
魔法少女リリカルなのはフロンティア ~ 魔導師と少年達の記録 ~

鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはフロンティア ～魔導師と少年達の記録～

【Nコード】

N9623I

【作者名】

鷹

【あらすじ】

第1章から半年・・・高校2年生となった拓也。

ある日、なのはの世界からSOSが！再び拓也達は魔導師の世界へ飛び込む！

新たに仲間を加え、闇の書を巡る戦いが今、始まる・・・！

今度はA・S編！激戦の記録が今、再び幕を開ける！

そして、主人公の忌まわしき力が遂に目覚める・・・！？

注：もしかしたら少しムフフな場面もあるかもしれませんが、
注意ください。

第1章・第1話 気がついたら別世界にいる事ってファンタジーでは良くある事

この物語は、デジモンフロンティアと魔法少女リリカルなのはのクロス作品であり、原作とは関係ない描写があり得るのでご注意ください。

あと、オリジナルキャラクター、オリジナルのスピリット（デジモン要素）、オリジナルの魔法（なのはの要素）もあります。

オリジナルに対して不快感を示す方、作者の文才の無さに耐えきれない方は、すぐに【戻る】を押して脱出してください。

あと、更新ペースは非常に遅いので、そこはご勘弁ください。

拓也「じゃ、始めるぜ！」

第1章・第1話 気がついたら別世界にいる事ってファンタジーでは良くある

第1話副題【邂逅】

200X年、東京・渋谷区の一部にて・・・何者かが2人、怪物と壮絶なバトルを繰り広げていた。

「はあああつ！」

「ぐがあああつ！」

1人は赤を基調とした、炎を模したような鎧に身を包み、黄色い長髪が目立つ。

もう1人は全身を白と緑の機械のような鎧で包み、まるで某爆弾男のビー〇アーマーみたいな容姿だった。

炎の鎧に身を包むのは、この物語の主人公の1人、かんばらたくや神原拓也。現在高校1年生である。

炎の鎧に身を包んだ拓也は【アグニモン】となり、敵と戦う伝説の十闘士【炎】の戦士である。

この時より5年ほど前、オフアニモンと言う天使型デジモンに導かれ、デジタルワールドに誘われた。

そこでみなもと源輝二、おりもと織本泉、ひみとも氷見知樹、しばやま柴山純平の4人と出会い、共にデジタルワールドを旅した。

旅の途中、輝二の双子の兄であるきむら木村輝一を仲間に加え、最後にはデジタルワールドのみならず人間界をも支配しようとする、ルーチェモンの野望を打ち砕いたのだ。

もう1人のビー○アーマー・・・じゃなかった、機械の鎧に身を包んだ少年はおもはやしたかとし面林孝俊という。

年齢は拓也と同じ高校1年生の16歳。中学生の時に広島から東京に引っ越してきて、拓也とは同じ中学の親友である。

彼は人間界に侵攻してくるデジモン達に対抗する為、オフアニモンが独自に作り上げた特殊型スピリット、【龍】の戦士である。

特殊型スピリットは他にも色々あるのだが、それはまたいつか説明しよう。

基本能力は十闘士の1.25倍とほんの少し高い。

特殊型スピリットを纏う彼は【プロスモン】と名乗り、ハンマーを手に怪物に立ち向かう。

ここで2人のデジモンのステータスを紹介しよう。

アグニモン ハイブリッド体 バリアブル種 魔人型

必殺技 バーニング・サラマンダー（炎の龍を模したエネルギー弾）

2段サラマンダーブレイク（サラマンダーブレイク+反転しての回し蹴り）

得意技 ファイヤー・ダーツ（手甲から炎の手裏剣を複数放つ）

サラマンダーブレイク（炎を纏った回し蹴りを叩き込む）

この状態はヒューマンスピリットと言い、完全体相当の力がある。ただし、スピリットは持ち主の心の強さなどが反映されるので、一概にそうとは言い切れない部分もある。

は進化を解き、元の姿に戻る。

ここでもめでたしめでたしといつもなら終わるところだが・・・そうは行かなかった。

怪物が消えた場所の空間が歪み・・・なんと裂けているではないか。

「な、なんだ!?!」

「や、やばい! 吸い込まれるぞ!」

なぜ?と考える暇もなく空間の歪みはあっという間に2人を吸いこみ・・・消えてしまった。

『うわあああああああ!』

所変わって・・・拓也達とは別の次元の【地球】の日本の海鳴市。そこで・・・1人の少女とフェレットが樹木のような怪物と戦っていた。

『ビシイッ!』 「あうっ!」

「なのは!大丈夫!？」

なのはと呼ばれた少女が、樹木の怪物の攻撃を受ける。それを見たフェレットが少女に呼び掛ける。

なぜフェレットが喋るのかと言う疑問は一旦置いておく事にする。

「この怪物・・・とっても強い・・・」

「ジュエルシード・・・今回はかなり手強い・・・!」

ジュエルシードとは、「ロストロギア」の一種で、碧眼の瞳を思わせる色と形状をした宝石。

全部で21個存在し、一つ一つが強大な「魔力」の結晶体で、周囲の生物が抱いた願望（自覚の有無に関わらず）を叶える特性を持っている。

ちなみに「ロストロギア」とは、過去に何らかの要因で消失した

世界、滅んだ古代文明で造られた遺産の事である。

現代の科学では解明不可能なほど超高度な技術で造られた物で、使い方次第では世界はおるか全次元を崩壊させかねない程危険な物もある。

それをフレット・・・の姿をしているユーノ・スクライアが発掘したのだが、とある事故で海鳴市周辺に散らばってしまったのだ。そして・・・ごく平凡な小学3年生、高町なのはは言葉を話すフレット「ユーノ・スクライアを発見・保護する。

そして事情を聞いた彼女は、ユーノに協力し、ジュエルシードを集める事にしたのだ。

「何とか・・・しなきゃ・・・」

なのはが呟いた次の瞬間・・・なのはの足元から木の根が飛び出し、なのはに襲いかかった！

「なのは、危ないっ！」

「ふえ！？・・・きゃあああっ！」

木の根がなのはに巻き付くと、空高くなのはを持ち上げてしまったのだ。

ユーノは寸前でかわすが、それでも攻撃を掠めてしまい、傷を負ってしまう。

「あぐうっ・・・っ！」

「うぐっ、なのは・・・！」

ギリギリと細い体を締め付けられ、苦悶の表情を浮かべるなのは。傷ついた体を引きずって叫ぶユーノ。

もはやこれまでかと思つた次の瞬間・・・樹木の怪物の頭上の空間が歪み・・・

「おわああああああ！！」

先程、空間の歪みに巻き込まれた拓也が降つて来たのだ！

だが、一緒に吸い込まれたはずの孝俊がいない・・・どーやら離れ離れになつてしまつたようだ。

「おおっと！」

拓也はとつさに空中に浮かぶ木の根を掴み、地面への激突を避けた。

しかも、掴んだ衝撃が大きかつたのか、自らの木の根を掴まれた樹木の怪物は苦しみ、捕えていたなのはを放す。

「にやあああああああ！？」

急に放されたので空中に浮かぶ余裕が作れなかつたのはは、地面に向かつて落下していく。

「あぶねえっ！」

拓也は木の根から反動を付けて飛び、なのはを抱き上げて着地した。

俗に言う『お姫様抱っこ』である。

「危なかつたな、怪我は無いか？」

「だ、大丈夫です・・・ありがとございます・・・／＼／」

お姫様抱っこが恥ずかしいのか、赤面するなのは。

近くでユーノが凄い目をして拓也を睨んでいたりするのだが、今はそれに構っている暇は無い。

「ここが何処だか確かめる前に、この怪物を何とかしなきゃな・・・」

「ふえ！？な、何言ってるんですか！早くここから逃げてください

は。怪物と戦おうとする拓也に仰天して、早く逃げるように言うのは。

拓也の事を知らないとはいえ、当然の反応である。

「女の子1人置いて逃げる程・・・俺は薄情じゃねえ。」

そう言って、進化するための道具・D・スキャナを取り出す拓也。

「な、何をやる気ですか・・・？」

ユーノがD・スキャナを見て拓也に尋ねる。

拓也はなのはとユーノに背を向けたまま、こう言い放つ。

「決まってるんだろ。戦うんだよ」

そう言うと、拓也は左手を構える。すると、左手を囲むように光のバーコードが出現する。

そのバーコードをD・スキャナでスキャンしながら、拓也は叫んだ。

「スピリットエボリューション！」

拓也の身体が光に包まれ、炎を模した鎧が武装されていく。そこに現れた炎の魔人……

「アグニモン！」

「ふえええ！？」 「変身……した！？」

現れたアグニモンを見て、仰天するなのはとユーノ。まあ、人間が見た事も無い魔人（？）になれば誰でも驚くだろう。

「さーて……怪物狩りに行くか！」

「私達も行こう、ユーノ君！」 「そ、そうだね！」

拓也……否、アグニモンは樹木の怪物に向かって走り出した。なのはとユーノもそれに続き、空を飛んで向って行く。デジモンと魔導師の共同戦線が今、始まった！

続く……かな？（かな？じゃねーよ！

第1章・第1話 気がついたら別世界にいる事ってファンタジーでは良くある事

どうも初めまして。初投稿となる鷹でございます。

デジモンとなのはのコラボをふと書きたくなって投稿した次第で
ございます(汗)

全くもって文才はありませんが、出来るだけ長く書き続けたいと
思います。

あと、指摘・注意・感想は大歓迎ですが、度の過ぎた批判・中傷
はやめて下さい。

それではまた・・・

孝俊「おい！俺は何処に行ったんだ！？」

それは(多分)次回にて・・・

第2話 主人公は最初の戦闘ではカッコよく映る気がする(前書き)

・・・はい、何とか2話にこぎつけました。改訂版ですが(汗)

2話目でヒーヒーです・・・(苦笑)

拓也「しっかりしろよお前(汗)」

なのは「まだまだ先は長い(苦笑)」

・・・何とか頑張ってみます(涙)

なのは「じゃ、始まるの!」

第2話 主人公は最初の戦闘ではカッコよく映る気がする

第2話副題【火炎&重龍】

「うおおおおおっ！」

アグニモンに進化した拓也は、速攻でジュエルシールドが乗り移った樹木の怪物に立ち向かっていく。

50Mはあった距離がわずか2、3秒で殆ど無くなってしまふ。

そして樹木の怪物に飛びかかり・・・

「おおおおおおおおおおおおおおおおあああっ！」

ズドドドドドドドドドド！と、目にも止まらぬスピードでパンチを連打していくアグニモン。

なんか憂さ晴らしをしているようにも見えるが、気のせいだろうか
(苦笑)

「あの人を援護するの！レイジングハート！」

【All right, my master】

なのはは10M程後方で自らの杖【レイジングハート】を構える。
そして、即座に魔力を込める。

「【ディバインシューター】！」

ドオオオオオン！！

『ギヤアアアアツ！』

桜色の魔力弾が数発撃ちだされ、樹木の怪物に命中して爆発する。

「【ファイヤーダーツ】！」

シュドドドツ！

アグニモンは手甲から炎を発生させ、その上を素早くスライドさせて炎の手裏剣を連射する。

次々と命中していき、ダメージを受ける樹木の怪物。

樹木だけあって、火には弱いようだ。

「デジモンと比べてあんまり大した事ねーんだな・・・木だけに素直に炎が嫌いみてーだし・・・」

苦しんでる樹木の怪物を見て、呟くアグニモン。

「よし、効いてる！もう一息でジュエルシードを封印できるよ！」

戦況を見て、ユーノが叫ぶ。

「だったら、俺が隙を作る。その間に、君達はそのジュエルシードつてのを封印するんだ」

ユーノの言葉を聞き、アグニモンが発言する。

「わ、解りました！」

アグニモンの言葉に返事をするのは。

そして、先程の【デイバインシューター】よりも魔力を込めていく。

「よし！……おおおおっ！」

それを見たアグニモンは炎の竜巻と化して、樹木の怪物に向かっていく。

「くらえっ！【サラマンダーブレイク】！」

ズドオオンッ！と、大きな音が響く。

アグニモンが樹木の怪物に炎をまとった回し蹴りを直撃させていた。

『グガアアアアッ！』

苦しんでのたうち回る樹木の怪物。

ちなみに、威力は加減した。

【ファイヤーダーツ】で苦しんでるのでは、全力の【サラマンダーブレイク】を喰らわせたら最悪の場合、中のジュエルシードを破壊してしまいかねないからだ。

「行くよ！【デイバイン・バスター】！！！」

空中にいるのはは、真っ直ぐに樹木の怪物を見つめて狙いを定める。

そして、レイジングハートから桜色の大きな閃光が発射され、一直線に樹木の怪物に向かっていき、命中して大爆発を起こす。

「ひよえー・・・結構すげーな・・・」

それを見たアグニモンは、その威力に少し驚いていた。

樹木の怪物を無事に撃破し、ジュエルシードも封印できた。

それを見た拓也も、アグニモンから元に戻る。

そして封印を終えたなのはが地上に降りてくる。

「っ・・・!」

着地したなのはが痛みに顔を歪め、よろける。

どうやら、先程の戦いの中で足を痛めたようである。

「おっと、大丈夫か？」

「あ、はい・・・ありがとうございますノ」

よろけたなのはを受け止めて拓也が尋ねる。

なのはは少し顔を赤くして答える。

「んー・・・こりゃ足を捻挫してる可能性があるな」

「あー、さっきの怪物の攻撃を何回か受けたからね・・・その時の
ダメージかも」

ユーノの言葉に拓也は少し考え込む。

そして考えた後、こう言った。

「とりあえず、家まで送るよ。空を飛ぶにしても疲れが溜まってる
だろうしな」

「え、でも・・・」

拓也の発言に迷うのは。

確かに、拓也は見ず知らずの自分を助けてくれた。

しかし、そこまでしてもらうのはいくらなんでも気が引けるとい
うものだ。

「気にすんなよ。人の親切は受け取っとくもんだぜ？」

ニカツと歯を見せて笑う拓也。

小学生の頃から結構カツコ良かった拓也だが、高校生になってか
らは更に端正な顔立ちになり、まさにスポーツ系のイケメン顔であ
る。

5年前の冒険を通してからは、精神的にもとても逞しくなり、心
身共にイイ男なのだ。

「そ、それじゃあお願いします・・・／＼／」

さつきから顔が赤くなりっぱなしなのは・・・

「なあ、さつきから顔赤いのが大丈夫か？熱でもあんのか？」

「い、いえ／＼！大丈夫です／＼！」

だが、鈍感な拓也はなんでなのは顔が赤いのかまるで理解でき
ていない。

なのはは慌てて拓也の質問に答える。

「そーいや自己紹介がまだだったな。俺は神原拓也って言うんだ。

呼び方は何でも構わねーぜ」

「わ、私は高町なのはって言います！で、私の肩に乗ってるのが・・・」

「僕はユーノ・スクライア。よろしく拓也」

拓也の自己紹介を聞き、なのはとユーノも自己紹介する。
ちなみにユーノはまだフェレットの姿をしている。

「よし、とりあえずはここを離れようぜ」

拓也は再びアグニモンに進化し、なのはとユーノを背負って走り出した。

その頃・・・拓也となのはが出会った場所から大分離れた場所に、マントを羽織った金髪のツインテールの少女と、犬っぽい耳と尻尾

が生えている大人の女性がいた。
知らない人が見たら何のコスプレかと勘違いするような格好である。

「この辺だね、ジュエルシードの反応があつたのは……」
「うん、何に乗り移ってるかわからないから、アルフも気をつけてね」

金髪の少女は、犬っぽい耳と尻尾を生やした大人の女性【アルフ】に忠告する。

「フェイトもね、場合によっちゃ私達の手には負えない奴が出てくる可能性もあるし……」

アルフは金髪の少女【フェイト】に答える。
ジュエルシードは、何に乗り移るか等でどれほどの強さになるか予測不可能なのだ。

「ウグオオオオオ!!」
「おお、噂をすればなんとやら、だね」

アルフとフェイトが後ろを振り向くと、巨大な鳥の怪物……正に怪鳥と言つべき生物がいたのだ。

ジュエルシードの影響か、かなり凶暴そうである。

「行くよ……バルディッシュ!」

【Yes, sir】

フェイトは、なのと同様に杖……デバイスを持っていた。
デバイスの名前はバルディッシュ。金色の刃が付いており、鎌の

ような形状になる。

「せやあああつっ！」

バキイツ！

『グアアアツ！』

フェイトよりも先にアルフが怪鳥に突っ込んで行き、強烈な鉄拳をお見舞いする。

痛烈な打撃音が響き、怪鳥が苦悶の声を上げる。

「【フォトンランサー】！」

フェイトは体の周囲にフォトンスファイア発射体を生成し、そこから槍のような魔力弾を発射する。

この【フォトンランサー】は弾速が速く、フェイトが得意としている魔法の1つである。

直撃を受けた怪鳥は益々大きな悲鳴を上げ、息も絶え絶えとなる。

「こりやあつさりと終わりそ……！フェイト、危ない！上から何か来る！」

『ギヤオオオオツ！』

アルフが楽勝ムードを感じた次の瞬間、上空から巨大な鳥がもう1匹襲来し、フェイトに襲いかかってきたのだ！

「え？……あつっ！」

フェイトが反応した時には、既に目の前に鳥が迫って来ていた。辛うじて体を捻ってかわしたフェイトだが、攻撃が腕を掠めてし

まう。

「大丈夫かいフェイト!？」

「な、なんとか・・・あれもジュエルシードの乗り移った・・・？」

「いや、魔力は感じないからジュエルシードは関係ないと思う・・・
どっちにしてもヤバいけどね・・・」

アルフはフェイトに駆け寄り、安否を気遣う。

腕からは少し血が滲んでいたが、大した傷ではない。

実はフェイトを襲った巨大な鳥はジュエルシードが乗り移った魔物ではなく、デジモンだったのだ!

『ギャオオオオオン!!』

そのデジモンが雄叫びを上げると、周りに様々なデジモンが姿を現した!

あろう事か次元を越えて、デジモン達がりりカルなのはの世界に襲来したのだ!

パロットモン 完全体 巨鳥型 ワクチン種

必殺技 ミヨルニルサンダー（額から強力な電撃を放つ技）

得意技 ソニックデストロイヤー（音速のスピードで飛び回り、衝撃波で攻撃する技）

クワガーモン 成熟期 昆虫型 ウイルス種

必殺技 シザーアームズ（巨大な腕を使って真っ二つにする技）
得意技 パワーギロチン（頭のハサミを使って敵を切断する技）

エアドラモン 成熟期 幻獣型 ワクチン種

必殺技 スピニングニードル（羽から風の矢をいくつも飛ばす技）

得意技 ゴッドトルネード（翼を羽ばたかせ、竜巻を発生させる技）

ウイングカッター（翼でカマイタチを発生させ、敵を切り刻む技）

クワガーモンとエアドラモンは数匹ずついる。

パロットモンは1体しかいない事から、どうやら親玉のようだ。

「な、なんなんだいこいつら・・・!!」

「全然・・・見た事無いモンスターばかり・・・!!」

当然ながら、全く見た事の無いデジタルモンスター（略してデジタルモン）を見て驚愕するアルフとフェイト。

フェイトの場合は、パロットモンによって手傷を負わされた上にこの数相手だとかなりやばい。

『グオオオオオオッ!!』

空中にいるエアドラモン達が一斉に翼を羽ばたかせると、カマイタチが発生してアルフとフェイトを襲った。

エアドラモンの【ウイングカッター】である。

「フェイト、危ない!・・・ぐああああっ!!」

「あ、アルフ・・・!!」

フェイトの前に立って障壁を張るアルフ。

しかし、あまりの多さに障壁が限界を迎えて割れてしまい、【ウ

「イングカッター」をまともに数発喰らってしまふ。

フェイトはアルフに守られて無事だったが、アルフは全身を切り刻まれてその場に倒れてしまふ。

『グウオオオオオオ！！』

今度はクワガーマン達が一斉にフェイト達に襲いかかってくる。

もはやこれまでか、と思われた次の瞬間・・・上空の空間が歪んで裂け目が現れ・・・

「どわあああああ！！！」

拓也と離れ離れになってしまった孝俊が降ってきたのだ！その勢いで孝俊はクワガーマンの上に落ちてくる。

「そ、空から人が・・・こっちに降ってくる！？！」

フェイトは急に空から降ってきた孝俊に驚く。

『ギヤウツ！』

「え！？！」

孝俊はクワガーマンの上に落ちてバウンドし・・・そのまま前方にいるフェイトの上に落ちた。

「あいててて・・・何なんだここは・・・！！？」

孝俊は頭と背中を押さえながら辺りを見渡し・・・自分の下を見たところで固まった。

「パロットモンにクワガーモンにエアドラモン・・・こりやまた沢山いるな・・・よし、さっきのお詫びと言っちゃなんだけど・・・この場合は俺が何とかするよ」

「え、でも危ないよ！アンタ見た所普通の人間だし、障壁を張ったアタシの体にも簡単に傷を付けた連中なのに・・・」

孝俊の発言に、アルフが驚いて制止する。

確かに、孝俊は見た所は普通の人間である。

「大丈夫だ。この連中の相手は・・・俺の専門なんでな」

そう言っつて、D・スキャナを取り出す孝俊。D・スキャナは緑と銀色に光っている。

顔つきもさつきまでのとぼけた顔から一転、真剣な目つきになっている。

「この人・・・普通の人じゃない・・・！」

孝俊が放つ威圧に、フェイトは顔つきを険しくする。

そして、孝俊も拓也同様にこう叫んだ。

「スピリットエボリューション！！」

孝俊の体を機械の装甲が包んで行き、そこに現れたのが・・・

「ブロスモン！」

機械の装甲を体にまとい、龍の魂をその体に宿した龍戦士、ブロスモンである。

特殊型スピリットは、オファニモンが四聖獣と呼ばれる青龍・朱雀・白虎・玄武を模したデジモンの協力を得て作り出した物である。それ以外にもいくつかあるのだが、それはいずれまた説明しよう。人間界に侵攻してくるデジモン達に対して、戦力増強の為に作り出したらしい。

「えっ……!?!」

「エボリューション……つまり、進化したって事!?!」

ブロスモンとなった孝俊を見て、驚きを隠せないフェイトとアルフ。

一方、ブロスモンはハンマーを持ってデジモン軍団の方を見ている。

デジモン軍団は全員空を飛んでフェイト達を見下ろしている。

「さーて……ひと暴れするかね……いきなり訳分からん世界に飛ばされてイライラしてんだわ……!」

「私も手伝いたいけど……みんな空飛んでる……」

張り切ってるブロスモンの後ろで呟くフェイト。

フェイトも空は飛べるが、腕を怪我した今の状態ではサンドバッグにされるのがオチだ。

「なら、俺が奴らを地上に引きずり下ろすから、君はそこを狙ってくれ」

「わ、解った……!」

そう言ってブロスモンはハンマーを地面に置き、その場で仁王立ちになる。

フェイトは後ろでバルディッシュを構えている。

「おおっ！」

ドガガガガガガガッ！

ブロスモンはフェイトに伏せているように指示した後、クワガーマンを振り回し、周りにいるエアドラモンや他のクワガーマンにぶつけていく。

「な、なんつー馬鹿力だい……！」

アルフが呆然として呟く。

ブロスモンが、自分の数倍はあろうクワガーマンを持ち上げて振り回しているのだから驚くのも無理はないが。

5分後……ブロスモンとフェイトのコンビにより、パロットモンとジュエルシードの乗り移った怪鳥以外は倒され、消滅してしまっていた。

「さて、トドメと行きますかい！」

「不意打ちしてくれたお返しを……させてもらおう……！」

ブロスモンが拳にエネルギーを溜め、光の矢じり型のエネルギーを形成する。

フェイトはバルディッシュを構え、エネルギーを急速充填する。

「【ツインコスモエッジ】！」

ブロスモンがエネルギーショットを2発同時に発射し、パロット

モンの翼に命中させる。

「グギヤアアツ！」

パロットモンが苦しみながら地上に墜落し、ジュエルシードの怪鳥の上に落ちる。

そこに、魔力を充填し終えたフェイトが構える。

「撃ち抜け、轟雷！【サンダースマツシャー】！！！」

強力な砲撃がパロットモンと怪鳥に炸裂し、パロットモンは消滅、怪鳥に乗り移っていたジュエルシードも封印した。

デジタルワールドならばデジコードが浮かび上がるのだが、ここはデジタルワールドではない為に消滅してしまうようだ。

それでも、【はじまりの街】で再び卵となって甦るのだが、それを見届けたブロスモンは進化を解き、孝俊の姿に戻る。

「ふう……」

緊張が解けたのか、その場に力なく座り込んでしまうフェイト。腕からは未だに血が滲んでいる。

「ん、大丈夫か？ちよつと待つてな……」

孝俊が身に付けているポシェットの中をゴソゴソと漁っている。そして、その中から消毒液・ガーゼ・包帯を取り出す。

「ちよつと染みるが我慢しろ……」

「う、うん……っ」

フェイトの腕の傷口に消毒液を塗り、ガーゼを当てて包帯を巻き、テープで止める。

野球部に所属している孝俊は、この程度の応急処置には慣れている。

「はい、OK。それにしても君、凄いな。たった一撃で2匹いっぺんに片付けるとは・・・かなりの手練だな」

「あ、ありがとう・・・／＼／」

照れながら礼を言うフェイト。

褒められたのは素直に嬉しかったようだ。

「さて、そっちの女の人の手当てもしないとな・・・」

「あ、あたしは大丈夫・・・何とか立てるから・・・」

アルフは何とか立ち上がろうとする。

しかし、まだダメージが残っているせいか、ふらついてしまう。

「おっと・・・無茶したらダメだ。体は大事にしなきゃいかんぜ？」

「う、うん・・・／＼／」

孝俊がふらついたアルフを受け止めて、真面目な顔で忠告する。

真面目な顔の孝俊は、拓也には及ばないがまあまあカッコいい方である。

そんな孝俊の顔を見て赤くなるアルフ。

孝俊は普段はボケーンツとしてて何を考えているのか分からないよ
うな奴なのだが（笑）

「よし、ちょっと待っててくれ」

そう言うと孝俊は再びブロスモンに進化し、額のクリスタルから光線をアルフに向かって照射する。

すると、アルフの体中にあつた切傷が見る見るうちに塞がっていったのだ。

ブロスモンのクリスタルレーザーには攻撃用と治療用の2種類がある。

カマイタチで出来た切傷ぐらいなら、すぐに治す事ができる。

「す、凄い・・・全然痛みが無いや・・・!」

「良かったね、アルフ!」

傷が無くなった自分の体を見て、驚くと同時に喜ぶアルフ。

フェイトもアルフを見て嬉しそうな表情を浮かべる。

「あれぐらいの傷なら何とか治せるからね・・・おっと、自己紹介がまだだったな。俺は面林孝俊。苗字は呼びにくいから、名前で呼んでくれ」

「私はフェイト・テストロツサ、フェイトって呼んでいいよ。よろしく、孝俊・・・」

「アタシは・・・フェイトの使い魔でアルフって言うんだ。よろしくね、孝俊!」

孝俊の自己紹介を受けて、自分達の自己紹介もするフェイトとアルフ。

さっきの戦闘を見て、フェイトが魔導士である事は解っていたので、孝俊は特に何も言わなかった。

「ところで・・・孝俊、違う次元から飛ばされてきたって言ったけど・・・」

「そうなんだよ・・・元の世界で戦闘してたら、何故か急に仲間と

一緒に飛ばされちまってな……」

孝俊がフェイトに【フォトンランサー】を喰らわされた直後のセリフを思い出したアルフは、孝俊に質問する。

ちなみに、孝俊は腑に落ちない表情だった。

初期段階であるヒューマンスピリットの技の衝撃くらいで次元の裂け目が発生するなど、到底有り得ないからだ。

「ところで、行く宛てはあるの……？」

「当然ながら無いよ。野宿でもして元の世界に帰る方法でも探すっきゃねーかな……あ、でも拓也も探さねーと……」

フェイトの問いかけに考え込む孝俊。

知らない世界に飛ばされて、行く宛などある訳が無い。

「あ、じゃあ私の家に泊まりませんか……？助けてもらったお礼も兼ねて……」

「え、いいのか？素性も知らない俺を泊めたりしても……」

フェイトの申し出に、少し困惑する孝俊。

いくらお礼とはいえ、知らない男を泊めるのはある意味危ない気もする。

「構いません。いいよね、アルフ？」

「アタシは構わないさ、さっき助けてくれたのを見てアンタが悪い奴じゃないのは解ったし」

フェイトの意見に賛成するアルフ。

それを聞いた孝俊は……

「ん、そうか・・・じゃ、ちょっと世話になるかな・・・」

フェイト達のお言葉に甘え、泊まる事にしたのだった。

フェイトの家で世話になる事となった孝俊。

そして、高町家に向かった拓也は・・・？

次回・・・どうなる!？

続きます。

第2話 主人公は最初の戦闘ではカッコよく映る気がする（後書き）

何とか第2話が終わりました・・・というか今更改訂しました（汗）

孝俊「またしても堪えてるな」

フェイト「まだまだ先は長いのにね（苦笑）」

ほ、ホントに疲れたからあと任せた・・・（死）

孝俊「つー訳で、これからもまだまだ続きます」

フェイト「皆さんのご感想・質問待っています」

拓也「可能な限り、ちよつとしたネタのリクエストも受け付けるぜ！」

なのは「これからも応援よろしくなの」

4人「じゃ、次回もお楽しみに！」

第3話 最近是一般男性も料理得意な奴が多い気がする(前書き)

はい、3話目です。

今回は戦闘抜きで、日常生活を描こうと思います。

孝俊「日常生活ね・・・大丈夫かな」

フェイト「な、何とかなると思うよ(苦笑)」

アルフ「作者の駄文っぷりじゃ心配だね」

アルフさん手厳しいっす・・・(涙)

孝俊「じゃ、始めるぞ」

第3話 最近は一般男性も料理得意な奴が多い気がする

第3話副題【日常】

前回、フェイトとアルフを成り行き上助けた孝俊は、フェイトの家でしばらく世話になる事となった。

「おおお・・・すげえ所に住んでんだな・・・」

フェイトとアルフはこの界限でもかなり高級なマンションに住んでいる。

「いったいそんな金が何処にあるのかと気になったが、もはや何でもアリなんだろうと割り切って突っ込まない事にした孝俊であった。

「まあね ささ、入った入った」

アルフに背中を押されながらフェイトとアルフの住む部屋に入る孝俊。

この行動からして、アルフはどーやら孝俊を気に入ったようだった。

「とりあえず、お茶でも出すねー」

「んー、お構いなくー」

台所に向かって行くアルフ。

そんなアルフを見て、孝俊は返事を返す。

「ねえ、さつき進化する時に出したあの道具・・・何なの？」

あの道具・・・D・スキャナの事が気になったのか、孝俊に尋ねるフェイト。

「ああ、D・スキャナの事か。俺はデジヴァイスって呼んでるけどね」

「D・スキャナ？」

「うん、デジモンに進化する為に必要な道具なんだ・・・しかし、この世界にもデジモンがいたとは・・・」

D・スキャナについて簡単に説明する孝俊。

そして、この世界にもデジモンがいるものと思い込んで溜息をつく。

「ううん、私もアルフもあんなモンスターは初めて見たんだよ？」

「・・・そうなのか？」

フェイトの言葉を聞き、少しビツクリする孝俊。

「・・・と、すると・・・こりゃ裏で何かありそうだな・・・」

そしてしばらく考え込んだ・・・と、台所でアルフの声がした。

「あっちゃー！冷蔵庫の中が殆ど空っぽだー！」

それを聞いた孝俊とフェイトが台所に向かう。

見てみると、冷蔵庫の中は見事にスツカラカンに近い状態だった。入ってるのはわずかな量のお茶、飲料水、冷凍食品、インスタント食品だけだった。

「うわーお・・・見事に殆ど何も無いな」

中身を見て呆然とする孝俊。

自分の家の冷蔵庫は、常にパンク寸前なのでスツカラカンになる事はおろか、半分になる事すら無い。

孝俊は16歳で運動部に所属しており、食い盛りだから仕方ないと言えは仕方ないが。

「しばらく買い物行ってなかったもんね・・・」

困った顔をしながらフェイトが呟く。

ジュエルシードを集める事に忙しかった為、買い物に行ってる暇なんて無かったのだ。

それを見て、孝俊が口を開いた。

「・・・じゃ、行くか」

「え、何処に？」

「買い物」

それから30分・・・孝俊、フェイト、アルフは海鳴市内のスーパーマーケットに来ていた。

幸い、拓也・孝俊達の世界とこの世界の通貨は一緒だった為、普段あまり金を使わない孝俊の奢りで夕飯を作る事になった。

世話になりっぱなしでは申し訳ないので、孝俊が夕飯を作ると名乗り出たのだ。

「ねえ、孝俊って料理は得意なのかい？」

ふと思ったのか、アルフが孝俊に尋ねる。

「ん、親父は家出たらしばらく帰って来ねーし、母さんも夜遅いからな。普段は俺が料理作ってた」

「そうなんだ・・・孝俊のご両親は何の仕事してるの・・・？」

「親父は良くわかんねえ・・・母さんは医療関係の仕事してる」

孝俊の話によれば、親父さんは息子の孝俊以上にボケーンとしててのほぼーんとしており、孝俊以上に何を考えているか解らないらしい。

母親は医療関係の仕事に従事しており、なかなか休みが無いそうだ。

そんな忙しい両親に代わり、普段から孝俊が家事を請け負っている。

あと、孝俊には妹もいるそうだ。なんでも、孝俊と同じく特殊型スピリットを持っているらしい。

「へーえ、アンタも結構苦労してんだね」

アルフが感心したように孝俊に言う。

ただか16歳の普通(?)の少年が両親に代わって全ての家事を請け負い、更には学業も部活もこなしている。

「それであんなに強いんだから、ホントにすごいね」

フェイトは微笑みながら孝俊に言う。

「・・・俺は守りたい物を守ってるだけだ。そんなに言うような事じゃないさ」

そりゃあ、強くなりたいうって願望は誰にでもある。

しかし、孝俊は世界を守る様な大それた力は求めてはいない。

ただ、自分の手の届く範囲の物は守りたい・・・その一心でオプ
アニモンから特殊型スピリットを受け取り、戦ってきたのだ。

ちなみに、今回孝俊達が買った物は・・・米10kg・牛肉・野
菜数種・調味料数種・清涼飲料water・・・

色々不足していた為、この機会に買い込んだのだ。

そして・・・当然ながら買い込んだ物は全て孝俊が持っている。
袋3つがパンパンになるほどで、かなりの重量になる。

「お、重そうだね・・・1つ持とうか？」

「いや、大丈夫だ。これもトレーニングの1つだから」

アルフが呆れ混じりの顔で聞いてくる。

しかし、孝俊は【トレーニングになる】と言い、そのまま歩く。

(た、遅しいなあ・・・)

後ろでフェイトが苦笑いしていたりするのだが・・・

「さて、早速だが作るとするか！」

あれから30分後、フェイトの家に戻った孝俊は早速料理に取り
掛かる。

心なしか、なんだかウキウキしてるようにも見える。

「何作ってくれるんだろうな」

「楽しみだね」

フェイトとアルフは、居間で座って待っている。

アルフに至っては、尻尾をパタパタさせていたりする。

台所からは、何やらいい匂いが漂ってきていた。

そして30分ほど後・・・

「はい、お待たせ了」

炒飯を持っている孝俊がやって来た。

どーやら炒飯作りは得意らしく、かなり美味しそうな匂いが漂っている。

(ぎゅるるるうう〜)

「・・・／／／／」

「あ、あはは・・・／／／／」

フェイトとアルフから腹の音が聞こえる。

よっぽど腹が減っていたらしい。

「ははは・・・ま、遠慮せずに食べてくれ。しばらく世話になるし、これくらいはさせてくれな」

「う、うん・・・いただきます・・・／／／／」

孝俊はその様子を見て軽く笑う。

昼間の戦闘で見た通り、フェイトは魔導士。それも一線級の凄腕だ。

しかし、魔法抜きで考えれば1人の可愛い女の子である。

そのギャップを考えると思わず笑いが出てしまい、それを必死に堪える孝俊であった。

「あ、美味しい・・・!」

「ホントだ、かなりイケるよこれ！」

一口食べて、すぐさま感想を口にする2人。

「お、そうか？口に合ったみたいで良かったよ」

それを聞いた孝俊も、嬉しそうに笑う。

そんなこんなで、夕飯の時間が終了。フェイトとアルフは入浴の為、風呂場に向かう。

そして孝俊はというと・・・

「さて、始めるか・・・」

居間で片手腕立て伏せを始めていた。

どーやら日課のトレーニングらしい。

右・左で30回ほどやった後、今度は腹筋50回を行い、さらには背筋30回・・・

しかし、これだけやってもフェイト達が風呂から上がって来ない・・・

「・・・ん？バスタオル忘れて行ってる・・・？」

部屋の隅を見ると、バスタオルがいくつか積まれている。

忘れて行ったのか？と思い、孝俊はバスタオルを2つ持って脱衣所に向かう。

「おーい、バスタオル忘れてた・・・ぞ・・・」

言い終わるところで孝俊は凍りついた。

ちょうど風呂から上がったらしく、身体にタオル巻いたフェイト

とアルフが目の前にいたからだ。

「……………（オワタ）」

孝俊が心の中でそう呟いた直後……

顔を真っ赤にしたフェイトとアルフのツープラトン攻撃を喰らい、本日2度目のスタボロにされるのであった。

……………どうも、神原拓也です。

俺は今、【翠屋】という喫茶店でアルバイトをしています。

え、何でこんな事になってるのかって？

この【翠屋】は、前回俺が助けた女の子、なのはちゃんの実家が経営している店で、なのはちゃんがお母さんの桃子さんに俺の事を説明（もちろん、難しい事は省いた）したところ、なんと住み込みのアルバイトとして歓迎（？）してくれた。

なんか後ろの方でお父さんの土郎さんと、お兄さんの恭也さんが凄い殺気を放っていてメツチャ怖かった。

「娘（妹）はやらないぞ！」とか言ってたけど・・・
とりあえずそんな気はないっつーの（苦笑）

ちなみに・・・なのはちゃんは自分の部屋で休んでいる。
やっぱりあの戦闘で足を捻挫していたらしい。

ちなみに桃子さんには、その辺で転んだという事にして説明したらあっさり納得してくれた。

なんでも、なのはちゃんは結構運動音痴らしい。そーいやさっきの戦闘でもずっと空飛んでたしな（笑）

応急処置は俺がした。サッカー部で散々やったし（苦笑）

そーいや手当てしてる間、ずっとなのはちゃんの顔が赤かったが・・・
やっぱり熱でもあんのかな？

「拓也くん、ちょっとレジの方お願い〜」

店の奥から桃子さんの声が聞こえる。

俺は考えを中断して急いでレジに向かう。

俺も元の世界では短期のアルバイトとか結構やってたから、レジ打ちは結構慣れている。

「ありがとうございます〜」

レジ打ちを済ませ、挨拶をする。

そしてお客さんもいなくなり、とりあえず一段落した。

「拓也君、お疲れ様・・・それにしてもごめんね、急にアルバイトなんて頼んじやって」

「いえ、住まわせてくれる訳ですし、これくらいは当たり前ですよ」

桃子さんがお礼を言ってくる。

でも住まわせてくれる訳だし、居候の俺がこれくらいするのは当たり前である。

俺は出来るだけ謙虚に返す。

「じゃ、ちょっとなのはちゃんの様子見てきますよ」

「うん、お願いね」

俺はそう言ってなのはちゃんの部屋に向かう。

なんだかんだで足の具合がちょっと心配だ。

「なのはの部屋」

「なのは、足は大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。拓也さんが丁寧に手当てしてくれたから」

ユーノが心配そうに尋ねる。

大丈夫だと言いながら、なのははベッドに座って足をぶらぶらさせている。

「なのはちゃん、入っていいかい？」

「あ、拓也さん？どうぞ」

ドアをノックして拓也が入ってくる。

「足の方は大丈夫か？」

「うん、もうすっかり大丈夫。明日には普通に歩けると思う」

「ん、そうか。良かった」

すっかり大丈夫そうなのはを見て、拓也は安心する。

「ところで……拓也さんは何者なんですか？」

フレット姿のユーノが拓也に尋ねる。

彼はずっとそれが気になっていたらしい。

「俺は……デジモンに進化できる人間なんだ」

「デジモン？」

拓也の言葉に首を傾げるのは。

まあ、この世界にデジモンは存在しないはずだから無理もないが。

「デジタルモンスター、略してデジモン。デジモンは本来、俺達の世界でも別次元として存在してるデジタルワールドって所に住んでるんだ」

「あなたはそのデジモンに進化できる、と？」

「ああ。説明すればちよつと長くなるが……今から5年前、俺は偉い天使型のデジモン、オフアニモンに呼ばれてデジタルワールドに行った……」

拓也はそこから、5年前の冒険を話した。

その冒険から2年後、今度はデジモンが人間界に侵攻して来た事も。

拓也達はその時も戦ったが、2年のブランクと慣れない人間界で

の戦闘で負傷してしまい、窮地に陥った。

それを危惧したオファニモンが特殊型スピリットを作り出し、戦力を増強した事。

そして今回、その特殊型スピリットを使う仲間（孝俊）と一緒にこの世界に飛ばされてしまった事。

5年前から今に至るまでを簡単に話した。

「・・・と、信じられないかもしれないがこれが俺の素性さ」

「ふえ〜・・・」

なのははポカーンと口を開けている。

ユーノもまた、信じられないといった表情をしていた。

しかし、現に自分達の目の前で拓也はデジモンに進化し、ジュエルシードが乗り移った怪物を圧倒した。

これは信じざるを得ないだろう。

「まあ、とにかく元の世界に戻る方法が見つかるまではよろしくな

」

「うん！こちらこそよろしくお願いします！」

笑い合って握手を交わす拓也となのはであった。

こうして、出会いの日は過ぎて行った・・・

続く

第3話 最近是一般男性も料理得意な奴が多い気がする（後書き）

はい、何とか3話目が終了しました。

孝俊「俺って…ずっとあんな扱い？」

そのつもりですが何か？

孝俊「マジかよ……（涙）」

拓也「まあ……ドンマイ（苦笑）」

次回は戦闘有りで行こうと思ってます。

では、フェイトちゃん次回予告どうぞ〜

フェイト「次回、リリカルなのはフロンティア【初めて出す必殺技はインパクトが凄まじく強い】。お楽しみに」

第4話 初めて見る必殺技はインパクトが強い気がする(前書き)

はい、第4話です。

孝俊「ペースだけは順調だな」

フェイト「でも、これから年末だから忙しくなって更新も滞っちゃ
うかもね」

うっ・・・痛い所を(汗)

アルフ「じゃ、始めるよ!」

第4話 初めて見る必殺技はインパクトが強い気がする

第4話副題【思案】

孝俊がフェイトとアルフのツープラトン攻撃を喰らった（笑）翌日のAM5:30・・・

「ん・・・ふああ・・・」

フェイトが目を覚ます。

ベッドの傍ではアルフが座ったまま寝ている。

ちなみに、孝俊は昨日ツープラトン攻撃を喰らった後、床に這いつくばりながら居間に戻って行き、そこで力尽きて寝たのだが。

「孝俊・・・まだ寝てるかな・・・？」

なんだかんだで気になったらしく、居間に向かうフェイト。

だが、居間にはいなかった。

そこには孝俊がかけて寝ていたと思われるタオルが畳んで置いてあった。

「あれ・・・何処行つたのかな・・・？」

ふと、窓から外を見た。

見てみると、トレーニングしている孝俊がいたのだ。

何やらカンフーっぽい構えで練習している。

孝俊は独自に格闘技も使い、デジモンに進化しなくてもそれなり

に戦えるように訓練しているらしい。

「・・・凄い・・・まるで隙が無い・・・ああやっていつも練習してるんだ・・・」

昨日見た孝俊の強さは、毎日のああいう訓練から来ているんだと納得するフェイト。

しかし、当の孝俊は無理な練習はしていない。身体は何処かが少しでも悲鳴を上げそうになれば、すぐに訓練を中止して休憩に入る。

毎日、自分の体が許す範囲で訓練している。それを長い間続けてきて、孝俊の今の強さがある。ちなみに拓也も同様である。

長い間、地味な基礎鍛錬を積み上げ、徐々に技術を付けながら実戦を経験する。

それが表面に出ており、現在ののような他を圧倒するほどの実力が出せるのだ。

「…………ふー…次はシャドウピッチングでも…………ん？」

我流のカンフーを15分ほど練習して、今度は野球の練習に移ろうとした俺がふと後ろを見ると、フェイトがじーっと自分を見ているではないか。

「あ、お、おはよう・・・孝俊／＼」
「おう、おはよう」

フェイトが慌てて挨拶する。
俺は笑って返す。

「もう起きたのか・・・早いな。アルフはまだ寝てんのか？」
「うん、座ったままだけどグッスリだった」

まだ6：00なのにもう起きてきたフェイトに苦笑いする俺。

「孝俊はいつ起きたの？」

「5時くらいかな、いつもそんなもんだよ。ま、学校でよく居眠りしてんだけどな」

「そうなんだ・・・」

苦笑しながら語る俺に同じく苦笑しながら聞いているフェイト。
それから1時間ほどトレーニングを続け（フェイトも交えて）、それから朝食を食べた。

朝っぱらから動いたせいかわ、フェイトはかなり食が進み、アルフが驚いていたのは言うまでもない。

AM10：00・・・ジュエルシードの反応があった為、その地点に向かう俺・フェイト・アルフの3人。

俺は朝食の後、なぜジュエルシードを集めるのかをフェイトに聞いた。

なんでも、母親のプレシア・テストロッサがジュエルシードを必要としているのだという。

何故なのかはフェイトもアルフも知らないらしい。

更には、ジュエルシードを巡って時空管理局じくうかんりきょくつてのと対立している事も聞いた。

ちなみに・・・俺は初めてジュエルシードを見た時から、何か違和感を感じていた。

何故かは解らない・・・ただ、何でか嫌な予感がしてくるのだ。

(ジュエルシード・・・集めれば願いが叶う的な物らしいが・・・あれはそんな都合の良いもんじゃないような気がする・・・)

「し・・・！孝俊！」

「・・・え？」

考えながら歩いていた俺だが、アルフに呼ばれてハツとする。

「どうしたんだい？さっきから考え込んでるみたいけどさ・・・」
「いや、何でも無い・・・それより、ジュエルシードは見つかったのか？」

「ううん、まだ・・・」

俺はアルフの質問をかわし、フェイトに尋ねた。

しかし、まだ見つからないようだ。

「そうか・・・！！2人とも飛べ！」

俺が叫んだ瞬間、フェイトとアルフはその場から飛び、さっきまで2人がいた場所に何者かの攻撃が来た。

それは・・・またしてもデジモンだった。

ヴァーミリモン 完全体 鎧竜型 データ種

必殺技 ヴォルケーノストライクス (ヴォルケーノストライクの強

化版)

ヴォルケーノストライク(口から強力な火炎弾を吐き出す)

得意技 ヴァームブレイズ(口から炎を吐き続ける)

ハードタックル(硬い体を使って突進する)

ドクグモン 成熟期 昆虫型 ウイルス種

必殺技 ステインガーポレーション(猛毒の牙で噛みつく)

得意技 蜘蛛糸を発射(文字通り蜘蛛の糸を吐き、相手を捕獲する)

アロモン 成熟期 恐竜型 データ種

必殺技 デイノバースト(口から超高温の熱風を物凄い勢いで吐き出す)

得意技 ダイナマイトヘッド(硬い頭で相手に頭突きする)

ダークティラノモン 成熟期 恐竜型 ウイルス種

必殺技 ファイアブラスト(強力な火炎放射)

得意技 アイアンテイル(尻尾で敵をなぎ払う)

イビルモン 成長期 小悪魔型 ウイルス種

必殺技 ナイトメアショック(超音波で相手を苦しめる)

得意技 スクラッチビート(爪での攻撃)

完全体のヴァーミリモンを親玉に、凶悪そうなデジモンが揃っている。

成長期のイビルモンは数十匹ほどいる。

「・・・こりやまた、暴れ甲斐がありそうだな」

「行くよ、アルフ。準備は良い？」

「勿論！前みたいなの不覚は取らないよ！」

孝俊はデジヴァイスを構え、フェイトはバルディッシュを【サイズフォーム】にし、アルフは戦闘態勢に入る。

「スピリットエポリション！・・・ブロスモン！」

「行くよバルディッシュ！」【Yes,sir】

「さーて、暴れようかな・・・！」

次の瞬間、3人は一気に駆け出し、手始めにイビルモン10匹ほどを一気に蹴散らした！

「さあ・・・」

「かかって・・・」

「来いやぁー！ーっ！」

この3人の前では、成長期のイビルモンが何十匹束になるうが敵うはずがない。

「おらぁぁぁっ！」

ブロスモンの【メモリアル・アーチ】でブツ飛ばされ・・・

「はぁぁぁっ！」

フェイトの【サイズスラッシュ】で両断され・・・

「せいっ！たぁぁっ！」

アルフの格闘技や魔力弾でボコボコにのされる。

あっという間にイビルモンは全滅し、残るは成熟期の3体と完全

体のヴァーミリモンだけになった。

3人は間髪入れずに敵に向かって行く。

フェイトはドクグモンを、アルフはダークティラノモンを、そして孝俊はヴァーミリモンとアロモンの2体を同時に相手していた。

『キシヤアアアッ!』

「はっ!」

蜘蛛糸を吐き出してくるドクグモン。

フェイトはそれをジャンプしてかわす。

スピードならフェイトの方が遙かに上である。あとは隙を見つけて叩くのみ。

『ギヤオオオーン!』

「おおおおっ!」

アルフはダークティラノモンはがちりと両手で押し合い、互角の勝負を展開していた。

エアドラモンにやられた時は相手が大勢いたが、1対1なら負けはしない。

『グウオオオオオッ!』

『ガアアアアアッ!』

「とーうっ!・・・はあぁっ!」

向かってくるヴァーミリモンを受け流し、アロモンに一撃を加える孝俊。

流石にデジモンとの戦闘経験が豊富なだけあって、2匹相手でも優勢に戦っている。

「はあっ!」

『ギヤウッ!』

フェイトが隙を突いてドクグモンの足をバルディッシュで払い、
態勢を崩させる。

「今だ・・・！【フォトンランサー・マルチショット】！」
『ズドドドドドドン！！』

フェイトがフォトンランサーを複数放ち、それが全てドクグモン
に命中。

凄まじい衝撃に、ドクグモンは耐えられずに消滅した。

フェイトvsドクグモン・・・フェイトwin！

「はああああああああああつ！」

『ズガガガガガガッ！』

アルフが息もつかせぬ猛ラッシュをダークティラノモンのどてっ
腹に叩き込む。

完全にグロッキーのダークティラノモン。足取りもおぼつかない。

「くらえっ！【フォトンランサー・マルチショット】！！！」
『ズドドドドドドドン！！』

フェイトと同じく、複数のフォトンランサーを放つアルフ。

威力や精度はフェイトの物には劣るが、ダークティラノモンを倒
すには十分だったようだ。

アルフvsダークティラノモン・・・アルフwin！

「あらよつと！」

『ガゴンッ!』

ブロスモンはその場からジャンプする。

すると、ブロスモンを挟むように突撃して来たヴァーミリモンとアロモンが激突、レベルの差でアロモンが吹っ飛ばされる。

「どっこいさぁーっ!」

『ドゴンッ!』

『グギャアアアッ!』

ブロスモンは落下の勢いでハンマーをヴァーミリモンの脳天に叩き付ける。

あまりの衝撃にヴァーミリモンは悲鳴を上げる。

「よっしゃ・・・仕上げと行くかな・・・!」

ブロスモンはヴァーミリモン・アロモンと距離を取り、エネルギーを充填する。

「【ブロスバーストブレイカー】・・・ファイアー発射!」

『チュドドドドドン!ズバババババ!バゴオオオオンッ!』

主砲・レーザー砲・ガトリング・ランチャーからエネルギー弾・エネルギー砲が絶え間なくぶっ放される。

技のネーミングはともかく、威力はかなりのものだ。

「凄い・・・!」

「うへえー・・・なんちゅーデタラメな威力だい・・・」

凄まじい砲撃に驚きを隠せないフェイトとアルフ。

2人ともこの技を見るのは初めてなので、インパクトはかなり強いだろう。

ブロスバーストブレイカー

ブロスモンの砲撃を受けたアロモン・ヴァーミリモン共に消滅。

ブロスモン vs ヴァーミリモン & アロモン・・・ブロスモン win

n!

「ふうー・・・終わった終わった」

敵がいなくなったのを見て、進化を解く孝俊。

壁に寄りかかって休む。

「やっぱり流石だねえ、2匹相手に終始優勢だったじゃん」

孝俊の戦闘を振り返ってみて、改めて感心するアルフ。

「ん、そう言われると何か照れるな・・・ノノとにかく、一休みしたらまたジュエルシードを探しに・・・」

と、孝俊が言い終わるところで・・・孝俊が寄りかかっていた壁の上が崩れ・・・

ガンツ!

「ごばあっ!?!」

大きい破片が孝俊の脳天に直撃した。

どうやら【ブロスバーストブレイカー】の一部が壁に当たっており、今頃になつて崩れたらしい。

「た、孝俊!?!」

「し、しっかりしてー!」

孝俊はしばらく気を失っていたとき・・・

ちなみにジュエルシードは・・・結局見つからなかったそうだ。

カッコ良く終われない孝俊。

もはやこれも宿命であらう・・・

続く

第4話 初めて見る必殺技はインパクトが強い気がする(後書き)

なんとか第4話終了です。

あとは・・・年末までに1話くらい更新出来ればいいなと思っ
ます。

拓也「今回は俺達sideの話だぜ！」

なのは「頑張るの！」

2人とも張り切ってますねえ・・・

拓也「次回タイトルはまだ未定なんだよな(沈)」

ではまた次回

第5話 男の主人公は炎属性が多い気がする（前書き）

はい、第5話です。

いつのまにかこの小説、1万アクセスを超えてました（苦笑）
読んで下さった皆様、ありがとうございます！

孝俊「なあ、俺の扱いどうにかならねえ・・・？」

「ごめん、それ無理。」

孝俊「ひでえ・・・」（涙）

拓也「第5話、始まるぜ（苦笑）」

第5話 男の主人公は炎属性が多い気がする

第5話副題【獣魂】

拓也がなのはと出会い、【翠屋】でアルバイトをする事になって1日が経過した。

AM8:30・・・拓也は高町家の庭の草むしりをしていた。ただ、何故か顔が傷だらけになっている・・・その訳は約1時間半前のAM7:00頃まで遡る。

↓高町家 拓也が使わせてもらっている部屋↓

「ふああ・・・よく寝た・・・」

拓也が目を覚ます。

元の世界では朝練を始めるところだが、ここではゆっくり休んでいる。

・・・ふと横を見たところで、拓也は固まった。

「すぴ・・・zzz・・・」

なんと、なのはが自分の横で気持ち良さそうに寝てるではないか。実は拓也のいる部屋となのはのいる部屋は隣同士で、夜中にトイレに行ったなのはが寝ぼけて部屋を間違え、それに気付かず拓也の布団に入ったのだった。

勿論、そんな事を知る由もない拓也はパニックになっていた。

「え！？え！？え！？何何何！？ちょ、どーいう事だ！？」
「拓也君、起きて……る……」

そしてバッドなタイミングでシスコン兄貴《恭也》が拓也の部屋に入ってきた。

拓也は一気に凍りついた。

「ふ……ふふふふ……」(ゆらり)
(あ、こりゃ殺^やられたな……)

拓也の予想通り、鬼と化した恭也が何処から取り出したのか、木刀を2本持つて拓也に襲いかかったのだ。

「き・さ・まあ……っ！！！」
「どわあああ……っ！！？」

故意じゃ無いとはいえ、これは状況が悪かった。

「なのはと一緒の布団で寝るとはなんと羨ま……じゃなかった不届きな奴だ！この場で成敗してくれるわ……っ！！！」

「オイイイイイイ！今【羨ましい】って言おうとしただろ！？
第一、これは誤解だ……っ！！！」

流石に生身の人間相手に進化する訳にもいかず、30分後になのはが起床するまで、拓也は恭也にポッコボコにされたのであった。

まあ、シスコン全開状態の恭也ならアグニモンぐらいには太刀打ちできそうな気もする(汗)

その恭也はなのはにこっぴどく怒られて多大な精神ダメージを喰

らっていたが。

「……つたく、朝っぱらから酷い目に遭ったぜ……」

ぶつぶつ言いながら草むしりをしている拓也。

ちなみに、傷の手当てはなのはがやってくれたらしい。

ちなみに今日は平日なので、なのはは小学校、恭也は大学、美由希は高校へそれぞれ登校して行った。

父の士郎は自らが監督を務める少年サッカーチームの練習がある為、朝早くから出掛けていた。

そんなわけで、現在家には拓也と桃子しかない。

「拓也君、朝早くからご苦労様」

「あ、桃子さん……いえいえ、大した事じゃないですよ」

拓也が苦笑して答える。

本当なら家事の方を手伝いたかったが、拓也は料理が苦手なのだ。かつてデジタルワールドを冒険した時にハンバーガー作りを経験しているのだが、散々な出来だった。

「……あら？なのははったら、体操服忘れて行ってるわ。今日は確か2時間目から体育の授業があるって言ってたのに……」

ふと、体操服を入れた袋が目に入る。

どうやらなのはの忘れものらしい。

そして桃子は少し考え、拓也に言った。

「拓也君、悪いんだけど届けてくれないかしら？私より、拓也君が行った方が早そうだしね？」

「あ、はい、解りました。」

「学校には私から連絡入れておくから、すぐに入れると思うわよあと、バイトは昼からでいいから、それまでゆっくりしてていいわよ。」

拓也はすぐに家を飛び出し、なのはが通う私立聖祥大附属小学校へと向かって行った。

小学校までは結構距離があるが、拓也からしてみればいつものトレーニングの1つに過ぎない。

「やれやれ・・・なんか手のかかる妹が出来た気分だよ・・・」

苦笑いしながら走っていく拓也であった。

「その頃、なのは達は」

「へーえ、アルバイトねえ」

「うん、昨日から住んでるの。なんか訳有りっぽくて、うちに住み込みでね」

教室では、なのはとその友達のアリサ・バニングスと月村すずかの3人が談笑していた。

話題は拓也の事である。

「で、どんな人？カッコいい？」

「んー、結構カッコいい・・・かな・・・／／／」

なのはが赤面しながらアリサに話す。

「そういえば知ってる？最近、正体不明の怪物が出没してるって話・・・」

さすがが怯えたように話す。

正体不明の怪物・・・なのはには2種類が思い浮かんでいた。

1つは・・・ジュエルシードの怪物。そしてもう1つは・・・拓也から聞いたデジモンの事だった。

なのははまだ拓也が進化したアグニモン以外のデジモンを見た事が無い。

ただ、他のデジモンがいる可能性は否定できなかった。

「怪物？」

「うん、目撃情報が結構あるみたい・・・ただ、数十分の内にみんな消えてるみたいなんだけど」

数十分の間に消えている・・・というか、実は孝俊とフェイトが撃退したからなのだが、そんな事はなのはは勿論、拓也も知る由が無い。

ちなみに、なのはとフェイトは既に交戦しているが、なのははフェイトに敗北している。

なんとワンサイドゲーム・・・まるで手も足も出なかったらしい。

「・・・あ、体操服忘れちゃったあ・・・」

ふと思いついたようになのはが呟く。

その体操服を届ける為に、拓也が疾走中だったりするのだが。

「あんたが忘れものなんて珍しいわね」

「今日の体育はドッジボールだったよね」
隣でアリサが苦笑している。

「さすがは今回の体育の内容を思い出す。」

なのは携帯ですぐに母親の桃子に連絡を入れる。

そして、拓也が体操服を持って学校に向かってくれている事を聞いた。

「どうだった？」

「うん、さっき話したアルバイトの人が持ってきてくれるって言うてた」

なのはが嬉しそうに話す。

拓也の事を話す時は何となく嬉しそうである。

なのはにとって、もう1人お兄ちゃんが出来たような感じなのか・・・はたまた別の理由なのかは解らないが・・・とにかく、嬉しそうな顔をするのだ。

「良かったね、なのはちゃん」

「にはは・・・」

3人で笑い合っていると、チャイムが鳴った。

「どうやら授業が始まる様だ・・・」

「その頃の拓也」

「あー・・・まだ着かねーのかよ・・・結構遠いな」

ひたすら走っている拓也。

私立聖祥大附属小学校へは、なのは達はバス通学なのだ。

その為、徒歩で行けば結構時間がかかる。

「体育は2時間目からって言うてたし、それまでには間に合うと思
うが・・・」

ひたすら走る拓也。

そして約30分後・・・ようやく学校が見えてきた。

「や、やっと見えてきたぜ・・・」

そして、学校の中へ入れてもらう。

桃子が本当に連絡を入れてくれており（しかも何時撮ったのか、
拓也の写真まで送付）、すんなりと中に入れた。

今はまだ1時間目の授業中なので、待合室みたいな場所で待たせ
てもらった。

そして、なのはが授業終了後に待合室まで慌ててやってくる。

ついでにアリサとすずかも一緒にいる。

「はわわわわ・・・拓也さんすみませんー!!」

「ははは・・・気にすんなよ。ここまで走って来て良いトレーニング
グになったからさ」

拓也は、必死に謝るなの是对し、【気にしてない】と笑い飛ば
す。

現に、トレーニング代わりにはなった。
ただ、また走って帰らなきゃならないが(汗)

「へえ、この人がアルバイトの？」

アリサが拓也をまじまじと見ている。

「ん、なのはちゃんの友達か？」

「はい、私の友達のアリサ・バニングスちゃんと月村すずかちゃんです」

「よろしくお願いします」

問いかける拓也に対し、2人を紹介するなのは。

2人は揃って拓也に挨拶する。

「俺は神原拓也。昨日からなのはちゃんの家で世話になってるんだ。

【翠屋】でアルバイトしてる。よろしくな」

(ホントにカッコいいわね・・・背も高いイケメンだし・・・)
(そうだね・・・この人がアルバイトなら翠屋に更にお客さんが増えそうだね)

アリサとすずかが小声で話している。

無論、拓也となのはには聞こえていない。

ちなみに、拓也は身長175cmあり、結構がっしりしている。

16歳で175cmなら大分でかいだろうか。

「さてと、そろそろ行くかな・・・バイトは昼からでいいって言われてるから、その辺ぶらぶらして帰るよ」

「あ、うん・・・拓也さん、ホントにありがとうございますー!」

拓也は椅子から立ち上がり、礼を言うのはに後ろ手に手を振りながら待合室から出る。

そしてなのはの担任の先生に挨拶をして学校を出た。

だが、朝飯は食ったものの走って来た為、また腹が減ってしまった。

「・・・その辺でハンバーガーでも食うか」

拓也が去ってからすぐになのは達は体育の授業に取り掛かった。さすがが言っていたように、今日はドッジボールだった。

アリサ、さすがは運動神経が良く（さすがは特に）、活躍していた。

が、なのはは即行で当てられ、さっさとアウトにされていた。

授業を始めて30分後・・・事件は起こった。

ズズズズ・・・と、地面が揺れ始める。

子供達は勿論、教師達も騒然とする。

「な、何何何!？」

「地震!?にしては揺れが小刻みだけど!？」

「と、とりあえず避難しなきゃ・・・!」

なのは、アリサ、さすがが慌ててグラウンドの隅へ走る。

他の生徒達も同様に避難している。

また、校内も生徒達はおろか、教師達までパニック状態になっていた。

それもその筈、ただの地震なら大人達は多少落ち付ける・・・

『グガアアアアアアアア!!』

出てきたのはデジモンだったからだ!

メガドラモン 完全体 サイボーグ型 ウィルス種

必殺技 ジェノサイドアタック

(両腕から有機体系ミサイルを発射する)

得意技 アルティメットスライサー

(両手から空気の刃を放つ)

メガデスサイズ

(腕から巨大な鎌を出し、攻撃する)

メタルグレイモン、メタルマメモンなどでサイボーグ型デジモンを作る為の技術が

完成したことにより、対陸海空迎撃用デジモンとして作られた第一号機で、

対空迎撃用デジモン。

人工的に改造され、嚴重に守られているコンピューターに簡単に侵入し、全ての物を

破壊するようにプログラムされている。

両手にあるすどいツメは、どんな物質もカンタンに切り裂いてしまふ。

同時期に開発が進められていた“ギガドラモン”とはライバル関係にある。

メタルティラノモン 完全体 サイボーグ型 ウィルス種

必殺技 ギガデストロイヤー？

（右腕から有機体系ミサイルを発射する）

得意技 ヌークリアレーザー

（左腕から強力なレーザー光線を放つ）

対陸海空迎撃用デジモンとして作られた三体のうちの一体。
メガドラモンに続き対地迎撃用として改造されたサイボーグデジモン。

強化された体はどんな攻撃をも跳ね返す。

アゴの攻撃力もすさまじく、硬い武装も簡単に砕くことができる。

ユーノ君！なんか変な怪物が出てきてるんだけど！？

ええ！？でも、ジュエルシードの反応はないよ！・・・もしかして、拓也が言ってたデジモンってやつじゃ！？

なのはが念話でユーノに報告する。

ユーノは驚き、ふと拓也が言っていた事を思い出した。

でもどうしよう・・・学校じゃ私も魔法を使う訳にはいかな
いし・・・!

「なのはちゃん、危ない!!」

「ふえ!?!」

ふと、すずかが叫ぶ声が聞こえた。

なのはが見上げると、メタルティラノモンが襲いかかって来てい
たのだ!

『ギヤオオオオオオン!』

「にゃああ!!?!」

逃げる事も出来ず、その場にへたり込んでしまうのは。

(た、助けて・・・ユーノ君・・・助けて・・・拓也さん・・・!)

ひたすら助けを求めるのはに向けて、メタルティラノモンが砲
撃を放った!

なのはがいた場所が大爆発したが・・・煙が晴れると、そこにな
のははいなかった。

「ふえ・・・?」

「よう」

なのはがおそろおそろ目を開けると、何とそこには自分をお姫様
抱っこしている拓也がいたのだ。

拓也はハンバーガーを食って店を出た直後に、学校にデジモンが
現れたのを目撃し、すぐさま現場に駆け付けた。

そして、間一髪でなのはをメタルティラノモンの砲撃から救い出したのだった。ヌークリアレーザー

(ここは俺に任せろ。ここじゃ魔法は使えねえだろ?)

(う、うん・・・でも拓也さんは・・・)

(構わねーよ、元の世界でも周りにはバレバレだからな)

小声で話しながら、なのはに下がる様に言う拓也

人間界で戦っていた事もあり、周りの人間にはデジモンである事はバレバレだった拓也。

ちなみに、授業中でもデジモンが出現すれば普通に戦いに出ている。

「なのは！早くこっちに！」

アリサがなのはを引っ張る。

「あ、あの人は・・・」

「拓也さんなら心配無いよ。きっと大丈夫・・・」

心配するすずかだが、なのはは拓也を信じる。

拓也は自分よりずっと強い・・・きっとあんな凶悪なデジモン2体相手でも勝てる・・・と。

「子供達を襲うとは・・・勘弁ならねーな・・・!!」

拓也はデジヴァイスを構える。

「スピリットエボリューション！・・・アグニモン！」

ヒューマンスピリットのアグニモンに進化する拓也。
すぐさまメタルティラノモンに飛びかかって行った！

「はああああっ！」

アグニモンがメタルティラノモンの顔面に飛び膝蹴りをお見舞いする。

更には、よろけるメタルティラノモンの頭を踏み台にして飛び上がり、今度は空中にいるメガドラモンの尻尾を掴んで振り回し、地面に叩き落とした！

「す、凄い……！てゆうかあの何者なの！？」

「変身……した……！？」

「うっん、あれは進化したんだよ」

驚くアリサとすずかに対し、落ち着いて説明するなのは。

1度拓也から説明を受けているので、進化することについては驚かない。

「【バーニングサラマンダー】！」

『グギヤアアア！』

アグニモンが炎のエネルギー弾をメガドラモンに放つ。

見事に直撃し、悲鳴を上げるメガドラモン。

「よし……なっ！？やべえ！」

着地すると同時に、叫び声が聞こえた。

『きゃあああああああああ！……！』

ふと見ると、メタルティラノモンがなのは達に向かって砲撃しようとしてるではないか！

そして・・・メタルティラノモンの左腕から【ヌークリアレーザー】が放たれた。

「危ない！！・・・ぐああああっ！！」

アグニモンが危機一髪で身を挺してなのは達を防御し、【ヌークリアレーザー】をまともに受けてしまう。

「た、拓也さん！！」

「なのはちゃん・・・だ、大丈夫か・・・？」

進化が解けてしまい、拓也の状態に戻る。
それでも、なのは達を気遣う拓也。

「私達は大丈夫・・・でも、拓也さんが・・・！」

自分達を守ったせいで拓也が酷い目に遭った事に罪悪感を覚え、涙目になるのは。

アリサとすずかも今にも泣きだしそうである。

「・・・大丈夫だ・・・」

拓也がゆっくりと立ち上がる。

その眼には・・・未だに闘志の炎が燃え上がっていた。

「・・・もう怒った。容赦しねえ・・・！」

拓也が再びデジヴァイスを構え、左手を出す。
すると、アグニモンの時の様に1本ではなく、何本ものデジコー
ドが左手を覆う。

「スピリット・・・エボリューション!!」

拓也が叫んだ瞬間、爆炎が拓也の体を包む。

「うがあああああああああああああああああつ!!」

拓也の叫び声が響き、爆炎が晴れると・・・そこにはアグニモン
ではない、違うデジモンが立っていた。

炎のような大きな翼を持ち、紅蓮の装甲に包まれた龍・・・その
名は・・・

「ヴリトラモン!!」

ヴリトラモン ハイブリッド体 魔竜型 バリアブル種
必殺技 コロナブラスター

(両腕に装着した【ルードリー・タルパナ】から太陽熱線並
のレーザーを放つ)

フレイムストーム

(巨大な炎の竜巻を放つ)

得意技 クリムゾンフィンガー

(【ルードリー・タルパナ】を盾にして、タックルする)

ドラグファンガー

(巨大な炎の竜に包まれて突撃する)

伝説の十闘士“エンシエントグレイモン”の力を受け継いだ、炎の属性を持つ獣型
デジモン。

火山研究用データから誕生したといわれており、たとえ溶岩の中でも行動可能。

敵が強いほど燃える性格をしている。

両腕には「ルードリー・タルパナ」という武器を装備。

この状態はビーストスピリットと言い、全開まで力を引き出せば究極体に匹敵するとも言われる。

今でこそ拓也は普通に使いこなしているが、初めて使った時は暴走してしまった。

。それだけ出力が大きく、経験が少ないとかなり危険である(周りが)

「で、でかつ!?!」

「アグニモン・・・じゃない!?!」

アリサとなのはが現れたヴリトラモンに驚く。

「……さあ、お仕置きの間だぜ……!」

ヴリトラモンの眼光は、ただただ鋭くメガドラモンとメタルティ
ラノモンを睨みつけていた。

次回、ヴリトラモンが大暴れ!

続く

第5話 男の主人公は炎属性が多い気がする（後書き）

第5話更新です。

恐らく、今年中は多分更新はありません（もしかすれば1回だけあるかも？）

なのは「拓也さん、まだあんな姿があっただね（苦笑）」

拓也「まあな」

次回、拓也がめっちゃ暴れる・・・かな？

拓也「かな？じゃねーだろ（汗）」

では、次回もお楽しみに！

第6話 基本的に主人公を怒らせてはいけない気がする（前書き）

はい、何とか2009年中に更新できました。
第6話です。

拓也「あと1日半しかないけどな（苦笑）」

なのは「拓也さん、来年もよろしくなの」

拓也「いや、まだ前書きだろ。そう言っつのはあとがきで言おうぜ（苦笑）」

では、始まります。

第6話 基本的に主人公を怒らせてはいけない気がする

第6話副題【心遣い】

拓也は、なのはの忘れものの体操服を届けに小学校に向かった。

だが、その体育の授業中にメガドラモンとメタルティラノモンが小学校を襲撃、学校中が混乱する中、メタルティラノモンがなのはに襲いかかる。

しかし間一髪のところまで拓也が助け出す。

そして、すぐさまアグニモンに進化してメガドラモンとメタルティラノモンに立ち向かう。

優勢に戦うも、メタルティラノモンの砲撃をなのは達を庇って受けてしまい、進化が解けてしまう。

しかし、再びデジヴァイスを構え、今度はヴリトラモンに進化した拓也。

炎のごとき闘志をその目に宿し、再びメガドラモンとメタルティラノモンに立ち向かう！

「……絶対に許さねーぞ……貴様ら……」

炎がヴリトラモンの周りを渦巻いている。

まるで、拓也自身の怒りを表しているかのようなだった。

メガドラモン、メタルティラノモンはそれを見て怖気づいているかのように、後ずさっていた。

「おおおおおっ！」

ヴリトラモンを巨大な炎の竜が包み、一気に2匹に向かって突撃していった！

「くらえっ！【ドラグファンガー】！！！」

次の瞬間、爆発音が響いて吹っ飛ばされるメガドラモンとメタルティラノモンがいた。

『グガアー―ッ！』『ギャオオー―ッ！』

逆上してそれぞれ【アルティメットスライサー】と【ヌークリアレーザー】を放つ2匹。

「ぬんっ！」

『ズドオオオオオオオンッ！』

ヴリトラモンは避けるでもなく、直撃を受ける。

「ああっ！」

「直撃しちゃったわよ!？」

「た、拓也さん!？」

すずか、アリサ、なのはは爆風に飛ばされそうになりながらも、拓也の身を案じる。

爆風が晴れて行く・・・だが、そこには無傷のヴリトラモンがいた！

「へへ・・・効かねーな・・・!」

余裕の笑みを浮かべ、再びメガドラモンとメタルティラノモンに迫る。

さらに激しい炎がヴリトラモンの周りを渦巻く。

「喰らいやがれ・・・【フレイムストーム】！！」

轟音を上げながら巨大な炎の竜巻が2匹に向かって飛んでいく！
メガドラモンは空を飛んで辛うじてかわすが、メタルティラノモンは直撃を喰らい、消滅してしまった。

「よっしゃ、まずは1匹・・・！」

『グガ・・・』

あまりの威力に冷や汗をかいているメガドラモン。
もしも自分が喰らっていれば・・・そう思うと震えずにはいられないだろう。

「おらあああああつ！」

間髪いれずにヴリトラモンが襲いかかる。

もはや容赦も何もあったものではない。

鉄拳、蹴り、頭突き、尻尾、固め技、しまいにはパイルドライブ
まで繰り出す始末。

決め技になるほどの威力が無い為、メガドラモンにとっては地獄である。

「す、凄いね・・・」

「うん・・・」

アリスとすずかは呆然とその状況を見ている。

「頑張れー！拓也さーん！」

一方、なのははノリノリで拓也を応援していたりするが。

「よし・・・トドメだ！」

ヴリトラモンの両腕の【ルードリー・タルパナ】が光りだす。高熱が籠っているせいか、オレンジ色にぼんやりと光っている。

「くらえ！【コロナブラスター】っ！！！」

両腕の【ルードリー・タルパナ】から強烈なレーザー光線が放たれ、メガドラモンに直撃する。

『ギャグアアアアアアアア！！』

焼け落ちながら消滅していくメガドラモン。
なんとも無惨な最後である。

「ふう・・・」

ヴリトラモンは一息ついて拓也の姿に戻る。

校舎内やグラウンドからは子供達や教師達の歓声が聞こえてくる。

「拓也さん、やったね！」

「ホントにありがとうとつごぞいます！」

「助かりました！」

なのは、すずか、アリスが次々に拓也に話しかける。

「いや、皆無事で良かったよ」

拓也は笑顔で3人に返す。

アグニモンの時に受けたダメージがあるが、大した事は無い。

「危ないところを本当にありがとうございました……！」

「お陰で怪人も出ずに済みましたよ」

なのは達の担任教師と校長先生が拓也に近寄ってくる。

「あ、いや、子供達が無事で良かったですよ……あと、この事は出来るだけ誰にも言わないようにしてもらえますか？」

拓也は礼儀正しく言葉を返しながら、この事は出来るだけ内密にしてほしいと懇願する。

「こうやって戦って行くうちにいずれはバレて行くとは思いますが……俺も一応訳有りなんで」

「解りました。我々の命の恩人のたつての願いです。この事は子供達にも他の教師達にも口外しないように言っておきます」

拓也の言葉に深入りするでもなく、校長先生は拓也の願いを快諾した。

「ありがとうございます。では、俺はこれで失礼します」

「本当にありがとうございます！良ければまた、我が校を訪問してください。子供達も喜ぶと思うので」

拓也は担任教師の申し出をありがたく受け取り、小学校を後にす

るのであった。

ちなみに、バイトにはきっちり昼から参加したのであった。

↳数日後、孝俊Side↳

「んー！やっぱり孝俊の料理は美味いねえ」

「そうだね・・・」

例によって例のごとく、孝俊が2人の昼ご飯を作っていた。

ちなみに今日の昼ご飯は手打ちうどんだ。

孝俊はまさにテスタロッツサ家の料理長、台所の覇者と化していた。

「・・・で、ジュエルシードはいくつか集まったのか？」

孝俊はずっとフェイトに付いて歩いてきたわけではない。

飯の準備をしたり、家事をやったりしていた為に、行けなかった時もあった。

で、そーいう時に限ってなのはと対決したりしていた。

ちなみに、なのはSideも同様に、拓也がいない時に限ってフ

エイトと戦う羽目になっている。
拓也はその時はバイト中だったりする。

「うん・・・とりあえずは4つ」

「色々邪魔が入っちまってるからね・・・すんなりとは行かなくつてさ」

アルフが言う邪魔とは、なのはとユーノの事である。

「ふーん・・・ま、次は俺も付いて行くよ」

「ああ、頼むよ。あんたが付いて来てくれるなら百人力さ！」

孝俊の実力は既にアルフにも認められている。

フェイトもハッキリとは言わないが、孝俊の事は頼もしく思っているのだ。

「フェイト・・・」

「何？」

孝俊が静かにフェイトに話しかける。

「前から言おうと思ってたが・・・あんまり無茶すんじゃねーぞ？」

「えっ・・・？」

予想だにできなかった孝俊の言葉に驚くフェイト。

「昨日、表情にこそ出さなかったが、結構疲れてたみたいだったしな。夕飯にもあまり手を付けてなかったろ？」

「う……………」

隠してたつもりだったが、バレバレだった事に口をつぐんでしま
う。

ちなみに、夕飯の後孝俊は後片付けと部屋の掃除などをやってい
た。

「おまけに帰って来た時にはバルディッシュは破損してるし・・・
フェイト自身にも、バルディッシュにも無茶をさせたらいかんぜ？」
「・・・」

見てるところはちゃんと見ている孝俊。

その性格ゆえに、強く言う事はあまりないが、言葉に迫力はある。
何処か怒ってるようにも見えるのか、その威圧に黙ってしまうフ
ェイト。

「フェイト・・・」
「・・・っ！」

ゆっくりと手を出す孝俊。

殴られでもするのかと思い、ビクツと体を震わせるフェイト。

しかし・・・衝撃は無く、頭に柔らかい感触が来た。

「・・・１人で何もかも抱え込まずに、もっと周りを頼りな
フェイトにはアルフって言う優秀な使い魔がいるんだし、今は俺も
いるだろ？」

孝俊はゆっくり優しくフェイトの頭を撫でていた。

「うん・・・」

フェイトはただただ、撫でられている感触を感じるだけだった。孝俊の大きな手の暖かさに身を委ねて・・・隣でアルフが何だか羨ましそうな顔をしていたが、気付くはずも無かったりする。

翌日・・・フェイトとアルフは、フェイトの母親であるプレシア・テストロッサの元に報告&回収したジュエルシードを渡しに行く事に。

孝俊はプレシアがいる場所がどんな所か興味があるらしく、ついで行く事にした。

アルフはあまり良い顔をしなかったが、帰ったら高級ドッグフードを買ってやると言われ、渋々承諾した。

「じゃ、行くよ・・・?」

「ああ!」「OKだぜ」

フェイトの言葉に準備が出来ているアルフと孝俊は返事を返す。

「次元転移。次元座標。 8 7 6 C 4 4 1 9.....」

フェイトが呟くと、魔法陣の光がどんどん強くなっていく。

「開け、誘いへの扉。時の庭園、テストロッサの主の所へ!」

魔法陣が強力な光を発し、三人を包んだ。

高時空間内『時の庭園』。

プレシア・テストロッサが住んでいる場所らしい。

「へーえ、綺麗な所じゃんか」

孝俊は辺りを見回している。

「じゃあ、あたしとフェイトは行ってくるからさ、その辺ブラブラしてて。用が済んだら戻ってくるからさ」

「ん、解った」

フェイトとアルフはプレシアがいる所へと向かって行った。その時のアルフの目は・・・何処となく辛そうだった。

それから20分ほどが経過した・・・

「・・・遅いな・・・なんか手間取ってんのか？」

心配になり、フェイトとアルフが歩いて行った方向に小走りで向かう孝俊。

少し走っていくと・・・扉の傍でアルフが傷だらけになって倒れているではないか。

「アルフ!? どうした! しっかりしろ! 何があった!？」

アルフを抱きかかえ、喋りかける孝俊。

「孝俊・・・ふえ・・・フェイトが・・・」

「無理に喋るな。すぐに治してやるから!」

孝俊はすぐさまブロスモンに進化、治療型【クリスタルレーザー】でアルフの傷を治す。

傷はみるみる内に塞がっていった。

と、次の瞬間、何かしら音が聞こえた。

「……こりやまずいかもな……」

アルフを抱きかかえて（ちゃっかりお姫様抱っこ）扉から遠ざける。

そして再び扉の前に仁王立ちし、ハンマーを取り出す。

そして片足をフラミンゴのごとく高く上げ……ハンマーを振りかぶる。

「【メモリアル・アーチ 1本足打法】！」

強烈な打撃音が響き、扉が破壊される。

なお、アルフはこの時、孝俊の背後にユニフォーム着て黒いヘルメット被った某世界のホームラン王が見えたという。

扉を破壊して、すぐに進化を解除した孝俊。

部屋の中を見て、孝俊は眼を疑った。

フェイトが鎖に吊るされ、バリアジャケットが見るも無残に引き裂かれているのではないか。

「フェイト!？」

「……いきなり扉を破壊して入ってくるなんて……あなた、何者?」

吊るされたフェイトの隣に黒髪の大人の女性が立っていた。

何処か狂気すら感じさせる雰囲気だ。

「……通りすがりの高校生だ」

「ふざけないで!」

孝俊の解答に、プレシアが声を荒げ、杖を掲げて雷を発した！
孝俊の足元に炸裂し、煙が立ち込める。

「真面目に答えなさい・・・さもないと、次は当てるわ」

だが、煙の中からは何も聞こえてこない。

と、いきなり煙の中から矢じり型のエネルギーショットが飛んで来る。

「!?!」

プレシアは少し驚くが、エネルギーショットはプレシアではなく、フェイトを吊るしてある鎖を斬り裂いた。

鎖が斬れて、フェイトが落ちてくる。

煙の中からプロスモンが飛び出し、フェイトをキャッチする。

そしてすぐに後ろに飛んでプレシアから距離を取る。

後ろに飛びながら進化を解除する。

プレシアが喋ってから、その間わずから秒だった。

「な・・・!?!」

人間業ではないその速さにプレシアは驚きを隠せなかった。

あの時孝俊は立ち込める煙を利用してプロスモンに進化、すぐさま【コスモエッジ】を発射して、フェイトを吊るす鎖を斬り裂く。そしてターボ（プロスモンはマシンの塊なので、これくらいは標準装備）を使って高速移動。

フェイトを救出し、バックステップで進化を解除しながらプレシ

アから距離を取った。

「孝……俊……？」

フェイトがゆっくりと目を開ける。

かなりのダメージを負ったのか、声も弱々しい。

「気が付いたか……良かった……」

「フェイト！」

孝俊が安心してると、アルフが部屋に駆け込んで来た。

「アルフ、フェイトを頼む」

孝俊はフェイトをアルフに任せ、プレシアの方に向き直った。

「だ、大丈夫なのかい……？あの女はとんでもなく強い魔導師なんだよ……？」

アルフが心配そうに孝俊に話しかける。

「……【弱気は最大の敵】……だ。相手が誰だろうと俺は気持ちでは引き下がりはない」

「孝俊……」

この時、フェイトには孝俊の背中にユニフォーム着て赤い帽子をかぶった、某【炎のストッパー】が見えていたとか……

「……あなたが……フェイトの母親だな？」

「いかにも、私がその子の母親、大魔導師プレシア・テストロッサ

よ

孝俊は眼を鋭くして問いかける。

プレシアは、表情を崩さずに孝俊を見る。

「・・・何故フェイトにこんな仕打ちをした」

「何故って？この大魔導師プレシア・テストロツサの娘がああ程度の成果しか上げられなかったのよ？少しお仕置きをしたまでよ・・・」

「

プレシアの言葉に、孝俊は怒りを覚えずにはいらなかった。

言葉にこそ出さないフェイトだが、その目は何処か寂しそうだった。

ジュエルシードを集めるのも全て母親の為である。

バルディッシュを破損させてまで、母親の為に健気に頑張り続けるフェイトを知っているからこそ、孝俊は怒っていた。

「てめえ・・・それが母親のする事か・・・！フェイトがどれだけ頑張つて、どれだけ辛い思いをして、どれだけあんなの事を想つてジュエルシードを集めたのか・・・解つてんのか！？」

孝俊は声を荒げた。

普段冷静で温厚な孝俊が声を荒げるなど、滅多に無い。

それだけ孝俊は怒っていたのだ。

「黙りなさい・・・目障りだわ！」

プレシアが再び雷を発射する。

「しゅわっちー！」

某特撮ヒーローみたいな恰好をしながら飛んで避ける孝俊。

「た、孝俊!」

「俺の事は良いから、早く外に出ろ!すぐに俺も片を付ける!」

フェイトとアルフに外に出るように指示し、孝俊は雷を避け続ける。

孝俊の言葉を聞き、アルフは頷いてフェイトを抱きかかえて外に出る。

「人間の割になかなか逃げ足は速いようね!」

次々に雷を放ってくるプレシア。

ひたすらそれを避ける孝俊。

進化して1発ぶちかましてやりたい気分だったが、仮にもフェイトの母親・・・

そんな事をすればフェイトにどんな顔をされるか解ったものではない。

「相手の魔力が切れるまで待つしかないか・・・っておわっ!?!」

壁を蹴って飛ばうとした瞬間、壁がスライドして道が出現したのだ。

孝俊はそのままその通路に落ちた。

「そ、そこは・・・!」

プレシアが焦った顔で声を出す。

「隠し通路・・・何かあるのか・・・？」

孝俊はその通路のすぐ先にある物を見て・・・驚きを隠せなかった。

「なっ・・・フェイト・・・!？」

ガラス張りの様なケースがあり、その中に裸の少女が1人入っていた。

しかもその少女は・・・フェイトと瓜二つだったのだ!

これは一体どういう事なのか？

続く

第6話 基本的に主人公を怒らせてはいけない気がする（後書き）

はい、第6話完了です。

孝俊「お、今回はギャグらしいギャグは無かったな」

あ、忘れてた・・・改訂してからギャグシーン作ろうかな・・・

孝俊「わー！やめろ！折角のシリアスなシーンが台無しになるだろ
うが！」

「冗談だよ。」

フェイト「孝俊って、あんなに怒ったりするんだ・・・」

孝俊「そりゃまあ、な・・・俺だって怒る時は怒るし」

さて、次回の更新は来年になります。

孝俊・フェイト・アルフ』では、皆さん良いお年を〜
』

第7話 どんな命でも大切にしなきゃいけない気がする（前書き）

新年明けましておめでとございます。

少し長くなりましたが、第7話です。

孝俊「今年もよろしくな、フェイト、アルフ」

フェイト「うん、よろしくね」

アルフ「よろしくー！」

2010年も頑張って行きたいと思います。

孝俊「では、第7話。始まるぜ」

第7話 どんな命でも大切にしなきゃいけない気がする

第7話副題【黒幕】

「・・・フェイトが・・・もう1人・・・いや、フェイトより小さいか・・・？」

ガラス張りのケースの前に立ち、考える孝俊。

「そこを離れなさい！」

「どわっ!？」

プレシアが雷を放ち、咄嗟に避ける孝俊。

「おい、どういう事だ・・・なんでフェイトがもう1人いるんだ？」

プレシアに言い放つ孝俊。

「フェイトがもう1人？笑わせないで・・・その子は私の本当の娘、アリシア・テスタロツサ・・・」

「本当の娘・・・だと・・・？」

鼻で笑うプレシアの言葉を聞き、愕然とする孝俊。

じゃあ、フェイトは一体何なのか・・・？

「フェイトは私がアリシアの代わりに作った人造生命体・・・【フェイト】はその時のプロジェクトから付けた名前よ。私からしてみ

れば、あの子はただの人形に過ぎないわ」

「人造生命体・・・人形・・・だと・・・」

孝俊は、プレシアのフェイトに対する態度に、どんどん怒りがこみ上げて行く。

プレシアは更に言葉を続ける。

「アリシアは昔、事故で死んでしまった・・・だから私は【プロジエクトF】を完成させ、フェイトを作った・・・」

「事故・・・」

「フェイトはアリシアと姿形は同じ・・・でも・・・アリシアと同じようにはならなかった・・・記憶をあげても意味は無かった」

孝俊は怒りを必死に抑えながら、プレシアの言葉を聞いていた。

「私はあんな出来損ないなんか知らない。だから『ジュエルシード』を使い、失われた秘法を用いると言われる約束の地『アルハザード』へ行つて、娘のアリシアを蘇らせる！！」

孝俊はやりきれなかった。

一度失った生命は元には戻らない。

たとえオファニモンだろうがルーチエモンだろうが伝説の十闘士だろうが、人やデジモンを蘇らせる事は出来ない。

だからこそ、命は大切にしなければいけぬ。

作った命を捨てる・・・その命の持ち主が創造主の為に健気に、必死に生きているのに、そんな命を弄ぶプレシアを・・・孝俊は放つてはおけなかった。

「プレシア・・・あなた、それがホントに娘アリシアの為になると思っているのか・・・？」

「どづいつ事よ……?」

孝俊はゆっくり、静かに口を開く。
その言葉に、プレシアは眼を細める。

「あなたは……自己満足の為に、娘アリシアの命を弄んでるに過ぎん」

「……黙れ……」

「今のあなたを見たら……アリシアはきっと……いや、絶対に悲しむ……本当に娘の為を想うなら……そのまま安らかに寝かせてやれっつんだよ!!!」

「っ……黙りなさいっつて言ってるでしょう!!!」

プレシアが魔法弾【フォトンバレット】を孝俊に向けて数発放つ。ごく初級の射撃魔法だが、プレシアほどの熟練者が使えば相当な威力になる。

それを孝俊は……避けなかった。

「ぐはあああああつ!!!」

大ダメージを受けて吹っ飛ぶ孝俊。

しかも数発も喰らっている為、立ち上がるのもやっとの様だ。

「っぐ……」

「……何故……避けなかったの……? さっきまでの雷をかわしていたあなたなら……今のくらいかわせたはずよ……?」

プレシアは動揺していた。

まさか無防備で受けるとは思わなかったからだ。

「……今までのフェイトの苦しみや、悲しむであるうアリシアの

事を考えれば・・・こんなもん大した事は無い・・・」

孝俊はボロボロになっているフェイトを見て思っていた。

時折見せる悲しい表情の一因はこれだった・・・そして、フェイトの背中にあつた傷跡はこれが原因だったと。

自分は殆ど何もしてやれない・・・ならばせめて、フェイトが受けた仕打ちを自分も受け、苦しみだけでも解ってやろう、と。

「・・・気は済んだか・・・？」

不敵に笑う孝俊。それでも、体力は限界に近かったが。

「・・・っ！ごほっ・・・！」

だが次の瞬間、プレシアが急に咳き込みだした。吐血し、床にも血が付着する。

「お、おい、あんた・・・！」

「ふふ・・・いくら私でも・・・病は治せないのよ・・・私を倒すなら・・・今が好機・・・」

「・・・断る。んな事したらフェイトもアリシアも悲しむ。あの世からアリシアに恨まれたりしたら嫌だしな」

プレシアに対し、背を向けたまま言う孝俊。

「・・・あと、そこで高見の見物してないで出てきたらどうだ」
「え・・・？」

孝俊の言葉にプレシアが耳を疑う。

ここには自分と孝俊しかいない筈。フェイトとアルフは既にここを出た……

どういう事なのか？

「ふん、バレていたか……流石にデジモンに進化する人間。感が鋭いな」

すると、仮面を付けたヴァンパイアのような男が現れた。実はこいつもデジモンなのだ。

ヴァンデモン 完全体 アンデッド型 ウイルス種

必殺技 ブラッディストリーム（血の様に赤い電撃の鞭で攻撃）

デッドスクリーム（両手からコウモリのような光線を放ち、相手を石化させる）

得意技 ナイトレイド（無数のコウモリを操って、敵に奇襲をかける）

クラウドミニオン（右手から渦を発生させ、敵を攻撃する）

「な、何なの！あなたは……！」

プレシアは驚愕の表情でヴァンデモンを見る。

勿論、プレシアはデジモンを見るのは初めてである。

「ふん、何年もずっと近くにいたのに全く気付かなかったとは……
・大魔導師も間抜けなものだ」

「何年も……だと？」

ヴァンデモンの言葉に、孝俊が反応する。

「折角だから教えてやろう。私はこの世界の魔導士達の力を危惧した・・・そこで行動を起こしたのだよ」

次にヴァンデモンが放った言葉に、孝俊もプレシアも驚愕した。それは・・・

「そいつの過去の魔導実験の事故を引き起こしたのは私なのだから」

「何・・・だと・・・」

そう、つまり事故を引き起こし、アリシアを失ったのは他でもない、ヴァンデモンの仕業だったからである。

「デジモンの力をもってすれば、魔導実験のプログラムを狂わせるなど造作もない事・・・結果、その女は時空管理局を追われた。精神まで見事に崩れてくれてな・・・」

不気味に笑いながら話すヴァンデモン。

「そんな・・・アリシアは・・・こんな奴のせいだ・・・」

その場に崩れ落ちるように座り込むプレシア。

そして、自分の過ちを認めざるを得なくなり、ショックを受ける。

「さて・・・この女にはもうひと働きしてもらわねば・・・」

するとヴァンデモンはプレシアの背中に触れ、なんと中に入り込

んで行った！

「ぐ・・・うあああああ！！！」

「プレシア！？」

苦悶の叫び声をあげるプレシア。

孝俊は助けようとするが、先程喰らった魔力弾のダメージが残っているせいか思うように動けなかった。

「あ・・・あなた・・・名前・・・は・・・？」

「た・・・孝俊・・・だ・・・」

「孝俊・・・ようやく・・・間違いに気づけたわ・・・ふえ・・・
フェイトを・・・お願い・・・！うあああああ！！！」

孝俊にフェイトの事を託し、プレシアは・・・その体をヴァンデモンに乗っ取られてしまった。

『さあ・・・貴様を始末しようか・・・！』

プレシアの姿だが、声はヴァンデモンの声である。

「お断りだね・・・さっさと退散させてもらおう！」

戦おうにも、ボロボロになっている今の状況では勝機は薄い。

孝俊はプロスモンに進化し、ターボを使って部屋から脱出、外に飛び出た。

「た、孝俊！？」

ボロボロになっている孝俊を見てビックリしているアルフ。

「事情は後だ！早くここを脱出するぞ！」

そして3人を光が包み・・・時の庭園を脱出した。

『ふん、逃がしたか・・・まあいい・・・膨大な魔力も手に入った事だしな・・・』

なんとか脱出し、事なきを得た3人。

だが、ダメージからか孝俊は到着した途端に気を失ってしまった。アルフは大慌てでフェイトと孝俊を部屋に運び込み、治療に大忙しとなっていた。

「孝俊・・・大丈夫かな・・・」

既に目が覚めているフェイト。

ちなみに目が覚めた時、自分よりも酷い傷を負っていた孝俊を見て軽くパニックになっていたらしい。

「孝俊がこれだけダメージを受けるなんて・・・」

アルフは孝俊の傷の具合を見て心配そうにつぶやく。

これまでの戦いをノーダメージで切り抜けてきた孝俊（戦いの後のトラブル除く）・・・

そんな孝俊が重傷を負ってしまった・・・何となくショックだったのだ。

「フェイトは大丈夫なのかい・・・？」

「うん、私はもう平気・・・アルフは？」

「アタシはあの時、孝俊に治してもらったからね。全然大丈夫だよ」
フェイトも傷は残っているが、もうそれ程酷くは無い。

【ピピピピピ・・・】

ふと、孝俊のD-スキャナから電子音が響く。
少し経つと・・・D-スキャナから光が出て、その中に天使の様なデジモンのホログラムが現れたのだ。

「な、何だい・・・!？」

「これは・・・ホログラム・・・?」

驚くアルフト、冷静にホログラムを見るフェイト。

『ようやく通信が繋がりました・・・』

「あ、あなたは・・・?」

『私はオファニモン・・・この少年にスピリットを与えた者です』

そう、三大天使デジモンの1人、オファニモンだった!

オファニモン 究極体 座天使型 ワクチン種
必殺技 セフィロートクリスタル(10個のクリスタルを召喚し、
相手にぶつける)

エデンスジャベリン(悪の心を浄化する光線)
得意技 エデンスニードル(ダッシュしながら武器のジャベリンで
突き刺す)

エデンスエア(空中からジャベリンを突き下ろす)

「あ、あんたが孝俊が言ってた・・・オファニモン・・・」

ホログラムとは言え、その神々しい姿に圧倒されるアルフ。

『次元の壁を越えるのは一苦労でしたが、繋がればあとは簡単です・・・』

「で、そのオファニモンがなんの用なんだい・・・？」

用件を尋ねるアルフ。

『いえ、今回はただ様子を見に来ただけなのですが・・・孝俊君はかなりダメージを負っているようですね・・・』

ベッドで眠っている孝俊を見て、心配そうに呟くオファニモン。

彼女としても、おそらく意外だったのだろう。

「なあ、折角だから聞きたいんだけど・・・孝俊ってそっちの世界としてはどれくらい強いんだい？」

『彼は・・・スピリット所持者の中でも3本の指に入る実力者です。特に剣を使わせれば、現役で右に出る者はいないでしょう』

「剣？でも、孝俊が使ってるのは・・・ハンマーだよな？」

フエイトがオファニモンの言葉に首を傾げる。

孝俊はここまで武器はハンマーしか使っていない。

『ハンマーも彼の得意武器ですが・・・剣術を最も得意としています。剣だけで彼は50以上の必殺技を持ちますので・・・』

「1」、50以上・・・!？」

驚かすにはいらなかった。

なにせ、必殺技に位置する【プロスバーストブレイカー】や【メモリアルアーチ】と同等、もしくはそれ以上の威力の物が50以上もあるというのだから。

『特殊型スピリット完成体NO.1【龍】・・・得意武器は剣』

「完成体・・・ですか？」

『ええ、25年くらい前の話ですが・・・試験体を私の母・・・先代のオファニモンが作りました。その時の物をベースに、私は完成体を作ったのです』

なんと、昔にもスピリットは存在していたのだ。

「孝俊が生まれる前から・・・スピリットは存在していたのか・・・」

実はその試験体スピリットが孝俊の生誕に大きく関わりを持つのだが、それはまだ先のお話・・・

『とにかく、私は今はこうやって映像でしか出られません・・・いずれ何とかしてそちらに出向きたいとは思いますが・・・』

「そうだね、色々積もる話もあるし・・・」

『それまで、孝俊君の事をよろしくお願いします・・・』

そう言い残すと、オファニモンのホログラムは消えた。

しばらくして・・・ジュエルシードの反応があり、フェイト達は孝俊の心配をしながらも外へ出て行った・・・

「その頃、拓也達は」

「……なのは……！」

「ジュエルシードの反応……！」

ユーノがなのはに叫ぶ。

なのはも理解し、立ち上がる。

「よし、行くうぜー！」

拓也もすっかり馴染んだのか、違和感もなくなのは達と行動する事に。

今度の場所は海が見える公園……

公園内には、ジュエルシードの光の柱が現れていた。

「あ……！あそこの木に入っていく……！」

ユーノが気に入っていくジュエルシードを見て叫ぶ。

そして……2本の腕が生えた巨大な木の怪物になった！

「うへえー……こりゃ前に戦った奴よりでかいんじゃないか？」

拓也は、なのはと初めて会った際に戦った樹木の怪物と、この怪物を比較してみる。

『グオオオオオオ！！』

雄叫びを上げる木の怪物。

「どうやら大きさだけでなく、雰囲気からして強さも前に戦った奴より上のようだ。」

「……こいつの相手は俺に任せろ。この前みたいにレイジングハートに無茶させたらいかんしな」

「は、はい……お願いします」

「どーやらなのはも、無茶をした事で拓也に少し叱られたようだった。」

「封印は任せませ……！」

「はい！」

一方、フェイトとアルフも公園にやって来ていた。

「フェイト」

アルフがフェイトに声をかける。

「うん。あの子達もいる……けど、もう1人の男の人は……誰だろうか？」

フェイトは、なのは達の姿を捉らえた。

だが、初めて見る拓也に首を傾げる。

拓也は左手を出し、D・スキヤナを構える。

「スピリットエボリューション！……アグニモン！」

ヒューマンスピリットのアグニモンに進化する拓也。

相変わらずその体には炎が渦巻いている。本日も絶好調のようだ。

「な・・・！進化した!？」

「まさかあの人・・・孝俊が言ってた拓也って人じゃ・・・」

進化した拓也に驚きを隠せないアルフと、前に孝俊が言ってた事を思い出すフエイト。

「なんてこった・・・よりもよってあいつらの側にいたのかい・・・！」

アルフは青ざめた。

孝俊と同じスピリットを使う奴が、よりもよって自分達の敵側にいたのだから。

「行くぜ行くぜ行くぜっ！」

某仮面ライダーみたいなセリフを吐きながら木の怪物に挑む拓也。

「【バーニングサラマンダー】！」

炎のエネルギー弾が2発、樹木の怪物に飛んでいく。

『ゴオオオオ！』

だが、木の怪物はバリアを張り、【バーニングサラマンダー】を防ぐ。

「へえ、生意気にバリアまで張るってか・・・牽制とはいえ、あれ

を防ぐとはやるじゃねーか」

バリアを張る木の怪物を見て呟くアグニモン。

「これなら・・・どうだっ！【バーニングサラマンダー】！！」

再びエネルギー弾が2発飛んでいく。

しかし、今度は大きさが倍ほどになっており、威力も桁違いである。

『グ・・・ガアアアッ！』

「ば・・・バリアごと押し返した！？」

バリアごと押されて仰向けに倒れる木の怪物。

そのデタラメな威力に、流石のフェイトも驚く。

「た、拓也さん・・・やっぱり・・・とっても強い・・・！」

なのはも改めて拓也の実力に驚く。

「うおおおおおっ！！」

アグニモンが今度は炎の竜巻と化し、木の怪物に向かって行く。

『グオオオオッ！』

「くらいやがれ！【サラマンダーブレイク】！！」

起き上がってバリアを張って迎え撃つ木の怪物。

だが、アグニモンは構わずに炎をまとった回し蹴りを炸裂させ・・・

バキイイイインッ!

もの見事に破壊した!

更に・・・

「おらあああああつ!!」

ドツゴオオオオツ!

更に身体を反転させ、もう1撃喰らわせた!

拓也のもう1つの必殺技、【2段サラマンダーブレイク】である。

『グガアアアアア・・・!!』

木の怪物が倒れ・・・中からジュエルシードが出てきた。

「よし!今だなのはちゃん!封印を!」

アグニモンから元に戻った拓也が叫ぶ。

なのはがレイジングハートを構え、フェイトもバルディッシュを構える。

【Sealing mode・Setup】

【Sealing form・Setup】

「ジュエルシード、シリアル7!」

「封印!」

ジュエルシードに光が降り注ぐ。

光が収まり、空中にジユエルシールドが佇む。フェイトとなのははジユエルシールドを挟むように対峙する。

「・・・ジユエルシールドには衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「うん。タベみたいになつたら、私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも・・・可哀相だしね」

「・・・だけど・・・譲れないから」

フェイトはバルディッシュを鎌の形状に変える。

「私は・・・フェイトちゃんと話したいだけなんだけど・・・」

なのはもレイジングハートを構える。

なのはは更に続ける。

「私が勝つたら・・・ただの甘つたれた子じゃないって解ってもらえたら・・・お話・・・聞いてくれる？」

「・・・」

2人の間に静寂が流れ・・・そして同時に動き出した。

そして・・・2人がデバイスを同時に降り下ろした！

だが、ぶつかり合う直前に青い魔法陣が展開され・・・そこから現れた黒いバリアジャケットを羽織った少年がデバイスを受け止めていた。

「！！！？」

突然の乱入者に二人は驚いた。

地上にいる拓也も呆然としていた。

「ストップだ！……ここでの戦闘は危険すぎる！」

そして少年は言葉を続ける。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

「まずは二人とも武器を引くんだ」

クロノに言われてなのはとフェイトは一旦デバイスを引く。
ジュエルシールドを空中に残して、三人は地上に降りた。
なのはとフェイトの間に立っているクロノは交互に二人を見た。

「このまま戦闘行為を続けるなら……」

クロノが言いかけた時、突如空からオレンジ色の魔力弾が降ってきた。

「っー！」

クロノは青い魔法陣を展開して魔力弾を防ぐ。

全員が空を見上げる。

そこにはアルフが空中に佇んでいた。

「フェイト！！撤退するよ！離れて！！」

アルフが再び魔力弾を複数放つ。

フェイトはそれを見て、空中にあるジュエルシールド目掛けて飛ぶ。

なのはとクロノは後ろに跳んで魔力弾を避ける。

「ちょ、おいおいおい！やばい、やばいって！」

拓也は必死に、降ってくる魔力弾をかわしていた。

進化を解除してしまっていた為、逃げるのにも一苦労である。

魔力弾が地面に当たって爆風が発生し、土煙が立ち込める。
フェイトはジュエルシードに手を伸ばす。

その時、クロノは青い魔力弾をフェイトに向かって放った。

「ああっ！」

魔力弾がフェイトを掠め、その衝撃で落ちて行くフェイト。

「フェイトー！！！」

アルフが悲痛な表情で叫ぶ。

だが、次の瞬間1つの影がアルフの前を横切り・・・空中でフェイトを抱きかかえて着地した！

「大丈夫か・・・？」

「え・・・孝・・・俊・・・？」

なんと、部屋で寝ていたはずの孝俊がブロスモンとなり、駆けつけたのだ。

フェイト達が部屋を出た少し後、目を覚ました孝俊は傷ついた体に鞭打ってここまで来たのだ。

「な・・・なんで・・・」

「言ったる？【次は俺も手伝う】ってよ・・・」

戸惑うフェイトに、ブロスモンは笑って答える。

「孝俊!？」

「・・・拓也・・・無事だったか」

草むらから顔を出す拓也を見て、安心する孝俊。

「な、なんでお前がそっち側に・・・!？」

「こっちにも事情があるんだよ・・・」

静かに呟く孝俊。

怪我のせいで、大きな声が出せないせいもあるが。

「丁度いい、なら貴方にも事情を聞かせてもらおうか」

クロノがブロスモンにデバイスを向ける。

「・・・断る、と言ったら・・・?」

「・・・それ相応の対応をさせてもらう!」

ブロスモンの答えに、少し顔を引きつらせるクロノ。

「・・・アルフ、フェイトを連れて逃げる。ここは俺が何とかする」

ブロスモンはフェイトを、狼モードのアルフの背中に乗せる。

そして・・・ハンマーではなく剣を取り出す。

(剣を出した・・・孝俊・・・本気だね・・・)

アルフはオフアニモンが言っていた事を思い出し、孝俊が本気で
ある事を悟る。

「抵抗するつもりか・・・だったら容赦はしない！」

クロノが魔力弾を数発放つ。

「・・・・・・・・・・はあっ！」

ブロスモンが剣を振る・・・すると、魔力弾が全て真つ二つに割
れた。

「なっ・・・・・・・・!?」

クロノが驚いて目を見開く。

だが、その間にもブロスモンはクロノに接近してくる。

「はあっ！」

「・・・・・・・・っ!?!?」

ブロスモンはクロノを狙わず・・・クロノのデバイス【S2U】
を下から弾き飛ばした。

そして刃をクロノの顔の前に向ける。

「……………ここまで。俺の勝ちだ」

その場にいる、拓也を除いた全員が驚きを隠せなかった。
管理局や魔導師の事をよく知っているフェイトやアルフ、ユーノ

は特いだ。

「か・・・勝つちまったよ・・・」

孝俊の後ろにいるアルフは、開いた口が塞がらなかった。

「凄い・・・」

フェイトも驚いて、目を大きく見開いていた。

そして刃を向けられているクロノは・・・動けなかった。

ブロスモンはアルフの方を少し見て、何かを合図した。

「・・・！」

アルフはそれを理解したのか、フェイトを背中に乗せてその場を去っていった。

(さて・・・拓也を敵に回したら流石に分が悪すぎる・・・フェイト達は逃がせたいし、とりあえずあっちの言つとおりにするか・・・)

ブロスモンの状態から進化を解除した孝俊は、少し考える。

「な、なあ孝俊・・・よ、良く解んねえけどさ、お前の事だからちやんとした事情があるんだよな？詳しく聞かせてくれねーか？」

拓也が困惑しながら孝俊に尋ねる。

「・・・解った。流石にお前を敵に回すのはヤバすぎるしな。お前俺より強えーし」

(拓也って・・・あの彼より強いのか・・・)
(そう、みたいだね・・・)

ユーノとなのはは顔を見合わせて苦笑していた。

「だ・・・だったら、僕と一緒に来てもらおう」

クロノが立ち上がり、改めて同行するように求める。

拓也、なのは、ユーノ、そして孝俊は・・・次元航行艦船アース
ラへと案内されるのであった・・・

続く

第7話 どんな命でも大切にしなきゃいけない気がする（後書き）

はい、第7話終了です。

結構長くなってしまいましたが・・・

拓也「やっと孝俊と会えたぜ・・・」

孝俊「心配掛けたな（苦笑）」

なのは「孝俊さんがどんな人だか良く解らないけど、悪い人じゃなさそうだね」

では、第8話予告・・・ユーノ君どうぞ。

ユーノ「次回、リリカルなのはフロンティア第8話『世界中探せば自分と似た奴は結構いる気がする』。お楽しみに!」

第8話 世界中探せば自分と似た奴は結構いる気がする(前書き)

はい、第8話です。

拓也「なあ、ふと思ったんだが・・・」

なんだ？

拓也「色んな小説見ると、人気投票とかやってるじゃん？」

そうだな？

拓也「この小説ではやんねーのか？」

いや、まだ無理だろ。まだ8話だし。

まあ、もうちょい人気出れば考えるけど。

拓也「そうか(苦笑)」

孝俊「さて、第8話始まるぜー」

なのは「今回はオリジナルキャラも出るの」

第8話 世界中探せば自分と似た奴は結構いる気がする

第8話副題【管理局】

く木の怪物との戦闘中、アースラ艦内にてく

「現地では既に、戦闘が開始されています。人間が何かに変身……
でしょうか。魔人の様な……」

オペレーターらしき人物がモニターに映るアグニモンを見る。

「中心となっているロストロギアのクラスはA+……動作は不安
定ですが、無差別攻撃の特性を見せています」

別のオペレーターが、ジュエルシードの怪物を見て言う。

「……速やかに止めなければいけないわね」

中央部分の高い席に座っている緑髪の女性が呟く。

「クロノ・ハラウン執務官、出られる？」

「転移座標の特定は出来てます。命令があればいつでも」

緑髪の女性がクロノに尋ねる。

クロノは既に準備万端のようだ。

「それじゃあクロノ、現地での戦闘行動の停止と、ロストロギアの回収、彼らからの事情聴取を！」

「了解です、艦長！」

クロノが出発しようと、ポツドの様な物に入る。

転移装置みたいな物だろうか。

「気を付けてね」

ふと、真面目な表情から一変して、ハンカチを振って見送る艦長と呼ばれた女性。

「は、はい・・・行ってきます」

ここまでのシリアス(?)な雰囲気が一気に崩れ、苦笑いしながら出発するクロノだった。

その後・・・なのはとフェイトの戦闘は止めたものの、乱入した孝俊により、フェイトを逃がす結果となってしまったのだが。

「戦闘行動は停止。クロノ・ハラOWN執務官は現れたメカのような物によって敗北、戦闘していた片方は逃走」

「追跡は？」

「多重転移で逃走しています。追いきれませんね」

オペレーターと艦長がやり取りをしている。

アルフは多重転移を使い、上手い事逃げているようだ。

「そう・・・まあ、戦闘行動は迅速に停止。ロストロギアの確保も成功・・・良しとしましょう」

ジュエルシードを確保してクロノを見て、安堵の表情を浮かべる艦長。

「事情も色々聞けそうだしね」

そう言って、クロノと通信を繋げる艦長。

なのはとクロノ（あと拓也と孝俊）がいる公園に、艦長の映像が現れる。

「クロノ、お疲れ様」

「すみません、片方は逃がしてしまいました・・・」

「ううん、だいじょうぶよ でね、ちょっとお話が聞きたいから、その子達をアースラに案内してあげてくれないかしら？」

「了解です、すぐに戻ります」

クロノの謝罪を受け入れ、なのは達をアースラに案内するように求める艦長。

クロノは了解し、通信を切る。

そして・・・アースラの中へ案内されるなのは、ユーノ、拓也、孝俊。

4人はクロノと共に、アースラの中へワープする。

「ユーノ君・・・ここ、何処なんだろう・・・？」

「時空管理局の次元航行船の中だね・・・簡単に言うと、いくつもある次元世界を自由に航行する為の船・・・」

「あ、あんま簡単じゃないかも・・・」

きよろきよろと辺りを見回しながら進むのは。
ちやつかり拓也にくつついて歩いているが、当の拓也は全く気にしていない。

「へーえ・・・広いとこだな・・・」

「次元航行艦船アースラ・・・か」

拓也と孝俊も、辺りを見渡す。

デジタルワールドで冒険した拓也も、これ程でかい艦船は見た事が無い。

しばらく歩いていると、クロノはなのはに振り返る。

「ああ、何時までもその恰好じゃ窮屈だろう。バリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ」

「あ、そっか・・・そうですね。それじゃあ・・・」

なのはは言われた通りに通常の服装に戻り、レイジングハートを待機状態に戻す。

「君も、元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

「ああ、そうですね。ずっとこの姿でいたから、忘れてました」

ユーノがクロノに答えると、ユーノの体が光に包まれ・・・フェレットから人間の状態に戻る。

「ふう・・・なのははこの姿を見せるのは、久しぶりになるのかな

メン」

「だ、だよな？そっだよな！？ビックリしたあ・・・」

ユーノはどうやら思い違いに気付いたらしく、なのはもそれを聞いて安堵する。

「ん？待てよ・・・ユーノ、お前確か・・・フェレットの姿の時、ずっとなのはの部屋にいたんだよな？」

拓也が何かを思い出したらしく、ユーノに尋ねる。

「え、うん、そうだけど・・・？」

「てことはお前アレか？なのはちゃんを着替えとか普通に立ち会ってた訳か・・・？」

拓也の声にどんどんドスが効いてくる。

なんか後ろにアグニモンの幻影スタンドまで見えている。

「え、いや、ぼ、ぼくはそんなつもりじゃ・・・！」

「あと、確か俺と出会う前に温泉に行ったらしいが、その時もなのはちゃんと入ったらしいなあ・・・？」

拓也が凄まじい威圧感を出しながらユーノに迫る。

しかも、いつの間にかアグニモンの幻影スタンドがヴリトラモンに変わっている。

「・・・・・・・・・・／／／」

なのはは顔を赤くして俯いてしまっている。

そして・・・次の瞬間、拓也はユーノにチョークスリーパーを仕掛けていた。

「てめえ、この淫獣がああ！このまま地上に引き返して恭也さんにボコボコにしてみらう！」

「んぐぐぐぐぐ・・・！」

ユーノは顔を真っ赤にして自分の首を絞めている拓也の腕を叩いていた。

「お、落ち着け拓也・・・！ユーノが死ぬぞ・・・」

孝俊が何とかユーノから拓也を引き剥がす。

孝俊自身も、事故とはいえかつてフェイトを押し倒したり、風呂上がりの姿を見たりしているので、なんとなくユーノに同情した。

「ぜー・・・はー・・・し、死ぬかと思った・・・」

ユーノは冷や汗を掻きながら、必死に呼吸をしていた。

それだけ拓也のチョークスリーパーがキツチリと決まっていたのだろう。

「まあ、あれだ・・・今回の事はお互いの思い違いが招いた事故って事で・・・な？」

孝俊がユーノと拓也・なのはの間に入り、仲裁する。

第3者が入れば、多少はやりやすくなる。

「ま、まあそうだな・・・孝俊の言う事は尤もだし・・・」

拓也もどうにか落ち着いたらしく、冷静になる。

「落ち着いたなら、急いでくれ。艦長を待たせているんでね」

クロノに言われ、4人は艦長のいる部屋へ向かう。

「艦長、来てもらいました」

そして、中に入ると……拓也達は驚いた。

なにせ部屋の中には、盆栽や茶道具、畳や獅子脅しが置かれていたのだから。

(な、なんかここまでの道に似合わない和風空間だな……)
(そうだな……)

拓也と孝俊は顔を見合わせ、小声で話す。

「お疲れ様 どうぞ皆さん、楽にしてください」

畳の上では、艦長の緑髪の女性が正座して、拓也達を出迎えた。拓也達は、とりあえず畳の上に座る。

ふと、またドアをノックする音が聞こえた。

「艦長、ちょっといいですか？」

ドアの向こうから間の抜けた声が聞こえてくる。

「ええ、どうぞ」

艦長がその声の主を部屋に招き入れる。

その声の主を招いた瞬間、またしても拓也達は固まった。

「おろ？客つすか？」

その人物は・・・何故か『C』と書かれた帽子を被り、某球団の赤いユニフォーム（背番号14）を着ていたのだから。

しかもユニフォームには『C A P』と書かれていた。それを見た孝俊は立ち上がり・・・

「・・・あなた、なかなか良いセンスしてんな！」

「お、解るか？」

その人物とガツチリ握手を交わしていた。

拓也はずっこけ、なのはとユーノとクロノは呆然とし、艦長は微笑んでいた。

ちなみに、孝俊はその某球団の大ファンである。

「しかも背番号14とは・・・アンタとは気が合いそうだ。名前は？」

「俺は佐野孝昭^{さのたかあき}。時空管理局地上本部の二等空佐だ。今はこの次元航行艦隊に出向してんだ。よろしくな！」

「俺は面林孝俊。よろしくな孝昭！」

初対面でいきなり意気投合した2人だった。

しかも、孝昭の顔はどことなく孝俊に似ている。

「似た者同士というか何と言うか・・・」

拓也は苦笑いして、2人の様子を見ていた。

それから孝昭も交え、互いに自己紹介を行った。

「私は時空管理局提督『アースラ』の艦長、リンディ・ハラオウンです」

「俺は神原拓也って言います」

「俺は面林孝俊です」

そしてなのは、ユーノも紹介を終えて本題に入る。

まずは、拓也達の事情を話す。

「・・・つまり、貴方達は次元の歪みに引き込まれてこの世界に来た訳ですね」

「はい・・・ただ、ちょっと気にかかる事が・・・」

「気にかかる事？」

リンディの言葉に、孝俊が言葉を濁す。

孝俊の言葉にクロノが反応する。

「あの時、俺と拓也が放った技の威力くらいでは、到底次元の歪みが出来るとは考えられないんです」

「そーいやそうだな・・・アレで時空の歪みが出来たら、5年前の冒険での戦いだったらデジタルワールドが次元の歪みだらけになるか、消滅してるだろうから・・・」

「つまり・・・他に何か原因がある・・・て事か」

孝俊と拓也の言葉に、孝昭が呟く。

【デジモンフロンティア】をキッチリ見た方ならご存知だと思うが・
・
・
ヒューマンスピリット・ビーストスピリットの上に、その2つを融合したW^{ダブル}スピリット。
更に【火・風・氷・地・木】と【光・雷・闇・水・鋼】がそれぞれ1つになったハイパースピリット。
そして、十闘士のスピリットを全て合わせたエンシェントスピリットエボリューションがある。

成熟期〜完全体レベルのヒューマンスピリットの技のぶつかり合
い程度で次元の歪みが出る筈は無いのだ。
そうじゃなければ、拓也が言ったように5年前の冒険でデジタル
ワールドは崩壊してしまう計算になる。

ふと、拓也が何かを思い出したように口を開いた。

「1つ・・・心当たりがあるんだけどな・・・」

拓也の心当たりとは・・・？

続く

第8話 世界中探せば自分と似た奴は結構いる気がする（後書き）

はい、短いですが第8話終了です。

オリジナルキャラクター、佐野孝昭の登場です。

拓也「かなり変わった奴だな（苦笑）」

孝俊「そうか？でも良い奴だよな」

孝昭「ま、これからもよろしくな」

こんな奴でも二等空佐・・・大丈夫か時空管理局（書いといて
言っなよ）

では、次回予告をなのはちゃんどうぞ

なのは「次回、リリカルフロンティア第9話、【思いやりってやっぱり大切な気がする】。お楽しみに、なの」

第9話 思いやりってやっぱり大切な気がする(前書き)

はい、第9話です。

いつの間にか3万ヒット越えとったな・・・(汗)

孝俊「奇跡だ奇跡」

拓也「まあ、これに慢心する事無く書き続けるこつた」

解ってる(苦笑)

なのは「この調子でどんどんHIT数が増えると良いの」

・・・善処します(汗)

孝昭「んじゃ、第9話始まるぜ」

第9話 思いやりってやっぱり大切な気がする

第9話副題【手紙】

孝俊の疑問に対し、拓也が心当たりがあるという。
拓也の心当たりとは？

「心当たり？」

孝俊と孝昭が声を揃えて首を傾げる。

「5年前、俺は1度違う次元のデジタルワールドに飛んだ事があるんだ」

「え、マジ！？」

拓也の発言に、孝俊が声を上げる。

拓也はかつて、【Vテイマー01】の世界に飛ばされ、八神タイチ（無印の八神太一とは別人）と共闘した。

「その時だったかな、パラレルモンって奴がいてさ……そいつの能力で飛ばされたんだ」

「じゃあ、今回も……」

「ああ、その可能性は否定できねえな」
可能性が出てきた所で、次はなのは達について話す事にした。

「なるほど、そうですか。あのロストログア【ジュエルシード】を発掘したのはあなたですか」

「はい……それで、僕が回収しようとして……」

リンディがユーノに尋ねる。

ユーノは顔を俯かせ、申し訳なさそうな表情で話す。

「立派だわ……」

「だけど、同時に無謀でもある！」

リンディの言葉に続いて、クロノが声を上げる。

クロノに叱られ、ユーノは肩を落とす。

「まあ、そう言うなよクロノ。ジュエルシードの存在に気付けなかった管理局（くわんりょくじゅう）にも責任があるんだからよ？」

「む……」

孝昭が隣にいるクロノをなだめる。

正論を言われ、クロノは口をつぐんでしまう。

「あの……ロストロギアって、何なんですか？」

「そーいや俺も気になったが……なんなんすか？」

なのはがリンディに尋ねる。

拓也も、なのはに続いて尋ねる。

「ああ、遺失世界の遺産……って言っても解らないわね……」
リンディは、苦笑しながら反応する。

「えっと……次元空間の中にも、いくつも世界があるの。それぞれに生まれて育っていく世界……その中に、極稀に進化しすぎる世界があるの」

「なるほど……」

拓也と孝俊は理解が早く、リンディの言葉に頷く。

前にオファニモンから話だけは聞いていたからだ。

【デジタルワールドは、違う次元にいくつも存在する】、と……
拓也がかつて飛ばされた【Vテイマー01】の世界も、その1つである。

「技術や科学……進化しすぎたそれらは、自分達の世界を滅ぼしてしまつて、その跡に取り残された、失われた世界の危険な技術の遺産……」

「それらを総称して、【ロストロギア】と呼ぶ」

リンディが正確に説明し、クロノが締める。

「使用法は不明だが、使い様によっては世界どころか、次元空間すら滅ぼす力を持つ事がある、危険な技術」

「然るべき手続きをもって、然るべき場所に保管されてなければいけない品物……」

真面目な顔をして語るクロノ。

リンディも顔を険しくしている。

「貴方達が探しているロストロギア【ジュエルシード】は、次元干涉型のエネルギーの結晶体……いくつか集めて、特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を引き起こし、次元断層すら巻き起こす危険物……」

「おいおい、そんな物騒なもんだったのかよ、ジュエルシードって……」

リンディの話を、拓也が冷や汗をかきながら反応する。

強大なエネルギーを持つてる事は解っていたが、まさかそれ程の物だったとは思わなかったからだ。

「……これより、ロストロギア【ジュエルシード】については、時空管理局が全権を持ちます」

「君達は、今回の事は忘れてそれぞれの世界に戻って、元通りに暮らすと良い」

リンディとクロノが発言する。

「で、でも……!」

「まあ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩、ゆっくり話し合ってそれから改めてお話をしましょう?」

「あ、はい……」

リンディに言われ、渋々返事をするなのは。

「そちらの彼らは、【次元漂流者】って事で、僕らが身柄を預かる」

「あー・・・でも俺、なのはちゃんの家の店でアルバイトしてっから、それはちよつとなあ・・・」

クロノの申し出に、拓也が頭を掻きながら困り顔で話す。

「俺は・・・とりあえずここで世話になろう」

孝俊はクロノの申し出を了承した。

できればフェイト達の元に帰りたかったが、もしも後をつけられて居場所がバレたらまずいからだ。

「なら、そちらの・・・孝俊には残ってもらって、あとの君達は送って行こう。元の場所が良いね？」

孝俊を残し、なのは・ユーノ・拓也は元の世界へ戻って行った。

それから少し後、アースラ艦内のモニター室にて・・・

「凄いや・・・どっちもAAAクラスの魔導士だよ！」

「うん・・・」

なのはvsフェイトの映像を見て感嘆の声を発したのは、時空管理局通信主任兼執務官補佐のエイミー・リミアツタ。

彼女は、アースラの管制官でもある。

「魔力の平均値を見ても、この子で127万・・・」

なのはを見て、平均値を出す。

「黒い服の子で、143万・・・」

フェイトの平均値も出している。フェイトの方がなのはより数値は上のようなのだ。

「最大発揮値は、更にその3倍以上！」

つまり、2人とも最大で400万を超えているのだ。

「・・・孝昭の奴が平均値220万だから・・・」

「あはは・・・まあ、彼はSクラスの魔導士だからね」

クロノが孝昭の数値を愚痴る様に言い出す。

エイミーは苦笑いしながら話す。

流石に二等空佐だけあって、あんなおとぼけ野郎でもSクラスの魔導士なのだ。

「で、こっちの・・・アグニモンとか言ったっけ？魔力は感じないけど・・・少なくとも、実力ならAAA+には達するね」

木の怪物を圧倒しているアグニモンを見て、呟くエイミィ。

「気にかかったのはこっちなんだけど・・・」

今度は、クロノをあつという間に追い込んだブロスモンの映像を出す。

「実力はアグニモンと同等のAAA+。だけど・・・ほんとに極僅かなんだけど、魔力反応があつたんだ」

「何・・・？」

なんと、ブロスモンから魔力反応が出たというのだ。

「数値はおよそ5000程度。計測できたのは一瞬だけど・・・」

「彼は自分の事を普通の人間だと言っていた・・・そして、それを隠しているような素振りも無かつたが・・・」

数値は全くもって低い。しかも計測されたのは一瞬だった。

「恐らく、彼は普通の人間として、自分自身でもそう思い込んで過ごしてきたんでしょうね」

「艦長！」

モニター室にリンディが入って来た。

制服ではなく、私服姿だ。

「本人が自覚してないのであれば・・・無理に話す事でも無いけどね」

そう言って、モニターを見続ける3人であった・・・

〈アースラ艦内・とある部屋〉

拓也達と別れた後、孝俊は用意された部屋で1人何かを考えてい

た。

あれからクロノに散々尋問されたが、適当にはぐらかして受け流した。

やはりフェイトとアルフの事が気にかかるのだ。

「・・・2人とともに大丈夫だろうか・・・」

ぼそりと呟く。

ふと、部屋をノックする音がする。

「おう、俺だ。入っていいか？」

孝昭だった。

「ああ、良いぜ」

孝俊は完全に孝昭を信頼していた。

何処か通じる物があるのか、初対面から仲良くなれたのだから。

「・・・実のところ、あの戦闘見てただけだよ」

「なんだ、見てたのか」

孝昭はモニターで、クロノを圧倒する孝俊を見ていたのだ。

「お前：あの金髪の子と狼の使い魔が心配なんだろ？」

「・・・まあな」

「・・・だが、自分が動けば管理局は間違いなく自分に監視を付ける・・・だからこうして大人しくしてるって訳か」

「・・・ああ」

孝昭の問いに、孝俊は短く返事をするのみだった。

それでも、孝昭は話を続ける。

「はは、お前はよっぽどあの2人が大切なんだな」

「ああ、家族みてーなものかな・・・」

孝昭は微笑んで孝俊に言う。

孝俊もまた、笑って返す。

「・・・一つ、連絡を取る方法はあるぜ？」

「？」

「手紙だよ。・・・もしくは監視って名目で俺がお前に付けば良い」

「!?!」

孝昭の言葉に、目を丸くして驚く孝俊。

「孝昭、お前：管理局の人間だろ？何で俺にそこまでしてくれるんだ？」

「ふっ、俺とお前はもう友達ダチだろうがよ？他に理由が必要か？」

孝昭は人情派で、時空管理局でも有名な存在である。

しかも二等空佐だけあって実力はとんでもなく高く、名実共に局内では知られている。

孝昭は義務よりも、友達である孝俊の気持ちを汲んだのだった。

「・・・すまない、恩に着る」

そう言っ手紙を書き始めた孝俊であった。

それから数十分後、孝俊はリンデイの許可を得て、監視役（という名目）で孝昭を付けて海鳴市にいた。

フェイトと接触しない事、という条件付きだったが。

ちなみに孝昭は、実力は管理局から信頼されているので、放置気味になっていたりする。

2人は現在、アクセサリーショップに寄っていた。

「えーつと・・・ああ、これだこれだ」

孝俊は何かを選び、金を払って店を出た。

そしてその【何か】に、ペンで何やらメッセージらしき物を書き込んだ。

「これでよし・・・後は郵便局に行って、手紙と物を速達で送ってもらおうか・・・」

そう言って、孝昭と2人で郵便局に向かい、フェイトの元へ手紙を送るのだった。

翌朝・・・フェイトとアルフの住むマンション。

「フェイト・テストロツサさん、お届けものでーす」
郵便配達員が、フェイトの住む部屋の前にいる。

「あ、はいはい・・・」

人型になって、耳と尻尾を隠したアルフが出てくる。

フェイトはまだ、奥の方にいるようだった。

アルフは小包にサインをして、受け取る。

「珍しいね、届けものなんて……で、差出人は……！」

差出人の欄を見て、アルフは眼を見開く。

そう、孝俊からの贈り物だからだ。

「ふえ・・・フェイト！た、孝俊からの届け物だよ！」

そう聞くが早いか、フェイトは部屋から飛び出て来る。

「孝俊から・・・！」

2人が小包の上に結ばれている封筒を開ける。

そこには、孝俊からのメッセージが綴られていた。

【フェイト、アルフ・・・上手く逃げ切れたか？俺はその後、時空管理局に『次元漂流者』って事で保護された。】

「よかった・・・酷い目には遭わされてないんだ・・・」

孝俊の現状を見て、安堵するフェイト。

【本来なら、こうやって手紙を書く事も許されないんだが、管理局側に俺の味方をしてくれる奴が1人いて、そいつの協力でこうやっ

て手紙を書けたって訳だ】

「管理局にも良い奴はいるんだねえ……」

意外にも管理局側に味方がいた事にアルフは驚く。

【さて、本題だが……もうプレシアは、自分の意思でフエイトに危害を加える事は無いだろう。】

「ど、どという事なんだい……!？」

「まだ続きがあるみたい……!」

【と、いうのも……プレシアは、とあるデジモンに利用されていたからなんだ。

……かつて、プレシアは魔導実験で事故を起こしたとされているのだが、その事故を引き起こし、プレシアに罪を擦り付けたのがそのデジモンなんだ。】

「そ、そんな……!」

【まだ、管理局側にこの事は知らせていない……と言うか、まだ信用してもらえないだろう】

如何に保護されている身柄とはいえ、犯罪者とされている側にいた孝俊である。

こんな事を言っても、まだ信用してもらえないだろう・・・

【おまけに、プレシアはそのデジモンに身体を乗っ取られちゃった・・・だが、プレシアはどうやら身体が弱っているらしい。いつまでもプレシアの身体にいる訳ではない筈。そのデジモンの目的は恐らくジュエルシードだろう】

「母さん・・・」

手紙を握りしめ、母を心配するフェイト。

【最悪、ジュエルシードと引き換えにしてもプレシアを取り戻すつもりだ。だからフェイト、アルフ・・・お前達は引き続きジュエルシードを集めてくれ。俺は後で仲間と相談して、対策を考える】

「アルフ・・・」

「ああ、孝俊の言う通りにしよう。あの女がデジモンに利用されていたなんてね・・・」

顔を見合わせて、決意するフェイトとアルフ。

【ついでに・・・一つ、俺の好きな言葉を送っておこう】
そこには・・・綺麗にこう書かれていた。

なる我なり 弱気は最大の敵】

【敵は敵にあらず 敵は内

【俺のいた世界で、20年ほど前にとある野球選手が遺した言葉だ・
・野球だけじゃなく、色んな事に言える】

「弱気は最大の敵・・・そうだね・・・！」

「頑張ろう、フェイト！あの女を・・・プレシアを助ける為に！」

【あと、俺から1つプレゼントがあるから、使ってもらえると嬉しいかな】

孝俊の送って来た小包を開けると・・・

「これは・・・リボン・・・？」

明るい緑色のリボンが3つ入っていた。

2つはフェイトに、1つはアルフにだ。

そのリボンにもまた、【弱気は最大の敵】と孝俊の直筆で書かれていた。

「孝俊・・・ありがとう・・・」

【いずれどうにかしてそっちに戻るつもりだ。そしたら好きな物何でも作ってあげるから、暫く我慢しててくれな
孝俊】

孝俊の手紙を強く握りしめ、少しばかり涙を流すフェイトだった。

続
く

・
・

第9話 思いやりってやっぱり大切な気がする(後書き)

なんとか第9話・・・終了です。

自分でもここまで書けるとは思わなかった・・・

フェイト「早く孝俊に会いたいな・・・」

お？まさかフェイト・・・

フェイト「【フォトンランサー】／／！」

チュドオオオオオオオオオン！！

ぎゃーーーーーす！！

・・・ま、まだ何も言っていないのに・・・(がくっ)

アルフ「ご愁傷様・・・(苦笑)」

フェイト「じゃあ、次回予告・・・アルフ、お願い」

アルフ「次回、リリカルなのはフロンティア第10話【アホっぽい奴に限ってデタラメに強い場合がある気がする】。お楽しみに〜！」

第10話 アホっぱい奴に限ってデタラメに強い場合がある気がする(前書き)

遂に10話目突入です！

孝俊「1ヶ月で10話・・・3日に1話のペースになるか」

ま、そーなるわな。

拓也「話は変わるが・・・もうすぐなのはちゃん達の映画が公開されるらしいな」

なのは「はい、【魔法少女リリカルなのは The movie 1st】です」

クロノ「ちなみに、拓也は映画になった事はあるのかい？」

拓也「7年半前に1回だけな」

孝俊「2002年だったもんなあ…俺はオリジナルキャラだから関係ねーけど(苦笑)」

拓也「とにかく、【魔法少女リリカルなのは The movie 1st】、1月23日公開だ」

なのは「告知みたいになっちゃったね(苦笑)」

孝俊「じゃあ、気を取り直して・・・第10話始まるぜ」

第10話 アホっぽい奴に限ってデタラメに強い場合がある気がする

第10話副題【爆炎の魔杖】

孝俊がアースラ艦内に残ってフェイト達を心配していた頃、拓也・
なのは・ユーノは・・・

「とりあえず・・・帰ろつか・・・」

「そうだね・・・」

なのははユーノと顔を見合わせる。

そして・・・ユーノはフェレットモードになった。

「とりあえず・・・こっちではこの姿の方が便利そうだから・・・」

それを見た拓也が、一言こつ呟いた。

「おお、^{フェレット}淫獣モードか」

「ちよつとおおおおおお！今【淫獣】と書いて『フェレット』と
読んだでしょ！？てゆうかあれは誤解ですつてば！」

必死に弁解するユーノがなんとなく虚しく見えるのだった・・・
孝俊がいればフォローしてくれるのだが、当の孝俊はいない。
ちなみなのは・・・呆然と2人のやり取りを見ていた。

「あー、ちょっと先に帰っててくれるか？俺はちょっと寄る所があるから・・・」

「あ、はい、解りました」

拓也は2人と別れ、市街地の方へ歩いて行った。

そして拓也が向かった先は・・・前話で孝俊と孝昭が訪れたアクセサリーショップだった。

ちなみに2人が訪れるのは、拓也が去った後である。

「・・・こーい店に来るのは初めてだからなあ・・・」

じゃあなんで訪れたのかは・・・よっぽど鈍い人じゃない限りはお気付きであろう筈なので、あえて説明はしない。

何度も言うが、拓也は成長してかなりのイケメンである。

店の中では、中高生ぐらいの女の子達が拓也の方をチラチラと見ている。

「えーっと・・・よし、これにしようかな・・・」

拓也は何を買うか決めたらしく、それを手に取る。

バイト代は日給で支払われてる為、金はキツチリあるので問題は無い。

こうして拓也は店を出て、帰路に就くのであった。

孝俊と孝昭が訪れるのは、それから10分ほど後だったりする。

そして・・・夕飯を食べ終わった後、なのはの部屋にて。

ユーノが何やらリンディと話している。
拓也もなのはの部屋に呼ばれ、一応相談しあっていたらしい。

「だから……僕もなのはも、そして拓也も、そちらに協力させて
頂きたいと……」

「協力ねえ……」

ユーノの申し出に、クロノが言葉を濁す。

いくら実力があるとはいえ、あくまでも民間人のなのはを巻き込
むのには抵抗があるようだ。

「僕はともかく、なのはや拓也は、そちらにとっても有効な戦力だ
と思います」

確かに、AAAクラスの魔力を持つのはと、アグニモンとして
AAA+の戦闘力を持つ拓也……

拓也に至っては、グリトラモンになれば間違いなくSクラスに達
するだろう。

管理局側に見れば、2人とも喉から手が出るほど欲しい人材
である。

「ジュエルシードの回収、あの子達との戦闘。どちらにしても、そ
ちらとしては便利に使える筈です」

「うーん、なかなか考えてますね。それなら……まあ良いでしょ
う」

「か、母さ……艦長！」

ユーノの申し出を了承するリンディに、慌てて苦言を呈そうとす
るクロノ。

ちなみに、解っているであろうが、2人は親子である。

「協力してもらいましょう。こちらとしても、切り札は温存したい物……ね？クロノ執務官？」

「……はい」

結局クロノも、渋々了承するのだった。

「条件は2つよ。3人とも身柄を一時、時空管理局の預かりとする事。それから指示を必ず守る事。良くって？」

「解りました……」

その頃、なのはは母親の桃子と2人きりで話し合い、少しの間家を開ける事を了承してもらった。

勿論、魔法の事や時空管理局の事は伏せてある。

そして、護衛（？）として拓也も同行するという事で話を通した。拓也は、桃子からは絶大な信頼を得ており、あっさりとした承が取れた。

父・士郎や兄・恭也が聞いたら親馬鹿&シスコン全開でとんでもない事になりそうだが、そこは桃子さんが上手くやってくれるとの事だ。

そして、なのはは自室に戻り、拓也・ユーノと3人で話し合っていた。

「……ま、俺達も元の世界に戻る方法を探さなきゃいけない……一応、時空管理局に協力しなくちゃな」

「そっか……拓也さんもいつかは……帰っちゃうんだよね……」

「

拓也の言葉に、何処か表情が暗くなるのは。

拓也の事は、実の兄以上に信頼しており、家族の絆すら越えようかという程である。

「んー…ま、そんな顔すんなって。今すぐにいなくなる訳じゃねーんだからよ？」

「うん・・・」

拓也はそう言って、なのはの頭を撫でる。

撫でられて、ちょっと嬉しそうな顔になっているのは。

ちなみに、隣でユーノが恨めしそうな表情で見ていたが、全く眼中に無かったりする。

「あ、そうそう・・・ちょっとなのはちゃんにプレゼントがあんだけど・・・」

拓也はそう言って、小さな袋を渡す。

なのはが袋を開けると……そこには、真っ赤なりボン（紐状）が2本入っていた。

「わあ・・・赤いリボン・・・」

「俺のシンボルカラーが赤だからな。俺からのプレゼントって解りやすいし」

拓也のスピリットは【火】・・・そこから連想したのが赤だった。

「あ、ありがとうございますー！」

なのははかなり嬉しそうに、赤い紐のリボンを見つめている。

「あ、ついでに何か言葉でも書き込むか・・・」

「そう言って、拓也が書き込んだ言葉は・・・」

【全力全開】 & 【乾坤一擲】・・・だった。

後にこの言葉が、なのはに大きな影響を及ぼしたかどうかは・・・
読者の皆様のご想像にお任せしよう。

「・・・それにしても孝俊の奴、大丈夫かな・・・」

「孝俊さんなら大丈夫だよ・・・きっと」

孝俊の身を案ずる拓也と、大丈夫だと言うなのは。

実力については、クロノとの戦闘を見ている為、心配は無い。

「よし・・・行こう!」

「はい!」

3人は家を飛び出し、アースラと合流する為に、あの公園へと向かった・・・

（時の庭園）

プレシアの身体を乗っ取ったヴァンデモンが、地上の拓也達3人を見ている。

「ふん・・・奴らを倒すなど今なら造作もないが・・・念には念を

入れておこうか・・・」

そう言つとヴァンデモンは、大量の傀儡兵達を発生させ・・・地上へと転移させた。

その数、およそ500体にのぼる。

「行けい！奴らを血祭りに上げるのだ！」

その頃・・・アースラ艦内では、いち早く傀儡兵の大軍を察知していた。

「未確認物体が接近中！その数・・・およそ500体！既に拓也君となのはちゃんが戦闘中です！」

エイミイが声を張り上げる。

「くっ！かなり多い・・・！いくら彼らでも・・・！」

クロノがあまりの敵の多さに顔をしかめる。

「・・・！！」

それを聞いた孝俊は部屋を出ようとするが・・・

「待て、孝俊・・・ここは俺に任せろ」

孝昭が孝俊を制止する。

「・・・解つた。だが・・・なんなんだその恰好は？」

「なんとなく着てみた」

今の孝昭の恰好は・・・ファンシーな恐竜の着ぐるみだった。

なんとなくワギ？ンに似ている気もする。

「ま・・・俺と相棒・・・【バーニングブロス】に任せな」

孝昭の手には・・・オレンジに光る四角形の宝石があった。

『仕事かい、ご主人？』

「ああ、500体ぐらいいるみたいだが・・・やれるか？」

『上等でい！こちらら暴れたくてウズウズしてるんでい！』

この江戸っ子っぽい口調で話すのは、孝昭のデバイスの【バーニングブロス】だ。

「・・・とにかく、任せませ」

「おう、まあ見てなつて」

『喧嘩だ喧嘩！みんなまとめてブツ飛ばしてやらあ！』

孝昭は転移装置に入り、公園へと向かって行った。

・・・恐竜の着ぐるみを着たまま。

その頃、拓也となのはは・・・傀儡兵の大軍と激しく戦闘中だった。

ユーノが結界を張っている為、一般人が入ってくる心配は無い。

拓也はアグニモンになって【バーニングサラマンダー】や【フアイヤードーツ】を連射。

なのはも、【ディバインバスター】や【アクセルシューター】で次々に薙ぎ払う。

しかし、倒しても倒しても次から次へと出てくる。

「ちきしょー・・・次から次へと出てきやがる！」

「倒しても倒してもキリが無いの・・・」

アグニモンとなのはは背中合わせに傀儡兵の大軍と向かい合っていた。

アグニモンからしてみれば、一体一体は大した事は無いのだが、いかなせん数が多すぎるのだ。

アグニモンがバリアジャケット姿の孝昭を見て話しかける。

「どーも、君達3人の送迎係です」
ピースしてちよつとおどけて見せる孝昭。

(凄い・・・！彼から感じる魔力・・・僕は当然、なのはやフェイトって子の比じゃない・・・！)

ユーノは孝昭から強烈な魔力を感じ、冷や汗を流す。

「とりあえず、この状況を打開するか・・・！」

アグニモンは傀儡兵達の方に向き直り・・・

「スライドエボリューション！・・・ヴリトラモン！」

ヴリトラモンへとスライドエボリューションした。

人型から獣型、またはその逆でも直接姿を変える事が出来るのだ。

「もうひと頑張り・・・行くよ、レイジングハート！」

『All right my master』

なのははレイジングハートを構え、ヴリトラモンの隣で戦闘態勢を取る。

「バーニングブロス、頼む！」

『おっしゃ！カリバーフォーム、行くぜい！』

バーニングブロスの宝石の部分に【Calibur forme】と文字が浮かぶ。

すると、杖型だったバーニングブロスが変化を始め・・・柄と鍔を形成し、真っ赤な魔力光が刀身を形成した。

「よっしゃあ！とつとと片付けるぜ！」

カリバーフォームになったバーニングブロスを手には、傀儡兵の大軍に飛び込んで行く孝昭。

ヴリトラモンとなのはもそれに続く。

「おらあああああ！」

ザシュツ！ドバアツ！ガシュツ！と、小気味いい音をさせ、次々に傀儡兵を斬り倒す孝昭。

「今度はこれだ！……おおおおおお……！」

更に、バーニングブロスに魔力を込めると、刀身が大きくなっていく。

孝昭はそれを大きく振りかぶった。

「くらえ！【マグナキャリバー】……！」

勢い良くバーニングブロスを振り下ろすと、極大の赤い衝撃波が発生し、傀儡兵20体ばかりを真つ二つに斬り裂いた！

「おいおい……なんつーデタラメな破壊力だよ……」

ヴリトラモンも、その破壊力に呆然とする。

【フレймストーム】をもってしても5、6体を焼き払うのがやっとなのに、あつという間に20体がブツ倒されたのだから無理もないが。

「おらおらおらおらおらあつ！」

『どーしたどーしたあ！悔しけりやかかってきやがれい！スカーツと真つ二つにしてやらあ！』

片っぱしからとにかく傀儡兵を斬り捨てて行く孝昭。

既に100体近くを倒している。

「出し惜しみはしねーぜ！次行くぞ！」

『バスターフォーム、行くぜい！』

今度は杖の形状に戻り、なのはのレイジングハートの【シューテ

イングモード】のような形になる。

宝石部分には【B a s t e r f o r m e】と出ている。

「行けっ！【インパクトシューター】！！」

バーニングブロスから赤い魔力弾が数発発射される。

なのはの【アクセルシューター】と似ているが、威力は桁違いである。

1発1発が傀儡兵にとっては必殺の破壊力であるらしく、次から次へと爆砕されていく。

『はい次いいい！さっさとかかって来んかいいいいい！』

バーニングブロスが活きの良い声を発しながら【インパクトシューター】を撃つ。

ヴリトラモンとなのは（あとユーノ）も奮戦し、既に半分を倒していた。

「バーニングブロス、ペースを速めるぞ！」

『だったらブーストフォームだ、行くぜご主人！』

宝石部分に【B o o s t f o r m e】と浮かび上がると、再びバーニングブロスが変形を始める。

4つに分裂し、籠手と靴状になり、孝昭の両手両足に装着される。そして・・・魔力を込めると、両手両足が赤く光っていく。

このブーストフォームは、主に肉体強化に使う。

スピード戦において、多大な戦果を発揮できる形態である。

「行くぞ！」

言うが早いか、孝昭はその場から飛び出し、傀儡兵の群れに飛び込んで行く。

それを見たヴリトラモンも、必殺技で傀儡兵達を薙ぎ払っていく。
「まだまだ・・・頑張るの！」

なのも魔力を絞り出しながら、必死にヴリトラモンを援護する。

そして、30分後・・・残すは巨大な傀儡兵を1体残すのみだった。

「よっしゃ、最後は3人で盛大に決めてやろうか！」

孝昭はそう言うと、バーニングブ羅斯を再び【バスターフォーム】に変形させる。

「おっしゃあ！」

「はい！」

ヴリトラモンは【ルードリー・タルパナ】にエネルギーを充填する。

なのにはレイジングハートに残ってる魔力を殆ど注入する。

「くらえ！バスターフォームの最大砲撃・・・【デイバインプラスター】、^{ファイヤ}発射！！」

「行けえ！【コロナブラスター】！」

「これで最後なの！【デイバインバスター】！」

極大な赤い閃光、火炎のレーザー砲、桜色の閃光が三位一体となり・・・巨大な傀儡兵を飲み込み、消滅させた！

「つしゃ、一丁上がりつと」

『これにて一件落着つてか』

「はぁ・・・流石に疲れたぜ・・・」

「レイジングハート、お疲れ様」

『Thank you my master』

孝昭となのははバリアジャケットを解除し、ヴリトラモンは拓也

の姿に戻る。

バーニングブロスとレイジングハートは、待機状態に戻る。

「よし、早いとこアースラに乗ってくれ。また新手が来たら面倒だしな」

孝昭に先導され、拓也となのははアースラに向かうのだった。

〜その頃、拓也達の世界では〜

孝俊の家・・・1人の男性が居間に座って、何やら機械らしき物を見つめている。

男性の名は面林龍輔、孝俊の父親である。現在34歳。

その機械には・・・オファニモンのホログラムが映っていた。

「・・・そうか・・・孝俊は・・・あの世界に行ったのか」

『真実を・・・打ち明けなければならぬ時が来たのかもしれないかもしれません』

「・・・オファニモン、皆を・・・現役世代みんなを集めてくれ。僕の口から話す」

龍輔とオファニモンから、真実が告げられる！

次回、急展開！

続く

第10話 アホっぱい奴に限ってデタラメに強い場合がある気がする(後書き)

はい、第10話終了です。

ここでオリジナル要素の説明を。

バーニングブロス 使用者：佐野孝昭 使用言語：日本語

イメージCV：松野太紀さん

別名：『爆炎の魔杖』

待機状態と起動後の【デバイスフォルム】。

その他、剣型の【カリバーフォルム】、射撃用の【バスターフォルム】、接近戦用の【ブレストフォルム】がある。

尚、他にも使われていない形態があるが、切札なので滅多に使わない。

バーニングブロスは江戸っ子口調で、話しやすい感じである。

近距離から長距離までオールマイティに使える便利なデバイス。

孝昭の事は『ご主人』と呼び、最高のパートナーとして認めている。

おもてはやしりゅうすけ

面林龍輔 孝俊の父親 34歳

イメージCV：子安武人さん

孝俊以上に何を考えてるか解らない、のほほんとした親父。

実は特殊型スピリット試作体NO.1【龍】の持ち主で、15年前まで前線で戦っていた。

次回で秘密が明かされる。

オリジナル要素については簡単にこんな物です。

孝俊「おいおい、なんかこっちはこっちでえらい事になりそうだな・
・・」

拓也「と、とにかく・・・感想、質問待ってまーす！」

では次回予告、孝昭君どうぞ〜

孝昭「次回、リリカルなのはフロンティア第11話【誰にだって秘密の1つや2つある気がする】。お楽しみに！」

第11話 誰にだって秘密の1つや2つはある気がする 前編(前書き)

はい、第11話です。

今回についてちょっと注意書きを。

この作品には、Strickersに関わる描写があります。その所を注意して読むようにして下さい。

急な展開に付いていけない人は、すぐにリターンして下さい。

拓也「孝俊の親父さんが語る真実って何なんだろうな・・・」

孝昭「うーむ・・・」

なのは「デジモンの世界も大変そうなの・・・」

今回は長くなりそうなので、前・後編に分けました。

あと、オリジナルキャラクターが更に増えています。

リンディ「では・・・第11話、始まるわよ」

第11話 誰にだって秘密の1つや2つはある気がする 前編

第11話副題【欲望と先代龍】

「拓也達の世界」

孝俊の家に・・・10人の少年少女が集まっていた。

「重要な話がある・・・か」

「緊急招集だったからね」

青いバンダナをした、黒い長髪の男・・・源輝二と、輝二そっくりの顔をした少年、木村輝一が話している。

双方とも、拓也・孝俊と同じ高校に通う1年生である。

この2人は双子だが、幼い時に両親が離婚して別姓となっている。ちなみに、輝二は父親に、輝一は母親に引き取られている。

余談だが、5年前のデジタルワールドの冒険の後、輝二は母親と再会を果たしている。

「現役世代みんなが集まるなんて・・・」

「こんな事滅多に無いわよ」

「・・・もしかしたら、拓也と孝俊に関係ある事かも知れないな・・・」

黄色い帽子を被った男の子・・・氷見友樹^{ひみともき}。現在中学2年生。
金髪のストレートヘアの女の子、織本泉^{おりもといずみ}。現在高校1年生。
青いつなぎを着ている大柄の青年、柴山純平^{しばやまじゅんぺい}。現在高校2年生。
ここまでの5人は、5年前に拓也と共にデジタルワールドで冒険した仲間である。

「お兄ちゃん・・・」

後ろで呟く黒髪のショートヘアの少女。

孝俊の妹、面林春香^{おもはやしほのか}である。

特殊型スピリット完成体NO.2【朱雀】を持っている中学2年生だ。

【朱雀】のスピリットは、四聖獣の1体である『スイーツエモン』の力を借りて出来た物。

属性は炎。スピードを生かした戦いが得意である。

「あり得るな。今やこの人間界、何があってもおかしくはねえ」
純平の後ろに座っている、茶髪の少年が喋る。
少年の名は四谷高雄^{よつやたかお}・・・孝俊の無二の親友である高校1年生。
機械技術に長け、デジヴァイスのメンテナンスも彼が担当する程。
また、特殊型スピリット完成体NO.5【剛龍】を持っている。

【剛龍】のスピリットは、孝俊の持つ【龍】のスピリットを素体とし、更にパワーを重視した物。

その為、全スピリット中トップのパワーを持つ。

属性は炎で、ハンマーを主とした戦闘を行う。

「……あの龍輔さんが緊急招集をかけるんだから、相当の事だろう」

高雄の隣に座っている、黒髪のツンツン頭の少年が話す。

少年は黒田善之くろだよしゆきと言い、高雄と同じく孝俊の友人である。

特殊型スピリット完成体NO.6【黒龍】を所持している高校1年生。

【黒龍】のスピリットは、【剛龍】と同じで孝俊の【龍】のスピリットを素体としている。

但し、【剛龍】とは対照的に、スピードを重視している。

スピードは全スピリット中トップで、最高移動速度は一瞬だが音速を超える程。

属性は雷。剣と足技を使い、敵を薙ぎ払う。

「……何か、大変な予感がする」

「海斗さんもそう思いますか……僕もです」

険しい顔をして言う黒髪のボサボサ頭の少年と、その隣にいる礼儀正しそうな少し幼さが残る少年。

ボサボサ頭の方は、火渡海斗ひわたりがいと。中学3年生。

野生児の様に飛び回る、所謂【体力馬鹿】。

両親が共に警察官だったが、海斗が幼い頃に殉職してしまい、両親の上司だった高雄の父・四谷虎鉄よつやこてつに引き取られた。

本人の希望により、元の火渡姓を名乗っている。

特殊型スピリットNO.3【白虎】を持つ。

【白虎】のスピリットは、四聖獣の1体である、バイフーモンの力を借りて作られた。

属性は氷。バイフーモンの影響からか、パワーを生かして戦うが、海斗自身の影響もあって、スピードも速い。

隣にいるのは中林雄人。なかばやしゆうと

特にこれと言って目立つ要素が無い、所謂脇役キャラ。

だが、脇役らしく堅実に良い仕事が出来る貴重な存在でもある。

実は孝俊の妹、春香と交際中の中学2年生。

特殊型スピリットNO.4【玄武】を持つ。

【玄武】のスピリットは、四聖獣の1体であるシエンウーモンの力を借りて誕生した。

属性は光・雷の2つ。パワータイプだが、何より防御力が高く、味方の盾となり戦う。

「・・・みんな集まったようだね」

『みなさん、お待たせ致しました』

龍輔とオファニモンがやってくる。

ちなみに、龍輔は拓也達には伝説の存在で、先代特殊型スピリット所持者と言われている。

また、龍輔にも仲間があり、龍輔を含め6人が戦っていた。

年を重ねた今では長時間戦う事は出来ないが、総合的な実力では拓也や孝俊でも歯が立たない程。

若手のピンチに颯爽と駆けつけ、助けしてくれる頼もしい存在である。

「・・・いきなり本題に入るが・・・拓也君と孝俊が何故いなくなつたのか、だ」

龍輔が真面目な口調で話し始める。
全員が龍輔を見つめている。

「それを説明するには・・・まず、僕の昔話を聞いてもらう必要がある」

23年前・・・デジタルワールド。

1人の少年がデジモンに進化して、巨大な相手と戦っている。
この少年こそ、当時11歳の龍輔である。

その2年前、先代のオファニモンに導かれ、9歳で特殊型スピリット試作体を受け取り、ここまで仲間もおらず、1人で戦っていた。ちなみに余談だが、現在のオファニモンは当時、完全体のエンジエウーモンだったりする。

相手にしている巨大なデジモンは・・・ミレニアモンと言うとんでもなく邪悪なデジモンだった。

ミレニアモン 究極体 合成型 ウィルス種

必殺技 タイムアンリミテッド

得意技 デイメンジョンデストロイヤー

龍輔の姿は・・・孝俊が進化するブロスモンが更に重装甲を加えたような姿だった。

かれこれ数時間にも及ぶ死闘を繰り広げていた。

「でえいやあああああつ!!」

ズドシュッ!

龍輔が一瞬の隙を突いてミレニアモンの懐に飛び込み、剣を腹に突き刺し、貫いた!

『グウウウ・・・オオオオオオオオオオ・・・!!!!』

ミレニアモンの体の中のエネルギーが暴発し、とんでもない大爆発が起こる。

そして・・・ミレニアモンは消滅した。
だが、空間が歪み・・・龍輔はその中へと吸い込まれて行った・・・

「痛ってー・・・何処だここ・・・」

龍輔が飛ばされた先は・・・全く違う別次元の世界。

近くの看板を見ると・・・【ミッドチルダ北部山岳地帯】と書かれていた。

「なんじゃそりゃあああああああ!!!!?」

思わず叫ぶ龍輔。

人間界でもデジタルワールドでも、ミッドチルダなんて地名は聞いた事が無い。

そこで龍輔は即座に判断する。

【ここは違う世界だ】と・・・

いつまでもボーっとしてる訳にもいかない為、とにかく進む事にした龍輔。

その内オファニモンが迎えに来てくれるだろう、そう思ったからだ。

ふと、遠目に怪しげな建物・・・研究所らしき物が見えた。

「お、なんか建物があるな・・・行ってみるか」

そして、研究所らしき建物に近付くが・・・

「侵入者だ!」「捕えろ!」

なんと、数人の門番らしき人物がいきなり龍輔に襲いかかって来たのだ。

・・・が、易々と捕まる龍輔では無かった。

「ふんっ!」

ガスッ!バキヤアッ!

即座に進化し、掌底とアップパーを喰らわせて、あっさりと門番の意識を刈り取った。

「ふう・・・思わず返り討ちにしまったが・・・どーも怪しいな、この建物・・・」

有無を言わず襲いかかって来た、と言う事は・・・中には見られるとまずい物があるという事だ。

それを察した龍輔は、研究所の中へと入って行った。

中に入った龍輔は、人目を避けながらどんだん奥へと進む。ちなみに、数人に見つかったが、声を上げられる前に顎をぶん殴って意識を刈り取っていた。

「あんまり騒いで大騒動になったらヤバいし・・・出来るだけ戦闘は避けたいな・・・」

途中には、見張りと思われる魔物や怪物までいた。

恐らく、研究で改造とかされた奴だろう。

そんな奴まで無理に相手をする事も無いので、隠れながら進んで行く。

そして・・・地下に降りて行くと牢屋の様な部屋がいくつもあり、そこには1人の青年と、小さな少女が別々に入れられていた。

「・・・君は・・・誰だい？」

「あー・・・なんつーか、事故で違う世界から流れてきたというか・・・」

白衣を着た、紫髪の青年が龍輔に声をかける。

龍輔はとりあえずあった事を言うしかなかった。

「なるほど・・・『次元漂流者』か・・・」

「あー、まあそう言えばしっくり来るかね・・・つーか、あんた誰だ？何でそんなところに入ってたんだ？」

「私の名はジェイル・スカリエッティ・・・君は・・・？」

なんと、原作では後に大事件を起こす（笑）スカリエッツィと、龍輔は昔対面していたのだ。

「龍輔・・・面林龍輔だ」

互いに自己紹介をする2人。

「で・・・隣の女の子はなんなんだ？見た所・・・俺よりも小さいが」

「・・・私の妹・・・とても言おうかな」

「・・・What？」

スカリエッツィの言葉に目を丸くする龍輔。

スカリエッツィの隣の牢に入れられている女の子・・・お世辞にもスカリエッツィとは似ていない。

年は・・・8、9才くらいだろうか。

女の子は青い髪の毛が首下まで伸びているセミロングヘア、青い瞳をした、とてもかわいらしい少女だ。

「・・・似てねーな」

即行で感想を述べる龍輔。

「そりゃあそうさ・・・私達2人は、管理局の最高評議会によって作られた存在。つまり、普通の人間では無いのだからね・・・」

「・・・ふーん」

「・・・あまり驚かないのだね？」

「立場上、色々あって・・・それくらいじゃ驚けんのだ」

デジモンに進化するだけあり、色々ビックリ体験はして来たので、今更人造人間だろうが人造魔導士だろうが驚かない龍輔だった。

「私のコードネームは【アンリミテッド・デザイア（無限の欲望）】、彼女のコードネームは【アンリミテッド・ダイナモ（無限の発電）】だ」

「【アンリミテッド・ダイナモ】・・・」

スカリエッツィの説明に、呟く龍輔。

「で・・・管理局ってなんなんだ？」

龍輔がふと思い出したようにスカリエッツィに尋ねる。

「時空管理局・・・次元世界の秩序を守るための組織・・・表向きはそうだがね」

「・・・裏で何かやましい事でも？」

「大ありさ。自分達が絶対的正義だと信じ、自分達に仇なす者はどんな手段を使っても抹殺し、その証拠を隠滅するという手の込み様さ」

スカリエッツィは、作られた立場上仕方なく管理局に協力していた。

「私と彼女・・・ナツキは、管理局の裏の切り札的存在・・・ナツキの魔力は半永久的に異常に生成され続ける、まさにダイナモだ・・・」

「まさか、管理局はそのナツキを・・・」

「そう、成長させて生体兵器として、自分達に仇なす者を抹殺させようと言うのさ・・・私はそんな彼女の教育係だったのだよ・・・」

聞けばスカリエッティは、ナツキの兄であると同時に、教育係を務めていたらしい。

ナツキはこのまま成長しきったら、魔力ランクにしてSSS+に達する化物になると言う。

最初は、スカリエッティ自身もナツキを生体兵器に育て上げるつもりでいた。

しかし、自分を『お兄ちゃん』と呼び、懐いてくるナツキを育てて行く内に、情が移ってしまったらしい。

結果、ナツキを研究所から逃がそうとしたが、見つかって捕えられ、こうして牢に放り込まれたという訳らしいのだ。

「そこで君に頼みがある。ナツキを・・・ここから出してやってくれ・・・」

「何・・・?」

「君が只者で無い事は解る。管理局の事で手を汚すのは私だけで良い。その子には・・・せめて、真っ当な人生を送らせてやってほしいのだよ・・・」

後に、広域指名手配犯と呼ばれるスカリエッティが見せた兄妹愛(?)だった。

スカリエッティの涙ながらの頼みに、困惑する龍輔。

そして、少し考えた後・・・

「・・・解った。必ずここからその子を・・・ナツキを出してやる」
そして・・・進化して牢を力づくで捻じ曲げて、ナツキの元に行く。

ナツキは怯えた表情で龍輔を見ている。

「大丈夫だ。俺は君を助けに来た・・・一緒に外に行こう」

龍輔はナツキと視線を合わせる為にしゃがむ。

「あ・・・う・・・」

ナツキは服だけでなく体もボロボロだった。
しかも、大分衰弱している。

「ナツキ、その人に付いて行きなさい・・・お前はちゃんとした人生を送るんだ」

隣の牢から、スカリエッティがナツキに話しかける。

「お兄ちゃん・・・は・・・？」

「私もいずれ此処を出る。だから・・・ナツキも早く逃げるんだ」

ナツキに言い聞かせるスカリエッティ。

「うん・・・」

兄の言葉には忠実なのか、頷いて、進化した龍輔にしがみつくなツキ。

「よし……行くぞ」

「ナツキを……任せたよ。龍輔……」

「……任せる。妹を想うアンタの気持ち、決して無駄にはしない」

この時、スカリエッティは龍輔が発する凄まじい威圧感を感じていた。

その威圧は、まさに龍を感じさせる物だった……

龍輔が牢からナツキを出すと同時に、警報のアラームが鳴り響いた。

研究所の中が慌ただしくなり、武装した魔導師がそこいらを巡回している。

「……ま、こうなるのもある意味お約束、か……さて、お姫様を脱出させるとしますかね」

この時、ミッドチルダ新暦0042年……時空管理局が闇に葬る事になる事件の始まりだった。

続く

エイミー「はいはい 次回、リリカルなのはフロンティア第12話【誰にだって秘密の1つや2つはある気がする 後編】お楽しみにー！」

第12話 誰にだって秘密の1つや2つはある気がする 後編(前書き)

はい、第12話です。

D・ブレスのシステムについて、少し改訂しております。
孝俊の親父・龍輔の昔話・・・

今回は龍輔が大暴れ…孝俊の事についても少し触れます。

龍輔「何はともあれ、第12話・・・始まるよ〜」

第12話 誰にだって秘密の1つや2つはある気がする 後編

第12話副題【無限の魔力】

龍輔は、ナツキを抱き上げたまま走っていた。

・・・途中に立ちはだかる魔導師達をぶちのめしながら。

「あー、もう！解ってはいたが数が多い！」

剣を振り回し、更には殴ったり蹴ったりで退けて行く。

途中、龍輔はスカリエッツィの事を気にかけていた・・・

〈数分前〉

「しかし、俺とナツキが脱出するのは良いとして、その後に残されたお前はどーなるんだよ？」

「まあ、間違いなく処分を受けるだろうね」

牢の中で進化を一度解き、ナツキを見ながらスカリエッツィに尋ねる龍輔。

スカリエッツィは、特に何も気に掛けずにサラッと答える。

「そりゃ良くねーや。おめーが妹悲しませる真似をしちゃいけねー」

「しかし・・・どうすれば・・・」

龍輔の言う事はもっともだ。

しかし、どうすればいいかスカリエッティは困惑した。

「じゃあこうすればいい。俺の威圧に当てられて気絶したって事にすればな」

「しかし、そんな事したら君の罪が1つ増えてしまうのでは・・・」
「構いやしねーよ。ナツキは解らんが、俺はどーせ二度とこの世界に来るつもりはねーし」

スカリエッティの心配をよそに、あっさりと答える龍輔。

ただでさえ、トラブルで飛ばされてきた世界だ。

脱出したら、二度と戻る気は無い。

「だから、気絶したフリでもしとけ」

「あ、ああ・・・解った・・・ナツキの事・・・改めて頼む・・・」

「！」

そう言っつて龍輔は、両手首に巻いている内、右手首のブレスレットの様な物の【2、6、3、ON】のスイッチを入れる。

これは龍輔のデジヴァイスである【D・ブレス】だ。

両手首に巻いてあり、右手首のブレスはヒューマンスピリット、左手首のブレスはビーストスピリットが収まっている。

ブレスにはON、OFFと、0〜9までのボタンがあり、特定のコマンドを入力すると、何かが起こる。

【two、six、three...HUMAN SPIRIT EV

OLUTION】

ブレスのスイッチが入ると、電子音が響いた。すると龍輔の体を光が包み、一瞬で機械の様な重装甲をまとった姿となる。

なんか戦隊物の変身シーンと似ているが、そこは気にしないでほしい。

・・・と、こんなやり取りがあつた訳だが。

「おのれ侵入者め！研究材料まで盗むとは！」

魔導師達が魔力弾を一斉に放ってくる。

勿論、殺傷設定になっているので、普通なら喰らえばただでは済まない。

「あーーーーーっ！」

龍輔は叫んで剣を振りかぶり・・・

「無駄に鬱陶しいーーーーーっ！！！」

ガガガガガンッ！

何と、魔法弾を全て弾き返し、魔導師達にぶつけたのだ。

予想外の事に反応できず、自らの魔法弾を喰らって墜落していく魔導師達。

「研究材料だ？この子は物じゃねえぞ・・・次に・・・んな事ぬかしたら、貴様ら全員地獄へ送ってやる・・・！」

ナツキを自分の後ろにやって怒りを露わにし、相手を睨みつける龍輔。

魔導師達はその鋭い眼光に怯む。

とても11歳の子供がするような眼では無い。

その眼はまさに、相手を狩る事に集中した獣の・・・いや、龍の眼だった。

「ええい！相手はガキ1人だ！」

「躊躇する事は無い！殺しても構わん！」

ブチッ

スカリエツティの言う通りだった・・・

いくら裏側の連中とは言え、とても次元の秩序を守る集団の言う事ではなかった。

自分達の目的の為には、子供を殺す事すら厭わないのだから。
そして龍輔の中で・・・何かが切れた。

「ナツキ・・・」

「ふえ・・・？」

「今から本気で動く・・・自分を覆うバリアとか張れるか・・・？」
「うん・・・」

ナツキの方に振り返り、尋ねる龍輔。

顔は平静を装っているが、込み上げる怒りを抑えようと必死だ。

「なら、バリア張って俺にしっかり掴まってる」

「んっ・・・(ぎゅっ)」

流石に【アンリミテッド・ダイナモ】と称されるだけはある、即座にかなりの強度の障壁を展開するナツキ。

蒼い球体に包まれた後、龍輔にしっかりとしがみつく。

それを確認した後、龍輔は・・・敵の視界から消えた。

「き、消えた・・・があっ!？」

急に視界から消えた龍輔に驚いた魔導師だったが、頭部に衝撃が加えられ、叩き落とされる。

「な、何が・・・ぐはあっ!？」

叩き落とされた仲間を見て、驚愕する別の1人も即座に撃墜される。

龍輔は、相手の視界に映らない程のスピードで、瞬時に敵を撃墜

していたのだった。

ナツキにバリアを張る様に指示したのも、そのスピードでナツキにダメージが行かないようにする為である。

しかも、その移動スピードでソニックブームまで発生してしまう為、それをも考慮しての事だった。

そのスピードは・・・フェイトすら遥かに凌駕する物であった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

無言で次々と敵を撃墜していく龍輔。

ものの数十秒後には・・・そのフロアの全員が撃墜されていた。

「ナツキ・・・平気か？」

「うん・・・!」

「よし、地上に出るぞ・・・」

自分にしがみつくナツキを確認し、地上1階まで上がった龍輔。だが、ここには魔導師だけではなく、魔獣なども多数構えていた。

「あう・・・」

魔獣を見て怯えるナツキ。

「大丈夫・・・ここを突破すればお前は自由だ。俺を信じる」

ナツキの頭を撫でて、じっと顔を見つめて言い聞かせる。

「う・・・うん・・・!」

龍輔に励まされ、希望が湧いたのか力強く返事するナツキ。

「馬鹿め！貴様の命運はここで尽きるのだ！やれい！」

魔導師の1人が号令をかけると、魔獣達がエネルギー弾や光線を一斉に放ってくる。

周りにいた魔導師達も、一斉に砲撃魔法を放って来た。言うまでもなく、殺傷設定である。

龍輔はその瞬間、素早く右腕のブレスの【8、1、8、3、ON】のボタンを押す。
押すと、ブレスから電子音が響いた。

【e i g h t , o n e , e i g h t , t h r e e : : M A X I M U M
C H A R G E】

「……はあああああ……」

龍輔はすっかりその場に踏みとどまると、エネルギーを急速に充填していく。

ナツキは龍輔を信じ、迫り来る攻撃に怯まず、しっかりと龍輔の背中にしがみついている。

【H y p e r m i r a g e b l a s t e r】

「貫け……【ハイパーミラージュブラスター】！！！！」

電子音がした直後に龍輔が叫ぶと、逆三角形の模様が現れ、そこから銀色の極大な閃光が放たれた！

ギリギリまで敵の攻撃を引きつけて発射したその一撃は、敵の攻撃をアツサリと霧散させ・・・魔獣達を一掃した。

「ば、馬鹿な・・・あれだけの砲撃を・・・たったの一撃で・・・」
「や、奴は子供じゃない・・・子供の皮を被った化物だ・・・！」

目の前で起こった事が信じられない魔導師達は、数十M先で仁王立ちしている龍輔を見て怯える。

その龍輔は、更に鋭い眼光をぎらつかせ、魔導師達を見据えている。

下手をすれば、今にも相手を殺してしまいそうな勢いである。

「貴様ら・・・人の命を何だと思ってる・・・」

もはや龍輔から慈悲だの容赦だのと言った感情は、消え失せていた。

眼の前にいる人間のクズを叩きのめす・・・それだけだった。

普段ののんびり屋の影は、何処にも無かった。

「自分達の目的の為には手段を選ばず・・・また、自分達に抗う物は秘密裏に抹殺し、虚きよになる事を無理やり真まこととし、人々を欺き続けた貴様らは・・・最早犯罪者と変わらん」

「黙れ！時空管理局が、我々こそが正義！たかが一般のガキが生意気を抜かすな！」

最早救い様が無かった。

龍輔はそれを聞き・・・剣を強く握る。

「こんな奴らが・・・次元の秩序を守るなどとは、はらわたが煮えくり返る想いだぜ・・・」

「ええい！黙れ黙れ！皆の者、そのガキを殺してしまえ！」

一斉に魔導師達が襲いかかる。

が・・・龍輔はナツキを背負ったまま、その中をゆっくり通り抜ける。

そして、数秒の静寂が流れた後・・・

ドサドサドサドサドサドサッ

魔導師達が墜落し、山のように折り重なって気を失っていた。

龍輔が魔導師達の中をゆっくり進みながら神速で剣を振り回し、撃墜したのだ。

龍輔は、自分を殺すように指示した男を睨みつける。

「うぬぬ・・・ならば最後の手段！」

魔導師の男が忌々しそうに吐き捨て、スイッチの様な物を取り出

し、押す。

すると地響きと共に地面が割れ、禍々しい姿をした巨大な魔獣が現れた！

色々な種類の魔獣が合成されている感じの合成獣キメラである。

どういふ偶然か、龍輔がこの世界に飛ばされる前に戦っていたミレニアモンと何処か似ている。

「往生際の悪い奴め……………つぐう……………」

龍輔が片膝をつき、苦しそうな表情になる。

この世界に飛ばされる前にミレニアモンと死闘を演じていた龍輔。その時のダメージが残っているのだ。

その状態であれだけの動きが出来たのは奇跡に近い。

（まだまだ……………ここで終わる訳には行かねえ……………この子を……………逃がすまでは……………！）

悲鳴を上げる体に鞭打って、立ち上がる龍輔。

スカリエツティと交わした約束を守る為……………ただそれだけだった。

龍輔は背負っていたナツキを降ろし、合成獣と向かい合う。

「うおおおおおおおっ！」

早くケリを付けようと、合成獣の攻撃を掻い潜って懐に入る龍輔。そして剣にエネルギーを蓄え、刀身を青白く光らせる。

「でやあらあああっ！！」

ザシュツ！バシュツ！ドバアツ！ガシュツ！ビシュアツ！

次から次へと斬りつける龍輔。長期戦となれば勝ち目はない。ダメージが残り、力の入らない体で、出来るだけ強く剣を振り続ける。

『グウオオオオオオオ！！』

ドゴオンツ！

「ぐふあああつ！」

だが、合成獣が放った一撃が龍輔を直撃し、吹っ飛ばす。龍輔はそのままナツキの所まで転がって行き、うつ伏せになって動かなくなる。

「う……………ああ……………」

起き上がらない龍輔を見て、泣き顔になるナツキ。
だが……………

「泣くな……………ナツキ……………まだ、俺は死んじやいねーぞ……………」

倒れたまま、ナツキの顔を見て笑顔を作る龍輔。

「……！」

それを見て、ナツキは何を思ったか龍輔に両方の掌を当てる。ナツキの掌から蒼い光が発生し、龍輔の体を包む。すると、見る見るうちに龍輔の傷口が塞がっていくではないか。

「おお……体が……全然軽くなりやがった……」

これには流石の龍輔もビックリだった。

まさかこれ程の回復能力まであるとは思わなかったからだ。

「……ゆるさない……！」

ふと見ると、ナツキが溢れんばかりの蒼い魔力を体から放出しているではないか。

「おお……」

龍輔は、呆然とそれを見ていた。

一方のナツキは右腕をゆっくりと上げて突き出す。

そして次の瞬間、ナツキの右手から凄まじく巨大な、蒼い魔力砲が発射された！

『グギャ……アアアアアアア……！！』

合成獣は魔力砲に飲み込まれ、大爆発を起こして跡形もなく消し飛ばされた。

これぞ正に【アンリミテッド・ダイナモ】の力の一端だった。

「うわぁーお・・・」

成長途中でこの威力・・・完全に成長したらと考えると、思わず青ざめてしまふ龍輔だった。

合成獣を消し飛ばしたナツキは、男の方を睨みつける。

「ま、待て・・・我々はお前を作ったのだぞ・・・！製作者に手を上げるつもりか・・・！？」

最後の手段があっけなく潰され、後ずさる男。

右手を突き出したまま、男に近寄っていくナツキ。

「あなたは・・・お兄ちゃんに、そしてこの人にひどいことした・・・ゆるさない・・・！」

ふと、龍輔がナツキを止める。

「よせ、そんな野郎の血で、ナツキの綺麗な手を汚すこたあねーよ・・・」

そう言ってナツキを後ろに下げ、男を睨みつける龍輔。

ナツキの回復魔法でパワーも漲っていて、より凄まじい威圧感が出ている。

「ひ……ひいい……!?!?」

男が腰を抜かして後ずさる。

龍輔の威圧に当てられ、今にも気を失おうところだ。

「……………」

龍輔は無言で男を見つめる。

「わ、解った……我々の仲間にならないか!? そうすれば最高評議会の下で、法を気にせず好き放題な研究や実験が出来……!?!?」

言い終わる前に、龍輔の拳が男の顔面に叩き込まれた。

凄まじい衝撃に、男は声も上げずに地面を何回もバウンドし、気を失った。

「んなクズが統括する組織、誰が入るかよ」

そう吐き捨て、ナツキを連れて研究所の敷地内を脱出した龍輔。

研究所内で無事だったのは、スカリエッティと極僅かな研究員だけだったという……

「……終わったな」

『龍輔君、無事ですか!?!?』

龍輔の変身用ブレスから声がする。

オファニモン（先代）である。どうやら龍輔のいるミッドチルダの次元座標を見つけて、通信を繋いだ様だ。

「遅せーよ、ったく・・・1人少女を保護したんだが、そっちで預かってくれねーか？訳は後で話すから」

『解りました・・・すぐに迎えに行きますので、待っていてください』

こうして、龍輔はナツキと共にデジタルワールドへと脱出、そしてナツキをオファニモンに託し、元の人間界へと戻った。

その後、ミッドチルダではこの事件の詳細を隠匿し、龍輔（進化した姿）を指名手配犯に仕立て上げたという。

もともと、龍輔は二度とミッドチルダに行く事も無かった為、無駄と言えば無駄なのだが。

そしてスカリエッティは・・・管理局の裏側で動きつつ、その事件の詳細を1つのファイルに纏め、こっそりと管理局の奥深くのデータファイルに封印したという。

それを知るのは・・・勿論、スカリエッティのみである。

その後、ナツキはデジタルワールドで保護された。

ナツキくらいの年齢なら普通に小学校に通わせる所だが、ナツキの魔力はまだ不安定な部分があった為、オファニモンによって教育される事になったのだ。

暴走でもしようものなら、大変な事になる。

人間界の事については、龍輔がデジタルワールドに足を運んでナ

ツキに教えていた。

オファニモンはナツキの魔力を抑える為、特殊型スピリット試作体No.2【朱雀】を授け、その力で魔力を抑え込んだ。
言うなればリミッター代わりである。

それから6年経ったある日・・・龍輔はナツキに呼ばれてデジタルワールドにいた。

「おう、ナツキ！」

「あ、りゅーすけ・・・」

龍輔17歳、ナツキ15歳。お互い随分と成長していた。

ナツキは背はあまり伸びておらず、180cmの龍輔に対して135cmしかなかったが。

龍輔の事は名前と呼ぶようになり、凄く慕っている。

「んで、用って何だ？」

龍輔に帰ってきた言葉は、龍輔が予想だにできなかった物だった。

「え・・・えつとね・・・私・・・りゅーすけが好き・・・なの／＼」

「・・・・・・・・・・・・・・・・What？」

「わたしと・・・けっこう・・・してください・・・//!!」

なんと、ナツキからのプロポーズだった!

普通なら男からするものだが、そんな常識はナツキには無い(当然だが)。

ナツキは助けられた時以来、徐々に龍輔に好意を抱いていき、今では完全に恋愛感情を持っていた。

「・・・・・・・・お、俺で良いのか?」

「はい・・・・・・・・//!!」

そんなこんなで、結婚した2人。もつとも、互いに18歳と16歳になるまで待ったが。

そして2人の間に生まれたのが・・・孝俊である。

孝俊の体の内部組織には【アンリミテッド・ダイナモ】の影響は無かったが、ナツキの持つ超膨大な魔力が受け継がれてしまったらしい。

それを知ったオファニモン(先代)が娘(現在のオファニモン)と力を合わせて孝俊の中の魔力を抑え込み、封印したという訳である。

〜回想終わり〜

『・・・と、言う訳です』

オファニモンが説明を終える。
輝二を始め、皆が呆然としている。

「え、でもその原理で行くと、春香ちゃんも・・・？」

ふと、我に返った高雄が龍輔に尋ねる。

「いや、ナツキちゃんの魔導資質は孝俊が丸々受け継いだから、春香の体は何の問題も無い」

孝俊の妹の春香には、魔力は全く無かった。

孝俊が全て母親から受け継いでしまったらしい。

「孝俊と拓也君はそのミッドチルダに・・・厳密に言えば、そのミッドチルダに直接関わりのある世界に行った、と言う訳だ」

2人の行き先を伝える龍輔。

「なるほど・・・まあ、あいつが何者であれ、構いやしねーっすよ」
「だな。あいつが俺達の仲間であり、友達である事に変わりは無いんだし」

納得した後、なんの問題も無いと返す高雄と善之。

彼が何者であれ、2人にとっては大切な親友である事に何ら変わりはない。

その場にいる全員が納得して首を縦に振る。

そして・・・拓也と孝俊、2人の無事を祈るのであった・・・

続く

第12話 誰にだって秘密の1つや2つはある気がする 後編(後書き)

はい、第12話終了です。

孝昭「ナツキさん、すげえなおい・・・(滝汗)」

拓也「あれで力の一端って・・・」

まあ、魔力の塊みたいなものですからね。

動力炉みたいに異常に魔力が生成されるという。

孝昭「ちゃっかりプロポーズするとはな(汗)」

拓也「てゆうかあれじゃあスカ公が普通に良い奴じゃなーかよ」

この作品では単なる悪党ではありませんので。

次回から再び海鳴Sideに戻ります。

次回予告、黒野君よろしく

クロノ「おい、漢字にするんじゃない!・・・ったく。

次回、リリカルなのはフロンティア第13話【誰にだって解らない事はある気がする(仮)】。お楽しみに」

第13話 誰にだって解らない事はある気がする（前書き）

少し間が空きましたが第13話です。

最近仕事が忙しい・・・（泣）

孝俊「泣き事を言うな。他の皆さんだって学業や仕事で忙しいんだから」

うう・・・手厳しい（涙）

とにかく、早いところ頑張って進めねば・・・

孝昭「ま、とにかく先に進もうや」

拓也「じゃ、始めるぜ！」

第13話 誰にだって解らない事はある気がする

第13話副題【想い】

拓也となのは（あとユーノ）を招いた翌日AM9：00。次元航行艦船アースラの一室にて・・・

孝俊とエイミィ、そしてリンディが話していた。

「なるほど・・・あれはデジモンって言うんだ？」

「はい、デジタルモンスター・・・略してデジモンです」

「電子の獣・・・てところかしらね」

今は、孝俊がリンディとエイミィにデジモンの事を説明していた。と言うのも、アースラ側でデジモンの解析を試みたものの、凄まじく複雑なプログラムで、殆ど理解できなかったのだ。

孝俊から【D・スキャナ】を借りて解析しようとしたが、D・スキャナ自体がかなり複雑で、全然駄目だった。

「とんでもなく複雑だね、あれは・・・全く理解出来なかったよ
溜息を吐くエイミィ。

なんとなく悔しそうにも見える。

「あー、持ち主の俺達でも細部までは完全には理解してませんからね。高雄じゃねーと駄目だな・・・」

「高雄？」

「俺の親友です。【D・スキャナ】のメンテナンスはそいつに一任

してるんですよ」

自分の親友の名前を出す孝俊。

デジヴァイスのメンテナンスを一任できる程、機械技術に長けて
いるのだ。

「へえー、あんなのを完全に理解できるなんて凄いね！」

「是非、管理局に欲しい人材ね」

「スカウトは結構ですけど、あいつは癖が強いからなあ・・・話してると疲れるかもね」

感心するエイミィと、スカウトしようとしてるリンディ。

しかも、【剛龍】のスピリットを持つ高雄は戦闘力も高い。

まさに、喉から手が出るほど欲しい人材だ。

が、孝俊曰く高雄はある意味変わった人物らしく、慣れるか気が合っていないと疲れるらしい。

「あー・・・良く寝た・・・」

「おふぁよづございますぅ・・・」

そこに、寝起きらしい拓也となのはがやって来た。

傀儡兵とのバトルを終えて孝昭にアースラに案内された後、どつと疲れが出たらしく、仮眠室で大爆睡してしまっていたのだ。

相当疲れていたのか、およそ半日寝てしまっていた。

ちなみに、なのはは拓也にくつついて寝ていたらしい。

ユーノは・・・なんか切ない表情で少し離れて寝たらしい・・・

哀れ。

「お、やっと起きたか」

「500体とバトルだったからな・・・シャレにならねーほど疲れ
たぜ・・・」

まだボーっとしてる拓也。

隣にいるなのはも、眼が半開きである。

「で、何の話してたんだ？」

「ああ、デジモンについて詳しく説明をな」

拓也の問いに、孝俊が答える。

「君達の事は、一応調べさせてもらったけど・・・見れば見るほど
凄いね」

「んー・・・でも、昨日の孝昭の方が凄かったよっな・・・」

拓也に話しかけるエイミー。

頭を掻きながら、昨日の戦闘で傀儡兵を殆ど薙ぎ倒したデタラメ
野郎を思い出す拓也。

「あいつは何を考えてるか解らんからな・・・戦闘からプライベ
ートまで本当にデタラメだから」

後ろにいるクロノが溜息を吐きながら言う。

思い返してみれば、何故かファンシーな恐竜のぬいぐるみで出て
くるわ、デタラメな破壊力で敵を薙ぎ払うわで、色んな意味で大活

躍だった。

「彼の魔力量はSS-、総合ランクでもS+だからね」

エイミイが孝昭のデータを出しながら答える。
ちなみに孝昭は、未だに仮眠室で寝ている。

「奴は地上本部どころか管理局全体でも異端児扱いらしいからな・
・まあ、当の本人は何処吹く風って感じだが」

クロノが苦笑しながら孝昭の現状を話す。

堅苦しく、実績などを異常なまでに重んじる管理局の中で、孝昭は数少ない人情派である。

自分の事よりも、まずは他人の事を考えるのが彼のやり方だ。
周りが何を言おうとも、孝昭は実力で登り詰めて、周りの批判を封じたいらしい。

『ぐぎゅるるるる〜』

「あ・・・／／」

「ふえ・・・／／」

拓也となのはの腹の虫が鳴った。
どつやら腹が減ったようだ。

「見事に豪快に鳴ったな（苦笑）」

孝俊が苦笑しながら2人を見ている。
半日も寝てりゃ腹も減るだろう。

「何か作るか・・・リンディさん、台所借りますよ？」
「ええ、どうぞ」

孝俊がリンディに許可を取り、台所へと向かう。
アースラに台所があるのか？というツツコミは無しで願いたい。

「孝俊が飯作ってくれるのか・・・こりゃ楽しみだな」

孝俊の手料理を幾度となく食している拓也は、よだれが出そうな
口元を押さえてにやける。

「孝俊さんって、料理得意なんですか？」

なのはが拓也を見上げて尋ねる。
40cm以上の身長差がある拓也となのは。どうしてもなのはは
拓也を見上げる形になってしまう。

「ああ、あいつの料理はマジで美味いぜ？俺の中では桃子さんにも
負けねーくらい」

拓也の中では、孝俊と桃子の料理の腕は同等らしい。

「うーん、もし彼女が女の子なら、クロノのお嫁さんに欲しいくらい
ね」

「気色の悪い事を言わないで下さい・・・」

リンディの言葉に、クロノが青ざめて答える。

まあ、確かに想像はしたくない。

「そーいやあいつは何時に起きたんだ・・・？」

「彼ならもう5時には起きて、部屋でトレーニングしてたみたいだよ？」

拓也の疑問にエイミィが答える。

エイミィが朝早くに孝俊のいる部屋を覗いたら、既に起きて修行していたらしい。

場所が変わっても、可能な限りは続けている。

エイミィが見た時は、孝俊が逆立ち状態で腕立て伏せをしていたとか・・・

ちなみに余談だが、フエイトも朝早くからの修行を続けているらしい。

「あいつ、この世界に来て修行やってたのか・・・」

苦笑いを浮かべる拓也。

「彼の戦闘技術・・・僕の予想では、将校のレベルを凌駕するな」

自分を破った孝俊の事を評するクロノ。

アツサリと武器を弾き飛ばされ、負けを認めざるを得ない状況にされたのだ。

高評価を下すのも納得できる。

「お待たせーっ」と

それから30分程して、孝俊がカートに乗せて朝食を持ってくる。何処にそんなもんがあったのかは気にしないでもいい。

カートに乗せられていたのは・・・和食と洋食の2種類だった。洋食はベーコンエッグにバタートースト、ツナサラダにコーヒ―。和食はご飯に味噌汁、焼き魚に卵焼きだった。

「とりあえずこれ位ですが」

軽く笑いながら言う孝俊。

(おいおい・・・これ1人で作った訳か?)

(ご飯は最初から炊いてあったとしても・・・これだけを30分で仕上げるって・・・)

(す、凄いなあ・・・)

(し、しかしなかなか美味そうだな・・・)

(うーん、男の子なのが勿体ないわね)

(あ、もう駄目だ、お腹が・・・)

拓也、なのは、ユーノ、クロノ、リンディ、エイミィが心の中で感嘆する。

リンディだけ視点がズレているが。

ちなみに、味噌汁は朝早くに孝俊がコツンリ仕込みをしておいたのである。

とにかく、6人は遅めの朝食に入るのであった。

「うおー！やっぱり美味えー！」

拓也は洋食の方を取り、バタートーストを頬張る。

「ホントにお母さんに負けないくらい美味しいの」

「確かにこれは美味しい・・・！」

なのはとユーノも洋食を取り、それぞれベーコンエッグとツナサラダを食べている。

「うん・・・味噌汁も濃すぎず薄すぎず・・・丁度良い」

「卵焼きもほんのり甘くて美味しい〜！」

クロノとエイミィは和食を取り、美味しそうに食べている。
リンディも焼き魚と合わせてご飯を食べていた。

「孝俊君、料理歴はどのくらいなのかしら？」

ふと、リンディが孝俊に尋ねる。

「んーと、初めて台所に立ったのが確か幼稚園の時だったから・・・
10年くらいですかね？」

「ふえ、10年!？」

孝俊の答えに驚いたなのは。

自分が生まれる前から料理に携わっていたのだから。

そりゃあ、上達もするだろう。

「中学入る前くらいからは大体俺が作ってますけどね」

序盤の頃に述べたと思うが、孝俊の家は両親共に家にいない事が多い。

その為、孝俊が料理を作る事が殆どなのだ。

ちなみに、無二の親友である四谷高雄とは家が隣同士で、よく食事に招かれる。

また、高雄の両親も孝俊の父・龍輔のかつての仲間だったらしいが、それはまた別の機会に。

「あたしと同じ年なのに随分苦労してたんだね」

エイミイが感心して言う。

エイミイは16歳で、拓也・孝俊とは同じ年である。

(そーいやフェイトの奴・・・ちゃんと飯食ってんのかな・・・)

孝俊は内心でフェイトの事を心配していた。

殆ど食事に手を付けない事もあったので、かなり心配せざるをえないのであった。

「孝俊がいなくなって数日後、フェイトSide」

・・・どうも、アルフです。

最近、どうにもフェイトの様子がおかしいんだよね。

何ていうか、ジュエルシード以外で・・・特に孝俊の話題を振ると。

「ねえ、フェイト・・・孝俊、ホントに大丈夫かな？」

「え、うん・・・きつと大丈夫だよ・・・孝俊、優しいし強いから・・・／＼」

・・・と、こんな感じだ。

多少顔が赤くなってるんだよね。もしかしてフェイト、孝俊の事が・・・？

だとするとちよつとまずいなあ・・・アタシも孝俊の事は結構気に入ってるんだよね・・・

しかも最近、フェイトは料理に挑戦するようになった。

最初は何かの嫌がらせか、一種のアートかと思うくらいに悲惨な出来だったけどね。

でも今は、普通に食べられるくらいになって来ている。

「孝俊が帰って来たら、ビックリするくらいの美味しい物作ってあげたいの」

・・・だそうだ。こりゃ本気だね。

それで、ある日の夕方に、ふとフェイトにアタシが思ってる事を聞いてみた。

「ねえフェイト・・・最近、孝俊の話題を振ったらやたら動揺するけど・・・なんでだい？」

「えっ・・・／＼／え、えつと・・・それは・・・／＼／」

顔を赤くしてオロオロしてるフェイト。

なんか可愛くてもうちよつと見ていようかとも思ったけど、まずは質問に答えてもらいたいので、諦める。

「孝俊が・・・いなくなつてから、何ていうか・・・寂しくて・・・孝俊の事考えたら、何だか苦しくなつて・・・熱くなつて・・・この感情・・・良く解らなくて・・・／＼／＼」

ああ、こりや完全に惚れてるね。

それにしてもフェイトをここまでにさせるとは・・・孝俊、アンタもなかなか罪深い奴だよ。

アタシだつて、アンタの事好きなんだからさ・・・フェイトほど露骨に感情出さないけど。

「そりやあフェイトが、孝俊の事を好きになつてるんだよ」

「私が・・・孝俊を・・・／＼／？」

黙つてりやアタシが有利だけど、フェアじゃないからね。

これくらいは教えてあげなきゃ。

「そつだよ。まあ、あいつは自然に行動してたんだろっけどさ」

あいつはホントに良い奴だと思う。

強いし、優しいし、家事も出来て、フェイトの為にプレシアに対して本気で怒つて・・・

管理局に捕まりそうになつたアタシ達の為に、傷ついた体に鞭打つて助けに来てくれて・・・

アタシ達を心配して手紙まで書いてくれて・・・

フェイトみたいに純粹で恋愛を知らないような子なら、間違ひなく惚れる。

アタシから見れば、外見だつてなかなかのイケメンだし・・・

「そっか・・・これが・・・好きつて・・・気持ち・・・／／／」
「孝俊が帰つて来たら・・・出来れば伝えてごらんよ」

そう言うアタシは・・・まだ、想いを伝える覚悟は出来てない。
でも、いつか絶対に言うつもり。フェイトにばかり先を行かせる
訳にはいかないからね。

それにしてもあいつ、ホントに大丈夫なんだろうか・・・

くその頃、時の庭園く

「くそつ、何なのだあの訳分からん魔導士は・・・！」

プレシアの体に乗っ取っているヴァンデモンが、数日前のバトル
の映像を見ている。

500体の傀儡兵が、次々と孝昭に撃滅されている。

「いきなり着ぐるみ着て現れるわ、剣を振り回して一気に殲滅する
わ、デタラメに砲撃ぶつ放すわ・・・訳が解らん・・・！」

ヴァンデモンはかなり頭の良い方のデジモンである。

ただ、それだけに孝昭の予測不能の行動には付いていけなかった。ある意味、バカな方が孝昭の動きに付いて行けるかもしれない。

「おのれ・・・仕方が無い、しばらく静観するか・・・」

忌々しく吐き捨て、モニターを見るヴァンデモンだった・・・

続く

第13話 誰にだって解らない事はある気がする（後書き）

はい、第13話終了です。

孝俊の料理スキルが全開です。

拓也「絶対主婦ならぬ主夫になれるよな・・・」

孝昭「それは言わないでやれよ・・・（汗）」

孝俊「あ、そうそう・・・秋風先生の所の【魔法少女リリカルなのはStrikerS】蒼天の騎士伝説」の井上直人君が、こっちに遊びに来たいらしい」

孝昭「こんな所でよけりゃいくらでも来てほしいね。むしろこっちからお願いするよ」

こちらに出たい場合は、簡単なプロフィール紹介をお願いします。

そろそろ後書きコーナーでも始めようかと思っております。

では次回予告、^{シスコ}恭也君よろしく。

恭也「おい！恭也と書いて【シスコ】と読んだか！？全く・・・次回、リリカルなのはフロンティア第14話【仲間ってやつぱり大切な気がする（仮）】お楽しみに！」

第14話 仲間ってやっぱり大切な気がする 前編（前書き）

第14話です。

今回も少し長くなりそうだったので、前後編に分けました。

孝俊「いよいよ無印編も後半だな・・・」

拓也「更新ペースは・・・今のまま行けば、半年後にはStrike
ers編かな（汗）」

孝昭「長いなオイ」

あとがきコーナーにはスペシャルゲストのお2人が登場！

では・・・

コーノ「第14話、始まります！」

第14話 仲間ってやっぱり大切な気がする 前編

第14話副題【調査】

アースラの会議室らしき場所で、艦長のリンディを始めとしたアースラのクルーが集まっていた。

勿論、拓也となのは、ユーノ、孝俊もいる。

「・・・本日0時をもって、本艦の任務はロストロギア【ジュエルシード】の搜索と回収に変更となります」

リンディが今回の目的を、クルー全員に伝えている。
いつものほんわかとした雰囲気は無く、真面目な表情である。

「なお、本件に関しては特例として、問題のロストロギアの発見者であり、結界魔導師でもあるこちら・・・」

「は、はい・・・ユーノ・スクライアです!」

「それから、彼の協力者であり、現地の魔導師さん・・・」
「た、高町なのはです!」

ユーノとなのはが、緊張した面持ちで自己紹介する。

「それから・・・本件には、未確認生命体【デジタルモンスター】、略して【デジモン】の存在が確認されています」

ユーノとなのはの自己紹介を聞いた後、リンディが続ける。

「デジモンのレベルは、これまで全てAランク以上の物ばかりが観測されていて、対決するにおいて、対処法を知らない我々魔導師だけでは危険なものと思われる」

クロノが補足して話す。

デジモンは成熟期でもAランクに相当する物がゴロゴロいるようであり、並の魔導師では太刀打ちできないだろう。

かつて、孝俊と組んでたとはいえフェイトがデジモンを倒せたのも、彼女自身がAAA相当の高ランク魔導師だったからだ。

「そこで、同じく協力者として専門家である、そちらのお二方・・・

」
「どうも、神原拓也です。デジモンに進化して戦う事が出来ますんで、よろしく願います！」

「面林孝俊です。同じくデジモンに進化して戦えます。特技は野球と剣術です」

ユ一ノとなのはとは対照的に、落ち着き払っている2人。

こづいつのは慣れているらしい。

「・・・以上、この前より地上本部からこちらに出向となっている佐野孝昭二等空佐を加え、5名が事態に当たってくれます」

「「「「「よろしく願います」」」」」

「・・・しかし、しばらくデジヴァイスは軽めの調整しか出来ねーな」

「精密調整はオフア二モンか高雄しか出来ないからな・・・俺も7割くらいしか出来ないし」

会議室を出た後、拓也と孝俊は溜息を吐く。

デジヴァイスの調整が簡単な物しか出来ないからだ。

孝俊は親友の高雄からある程度教わってはいるものの、それでも全体の7割弱しか理解できていない。

管理局でも解析できないとなると、自分達で軽めに調整するしか出来なかった。

「レベルの高い進化をすれば、それだけデジヴァイスにも負荷が掛かってくるからな・・・」

「極力、ヒューマンスピリットで何とかしなきゃなあ・・・」

何気なく進化してるようにも見えるが、それも高雄の調整があつてこそだった。

デジタルワールドは電子空間の中なので調整の必要もなかったが、人間界ではそうはいかないのである。

「・・・てな訳で、デジヴァイスの調整の時は、この艦のコンピューターを貸して貰いたいです」

「ええ、それくらいならお安いご用よ　うちのクルーじゃ誰も解析は出来ないし、自分でやってもらうしかないものね」

孝俊がリンディにコンピューターを使わせてもらうように交渉して、難なくOKをもらえた。

後ろでは、拓也となのはとユーノが2人の会話を見守っている。

ちなみに、なのはは拓也とユーノに挟まれて立っているが、明ら

かに拓也の方に寄って立っている。

相変わらずなのは拓也に懐いているらしい。

でも、やっぱり拓也は特に気にしていなかったりする。

ユーノは・・・ジト目で拓也を見ていたりするのだが、やっぱり眼中になかったりする。

「艦長、お茶です」

「ありがとう」

エイミイがお盆に載せてお茶（緑茶）を持ってやってくる。

リンディは一緒に置いてあった砂糖とミルクを入れて飲む。

（うわ、すげえなおい・・・絶対いつか糖尿病になっちまうぞ・・・）

（・・・ま、本人の自由だし、突っ込まない事にしておこう）

後ろでは拓也となのはが顔を引きつらせている。

リンディの隣では、孝俊が無表情でそれを見ている。

「はぁ・・・そういえば、なのはさん。学校の方は大丈夫なの？」

お茶を飲んで一息ついた後、リンディがなのはに尋ねる。

なのはは9歳。当然ながら学校に通っている訳だが・・・

「あ、はい・・・家族と友達には説明してありますので・・・」

その頃、小学校では・・・

「・・・そういう訳で、高町さんはご家庭の事情で何日か学校をお休みするそうです」

担任の先生がクラスで説明していた。

「でも、病気や怪我や不幸な事があってお休みする訳ではないという事ですから、心配しなくても大丈夫ですよ」

先生の説明を聞きながら、なのはの友達であるアリサ・バニングスと月村すずかが、空席となっているなのはの席を見ている。なのはがアースラに赴く数日前、なのははアリサと喧嘩になってしまっている。

フェイトの事で頭が一杯になってしまい、何を言われても殆ど上の空だったなのは。

そんな彼女にアリサが怒ってしまった、と言う訳だ。

勿論、アリサが怒ったのもなのはを心配しての事なのだが。

「高町さんがお休みの間、ノートとプリントは・・・」
「はい！私が」

先生の言葉に、間髪入れずにアリサが立候補する。
なんだかんだで、やっぱりなのはの事は心配なのである。

「アリサさん、それじゃあよろしくね」
「はいっ！」

そんなアリサを、すずかは微笑みながら見ていた。

(なのはちゃん、元気でいるかな・・・)

空を見上げ、彼女もまた、なのはを心配するのであった。

暫く後・・・なのは・ユーノ・拓也・孝俊はジュエルシードの乗り移った巨大な鳥と、バトルしていた。

ユーノが魔法の鎖で捕まえようとするが、鳥だけあって素早く、なかなか捕まえられない。

おまけにヴァンデモンが差し向けたデジモンまで襲来していた。

ちなみに現時点では、ヴァンデモンの存在については管理局側では孝俊しか知らない。

スカルグレイモン 完全体 アンデッド型 ウィルス種

必殺技 グラウンド・ゼロ(背中からミサイルを発射)

得意技 カースブレス(紫色の息を吐き出し、相手を麻痺させる技)

「こいつは俺がやる！拓也はなのはちゃん達の援護を！」
「解った！任せませ！」

ブロスモンに進化した孝俊がスカルグレイモンに突入していく。
拓也はアグニモンに進化し、ジュエルシードの巨鳥に立ち向かう。

巨鳥は未だに空中を飛び交っていた。

「あー、もう！チヨロチヨロ動き回ってんじゃねえ！【バーニングサラマンダー】！」

・・ズドンッ！ズドンッ！

アグニモンが必殺のエネルギー弾を放つ。

巨鳥の飛ぶコースをある程度予測し、見事に命中させる。

『ギヤアアアア！』

【バーニングサラマンダー】をまともに喰らい、巨鳥が悲鳴を上げる。

更にアグニモンは飛び上がり、炎の竜巻と化して向かって行く。

「くらえっ！【サラマンダーブレイク】！」

『バキヤアアアッ！』

そして巨鳥の目の前に到達した瞬間、その顔面に炎の回し蹴りを叩き込んだ！

「ユーノ！行け！」

「よし・・・それっ！」

アグニモンの号令でユーノが魔法の鎖を放つ。
鎖は見事に巨鳥を捕えた。

「捕まえた！なのは！」

「うん！」

【Sealing mode set up】

レイジングハートから発せられた光の帯が巨鳥にぶつかる。
すると、巨鳥の喉元に【？】の文字が浮かぶ。

【Stand by ready】

「リリカル、マジカル、ジュエルシードシリアル?!封印！」

【Sealing】

巨鳥が消滅し、ジュエルシードがゆっくりと落ちてくる。
なのははレイジングハートを構え・・・ジュエルシードを回収した。

【Received Number?】

「状況終了です。ジュエルシード、ナンバー8無事確保。お疲れ様なのはちゃん、ユーノ君、拓也君」

クルーの1人がなのは達に通信を入れる。

「あー、もうちょっと待ってください？孝俊がまだ戦闘中なんで」

「了解。じゃあ、終わったら伝えてね」

アグニモンから元に戻った拓也がクルーに話す。
クルーも了承し、一旦通信を切った。

そして、なのは達から少し離れた所では・・・

「せいっ！」

『ガギーン！』

ブロスモンが剣を手にスカルグレイモンを追い詰めていた。
ハンマーを使っている時よりも、剣を使っている時の方が素早い。
武器自体の重さもあるが、何より孝俊は剣の方が使い慣れている。

孝俊は幼い頃から父・龍輔を師として剣術を鍛えてきた。

普段はのほほんとしている父・龍輔だが、剣を持てば人が変わったように真面目になる。

型に嵌らない自由な剣筋は、磨けば磨く程パワーアップしていき、
様々な強敵と斬り結んだ。

神速の剣術を持つ龍輔は、孝俊にとって未だ辿り着けない大きな
目標である。

父から教わった必殺技、自らで開発した必殺技・・・増えに増え
て50を越えた。

「おー、やってるやってる」

様子を見に来た拓也、なのは、ユーノ。

なのはとユーノは既に元の服装に戻っている。

「で、でかいなあ・・・あのデジモン」

スカルグレイモンを見て、少し怖気づくユーノ。

確かに、サイズではスカルグレイモンの方がブロスモンよりは大きい。

だが、状況としてはブロスモンの方が圧倒的に有利である。

『グウオオオオツ！』

スカルグレイモンが、ブロスモン目掛けて背中からミサイルを発射する。

必殺技の【グラウンド・ゼロ】だ。

着弾してしまえば、この辺一帯はブツ飛んでしまっ程の威力がある。

「あわわわわ・・・！！ミ、ミサイルなの！孝俊さん危ない！！」

「まあまあ、慌てるなって」

手をパタパタ振って慌てているのは。

しかし、拓也は平然としている。

「・・・・・・・・・・はっ！」

ブロスモンが縦一閃に剣を振るう。

次の瞬間、ミサイルが真っ二つに割れてブロスモンの後方で爆発した。

「ふえ・・・・・・・・」

「嘘・・・・・・・・」

「孝俊ー、そろそろ決めちまえー」

呆然としているのはとユーノを尻目に、呑気に言い放つ拓也。嫌という程孝俊の実力は知っている。

もつとも、拓也はその孝俊よりも強い（孝俊談）のだが。

「見せてやる・・・親父から教わった剣技の1つ・・・」

プロスモンがその場で剣にエネルギーを集中させる。すると、剣が緑色の光を纏っていく。

『グガアアアアア！』

だが、スカルグレイモンが既にプロスモンに向かって突進して来ている。

「行くぞ！」

プロスモンがその場から凄まじいスピードで動き出す。

そして・・・スカルグレイモンとすれ違いざまに横薙ぎに剣を振り抜いた！

「【閃光斬】！」
せんこうざん

技の名前を叫んだ瞬間、閃光が煌めいた。

剣を振り抜いた後、急ブレーキをかけて停止するプロスモン。

スカルグレイモン、プロスモン共に動かない。

そのまま数秒の静寂が流れ・・・そしてプロスモンが剣を鞘に収める。

すると、スカルグレイモンが胴体から上下真っ二つに割れ、消滅した！

「な、なのは……今の……見えた？」
「か、辛うじて……かな……？」

ユーノとなのはは顔を見合わせて苦笑いしていた。

「今のは孝俊の必殺技の1つ、【閃光斬】だ。あいつが最も多用する剣技でもある」

拓也は落ち着き払って解説していた。

元の世界ではよく孝俊と組み手をしていたが、最初の頃は嫌という程この【閃光斬】を喰らいまくっていた。

今では全然余裕で見切れるのだが。

「4人ともお疲れ様。ゲートを開くから、そこで待ってて」

「「はい」」

「「ういーす」」

「うーん、4人ともなかなか優秀だね。このままうちに欲しいくらいかも」

モニターを見ながらリンディが上機嫌で喋る。

一方で、エイミィとクロノが別のモニターで、フェイトの事を調べていた。

「この黒い服の子、フェイトって言うんだ……」

「フェイト・テストアロッサ。かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」

画面を見ながらクロノが言う。

「へえ、そうなの？」

「だいぶ前の話だよ。ミッドチルダの中央都市で、魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして追放されてしまった大魔導師……」

もつとも、その魔法実験を引き起こしたのがプレシアではなく、ヴァンデモンである事は孝俊しか知らないのだが。

「その人の関係者？」

「わからない、本名とも限らない……」

「孝俊君はこの子と暫く一緒にいたみたいだけど……彼は何も話してくれないし……」

エイミィが溜息を吐く。

孝俊は、フェイトとアルフについては固く口を閉ざしている。

力づくで口を割ろうにも、孝俊の方が実力は遙かに上である。

もしかしたら孝俊に対抗できるであろう孝昭は、その孝俊と友人関係を築いており……

【友を売るなど俺には出来ん】と突っぱねられてしまったらしい。

孝俊は孝俊で、いつか言つつもりではいるのだが……まだ黒幕ヴァンデモンが公に姿を現していない以上、信用してはもらえないだろう。

孝俊にとって、フェイトとアルフは大切な家族であり、仲間である。

仲間を売るなど、出来るはずもない。

「フェイトちゃん……現れないですね……」

「そうだな……なあ孝俊、教えてくれ。あのフェイトって子は、何が目的でジュエルシードを集めてるんだ？」

アースラの艦内を歩きながら、拓也に話すのは。

拓也は頷いた後、孝俊にフェイトの事を尋ねた。

「・・・フェイトは、ある人の頼みでジュエルシードを集めている。ただ、目的が何なのかまでは、フェイト自身も知らない」

「・・・マジか」

「ああ。俺から言えるのはこれだけだ・・・すまん」

孝俊は拓也の事を信用していない訳ではない。

ただ、今はまだ言うべきではないと判断したのだ。

・・・その頃、フェイト達は

「・・・フェイト、駄目だ。空振りみたいだ」

「そう・・・」

「やっぱり・・・向こうに見つからないように隠れて探すのはなかなか難しいよ・・・」

アルフとフェイトは、管理局の手から逃れながらジュエルシードを探していた。

しかし、なかなかジュエルシードは見つからなかった。

「・・・孝俊さえいれば・・・管理局に見つかったても真っ向から何とか出来たかもしれないけど・・・」

アルフは、この前まで一緒にいた、自分達を助けてくれていた男を想っていた。

「・・・うん、でも・・・もう少し頑張ろう・・・」

フェイトは腕に巻いてあった包帯を外し・・・空へと放った。

(孝俊・・・私、頑張るから・・・弱気は最大の敵、だよな・・・)
前に孝俊から送られてきた手紙に書いてあった言葉・・・

【敵は敵にあらず 敵は内なる我なり 弱気は最大の敵】

この言葉は、今やフェイトの支えにもなっていたのだった。

・・・拓也達がアースラに移ってから10日目。

拓也達が手に入れたジユエルシードは？、？、？の3つ。

フェイト達が手に入れたのは？と？の2つである。

「・・・あと6個か」

ユーノが呟く。

「しかし、何処捜しても見当たらねーとは・・・」

「・・・もう、それこそ空の上か海の中でも探さなきゃ駄目なんじやねーか？」

拓也が困ったように呟き、孝俊は半分諦めたように言い放つ。

その日の午後、アースラ内の食堂(?)にて。

「・・・今日も空振りだったね」

「だな・・・」

孝俊お手製のクッキーを食べながら、なのは、拓也、ユーノが話していた。

ちなみに孝俊は、孝昭の部屋に行っている。

「ごめんね、なのは・・・その、寂しくない？」

ユーノがなのはに謝る。

どんな経過であれ、巻き込んでしまった事に未だに罪悪感を覚えているユーノ。

「ううん、大丈夫。拓也さんやユーノ君と一緒に・・・1人でも結構平気」

なのはは笑いながら返す。

「・・・私がちっちゃい頃、お父さんが仕事で大怪我しちゃって、暫くベッドから動けなかった事があるの」

更になのはは話を続ける。

「喫茶店も始めたばかりで、まだ人気がなかったから、お兄ちゃんやお母さんもずっと忙しくて」

「・・・」

なのはの話を、拓也とユーノは黙って聞いている。

話をしている時のなのはの顔は・・・何だか寂しい表情だった。

「お姉ちゃんは、ずっとお父さんの看病で・・・だから私、割と最近まで家にいる事が多かったの」

「・・・そうだったのか」

拓也は少し悲しそうな表情をして、喋る。

「拓也さんの家族は・・・どんな感じですか？」

「ん、今話を聞いた後に喋るのはちよつと気が引けるが・・・うちごく普通の家庭だよ・・・両親に弟が1人だ」

拓也の家は特にこれといった特徴もない、ごく普通の一般家庭である。

現在は拓也がデジモンとして戦っている事も知っており、両親は息子の身をよく案じている。

余談だが、オフアニモンは特殊型スピリットの1つを拓也の弟に授けようと考えていたらしい。

だが・・・

【戦場に立つのは俺だけで良い。弟には危険な目に遭ってほしくない】

・・・という拓也の懇願により、断念した。

「弟とは良く喧嘩もするけど・・・なんだかんだで仲が良いしな」

「そうなんですか・・・」

「・・・まあ早いところこの問題片付けてゆっくりしようぜ」

「はい！」

拓也は優しくなのはの頭を撫でる。

なのはは嬉しそうに笑って、返事を返す。

ふと、アースラ艦内に緊急事態を伝えるブザーが鳴り響いた。

「エマージェンシー！ 捜査区域の海上にて、大型の魔力反応を感知
！」

「な！？・・・よし、リンディさんの所に向かうぞ！」

「はい！」

拓也が叫び、なのはとユーノも拓也について走り出した。

「緊急事態か！」

「とりあえずモニター室に向かうぞ！」

孝俊と孝昭もまた、緊急事態のブザーを聞き、走り出すのであつた。

続く

第14話 仲間ってやっぱり大切な気がする 前編（後書き）

はい、第14話終了です。

孝俊の50以上ある内の剣技が漸く発動・・・

孝昭「それより、客が来てるぜ」

直人「こんばんは！」

マリカ「こんばんは」

孝俊「おお、直人君とマリカさん。こんばんは！この間はどうもw」

直人「そっちはそっちで大変みたいだな」

孝俊「んー、フェイトと離れ離れになっちゃったからなあ・・・早いとこ事件片付けて帰りたいな・・・」

マリカ「よっぽどフェイトさんが心配と見えますね」

孝俊「ん、そりゃあ、まあね・・・」

直人「で・・・今回出した技、【閃光斬】だっけか？」

孝俊「親父から一番最初に教わった技で、俺が一番愛用してる」

マリカ「高速で突っ込んで行って、レーザーソードですれ違い様に敵を叩っ斬るってところですかね」

孝俊「まあ、突っ立ったままでも出来ますけどね」

直人「ふむふむ・・・ところで気になったが、拓也はビーストスピリット使ってたが、孝俊君は持ってないのか？」

孝俊「いや、あるっちゃある。近い内に出すよ？」

直人「そうか、楽しみにしてるよ」

マリカ「主、そろそろ時間です」

直人「え、もう!？」

鷹「じゃあ土産を・・・」

孝俊「ちよつと待て、何渡そうとしてんだ？」

鷹「いや、カープグッズを少々」

孝俊「やめんかい。とりあえずこんな物しかないが・・・」

直人「これは？」

孝俊「D・スキャナのレアモデル・・・と、俺の手作りのクッキー」

マリカ「喜んでいただきます」

直人「クッキーをか(汗)」

孝俊「D・スキャナはあれだったら売ってくれれば（待て）」

直人「ははは・・・まあ、貰っておくよ」

孝俊「なんかそつちの世界は大変そうだけど・・・頑張つてな」

直人「ああ、お互いにな」

マリカ「では、また機会があれば」

孝俊「はい、それじゃ！」

井上直人 19歳

デバイス・・・メシア ブレイブスワロー

両方共、古代ベルカ式

登場作品・・・秋風先生の【魔法少女リリカルなのはStrike
r・s】蒼天の騎士伝説】

性格は温厚かつ真面目。喧嘩が強く、運動神経は良い。

前作の【魔法少女リリカルなのは蒼天に舞う騎士】で、カオスとの戦いにおいて戦果を挙げるも、カオスの爆発を押さえるためにコアを破壊して爆発に巻き込まれ、アルハザードへと飛ばされる。その4年後にミッドチルダへ戻り、現在は機動六課に在住。民間協力者として戦っている。

現在、多数の女性キャラとフラグを立てている。

マリカ

古代ベルカ式の融合騎

真面目で優しい性格。主である直人とゼオンを大切に思っている。甘いものに目がなく、本人曰く、甘い物は別腹。戦闘能力は高い為、剣なども扱う。直人の師匠でもある。

今回は、ジュエルシードの竜巻と対戦&遂に【龍】のビーストスプリットが！

それでは次回予告・・・桃子さん、お願いします。

桃子「あら、私でいいのかしら？」

それじゃあ・・・次回、リリカルなのはフロンティア第15話【仲間ってやっぱり大切な気がする 後編】、お楽しみに」

第15話 仲間ってやっぱり大切な気がする 後編(前書き)

はい、第15話です。

今回は龍のビーストスピリットが登場します。

竜巻相手にどう戦つか・・・

孝俊「じゃ、始めるぞ」

第15話 仲間ってやっぱり大切な気がする 後編

第15話副題【片鱗&緑龍】

「・・・何か大変な予感がする・・・！」

拓也は廊下を走りながら、胸騒ぎを覚えていた。

拓也に少し遅れて、なのはとユーノも走ってくる。

「ジュエルシードかな・・・!？」

「解らない・・・でも緊急事態なのは間違いない・・・!」

「な、なんて事してんのあの子達！」

エイミィがモニターを見て叫ぶ。

モニターには、海上で魔法陣を展開しているフェイトの姿が映っていた。

「アルカス、クルタス、エイギアス・・・」

魔法陣の上には、呪文を唱えているフェイトがいた。

魔法陣から少し離れた場所では、狼モードのアルフが心配そうにフェイトを見つめている。

(ジュエルシードは、海の中にある。位置を特定するために、電気

の魔力流を海に叩き込んで強制発動させる。そのプランは間違っていないけど……!）」

フェイトを見つめるアルフの表情が険しくなる。

「撃つは雷、響くは轟雷、アルカス、クルタス、エイギアス……」

「はぁぁぁあ!!」

呪文を唱え終えたフェイトが、海に向かって巨大な雷を放った。すると、海からジュエルシードの光の柱が6つ現れる。

「見つけた……残り6つ!」

だが、今のでフェイトの呼吸が荒くなっている。かなり魔力を使ったようだった。

（これだけの魔力を打ち込んで、さらに全てを封印して……こんな、いくらフェイトの魔力でも絶対限界超えだ!）

アルフは、フェイトを心配する。

それと同時に、1人の少年を想い浮かべた。

（孝俊……あなたなら……どうする……?……いや、言うまでもないか……あいつなら……!）

「アルフ!空間結界とサポートお願い!」

「ああ!任せといて!」

（あいつなら……なんだかんだでフェイトに何処までも付き合おうとするだろうね……!）

孝俊の性格を考えれば、一蓮托生の道を選ぶだろう。
優しいが故の・・・彼の事を考えれば。

(だから、誰が来ようが、何が起きようが・・・孝俊が戻るまで、
あたしが一人で絶対にフェイトを守ってやる！)

「行くよバルディッシュ。頑張ろう・・・！」

フェイトはバルディッシュを構え、嵐の中に飛び込んで行った。

その頃、拓也となのは、ユーノはブリッジに到着していた。

「おいおい・・・こりゃとんでもねえな・・・」

「フェイトちゃん・・・！」

拓也となのはがモニターに映るフェイトを見て、驚く。

「何とも呆れた無茶をする子だわ！」

「無謀ですね・・・間違いなく自滅します」

心配そうな表情を向けるリンディと、冷たく言い放つクロノ。
それを聞いた拓也は、少しムツとした。

「リンディさん！」

「何事ですか!？」

孝俊と孝昭がブリッジに飛び込んでくる。
・・・何故かムーンウォークで。

「2人揃って何やつとんじゃボケエエエエ!」

【ゴンツ×2】

「グハツ!」

容赦ない拓也の鉄拳ツツコミが入る。

「あのなあ、状況を考える状況を・・・」

「すみません・・・」

2人は揃って拓也に土下座をしていた。

「フェイト・・・!なんつー無茶を・・・あれだけ無理するなって
言ったのに・・・!」

土下座を終えて立ち上がり、孝俊はモニターを見て言う。

「あれは・・・個人の出せる魔力の限界を超えている・・・!」

その状況を見て、クロノが呆れたように言い放つ。

「あの!私急いで現場に・・・!」

「その必要は無いよ。放っておけば、あの子は自滅する」

現場に向かおうとするなのはの言葉を遮り、クロノが止める。
クロノの言葉に、拓也、孝昭、そして孝俊は顔を険しくした。

「仮に自滅しなかったとしても、魔力を使い果たした所で叩けば良
い」

「でも……！」

非情なクロノの言葉に、戸惑いを隠せないのは。

「今の内に捕獲の準備を！」

「了解」

クロノの指示を受けたオペレーターが準備をする。

「私達は、常に最善の選択をしなきゃいけないの。残酷に見えるか
もしれないけど、これが現実よ」

リンディが険しい表情で画面を見上げた。

フェイトは、まだジュエルシードを封印しようと必死に戦ってい
る。

何度弾き飛ばされても……諦めずにひたすら何度も何度も立ち
向かっていく。

「……………」

それを見ていた孝俊はD・スキャナを握り締めて、転移装置に向
かって歩き出す。

「……何処へ行くつもりだ？勝手な行動を許す訳にはいかない」

クロノが孝俊の前に立ちはだかる。
だが・・・孝俊は何も言わない。

しばらく無言を貫いた後、孝俊は一言・・・こう発した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・どけ」

「・・・・・・・・つ!!!??」

蒼い単色の絶対零度の瞳が、クロノに突き刺さる。

クロノは思わずその場から立ち退いてしまった。

彼には見えていた・・・孝俊の体から、何かとてつもなく禍々し

い緑色のオーラが龍の形を成して、自分を睨みつけているのを。

「……行け、孝俊。俺が海上まで転送してやる」

それを見た孝昭は、孝俊の前に立つ。

「……頼む」

「俺も行く！」

「わ、私も行きます！」

「僕も！」

孝俊に続いて、拓也、なのは、ユーノが名乗り出る。

「き、君達は……！」

「……リンデイさん、あなたの言い分は確かに正しい。だが……世界を守る云々を語る前に、眼の前で苦しんでる1人の少女を救えねーんじゃ、本末転倒だ」

自分を睨みつけているクロノを尻目に、リンデイに言い放つ孝昭

「俺も孝俊、孝昭と同じ考えだ。こんなのと似た状況は結構体験したけどよ……眼の前で苦しんでる奴を見捨てた事は1度も無いんでね」

拓也も孝昭に続く。

「……フェイトとアルフは俺の大切な家族であり、仲間だ……おめおめと見殺しになんか出来るもんかよ！」

孝俊は爆発寸前の感情を抑えながら叫ぶ。

（う、うそ・・・！魔力平均値・・・255万・・・！！？彼の魔力値は確か5000だった筈・・・！）

エイミィは、ちゃっかり孝俊の魔力値を測っていた。すると、なのはの倍の魔力が計測されていたのだ！

孝俊の体には、魔力生体兵器である母・ナツキから受け継いだ超膨大な魔力が存在する。

誕生した直後に封印されているが、年月を経て封印が弱まり、感情の爆発で封印が解けかかっていたのだ。

もっとも、孝俊自身は自分に魔力があるなど知る由も無い。

「リンディさん！私達・・・フェイトちゃんを助けたいんです！」

「・・・解りました。行動を許可しましょう」

なのはの必死の懇願に、リンディが遂に折れた。

「・・・現場での責任は俺が取る。お前達は思う存分やって来い！」

孝昭が申し出る。

彼は2等空佐・・・それなりに権限も持てる。

親友ともの為、自らを犠牲にしてもモニター越しに苦しんでるフェイトを助けたいと思ったからだ。

「・・・何度もすまねえな」

「気にすんな・・・さあ、行け！」

孝昭は転移魔法で拓也、なのは、ユーノ、そして孝俊を海上まで送り込んだのだった。

そして・・・拓也達が空中に現れる。

すぐに拓也はデジヴァイスを構える。

すると、拓也の左腕に複数のデジコードが現れ、拓也はそれをスキャンする。

「スピリットエボリューション！」

叫んだ瞬間、爆炎が拓也を包み込む。

そこから現れたのは・・・

「ヴリトラモン！」

孝俊を肩に乗せたヴリトラモンだった。

「拓也・・・竜巻まで出来るだけ接近してくれ。俺もそこで・・・
ビーストスピリットを使う！」

「よし、解った！」

ヴリトラモンは頷き、孝俊を乗せて竜巻に向かって飛んで行った。

「行くよ・・・レイジングハート」

なのはは・・・待機状態のレイジングハートに語りかける。
そして！

「風は空に、星は天に！輝く光はこの腕に！不屈の心はこの胸に！
レイジングハート、セーフトアープ！！」

【Stand by・Ready】

バリアジャケット姿で、ゆっくりと海上に降りるなのは。

「・・・っ！フェイトの邪魔を・・・するなあああ！」

狼モードのアルフが竜巻を振り切ってなのはに向かって飛びかかってくる。

だが、アルフの前に緑色の魔法陣が展開され、ユーノが出てきた。

「違う！僕達は君達と戦いに来たんじゃない！」

「ユーノ君！」

「待てよ・・・アンタ達がいるって事は・・・孝俊は、孝俊はいないのかい!?!」

ふと気が付き、アルフはユーノとなのはに尋ねる。

「もうすぐここに来ます！孝俊が、一番にここに向かおうと動いてくれたんです・・・！」

ユーノがアルフとフェイトに向かって叫ぶ。
そして、公園の方からヴリトラモンの肩に乗っている孝俊が見えた。一直線にこちらに向かっていてる。

「孝俊……！」

フェイトは辛いながらも、嬉しそうな表情になる。
ずっと会いたかった……大切な人に会えたのだから。

だが、次の瞬間に竜巻がフェイトに襲いかかった。

「ふえ、フェイト、危ない！」

「っ……！？あぁっ！」

竜巻に弾き飛ばされ、海に落下していくフェイト。
魔力も殆ど無い為、空中で踏ん張る力も無かった。

だが……ヴリトラモンが急降下し、その肩に乗っている孝俊がフェイトを受け止めた！

「ふー……あぶねえあぶねえ」

「サンキュー、拓也……」

一旦竜巻から距離を取るヴリトラモン。
ユーノとアルフ（人間モード）は、魔法の鎖でジュエルシードの竜巻を抑えていた。

「孝俊……あう！？（むにーっ）」

ふと、何を思ったか、孝俊がフェイトの頬つぺたを軽く引つ張っていた。

「全く・・・あれ・ほ・ど無茶すんなって言ったよな・・・？な？な？」

「あうう・・・」「ごめんなひゃい・・・」

無茶した事についての、ちょっとしたお仕置きだった。
この程度で済ませる所が孝俊らしい。

「フェイトちゃん！」

孝俊とフェイトの元に、なのはが飛んでくる。

「手伝って！ジュエルシードを止めよう！」
「・・・・・・」

フェイトは孝俊の方を見る。
孝俊は頷いて、フェイトになのはと協力するように促す。
そして・・・レイジングハートから桜色の光がバルディッシュに入る。

【Power charge】
バルディッシュに再び魔力の刃が形成された。

レイジングハートの魔力をバルディッシュに分け与えたのだ。

【Supplying complete】

「俺と孝俊で竜巻を弱らせる！」

「そこを狙って2人は封印を！」

「はい！」

「うん・・・！」

ヴリトラモンは孝俊を乗せ、上空高く飛び上がる。
そして・・・孝俊はヴリトラモンから飛び降りた！
スカイダイビングをしながらデジヴァイスを構えると・・・左手
に複数のデジコードが現れる！

「スピリット…エボリューション…！」

次の瞬間、孝俊の体が緑色の凄まじい光に包まれた。

「う・・・ぐ・・・がああああああああああああああ
あっ！」

ブロスモンよりも巨大で重厚な機械の鎧が装着されていく。
光が晴れ、そこに現れたのは・・・とても巨大なロボットだった！

「グリーンドラモン…！」

グリーンドラモン ハイブリッド体 マシン型 バリアブル種
オリジナル

必殺技 ドラゴンカノン【エネルギーを溜め込んで発射する巨大エ
ネルギーキャノン】

フルバーストランチャー【マグナムランチャーをフルパワ
ーで射出】

得意技 マグナムランチャー【ランチャーからエネルギー弾を連続
発射】

ジェットナックル【両手から拳を発射。決してスーパーフ
アイ ロボとか言っではいけない】

龍のビーストスピリット形態。『蒼緑の巨龍兵』の異名を持つ。
サイズは2M〜40Mまで自在に変化できる（通常サイズは15M）
。ただし、大きいサイズは維持するのが難しく、25M以上になると、
約5分しか持続できない。
制限時間を越えると、強制的に通常サイズに戻り、出力は通常サイ
ズよりかなり落ちてしまう。
今回はフルサイズの40Mで登場。

「で、でかつ!？」

「な、何なんだいあの大きさは…!？」

ユーノとアルフが驚く。

「ふ、ふええー!?!？」

「す、すっごい大きさ…!?!」

なのはとフェイトも流石に驚いている。

まあ、目の前に急に40Mの物が出てくれば誰だって驚くだろう。

一方のアースラでも・・・

「な、なんだあのデカイのは!?!」

「あらまあ、随分おつきいわね」

「お、およそ40Mありますよ・・・!」

「おいおい・・・こりゃたまげたな」

クロノ・リンディ・エイミィも驚いている。

流石の孝昭も、あのビッグサイズにブツたまげている。

「この大きさは5分くらいしか持たん・・・早めに決めろぞ！」
「おっしや！行くぜ！」

ヴリトラモンとグリーンドラモンが竜巻に向かって行く。
ユーノとアルフは魔法の鎖を外し、離脱してそれぞれなのはとフ
エイトの近くにいる。

2人に向かって、ジュエルシードの竜巻が向かってくる。

「くらいやがれ！【ジェットナックル】！」
「行け！【コロナブラスター】！」

グリーンドラモンの両手からロケットパンチが撃ち出され、竜巻
を貫く。

ヴリトラモンはコロナブラスター（弾丸タイプ）で竜巻を押し返
す。

「時間は無い・・・休まずに行くぜ！【マグナムランチャー】！」

グリーンドラモンの体に装着されているランチャーから、エネル
ギー弾が次々に撃ち出されていく。

ブロスモンにもランチャーは付いているが、威力は3倍程違う。
エネルギー弾は竜巻に次々と命中し、竜巻の勢いを徐々に弱めて
行く。

「くらえ！フルパワーの・・・【フレイムストーム】だああっ！」

ヴリトラモンが通常よりも格段に大きな炎の竜巻を発射し、竜巻にぶつける。

水と炎という不利な相性があるが、互角に押し合っている。不利な相性が無ければ、間違いなく勝っていただろう。

「よし・・・暴風雨も弱くなってきた・・・もうひと押し、これで決まりだ！」

グリーンドラモンがランチャー砲にエネルギーを集める。

「これでどうだ！【フルバーストランチャー】！！！」

先程の【マグナムランチャー】よりも強力なエネルギー弾が高速で撃ち出され、竜巻を貫いていった。

貫かれる度に竜巻の威力は更に弱まり、フェイトが呼び出した時の半分くらいになっていた。

「2人とも！今だ！」

ヴリトラモンが空中にいるのはとフェイトに向かって叫ぶ。

「行くよ、フェイトちゃん！2人で【せーの】で一気に封印！！」

なのはが更に上に飛び、フェイトもそれに付いていく。

【Shooting mode】

レイジングハートをシューティングモードにし、発射態勢を作る。そして、雷をかわしながら更に上空高く飛んで行く。

ぶつかりそうになった雷は、ヴリトラモンが叩き落としてくれて

いた。

フェイトもまた、なのはの後から飛んで来ていた。

グリーンドラモンもヴリトラモンと同じく、フェイトに襲いかかる雷を防いでいる。

（一人ぼっちで寂しい時に一番して欲しかった事は・・・【大丈夫？】って聞いてもらう事でも、優しくしてもらう事でも無くて・・・）

魔法陣を展開して、その上に立つなのは。

フェイトもなのはの近くで空中に浮かんでいる。

【Sealing form・Set up】
バルディッシュがシーリングフォームにチェンジする。

「・・・ディバインバスター・フルパワー。行けるね？」

【All right my master】

「せーの・・・！」

空中に桜色と金色の巨大な魔法陣が展開される。

「サンダー・・・！」

「ディバイン・・・！」

閃光と雷光が強く煌めく。

そして・・・

「レイジー！」

「バスター！」

巨大な雷と桜色の巨大な閃光が一気にジュエルシードの竜巻に向かう。

そして・・・凄まじい爆発が起こり、ジュエルシードが6個一気

に封印されたのだった。

「ジュエルシード、6個すべての封印を確認しました！」

「な、なんてデタラメな……！」

「はぁ……でも、凄いわ……！」

エイミイもクロノも驚きを隠せなかった。

流石のリンディも、眼を見開いて驚いている。

「ははは……やってくれたよ。流石だな」

孝昭は笑みを浮かべ、モニターを見つめていた。

海上では……6個のジュエルシードが、なのはとフェイトの間に現れていた。

(……同じ気持ちを分け合える事。寂しい気持ちも、悲しい気持ちも半分こに出来る事……ああ、そうだ。やっと解った……私、この子と分け合いたいんだ)

「……友達に、なりたいんだ」

なのははフェイトを見つめて語りかける。

フェイトは、なのはの言葉に驚いた。

その頃、アースラでまたしても緊急のアラームが鳴り響いていた。

「次元干渉！？別次元から本艦および戦闘区域に向けて、魔力攻撃
来ます！あ、後6秒！」

「な！？」

そして・・・アースラに紫の雷撃が直撃、更になのは達のいる所
にも雷が落ちた！

「ま、まさか・・・ヴァンデモンの野郎・・・！！」

グリーンドラモンが上空を見上げて叫ぶ。

紫色の雷はプレシアの物。つまり、そのプレシアの体に乗っ取っ
ているヴァンデモンの仕業だと、孝俊にはすぐに解った。

「う・・・あああああああつ！！」

更に、フェイトに雷が直撃し、フェイトが海に向かって落下して
いく。

「フェイト！」

アルフがフェイトをキャッチし、更に上空にあるジュエルシールド
を回収しようとする。

だが、突如現れたクロノに阻まれる。

「邪魔・・・するなああああつ！！」

「うわあつ！！」

しかし、アルフはそのままクロノのデバイスを掴み、ぶん投げた。

「クロノ！」

グリトラモンが急降下し、クロノをキャッチする。

「す、すまない・・・拓也」

アルフは再びジュエルシードを見ると…3つしかなかった。
クロノが今の間に3つを回収したのだった。

「う…わああああああつ!!」

アルフが魔力弾を叩きつけ、水柱を上げる。

それを目くらましに利用し、逃走した…

「フェイト…アルフ…」

グリーンドラモンはスライドエポリユーションでヒューマン体の
ブロスモンになり、フェイトとアルフの逃げた方向を見つめていた。
・

今の間、呆然と突っ立っているだけだった自分に、苛立ちを覚え
て…

続く

第15話 仲間ってやっぱり大切な気がする 後編（後書き）

はい、第15話終了です。

再びフェイト達と再会できた孝俊ですが・・・黒幕の横槍で再び離れ離れに・・・

孝昭「とんでもねえ威力の雷だったな・・・」

孝俊「・・・フェイト達が心配だ」

拓也「俺達もこれからどうすりゃいいんだか・・・」

次回は・・・孝俊が自分の真実に近づく・・・？

予告を・・・土郎さん、よろしく。

土郎「なのはは大丈夫だろうか・・・」

次回、リリカルなのはフロンティア第16話【真実は意外な所で見つかる事もある気がする】。お楽しみに！」

番外第1回 今更だけどキャラ紹介はした方が良い気がする（前書き）

さて、16話に入る前にキャラ紹介をしようと思います。

複数回名前が出た人の紹介を・・・

注：多少ネタバレが入ってますので、ご注意ください。駄目な方は即刻Uターンして下さい。

孝俊「ホントに今更だな・・・」

孝昭「ま、やっといた方が良いのはホントだしな」

番外第1回 今更だけどキャラ紹介はした方が良い気がする

神原拓也 かんばらたくや 16歳 男 魔導資質無し

『成長し続ける炎の闘士』、『翠屋のイケメンアルバイター』

身長：175cm 体重：68kg

ご存知、デジモンフロンティアの主人公。今作の主人公の1人でもある。

5年前の冒険の時に身に付けていた帽子とゴーグルは今も身に付けている。

成長して、落ち着きも兼ね備えた炎の闘士。

偶然、海鳴の街に飛ばされ、ひよんな事からなのはと暮らす事になのはにはえらく懐かれているが、特に気にする素振りは見せない。

ユーノや恭也・士郎にはなのは関連で目の敵にされる事が多々ある。

また、戦闘力は非常に高く、なのは達を助ける為に奮戦する。

ボケ気味な孝俊と孝昭のツッコミも務める事がある。

統率力があり、現在では十闘士、特殊型スピリットを統括する総合的なリーダー。

味方からの信頼も厚く、味方のピンチには迷わず駆けつける。

サッカー部に所属しており、1年生ながらMF兼エースストライカーを務める。

好きな物（事・人）：サッカー、翠屋のケーキ
嫌いな物（事・人）：卑怯な奴、理数系の勉強

炎のスピリット：アグニモン（魔導師ランクAAA+相当） 必
殺技：バーニングサラマンダー

グリトラモン（魔導師ランクS相当） 必殺技：
コロナブラスター

おもはやしたかとし
面林孝俊 16歳 男 魔導資質有り（但し本人無自覚） 魔力

光：明るい緑

『心優しき龍戦士』、『台所の覇者』、『アンリミテッド・ダイ
ナモJr』

身長：176cm 体重：68kg

イメージCV：櫻井孝宏さん

今作オリジナルキャラクター。今作の主人公の1人で、中学に入
ってから拓也と知り合った。

その実態は、オファニモンが作り上げた特殊型スピリット完成体
No.1【龍】を持つ戦士。

拓也と共に海鳴市に飛ばされ、拓也と離れ離れになった後にフェ
イト達と出会う。

フェイトに好意を抱かれているが、気づいていない上に現在離れ
離れになっている。

少し心配性な部分があり、特に無茶しまくるフェイトを気にか

ている。

実は母親が時空管理局の裏側の連中によって作られた生体兵器【アンリミテッド・ダイナモ】。

孝俊の体の内部には、母から受け継いだ超膨大な魔力が宿っている。

魔力量はSS+に相当する・・・が、孝俊自身、魔力がある事にすら気付いてない上に、魔法の世界についてはまるで何も知らない。生まれた直後にオファニモンによって魔力を封印されている。

だが、現在は封印が弱まってきており、感情の激変などで封印が解ける恐れがある。

ちよつと解けかかった状態で魔力平均値255万という驚異的な数値を持つ。

某プロ野球選手を崇拜しており、『弱気は最大の敵』が座右の銘。孝俊自身も野球部に所属しており、投手を務めている。

戦闘や野球の腕を鈍らせない為に、早朝トレーニングや、空いた時間での筋トレを実行している。

また、料理が得意で、腕前はなのはの母・桃子に匹敵する程。

好きな物（事・人）：野球、家事（特に料理）、フェイト、アルフ、海産物、80〜90年代の音楽。

嫌いな物（事・人）：トマト（特にミニトマト）、命を弄ぶ奴

龍のスピリット：プロスモン（魔導師ランクAAA+相当） 必

殺技：プロスバーストブレイカー

グリーンドラモン（魔導師ランクS相当） 必

殺技：ドラゴンカノン

佐野孝昭 さのたかあき 14歳 男 魔導師ランクS+ 魔力光：赤

『地上本部の異端児』、『The ポケ男』、『爆炎の魔導師』

身長：166cm 体重：58kg

イメージCV：進藤尚美さん

今作オリジナルキャラクター。ミッドチルダ出身の魔導師。

時空管理局地上本部で、弱冠14歳ながら二等空佐の役職に就いている。

バリアジャケットは赤と銀の騎士服で、炎の模様が施されている。戦闘スタイルは特に決まっておらず、近距離から長距離までこなすオールラウンダー。

孝俊と意気投合し、早くも互いに親友と認めあう仲になった。

フェイトを心配する孝俊の行動を支持し、自らの危険も顧みずに行動する。

孝俊と一緒にポケる事が良くあり、拓也に突っ込まれるのがお約束。

好きな物（事・人）：お笑い、肉、仲間

嫌いな物（事・人）：ノリが悪い奴、根性の無い奴、イクラ

バーニングブロス 男性型インテリジェントデバイス 使用者：

佐野孝昭

性格：豪快な性格で江戸っ子口調。バトルを【喧嘩】と称する。

形態：スタンバイフォーム（待機状態。四角いオレンジの宝石）

デバイスフォーム（杖）

カリバーフォーム（剣。魔力を込めると、刀身が大きくなる）

バスターフォーム（レイジングハートのシューティングモードと似た形）

ブーストフォーム（籠手と靴。近接戦闘でよく使う）

?????（切り札）

技：インパクトシューター

（赤い魔力弾。破壊力はプレシアの傀儡兵の装甲すら爆破する威力）

マグナキャリバー

（カリバーフォーム専用。魔力を込めて大きくした剣で叩つ斬る）

デイバインブラスター

（主にバスターフォームで放つ魔力砲。破壊力はデイバインバスターの2倍）

ブラスターキック

（ブーストフォーム専用。魔力を片足に込め、敵に飛び蹴りをぶちかます）

破壊力はデイバインブラスターと同等）

高町なのは 9歳 女 魔導師ランク：AAA（推定） 魔力光：
桜色

『民間協力者』、『天性の砲撃手』

ご存知、『魔法少女リリカルなのは』の主人公。
ジュエルシードのモンスターに苦戦を強いられていたところを拓也に助けられる。

その縁があつてか、拓也を自分の家に迎え入れた。
拓也に懐いており、よくくつついて歩く。

拓也の事は、実の兄である恭也以上に慕っている。

【デイバインシューター】や【デイバインバスター】など、砲撃
主体の戦闘を行う。

また、防御力もあり、そのシールドはかなり強固。

フェイト・テストロッサ 9歳 女 魔導師ランク：AAA（推
定） 魔力光：金

『悲しき赤い瞳の少女』、『雷の魔導師』

ジュエルシードを集める金髪ツインテールの女の子。

アルフと共にデジモン軍団に襲われていた所を孝俊に助けられた。母・プレシアに造られた人造魔導師だが、フェイト自身はその事を知らない。

孝俊の早朝トレーニングを目撃した後、自ら進んでトレーニングを行っている。

【サンダースマッシャー】、【サンダーレイジ】など、雷系の魔法が得意。

孝俊と離れ離れになった後、アルフのアドバイスもあって、自分が孝俊に好意を抱いている事を自覚した。

孝俊の言う事は意外に素直に聞く。

おんりゆう

面林龍輔 34歳 男 魔導資質無し

『最強の剣龍』、『先代の龍闘士』、『ノンビリボケ親父』

身長：183cm 体重：73kg

イメージCV：子安武人さん

孝俊の親父で、特殊スピリット試作型No.1【龍】を持つ戦士。普段はとつてもものほんとして掴み所のない人物。

だが、その実力は拓也や孝俊も歯が立たない程で、特に剣術の腕前は他の追隨を許さない。

孝俊の剣術の師でもある。

11歳の時にミッドチルダに飛ばされ、そこでジェイル・スカリエッティと出会う。

そこで彼の懇願により、彼の妹でもある生体兵器【アンリミテッド・ダイナモ】の
ナツキ・スカリエツティを保護。

その7年後にナツキにプロポーズされ、結婚した。

好きな物（事・人）：剣術、奥さん、息子の料理
嫌いな物（事・人）：時空管理局（特に最高評議会）

おおまはやしなつき
面林夏紀 旧姓：ナツキ・スカリエツティ 32歳 女 魔導師
ランク：SSS+（推定） 魔力光：蒼

『アンリミテッド・ダイナモ』、『剣龍の嫁』、『先代の不死鳥』

身長：138cm 体重：37kg 3サイズ：86・54・82
イメージCV：かないみかさん

孝俊の母親で、特殊スピリット試作型No.2【朱雀】を持つ戦士。

その正体は、時空管理局最高評議会によって作られた生体兵器【アンリミテッド・ダイナモ】。

【アンリミテッド・デザイア】ことジェイル・スカリエツティの妹でもある。

魔力ランクはSSS+（ランクがここまでしかない為）だが、生体兵器としての教育は受けておらず、魔力も封印されている。

と言うのも、9歳の時（ミッドチルダ新暦0042年）に、偶然

やって来た龍輔により保護され、その後オファニモンによって魔力を封印された為。

だが、龍輔から戦闘技術や勉強を教わっている為、今でも孝俊より強い。

必死に勉強した甲斐あつてか、現在は医療機関で働いているらしい。

好きな物（事・人）：龍輔、兄、子供
嫌いな物（事・人）：時空管理局、弱い者イジメする奴

四谷高雄 よつやたかお 16歳 男 魔導資質無し

『剛龍の拳士』、『龍の相棒』、『デジヴァイスマイスター』

身長：174cm 体重：70kg

イメージCV：朴？美さん

孝俊の無二の親友でもあり、特殊型スピリットNo.5【剛龍】を持つ戦士。

デジヴァイスの精密点検が出来る希少な存在であり、それを一任されている。

その為、拓也と孝俊は、今回彼がいない事を悔やんでいる。
パワーは全スピリット中トップで、プロスモンやアグニモンが動かせない物でも動かせる程。

孝俊と共に野球部に所属し、捕手を務めている。

龍輔から孝俊の真相を聞くが、それでも孝俊への友情は1ミクロンも揺らがなかった。

ヴァンデモン 完全体 アンデッド型 ウィルス種
必殺技：ブラッディストリーム デッドスクリーム
得意技：ナイトレイド クラウドミニオン

今回の事件の黒幕。プレシアが起こしたとされる魔導実験の事故を引き起こした。

つまり、アリシアが亡くなったのもこいつの仕業である。

孝俊によって存在が明らかになるも、直後にプレシアの体に乗っ取ってしまった。

目的はジュエルシードらしい。

拓也やなのはを始末しようとする大量の傀儡兵を送り込み追い詰めるが、現れた孝昭によって形勢が逆転、全滅させられてしまう。

後にデジモンを送り込むが、今度は孝俊によって撃滅させられる。なのはとフェイトがジュエルシードの竜巻を沈めた後、横槍を入れてフェイトを傷つけるなど、孝俊の怒りを買う。

プレシア・テストロッサ 40歳 女 魔導師ランク：オーバー
S（推定） 魔力光：紫

優秀な魔導師であり、フェイトの母。

昔、魔導実験の事故で実子のアリシア・テストロッサを亡くし、その後【プロジェクトF】に参加。そのクローンでフェイトを作った。

遅々としたフェイトの行動を叱責し、フェイトに虐待を加えていた。

だが、そこに乱入して来た孝俊の体を張った説得と、黒幕のヴァンデモンの登場により、自らの過ちに気付いた。

しかし、直後にヴァンデモンに体に乗っ取られる。

乗っ取られる寸前に孝俊にフェイトを託した。

ジェイル・スカリエッティ 年齢不詳 男

時空管理局最高評議会によって生み出された人間。

コードネーム【アンリミテッド・デザイア】。

生体兵器【アンリミテッド・ダイナモ】こと、ナツキの兄でもある。

ナツキの教育係も務めていたが、彼女を生体兵器にする事に反発し、彼女と共に脱走を企てるも、失敗して投獄される。

だが、偶然やって来た龍輔に懇願し、彼にナツキを保護してもら

う事に成功した。

ナツキの分まで管理局の罪を背負っている、ある意味管理局の被害者。

龍輔にとっては義理の兄、孝俊にとっては叔父に当たる人物。

龍輔の事は【恩人】と崇め、非常に感謝している。

道具紹介

D - スキャナ 使用者（今作）：神原拓也、面林孝俊

デジモンに進化する為の道具。左手にデジコードを発生させ、それをスキャンすると進化できる。

ヒューマンスピリットとビーストスピリットがある。

また、それを融合したダブルスピリットが存在するが、人間界ではデジヴァイスに負荷が掛かる。

メンテナンス役の高雄がいないので、ダブルスピリットは無闇に使えない。

D・プレス 使用者（今作）：面林龍輔

先代の特殊型スピリットを扱う龍輔達が使う。

両手首に装着されており、右にヒューマン、左にビーストがある。0～9、ON、OFFのボタンがあり、特定のコマンドで様々な事が起こる。

龍輔の場合は、ヒューマンスピリットで進化するには右プレスの【2、6、3、ON】のボタンを押す。

昔は少々不安定だったが、現在は高雄のメンテナンスにより、かなり安定している。

・・・とりあえずこんなところでは、次回もお楽しみに～

続く

番外第1回 今更だけどキャラ紹介はした方が良い気がする(後書き)

キャラ紹介終了です。

話やキャラに対する質問、感想待ってます)

次回から本編に戻ります。

第16話 真実は意外な所で見つかる事もある気がする（前書き）

かなり遅れましたが、第16話です。

孝俊が自分の真実に気付く・・・！

そして、フェイトとアルフが敵陣に乗り込む・・・！

いよいよ無印編も後半・・・！

孝昭「第16話、始まるぞ！」

第16話 真実は意外な所で見つかる事もある気がする

第16話副題【真相】

フェイトとアルフが去った後・・・なのは、ユーノ、クロノ、拓也、孝俊は海上に佇んでいた。

「5人とも、戻って来て」

モニター越しにリンディが話す。

「・・・はい」

「しゃーねえ、一旦戻ろう。戻ってデジヴァイスのメンテもしなくちやいけねえし」

クロノが返事をし、拓也も同意する。

軽くだが、デジヴァイスのメンテナンスはしなければいけない。

そして・・・アースラ艦内にて。

孝昭が今回の事について、リンディと話し合っていた。

「・・・とりあえず、勝手な行動については謝ります。申し訳ありません」

「・・・すみませんでした・・・」

深々と頭を下げる孝昭。

現場での責任を自分が背負う・・・彼はそう言っていたのだ。

孝昭の後ろでは、なのは、ユーノ、拓也、孝俊が同じく頭を下げている。

「・・・まあ、私も許可しましたから、特に何も言うつもりはあり

ませんが・・・次からは出来るだけ控えてください」

「・・・はい」

「それに、許可しなくても・・・あなた達は強引に出たでしょうしね」

「・・・ですね」

そう言いながら孝昭は、出勤前の孝俊の表情を思い出していた。

全てを貫かんとする絶対零度の蒼い単色の瞳。

クロノですら、その恐怖から思わず立ち退いた禍々しい威圧感・・・

あのまま彼に感情のまま暴れられでもしたら・・・大変な事になっていただろう。

あそこで孝昭が責任を取る、と名乗り出たのは正しい選択だった。

「・・・さて、問題はこれからね。クロノ、事件の大元に付いて何か心当たりは？」

リンディは壁に寄りかかっていたクロノに話しかける。

「はい・・・エイミィ、モニターに出してくれ」

『はいはい』

スピーカーからエイミーの声が聞こえる。
エイミーの声の後、テーブルの中心に映像が映し出された。
映し出されたのは、プレシアだった。

「あら？」

「……………」

映像を見て、リンディは少し驚き、孝俊は無言で表情を険しくした。

「誰なんだ？」

拓也がクロノに尋ねる。

「僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師。プレシア・テストロッサだ」

映像を見ながらクロノが説明する。

「専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導師だったが、違法研究と事故によって放逐された人物です」

「……………」

孝俊は何も言わず、ただプレシアの映像を見ているだけだった。
だが、握っている拳が震えていた。

孝俊はこの中で唯一真相を知っている、
違法研究は良く解らないが…少なくとも事故はプレシアのせいではなく、卑怯にて卑劣なるデジモン…ヴァンデモンの仕業だと解っていたからだ。

その事故のせいで、幼い命が…アリシアが死んでしまっているのだから。

「登録データと、さっきの攻撃の魔力波動も一致しています。そし

て、あの少女・・・フェイトは恐らく・・・」

「この人がフェイトちゃんの・・・お母さん・・・」
クロノの言葉に、なのはが小さく呟く。

「エイミィ、プレシア女史について何か他に詳しい情報は無い？」

「・・・プレシア・テストロツサは、個人が開発していたエネルギー
「駆動炉」【ヒュウドラ】使用の際に、違法な材料を使用した実験を
行い、暴走して失敗。結果的に、中規模次元震を起こした事で中央
を追われ、地方へと異動になりました・・・」

エイミィが結果を詳しく話す。

そして、更に続ける。

「・・・随分と揉めたみたいです。失敗は結果に過ぎず、実験材料
には違法性は無かったと・・・辺境に異動後も、数年間は技術開発
に携わっていましたが・・・暫く後、行方不明になって・・・それっ
きりですね」

「家族と、行方不明になるまでの行動は？」

リンディが更に詳しい事情を聞こうとする。

「その辺のデータは、綺麗サツパリ抹消されちゃってます・・・今、
本局に問い合わせて調べてもらっていますので・・・」

「・・・一つ・・・まだ言っていない事があった」

「何ですか？」

ふと、孝俊が口を開く。

「そして・・・奴はプレシアの身体を乗っ取りやがったんだ・・・」
「な、何だと・・・!?」

孝俊の言葉に、クロノが信じられないと言った表情で反応する。

「あの時の雷はプレシアの物だが、発動させたのはその身体を乗っ取っているヴァンデモンだ」

「・・・デジモンが関わっていた・・・という事ですか」

「・・・そして、プレシアは奴の良い様に利用されてきた・・・て事だ」

孝俊が話を終える。

黒幕の存在を知った今、考え方を変えなければいけなくなったり
ンディ達。

「プレシア女史・・・もといデジモンもフェイトちゃんも、あれだけの魔力を放出した後では、そうそう動きは取れないでしょう・・・その間に、アースラのシールド強化もしないといけないし・・・」

リンディはしばらく考え込む。

そして、なのは達に顔を向けて口を開いた。

「ご苦労様。貴方達は一休みした方がいいわね」

「あ……でも……」

「特になのはさんは、あまり長く学校を休みつぱなしでも、良くないでしょう・・・一時帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せた方がいいわ」

リンディがなのはに微笑んで言う。

なのはは少し戸惑うが、リンディがなのはの身の周りの状況も考え、諭すように話した。

「そうだな。もう10日も家を離れちゃってるし・・・そろそろシス恭也コシさんと親バカ土郎さんが発狂しかねんしな」

「あ、そうですね・・・」

(拓也の奴、容赦ねえな・・・つーかなのはちゃん、シスコンと親馬鹿は否定しねーのか!?)

リンディと拓也の言葉に頷くのは。

その隣では、孝俊がシスコンと親馬鹿を否定しなかったなのはを見て苦笑いしていたのだった。

翌日・・・フェイトとアルフは、再び時の庭園に来ていた。

今は2人でプレシア・・・否、ヴァンデモンがいる部屋の扉の前にいた。

「・・・行こう、アルフ。母さんを・・・助けに」

「ああ・・・!」

(ごめんね、孝俊・・・もう1度・・・無茶するよ・・・)

フェイトは、心の中で孝俊に謝り・・・扉を開けた。

「・・・来たな」

プレシアの姿をしたヴァンデモンが2人を見る。

「・・・母さん・・・いえ、母さんの身体を乗っ取っているデジモン・・・!」

「!・・・ほう、私の事を知っていたか・・・」

ヴァンデモンは少し驚いた顔をするが、すぐに落ち着きを取り戻

す。

「母さんを……返して……！」

「良かるう……だが……私に勝てればだがなあっ！」

フェイトの言葉に、ヴァンデモンが手から雷を放った。

フェイトとアルフはそれぞれ左右に飛んでそれをかわす。

「ほう、なかなか素早いな……だが……昨日あれだけの魔力を使い……いつまで私相手に持つかな！」

雷を連射するヴァンデモン。

フェイトとアルフはひたすらそれをかわしていく。

魔力はあまり残っていない……その為、一撃を加えるワンチャンスを狙っていた。

「ええい、チヨロチヨロと……！」

ヴァンデモンが一際大きな雷を放ち、それをフェイトがかわして一気に前に出る。

「ここだ……！【サイズスラッシュ】！」

バルディッシュを振り下ろすフェイト。

だが、完璧に決まったと思われたその一振りは……ヴァンデモンが張ったバリアに弾かれてしまった。

「ぐうっ!？」

「ぬんっ！」

プレシア《ヴァンデモン》の手から赤く光る鞭が放たれ、フェイトを縛り上げた。

「あ……あああああああっ!!！」

鞭には電撃が通っていた。

その強烈な電圧に苦しむフェイト。

これがヴァンデモンの必殺技【ブラッディストリーム】である。

「フェイトオオオオオ！」

「犬は引っ込んでいろ」

突っ込んでくるアルフに手を向け・・・そこから渦を発射した。

「ぐ・・・うわああああああっ!!」

直撃を受けたアルフはもの見事に吹き飛ばされた。

今のは【クラウドミニオン】、ヴァンデモンの技の1つである。

ヴァンデモンは夜などの暗い空間では凄まじい力を発揮し、並の究極体なら倒す事も出来る程だ。

「目障りだな…貴様から先に消えてもらうか・・・」

フェイトを空中に縛り上げたまま放置し、アルフに近づくヴァンデモン。

そして・・・アルフに手を向けた。

「・・・っ！」

だが、アルフは咄嗟に魔法陣を展開した。

爆発が起こると同時に、アルフは時の庭園から落ちて行く。

(何処でも良い・・・転移しなきゃ・・・ごめんフェイト・・・少しだけ待ってて・・・!)

「あ・・・アルフ・・・つぐあああ！」

「・・・そうだ、このままではお前も死に切れまい・・・チャンスをやろう」

空中に吊るされ、電撃に苦しむフェイト。

そのフェイトを見て、ヴァンデモンが提案する。

「・・・時空管理局が持っているジュエルシードを奪え。最低でもあと5つ・・・それが出来れば・・・お前の母親の身体を返してやるろう・・・」

「……っ……わ、解った……」

フェイトには、最早その要求を飲むしかなかったのだった……

その頃、高町家では……

「……と、まあそんな感じの10日程でしたのよ」

「まあ、そうなんですか」

リンディと、なのはの母・桃子が、意気投合して楽しく談笑している。

「ははは……」

(リンディさん……見事な嘘で固めたストーリーだな……)

2人のその様子を見て、拓也と孝俊は苦笑いしていた。

ちなみに、孝俊も高町家で世話になる事となった。

孝俊1人だけアースラに残るというのも何だか可哀想だという拓也の提案だった。

今更1人2人増えても大丈夫だろう、という桃子の許諾を得て、今に至るのである。

ちなみに、剣術が得意だと言ったら、士郎と恭也が眼を輝かせていた。

「なのは、今日明日くらいはお家にいられるんでしょう？」

「うんっ」

「アリサもすずかちゃんも心配してたぞ？もう連絡はしたか？」

「うん、さっきメールを出しといた」

なのはと姉の美由希、兄の恭也が話している。
なのはは、アリスとすずかに先程連絡を入れたようだった。

数十分後、孝俊はなのはの部屋でノートパソコンを弄っていた。
デジヴアイスのメンテナンスの為に、アースラから借りて来たのだ。

「えーと……とりあえず目立った異常は無いな……」

「高雄がいれば小さな異常でも見つけられるが……俺達じゃ限界があるよな……」

「そうだな……ま、とりあえず俺がメンテしとくから、なのはちゃんと一緒にいなよ。あの子、どーもお前に懐いてるっばいし」

「おいおい、からかうなって……ま、そうするかね」

画面を見ながら孝俊と拓也が話している。

そして、孝俊にからかい半分に言われ、拓也は指で頬を掻きながら部屋を出た。

「さて……ん？なんだこりゃ？」

孝俊がふと見つけた管理局のデータファイルにアクセスしていくと……その奥底に1つのファイルがあった。

ファイルには、【JS】と書かれていた。

実はこのファイル……あのスカリエツティが23年前の事件を記したデータファイルだったのだ。

ファイルにはスカリエツティしか知らないパスワードが入っており、管理局では誰も開ける事が出来ない。

ヒントこそ付けてあるが、解る筈もなかった。

それもその筈、そのヒントとは……【23年前の剣を使いし機

龍の正体】だった。

ちなみに、パスワードのヒントは毎年変えているらしい。

「【剣を使いし機龍の正体】・・・？機龍・・・23年前・・・？」

孝俊にはうつすら解りかかっていた。

だが、なかなか答えが出てこない。

駄目元で、孝俊はとある人物の名前を打った。

「【面林龍輔】・・・と。実行・・・！」

すると・・・パスワードが一致したらしく、ファイルが開いた。

「開いた・・・！でも何で親父の名前が・・・？」

開いていくと……孝俊は仰天した。

そこに映し出された動画は・・・かつて自分の父・龍輔がミッドチルダで大量の魔導士・魔獣相手に戦っている姿だったのだ。

自分の両親の若い時の姿は、写真で見せてもらった事がある。

動画の下の文章には……こう書かれていた。

【私以外でこのファイルを開いたという事は、恐らくあの機龍の親密な関係者だろう。このファイルでは、かつて管理局が闇に葬った事件の真実を語る。

ジェイル・スカリエッティ】

そして・・・動画を見て、孝俊は知ってしまった。

母、ナツキが管理局に生み出された史上最強、最大級の生体兵器である事。

そして、父・龍輔によって助け出された事に。

更に、管理局の裏側の連中により、事件は闇に葬られ、父・龍輔を進化後の姿とはいえ、指名手配犯に仕立て上げられた事を。

自分は・・・半分は兵器の血が流れている事を・・・

凄まじい衝撃だった・・・これ程の重大な秘密を一気に知ってしまったのだから。

だが、ショックであると同時に、父親とスカリエッティに感謝と尊敬の念を抱いた。

父が母・ナツキを助け出していなければ、今頃罪の無い沢山の人々が命を奪われていたのかもしれないのだから。

管理局にとっては指名手配犯でも、自分から見れば凶悪な兵器を世に流出するのを防いだ、立派な親父である。

そして、その父が来るまで、母・ナツキを生体兵器にする事を拒み、一度は脱獄まで試みてくれたスカリエッティに感謝した。

スカリエッティは母の分まで罪を被ってくれている・・・それを思うと、やりきれなかった。

「憎むべきは・・・時空管理局の裏側・・・そして、最高評議会・・・か」

孝俊はボソリと呟いた・・・

すると、そこに再び拓也が入って来た。

「ん？・・・どうしたんだ？孝俊・・・」

「・・・拓也、聞いてくれ・・・」

孝俊は・・・今見た全てを、拓也に見せた。

そして・・・たった今知った、自分の真相を話した。

「……こりゃ驚いたな。まさか孝俊が……半分は生体兵器の血だったなんてよ……」

拓也も、顔を険しくしている。

彼もまた、非人道的な実験や研究を平気で行う時空管理局の裏側の連中に、激しい怒りを感じていた。

「リンディさんみたいな立派な人達ばかりじゃない……か」

孝俊が天井を見上げて呟く。

そんな孝俊を見て、拓也は静かにこう言った。

「でもよ、孝俊……俺はお前が何であろうと関係ねえ。例え人間だろうが兵器だろうが、今まで一緒に戦ってきた仲間じゃねえか。そしてこれからもな……」

「拓也……ありがとう」

孝俊は顔を俯かせ、拓也に礼を言った。

自分は本当に良い友達に巡り合えた……そう思うと、涙が出そうになった。

「だけど、この事はしばらく2人だけの秘密にしておきたい……今はヴァンデモンの野郎をブツ倒すのが先決だ……」

孝俊が顔を上げ、真面目な顔で話す。

「それもそうだけど……お前はそれで良いのか？」

「ああ。それに、今話してもリンディさん達が混乱するだけ……余計な混乱は避けたいし」

「……そうだな。ま、とりあえずはゆっくりしようぜ。ちなみにメンテは終わったのか？」

「ああ、なんとかな」

孝俊は拓也にD-スキャナを渡し、自分の分も手に取る。

そして、D・スキャナを強く握りしめ、必ずヴァンデモンを倒すと、心に誓うのだった。

その頃・・・アリサは秘書である鮫島に、車で家まで送ってもらった。

今は、携帯でなのはからのメールに返信をしていた。

「送信・・・っと」

メールを送信し、携帯を閉じる。

「アリサお嬢様、何か良いお知らせでも？」

「別に・・・普通のメールよ・・・！！鮫島、ちょっと止めて！」

そう言っただけを見ると、何かが見えた。

見えた瞬間、アリサは鮫島に車を止めるように言い、鮫島は道路の脇に車を止める。

そして、その【何か】の場所に行くところ...

「やっぱり、大型犬・・・」

「怪我をしていますな・・・かなり酷い様です」

そこには、大怪我をした狼モードのアルフがいたのだ。

プレシア（ヴァンデモン）にやられる寸前に転移し、今の場所に瀕死の状態で不時着したのだった。

「でも、まだ生きてる・・・鮫島！」

「心得ております」

鮫島はそう言っただけで、アルフに近づく。

（フェイト・・・！！）

アルフはフェイトの事を想いながら・・・そこで意識を手放した。

そして、数時間後：アルフが目覚ますと・・・目の前にアリサがいた。

「あ・・・目、覚めた？」

（あれ？このチビツ子、どっかで・・・）

「あんた、頑丈に出来てんだね。あんなに怪我してたのに、命に別状は無いつてさ・・・怪我が治るまでは、うちで面倒見てあげるからさ・・・安心していいよ」

アリサは、アルフの前にドッグフードを置き、アルフの頭を優しく撫でる。

普段は意地っ張りで素直じゃないアリサだが、誰も見て無い所ではとっても優しい女の子だったりする。

根はマジで良い子なのだ。

（ああ・・・あの子の、友達なんだ・・・）

アルフは、アリサと海鳴温泉で出会っていた事を思い出した。

「ほら、柔らかいドッグフードなんだけど、食べられる？」

アルフは、ゆっくりとドッグフードに顔を近づけ、食べ始めた。

「ふふ、そんなに食欲があるなら大丈夫だね・・・食べたらゆっくり休んで、早く元気になりなね」

（・・・ありがとう・・・）

アルフは、心の中でアリサに礼を言い、ドッグフードを食べ続けた。

そうして、夜は更けて行った・・・

翌朝、なのは達の小学校にて。

「なのはちゃん、良かった！元気で！」

「ありがとう、すずかちゃん！・・・アリサちゃんも、ごめんね。心配掛けて」

「まあ良かったわ、元気で・・・」

プイッとそつぽを向いて喋るアリサ。内心は嬉しいが、素直になれないのだ。

そんなアリサを見て、なのはとすずかは顔を見合わせて笑った。

「そつか、また行かないといけないんだ・・・」

「大変だね・・・」

「うん・・・でも、大丈夫！」

心配するアリサとすずか。

しかし、なのはは笑って大丈夫だと返す。

10日前の沈んだ表情ではなく、明るい笑顔だった

「放課後は？少しくらいなら、一緒に遊べる？」

「うん、大丈夫！」

「じゃあ、うちに来る？新しいゲームもあるし・・・」

「あ、本当？」

久しぶりに遊べるとあって、3人とも嬉しそうだった。

「そういえば、あのアルバイトの拓也さん、だっけ・・・あの人もしばらく見なかったけど・・・？」

「あ、うん・・・拓也さんも私の付き添いで一緒にいたから・・・でも、拓也さんも元気だよ」

かつて、自分達をデジモンの襲撃から守ってくれた拓也の事を思い出すアリサ。

何となくだが、気になったらしい。

「あ、そうだ・・・拓也さんが探してた友達が見つかって、今うちに住んでるの」

「へえ、そうなんだ・・・良かったじゃない。だったら、拓也さんとその人もうちに連れてくればいいわ。改めて挨拶したいし」

「うん、じゃあ拓也さん達に連絡するね」

どうやらまた拓也に会いたくなったらしく、適当な理由を付けてなのは提案するアリサ。

拓也が探してた友達・・・無論、孝俊の事である。

なのは休み時間を利用して拓也に電話をし、誘ってみた。

今日はバイトが休みだった為、拓也はそれを快諾。

孝俊も暇だった為、拓也と一緒に行く事にした。

「あ、そういえばね、昨日怪我してる犬を拾ったの
「犬？」

ふと、アリサが昨日の事を思い出す。

すずかはアリサに聞き返した。

「うん、凄い大型で、なんか毛並みがオレンジ色で、おでこにね、
こう・・・赤い宝石が付いてるの」

「あ・・・」

アリサの言葉に、なのはが反応した。

なのはは、今でアルフの事に気付いたようだった。

放課後・・・拓也と孝俊は、アリサの家の前にいた。

「「Oh・・・This is a big・・・」

あまりの屋敷の大きさに、思わず英語で驚いていた。
これ程でかい屋敷は、見た事が無いからだ。

「あ、いたいた！拓也さーん！孝俊さーん！」
向こうの方からなのは達が歩いてきた。

「初めまして、ここにいる拓也の友達で、今はなのはちゃんの家で世話になってる面林孝俊って言うんだ。よろしくね」

「あ、私は月村すずかです」

「あたしはアリサ・バニングスです・・・よろしくお願いします」
とりあえず初対面なので、敬語で挨拶するすずかとアリサ。

「んー、俺の苗字は呼びにくいし、拓也を名前で呼んでるみたいだから、俺も名前で呼んでくれればいいよ」

「はい・・・じゃあ、孝俊さんで」

孝俊の提案で、すずかはすぐに名前で呼んだ。

その後、アリサに案内され、なのは・すずか・ユーノ（フェレット状態）・拓也・孝俊は、アルフがいる場所へと案内された。

なのは達を見たアルフは・・・

（あ・・・孝俊・・・！）

即行で孝俊の方に視線が行ったのだった。

あの時は逃げてしまったが、今はゆっくりと目を合わせていられる。

（アルフ・・・！）

孝俊もまた、アルフを見つめていた。

2人（1人と1匹？）は無言のまま、ただ見つめあっただけだった。

・
・

続
く

第16話 真実は意外な所で見つかる事もある気がする（後書き）

はい、第16話終了です。

孝俊が両親の過去を知り、自分の真実に気付きました。

彼がこれから自分の持つ力とどう向き合っていくか・・・ある意味1つの重点です。

次回、何故か孝俊の剣術が唸る・・・!?

では、次回予告・・・アリサちゃん、よろしく。

アリサ「え、あ、あたし!?え、えーつと・・・」

次回、リリカルなのはフロンティア第17話【強い奴と毎日戦^やりあつてりや嫌でも強くなる気がする】、お楽しみに!」

第17話 強い奴と毎日戦りあってりや嫌でも強くなる気がする(前書き)

はい、第17話・・・そろそろ無印編も終盤に差し掛かろうとしています。

孝俊「さーて、今回はどうなるかな」

今回は、後書きコーナーにゲストが登場！ 最後まで読んでみてください！

拓也「じゃあ、始めるぞ！」

拓也・孝俊『第17話、スタートだ！』

第17話 強い奴と毎日戦りあってりや嫌でも強くなる気がする

第17話副題【剣戟、そして開幕】

アリサ宅の庭で、アルフと再会した孝俊。
何も言わず、無言で見つめ合っているだけだった。

(やっぱり、アルフさん……)

(……アンタか?)

なのはが念話でアルフに語りかける。

(その怪我、どうしたんですか? ……それに、フェイトちゃんは
……?)

(……)

アルフは黙ってしまい、後ろを向く。

「あらら、元気無くなっちゃった……どした? 大丈夫?」

「傷が痛むのかも……そつととしてあげようか」

「うん……」

アリサが声をかけ、すずかはアルフの容体を気遣っている。

なのはもすずかの意見に同意し、3人が立ち上がる。

すると、すずかに抱かれていたフェレットモードのユーノが檻の
前に移動する。

「あ、こらユーノ! 危ないぞ?」

「大丈夫だよ、ユーノ君は」

止めようとするアリサを、なのはが笑顔で制止する。

(・・・アルフ・・・聞こえるか?)

(え・・・孝俊、アンタ・・・念話が使えるようになったのかい!?)

ふと、アルフの頭の中に孝俊の声が流れ込んで来た。

実は孝俊は、エイミィから自分に魔力が計測された事を知らされた。

もっとも、詳しい数値までは聞けなかったが。

(どうやら俺にも少し魔力があるみたいだな・・・念話だけ教えてもらったんだ)

そこで、リンディに頼んで念話の仕方を教えてもらったのだった。流石に、異常な魔力生産能力を持つ【アンリミテッド・ダイナモ】の息子だけあり、飲み込みは凄まじく早かった。

ちなみに、【アンリミテッド・ダイナモ】についての詳しい事は、この時点では孝俊しか知らない。

(なのは、彼女からは僕と孝俊で話を聞いておくから・・・なのはは、アリサちゃん達と)

(・・・うん)

「・・・もうちょいこの犬、見ても良いかな?」

「え、あ、はい・・・別にかまいませんけど・・・」

孝俊がアリサに頼み、もう少しアルフの様子を見ると言う事にした。

「拓也、なのはちゃん達に付いててあげてくれ」

「ん、解った」

拓也はなのは達と家の中に入る事に。

拓也には魔力が無いので念話は使えないが、大体孝俊が何を考えているのかは見当がつく。

「それじゃあお茶にしない？美味しいお茶菓子があるの！」

「うん！」

「あ、そーいやこれ・・・孝俊が作ったらしいから、これも食ってみるかい？」

拓也は、ポケットから大きめの包みを出す。

中には・・・孝俊お手製のクッキーが入っていた。

「え、これって孝俊さんが作ったんですか？」

「あいつ、特技が剣術と野球と料理だから・・・料理の腕前なら桃子さんに匹敵するみたいだし」

「うっ、それ聞いたら猛烈に美味しそうな気が・・・」

さすがの質問に答える拓也。

拓也の言葉を聞いた瞬間、アリサの目がちよつと輝いた。

(・・・一体何があったんだ？なんでフェイトとは・・・離れてるんだ？)

(君達の間で、一体何が・・・？)

拓也達を見送った後、孝俊とユーノは念話でアルフに問いかける。

(・・・アンタ達がここにいて言う事は、管理局の連中も見るんだろっね・・・)

(・・・うん)

アルフは後ろを向いたまま話す。
アルフの思った通り、アースラ艦内ではクロノ達はその様子を見ていた。

「時空管理局、クロノ・ハラオウンだ。どうも事情が深そうだ・・・正直に話してくれば、悪い様にはしない。君の事も、君の主・・・フェイト・テストロッサの事も」

（話すよ・・・全部。だけど約束して、フェイトを助けるって・・・！）

（・・・今更水臭いじゃねーか。当たり前だろ？）

アルフの懇願に、孝俊が答える。

（最初に・・・孝俊、ごめんよ・・・アタシとフェイトで、無茶を承知でプレシアの身体を乗っ取ったデジモンに挑んだんだ・・・！）

（・・・そうか・・・それでそんな事に・・・）

アルフは再び無茶した事を孝俊に謝った。

孝俊はその言葉で、今の状況を理解した。

（あのデジモン・・・ヴァンデモンとか言っただけか・・・とにかく強いんだ・・・）

（ヴァンデモンは完全体だが・・・暗い空間では究極体レベルの力を発揮するからな。そこいらの完全体とは格が違う）

万全では無かったとはいえ、自分とフェイトが2人がかりでも歯が立たなかったヴァンデモン。

プレシアの力を使っただとしても、あれは強すぎる。

（フェイトは・・・多分あいつに捕まっちゃってる・・・今頃どうなってるか・・・アタシにも解らないんだ・・・）

(なのは・・・聞いたかい?)

(うん・・・全部聞いた)

なのはは、アリサの家の廊下で念話を聞いていた。

(君の話と、現場の状況、孝俊の証言、そして彼女の・・・使い魔アルフの証言と現状を見るに、この話に嘘や矛盾は無いみたいだ)
(どうなるのかな・・・?)

「・・・そのデジモン、ヴァンデモンを倒し、プレシア・テストロツサとフェイト・テストロツサを救出する」
クロノが少し考えた後、なのはに伝える。
すると、念話に孝俊が入って来た。

(なのはちゃん、ちよつと良いかな?)

(あ、はい・・・なんですか?)

(ヴァンデモンの目的はジュエルシード・・・それさえ手に入れば、プレシアは解放されるだろう。ただ、今はそれを手に入れる為に奴はフェイトを利用してくるはずだ)

ヴァンデモンの目的を伝える孝俊。

そして、フェイトがどう絡んでくるか・・・予想した。

(・・・恐らく、近いうちにフェイトはジュエルシードを賭けて挑んでくる。今までに無いぐらい全開で・・・そうなったら、君はどうする?)

(私は・・・私は、フェイトちゃんを助けたい!)

孝俊の問いかけに、なのはは力強く答える。

(アルフさんの想いと、私の意思・・・フェイトちゃんの悲しい顔は、私も何だか悲しいの・・・だから助けてたいの・・・それに、友達になりたいって伝えた・・・その返事もまだ聞いてないしね)

(そうか・・・なら、フェイトの事は・・・頼んだ。俺じゃあ多分、フェイト相手に本気で戦えねえ・・・)

大切な家族・・・仲間・・・だからこそ助けたいが、自分では心の何処かでブレーキをかけてしまっただろう。

心の底から本気で戦って打ち勝てるのは・・・恐らくなのはだけ・・・孝俊はそう考えた。

「そうか・・・なら、フェイト・テストロッサについては、なのはに任せる・・・それで良いか？」

(うん・・・孝俊もそう言ってるから、アタシも異存は無いよ・・・)

クロノの言葉に頷き、返事をするアルフ。

アルフも考えは孝俊と同じだった。

(なのは・・・だっけ。頼めた義理じゃないけど・・・だけど、お願い・・・フェイトを助けて・・・あの子、今ホントに一人ぼっちなんだよ・・・)

(うん、大丈夫・・・任せて・・・！)

なのはは念話でそう言った後、アリサ達のいる部屋の扉を開けた。

「遅いよなのは！」

「ほら、新しいダンジョンに入るの待ってたんだよ」

「あははは・・・ごめんごめん！」

なのは、アリサ、すずかは楽しそうにゲームをしている。

(いつか、この3人の中に・・・フェイトって子が入る日が来たら良いな・・・)

そんな事を想いながら・・・拓也は微笑んで3人を見ていた。

(・・・アルフ、フェイトとプレシアは絶対に助け出す。そして・・・ヴァンデモンの野郎もブツ倒す)
(ああ・・・頼んだよ・・・孝俊)

孝俊は、いまだにアルフと念話で話していた。

アルフは、出来るなら人間モードになって孝俊に抱きつきたいところだが、何処で誰が見てるか解らないので我慢する。

(・・・さて、そろそろ拓也の所に行くとするかね。あまり待たせるのも悪いからな)

(そうしなよ、アタシはこの淫獣フェレットと話してるからさ)
(ちよっと!?!?何で君がその呼び方知ってる訳!?!?)

何故かアルフに淫獣と呼ばれ、驚きを隠せないユーノ。そんなユーノを尻目に、孝俊は屋敷の中へ入って行く。ちなみに、部屋まではアリサの秘書の鮫島に案内してもらった。

「お、やっと来たな?」

「わりーな、ちよつと長引いた」

部屋に入って来た孝俊を、拓也が笑って出迎える。

なのは、アリサ、すずかも孝俊を見ている。

「そう言えば……孝俊さんも拓也さんみたいにデジモンになれるんですか?」

ふと、すずかが孝俊に尋ねた。

「え、なんでその事を・・・?」

孝俊は突然の質問に目を丸くして驚く。

「あー、前になのはちゃん達の小学校にデジモンが現れてな・・・
たまたま居合わせた俺が戦ったんだよ」

拓也は前になのはの忘れ物を届けに、聖祥大付属小学校を訪れている。

その際に、メガドラモン・メタルティラノモンの襲撃を受けたなのは達を助ける為に進化したのである。

「そうだったのか・・・まあ、俺も進化は出来るよ」

「そうなんですかー」

孝俊を含めた5人で談笑する。

ちなみに、孝俊が作って来たクッキーはアリサ達がきっちり頂いていたりする。

「へえー、拓也さんはサッカーが得意なんだ！」

「まあな、ガキの頃からやってるからな」

「孝俊さんは野球を？」

「まあ、昔から大好きだったからね。中学までは基礎体力を付ける為に別のスポーツをしてたけど」

アリサは拓也と、すずかは孝俊とそれぞれ話している。

ちなみになのはは、拓也の隣に座って話を聞いている。

余談だが、孝俊は幼少の頃は体が弱く、毎年の様に風邪やインフルエンザにかかっていた程である。

しかし、中学に入った辺りを境に病気が1つしなくなった。

そんなこんなで、楽しい時間はあっという間に過ぎて行った。

「ああ・・・なかなか燃えたわー！」

「やっぱりなのはちゃんがいいた方が楽しいよ！」

なのは、アリサ、すずかの3人はテーブルを囲んでジュースを飲んでいた。

拓也と孝俊は、近くの壁に寄りかかっている。

「ありがとう・・・多分、もうすぐ全部終わるから・・・そしたら、もう大丈夫だから」

なのははそう言っつてジュースを飲む。

「なのは・・・なんか、少し吹っ切れた？」

「え？あ、えつと・・・どうだろう・・・」

アリサの言葉に、少々困惑するなのは。

前ほどの迷いは無くなったとしても、完全に吹っ切れたとは言い難い。

「心配してた・・・てか、あたしが怒ってたのはさ、なのはが隠し事をしてる事でも、考え事してる事でもなくて・・・なのはが不安そうだったり、迷ったりしてた事・・・」

アリサは少し辛そうな表情をしている。

なのはとすずかは、アリサの方を見て話を聞いている。

拓也と孝俊も、外を見ながら話を聞いていた。

アリサは更に続ける。

「それで時々、そのままもうあたし達の所へ帰って来ないんじゃないかなって思っつちゃうような目をする事・・・」

そう言われて、なのははアリサを見つめる。

すずかはジュースを飲みながらなのはとアリサを見ていた。

「・・・行かないよ、何処にも」

そう言っつて、なのはが立ち上がる。

「友達だもん、何処にも行かないよ!」

「そっか・・・」

「うん・・・」

なのはの言葉を聞いて、少し安心したアリサとすずかだった。

そして・・・なのは、ユ一ノ、拓也、孝俊は高町家に戻って行った。

その日の夜……なのはは自宅の道場にいた。

ふと、拓也と孝俊が道場に入って来る。

「前と比べて良い顔になったな・・・迷いは消えたのか?」

拓也がなのはに話しかける。

「はい・・・私、全力でフェイトちゃんにぶつかろうって、決めましたから」

なのはは真っ直ぐに拓也を見つめる。

「なのはちゃん・・・解ってると思うけど、フェイトはマジで強いぞ」

「うん・・・でも、大丈夫です!」

孝俊の言葉にも、力強く返す。

その眼からは、完全に迷いが消えていた。

「次は俺達は一切手は出さねえ。なのはちゃんとフェイトの1vs1のタイマン勝負だ」

「はい！」

数分後・・・道場に恭也がやってきた。

「孝俊君、ここにいたのか・・・ちよつといいかい？」

「え、なんですか？」

どうやら孝俊に用事があるらしい恭也・・・

「・・・俺と手合わせしてくれないか？」

「・・・What？」

恭也の言葉に、思わず英語で返す孝俊。

孝俊は、こういう所まで親父とそっくりである。

「君の実力が知りたくなってね・・・」

「・・・良いですよ」

孝俊は真面目な顔付きになり、恭也を見る。

その手には・・・何処から出したのか、木刀が握られていた。

「だ、大丈夫かな・・・孝俊さん・・・」

なのはが心配そうな顔をして孝俊を見ている。

兄・恭也は剣士としては既に一流のレベルだ。

そこいらの奴が束になっても勝てる訳は無いだろっ。

「・・・ま、孝俊なら大丈夫だろ。あいつも剣を使わせりゃ一流だ。うちの高校の剣道部から誘いが来たくらいだしな。たまに助っ人になり出されてるし」

拓也は、案外落ち着いていた。孝俊の剣の腕前は嫌という程知っているからだ。

恭也の剣術も（シスコンモードだったとはいえ）受けた事があるので、何となくわかる。

孝俊は、幼少の頃より父・龍輔から剣術を学んでいる。

孝俊曰く、【気が付いたらもう木刀握ってた】だそうである。

父・龍輔が孝俊に初めて買い与えた物が・・・木刀だったとか。

「・・・・・・・・」

互に見つめ合い、距離を取っている孝俊と恭也。が、次の瞬間に2人が動き・・・

ガギイイイン！

木刀を打ち合う音が響いていた。

動いたタイミングも剣を振るタイミングも殆ど同時だった。

（流石に強い・・・まだうちの親父には及ばねーが、この人も剣士として一流だ・・・！）
アホオヤジ

（くっ・・・我流だがまるで隙が無い・・・！これでまだ16歳だとは・・・これは油断すれば父さんでも足元をすくわれかねないぞ！？）

互いに相手に驚きながらも、木刀を構える2人。

しかし、すぐに恭也が動いた。

「はああ！」

ガギン！ギイン！ブウン！ブオオン！ガギン！

目にも止まらぬ速さで孝俊に連撃を浴びせる恭也・・・
だが、孝俊はそれに次々と反応・・・かわしたり、かわせないと判断した物は木刀で防ぐ。

「おいおい・・・2人とも凄いな・・・ところどころ見えねーぞ・・・」

拓也は苦笑しながら孝俊と恭也の戦いを見ていた。

「ふええ・・・」

なのはも冷や汗を流しながら、2人の打ち合いを見ている。
ふと、そこに美由希が入って来た。

「ちよ、ええ！？なんなのこの光景！？」

兄・恭也とまともに打ち合っている孝俊に、驚きを隠せない美由希。

恭也とまともに打ち合える人間など、父・土郎以外に見た事が無いからだ。

「あ、お姉ちゃん・・・実はお兄ちゃんが孝俊さんに挑んでこんな事に・・・」

なのはが簡単に今までの経緯を話した。

「まさか恭ちゃんとここまで渡り合える人がお父さん以外にいたな

んてね……」

未だに信じられないと言った表情の美由希。

「孝俊の親父さんも化物みたいに強いからなあ……孝俊はそんなのとほぼ毎日やり合ってたんだから……」

3人が話してる間にも、孝俊と恭也は打ち合いを続けていた。だが、次の瞬間……恭也が凄まじい速さで突きを繰り出す！

「御神流・『射抜』！」

御神流の技の1つ、『射抜』だった。

凄まじい速さで敵に突きを繰り出す刺突技である。

その『射抜』が孝俊に迫る！
だが……

ガゴオン！

なんと、孝俊は木刀で『射抜』を受け止めていた。

「嘘！？恭ちゃんの『射抜』を受け止めた！？下手すりゃ木刀ごと吹っ飛ばされる威力なのに……！」

それを真っ向から受け止めた事に対し、美由希が驚きの声を上げる。

だが、これは想定範囲内だったらしく、恭也は表情を変えずに孝俊から離れる。

「流石にやるな……なら……！」

(・・・・・・次は更にでかいのが来る・・・・！)

孝俊は表情を崩さず、真っ直ぐに恭也を見ている。
そして、集中力を高めて行く。

「御神流・・・・『雑旋』！」

高速で恭也が放った4連の斬撃が孝俊に襲いかかった。
だが、今度は孝俊も動いた。

「我流・・・・『乱れ旋風』！！！」

ガギイン！ガギイン！ガギイン！ガギイン！

孝俊も恭也と同じく高速で4発の斬撃を放ち、恭也の『雑旋』を
迎撃した！

「何！？4つとも・・・・真っ向から防いだ・・・・！？」
流石の恭也も、4つ全て防がれたのには驚いた。

すると・・・・孝俊が恭也と距離を取り・・・・居合の構えを取る。
それを見た恭也も・・・・孝俊から距離を取り、集中する。
「行くぞ！」

恭也が動き・・・・自身最大の奥義を放つ！

「御神流奥義之極・・・・・・『閃』！！！」

すると・・・恭也が接近した瞬間、孝俊が居合の構えを解いて恭也の横をすり抜け、木刀を振り抜いた。

「我流奥義・・・『疾風』！」

数秒の静寂が流れた瞬間・・・恭也が膝をついた。
見ると、服の左脇腹部分が破れていた・・・もつとも、ジャストミートはしていない。

孝俊が咄嗟に『疾風』を浅く入れたからだ。

「ふう・・・いや、流石だね。想像以上だったよ」

「いえ、油断してたらこつちがやられてましたよ・・・恭也さん、かなり強いです」

ずっと集中力を高めていた為か、孝俊はかなりくたびれていた。
一瞬でも気を抜けば、間違はなく一本取られていただろう。
2人は笑い合って握手を交わした。

数十分後、なのはの部屋にて。

「孝俊さん、ホントに強いんですね!」

「な、言つたる？孝俊なら大丈夫だつて」
なのはは興奮冷めやらぬ顔で、拓也に話しかけていた。
孝俊は拓也と向かい合つて胡坐あぐらをかいて座っている。

「……デジモンの力にばかり頼る訳に行かないからね。自分自身でも、出来るだけ強くならなと……つて思ったからさ」

孝俊は静かにそう語った。

デジモンの力ばかりに依存しては、自分自身はいつまで経つても強くなれない。

「そうだな……それに、自分自身の強さがあつてこそ、スピリットは力を発揮できるんだからな」

拓也も孝俊に同意する。

「そうなんだあ……」

なのはは目を輝かせて、2人を見ていた。

兄を真つ向から打ち破つた孝俊……そして、その孝俊より強いという拓也……

自分の想像が及ばない程の強さを持った人物が、自分の味方でいてくれる……それだけで心強さを感じた。

「……そろそろ……動くのか？」

「……うん」

拓也の質問に、なのははゆっくり頷いた。

数日の内に、フェイトと本気マジで闘やり合つつもりらしい。

「じゃ、俺はそろそろ寝るわ」

「あ、はい、おやすみなさい！」

孝俊は立ち上がつて部屋を出て行った。

「んじゃ、俺もそろそろ……」
拓也も立ち上がるうとする。

「あ、あの……拓也さん……！」
「んあ？」

急に呼ばれて、少し間抜けな声を出してしまう拓也。

「えっと……その……一緒に……寝ませんか……／＼／？」
「……は？」

なのはの予想だにしなかつた言葉に、一瞬フリーズした拓也。
ちなみに、前に恭也に襲撃フルボッコされた恐怖の記憶がフラッシュバックしてたりする。

「えっと……ダメ……ですか……／＼？」
上目使いで拓也を見つめているなのは。

（はあ……しょうがねえな……なんだかんだで、今度の事が不安なんだろうな……）

「しょうがねえな、良いぜ」
拓也は微笑んでなのはに言った。

「あ、ありがとうございます……／＼／」
そんなこんなで、拓也となのはは一緒に寝たのであった。
もつとも、なのははベッドで、拓也は床で寝たのだが。

3日後……AM5:27。

なのは、ユーノ、拓也、孝俊は家の門の前に立っていた。
ちなみに、孝俊は相変わらず5:00から早朝トレーニングをやっていたりする。

「っしや、行くか！」

「はい！」

4人は一斉に走り出す。

目指すは・・・海鳴臨海公園である。

向かう途中で、アルフも合流した。

海鳴臨海公園・・・AM5:55。

海を眺め、なのは・ユーノ・孝俊・拓也・アルフが立っている。

「ここなら・・・良いね。出てきて・・・フェイトちゃん！」

なのはが口を開き・・・しばらく静寂が流れる。

風が吹き、近くの木々がざわめく。

【Scythe form】

ふと、バルディッシュの声が聞こえた。

5人が振り返ると・・・電灯の上に、フェイトがサイズフォームのバルディッシュを持って立っていた。

「・・・フェイト・・・」

「・・・孝俊・・・」

2人は見つめ合い・・・互いに名前を呟く。

「・・・今回は、お前となのはの1vs1だ。拓也も、ユーノも、アルフも、そして俺も・・・一切手は出さん」

「・・・解った」

孝俊が口を開き、フェイトに話しかける。

フェイトも、小さく頷いた。恐らく、フェイトもそのつもりだったのだろう。

それを見たなのはは、バリアジャケットを装着し、レイジングハートを持った。

「ただ捨てればいいってわけじゃないよね？」

レイジングハートを構えて、なのはが言う。

「逃げればいいってわけじゃ、もつとない」

そう言っつて、真っ直ぐフェイトを見る。

「きっかけは、きつとジュエルシード……だから賭けよう。お互いが持つてる全部のジュエルシードを！」

【Put out】

なのはの周囲に、ジュエルシードが現れる。

【Put out】

フェイトの周囲にも、同じくジュエルシードが現れる。

「それからだよ。全部それから」

なのはがレイジングハートを構える。

フェイトもバルディッシュを構える。

「私達の全てはまだ始まってすらいない……」

「だから、本当の自分を始めるために……始めよう。最初で最後の本気の勝負！」

「なのは……」「フェイト……」

拓也と孝俊が、それぞれなのはとフェイトに話しかける。

2人は拓也と孝俊の方を向く。

「お前達の全て、この戦いで残さず、一気にぶつけるんだ！」

拓也と孝俊、同時に同じ言葉を言い放った。
「はい!」「うん……!」

遂に……全力勝負が幕を開ける!

続く

第17話 強い奴と毎日戦りあってりや嫌でも強くなる気がする(後書き)

はい、第17話終了です。

次回、遂に2人の決着がつき、ヴァンデモン黒幕が動き出す・・・かも？

孝昭「おーい、今回も客が来てんぞ」

おっと、今回はこの後書きコーナーに、灰色の野良猫先生の【魔法少年の物語】から、ソラ・フォード君が来てくれました。

ソラ「どうも、こんにちは！」

孝俊「やあ、この間はそちらに出してくれてありがとうな」

ソラ「いえいえ」

孝俊「で、どうだった？今回の話は」

ソラ「孝俊さん、生身でも結構強いんですね。恭也さんに勝つなんて・・・」

孝俊「自分自身が強くならなないと、スピリットも力を引き出せないしね」

ソラ「お父さんが剣の師らしいですね？」

孝俊「悔しいが、俺はまだあの親父の足元にも及ばないからね」ポケオヤジ

ソラ「で、遂になのはさんとフェイトさんが全力勝負ですか」

孝俊「原作に沿ってるけど・・・でもちよつとだけ変わる部分もあるかもな。読んでからの楽しみだが」

ソラ「楽しみですね」

孝俊「ま、うちの作者ごときの力量じゃたかが知れてるけどね」

鷹「ちよ、それ酷くねえ!?!」

孝俊「事実だろうが」

鷹「うつ・・・」

孝俊「ソラ君は今、A・S編で闇の書・・・もとい、夜天の書と対決中だったな」

ソラ「はい、流石に手強いですけど・・・なんとしても勝って見せます!」

孝俊「ま、ソラ君なら大丈夫だろ。応援してるから、頑張ってな!」

ソラ「はい!あ・・・そろそろ時間ですね」

孝俊「もうそんな時間か・・・」

鷹「じゃあ土産を・・・」

孝俊「おまえはやらんでいい、どうせカープグッズだろうが(顔面

に蹴り)」

鷹「ごぼっ!?! な、なぜ解った……」

孝俊「ったく……まあ、今日はバレンティンって事で……うちの母^ナ親^{ソクキ}からソラ君にチョコレートだ。あと、俺からはブロスモンの時に使っている剣……【重龍牙^{じゅうりゅうが}】のレプリカを」

鷹「チョコレートは解るが、なんで剣のレプリカ?」

孝俊「なんなら、うちの作者で試し斬りするか?」

鷹「待て待て待て! 普通に死ぬから!」

孝俊「いつそ死ぬ。つーか可愛い子に斬られるなら多少は楽だろ」

鷹「なわけあるかああああ! (逃走)」

ソラ「まあ、ありがたく頂いておきますね」

孝俊「んじゃ、ついでに次回予告お願いできるかい?」

ソラ「はい! では……次回、リリカルなのはフロンティア第18話【やっぱ全開で戦った方が勝っても負けても後悔しない気がする】お楽しみに!」

第18話 やっぱ全開で戦った方が勝っても負けても後悔しない気がする(前書

はい、間が空きましたが18話目です。

なのはvsフェイトの本気の勝負！

あと、ちょっとアンケートを取りたいと思います。

詳しくは後書きにて・・・

エイミー「第18話、始まるよ！」

第18話 やっぱ全開で戦った方が勝っても負けても後悔しない気がする

G I C B A T T L E】

第18話副題【G I R L · S M A

お互いを見つめ合う2人・・・互いに出方を窺うかがっている。

「・・・どうなると思う？」

「・・・俺にも解らんよ・・・」

拓也が隣にいる孝俊に話しかける。

孝俊は首を横に小さく振り、対峙しているのはとフェイトを見ている。

「個人の感情としては、フェイトに勝ってもらいてえさ・・・だが、そうなりやヴァンデモンの思うがまま・・・結果を重視するならばちゃんに勝ってもらわなきゃいけねえ・・・複雑だよ」

「・・・ま、そーだわな」

自身の胸の内にある複雑な思いを打ち明ける孝俊。

それを聞いた拓也は仕方ない、とばかりに小さく溜息を吐いた。

その頃、アースラでは・・・

「戦闘開始みたいだね」

エイミィが、なのはとフェイトの戦いの様子をモニターで見ている。隣にはクロノも立っている。

「ああ」

クロノは、チラチラと何かを見ている。

視線の先には……ぴよこんと立っているエイミイの頭のアホ毛があつたりする。

「しかし、ちよっと珍しいよね。クロノ君がこういうギャンブルを許可するなんて」

「まあ、なのはが勝つに越した事は無いけど……あの2人の勝負自体は、どちらに転んでもあんまり関係は無いからね」

エイミイは物珍しそうにクロノを見ながら言う。

何に關してもセオリー通りに手堅く行くタイプのクロノが、こう言う一か八かの勝負に出たのは本当に珍しいのだ。

クロノは、何故かポケットから整髪剤を出して、それを振りながら答える。

「なのはちゃんが、戦闘で時間を稼いでくれる内に、あの子の帰還先追跡の準備をしておく……ってね！」

そう、クロノとエイミイは、ただ戦いの様子を見守っているだけではなかった。

なのはがフェイトとの戦闘で時間を稼いでる内に、帰還先追跡をしておくという作戦だったのである。

「頼りにしてるんだからね……逃がさないでよ」

整髪剤をエイミイのアホ毛に振りかけ、ブラシで撫でつけながら言うクロノ。

「おう、任せとけ！（ぴよこん）……あら？」

「あ……」

エイミイが、親指を立てて返事をした。

……と同時に、再びアホ毛がぴよこんと飛び出てしまったのだ。た。

「・・・でも、あの事・・・なのはちゃんや拓也君達に伝えなくて良いの・・・？」

エイミーが自分の髪の毛を整えながらクロノに尋ねた。

「プレシア・テストロツサの家族と、あの事故の事・・・」

「・・・勝つてくれるのに越した事は無いんだ。今は、なのはを迷わせたくない」

クロノは、そう言って再びモニターを見つめるのだった。

上空で、激しくぶつかり合うのはとフェイト。

【Photon Lanceer】

フェイトの前に複数の金色の魔力弾が現れる。

【Divine Shooter】

なのはも、複数の桜色の魔力弾を出す。

「ファイア!!」

「シュート!!」

金色の魔力弾と桜色の魔力弾が、同時に発射される。

なのはは、上下左右に飛んで金色の魔力弾をかわしていく。

フェイトは、追跡してくる桜色の魔力弾を障壁で防ぐ。

「・・・っ!？」

だが、フェイトが気が付いた時には、なのはは既に次の攻撃体勢に入っていた。

砲撃に関しては、なのはの方が上手のようだ。

「シユート!!」

再び桜色の魔力弾を、フェイトに向かって放つ。

【Scythe Form】

フェイトはバルディッシュを鎌の形に変形させ、自身に迫る桜色の魔力弾を切り裂く。

そして、最後の一発をかわし、そのままの勢いでなのはに迫って行く。

「・・・っ!？」

【Round Shield】

なのはは咄嗟に【ラウンドシールド】を展開し、フェイトの攻撃を迎え撃つ。

激突し、魔力波が辺りに飛び散る。

今度は、フェイトの後ろから魔力弾が飛んでくる。

フェイトが避けた一発の魔力弾を、なのはが誘導したのだ。

「くっ!」

フェイトは咄嗟に魔法陣を展開して、魔力弾を防ぐ。

だが、前に向き直った時には、既になのはの姿は無かった。

【Flash Move】

「せええええええいっ!」

レイジングハートの声がすると同時に、フェイトの真上からなのはが強襲をかける。

フェイトは咄嗟にそれを受け止める。

すると・・・その衝撃で再び魔力波が弾け飛んだ。

【Scythe Slash】

今度はなのはの上からフェイトが斬りかかる。
なのはは間一髪でかわすが、目の前には金色の魔力弾が4発待ちかまえていた。

【Fire】

「・・・くうっ！」

咄嗟にシールドを展開して全て防ぐのは。

一進一退の攻防・・・どちらも譲らなかった。

「うおっ・・・！こりやすげえなおい・・・！」

「こいつぁ、どっちに転ぶかマジで解んねえぞ・・・」

戦況を見守る拓也と孝俊。

2人の繰り出す戦闘技術の数々に、驚きを隠せなかった。

「・・・そーいや思ったんだが、なのはちゃん、いつもトリボンの色が違ったな？なんか赤かったけど」

「ああ、この前俺がプレゼントしたんだよ」

孝俊がふと思いで言った。

なのはは今回、前に拓也にプレゼントされた、【全力全開・乾坤一擲】と書かれたリボンを付けて勝負に臨んでいた。

（負けない・・・！フェイトちゃんを・・・そして、フェイトちゃんのお母さんを助ける為にも・・・！）

なのはは真っ直ぐフェイトを見据えている。

（全力全開で・・・フェイトちゃんと闘う！）

肩で息をしながらも、拓也の物にも似た闘志をその眼に宿し、決

意を新たにする。

その頃、再びアースラでは・・・

「次元干渉！未確認物体・・・恐らくデジモンが数体、戦闘区域に入ってきます！」

「何！？」

エイミイがモニターを見て叫ぶ。

そう、ヴァンデモンが戦闘で疲弊しているのはを狙ってデジモンを送り込んだのだった！

（孝俊！デジモンが数体程その戦闘区域に向かっていている！至急応戦してくれ！）

（何！？ヴァンデモンの野郎め・・・狙ってきやがったか・・・解った！）

クロノが念話で孝俊に急いで通信する。

孝俊はすぐに了承し、戦闘態勢に入る。

「拓也！クロノからの念話だ。ヴァンデモンの野郎がなのはちゃんを狙ってデジモンを送り込んできやがった！」

「何！？あんにやろう、1vs1の勝負に横槍入れる気が！そうはさせねえ！」

2人はデジヴァイスを構える。

「アタシも手伝うよ！」

「僕も手伝う！あの2人の邪魔はさせない！」

アルフとユーノが人間モードになる。

「スピリットエボリューション！！！！」

左手に浮かぶデジコードをスキャンし、進化する拓也と孝俊。

「ヴリトラモン！」

「グリーンドラモン！」

ビーストスピリットで進化し、すぐさま空を飛ぶ。

見てみると、確かに後方からデジモンと思しき物体が飛んで来ている。

「ここで食い止めるぞ！あの2人の邪魔だけは絶対にさせるな！」
空中でヴリトラモンが叫ぶ。

「おう！」

「勿論さ！」

「うん！」

グリーンドラモン、アルフ、ユーノが頷き、デジモン達を迎撃する態勢に入る。

「ここは通さねえ！【フレイムストーム】！」

ヴリトラモンが炎の竜巻で撃墜すれば・・・

「くらえ！【マグナムランチャー】！」

グリーンドラモンはエネルギー弾を連射して敵を止める。

「よし、捕まえた！今だよ！」

「あいよっ！【フォトンランサー】！」

ユーノがチェインバインドで敵を捕まえ、そこを狙ってアルフが魔法弾で撃墜する。

1匹たりとも、この4人の壁を抜く事は出来なかった。

その間にも、なのはとフェイトは壮絶なバトルを続けていた。

桜色と金色の魔力弾が乱れ飛び、それをかわし、防ぎ、デバイス同士で打ち合い、衝撃が起きる。

双方一步も譲らず、一進一退の攻防が続いていた・・・

（・・・初めて会った時は、魔力が強いだけの素人だったのに・・・）
肩で息をしながら、なのはを見つめているフェイト。

（もう違う・・・迷ってたら・・・やられる！）

フェイトはバルディッシュを両手で強く握る。

すると、フェイトの足元に巨大な魔法陣が展開された！

「な、なんだありや!？」

「フェイト・・・大技を出す気か!」

デジモン軍団を全滅させ、再び地上に降りた拓也と孝俊は、フェイトの様子に驚く。

その間にも、なのはの周りに無数の魔法陣が展開されては消えていく。

【Phalanx Shift】

バルディッシュの音が響くと、フェイトの周りにはかなりの数の魔力弾が現れる。

それを見たなのははレイジングハートを構えようとするが・・・

「あっ!！」

なのはの両手両足を、金色の魔法陣が拘束した。

「・・・ライトニングバインド」

フェイトが小さく呟く。

「まずい！フェイトは本気で……！」

「なのは、今サポートを！」

アルフが焦って叫び、ユーノがサポートに入ろうとする。
だが……

「……やめる」

拓也が2人を制止する。

「これはあの2人の全力全開の一騎打ちだ……邪魔しちゃいけない」

「で、でも……フェイトのあの魔法は本気でまずいんだよ!？」

拓也の言葉に食い下がるアルフ。

だが、今度は孝俊が口を開いた。

「アルフ……拓也の言う通りだ。それに……本心じゃ拓也が一番なのはちゃんを助きたい筈だ」

「あ……」

ふと見ると、拓也の拳が震えていた。

拓也は出来るなら、すぐにでもあの場に飛び込んで行きたかったのだ。

(拓也さん・・・孝俊さん・・・ありがとう・・・！私は・・・平気だから！)

拘束されたまま、なのははフェイトを見ていた。

「アルカス・クルタス・エイギアス・・・疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかけ・・・」

その間にも、フェイトは呪文の詠唱を続ける。

どうやらこの魔法は発動に時間がかかるらしい。

だからなのはを【ライトニングバインド】で拘束し、時間を稼いでいたのだ。

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル・・・フォトンランサー・ファランクスシフト！」

呪文の詠唱を終えたフェイトは、手を空に掲げ、バインドで拘束されてるのはを睨みつけ・・・

「撃ち碎け、ファイアー！」

フェイトが手をなのはに向けて振り下ろす。

それを合図に、無数の魔力弾がなのはに襲い掛かった。

無数の魔力弾がなのはに降り注ぎ、爆発する。

「なのは！」

「フェイト！」

ユーノとアルフが叫ぶ。

拓也と孝俊は、無言で見つめていた。

フェイトは、残った魔力を集めて魔力弾を作っている。

煙が晴れると……そこには殆ど無傷のなのがいた！

「おいおい……あれに耐えきったってか？」

「こりゃ驚いたな……」

拓也と孝俊は、冷や汗を流している。

あれは間違いなくフェイトの切り札的な魔法だったはずである。

「……おそらく、障壁を張ってたんだろうな。レイジングハートが光ってるし」

孝俊はなのはの様子を見て言う。

「ぶはあく……撃ち終わると、バインドって言うのも消えちゃうんだね……」

なのはは一息つき……レイジングハートを構える。

「今度はこつちの……」

【Divine……】

「……番だよ！」

【Buster!】

「……はあっ……!」

なのはが【デイバインバスター】を放つ。

フェイトは魔力弾を放つが、あっさりと掻き消されてしまう。

「……つく！」

それを見たフェイトは咄嗟にシールドを展開し、デイバインバスターを防ごうとする。

（直撃……でも、耐え切る……あの子だって、耐えたんだから……!）

必死にシールドを張って耐えるフェイト。

フェイトのシールドの強度はそれ程高くはない。

それでも・・・【負けたくない】、その気持ちでフェイトを突き動かしていた。

だが、あまりの衝撃にフェイトのバリアジャケットが所々破れていく。

それでも・・・フェイトはデイバインバスターに耐え切った！

「フェイト・・・！」

アルフはフェイトを見つめている。

だが、これで終わりでは無かった。

フェイトの上から、桜色の光が見えた。

「あれは・・・！なのはちゃん、切り札を使うのか！」

「切り札？」

「ああ、今回の為に切り札を用意したって言うってたんだ・・・【デ

イバインバスター】を超える威力の・・・なのはちゃんの切り札！」

拓也は、事前になのはから聞いていた。

デイバインバスターを超える切り札を・・・

「受けてみて・・・デイバインバスターのバリエーション！」

なのはがレイジングハートを構える。

そして、なのはの前に桜色の魔法陣が展開される！

【Starlight Breaker】

レイジングハートの声が響くと、周囲から魔力が集まってくる。

今回の戦いで、周囲に散らばった魔力を集め、集束しているので

ある。

「・・・っ!? バインド!?!」

フェイトは逃れようとするが、バインドで捕えられる。

「これが私の全力全開!」

「なのはちゃんの切り札・・・その名は・・・」

「スターライトブレイカー!?!」

偶然だが、なのはと拓也の声が重なり合っていた。

レイジングハートから、デイバインバスター以上の極大な砲撃が放たれる!

フェイトは、なす術もなく砲撃に飲み込まれた・・・

「な・・・なんつーバカ魔力!」

「うっわ・・・フェイトちゃん、生きてるかなあ?」

アースラでは、クロノとエイミイがモニターを見て驚いていた。

やがて砲撃が終わり、レイジングハートから蒸気が噴き出す。

なのはは肩で息をしており、殆どの魔力を使い果たしたようだ。

フェイトは・・・バルディッシュを手放し、海に落下していった。

「勝負有り・・・だ！」

孝俊が飛び出し、ブロスモンに進化して海に飛び込む。

「孝俊！・・・あの状態で海に飛び込んで大丈夫なのかい？」

アルフが拓也に尋ねる。

「ああ、ブロスモンの体は金属じゃなくて特殊鉱物だからな。海に入っても錆びたりはしねーさ」

そう、ブロスモンの体はデジタルワールドの特殊物質で出来ている為、平気なのだ。

海の中に沈んでいくフェイトを抱き上げ、海上へ浮かんでいくブロスモン。

バルディッシュもしっかりと握っている。

「んっ・・・」

「気が付いたか？」

「あ・・・孝俊・・・」

目を覚ますフェイト。

ブロスモンは空中でフェイトをお姫様抱っこして佇んでいる。

「良く頑張ったな。どっちが勝ってもおかしくは無かった」

「でも・・・負けちゃった・・・」

「精いっぱい戦ったんだ。落ち込む事は無いぜ、な？」

「・・・うん」

落ち込むフェイトの頭を撫でるブロスモン。

フェイトは少し嬉しそうな顔をしていた。

「飛べるか？」

「うん」

フェイトはブロスモンから離れる。

なんとか飛べるくらいには回復したようだ。

「フェイトちゃん…ごめんね、大丈夫…?」

なのはが2人の元にやってくる。

「うん…」

「私の勝ち…だよ…?」

「そう…みたいだね…」

【Put out】

バルディッシュがジュエルシードを出す。

「よし、なのは、ジュエルシードを確保してそれから彼女を…」

「いや、来た!」

「え!?!」

クロノが指示を出そうとしたところに、エイミイが叫ぶ。

すると、空が暗くなり、紫の雷がフェイトに向かって降り注いだ!

「フェイトちゃん!?!」

「フェイト!」

なのはと孝俊が叫ぶ。

「…っ、ぐうう…ああっ!」

凄まじい威力にバルディッシュは破壊されて強制的に待機状態に戻ってしまう。

そして、ジュエルシードは黒い雲の中に消えて行った…

「ヴァンデモンの野郎…!」

ブロスモンは拳を血が出そうなほど強く握りしめる。

そして・・・感情に任せ、吠えた・・・
「許さねえ・・・許さねえぞおおおおおっ！！！！！」

孝俊の怒りの雄叫びが海上に響き渡ったのだった・・・

続く

第18話 やっぱ全開で戦った方が勝っても負けても後悔しない気がする(後書

はい、第18話終了です。

孝俊「最大の山場が終わったか・・・あとはヴァンデモンの野郎をぶっ潰す！」

拓也「次は俺達の出番かね・・・」

さて、前書きで述べたアンケートですが・・・

【この小説(第1章)にOPテーマを付けるならどの曲にするか？】

・・・と、言う事で選択肢を。

? innocent starter (魔法少女リリカルなのは
OPテーマ)

? Fire!! (デジモンフロンティアOPテーマ)

? Butter-FLY (デジモンアドベンチャーOPテーマ)

デジモンシリーズの始まりの曲でもある為、エントリー

・・・以上3つです。

回答は感想と一緒にに入れて頂ければOKです。

締め切りは次回の投稿まで(大体1週間以内)です。

孝俊「しかし、回答者がいるかどうかすら疑問なんだが(汗)」
鷹「言うな。それに駄目元だし」

では、次回予告・・・すずかちゃん、よろしく。

すずか「あ、はい。緊張しますが、頑張ります。

では・・・次回、リリカルなのはフロンティア第19話【人は怒り出したら簡単には止まらない気がする】お楽しみに！」

第19話 人は怒り出したら簡単には止まれない気がする（前書き）

はい、第19話です。

意外に早く更新出来たので、アンケートの締め切りを次回の投稿まで延長します。

今回は、意外な奴が登場・・・今後のキーマンになるかも・・・？

クロノ「第19話・・・始まるぞ！」

第19話 人は怒り出したら簡単には止まれない気がする

第19話副題【パラレルモン】

アースラ艦内にて

「ビンゴ！尻尾掴んだ！」

エイミィがヴァンデモンの居所を掴んだらしく、コンピューターを動かしていた。

「よし！不用意な物質転送が命取りだ。座標を・・・」

「もう割り出して送ってるよ！」

既に座標を特定したエイミィ。

彼女も相当コンピューターに強い。

そんな彼女ですら殆ど解析できないデジヴァイスって一体・・・

(汗)

「武装局員、転送ポートから出動！任務はデジタルモンスター・ヴァンデモンの身柄確保です！」

リンディの指令と共に、武装隊が時の庭園に向けて転送される。

ちなみに、統率役として孝昭もいる。

時の庭園では・・・

「・・・ふん、あのフェイトとかいう小娘も使えんな・・・それよりも、あのなのとは言う小娘・・・まさかあのような切り札を隠し持っていたとは・・・」

ヴァンデモンは苦虫を噛み潰したような顔をして、地上の光景を見ていた。

「……そろそろこの女の体も必要あるまい……そろそろ、潮時か」

ヴァンデモンが吐き捨てると同時に、武装隊が時の庭園に到着していた……

再びアースラ艦内……

なのは・ユード・アルフ・拓也・孝俊がフェイトを連れて戻って来ていた。

当初、局員がフェイトに拘束具を付けようとしていたが……拓也と孝俊に脅されて止めた。

その内容と言うのが……

「おい、何しようとしてやがる、【サラマンダーブレイク】で股間蹴り上げんぞコラ」

「その頭、【閃光斬】でスコーンと割って脳味噌をストローでチューチューすんぞゴルア」

その言葉に男性局員（＋ユーノ・クロノ）は股間を押さえて震え、女性局員となのはとアルフは頭を押さえていた。

リンデイとエイミイも想像してちよつと悪寒がしたらしい。

おまけに、孝俊はまだヴァンデモンに対する怒りが収まっておらず、余計に言葉に迫力があつた。

「お疲れ様」

リンデイが拓也達に声をかけ、それからフェイトに顔を向けた。

「フェイトさん？初めまして」

フェイトは、待機状態のバルディッシュを握って顔を俯かせる。

（母親が身体を乗っ取られてるとはいえ、それが逮捕されるシーンを見せるのは忍びないわ・・・なのはさん、彼女を何処か別の部屋へ）

（あ、はい・・・）

リンデイは念話でなのはに言う。

なのはも同じ様に感じたのか、返事をする。

「フェイトちゃん、良かったら私の部屋・・・」

だが、なのはが言いかけた所で、武装隊からの連絡が入った。

「総員、玉座の間に進入。目標を発見！」

どうやら、武装局員がプレシアのいる部屋に突入したようである。

「プレシア・テストロッサ・・・いや、デジタルモンスター・ヴァンデモン。時空管理法違反及び管理局管制への攻撃容疑で逮捕します！」

「武装を解除するんだ！」

だが、プレシアは玉座に座って微動だにしないどころか、武装隊の音が聞こえない様だった。

「ちよつと待て・・・」

「孝昭二佐!？」

不審に思った孝昭が局員を制止し、バーニングブロスを構える。

局員の1人が驚くと同時に、孝昭が魔法弾を発射した。

魔法弾はプレシアの近くで着弾して爆発するが、プレシアは反応しない。

「・・・ヴァンデモンめ、プレシアの体から抜けて何処かに隠れやがったか。この辺りを搜索するぞ!」

『はっ!』

ヴァンデモンは既にプレシアの体を捨てて何処かに隠れてしまったらしい。

孝昭は武装隊に指令を出す。

「おい、大丈夫か?しつかりしろ!」

「・・・う・・・」

武装隊が時の庭園内を搜索している間に、孝昭はプレシアに呼びかける。

孝昭の呼びかけに目を覚ますプレシア。

「ヴァンデモンは・・・何処へ行った?」

「私にも解らない・・・急に私の体を抜けて・・・ジュエルシールドを持って、何処かに消えた・・・」

身体を乗っ取られている間の記憶は無いらしく、プレシアにも解らなかった。

プレシアは言い終わると、再び気を失った。

武装隊は玉座の後ろに回り、隠し通路を発見していた。

それをアーストラのモニターで見ていた孝俊が焦りの声を上げた。
「やばい！そこは……！」

だが、時既に遅し……武装隊が、遂にアレを見つけてしまった。

「えっ!!?」

なのはが驚き、孝俊以外のメンバーも絶句してしまふ。

そこにはガラス張りのケースの中、緑色の液体の中を漂うアリシアが映し出されていたからだ。

「……！！！」

フェイトも信じられないと言った表情で、モニターを見ている。

「お、おいおい……展開が急過ぎて付いて行けねえぞ……た、孝俊……どういふ事なんだ……？」

拓也も冷や汗を流して目を見開き、孝俊に尋ねる。

だが、孝俊は顔を俯かせたまま何も答えなかった。

局員がアリシアの亡骸が入ったケースに近づいた次の瞬間……

「ぐわあああ!!！」

いきなりケースの前に現れたヴァンデモンに弾き飛ばされた。

「う、撃てえ！」

武装隊がデバイスを構え、一斉に砲撃を放つ。

だが……ヴァンデモンはバリアを張り、容易に防いでしまふ。

「ふん……バリアを張るまでもなかったか……？」

薄ら笑いを浮かべ、手にエネルギーを溜めるヴァンデモン。

「まずい！防御しろ！」

後方から、プレシアの肩を支えている孝昭の声が響く。

「うるさい虫けらが……【クラウドミニオン】！」

『ぐわあああああ!!！』

だが、それもむなしくヴァンデモンの【クラウドミニオン】が武

装隊を蹴散らしてしまった。

後ろにいる孝昭とプレシアにも飛んでくるが、孝昭はプレシアを後ろに回し、シールドを張って防御した。

「いけない！ 同員達の送還を！」

「りよ、了解です！」

リンディの指示を受けたエイミィは、同員達をアースラに転送する準備を行う。

プレシアは、孝昭が自分の転移魔法で転送した。

孝昭は転送が終わるまでの時間稼ぎの為、ヴァンデモンと対峙していた。

「貴様はそこらのザコとは少し違うようだな……」

「そりゃどーも。もっとも、こっちはテメーの相手してる暇は無いんだが……な！」

嫌味っぽく言うヴァンデモンに対し、孝昭も皮肉っぽく返す。

直後、孝昭がヴァンデモンの周りに魔法弾を数発発射する。

「むっ……！ 攪乱か！」

魔法弾が着弾して煙が立ち込め、それを払おうとするヴァンデモン。

その間に、孝昭は周りを見渡す。

（あのアリシアとかいう子が入っているポッドは奴の後ろ……流石に回収は不可能か……ってあれ？）

考えながら辺りを見回していると、壁際で何やら震えている物体を見つける。

孝昭はその物体に近付く。

「おい、何やってんだお前？」

「ひ、ひいいい……」

その物体は・・・明らかに人間ではなかった。
しかも、何やら怯えているようだ。

「あー、まあいいや。とりあえず話は後だ、一緒に来い！ここは危険だ」

孝昭はその物体を連れ、転送魔法でアースラに戻って行った。
その直後、ヴァンデモンが煙をようやく払い終えたのだった・・・

「アリ……シア？」

フェイトは、モニターに映る自分と瓜二つアリシアの少女を見つめた。

「座標固定、0120-503！」

エイミーが転送の準備を終え、武装隊をアースラに転送した。
それとほぼ同時に、孝昭に転送されたプレシアが送られてきた。

「プレシア！？」

「母さん……！」

転送ポートの中で倒れているプレシア。

「大分衰弱してんな・・・気も失ってるみてーだ……」

拓也がプレシアを見て言う。

少し遅れて、孝昭が入って来た。先程保護した【何か】を連れて
いる。

その【何か】を見て・・・拓也が声を上げた。

「あーーーーーっ！！て、てめえは・・・パラレルモン
！？」

「こ、こいつが・・・パラレルモン！？」

拓也の叫びに、孝俊も驚く。

そう、孝昭が保護したのはパラレルモンだったのだ。
そのパラレルモンはガタガタと震えているのだが。

「そ、それにしても・・・随分震えてんな・・・」
「ひいいい・・・お、オラ・・・ヴァンデモンに無理やりこの世界に連れて来られて働かされてただよ・・・」

何故か言葉が訛ってるパラレルモン。

どうやら、ヴァンデモンに無理やりこの世界に連れて来られたらしい。

「そんで・・・ヴァンデモンに命令されて、オラ 능력であんたらをこの世界に連れ込んだ・・・」

「そうか・・・ヒューマンスピリットの技の衝撃で時空の歪みが出るのはおかしいと思ってたが・・・」

「これなら合点が行くな」

そう、パラレルモンが拓也と孝俊をこの世界に送り込んだのだった。

「ただ・・・ホントならあんたらみたいな主力レベルは後にする予定だった・・・でも、位置特定を間違えて、あんたらを先に吸いこんじまっただよ・・・」

なんと、本当なら拓也みたいな主戦力は後回しにする予定だったらしいのだが、ちょっとしたミスで先に連れて来られたらしい。

拓也と孝俊にとってはなんとも迷惑な話である。

「いや、それは良いんだけどよ・・・おまえ、仮にも究極体だろ？完全体のヴァンデモンを怖がるって・・・」

「お、オラ・・・昔から気が弱くてよお・・・成熟期のデジモンにも苛められてただよ・・・」

拓也が困った顔でパラレルモンに話しかける。

パラレルモンは従来、冷徹で凶悪な性格とされている。
しかし、このパラレルモンはどうも変わっているらしく、臆病で
大人しい性格らしい。

成熟期のデジモンにすら苛められるという、同情すら覚えそうな
奴だった。

人情派の孝昭に至っては、涙が出そうになっていた・・・

「・・・ふん、見ているのだろうか？時空管理局よ・・・」

アリシアの亡骸が入ったケースの横にいるヴァンデモンが、モニ
ター越しに話しかけてくる。

「そこにフェイトとかいう小娘もいるのだろうか・・・折角だから
良い事を教えてやろう・・・」

ヴァンデモンはニヤリと笑って、語り始めた。

「そこにいるフェイトはな・・・このアリシアのクローンだったの
さ・・・！」

『・・・！！！！』

孝俊以外の全員が驚愕する。

ヴァンデモンは更に続ける。

「ククク・・・出来損ないの人形とは良く言ったものだ・・・プレ
シアが苛立つのも無理は無かったのかもなあ・・・？」

邪悪な笑みを浮かべているヴァンデモン。

フェイトは俯いたまま、何も喋らなかった。

「・・・最初の事故の時にね・・・プレシアは実の娘・・・【アリ
シア・テストロッサ】を亡くしているの・・・」

エイミーが顔を俯かせ、暗い雰囲気で語る。

「・・・彼女が最後に行っていた研究は、使い魔とは異なる・・・
使い魔を超える、人造生命の生成・・・そして、死者蘇生の秘術・・・」

「「えっ・・・」」

アルフとユーノが目を見開いて驚く。

孝俊は顔を険しくしており、拓也は無表情でエイミーの話の聞いている。

「【フェイト】って名前は、当時彼女の研究に付けられた、開発コードなの・・・！」

「ふん、良く調べたな・・・そう、その通りだ」

ヴァンデモンは再び話を続ける。

「だが、ちつとも上手くは行かなかったのさ・・・作り物の命は所詮作り物・・・失った物の代わりにはならないのだから・・・」
相変わらず不快感を煽りそうな笑みを浮かべるヴァンデモン。

「フェイト・・・貴様は結局はこのアリシアの偽物に過ぎなかったという事さ・・・！」

「・・・やめて・・・」

ヴァンデモンの言葉に、なのはが呟く。

「アリシアの記憶を移しても、貴様じゃ駄目だった・・・」

「やめて・・・やめてよ・・・！」

なのはの悲痛な叫びを無視し、ヴァンデモンは更に続ける。

「プレシアにとっては、貴様はこのアリシアが蘇るまでの慰みに使

う人形だったのさ……」

「お願い……もうやめて！」

なのはは必死に叫び続ける。

隣ではフェイトが涙を浮かべている。

後ろでは……拓也と孝俊が拳を震わせていた。

「最後に良い事を教えてやろう……プレシアはな……お前を生み出してからずっとお前の事が……大嫌いだったのさ!!」

「……!!」

フェイトは最後の言葉に衝撃を覚え、その場に両膝をついてしまい……待機状態のバルディッシュを落とした。

「フェイトちゃん！」

「フェイト……!!」

なのはとユーノがフェイトを支える。

「本当なら貴様は……生まれて来る事が無かった筈だ……」

「「黙れ」「」

ヴァンデモンが言い終わる前に、拓也と孝俊が口を開いた

「てめーがフエイトの事をとやかく言うんじゃないねえ」

「この世に生まれてきてはいけない命などありはしねえ・・・！」

孝俊、拓也が怒りの形相で語る。

特に、孝俊の言葉には妙な説得力が感じられる。

それもその筈。孝俊の母親・ナツキも、生体兵器として作られた命だからだ。

それでも、ナツキは龍輔に助けられ、今は幸せそうに生きている。そして、プレシアの本心も聞いた。【間違いに気付いた】、と・

だからこそ、デタラメを吐くヴァンデモンを許せなかった。

「てめーだけは絶対に許さねえ・・・原型も留めねえぐれーにボコボコにして、デジタルワールドに送り返してやる・・・！」

拓也の顔は、これ以上見た事が無い程怒りに満ちていた。

5年前、ケルビモン（悪）に向けた物よりも、ルーチェモンに向けた物よりも・・・怒っていた。

「ふん、流石に5年前にデジタルワールドを救ったという英雄・・・威圧感だけはなかなかだな・・・」

ヴァンデモンは表情を崩さずに言う。

「まあ、今更何をしようと無駄だ・・・これから私が何をするか・・・指をくわえて見てるがいい・・・」

「・・・孝俊・・・アンタは全部・・・知ってたのかい・・・？」

アルフは声を震わせて孝俊に尋ねる。

「・・・ああ」

孝俊は顔を俯かせたまま、小さく呟く。

「なんで・・・何で教えてくれなかったのさ・・・こんな大事な事を・・・！」

アルフは孝俊の胸ぐらを掴み、叫んだ。

「・・・すまん」

「謝るくらいなら・・・どうして・・・！」

アルフが拳を握りしめ、孝俊を殴ろうとする。

だが、拓也が制止する。

「止めるアルフ。孝俊だって・・・辛かったはずだろ・・・！」

「・・・そう・・・だよね・・・ゴメン・・・」

アルフはゆっくりと拳を下ろす。

「・・・局員の回収、終了しました」

クルーの1人が武装隊の回収を終了した事をリンディに伝える。

その直後、エイミイの慌てた声が響いた。

「た、大変大変！ちよつと見てください！」

「!?!」

「屋敷内に魔力反応、多数！」

「なんだ!?!何が起こってる・・・!?!」

モニターを見ると・・・鎧をまとった傀儡が床の中から大量に湧き出て来ていた。

「庭園敷地内に魔力反応、いずれもA+！」

「デ、デジタルモンスターの反応も多数確認！最低でもAランク以上かと思われます！」

更には・・・パロットモンやエアドラモン、メタルティラノモンやメガドラモンといった、拓也や孝俊がこの世界で倒して来たデジモンまで現れていた！

「総数60・・・80・・・まだ増えています！」

「ヴァンデモン・・・一体何をするつもり!?」

「私からの挑戦状・・・と言うところか。私を逮捕したくば、ここまで来るがいい！ハハハハハハ！！！」

高らかにヴァンデモンが笑い、モニターから姿を消した。

「野郎・・・上等じゃねーか・・・!!」

「・・・」

怒りに震える拓也と、無言で立ち尽くす孝俊。
なのはとユーノはフェイトに付き添っている。

「・・・俺は時の庭園に向かう。なのはちゃん達は、どうする?」

一息ついて、拓也が言う。

それを聞いたなのはとユーノは・・・

「私も行きます！」

「僕も！」

間髪入れずに返事を出す。

元より2人ともそのつもりだった。

「アルフと孝俊は・・・フェイトとプレシアについててやね。こっちは俺達で何とかする」

「う、うん・・・」

「・・・すまん、頼んだ」

拓也はアルフと孝俊に残る様に指示。

アルフは困惑気味に返し、孝俊は俯いたまま返事をする。

フェイトはショックで周りが見えていない状態で、プレシアは未だに気を失っている。

「行くぞ！」

「うん！」「はい！」「おう！」

「僕も行く！」

拓也が叫び、なのは、ユーノ、孝昭、クロノが走り出す。

クロノと孝昭は既にデバイスを持ち、拓也はD・スキヤナを持っている。

5人は時の庭園に突入していった・・・

とある一室では・・・プレシアが目を覚ましていた。

「・・・う・・・」

「・・・気が付いたか？」

孝俊が声をかける。

ある程度怒りは収まっており、いつもの優しげな顔に戻っている。

「孝俊・・・ここは・・・？」

「次元航行艦船アースラの一室だ。ヴァンデモンに放置されて気絶してたアンタを、局員の1人が保護したんだ」

弱々しい声でプレシアが孝俊に尋ねる。

孝俊は淡々と話す。

「・・・そう・・・で・・・フェイトは・・・？」

「・・・シヨック喰らって意識失ったままだ・・・事実を知ったま
つたからな・・・」

フェイトは、未だに意識を失い、ベッドに横たわっていた。

横ではアルフが心配そうに見守っている。

「・・・仕方ないわ・・・事実なんだもの・・・実際、貴方に説得
されるまでは私はあの子が大嫌いだった・・・」

「・・・プレシア・・・」

「でも、今は違うわ・・・アリシアはアリシア、フェイトはフェイト・・・2人とも私の大事な娘・・・！」

俯いたまま語るプレシア。

孝俊は殆ど何も言わず、聞くだけだった。

そして、プレシアの考えは変わっていた。フェイトも自分の大事な娘として見る様になっていたのだ。

「・・・そうだ、一応アンタにだけは教えておこうか」

「・・・何？」

一息ついて、孝俊が口を開く。

「俺の母親もな、作られた命なんだよ」

「えっ・・・!？」

そして、孝俊はプレシアに語った。

生体兵器【アンリミテッド・ダイナモ】について・・・そして自分がその血を継いでいる事を。

もっとも、スカリエツティや最高評議会については伏せておいた。

「・・・この事は当然他言無用だ。ここでは拓也しか知らんしな」

「・・・あなたの言葉に妙に説得力があると思ったらそのせいだったのね・・・解ったわ・・・」

そして、孝俊は弱っているプレシアの肩を支え、フェイトが眠っている部屋へと向かった。

「あ、孝俊・・・と、プレシア!？」

「そう警戒するな、アルフ。前にも言ったら、もうプレシアはお前達に危害は加えないってよ」

警戒して構えるアルフに対し、落ち着いて対応する孝俊。

「・・・フェイト・・・」

その間にも、プレシアは眠っているフェイトを見つめていた・・・
次回、フェイトはプレシアにどう反応するのか・・・
そして時の庭園に突入した拓也達は・・・？

続く

第19話 人は怒り出したら簡単には止まれない気がする（後書き）

はい、第19話終了です。

まさかまさかのパラレルモン登場です。

しかも、とても臆病で大人しいという変わったタイプです。

プレシアはフェイトにどう対応するのか・・・

そして、孝俊はフェイトにどんな言葉をかけるのか・・・

今回は拓也と孝昭が久々に大暴れします。

ヴァンデモンに辿り着くまでに少し長くなりそうですが・・・

では、次回予告・・・パラレルモン、お前やれ。

パラレルモン「お、おらがやるだけ!? わ、解つただ・・・

次回、リリカルなのはフロンティア第20話【人は支え合わないと生きていけない気がする】、お楽しみに・・・!」

第20話 人は支え合わないと生きていけない気がする（前書き）

はい、遂に節目の20話です。

まさか自分でもここまで続くとは思わなかった……（汗）

そんでもって、まさかまさかの10万ヒット突破……！

読んで下さった皆様、本当にありがとうございます！

あと、プレシアについて少し設定を変えています。

そして、フェイトが……！

どうなるのかは読んでからのお楽しみ（何）

パラレルモン「第20話、始まるだよ」

第20話 人は支え合わないと生きていけない気がする

第20話副題【龍の戦斧】

アースラの一室で放心状態のフェイト。

色んな意味で目覚めたプレシアを連れ、フェイトの元にやって来た孝俊。

プレシアは、ずっとフェイトを見つめている。

そこに・・・パラレルモンがやって来た。リンディが隣に付き添っている。

「あ、ここにいただけか？」

「パラレルモン・・・なんか用か？」

「ちよつとアンタに教えたい事があるだよ・・・」

パラレルモンは一息ついて、話します。

「ヴァンデモンの目的は、ジュエルシードを使つてのパワーアップだあ・・・あれだけの魔力があれば、進化も容易いだよ・・・」

「なるほど・・・」

「この通信で伝えても良かったが、もしヴァンデモンに聞かれて対策立てられたりしたらまずいだ・・・だから、ここに残ってるアンタに伝えたいよ・・・」

相変わらずオドオドしながら喋るパラレルモン。

それを見て、こいつホントに究極体か？と思ってしまう孝俊だったりする。

「あと、そののののの。プレシアさんって言ったべか？」
「え、ええ……」

パラレルモンの質問に弱った声で返すプレシア。

「プレシアさんの体、大分弱ってるみたいだが……」

「ええ……病に冒されたみたいだね……」

「その事なんだとも……それは病じゃないだよ……」

「……え!!?」「」「」

パラレルモンの言葉に、孝俊・プレシア・アルフ・リンディが驚愕する。

一体どういう事なのか？

「前にヴァンデモンが話してたんだべよ……【あの女には、エネルギー駆動炉【ヒュウドラ】暴走の際に、長期に渡って体を蝕む呪いをかけておいた】って……」

「呪い……だと?」

「んだ……何年にも渡って苦しめ、いずれは死に至る様な、性質^{たち}の悪い呪いだべさ……」

なんと、プレシアは不治の病などではなく、ヴァンデモンの呪いで命を蝕まれていたのだった。

しかも、エネルギー駆動炉【ヒュウドラ】暴走の際に呪いをかけると言う絶妙のタイミングで、だ。

そのタイミングならば、駆動炉暴走の影響で何かしらの病に冒されたと誤認させる事が出来るからだ。

「ヴァンデモンめ……どこまでも卑劣な奴……!」

歯をギリギリと食いしぼり、怒りの表情を見せる孝俊。

「だけでも、何とかなるかしんねえだよ」

「え？」

パラレルモンの言葉に、ちよつと間抜けな声を出してしまう孝俊。プレシアも目を見開いている。

「ただ、ヴァンデモンを倒してからの方が確實だべ・・・その方が邪魔が入らずに実行できるだよ」

「・・・なら、さつさとあの野郎をぶつ潰すしかない・・・だが・・・」

拳を固め、瞳に凄まじい闘志を秘める孝俊・・・

しかし、まだフェイトの事が気にかかる為、その場を動く事が出来なかった。

その頃、時の庭園に突入したのは、ユーノ、拓也、孝昭、クロノは・・・

「・・・いつぱいいるね」

「まだ入り口だ・・・中にはもつといるよ・・・」

大量の傀儡兵やデジモンを前に、少々引き気味のユーノ。

だが、クロノの言う通りまだ入り口・・・中にはもつと大量にいるだろう。

「クロノ君、この子達って・・・」

「近くに来た者を攻撃するだけの、ただの機械だよ」

傀儡兵は単なる機械なので、壊しても問題は無い。

「デジモンも、倒しても卵に戻ってデジタルワールドで転生するか
ら心配はいらねえぜ」

拓也もなのはに説明する。

それでも、その命を奪う事に変わりはないが・・・余計な事を言
つて戦意を喪失させる訳には行かない為、あえてそれだけしか言わ
なかった。

「そっか、なら安心だ」

そう言つて、レイジングハートを構えるなのは。

だが、クロノがなのはを制止する。

「この程度の相手に、無駄玉は必要ないよ」

「だな、ここは俺達に・・・任せな！」

拓也もクロノに同意し、デジヴァイスを構える。

「スピリットエボリューション！・・・アグニモン！」

アグニモンに進化する拓也。

隣では孝昭もバーニングブロスを起動させ、戦闘態勢に入ってい
る。

「バーニングブロス、ブーストフォームで行くぞ！」

【了解でい！】

バーニングブロスが杖形態から変形し、籠手と靴になって孝昭の
両手足に装着される。

一刻を争う為、スピード戦闘で行くつもりらしい。

傀儡兵が、一斉に拓也達に襲い掛かってくる。

「迎え撃つてやるぜ！【バーニングサラムンダー】！」

炎のエネルギー弾を放ち、傀儡兵を吹き飛ばすアグニモン。

「【バルカンナックル】！」

魔力を纏った高速連続パンチを次々と傀儡兵に喰らわせる孝昭。

ブーストフォームは通常の数倍の速度で動けるので、結構使いやすい。

その拳は、傀儡兵の装甲を容易く貫いていく。

【Stinger Snipe】

「【スナイプショット】！」

クロノは青い光の刃で次々と傀儡兵を殲滅していく。

今度は少し大きめの傀儡兵が出て来る。

だが、既に炎の竜巻と化したアグニモンが接近し……

「【サラマンダーブレイク】！」

炎を纏った回し蹴りを喰らわせる。

傀儡兵はガードするが、そのガードごとぶち抜かれて爆砕される。

「す、凄い……！」

「ボーっとしてる暇はねえ！次行くぞ！」

着地してすぐに走り出すアグニモン。

クロノ、孝昭も後に続き、慌ててなのは、ユーノも付いて行く。

奥へ進んで行くと……所々が崩落して、黒い空間が発生していた。

「その穴……黒い空間がある所は気を付けて！」

「ふえ？」

「虚数空間……あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間なんだ」

虚数空間に落ちてしまえば、魔法が使えなくなる。

それを聞いて少し驚くのは。

「飛行魔法もデリートされる。もしも落ちたら、重力の底まで落下する。二度と上がって来れないよ！」

「き……気を付ける……！」

落ちたが最後、死んだも同然である。

なのは青ざめるが、後ろからアグニモンが声をかける。

「なに、そんなときやヴリトラモンになって助けるから心配すんな

！」

「は、はい・・・！」

アグニモンの言葉に、笑顔で返すのは。

後ろではユーノがアグニモンをジト目で見ていたが・・・例の如く気付かれていなかったりする。

しばらく進むと大きな扉があった。

クロノがそれを蹴破ると・・・予想通り、大量の傀儡兵が待ち構えていた。

少し先に階段が見え、それを見たクロノが・・・

「ここから二手に分かれる。君達は、最上階にある駆動炉の封印を
！」

「クロノ君は!？」

「ヴァンデモンの所へ行く。それが僕の仕事だからね」

「俺はなのはちゃんに付いて行く。護衛ぐらいは務まると思っぜ」

アグニモンはなのはとユーノに付いて行く事に。

「んじゃ、俺はクロノと一緒にヴァンデモンの所に行くとすっかね」

孝昭はクロノと共にヴァンデモンの所へ向かう事にした。

「俺とクロノで今から道を作る！バーニングブロス、行くぞ！」

【おうよ！バスターフォルムでい！】

両手両足の装甲が外れて1つになり、砲撃形態のバスターフォルムになる。

そして、すぐさま魔力をチャージする。

【Blaze Cannon】

【ディバインブラスター！】

クロノの【ブレイズキャノン】と孝昭の【ディバインブラスター】が一気に傀儡兵を薙ぎ払った。

その際に、なのは・ユーノ・アグニモンが上の階に向かって行く。

「クロノ君！孝昭さん！気を付けてね！」

「おう！そつちもしつかりやれよ！」

なのは達を見送り、バーニングブロスを構える孝昭。

「・・・へへっ」

そして・・・孝昭は少し笑った。

「どうした？」

「いや、お前と2人で協力すんのも久しぶりだな、と違ってよ」

「・・・そうだな」

この2人は同い年であり、同期でもある。

互いに切磋琢磨して実力を上げて来た。

今やクロノはアースラの切り札、孝昭は地上本部の二等空佐である。

「さあ、行こうか！」

「ああ！」

2人は傀儡兵の集団に向かい・・・突撃して行った。

再びアースラにて・・・

時の庭園での激戦をモニターで見ているアルフ、孝俊、プレシア、リンディ、そしてパラレルモン。

「・・・あの子達が心配だから、アタシも手伝ってくる。孝俊、ここは頼むよ・・・」

「・・・ああ、頼んだ」

そして、フェイトの頬に手を添える。

「すぐ帰ってくるよ・・・それで、全部終わったら・・・ゆっくりでいいからアタシの大好きな、ホントのフェイトに戻ってね・・・これからはフェイトの時間は全部、フェイトが自由に使っていいんだから・・・」

アルフはそう言って部屋を出て行くこととするが、何かを思い出してUターンする。

「あ、忘れてた・・・フェイトが目を覚ましたら、これを渡してあげて」

アルフはポケットから、かつて孝俊がフェイトと自分にプレゼントしてくれた緑色のリボンを出す。

「・・・解った」

そして、アルフは時の庭園へと向かって行った。

「・・・本当に、私は最低な母親だわ・・・この子の時間を全部・・・私が奪って・・・」

プレシアは声を震わせ、これまでの自分の愚行を恥じ、悔やんだ。

どんなに罵倒し、虐待を加えようとも自分の為に動いてくれたフェイト・・・

それを思うと、とても申し訳ない気持ちに苛まれた。

「プレシア・・・アンタは死んじやいけねえ。もし、本当に過去を悔やむなら、アンタにはやらなきゃいけねえ事が幾つも残ってる」

「・・・そうね・・・」

真面目な顔で語る孝俊。

プレシアは顔を俯かせる。

その時・・・フェイトが目を覚ました。

「・・・気が付いたか」

「フェイト・・・」

フェイトを見る孝俊とプレシア。

「孝俊・・・か、母さん・・・」

すぐ傍にいるプレシアの存在に、驚くフェイト。

あれだけシヨッキングな事実を聞いた後に、これは流石に驚く。

「フェイト・・・ごめんなさい・・・私が・・・間違ってたわ」

「え・・・？」

フェイトが頭で思ってた事とはまるで違う言葉だった。

ヴァンデモンの話を聞く限りでは、母親から自分に罵倒の言葉しか飛ばないと思っていた。

「あのデジモンの言う通り・・・私はあなたの事が嫌いだった・・・でも今は・・・違うわ・・・」

「・・・」

プレシアの言葉を、フェイトは無言で聞いていた。

ふと、フェイトが口を開く。

「私は・・・母さんに認めてほしくて・・・ずっと笑ってほしくて・・・それだけの為に生きていた・・・」

「・・・」

「どんなに足りないと言われても、どんなに酷い事をされても・・・だけど、笑ってほしかった・・・」

孝俊もプレシアも、無言で聞いていた。

その後ろでは・・・何故かパラレルモンが泣いていた。

「うっ・・・うっ・・・プレシアさん・・・アンタあ、良い娘さん

を持ったただよお・・・」
「ええ・・・そうね・・・」

フェイトは、モニターの方を見る。

そこには、なのは達と合流したアルフが映っていた。

（アルフ・・・ずっと傍にいてくれたアルフ・・・言う事を聞かない私に、きつと随分と悲しんで・・・）

今度はなのはがモニターに映る。

（何度もぶつかつた、真っ白な服の女の子・・・初めて私と対等に・・・真っ直ぐ向き合ってくれたあの子・・・何度も出会って、戦って・・・何度も・・・私の名前を呼んでくれた・・・何度も・・・何度も・・・）

そして・・・フェイトはモニターを見ている孝俊に視線を移す。

（孝俊・・・ある日突然、私の前に現れて・・・危ない所を助けてくれて・・・いつも・・・笑ってくれて、優しく、強くて・・・）

心の底から私の事を心配してくれた・・・私が・・・大好きな人・・・)

アルフ、なのは、孝俊・・・3人の事を考え、涙を流すフェイト。

(私が生きていたかったのは・・・母さんに認めてもらいたいからだった・・・それ以外に、生きる意味なんて無いと思ってた・・・それが出来なきゃ、生きていけないんだと思ってた・・・)

(捨てれば良いってわけじゃない、逃げれば良いって訳じゃ・・・もつとない・・・私の、私達の全ては、まだ始まってもない・・・！)

そう思った後・・・孝俊に話しかける。

「孝俊・・・私・・・このまま終わるのは・・・嫌・・・！」

「フェイト・・・」

フェイトはバルディッシュを起動させる。

バルディッシュは、全体にヒビが入ってボロボロだった。

【Get Set】

それでも、バルディッシュはフェイトの思いに応えようと、自身を動かす。

「そうだよね・・・バルディッシュもずっと、私の傍にいてくれたんだよね・・・お前も、このまま終わるのなんて、嫌だよね・・・」

【Yes Sir】

「・・・その言葉を待ってたぜ。フェイト」
孝俊はそう言うと、D・スキャナを出す。

D・スキャナから緑色の光が照射され、バルディッシュの宝石部分に入る。

すると・・・バルディッシュが光り、新品の様に綺麗な状態に戻った。

【Recovery】

しかも、形状が少し変わっていた。宝石の周りに龍の顔の模様が施され、宝石部分を覆っている。

色は白かった部分が緑色になり、黒い部分がメタリックブラックになって輝きを増していた。

「これは・・・」

「一時的にだが、スピリットの力でパワーアップを施した。言うなれば・・・【バルディッシュ・ドラグーン】ってところか」

バルディッシュ・ドラグーン 使用者：フェイト・テストロッサ
今作オリジナルデバイス

フェイトのバルディッシュが龍のスピリットの力でパワーアップ。
従来の魔法もパワーアップして使える他、新たな魔法もいくつか追加されている。

出力はバルディッシュの2.5倍。

エネルギーが無くなり次第、元のバルディッシュに戻る。

「孝俊・・・ありがとう・・・！」

【Thank you Brother】

フェイトは涙を浮かべ、孝俊に抱きつく。

「ぶ、ブラザーって・・・おいおい」

孝俊はバルディッシュの言葉に少し照れていた。

「多分、バルディッシュはアンタの事を【兄貴】って言ったんだべな」

パラレルモンは理解したらしかった。

孝俊から離れたフェイトは、バリアジャケットを装着する。

「私達の全ては、まだ始まってもない・・・だから、本当の自分を始める為に・・・！」

そして、アルフが置いて行った緑色のリボンを付ける。

「孝俊・・・私は、作られた命だけど・・・それでも、精いっぱい・・・生きるよ・・・！」

「ああ。例え作られた命とはいえ、この世に生まれたならばその命を大切にしろ。生きている事の素晴らしさが解る時が、いつかきつと来る・・・！」

フェイトの言葉を聞き、孝俊はフェイトの両肩を掴んで言う。

言葉には出さないが、フェイトにも自分の母・ナツキの様に、幸せになつてほしいから・・・心の底からそう思い、語った。

「フェイト……」

プレシアがフェイトを見つめる。

「母さん……行ってきます……」

フェイトが微笑む。

プレシアの眼には……初めてアリシアとフェイトがダブって見えていた。

「よっしゃ、じゃあ俺も行くか……フェイトの事は任せろ」

「ええ……お願い……」

「行くか、フェイト……アリシアを……お前の姉ちゃんを助けるに！」

「うん……！」

未だヴァンデモンに捕われているアリシアの亡骸を取り戻す為……

そして、自分達を散々弄んだヴァンデモンを倒す為……2人は時の庭園に向かった。

その頃、時の庭園では……なのは達が傀儡兵軍団と激戦を繰り広げていた。

空を飛んで襲い掛かってくる、羽の生えた傀儡兵を魔法弾で撃ち落とすのは。

アルフは狼モードで噛みついて傀儡兵の装甲を破り、爆砕する。

アグニモンは【ファイヤーダーツ】や【バーニングサラマンダー】

、【サラマンダーブレイク】を駆使して、次々と傀儡兵を倒して行く。

「くっそ……数が多い！」

「何とかしないと……!」

敵の数の多さに押され気味のなのは達。

ユーノはチェーンバインドでなんとか敵を押さえている。

アグニモンに至っては、かなりの数を相手にしており、少しばかり疲れが見えてきていた。

すると、敵の1体がチェーンバインドを破り、なのはに襲い掛かった!

「あつ……なのは!!」

「え!?!」

なのはが気付いた時には傀儡兵が斧を振り上げていた。

なのはに斧が迫ったその時……

【Thunder Rage】

上空から雷が降り注ぎ、傀儡兵の動きを止める。

「え……?」

突然の事に、なのはは驚いていた。

【Get Set】

「【サンダーレイジ】!」

上空からフェイトがバルディッシュを構え、大きな雷を発射する。

バルディッシュがパワーアップした【バルディッシュ・ドラグー

ン】の出力は半端ではない。

直撃を喰らった傀儡兵は、爆発して果てた。

「ちつ……!まだいやがる……アグニモン!伏せる!」……
え?」

相手の数の多さに苦戦しているアグニモン。

だが、突如背後から孝俊の声が響いた。

アグニモンは言われた通りに身を屈めた。

「【フルバーストランチャー】!」

多数の光弾がアグニモンの頭上を通って行く。
光弾は次々と傀儡兵を爆撃、破壊していく。
アグニモンが振り向くと・・・そこにはグリーンドラモンがいた！

「フェイト！孝俊！」

アルフが叫ぶ。

「フェイトちゃん！孝俊さん！」

なのはが駆け寄ってくる。

フェイトは少し顔を背ける。まだ少し照れがあるのだろうか。

「フェイト・・・そのバルディッシュ・・・」

「孝俊が・・・エネルギーを分けてくれたんだ・・・一時的にだけ
ど、パワーアップしてるんだ」

アルフが尋ねると、フェイトは微笑んで答える。

だが、突然背後の壁から巨大な傀儡兵が現れた。

「大型だ・・・バリアが強い！」

「うん・・・それにあの背中の・・・！」

傀儡兵は背中に2門の巨大な大砲を背負っている。

それを向け・・・エネルギーをチャージし始めた！

2人は迎え撃とうとするが・・・グリーンドラモンが前に出る。

「ここは俺がやる。体力が有り余ってるんでな・・・それに、フェイトもなのはちゃんも、エネルギーはラスボスまでとつときな」

「孝俊・・・！」

グリーンドラモンはその場で仁王立ちになると、エネルギーを充填していく。

緑色のオーラが渦巻き・・・グリーンドラモンの腹部にあるメイ
ンキャノン砲に集中していく。

「出るぜ、グリーンドラモンの本当の必殺技・・・！みんな衝撃で
吹っ飛ばされねーように気をつけるよ・・・！」

「え、あ……はい……！」
そう言って、なのはとユーノはアグニモンにしがみつく。
アルフもフェイトとくつついて少し距離を取っている。

一足先に大型傀儡兵がチャージを終え、2つの砲撃を発射した。
「フルチャージ完了……！行くぜ！」

向かってくる砲撃に怯む事無く、真っ直ぐ先を見据えるグリーン
ドラモン。

そして……叫んだ。

「ブツ飛びな……！これが俺の必殺技……【ドラゴンカノン】
だああああっ！」

次の瞬間、大型傀儡兵の物よりも遥かに大きな砲撃が発射された。
緑色に光る超エネルギーキャノン、【ドラゴンカノン】だ。
フルパワーで放つにはチャージに10秒程かかるのが欠点だが、
一度発射されればA+ランクの傀儡兵50体近くをまとめて消し飛
ばす程。

その【ドラゴンカノン】は大型傀儡兵の砲撃を2つまとめて押し
返し……そのまま命中する。

まともに喰らった大型傀儡兵は、大爆発を起こして跡形もなく消
し飛ばされた。

「うわぁ……えげつない威力だなぁ……」

とんでもない威力に、ユーノが小さく言葉を漏らす。

「孝俊……やっぱり凄い……！」

フェイトは目を輝かせて、嬉しそうにしている。

「立ち止まってる暇は無え、早いとこ次行くぞ！」

「おっしや！みんな、行くぞ！」

グリーンドラモンとアグニモンを先頭に、駆動炉へと向かうなの

は達だった。

続く

第20話 人は支え合わないと生きていけない気がする（後書き）

第20話終了です。

フェイトのバルディッシュがまさかのパワーアップです（笑）

で、プレシアは病ではなく、ヴァンデモンの呪いで体が弱ってる設定です。

孝俊「なんか強引っぽい気もするけどな」

孝昭「まあ、こーいう事考える人っていないだろうから、別に良いんじゃない？」

さて、今回は・・・遂にヴァンデモンの元に到達・・・の予定です。

では次回予告・・・プレシアさん、よろしくお願いします。

プレシア「ええ、解ったわ・・・えつと・・・

次回、リリカルなのはフロンティア第21話【それなりに強くないとラスボスは名乗れない気がする（仮）】・・・お楽しみに」

第21話 それなりに強くないとラスボスは名乗れない気がする

第21話副題【究極体】

傀儡兵。それは屈強な鎧に身を包まれた機械の兵。

立ちはだかる者を撃滅せんとひたすら闘う。

並の力では到底歯が立たない。

そんな傀儡兵が・・・次々と壊滅していた。

・・・とある御一行様によって

「オラ、どけどけどけどけどけえー！魔導師とデジモンのお通りじやコラアアアア！」

「悔しかったらかかってきやがれ！片っぱしから消し炭にしてやんぜこのヤロオオオオオ！」

グリーンドラモンとアグニモンが、それはもうイイ笑顔で次々と傀儡兵を撃沈している。

既に何体倒したか解らない。

「邪魔じゃボケエエエエエ！」
グリーンドラモンは専用の剣【機龍牙】きりゅうがを片手に、次々と傀儡兵を切り裂いていく。

ちなみに、プロスモンの時に使っている剣は【重龍牙】じゅうりゅうがという。

「うおおおおお！」

アグニモンは【バーニングサラマンダー】を連射し、傀儡兵を燃やして行く。

ここまでグリーンドラモンと共に、大半の傀儡兵を倒している。

「フェイトの邪魔を・・・するんじゃないよっ！」

アルフは魔法弾を放って、傀儡兵にダメージを与える。

動きが鈍った所を、グリーンドラモンとアグニモンが攻撃して倒す。

ユーノも【バインド】を複数放って傀儡兵の動きを止め、やはりそこを狙ってグリーンドラモンとアグニモンが猛攻を加えて撃沈する。

出来るだけ、なのはやフェイトに負担が掛からないようにと奮戦する4人。

「す、凄いね・・・特に拓也さんと孝俊さん・・・」

「・・・うん・・・」

4人の後ろでは、なのはとフェイトが走りながら話していた。

合流して走り出してからというもの、2人は一切手を出していない。

そうこうしてるうちに、扉が見えて来た。

「アグニモン！同時に行くぞ！」

「OK！」

グリーンドラモンが剣を収めてハンマーを持ち、アグニモンが足に炎を纏う。

そして、2人同時に扉に向かって走り出した。

「行くぞ！」「俺達の合体技……！」

「『ブレイズインパクト』だアアアアアア！」

扉に向けて、エネルギーを込めたハンマーと、炎を纏ったアグニモンの渾身の蹴りが同時に炸裂。

爆発音が響き、鋼鉄製の扉はバラバラになって吹っ飛んだ。

更に、今の【ブレイズインパクト】の衝撃で、扉の付近にいた傀儡兵数体が吹っ飛ばされて爆発し、果てた。

もはやこの2人が組んで怖い物は無かった。

この部屋にも、傀儡兵がウヨウヨいた。

ついでにデジモンも沢山いる。

「結構いやがるな……ざっと2、30体つてところか……」

「デジモンも同じくらいいやがる……みたところ全部成熟期みてーだが……」

ふと先を見ると、奥の方にエレベーターが見えた。

「あそこのエレベーターから、駆動炉に向かえる」

フェイトがなのはに説明する。

自分も長い事時の庭園にいたので、何処に何があるかぐらいは大抵把握している。

知らなかったのはアリシアの事ぐらいである。

「うん！ありがとう！・・・フェイトちゃんは・・・デジモンの所に？」

「・・・うん」

フェイトはヴァンデモンの所に向かうつもりである。勿論、アルフも一緒に。

なのははフェイトの答えを聞くと、レイジングハートを一旦置き、フェイトに近づく。

「私・・・その・・・上手く言えないけど・・・」

そう言いながら、フェイトの手を両手でそっと握り・・・

「・・・頑張って」

そう言って、フェイトを見つめるのは。

「・・・」

フェイトは、しばらくなのはを見つめると、その手を握り返し・・・

「・・・ありがとう」

静かに礼を言った。

2人の心が・・・通じ合った瞬間だった。

そこに、ユーノが駆け込んで来た。

「今、クロノと孝昭さんが2人で向かってる！急がないと間に合わないかも！」

「フェイト！」「うん・・・！」

「よし、俺はフェイトとアルフと一緒に最下層に向かう。アグニモン、駆動炉の方は任せた！」

グリーンドラモンからブロスモンにスライドエボリューションした孝俊が叫ぶ。

いくら最小サイズの2Mとはいえ、ビーストスピリットを維持し続けるのは容易ではない。

「解った、任せろ！終わったらすぐに救援に向かう！」

アグニモンはそう言って、なのは・ユーノと共に最上階へと向かって行った。

アースラでは・・・エイミーが現地のクロノと通信していた。

「エイミー！」

「なのはちゃんとユーノ君と拓也君、駆動炉へ突入！フェイトちゃんとアルフと孝俊君は最下層へ！大丈夫、行けるよきつと！」

「ああ！」

最上階へと辿り着いたなのは・ユーノ・アグニモン。

だが、そこにいたのはやはり大量の傀儡兵とデジモンだった。

「そう簡単には・・・行かないってか・・・」

アグニモンはじっと敵の大軍を見据える。

そして・・・

「スライドエボリューション！・・・ヴリトラモン！」

ビーストスピリットでヴリトラモンに変化する。

なのははレイジングハートを構えるが、ユーノとヴリトラモンが制止する。

「防御は僕がやる。なのはは、封印に集中して」

「向かってくる奴らは返り討ちにしてやる。思い切りやるんだ！」

「うん、いつも通りだよね」

「「え？」」

なのはの言葉に、ユーノとヴリトラモンが振り返る。

「ユーノ君、いつも私といてくれて、守ってくれたよね・・・拓也さんも、私が危ない時はいつも助けてくれたよね・・・」

そして、なのはは明るい顔になる。

【Sealing Mode】

そして、レイジングハートのシーリングモードを起動させ、言った。

「だから戦えるんだよ・・・背中がいつも、あつたかいから！」

（なるほどな・・・ただ、俺だとあつたかいと言うより熱い気もするが・・・まあいいや。信頼されてるみてーだし、いっちょ張り切るとすっかね）

そう考えて、ヴリトラモンは小さく微笑むと、傀儡兵達に向かって行った。

なのはは・・・魔法弾を4つ作り出す。

「デイベインシューター、フルパワー！」

そう叫ぶと、大きく振りかぶり・・・

「シュート!!!」

渾身のデイベインシューターを放った。

その頃、最下層に向かって走っているフェイト・アルフ・ブロスモンは・・・

「もうすぐ・・・終わるな。全部が・・・」

「・・・うん。ねえ、孝俊・・・」

「ん、どうした？」

近付きつつあるクライマックスに向け、呟くブロスモン。フェイトは頷き、ブロスモンに話しかける。

「これが、終わったら・・・私に、剣術を教えて・・・？」

「剣術を？俺のは我流だが・・・良いのか？」

「うん」

これまでずっと孝俊の剣術を見て来たフェイト。
その剣捌きを見て、自分も剣を使いたい・・・そう思ったのだ。

「ん、まあお前が良いなら、それでもいいけどよ・・・それに、そのバルディッシュ・ドラグーンには龍のスピリットの力が入ってるから、剣にもなれるしな」

「そうなの？バルディッシュ」

【Yes Sir】

バルディッシュ・ドラグーンは、追加要素で刀のような形状になる。

ザンバーの様な大型では無く、ソードと言うべき普通の物だ。

「・・・ま、とりあえずはヴァンデモンの野郎をブツ飛ばしてからだ」

「うん・・・あと、伝えたい事も・・・あるから・・・」

「伝えたい事・・・？」

「・・・終わってからのお楽しみ・・・だよ」

フェイトの言葉に、首を傾げるプロスモン。

フェイトは小さく微笑んで走り出す。

顔が少し赤かったのは、多分闘志が漲って興奮してたんだろう。

うん、きつとそうだ。

最下層では・・・ヴァンデモンがアリシアの亡骸の入ったポッドの横で佇んでいた。

「来るがいい・・・魔導師、そしてデジモンに進化する者達よ。返り討ちにしてくれる！」

このジュエルシードの力でパワーアップし、私はこの次元世界全てを支配する・・・！」

自分の周りに集めた9つのジュエルシードを眺めるヴァンデモン。だが・・・今まで起こっていた振動が・・・止まった。

「・・・!?」

これまで余裕の笑みを浮かべていたヴァンデモンが、初めて焦りの表情を見せた。

ジュエルシードと時の庭園の駆動炉の力で次元震を起こしていたが、それが止まってしまったのだ。

『ヴァンデモン』

「な・・・!?」

『終わりですよ。次元震は、私が押さえています。駆動炉ももうすぐ封印・・・あなたの元には、執務官が向かっています』

「く・・・!」

なんと、リンデイが魔法陣を展開して、次元震を押さえていたのだ。

悔しそうに顔を歪めるヴァンデモン。

『最早あなたに手立ては無い筈・・・大人しく投降しなさい』

「ええい・・・黙れ!こうなればその執務官もろとも、ここで葬ってくれる・・・このジュエルシードで・・・パワーアップを果たす!」

『なんですって・・・!?!』

「こんな筈ではなかったが・・・結果が出ればそれで良い・・・私自らの力で次元を崩壊させてくれるわ・・・!」

と、ヴァンデモンが言い終わったところで・・・声が響いた。

「待てい!」

「む!?」

声が響くと同時に、青と赤のレーザーが壁をぶち壊した。

壊した壁の向こうには・・・頭から血を流したクロノと、手足か

ら流血している孝昭がいた。

「・・・力と力がぶつかり合う狭間に、己が醜い欲望を満たさんとする者よ、その行いを恥と知れ!・・・人それを【外道】という!」

「何奴!?!」

「貴様に名乗る名は無い!」

咄嗟に反応するヴァンデモン。

そして、どっかの兄さんみたいなセリフを叫ぶ孝昭。

「世界はいつだって・・・こんなはずじゃない事ばかりだよ!ずっと昔から、何時だって誰だってそうなんだ!」

「ぶっちゃけ、この世の歴史上に悪が栄えた例は無いからな!」
クロノがありつたけの声で叫ぶ。

孝昭もそれに続いて叫んだ。

この世に悪が栄えた事は無い。

例え、時代を築こうとしても、必ず何処かでそれを阻止する存在が現れるのだ。

「その通りだ!」

「アンタの運命もここまでだ!大人しく降参しな!」

更に、上から孝俊・アルフの声がする。

ヴァンデモンが見上げると、上からフェイト・アルフ・ブロスモンが降りて来ていた。

「おのれ……！こうなれば貴様ら全員、ここで葬ってくれるわあ！」
逆上したヴァンデモンが、特大の【クラウドミニオン】を放つ。
クロノ・孝昭・フェイト・アルフはそれぞれシールドを張って防御。

ブロスモンは上空に飛び上がって回避し……そのまま攻撃に移った。

「【ブロスバーストブレイカー】！」

空中から発射されるエネルギー弾とエネルギー砲の雨あられ。

それが容赦なく次々とヴァンデモンに降り注ぐ。

「むんっ！」

だが、ヴァンデモンもシールドを張り、簡単に防いでしまった。

「なっ！？撃てば間違いなく相手を撃沈した孝俊の砲撃を防いだ！
ブロスバーストブレイカー

？」

ヴァンデモンの防御力に驚くアルフ。

今まで様々な敵をK.Oしまくってきた必殺技……それをい

ても簡単に防いでしまったのだ。

流石にラスボスだけあり、一筋縄では行きそうにもない。

「【スナイプショット】！」

「【インパクトシューター】！」

「無駄だ……！」

今度はクロノと孝昭が攻撃に移る。

だが、それでもヴァンデモンのシールドは揺らがなかった。

「あの野郎め……ジュエルシードのエネルギーを使って、シールドの強度を上げてやがるのか……！」

吐き捨てるように呟く孝俊。

そして、少し考えると……隣にいるフェイトに小声で話しかける。

「フェイト、【アークセイバー】を奴のシールドに突き立てられるか？」

「解んないけど・・・やってみる！」

【Ark Saviour】

「【アークセイバー】！」

フェイトが魔力刃を一直線に発射する。

そしてそれが・・・見事にヴァンデモンのシールドに刺さって止まった！

「何！？消滅せずに止まっているだと!?」

魔力陣が刺さってヒビが入ったシールドを見て、驚くヴァンデモン。

パワーアップして【バルディッシュ・ドラグーン】になったフェイトの魔法は、威力も段違いだった。

そこを見逃さずに、プロスモンがハンマーを持って一気に接近した。

そして、シールドのすぐ傍でハンマーを大きく振りかぶり、横薙ぎに振り抜いた。

「どっこいしょー!!」

ガゴンツ！と打撃音が響くと、フェイトの放った魔力刃がプロスモンのハンマーによって、ヴァンデモンのシールドに釘の様に打ち込まれる。

そして、シールドにヒビが広がっていった。

「今だ！行けえ！」

「【ブレイズキャノン】！」

「【ディバインブラスター】！」

「【サンダースマッシュャー】！」

「【フォトンランサー・マルチショット】！」
ブロスモンが叫んでその場から飛び退くと、クロノ・孝昭・フェイト・アルフが一斉射撃を放った。
ヒビが入ったシールドでは到底防ぎきれず・・・シールドは粉々に碎け散り、ヴァンデモンに砲撃が直撃した！

「ぐがあああつ！」

吹っ飛ぶヴァンデモン。

流石に4つの魔法が直撃しては辛いようだ。

「やっとあの野郎に一撃ぶち込めたな・・・」

「ああ、でもこれからだよ！アタシ達を散々利用した報い、受けてもらわなきゃね・・・」

ブロスモンとアルフが向かい合って話す。

だが、あれぐらいでヴァンデモンがくたばるとは思えない為、構えは解いていない。

「おのれ・・・小癪な真似を・・・！だが、まだこの時の庭園には数多くの私の部下が・・・」

『ドオン！ガラガラガラ・・・』

と、ヴァンデモンが言い終わる前に、爆発音が響いて壁がぶち壊れる。

「部下つてのはこのデジモン達か？」

「私達が全部やつつけたの！」

「残念だったね！」

壁の向こうで・・・アグニモン、なのは、ユーノが倒したデジモン達の上に乗っていた。（正確には踏んづけていた）

駆動炉を停止させ、最上階から最下層まで駆けつけて来たのだ。

なのはに顔を踏まれてるデジモンが目線を上にして『でへへへ・・・

・』とか言ってるのは多分気のせいだろう。

「大人しく降参するなら悪い様にはしないの！」

なのはがレイジングハートを向けてヴァンデモンに向かって叫ぶ。

後ろでは、アグニモンがなのはに踏まれていたデジモンを簀巻きにしておらー！とか叫びながらジャイアントスイングしていたが、あえてスルー！。

そのすぐ傍ではユーノがバインドを幾つも使ってデジモンを多重拘束し、壁の穴から無理やり外へ蹴り飛ばしてバンジージャンプさせていたが、それもあえてスルーしよう。

「おのれ……！かくなる上は最後の手段よ……！」

すると、ヴァンデモンがジュエルシールドを自分の中に取り込んだ！

「な……！？」

全員が目を見開く。

ヴァンデモンがみるみる大きくなっていき……50Mはあろう、巨大な体躯となった！

しかもヴァンデモンではなく……別のデジモンとなっていた。

ヴェノムヴァンデモン 究極体 魔獣型 ウイルス種

必殺技 ヴェノムインフューズ（腹部の口から相手を破壊する光線

を発射)

得意技 カオスフレイム(腹部の口から紫色の炎を吐く)

タイラントサベージ(右腕で敵を薙ぎ払う)

獣の下半身と硬い外殻の上半身を持つ魔獣型デジモン。

ヴァンデモンが進化したデジモンだが、理性も知性も失っており、本能だけで敵を破壊する。

「でかくなりやがったか・・・!」

だが、ジュエルシードは9つあった内の1つを使ったのみだった。残りの8つのジュエルシードは、クロノと孝昭が隙を見て封印し、回収に成功した。

「奴を倒せば全てが終わる・・・!みんな、最後のバトルだ!」

「よっしゃ!」

「負けてたまるかよ・・・!」

アグニモンの叫びに、ブロスモン、孝昭が答える。

なのは、フェイト、アルフ、ユーノ、クロノも改めて戦闘態勢に入った。

現れた究極体ヴェノムヴァンデモン・・・拓也達はどう立ち向かうのか!?

次回・・・最後にとんでもない展開が・・・!

続く

第21話 それなりに強くないとラスボスは名乗れない気がする（後書き）

はい、第21話終了です。

ヴァンデモンはなんとかになりましたが、進化してヴェノムヴァンデモンに……！

次回、更に激戦（予定）！

孝昭「それはいいが、ゲスト来たぞ」

直人「よう！」

マリカ「こんばんは」

孝俊「お！また来てくれたんだな、直人君とマリカさん！」

マリカ「この前はおいしいクッキーをありがとうございました」

直人「マリカ、殆ど1人で食ってたもんな……その内太るぞ？」

マリカ「うっ……主の意地悪……」

孝俊「大丈夫ですよ、カロリーは極力抑えていますから」

直人「そうか（汗）」

マリカ「そういえば、フェイトさんのバルディッシュがパワーアップしましたね？」

直人「バルディッシュ・ドラグーンだっけか……かなりのパワー

だっ たな」

孝俊「実は連載当初から考えてたりしたらしいよ」

直人「なるほど・・・じゃあなのはレイジングハートも・・・？」

孝俊「それはどうかは解らないけど・・・まあ、後のお楽しみ」

直人「これから先も楽しみだな？」

孝俊「そう言ってもらえるとありがたいね。それにしても、そっちは相変わらず大変みたいだね・・・スポーツ大会とか特に凄かったよ？」

直人「あれはスポーツって次元じゃなかったぞ・・・おまけになのは達のファンには襲われるわ俺のFCは現れるわ・・・しまいにはテロリストだぞ？」

マリカ「大変な騒動でしたよね・・・」

孝俊「まあ、ヴィヴィオが人質に取られてたら俺も何したか解んねーし？」

直人「そうだな・・・それにしても、ヴァンデモン・・・ホントに外道だよな」

マリカ「この際ですからギッタギタのメッタメタにして、肉塊も残さずにdeleteしてしましましょう」

直人「そうだな。全力で粉々にしてやれ」

孝俊「とは言うが・・・ヴェノムヴァンデモンになっちまったぜ（汗）」

直人「50Mは流石にデカイな・・・グリーンドラモンでもアレには届かんだろうし?」

孝俊「ま、一応・・・最後の切り札的な物はあるけどね」

直人「ほう?」

孝俊「それは読んでからのお楽しみにな」

マリカ「無印が終わった後はどうするんですか?」

孝俊「んー、とりあえずA・S編に続きます。でもって、仲間が増える、とだけ言っておきましょうか」

マリカ「・・・仲間が増える・・・誰が来るんでしょうか」

直人「気になるが・・・まあ、楽しみは後に取っておこうか」

マリカ「そうですね・・・あ、もう時間ですよ主?」

直人「もうそんな時間か・・・そろそろヴィヴィオが泣きだしたらいかんし、急がなきゃな」

孝俊「すっかりパパだねえ、直人君・・・」

マリカ「良いお父さんです」

孝俊「じゃ、とりあえずお土産に・・・俺の手作りのショートケーキ（1ホール）と、グリーンドラモンの時に使ってる【機龍牙】のレプリカ、それとデジモンフロンティアのDVD全巻を」

マリカ「喜んで頂きます」

直人「ケーキをか？」

マリカ「はい」

孝俊「あはは・・・まあDVDで拓也達の活躍を見てくれれば（待て）」

直人「ああ、じゃあ頑張つてな！」

孝俊「お互いにね・・・おっと、ついでに次回予告お願い出来る？」

直人「よし、任せろ。えーっと・・・」

次回、リリカルなのはフロンティア第22話【命を賭けてこそ最後の切り札だと言える気がする】」

マリカ「お楽しみに！」

第22話 命を賭けてこそ最後の切り札だと言える気がする(前書き)

はい、第22話です。

いよいよ本当のラストバトル！

ヴェノムヴァンデモン相手にどう立ち向かうか・・・！

グリーンドラモンのフルサイズを変更しました(汗)

そんでもって、再び名言コーナーです。

- お前の命、俺が預かった！

(結城凱 鳥人戦隊ジェットマン)

- 俺はもう、二度と負ける訳には行かないんだあああああつ！

(神原拓也 デジモンフロンティア)

- 闇を操り心を蝕む者達よ、天は許してもこの俺が許さん！

(ロム・ストール マシンロボ クロノスの大逆襲)

孝俊「おいおい、何気に拓也が入ってんぞ」

なのは「拓也さんの現役時代かぁ・・・」

拓也「いや、今も現役だからな？（苦笑）」

孝昭「じゃ、第22話、始めるぞ！」

第22話 命を賭けてこそ最後の切り札だと言える気がする

第22話副題【苦闘、そして・・・】

ジュエルシードを取り込んで進化したヴェノムヴァンデモン・・・理性も知性も無くし、本能のままに拓也達に襲い掛かってくる。

「ちっ！」

「おおっと！」

拓也と孝俊がその場から飛び退く。

その瞬間、ヴェノムヴァンデモンの巨大な左腕が叩きつけられた。

「おいおい・・・ありゃあデカすぎんだろ・・・！」

「しかも外殻も頑丈だ・・・さつきから【スナイプショット】を何発も掻き消されてる・・・！」

距離を取っている孝昭が驚きながらバーニングブロス（バスターフォルム）を構えている。

クロノも、孝昭の隣でS2Uを構えてヴェノムヴァンデモンを睨みつけている。

「ガアア・・・【カオスフレイム】！」

ヴェノムヴァンデモンの腹部の口から、なのは目掛けて紫色の炎が発射される。

【Round Shield】

「くぐりっっ・・・！」

なのはが【ラウンドシールド】を張って耐える。
だが、【カオスフレイム】のあまりの威力に押されていた。
強固なのは【ラウンドシールド】をもつてしても、完全に威力を押さえられなかったのだ。

「この野郎・・・！【バーニングサラマンダー】！」
ヴェノムヴァンデモンの顔面に向かって、横から【バーニングサラマンダー】を放つアグニモン。

それは見事にヴェノムヴァンデモンの額に命中し、ぐらつかせる。不意を突いた攻撃だった為、対応しきれずに膝をつくヴェノムヴァンデモン。

「よし！一気にたたみかけろ！・・・【デイバインブラスター】！」

「【ブレイズキャノン】！」

「【フォトンランサー】！」

「【デイバインシューター】！」

「【サンダーレイジ】！」

「【プロスバーストブレイカー】！」

孝昭の号令と共に、全員が一斉に攻撃する。

砲撃、魔法弾、雷、エネルギー弾、エネルギー砲がヴェノムヴァンデモンに次々と撃ち込まれる。

『ズドドドドオオオオオオン！！』

そして、大爆発が起きて煙が立ち込める。

「どうだ・・・？」

「あれだけぶち込めば・・・奴だって・・・」
クロノと孝昭が呟く。

だが、即座にアグニモンの声が響いた。

「危ないみんな！防御だーっ！！」

アグニモンが叫び終わる前に、巨大なヴェノムヴァンデモンの右腕が孝昭達に襲い掛かった！

「何！？」

「くっ……！」

ユーノとアルフが咄嗟に前に出てシールドを展開する。

『ガゴオン！……ビキビキキッ……』

「なっ！？」

「ひ、ヒビが……！」

なんと、ユーノとアルフ2人がかりのシールドを力づくでぶち破ろうとしていた！

そして……

『バキイイーン！』

「うわあああっ！！」

「ぐああああっ！！」

ユーノとアルフが右腕の直撃を喰らい、吹っ飛ばされた。

今のはヴェノムヴァンデモンの【タイラントサベージ】である。

左腕とは比べ物にならない破壊力を持った打撃攻撃なのだ。

「ユーノ君！」

「アルフ！」

なのはとフェイトが即座に回り込んで、それぞれユーノとアルフを受け止める。

「ご、ごめんなのは……」

「あいつ……とんでもない攻撃力だよ……」

シールドである程度勢いが削がれていたとはいえ、究極体の攻撃をモロに喰らったのはかなりきつかったようだ。

ユーノとアルフはしばらく満足に動けそうにはなかった。

「あの野郎・・・マジで強い・・・ユーノとアルフのシールドを簡単に破りやがった」

ヴェノムヴァンデモンを見上げるブロスモン。

そして・・・

「スライドエボリューション！・・・グリーンドラモン！」

グリーンドラモンにチェンジする。

時間制限が付かないギリギリのサイズ（24M）で登場した。

フルサイズ（40M）はもしもの為にとっておく事にした様だ。

「よし、俺も・・・！スライドエボリューション！・・・ヴリトラモン！」

アグニモンもスライドエボリューションしてヴリトラモンに変化。グリーンドラモンとヴリトラモン、2体のビーストスピリットでヴェノムヴァンデモンに対抗する。

だが、ヴェノムヴァンデモンはグリーンドラモンの倍以上ある。

この2体でも太刀打ちできるかは・・・解らなかった。

「何て奴だ・・・グリーンドラモンが小さく見える・・・」

「どんだけでえんだあの野郎・・・」

クロノと孝昭が呆然と呟く。

ヴェノムヴァンデモンの前ではグリーンドラモンすら子供サイズに見えてしまう。

「孝俊・・・大丈夫かな・・・」

「今は彼らを信じるしかないよ・・・」

後ろで治療しているユーノとアルフ。

2人の前では、なのはがシールドを展開して防御している。

「うおおおおっ!」

グリーンドラモンの拳の連打がヴェノムヴァンデモンに直撃する。

「おらああああ!」

ヴリトラモンもヴェノムヴァンデモンの肩に飛び乗り、顔面に攻撃を加えて行く。

だが、ヴェノムヴァンデモンは少し顔を歪める程度で、堪えた様子は無かった。

「グウオオオオオ!」

「ぐああっ!」

ヴェノムヴァンデモンの放った【タイラントサベージ】が直撃し、吹っ飛ばされるグリーンドラモン。

グリーンドラモンが倒れ、地響きが起こる。

「孝俊!大丈夫!?!」

フェイトが駆け寄ってくる。

「大丈夫だ・・・これくらいでくたばりはしねえ・・・」

よろよると立ち上がるグリーンドラモン。

だが、今ので結構なダメージを負った様だ。

「何か・・・あいつに弱点でもあれば・・・」

フェイトがヴェノムヴァンデモンを見て呟く。

その頃、アースラでは・・・

「早く!ヴェノムヴァンデモンの解析急いで!」

「今、全速力でやっています!でもD・スキヤナの様なデータの羅列で、解析が殆ど不可能です!」

エイミィがクルー達に指令を出す、ヴェノムヴァンデモンの解

析は殆ど進まなかった。

あまりに複雑なデータの羅列、おまけにジュエルシードの力で更に複雑になっている。

「ううゝ・・・グリーンドラモンやヴリトラモンでも歯が立たないし・・・このままじゃ全滅だろう・・・」

頭を抱えるエイミイ。

あのままでは【ドラゴンカノン】や【スターライトブレイカー】でも決定打にはならないだろう。

そこに・・・パラレルモンがやって来た。

「あ、あの・・・オラで良かったら、協力するだよ・・・」

おずおずと喋るパラレルモン。

「え！？か、解析できるの！？」

「お、オラだつて・・・ヴェノムヴァンデモンには敵わねえだが、究極体の端くれだべ・・・少しくらいは力になれるはずだべ・・・！」

力強く言うパラレルモン。

パラレルモンもヴェノムヴァンデモンと進化レベルは同じ究極体。もしかしたら、多少の解析は可能かもしれない。

「じゃ、じゃあお願いできる？」

「任せるだ！・・・そのコンピュータの中に入るから、そこからオラの指示通りにして欲しいだ」

「うん、解った！」

そう言つて、パラレルモンはコンピュータの中に入り込む。

すると・・・先程まで訳の解らないデータの羅列が、アースラの技術で辛うじて解析できるレベルにまで簡単になった。

パラレルモンがデータの羅列を出来るだけ解析し、高速でプログラムを解り易く組み替えたのだ。

流石に究極体の力は伊達じゃないようである。

「す、凄い……！これなら、何とかなりそうだよ！」
エイミィはそう言うと、高速でキーボードを叩いて行く。
「早く弱点を見つけて……あの子達に知らせなくちゃ……！」

Side なのは

さつきから一方的な展開……拓也さんも孝俊さんも頑張ってる。
でも……ヴェノムヴァンデモンは強すぎるの。

まるで歯が立たない……フェイトちゃんやクロノ君、孝昭さん
も全力で立ち向かっている。

でも、フェイトちゃんの【サンダースマッシャー】も……

クロノ君の【ブレイズキャノン】も……

孝昭さんの【ディバインブラスター】も、殆ど効いてない……

どうしよう……このままじゃ皆やられちゃう……

私も【スターライトブレイカー】の準備はしてるけど……今の
あいつに撃っても多分倒せない……

なんとか……なんとかしないと……！！

Side フェイト

ジュエルシールド・・・まさかあそこまでの力があつたなんて・・・
パワーアップしたバルディッシュ・ドラグーンでも殆どダメージ
が与えられない。

孝俊が1度【ドラゴンカノン】を撃つたけど・・・上半身の外殻
に少しヒビが入った程度で、それ程のダメージは無かった。

あれじゃフルチャージでも大したダメージは期待できない。

拓也つて人も【コロナブラスター】や【フレイムストーム】を放
つたけど、やっぱり殆どダメージが無かった。

私の【フォトンランサー・フアランクスシフト】は詠唱に時間が
掛かる・・・とてもそこまでの時間の余裕は無い。

このままじゃ全滅してしまう・・・母さんを・・・そして姉さん
を助けないといけないのに・・・

Side 孝昭

おいおい、マジかよ・・・あいつにはまるで攻撃が通じねえ・・・
俺の渾身の【デイベインブラスター】すら、あいつには掠り傷に
しかならねえのかよ・・・

俺も切り札は残してあるが・・・今の奴に撃つても、大打撃は望
めんだろう。

孝俊の【ドラゴンカノン】もあいつの外殻にヒビが入っただけ・・・
どうすりゃいいんだ・・・

何か奴に大打撃を与える方法は無いのか・・・！

S i d e クロノ

何て奴だ・・・あれだけの攻撃を喰らっても殆ど平気だなんて・・・
せめて弱点が解れば何とかなるかもしれないが・・・
だが、奴の防御力は半端じゃない・・・しかも巨体に似合わず素早い。

それに攻撃力も右腕の一振りですーノとアルフのシールドを砕いてしまう程だ・・・

遠距離も【カオスフレイム】で攻撃してくるから隙が無い。

僕の【ブレイズキャノン】も、奴には大して効いてない。

このままでは撃つ手が無い・・・何か突破口を探さないと・・・！

S i d e ユーノ

恐ろしい敵に出会ってしまった。

こんな奴に勝てるのか・・・！？

いや、勝たなくちゃいけないんだ・・・このまま僕達が負ける様な事があれば、次元世界全てが危ない。

なのは達の地球も、僕の故郷も、クロノ達の故郷・ミッドチルダも・・・

そして、拓也さん達の地球もいずれは奴に支配されてしまう・・・

それだけは何としても阻止しないと。

負けてたまるか……！

僕は僕の……出来る事を全力でやる……！

Side アルフ

なんてこつたい……

孝俊、拓也、孝昭、クロノ、フェイトの必殺技がことごとく通じないなんて……

アタシやユーノの障壁も簡単に碎かれちまう。

孝俊の【ドラゴンカノン】すら奴の外殻にヒビが入るだけ。

パワーアップしたフェイトの魔法でも掠り傷程度だなんて……

何とかして奴を倒して帰らないと……

折角、フェイトがプレシアと解り合えて……なのはって友達も

出来そうなのに……

負けてたまるかい……絶対に……！

Side 拓也

ちつ……なんて野郎だ。

顔面目掛けて【コロナブラスター】喰らわせても少し血が出た程度か……

ジュエルシードでパワーアップしてるから余計に性質たちが悪い。
しかも俺はさつき、「スターライトブレイカー」をチャージ中の
なのはちゃんを庇って、奴の【カオスフレイム】をまともに喰らっ
ちまったから、結構なダメージを負ってしまった・・・
確か、ヴェノムヴァンデモンには【ヴェノムインフューズ】とか
いう破壊光線っぽい物があるって聞いた事があるし・・・
やべえな・・・こりゃマジで全滅ルートだぞ・・・
アースラの方では解析をしてくれてるんだらうけど・・・満足に
は行かねえかもな・・・

Side 孝俊

俺の【ドラゴンカノン】をまともに受けて外殻にヒビが入っただ
け・・・か。

さつきは【閃光斬】を喰らわせてやったが、逆に機龍牙が折れち
まったし。

まあ、機龍牙は再構成すれば再生するから別に問題は無いが・・・
ダブルスピリットは負荷が掛かって使えない・・・無理やり使っ
てもD・スキヤナがイカレちまうのがオチだろう。

ったく、なんつー化物だ・・・あいつを倒さねーと、プレシアも
助けらんねーし、アリシアも取り戻せねえ・・・

それに、元の世界にも帰れねえ・・・
だが、全員攻撃でもあいつには大したダメージが行かない・・・
と、なると・・・

．．．．．【アレ】しか．．．無いか．．．

S i d e o u t

ヴェノムヴァンデモンの猛攻を受けて満身創痍のグリーンドラモン。
ン。

すると．．．一気に体が大きくなる。

「フルサイズチェンジ．．．！」

グリーンドラモンが最大サイズの40Mになる。

制限時間は5分．．．その5分に全てを賭けた！

「ぬおおあぁっ！」

ドオンツ！と、グリーンドラモンのパンチがヴェノムヴァンデモンの顔面にヒットする。

「グオオオッ!？」

仰向けに倒れるヴェノムヴァンデモン。

大きくなったせいか、パンチの威力が上がっている。

「おいおい．．．どこの怪獣大決戦だよ．．．」

その光景を見て呆然とする孝昭。

「だが、チャンスだ．．．皆、今の内にありったけの魔力をチャージするんだ！」

「うん．．．！」

「あいよっ！」

クロノの言葉に、フェイトとアルフが頷く。

なのはは既にチャージを完了。魔法陣を展開すれば、いつでも撃てる状態である。

「ぬんっ！」

「ガアアッ！」

グリーンドラモンとヴェノムヴァンデモンの打ち合いが続く。

最初こそ押していたグリーンドラモンだが、徐々にヴェノムヴァンデモンの圧倒的パワーの前に劣勢になる。

「グオオオ・・・【ヴェノムインフューズ】！」

ヴェノムヴァンデモンの腹部の口から破壊光線が発射され・・・それがグリーンドラモンに直撃した！

「ぐわああああっ！」

吹っ飛ばされ、仰向けに倒れるグリーンドラモン。

既に体力は限界寸前だった。

（くそ・・・使いたくなかったが・・・もう本当に【アレ】を使うときゃねえ・・・！）

グリーンドラモンはゆっくり立ち上がる。

「フェイト！」

「え・・・？」

「これ・・・持ってる」

グリーンドラモンはフェイトを呼ぶと、自分のD・スキャナを投げ渡す。

「え・・・これって・・・」

「・・・それをバルディッシュ・ドラゲーンの宝石部分に接続すれば、150%の力が出せる」

そう言い放つと・・・グリーンドラモンがその場で仁王立ちにな

り・・・

「はああああああああああああ・・・」

エネルギーを溜め始める。

だが、ドラゴンカノンは既に通じない事が解っている筈・・・全員がそう思った。

・・・ヴリトラモン以外は。

「ま、まさか・・・孝俊・・・アレを使うんじゃ・・・よ、よせ孝俊ーーーーっ！！」

ヴリトラモンは青ざめ、グリーンドラモンを制止しようとする。

だが、その間にもグリーンドラモンはエネルギーをチャージしていく。

「た、拓也さん・・・一体何が起こるんですか・・・！？」

なのはがヴリトラモンに尋ねる。

「あいつ・・・命を賭けるつもりだ！俺は前にアレを1度だけ見た事がある・・・運が悪けりゃ命を落とす真正銘、あいつの最後の切り札だ・・・！」

「ふええ！？」

「そ、そんな・・・や、やめて孝俊・・・！！」

ヴリトラモンの言葉になのはは驚愕し、フェイトは愕然として叫ぶ。

「・・・スマン。だが、もうこれしか手が無いんだ・・・！」

そう言い終わると、グリーンドラモンの巨躯が炎に包まれた。

それは・・・巨大な炎の塊だった。

「グリーンドラモンのエネルギー急上昇！オーバーヒート状態です！」

「ええ！？な、何が起こるの！？」

アースラ内でも、グリーンドラモンの現状に大混乱だった。パラレルモンは、急いでヴェノムヴァンデモンについて解析していた。

「もう少しだ・・・もう少しで解析終わるだよ・・・！」

「急いで！パラレルモン！」

「了解だ！」

燃え盛る炎に包まれるグリーンドラモン・・・

「行くぜ・・・これが俺の・・・最後の切り札だ・・・！」

そう言って走り出し・・・ガツチリとヴェノムヴァンデモンに組み付いた！

その熱さに、ヴェノムヴァンデモンが苦しそうに叫ぶ。

「グガアアアア・・・！ハナセ・・・ハナセエエエエ・・・！」

「てめえにやここで・・・消えてもらっぜ・・・！」

そして、炎が一際大きくなったところで、グリーンドラモンの叫び声が響いた。

「果てる・・・【ドラゴニック・ダイナマイト】 オオオオオオ！！」

！

カッ！ドゴオォー——————ン！！

！！

次の瞬間、とんでもない大爆発が起こった……

グリーンドラモンの最後の切り札……【ドラゴニック・ダイナ
マイト】だ。

ドラゴニック・ダイナマイト 使用者：面林孝俊

龍のスピリットの最後の切り札。早い話が自爆である。
全ての進化形態で使用できる。

ビーストスピリットの場合、【ドラゴンカノン】の数十倍の破壊力があるが、これを使えば当然戦闘不能になる。しかも、かなり低確率だが運が悪ければ命を落とすという恐ろしい技。

おまけに、使えば使う度に命を落とす確率が上がる。

その場が大爆発に巻き込まれる。

なのは達は1か所に集まって障壁を何重にも展開する。

そして、とんでもない衝撃がなのは達にも襲い掛かった。

だが、拓也以外の全員が障壁を張っていた為、何とか耐え切った。

煙が晴れると・・・そこには大量の瓦礫の山があった・・・

「孝俊・・・たか・・・とし・・・！」

フェイトは・・・両膝をついて、呆然としていた。

「バカ野郎・・・孝俊いいーーーーっ！！！」

ヴリトラモンの叫びが時の庭園に響き渡った・・・

孝俊はどうなったのか！？

そして、ヴェノムヴァンデモンは・・・？

次回、完全決着！

続く

第22話 命を賭けてこそ最後の切り札だと言える気がする（後書き）

はい、第22話終了です。

孝俊・・・自爆しました（汗）

まあ、これも結構前から考えてたのですが・・・

拓也「・・・マジで死なねえだろうな・・・？」

鷹「まあ・・・それは次回まで待ってくれ（汗）」

フェイト「孝俊・・・」

命を賭けた孝俊の必殺技。

これで勝負はどう動くのか・・・！？

次回予告、美由希さんお願いします！

美由希「え、ここで私！？良いのかな・・・

次回、リリカルなのはフロントティア第23話【苦戦すればする程勝った時は気持ち良い気がする】お楽しみに！」

第23話 苦戦すればする程勝った時は気持ち良い気がする(前書き)

第23話です。

遂に今回で決着がつく・・・と思います。

今回も名(迷)言コーナーです。

- 俺がナメてんのは土方さんだけでさア (沖田総吾 銀魂)

- ・・・どーも、子守狼です (坂田銀時 銀魂)

- 大好きです。今度は嘘じゃないっす (桜木花道 スラムダンク)

- 苦しいのは全部・・・俺だけで良いっすよ (猿野天国 Mr. Fullswing)

- 戦う!そして俺達は新たな伝説を作る! (神原拓也 デジモンフロンティア)

孝昭「またしても拓也が入ってるな」

拓也「・・・我ながら恥ずかしいな。今思うと・・・／＼／」

クロノ「では・・・第23話、始めるぞ！」

第23話 苦戦すればする程勝った時は気持ち良い気がする

第23話副題【不屈の火龍】 レイジング・サラマンダー

孝俊の決死の【ドラゴニック・ダイナマイト】が炸裂し、大爆発。大量の瓦礫が積もっており、それを呆然と見つめるヴリトラモン達。

「たか・・・とし・・・」

「フェイト・・・」

「フェイトちゃん・・・」

両膝をついて愕然とし、涙を流すフェイト。

アルフもフェイトの傍で俯き、なのははフェイトの肩を支えている。

少なくとも、あれだけの大爆発・・・間違いなくただでは済まないだろう。

「いくら奴を倒す為とはいえ・・・なんて無茶を・・・」

クロノも瓦礫の山を見つめ、呟く。

確かに、ヴェノムヴァンデモンの確保又は撃破は自分達の使命だった。

しかし、よもやあそこまでやろうとは思ってもよらなかった。

「孝俊、お前って奴は・・・大した漢おかしだぜ・・・」

孝昭は、ヴェノムヴァンデモンを倒す為に自らの命を賭した孝俊の行為に感服していた。

彼から見て、孝俊は誇るべき自分の親友ともだった。

そして・・・まだ生きている事を願った。

カラントツ・・・

「孝俊・・・ん!?」

ヴリトラモンが孝俊の名前を呟くと、積もっていた瓦礫の一部が小さく崩れた。

良く目を凝らして見ると・・・

「・・・う・・・」

進化が解けてズタボロの孝俊がいた!

「おいみんな!生きてる!孝俊が生きてるぞ!」

そう叫ぶと、孝俊の元に駆けていくヴリトラモン。

皆も慌ててヴリトラモンについて行く。

「大丈夫か!?しつかりしろ!」

「孝俊!」

「生きてるか!?!」

「孝俊さん!」

ヴリトラモン、フェイト、アルフ、なのはが孝俊に呼びかける。

「へへ・・・なんとか・・・な・・・」

小さく、弱々しい声で返す孝俊。

なんとか命を落とさずには済んだようだった。

「孝俊・・・良かった・・・！」

フェイトが孝俊に抱きついてすすり泣く。

「はは・・・どーやら俺は死神に嫌われてるみてーだな・・・まだ生きてるし」

冗談めかして笑う孝俊。

だが、もう歩く力も残されていなかった。

さっきの【ドラゴニック・ダイナマイト】で全エネルギーを使い果たしたせいである。

「それに・・・剣術教えるってお前との約束を破らずに済んだし・・・な」

「うん・・・」

そう言つて、フェイトの頭を撫でる孝俊。

フェイトは目に涙を浮かべながらも、笑顔で答える。

「・・・そうだ・・・ヴェノムヴァンデモンは・・・!?!?」

思いだしたように、ヴリトラモンに尋ねる孝俊。

「解らねえ・・・だが、あれだけの大爆発に巻き込まれたんだ・・・あれでくたばって無けりゃマジで化物だぜ・・・」

瓦礫の山を見つめ、呟くヴリトラモン。

出来るならあれでヴェノムヴァンデモンにはくたばっててもらいたい・・・そう思っていた。

「大丈夫ですよ・・・孝俊さんが命を賭けてまで攻撃したんですから・・・」

なのはがヴリトラモンに言う。

なのはも、あれでヴェノムヴァンデモンが生きてるとは思えない・

・否、信じたくなかった。

が、次の瞬間・・・瓦礫の山から巨大な腕がなのはに襲い掛かった！

「なのはちゃん、危ねえっ！」

「ふえっ!？」

咄嗟にヴリトラモンがなのはを突き飛ばした。

そして・・・

『ボゴオツ!』

「が・・・はあっ・・・!」

ヴリトラモンが代わりに直撃を喰らい、吹っ飛ばされた。

壁に叩き付けられ、これまでのダメージの蓄積もあつてか・・・

ヴリトラモンは進化が解けて拓也の姿に戻ってしまった。

「た、拓也さん！」

なのはが慌てて拓也に駆け寄る。

拓也は全身ズタボロで、立ち上がるのがやっとな状態だった。

ヴェノムヴァンデモンの猛攻を受け、なのはを庇って【カオスフレイム】の直撃を喰らい、更に今またなのはを庇って吹っ飛ばされてしまった。

もはや拓也の体力は無に等しかった。

瓦礫の山を見ると・・・全身ボロボロのヴェノムヴァンデモンがいるではないか。

あろう事か、孝俊の命懸けの【ドラゴニック・ダイナマイト】をもってしても倒す事が出来なかったのだ。

だが、上半身の外殻はボロボロに砕け、腕や脚は焼けただけ、血も流れている。

大ダメージは免れなかったようだった。

「野郎……あれでもまだくたばってねえってか……！」

「なんて化物だ……！」

孝昭とクロノが目を見開いて驚く。

あの【ドラゴニック・ダイナマイト】程の破壊力を持った技など見た事が無い。

あれほどの大爆発をくらえば、どんな魔獣でも間違はなく粉々に吹っ飛んでしまうだろう。

だが、あのヴェノムヴァンデモンは……耐えていたのだから。

その頃、アースラでは……

「……やったべ！解析が終わったべよ！奴の弱点は……腹部の口だべよ！」

「なるほど……さっきの孝俊君の自爆でそこにも衝撃が入ったからあんなにボロボロになったんだね……！」

パラレルモンが解析を終え、ヴェノムヴァンデモンの弱点を発見する。

エイミイはヴェノムヴァンデモンの現状に納得する。

「よし！みんなに伝えないと……！」

「それなら……私がやるわ……！」

そこに、プレシアが現れる。

呪いが進行しているにもかかわらず、やって来たのだ。

「プレシアさん!？」

「私が一斉にあの子達に念話で送るわ・・・念話なら、奴にもバレない筈よ」

現れたプレシアに驚くパラレルモン。

プレシアは、念話で一斉にフェイト達に情報を送ろうと言うのだ。

(フェイト・・・聞こえる?)

(え・・・母さん!?)

突如聞こえたプレシアの念話に驚くフェイト。

(良く聞きなさいフェイト・・・あのヴェノムヴァンデモンの弱点は腹部の口よ・・・)

(腹部の・・・口・・・)

プレシアの念話は、なのは、アルフ、ユーノ、クロノ、孝昭、孝俊にも伝わっていた。

この中で唯一魔力を持たない拓也には聞こえなかったが(汗)

(奴が口を開けた瞬間に、貴方達の最大の魔法を奴の弱点に撃ち込みなさい・・・ボロボロになった今のあいつなら・・・それで倒せる筈よ・・・)

(解った・・・!ありがとう・・・母さん・・・!)

フェイトは念話を遮断すると、先程孝俊から預かったD・スキヤナを【バルディッシュ・ドラゴン】の宝石部分に接続する。

【Max Power・・・New Magic Stand by】

これまでに無い程の膨大な魔力が【バルディッシュ・ドラゴン】に宿る。

新しい魔法が・・・追加されていた。

「・・・俺はもう戦えねえ・・・せめて俺の炎のスピリットの力を・・・なのはちゃんに・・・」

拓也がD・スキヤナをレイジングハートに向けると・・・D・スキヤナから赤い光が照射される。

光はレイジングハートの宝石部分に当たる。

すると・・・レイジングハートが形状を変えて行くではないか。

【Power Charge・・・Salamander mode】

「ふえ？レイジングハートが・・・！」

見ると・・・白い部分が赤に変わり、金色の部分はメタリックレッドに変わる。

更には炎の模様が施されている。

フェイトのバルディッシュ同様、なのはのレイジングハートもパワーアップしたのである。

レイジングハート・サラマンダー 使用者：高町なのは 今作オリジナルデバイス

なのはのレイジングハートが、炎のスピリットの力でパワーアップ。バルディッシュ・ドラグーンと同様に従来の魔法をパワーアップして使える。

更に、炎属性を付加する事も出来る。

勿論、新技や新形態も追加されている。出力は従来の2.5倍。エネルギーが無くなり次第、元のレイジングハートに戻る。

「俺の炎のスピリットの力で一時的にパワーアップさせた・・・俺の分まで、奴にぶち込んでくれ・・・！」

「解つたの、任せて！行くよ！レイジングハート！」

【All right my master】

そして・・・先程までチャージしていた【スターライトブレイカー】を発射する構えに入る。

魔法陣を展開し・・・それが爆炎に包まれる。

「よし・・・こつちも行くぞ、バーニングブロス！切り札行くぜ！」
『おうよ！キャノンフォームでい！』

すると、バーニングブロスが変形を始める。

2門の砲身を形成し、トリガー形式のハンドキャノン砲になる。

これが、バーニングブロス最強形態の【キャノンフォーム】である。

孝昭が最大の魔法を放つ時のみに使用する切り札。

バスターフォームでは最大魔法の衝撃に耐えられない為に、この形態がある。

「僕も・・・最大の一撃を撃たせてもらおう！」

【Brazee Cannon Full Power】

クロノもS2Uにありつただけの魔力を込めて行く。

「グウウ・・・オオオ・・・！」
ヴェノムヴァンデモンが腹部の口を開いてエネルギーを集める。
その瞬間を、4人は見逃さなかった！

【Dragon Smasher】
「撃ち抜け、雷龍！【ドラゴンスマッシャー】！」
バルディッシュ・ドラグーンから極大の魔力砲が撃ち出された。
その威力は【ドラゴンカノン】にも匹敵する程だった。

【Star Burst Breaker】
「これが私と拓也さんの全力全開！」
魔法陣が一際燃え上がり・・・
「【スターバーストブレイカー】！」
拓也の力も合わせたなのは新しい魔法、【スターバーストブレイカー】が発射された！

『セツトレディー！』
「唸れ、大地の息吹・・・爆風一陣・・・！」
2門の砲門に赤い魔力波が集まって行く。
それは【ディバインプラスター】とは比べ物にならない程の・・・
膨大な魔力だった。

すると、ヴェノムヴァンデモンの腹部の口に【?】の文字が浮かび上がる。

【Stand by ready】

「リリカル、マジカル、ジュエルシードナンバー?、封印!」

【Sealing】

ヴェノムヴァンデモンが消滅していき・・・元のヴァンデモンの姿に戻った。

なのははレイジングハートを構えて、落ちて来るジュエルシードを回収した。

【Received Number?】

「よし!回収成功だ・・・これで全部のジュエルシードが集まったな・・・!」

孝昭がガッツポーズをしながら言う。

「お、おのれええ・・・あと一歩のところだ・・・!」
ヴァンデモンがボロボロの状態で拓也達に迫ってくる。
拓也、孝俊は勿論、クロノと孝昭も既に体力の限界を迎えていた。
だが、拓也と孝俊を庇うように、なのはとフェイトが立ちはだかる。

「ここまでだ・・・もうお前に勝ち目は無い・・・!」

「大人しく降参するの!」

バルディッシュ・ドラグーンとレイジングハート・サラマンダー

をヴァンデモンに向ける2人。

「ふん・・・！厄介なデジモンに進化出来るその2人がその有様だ・・・貴様ら如き、この姿でも・・・！」

「・・・私達だけじゃない・・・！」

【Blade Form Setup】

バルディッシュ・ドラグーンが変形し、剣の形状になる。

ロングソードを模した真っ直ぐな刃。

一般的に良く見られる中型の剣である。

「拓也さんと孝俊さんの力も・・・私達の中に宿ってる・・・！」

【Lancer Mode Setup】

レイジングハート・サラマンダーも変形し、槍の形状になる。

炎の力が宿っている為か、桜色ではなく真っ赤な魔力刃が先端に形成されている。

バルディッシュ・ドラグーンの新形態【ブレードフォーム】。

同じくレイジングハート・サラマンダーの新形態【ランサーモード】

が姿を現した。

金色と桜色の魔力波がそれぞれのデバイスから溢れ出している。

「な、何いい・・・!?」

「凄まじい魔力に後ずさるヴァンデモン。
流石に予想外だったらしく、顔が引きつってしまっている。」

「この刃で・・・全てを断ち切り、終わらせる・・・!」

「みんなの力を・・・叩き込むの!」

「ぐぬ・・・だが、こつちには人質が・・・」

「ヴァンデモンがアリシアの亡骸の入ったポッドがある方を振り向くが・・・」

「そこには何もなかった。」

「なっ・・・無い・・・だと!?!」

「ははっ、もう遅いよ!アタシが回収させてもらった!」

「アルフが隙を衝いてアリシアの亡骸を回収していたのだ。
これでもう、何も心配はいらなくなった。」

「フェイト・・・お前の思いの丈を・・・奴に残さず叩き込め・・・
!」

「孝昭に肩を支えられ、孝俊がフェイトに叫ぶ。」

「なのはちゃん・・・君の全力全開・・・あいつに思い切りぶち込むんだ・・・!」

「拓也も壁に寄りかかった状態でなのはに叫ぶ。」

「うん・・・!」

「はい!」

「2人がそれぞれデバイスを構える。」

「そして、凄まじい勢いでヴァンデモンに突入する。」

「フェイトは超スピードで突入しながら、横に大きく剣を振りかぶる。」

った。

【Raikou-Zan】

魔力刃に凄まじい電撃が宿る。

フェイトがイメージした剣は・・・孝俊の【閃光斬】の様な速くて鋭い斬撃。

その名は・・・

「【雷光斬】！」

バシユウツ！

「がああああつ！」

綺麗に叩き斬られ、苦しむヴァンデモン。

だが、追い打ちをかけるようになるのはが突入して来た！

【Burning Spartan】

炎を纏ったレイジンググハート・サラマンダーを突き出し、ヴァンデモンに突っ込んだ。

なのはのイメージした槍は・・・拓也が持つような、全てを焼き尽くす紅蓮の炎。

そして・・・全てを貫くような超高速の一撃。

その名は・・・

「【バーニングスパルタン】！」

『ズドオオンッ！』

「うぐ……おああ……っ!?」

なのはの槍は……そのままヴァンデモンの体を貫通した！
腹に風穴を空けられ、苦しむヴァンデモン。

「とどめだよ！行くよ、フェイトちゃん！」

「うん……！」

顔を見合わせ、頷く2人。

「これが最後の全力全開なの！」

「母さんと……アリシア姉さんを苦しめた罪……ここで償って
もらう……！」

桜色と金色の巨大な魔法陣が2人の前に展開される。

そして……2人の最大の魔法が……再び放たれた！

【Star Burst Breaker】

【Dragon Smasher】

「【スターバーストブレイカー】！」

「撃ち抜け、雷龍……【ドラゴンスマッシャー】！」

ありつたけの魔力を込めた最高の一撃が……ヴァンデモンを飲み込んだ。

「うぎゃあああああああああ……！！！」

ヴァンデモン……遂に消滅。

それは……今回の事件が完結した瞬間だった。

「や、やった……！」

「遂に……やったな……！」

拓也と孝俊が顔を見合わせ、笑う。

孝昭とクロノも微笑み、安堵の表情を浮かべている。

「なのは……やったね！」

「うん！」

ユーノはなのはと笑い合っている。

彼もかなりの魔力を使い果たしてヘトヘトだった。

「やった……やったよフェイト！アタシ達が勝ったんだよ！」

「うん……やったね、アルフ……！」

アルフもフェイトに飛びついて喜んでいる。

フェイトも笑顔で答えていた。

「よし、みんな……帰ろうぜ！」

こうして……今回の事件は……幕を閉じたのだった。

後にこの事件は……こう呼ばれる事になる。

【ジュエルシード・VV事件】ヴェノムヴァンデモンと……

次回、プレシアの呪いを解く為にある人物が・・・
続く

第23話 苦戦すればする程勝った時は気持ち良い気がする(後書き)

第23話終了です。

なんとか孝俊は生きてました。

孝俊「自爆って・・・するもんじゃねえぞ・・・当たり前だけど」

拓也「ま、いいじゃねえか。生きてたんだし、黒幕もぶっ潰したしな」

フェイト「やっと・・・平和になるんだ・・・」

なのは「みんなお疲れ様なの」

鷹「では、次回予告・・・アルフさん、お願いします」

アルフ「あいよっ！えーと・・・」

次回、リリカルなのはフロンティア第24話【ハシヤギ過ぎには注意した方が良く気がする】お楽しみに！」

第24話 ハシヤギ過ぎには注意した方が良い気がする(前書き)

はい、第24話です。

今回で、完全に事件が後の事を含めて終わります。

今回も名(迷)言コーナー

- - 死に対する恐れを克服しなければ、どんな敵にだって勝てやしない(天宮勇介 百獣戦隊ガオレンジャーvsスーパー戦隊)

- - これ以上、僕の友達に手出しはさせない!(氷見友樹 デジモンフロンティア)

- - オヤジの栄光時代はいつだ?全日本の時か?・・・俺は・・・俺は今なんだよ!(桜木花道 スラムダンク)

拓也「え、友樹入ってんぞ!?!」

孝俊「なかなか良い言葉残すねえ、友樹君」

孝昭「だなぁ」

拓也「考えてみりゃ、あいつもなのはちゃんと同じ年で戦場に出たんだもんなあ」

プレシア「じゃあ、第24話・・・始まるわよ」

ドラゴニック・ダイナマイトを使った代償で身体がガタガタになっていたのだ。

だが幸いにも骨などに異常は無かった為、1、2日安静にしていれば大丈夫らしい。

「・・・すう・・・」

ちなみに、隣ではフェイトがぐっすり眠っていたりする。

フェイトは特に大した傷もなく、魔力の消費による疲労だけだった。

ちなみに、プレシアの呪いは・・・パラレルモン曰く、ヴァンデモンが消滅した事によって進行が殆ど止まり、すぐに死ぬような心配は無いという。

フェイトは、孝俊の身体にしがみ付く様に眠っていた。

今度こそ…今度こそ離さないと言ったように。

拓也は、というと・・・

「はい、おしまい」

「おう、サンキューな」

なのはに優しく手当てしてもらっていた。

怪我したメンバーの中では、一番優しく手当てされていたりする。拓也も、孝俊ほどではないものの、かなりの傷を負っていたのだ。頭に包帯を巻き、腰、両腕、左脚にも包帯が巻かれていた。

利き足である右足を負傷しなかったのは、不幸中の幸いだらう。

ユーノとアルフは、まともに一撃を喰らった以外は特に傷が無かった為、特に大した治療は行われなかった。

アルフはフェイトの使い魔なので、フェイトの魔力が回復すれば

ある程度戻せる為、心配はいらない。

「・・・それにしても・・・疲れた・・・ひと眠りするか・・・」

「んー・・・私も・・・少し休むの・・・」

なのははそう言っていると、拓也に向かって倒れ込む。

「おおっ!？」

拓也は慌ててなのはを抱きとめた。

なのはは、そのまま眠りに落ちていったのだった。

「・・・お疲れさん」

拓也はそう呟くと、なのはの頭を優しく撫でていた。

そして・・・座って壁にもたれ、2人並んで仲良く眠ったとさ・・・

その頃、パラレルモンは・・・

「・・・これでよし、だべ。あとは皆が回復するのを待って、プレシアさんの呪いを解く準備に入るだ」

「・・・礼を言うわ。パラレルモン・・・」

プレシアの治療を行っていた。

「いやあ、迷惑掛けちゃったんだあ・・・これ位は当然だべよお・・・」

パラレルモンも、ヴァンデモンの側で強制的とはいえ活動していた。

その為、罪悪感が彼にはあったのだ。

「まあ、パラレルモンは今回の事件の解決に大いに貢献した訳ですし、情状酌量の余地は大いにありますよー?」

エイミィがパラレルモンの隣で言う。

そう、パラレルモンがヴェノムヴァンデモンのデータを解析したおかげで、弱点を見つける事が出来た。

ヴァンデモンの陰謀もパラレルモンによって詳細が明らかになった。

パラレルモンの罪が軽減されるのは火を見るよりも明確だったのである。

「お、オラは別に構わねえだ・・・で、でもプレシアさんやフェイトちゃんは・・・」

「・・・フェイトちゃんは、何も知らなかった訳だし・・・無罪だと思う。悪くても保護観察になるだけだと思うよ？」

自分の事よりもプレシアとフェイトの事を心配するパラレルモン。・・・つくづく良い奴だなあ、と思ったりするその場の一同。

そんな事を思いながら、エイミィは話した。

「プレシアさんについては・・・ちょっと厄介な事になってるんだよね・・・」

「厄介・・・？」

エイミィの言葉に首を傾げるパラレルモン。

「黒幕に操られてたから仕方ないっていう温情派と、これだけの騒ぎを起こしたんだから然るべき処罰をついていう強硬派に分かれてて・・・」

「そんな・・・」

温情派・・・主にアースラの面々や、地上本部で孝昭の率いる部隊などである。

強硬派・・・地上本部の殆どの面々、更にはかつてプレシアが勤めていた中央の研究機関などがいた。

「・・・ちよいと調べてみるだけ・・・色々・・・」
パレルモンは真剣な目つきになり、アースラのコンピューターに入っていたのだった。

数日後・・・アースラ艦内にて。

「今回の事件解決について、大きな功績があつたものとしてここに略式ではありますが、その功績を称え、表彰いたします」

今回の【ジュエルシード・VV】ヴェノムヴァンデモン事件で、事件解決に導いたなのは・ユーノ・拓也・孝俊に表彰状が贈られる事になった。
「高町なのはさん、ユーノ・スクライア君、神原拓也君、面林孝俊君」

なのはが代表して、緊張した面持ちでリンディから表彰状を受け取った。

「ありがとう」
周りから拍手が起こる。

後ろではユーノ、拓也、孝俊が笑って見ていた。

ちなみに・・・今回の事件の重要参考人であるプレシア、フェイ

ト、パラレルモンについては、処分が決定していた。

パラレルモンは、今回の事件の黒幕であるヴェノムヴァンデモンの弱点を発見した事で温情措置がとられ、無罪となった。

フェイトについても、何も知らずに活動していた事もあり、また事件解決の功労者であるのはや孝俊の訴えもあって、これもまた無罪となった。

プレシアについては・・・無罪とは行かなかったが、少しの間の保護観察となっていた。

実はパラレルモンがプレシアに関するデータを調べに調べ尽くした。

そして・・・エネルギー駆動炉【ヒュウドラ】の事故についても調べた。

そこで驚きの事実があったのだ。

あれはヴァンデモンが細工をして暴走させたのだが・・・実はヴァンデモンが手を加えなくても、遅かれ早かれ暴走していただろうとの事だった。

更に呆れた事に、中央はその駆動炉暴走の罪をプレシア1人に押しつけ、データを処分しようとしていた。

だが、パラレルモンが極僅かに残っていたデータを回収し、当時の安全管理のずさんさを資料に纏め、相手側に叩き付けてやったのだった。

当時の責任者が罪に問われ、プレシアについては、罪は殆ど問われなかった。

その結果、プレシアに厳罰を与えようとしていた強硬派も何も言えなくなってしまったのだ。

そして、プレシアが保護観察処分になった、と言う訳である。ついでに言うと、孝昭が保護観察責任者となったのだが。

アースラ艦内の食堂にて。

なのは・ユーノ・拓也・孝俊が食事をしながらリンディと話をしていた。

「次元震の余波は、もうすぐ収まるわ。ここからなのはさん達の世界になら、明日には戻れると思う」

「良かった・・・！」

「ただ、ミッドチルダ方面の航路は、まだ空間が安定しないの。暫く時間が掛かるみたい」

「そうなんですか・・・」

ヴァンデモンが起こしていた次元震も収まりつつあった。

なのは達の世界には、翌日にでも帰れそうだった。

しかし、ユーノの世界については、まだ余波の影響があるらしく、すぐには無理そうだった。

「数ヶ月か半年か、安全な航行が出来るまでそれくらいは掛かりそうね」

「そうですか・・・その、まあうちの部族は遺跡を探して流浪してる人ばかりですから、急いで帰る必要も無いと言えは無いんですが・・・でもその間、ここにずっとお世話になる訳にもいかないし・

「
ユーノの部族は、遺跡発掘が主な仕事なので、普段から殆ど人が出払っている。」

ユーノとしては、帰るまでの期間をどう過ごすかの方が問題だった。

「じゃあ、うちにいれば良いよ。今まで通りに！」

「なのは、良いの？」

「うん！ユーノ君さえ良ければ！」

「じゃあ、その、えっと・・・お世話になります」

ユーノの問題は、あっさりと解決したのだった。

「で、拓也君と孝俊君についてなんだけど・・・」

「あ、その辺は心配いらないうすよ。パラレルモンが近い内に時空間ゲートを開いて、俺達を元の世界に返してくれるらしいんで」

拓也と孝俊については、パラレルモンが責任を持って元の世界に送ってくれるという。

元々、パラレルモンの能力でこの世界に飛ばされたのだから、帰る事も当然可能だ。

「そっか・・・拓也さん達・・・帰っちゃうんだね」

なのはが少し悲しそうな顔をする。

「んー・・・そのうちに、な。俺達の仲間の事も心配だから」

「まあ、すぐには帰らねえさ」

孝俊と拓也が顔を見合わせる。

もう少しこの世界にいるつもりらしい。

「そっだ・・・フェイトとプレシアについては・・・この先はどうなるんですか？」

孝俊がリンディに尋ねる。

「プレシア・テストロツサとフェイトさんについては、これからあの2人は一緒に暮らすことになると思うわ」

「そうですか・・・良かった」

保護観察責任者である孝昭が、色々と手を回してくれたらしい。

余談だが…アリシアについては、ミッドチルダに墓を建てる事に決めたらしい。

それまで、アリシアの亡骸はアースラ側で厳重に保管する事になった。

と、そこに・・・パラレルモンがやって来た。

・・・なぜかクルクルと回転しながら。

「何やっとなんじゃい」

スパーン！と、何処から取り出したのか、ハリセンでパラレルモンをぶっ叩く拓也だった。

「いくらヴァンデモンがいなくなったからって、ハシヤギ過ぎだろ・・・で、何の用だ？」

「え、えっとだな・・・そろそろプレシアさんにかけてられた呪いを解きたいと思ってるだよ」

ハリセンで叩かれた頭をさすりながら話すパラレルモン。

「でも、どうすんだ？」

ハリセンを持ったまま尋ねる拓也。

他のメンバーも首を傾げている。

「……オファニモンに来てもらっただよ」

「……その手があったか！」

拓也と孝俊が顔を見合わせて、驚いていたのだった。

数十分後、食堂に集められたフェイト、アルフ、プレシア、クロノとエイミィ、孝昭も立ち会っている。

そこには……既にオファニモンが現れていた。

「あなたが、プレシア・テストロツサさんですね……？」

「え、ええ……」

神聖なオーラを放ちながら、プレシアに尋ねるオファニモン。

流石のプレシアも、そのオーラに少し圧倒されている。

「事情は孝俊君から聞きました。今から貴女にかけられている呪いを解きます」

「お願いするわ……」

「やれそうか？オファニモン」

拓也がオファニモンに尋ねる。

「ふふっ、私はこれでも三大天使の1人です。たかだか完全体の呪いごとき、解けない事はありませんよ」

余裕の表情を見せるオファニモン。

そう言つと、武器を構える。

「少し、衝撃があるかもしれませんが……我慢して下さいね？」

「ええ」

そして……オファニモンの武器・ジャベリンの先端が虹色の光

を発し・・・光線を射出した。

「【エデنزジャベリン】！」

光線がプレシアを包み、閃光が煌めいた。
そして、光が晴れる。

「・・・身体の方はどうですか？」

「・・・す、凄いわ・・・全然苦しくない・・・痛みも何も全く無いわ・・・！」

プレシアが驚いて自分の身体の具合を確認する。

身体が軽い、苦しみも無い、ましてや血を吐くなど有り得ない。

「母さん・・・良かった・・・！」

「フェイト・・・！」

互いに抱き合って喜ぶプレシアとフェイトだった。

「流石に5年前、ケルビモン（悪）を一時的とはいえ（善）に戻した浄化光線【エデنزジャベリン】・・・大した威力だぜ」

拓也が腕を組んで感心していた。

流石は究極体・・・完全体の呪いなど、いとも簡単に消し飛ばしてしまった。

「良かったな・・・プレシア、フェイト」
孝俊が笑って2人に言う。

その顔は・・・本当に嬉しそだった。

「ええ・・・何から何まで・・・あなたには本当に感謝しているわ・・・」

「ありがとう・・・孝俊・・・！」

プレシアは涙を浮かべ、フェイトは孝俊に抱きついた。

「そーいやオファニモン・・・俺達の世界はどうなってんだ？」

拓也がオファニモンに尋ねる。

「心配はいりません。高雄君、輝二君を中心に団結して戦っています」

「そうか・・・まあ、輝二に任せてりや大丈夫だな」

オファニモンの言葉に安堵する拓也。

源輝二・・・拓也と共に5年前、デジタルワールドを救った英雄の1人で、拓也が最も信頼する仲間の1人である。

「拓也さん達の仲間って・・・強いんですか？」

「ああ、俺と同じくらい強いぜ？」

拓也の仲間達が気になって尋ねるなのはに、笑いながら返す拓也。自分がいなくても、安心して留守を任せられる、心強い仲間達である。

「あ、そういえばプレシアとフェイトとアルフは・・・何処に住むんだ？」

「ああ、アタシとフェイトが暮らしてたマンションがあるだろ？今まで通りそこに住む事にしたよ」

孝俊の疑問に答えるアルフ。

今まで通りの場所で、一緒に暮らすようだ。

ちなみに、保護観察責任者である孝昭は、フェイト達の隣の部屋に住む事にしたらしい。

上の連中が何かと煩かったが・・・

「あー、気が向いたらねー」とか、「その辺はよく解らんねー」

と、適当に聞き流したという。
何とも彼らしい行動だ。

「アタシ達が地上に戻ったらさ、孝俊も一緒に住もうよ！孝昭も許可してくれてるしさ！」

「ん、まあ・・・プレシアとフェイトが良いって言うんならな」
アルフの誘いに、少し照れ気味に話す孝俊だった・・・

それから数日後・・・なのは達が地球に帰る日。

転送ポートの前に、なのは・ユーノ・拓也・孝俊が立っていた。
ちなみに、ユーノはフェレットモードになっている。

フェイト・プレシア・アルフはまだ少し準備に時間が掛かるが、
1、2日の内に出るようだ。

また、パラレルモンは時空管理局で働く事にしたらしい。

と、言うのも・・・あれだけの解析技術を持つてるのに、生かさないのは惜しいという事でリンディにスカウトされたと言う。

で、パラレルモンも自分が役に立てるならと、快くそれを了承した。

「それじゃ、今回は本当にありがとう」

「協力に感謝する」

「お前らほど心強い民間協力者は2度と出ねえだろうな」
リンディとクロノと孝昭がなのは達に礼を言う。
なのははクロノと握手を交わした。

「ユーノ君、帰りたくなったらいつでも連絡してね。ゲートを使わせてあげる」

「はい、ありがとうございます」

リンディがユーノに話しかける。

ミッドチルダへの航路が安定すれば、いつでもゲートを使わせてくれるらしい。

「拓也さんと孝俊さんも、元の世界に帰る時には連絡して欲しいだ。その時はオラが時空間ゲートを開くだよ」

「ああ、解った」

パラレルモンが拓也に言う。

呼んでくれればいつでも来てくれるらしい。

「じゃあ、そろそろ良いかな？」

「はい！」

「おう！」

エイミイの言葉に返事する4人。

「・・・それじゃあ」

「うん、またね・・・クロノ君、エイミイさん、リンディさん、パラレルモンさん、孝昭さん・・・！」

なのは達が光に包まれる。

クロノ達はなのは達に向かって手を振っている。

そして・・・なのは達は、地球へと降り立った。

海鳴臨海公園・・・なのは達はそこに到着した。

そして、すぐに高町家に直行。

なのはは家族の温かい歓迎を受け・・・笑顔だった。

それを見ていた孝俊と拓也も、笑顔だった・・・

そして翌朝・・・アリサとすずかも、無事に帰って来たなのはを見て安心したようだった。

更に、準備が済んだらしくプレシア・フェイト・アルフも地球にやってきた。

孝俊はアルフとの約束通り、元の世界に帰るまでフェイト達と一緒に過ごす事にした。

そこでプレシアと・・・

「非常に言いづらいんだけどね・・・料理教えてくれないかしら？」

「・・・What？」

「アリシアが死んでからろくにマトモな料理をしてなかったから・・・感覚を忘れちゃって・・・」

「おいおい・・・」

・・・こんなやり取りがあったりしたらしい。

その日の夜、高町家・・・なのは・ユーノ・拓也はなのはの部屋にいた。

なのはは、ベッドに倒れ込んでいる。

「はあく・・・おうちのベッドも久しぶり〜」

久々のベッドの感触に気持ち良さそうなのは。

「ユーノ君も拓也さんも、今日はゆっくり休んでね」

「うん!」「ああ」

ユーノは頷き、拓也も笑顔で返す。

「レイジングハートも、ホントにお疲れ・・・」

そう言つと・・・なのははすぐに眠りについた。

拓也はそれを確認すると・・・なのはに近付き、布団をかける。

「ホントにお疲れさん・・・」

なのはの寝顔を見て、微笑む拓也。

「・・・ねえ、拓也」

「・・・なんだ?」

ふと、ユーノが拓也を呼び止めた。

「・・・いつ、元の世界に?」

「・・・その内、だ」

そう言つて拓也は、なのはの部屋を後にするのだった。

次回は・・・何故か野球・・・？
続く

第24話 ハシヤギ過ぎには注意した方が良い気がする(後書き)

はい、第24話終了です。

オファニモンが実体で初登場(今回はホログラム)です。
プレシアの呪いも解け、ようやく平和が訪れました。

そんでもって今回は・・・何故か野球です。

前半〜中盤は野球、後半は・・・次回のお楽しみに(何)

では、次回予告・・・オファニモン、どうぞ〜

オファニモン「解りました。では・・・」

次回、リリカルなのはフロンティア第25話【人は得意分野になると生き生きする事がある気がする】お楽しみに・・・!」

第25話 人は得意分野になると生き生きする事がある気がする(前書き)

はい、第25話です。

今回は野球・・・野球と言えば・・・彼しかいませんが(汗)

今回は名(迷)言コーナーはお休みします。

あと、後書きで重大発表がありますので、最後まで読んでみて下さい。

アルフ「じゃ、始めるよ!」

第25話 人は得意分野になると生き生きする事がある気がする

第25話副題【炎のストッパー】

地球に戻って3日後・・・孝俊は・・・マウンドに立っていた。

「・・・はぁ・・・やっぱり投げなきゃ駄目か・・・」

何でこんな事になったのか？それは前日の夜に遡る。

高町家、PM8:00・・・夕食を終え、家族(+拓也)で話をしていた。

「明日の町内会対抗の野球大会なんだが・・・」

なのはの父・士郎が口を開く。

実は翌日、町内会対抗の野球大会があるらしい。

ちなみに士郎も参加する。

「どうかしたんすか？」

拓也が首を傾げて尋ねる。

「・・・実はうちの町内会のチームに投手が足りないんだ」

「・・・で・・・どうしろと？」

「なのはの兄、恭也が口を開く。
何となく父親が言おうとしている事は解るのだが。」

「……恭也か拓也君、投手出来ないか？」

「……やっぱりな。でも俺は無理だ……野球についてはからっきしだから……」

案の定だった。

しかし、恭也は即答で拒否。

剣術は一流でも、野球はからつきし駄目である。

打つ方は何とかなるかもしれないが、投手は無理だ。

「俺も野球はキャッチボール程度ですから、投手はちょっと……」

拓也もサッカーなら一流レベルだが、野球はイマイチである。

18・44M先のバッターのスライクゾーンに投げ込むのは、素人ではなかなか難しいのだ。

「あ……ねえ、拓也さん……」

「ん？」

ふと、なのはが何かを思いついたかのように拓也に話しかける。

「……孝俊さんは野球得意って言ってましたよね？」

「……だ。よし、フェイトの所に電話するか」

適任者が1人いるのを思い出した。

ちなみに孝俊は今、テストロッサ家に住んでいる。

その際に、孝俊から電話番号を教えてもらっていた。

その頃、フェイトのマンションの部屋では・・・

「くぁー・・・やっぱり孝俊の飯は最高だよ・・・」

「そうだね・・・」

夕飯が終わったばかりで、アルフが幸せそうな顔でソファに座っている。

フェイトもアルフの横でくつろいでいる。

ちなみに、プレシアは孝俊と一緒に台所で片付け中である。

「すまないわね・・・夕飯作ってもらって」

「まあ、気にすんな。住まわせてもらってたし、これくらいは当然だ・・・ってこの言葉、前にフェイトにも言った様な気がするが」

皿を洗いながら孝俊に礼を言うプレシア。

妙にエプロンが似合っていたりするのは気のせいだろうか。

孝俊は苦笑しながら返す。

『プルルルルル・・・』

ふと、電話が鳴った。

ちょうど洗い物を終えた孝俊が、手を拭きながら電話のある場所に向かう。

「はい、もしもしこちらテスタロッサ家です」

この電話番号を知ってるのは、せいぜいアースラの面々と高町家、あとは隣に住んでる孝昭くらいである。

孝俊はおどけた感じで電話に出る。

『もしもし、孝俊か？うまくやってんのか？』

「拓也か？まあ、それなりにやってるさ」

電話をかけて来たのは拓也だった。

リビングでは、フェイトが待機状態のバルディッシュを見ている。

「バルディッシュ・・・今回は本当にお疲れ様・・・」

フェイトが呟くと、バルディッシュはそれに答えるかのように一瞬光る。

「いやあ、今回はハッピーエンドだったねえ・・・」

アルフも笑顔でフェイトを見ている。

プレシアも救い出して元気になった。ヴァンデモン黒幕もぶっ潰した。そんでもって殆ど罪には問われず。

良い事づくめだった。

と、次の瞬間・・・

「じゃあさ、明日応援に行こうよ！アタシ達でさー！」

フェイトが呟くと、アルフが応援に行こうと提案する。

「私も行きたいけど・・・私は保護観察の身だからあまり勝手な行動は・・・」

プレシアが苦々しく言う。だが・・・

『その心配はいらんですよってんだ！』

何故かバーニングブросの音が響くと・・・居間の壁がぐるりと回転して、孝昭が現れた。

「忍者かアンタは！」

「ぐはっ！」

スパーン！と、アルフに即座にハリセンで突っ込まれたのだが。

「えっとだな・・・プレシアさんは一応基本的に自由行動にしてあるから、別に何の問題も無いぞ」

孝昭が色々手を回しており、プレシアについて不便な事は殆ど無い。

また、保護観察の期間が終われば、就職先も紹介する事にしている。

「なるほど・・・お前、随分手を回してくれてたんだな・・・」
「何、大した事じゃない。ふんぞり返ってるだけの上の連中は事態をちゃんと見てねーからな・・・丸めこむのは楽だよ」

結構散々な言われ様の管理局上層部である。

とにかく、翌日はみんなで出かける事に・・・

AM9:00。市営総合グラウンド・・・ここに海鳴市商店街のチームが集まっていた。

拓也・土郎・恭也もそこにいた。

なのは・ユーノ・桃子・美由希も応援に来ている。

恭也は最初嫌がったのだが、なのはに「お兄ちゃんのカッコいい所が見たい」と言われたら、180。態度を翻してやる気満々になっていた。

少し遅れて、孝俊もやって来た。

プレシア、フェイト、アルフ、孝昭もいる。

「フェイトちゃん！来たんだね」

「うん・・・」

フェイトに駆け寄るなのは。

フェイトは未だに慣れないのか、少し俯き気味だ。

「あ・・・プレシアさん、身体は大丈夫ですか・・・？」

「ええ、もうすっかり良くなったわ・・・」

プレシアの身体を気遣うなのは。

ちなみに、なのはの肩にはユーノが乗っている。
プレシアは既に完全復活しており、魔力も戻っているらしい。

一方・・・商店街の皆さん。

適当に打順が決められていた。

拓也は足が速いという事で1番・遊撃手^{ショート}。

士郎は結構打撃が上手く、パワーもあるので4番・三塁手^{サード}。

恭也も打撃は意外と自信があると言う事で6番・左翼手^{レフト}。

孝俊は肩が結構強い（拓也談）という事で8番・右翼手^{ライト}である。

投手の件については、控えが足りないと言う事なので、無理に孝俊が投げる必要は無い。

ちなみに、相手は隣の市の商店街チーム。

野球経験者が豊富で、なんと助っ人に現役の高校野球児を4人も入れていた。

そんなこんなで試合開始^{プレイボール}。

1回表、海鳴市商店街チームの攻撃。

まずは1番、拓也・・・打席に入って構える。

相手ピッチャーが振りかぶって1球目を投げる。

『スバーン!』

「ストライク!」

まずは低めに決まってストライク。

130km/hは間違いなく出ているだろうか。

「おいおい・・・速いな・・・流石に現役の高校野球児だよ」

商店街チームの1人がそのスピードに舌を巻く。

130km/hは、素人ではなかなか手が出ないスピードだと言われている。

ちなみに、マウンドから18.44m先のホームベースまでは、130km/hの球で約0.47秒で到達する。

コッソん・・・

軽く当てたような音が聞こえる。

拓也は普通のスイングで当たらないと踏んだのか、バントに切り替えたのだ。

拓也は素晴らしいまでのスタートダッシュを決め、1塁まで猛ダッシュしていく。

「おおっ！あのボウズ速ええぞ！」

チームメイトから称賛の声が上がる。

観客席からも驚きの声が所々から上がっている。

三塁手が捕球するも、1塁には投げられずセーフ。セーフティーバント成功である。

「やった！拓也さん凄いの！」

なのはが立ち上がって喜んでいる。

だが、2番3番があっさりと三振に切って取られ、2アウト1塁。

ここで4番の士郎を迎える。

「お父さん！頑張つてー！」

なのはが士郎に声援を送る。

それを聞いた士郎は・・・凄まじい闘志を眼にぎらつかせる。

「さあ来い・・・スタンドに叩き込んでくれる・・・！」

漲っていた。もうこれでもか、と言う程に漲っていた。

相手ピッチャーが振りかぶり、投げた・・・次の瞬間、士郎は瞬時にバットを振り抜いた。

ガキイーーーーーン！

バットにジャストミートしたその球は、大きく綺麗なアーチを描き・・・レフトスタンドに叩き込まれた。

見事な先制ホームランだった！

「おお・・・すげえな・・・」

ホームベースを踏み、拓也が驚いていた。

親馬鹿パワー恐るべしだ。

士郎にとって、なのはは眼に入れても痛くないどころか、そのまま視力がアップしそうな愛娘なのだ。

そんな娘の声援を受ければ、必然とパワーアップするのである。

130km/h程度の球など、あっさり葬らん《ホームラン》だ。

士郎は守備でも大活躍だった。

サードに飛んで来た打球は、凄まじい反射神経と動体視力で次々と捕球。

ファインプレーを連続していった。

親馬鹿パワー発揮中の士郎は、もはやプロにも匹敵するかも知れない勢이었다。

恭也もなのはにカッコいい所を見せようと大奮闘。

打撃では次々とバットに当たってファールで粘り、甘い球を外野に弾き返してヒット。

守備でもダイビングキャッチなどのハッスルプレーで、チームを盛り立てる。

シスコンパワーをいかんなく発揮していた。

拓也はサッカーで鍛えた脚力で大活躍。

迎えた第2打席でも、ボテボテのゴロを打ってしまうものの、またしても俊足を生かしてセーフ。

守備でも身体を張って止めるなどのガッツ溢れるプレーを見せた。

孝俊は流石に現役の高校野球児だった。

打撃では相手のボールを見極め、コンパクトにバットを振って内野の頭を越すヒットを打つ。

守備では不安の無い安定した守りを見せる。

守備の最大の見せ場は5回裏・・・1アウト2、3塁のピンチだった。

カキイン！

ピッチャーの投げた球が・・・ライトの孝俊に向かってフラフラと飛ぶ。

犠牲フライには十分な距離だった。

そして孝俊がボールを取った瞬間、3塁ランナーが走り出す。誰もが失点を覚悟した・・・が！

「ホームは・・・踏ませねえっ！」

孝俊はその場で、左足で強く踏ん張り、右腕を振り抜いた。

その瞬間・・・レーザーの如き高速の送球がキャッチャーに向かって綺麗に飛んでいった。

肩が結構強い、なんてレベルでは無い。めちゃくちゃ鋭くて速かったのだ。

「なっ!？」

キャッチャーがボールを受け止め、ランナーは驚いて止まってしまう。

まさかこうなるとは思っていなかったのだ。

そのままキャッチャーにタッチされてアウト・・・スリーアウトでチェンジに。

ピンチを脱した。

7回裏、相手チームの攻撃。

試合は現在、4-4の同点・・・土郎が放った2ランと、拓也がマグレ当たりで放ったソロホームラン、恭也のタイムリーヒットだった。

拓也達のチームの先発はここまで何とか粘っていたが・・・現在1アウト満塁のピンチ。

相手は3番バッター。現役の高校野球児の1人だった。

「あっちゃー・・・こりやまずいかもねー・・・」

観客席で見ていた美由希が苦笑いしている。

「向こうのチームの3番、4番はこの辺じゃ結構有名な選手なんだよね・・・4番なんてプロも注目してる程らしいし」

ちなみに、向こうのチームの4点も、その3、4番が稼いだものである。

「大丈夫かなあ・・・」

なのはも心配そうに見ている。

相手チームの応援団は、対照的に物凄く盛り上がっていた。

ここで・・・海鳴商店街チームは、投手を交代する事にした。そう、孝俊の出番である。

「審判、ピッチャー交替です。ピッチャーとライトが入れ替わります」

キャプテンでもある土郎が審判に交代を告げる。

そして、ライトから孝俊がマウンドに向かってくる。

「うーん、1アウト満塁っすか・・・こりゃ精神的にきつい場面っすね」

孝俊が苦笑して土郎に言う。

しかし・・・内心は闘志がギラギラと燃え上がっていた。

「厳しい場面だとは思っけど・・・頼むよ」

「ういっす」

「おっ！遂に孝俊が投げるよ！」

「孝俊・・・頑張って・・・！」

アルフとフェイトがマウンドに上がる孝俊を見つめている。

孝俊は・・・ピンチにも関わらず、落ち着いていた。

相手チームのベンチにて・・・

「おいおい、あの鉄砲肩の右翼手ライトが投手だっつてよ」

「肩が強いからって・・・ヤケクソにでもなっただか？」

「第一、外野手と投手では体の使い方が違うんだ。ただ肩が強いだけでピッチャーが出来るなら、苦労は無いぜ」

・・・と、相手の高校野球児達はかなり楽観視していた。

実際、外野手と投手では投げる時の体の使い方が違う。そんな簡単な問題ではないのだ。

孝俊が・・・左脚を上げて身体を捻る。

そして強く地面を左足で踏み込み・・・腕を振り抜いた。ボールは真つ直ぐに・・・飛んでいった。

「・・・ふん、この程度のストレート・・・！」

3番バッターが自信を持ってスイングする。タイミングも合っていた・・・が。

ズバーン！

「ストライーク！」

相手のバットはむなしく空を切った。

「・・・なんだ？今、何か変化でもしたのか？」

「スライダーか何かでも投げたのか・・・？」

相手側のベンチでは、意外そうな顔で現状を見ていた。何でも無いストレートだった筈だ。

「バルディッシュ……あのボールのスピード……測れる？」

【Yes sir】

観客席では、フェイトが待機状態のバルディッシュに小声で話しかけていた。

バルディッシュにそんな能力があるかどうかは突っ込まないでほしい。

孝俊が2球目を投げた……またしても相手のバットは空を切った。

(何故だ……！タイミングは合っている筈なのに……！)

バッターは悔しそうな表情を隠せない。

「バルディッシュ……測れた……？」

【Yes……90mph】

バルディッシュが出した数値は……90mph(約144.8km/h)だった。

「90マイル……時速にしておよそ144.8km/hね」

プレシアが即座に時速に換算していた。流石に頭が良い。
結局、相手の3番バッターは三振してしまう。
そして……4番バッターを迎える。

孝俊はマウンドに立ったまま、投げる素振りを見せなかった。それを見たキャッチャーは不審に思い、タイムを取ってマウンド上の孝俊に駆け寄る。

すると・・・孝俊から驚きの言葉が出た。

孝俊はグローブで口元を隠し・・・

「全部・・・真っ直ぐで行きますんで・・・」

「な、何を言うとするんじゃ・・・」

孝俊は・・・全球ストレートで挑むつもりだったのだ。

キャッチャーは驚きを隠せない。

「真っ直ぐ直球・・・そうさせて下さい・・・」

「ば、バカ言え！相手はプロにも注目されてる強打者だぞ・・・！」

「？」

キャッチャーはそれを拒否するが・・・

「・・・そうさせて下さい」

孝俊の眼には・・・凄まじく燃え上がる闘志の炎が宿っていた。

一歩も引き下がるつもりは無いらしい。

それを見たキャッチャーはニヤリと笑い・・・

「よーし……向かって来いや！」

「……はい！」

キャッチャーは定位置に戻って行く。

「……弱気は最大の敵……！」

そう呟いた後、孝俊は左脚を上げて身体を捻り……左脚を踏み込む。

そして腕を先程よりも更に思い切り……振り抜いた。

ズドンッ！

ボールは内角高めに決まり、相手が空振りする。

投げ終わった瞬間、孝俊の身体は宙に高く跳ね上がり、着地した時にはなんと身体が180度回転して相手に背を向けていた。

「……打てるもんだったら打ってみろや……！」

フォームも何もあつた物ではない。

そこにはただ、【打てるものなら打ってみろ】という気迫だけがあつた。

【……92 mph (約148 km/h)】

「さっきより……速い……!?!」

「なんか……孝俊の気迫が凄い……こっちにまで伝わってくる

よ……」

観客席ではフェイトとアルフが驚いていた。
孝俊が発する異常なまでの気迫を感じ取りながら……

2球目……今度はど真ん中にズバツと決める。
相手は手が出せずに見送った。

(ま、まさか……この異常なボールの伸びは……ジャイロボールか……!?)

凄まじいボールの伸びに舌を巻く4番バッター……

ジャイロボール……それはプロでも投げる投手が滅多にいない
ストレートの一種。

通常、バックスピンをかけて投げるのが理想とされるストレート
だが、ジャイロボールの場合は横回転をかけて投げる(ドリル回転)。

その為、空気抵抗が非常に少なくなり、初速と終速の差が小さく
なる。

バッターにとってはそれこそ消えた様にも見える球なのだ。

だが、ジャイロボールもさる事ながら、孝俊が放つ炎のような気迫
は、明らかに相手を圧倒している。

と、言うのも孝俊は……とある投手を目標に、自身を鍛えてい

たからだ。

津田恒美・・・元広島東洋カープの投手である。

凄まじい伸びを誇るストレートを武器に、1986年に広島を優勝に導いた^{ストッパー}守護神。

元は先発として1981年にドラフト1位で広島に入団し、翌1982年には球団初の新人王に輝く。

以降は度重なる故障に苦しみ成績が伸びなかったが、1986年から抑えに転向して復活を果たす。

『弱気は最大の敵』を座右の銘とし、並いる強打者にストレート1本で真っ向勝負を挑んだ。

その姿は【炎のストッパー】と呼ばれ、他球団に恐れられた。

かの阪神歴代最強の助っ人、ランディ・バースをストレートのみで3球三振に仕留め、そのバースに「ツダはクレイジーだ」と言わせた程。

最盛期の1989年には、12勝5敗28セーブで最優秀救援投手のタイトルを獲得した。

だが、1993年に脳腫瘍の為、32歳の若さでこの世を去った。

「よし！良いぞ！」

キャッチャーが孝俊にボールを投げ返す。

そして、3球目・・・孝俊は何の躊躇も無く勝負に出た。
投げたのは・・・目の高さのくそボールだった。

「・・・つく!?!」

だが、相手はつられて空振りした。

「ストライーク！バッターアウト！チェンジ！」

「っしやあああ!！」

審判のコールを聞き、孝俊はマウンドで力強くガッツポーズをとったのだった・・・

結局、あの4番バッターの三振で意気消沈したのか、相手チームに勢いが無くなった。

試合は9回表、土郎がこの日2本目の2ランホームランを放ち、6-4で海鳴市商店街チームが勝利した。

試合が終わった後・・・なのははフェイトと一緒に公園にいた。なんと、意外にもフェイトがなのはを誘ったのだ。

公園にいるのはなのは・フェイト・ユーノ・アルフ・プレシア・拓也・孝俊・孝昭。

なのは・フェイトは2人きりでベンチに座っている。他の面々は離れた所で座っていた。

「なんだか、いっぱい話したい事あったのに・・・変だね。フェイトちゃんの顔見たら、忘れちゃった」

「私は・・・そうだね・・・私も上手く言葉に出来ない・・・ちょっと嬉しかった」

「ふえ？」

「真っ直ぐ向き合ってくれて」

なのはもフェイトも、いざ話すとなると上手く言葉にならなかった。

それでもフェイトは、なのはの気持ちが嬉しかった。

何度も何度も自分とぶつかり合い、気持ちをぶつけて来てくれたのだから。

「うん、友達になれたらいいなって思ったの」

「そっか・・・えっと、来てもらったのは・・・返事をする為・・・」

「え・・・？」

なのはの言葉に頷いた後、フェイトは若干顔を赤くして俯く。

「君が言ってくれた言葉・・・『友達になりたい』って・・・」

「あっ・・・うん、うん・・・！」

なのはは、待ってましたとばかりに首を縦に振る。

「私に出来るなら……私で良いならって……だけど私、どうして良いか解らない……だから教えてほしいんだ……どうしたら友達になれるのか……」

そう言っつて俯くフェイト。

フェイトは、これまでアルフ以外に親しい間柄の者がいなかった。

孝俊にしても、流れるにそうなたただけで、自分から友達になろうと歩み出た訳ではない。

それ故に、どうすれば友達になれるのか……フェイトには解らなかった。

「簡単だよ……友達になるの、凄く簡単」
「……」

なのはは笑って答える。

フェイトはそんなのは見つめている。

「……名前を呼んで。初めは……それだけで良いの。【君】とか【あなた】とか、そう言うのじゃなくて……ちゃんと相手の目を見て、ハッキリ相手の名前を呼ぶの」

「名前……」

「私、高町なのは……なのはだよ！」

「なのは……」

「うん、そう……！」

初めて、面と向かってなのはの名前を呟くフェイト。
なのはは嬉しそうに頷く。

「なのは……」

「うん……！」

眼に涙を浮かべ、フェイトの手を握るなのは。

「ありがとう……なのは」

「……うん！」

「……君の手は暖かいね……なのは」

「……ひつく……えう……」

感極まったのか、涙を流すなのは。

その涙を、フェイトは指で拭き取る。

「少し解った事がある……友達が泣いてると、同じように自分も
悲しいんだ」

「……っ！フェイトちゃん……！」

なのはは泣きながらフェイトに抱き付き、フェイトはそれを優しく
抱きとめる。

「ありがとう、なのは……また会ったら……なのはも私の名前

を呼んで……」

「うん……うん……！」

「なのはに困った事があつたら、今度はきつと、私がなのはを助けるから……」

2人は抱き合つて……そのまま泣いた。

「ひくつ……あなた達のとこの子は……つく……なのははホントに良い子だね……フェイトが……あんなに笑つてるよ……」

アルフが泣きながらユーノと拓也に言う。

「なんでアンタまで泣いてんだよ」

拓也が苦笑しながら言う。
「が、その横では……」

「うう……全くだ……ぐすつ……ホントに良い子だぜ……」

孝俊が泣いていた。勿論、孝昭も。

「お前もかい」

「うう……もうあかん……思い切り泣いていいか……」
「はぁ……好きにしろよ」

必死に涙を堪える孝俊に言い放つ拓也。

「うっ……うっ……がぁお~~~~~!」

孝俊は……凄い泣き方で泣いた……と言うより吠えた。
それを聞いた拓也、ユーノ、そしてプレシアまでもがズッコケた。

「なんつつ泣き方してんだ!しかも古いぞそのネタ……」

拓也は……やはりツツコミを入れたのだった。

遂に、完全に解り合い、友達となったのはとフェイト。
そんな2人を、微笑ましく見守る拓也達だった……

次回、遂に第1章最終回……!
続く

第25話 人は得意分野になると生き生きする事がある気がする(後書き)

はい、第25話終了です。

孝俊・・・打撃は地味でしたが、守備と投球に活躍しました。
で、士郎さんに結構花を持たせてます。

ここでちょっと孝俊のパワプロ的能力を・・・

孝俊 右投両打 オーバースロー

スタミナB コントロールB 最高球速148km/h

スライダー3 ドロップ2 チェンジアップ3 フォーク4

特殊能力：対ピンチ4 ジャイロボール ノビ5 キレ4 安定度

4 重い球 威圧感 四球(マイナス能力)

・・・こんな感じです。パワプロ知らない人はごめんなさい(汗)

さて・・・重大発表ですが・・・第1回人気投票を行いたいと思います！

孝俊「遂にやるのか・・・無謀だとは思いますが」

鷹「1人5票まで持てる事にします。例えば(孝俊に3票、フェイトに1票、拓也に1票)って感じで」

孝俊「なるほどな」

鷹「ちなみに、投票対象は・・・第1話から25話までに出たキャラ全員です」

孝俊「そのキャラに投票した理由も、あれば書いて下さい（無くても可）」

孝昭「締め切りは今月末（31日）です」

鷹「是非、皆さんの投票をお待ちしています！」

では、次回予告・・・拓也よろしく。

拓也「俺が次回予告するのは実は初めてなんだよな（汗）。じゃあ・・・
次回、リリカルなのはフロンティア第26話【別れ方にもいろんなパターンがある気がする】お楽しみに！」

第26話 別れ方にもいろんなパターンがある気がする(前書き)

はい、第26話です。

今回が無印編最終回です。

敵デジモンが出ますが・・・特筆すべき点はあまり無いです(待て)

第1回人気投票・・・期限までまだ時間はありますので、投票の方、待ってます！

さて、名(迷)言コーナーです。

- 優しさを失わないでくれ。弱いものをいたわり、互いに助け合い、どこの国の人たちとも、友達になろうとする気持ちを失わないでくれ。

例えその気持ちは何百回裏切られようとも。それが私の最後の願いだ。

(ウルトラマンA^{キス} ウルトラマンA)

- それは血を吐きながら続ける、悲しいマラソンですよ。

(モロボシ・ダン ウルトラセブン)

- 月は遠くから見ると綺麗なんだよ・・・

(両津勘吉 こちら葛飾区亀有公園前派出所)

- 元々人間意味あるために生まれたんじゃないんだから、意味無
くても当たり前だ。その意味を自分自身が探し出していく事が大切
じゃないかね。

(大原大次郎 こちら葛飾区亀有公園前派出所)

- てめーが勝手に掘った小せエ溝なんて俺達はしらねエよ。そん
なもん何度でも飛び越えてって何度でもてめーをブン殴りに行って
やる。

(近藤勲 銀魂)

拓也「今回はまともなのが多いな」

孝俊「だなあ」

孝昭「さて、今回が第1章の最終回だな」

フェイト「第26話・・・始まるよ!!」

第26話 別れ方にもいろんなパターンがある気がする

【の遠い約束】

第26話副題【サヨナラは再び会うまで

野球が終わった翌日・・・孝俊は拓也と一緒にアースラに出向いていた。

デジヴァイスのメンテナンスと・・・パラレルモンに頼んで時空間ゲートを開く準備をもらう為だ。

「・・・そうか、帰るのか」

「ああ・・・色々世話になったな」

部屋でクロノ、孝昭、リンディ、エイミーと話している2人。4人とも、心なしか寂しそうである。

「・・・夜中に海鳴臨海公園でパラレルモンと落ち合う事にしてる」「そうなんだ・・・」

「あ、そうそう、2人とも昨日は野球で大活躍だったらしいじゃない?」

「って、なんで野球してた事知ってるんです?」

「アースラのモニターから観戦していたよ」

エイミーが昨日の事を2人に言う。

何故かアースラのモニターから見ていたらしい。

いや、仕事しろよ！という拓也のツッコミが入ったのは言うまでも無い。

「で・・・なのはさん達には話したのかしら？」

ふと、リンディが口を開く。
だが、2人は・・・

「いや、なのはちゃん達には・・・話してない」

「俺も・・・フェイト達には何も言っていない」

何も言っていないかった。

ひっそりと帰るつもりなのだ。

「・・・あなた達はそれで良いの？」

「・・・湿っぽいのは嫌いですから・・・ま、手紙くらいは残していくつもりですけどね」

少し悲しそうな顔をするリンディ。

拓也も少し眉を顰め、俯いて話す。

「・・・互いに泣いちまいそうだし・・・な」

「・・・お前らしいな」

苦笑いしながら言う孝俊を見て、同じく苦笑いする孝昭。

孝俊は冷静だが、案外感情的な面もあるのだ。

「とにかく、今回の事件については本当に感謝しているわ。ありが

とう」

「いえ、あのまま奴を放っておく訳にもいきませんでしたから・・・

」

今回の【ジュエルシード・VV事件】の解決に大きく貢献してくれた2人に改めて礼を言うリンディ。

拓也は照れくさそうに頭を掻いている。

孝俊も照れ笑いをしながら見ていた・・・

地球に戻り・・・2人は適当にブラブラ歩いていた。

今はまだ昼を過ぎたばかり。なのははまだ学校だ。

ちなみに拓也は、士郎と桃子には帰る事は話してある（多少、話を捏造してあるが）。

その際、頼み込んでなのはには言わないように頼んだ。

孝俊もまた、プレシアにだけは話しており、フェイトとアルフには言わないように頼んでいた。

「・・・今日でこの世界ともお別れ・・・になるのかね」

「・・・ま、パラレルモンがいるから、今生の別れって訳じゃねーかもしれないがな」

感慨深そうに空を見上げる拓也。

孝俊は苦笑いしながら拓也に言う。

そう、パラレルモンがいる限りは時空間ゲートが開けば会いに行ける。

「・・・そーいやこの世界、今は6月だったよな？」

「それがどうかしたか？」

「・・・いや、俺達が時空間の歪みに引き込まれた時・・・俺達の世界は11月だったよな？」

「・・・て事は今・・・俺達の世界は思い切り冬じゃん」

孝俊達の世界と、なのは達の世界では季節が違っていた。しかも季節が真逆と言うあまり嬉しくないおまけつきだ。それを想い浮かべ・・・げんなりしてしまう2人だった。

「宿題とか溜まりまくってんだろっな」

「言っつな。考えねえようにしてんだから」

さらに顔色が悪くなる2人だった。なんとというか・・・ご愁傷さまだ。

30分後、テストロッサ家。

「ただいまー」

「あ、おかえり・・・！」

帰って来た孝俊に飛びついてくるフェイト。

孝俊が帰って来た時は大体こうなのだ。

「D-スキャナの調整は出来たのかい？」

「ああ、相変わらず簡単な調整しか出来なかったがな。何もしねーよりは良い」

奥からアルフが歩いてくる。

孝俊では簡単な調整しか出来ないが、何もせずに放っておくより

はずつと良い。

高雄から調整方法メンテを習っておいてよかった、と心から安堵する孝俊だった。

「今日はフェイトが夕飯作るんだってさ」

「フェイトが？出来るのか？」

アルフの言葉に首を傾げる孝俊。

「で、出来るもん・・・！」

頬を少し膨らまして拗ねるフェイト。

それを見て【可愛いなあ・・・】と思ったのは孝俊だけの秘密だ。

「はは、ゴメンゴメン。楽しみにしてるよ」

「うん・・・／＼／」

笑いながらフェイトの頭を撫でる孝俊。

フェイトは顔を赤くして、あっさりと機嫌を直したのであった。ちなみにアルフは、ちょっと羨ましそうな顔をしていた。

数分後、孝俊はプレシアの部屋にいた。

「・・・で、今日の夜・・・だったかしら？」

「ああ・・・2人が寝静まったら・・・な」

プレシアの部屋は防音効果バリアフリーの為、話し声は聞こえないようになっている。

ドアにもキッチリ施錠しているのだ。

「・・・貴方には、本当に世話になったわ・・・ありがとう」
「なに、気にすんな。俺が好きでやった事だ」

深々と頭を下げるプレシアに、優しく笑って言い放つ孝俊。
「こういう所も彼の良い所・・・なのだろうか。」

「・・・ところで、保護観察はどれくらいなんだ？」

「責任者（孝昭）の話によると・・・長くても半年以内には済むって言ってたわ」

「そうか・・・」

プレシアの保護観察は、およそ半年以内には終わると言う。

責任者の孝昭としては、無罪でも良かったぐらいだ。

ただ、上層部バカの連中がうるさかった為、保護観察にしておいたら
しい。

「しかし・・・随分と服装変わったな？」

「え、ええ・・・流石にあれは派手だったから変えたんだけど・・・
変かしら？」

現在のプレシアの服装は、あの胸元がざっくり開いたような魔導師の衣装ではない。

白いシャツに紫のジャケット、黒いロングスカートを着用した至って普通の恰好だ。

「いや、いいんじゃない？似合ってると思うぞ？」

あっさりと言う孝俊。

勿論、冗談でも何でもなく素直な感想だ。

「え、そ、そうかしら・・・ノノノ？」

「ああ、ぶっちゃけ年相応には見えんし」

・・・と、まあこんな他愛の無い話を展開したりしていた。

その頃、高町家にて。

拓也はリビングで何かを書いていた。

そう、夜にはこの世界を発つので、なのはに向けての手紙を書いていたのだ。

内容には・・・こう書かれていた。

【なのはちゃんへ・・・この手紙を読んでもう頃には、多分この世界に俺達はいないと思う。

黙って帰る事についてはとりあえず謝る。ごめん。

こっちの世界の方もそろそろ心配だから・・・な。

正直、見送られると泣いちまいそうだったのもあるんだけど（苦笑）

まあ、パラレルモンもいる事だし、これが今生の別れになる事は無いと思うがな。

この1カ月、なんだかんだで忙しかつたけど、楽しかったぜ。

これからも頑張れよ。
あと、アリサちゃんとすずかちゃん、それからフェイトとこれからも仲良くな……

神原拓也】

書き終わった後、とりあえずそれをジャケットのポケットにしま
う拓也。

なのはが寝静まってから、枕元に置くつもりなのだ。

「……さて、桃子さんの手伝いでもしてくるかな……」

そう呟き、リビングを後にする拓也だった。

時間は流れ、再びテストタロツサ家。

時刻はPM7:00。夕飯の時間だった。

「出来たよ……」

エプロンを付けたフェイトが3人を呼ぶ。

フライパンの中には……炒飯が出来ていた。

「お、炒飯だね？」

アルフが横からフライパンの中を覗きこむ。

「これ・・・孝俊が初めて作ってくれた料理だから・・・」
「ん、そーいやそうだったな・・・」

孝俊が初めてここで料理を作った時を思い出す。

確かにあの時、食料が尽きていて買い物に行き、その後すぐに炒飯を作った（第3話参照）。

「あれはホントに美味かったよねえ・・・」

アルフがそれを思い出して涎を出していた。
よっぽど忘れられない味だったようだ。

「まあ、慣れたらあれぐらいは簡単に作れるさ。積み重ねが大事だよ・・・何事もな」

皿に移して、食卓に運び・・・夕飯タイム。

そして・・・フェイト作の炒飯を口に入れる3人。

「おっ・・・美味しいな」

「うん、美味しいわフェイト」

「おお・・・なかなかイケるよ・・・」

味の方は・・・一生懸命練習して来た甲斐もあり、かなり美味しかったらしい。

特に・・・初めてフェイトが料理に手を付けた時から、味見役と言つ名の実験台いけにえになっていたアルフは・・・嬉し涙を流していた。

「そう・・・良かった・・・」

フェイトは嬉しそうに笑い、自分で作った炒飯を食べていた。

「……この世界での最後の飯にフェイトの料理とは……なんつか、思い出深いな……」

孝俊は炒飯を口に運びながら、感慨に耽^{ふけ}っていた。
今日の夜中には……この世界を去るのだから。

高町家、PM9:00。部屋ではなのは、ユーノ、拓也が談笑していた。

「これからも……なのはちゃんは管理局に？」
「うん、民間協力者としてだけど……」

なのははこれからも管理局に協力していくつもりらしい。
正直、なのはは程の実力者を管理局が放っておく筈もない。
AAAランクの魔導師ならば、喉から手が出るほど欲しい逸材だ。
今は民間協力者だが、いずれは正式な局員として引き入れるつもりだろう。

「そうか……ま、頑張れよ」
「はい！」

笑って応援する拓也。

そして、なのはも元気良く返事をした。

(俺も・・・元の世界に戻ってから忙しくなりそうだけ・・・)

戻った後の事を考え、心の中で苦笑する拓也。

色んな事が山積みとなっっているであろう。

主に勉強とか勉強とか勉強とか(以下略)

「さて、明日もあるし・・・そろそろ寝るか」

帰る事を悟られぬ様、いつもの挨拶をして立ち上がる拓也。

冷静さを身に付けている今の拓也なら、多少のポーカーフェイスもお手の物だ。

「あ、はい、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

なのはとユーノが拓也に手を振る。

拓也は小さく微笑んだ後、ゆっくりとなのはの部屋を出た。

「・・・またな」

部屋を出て一言、そう小さく呟いて・・・隣の部屋に戻った。

PM11:00・・・テストロッサ家。

フェイトとアルフは既に寝静まっている。

孝俊は・・・フェイトの枕元に手紙を置き、プレシアの部屋に行った。

「・・・行くのね」

「・・・ああ」

2人は一言ずつ言い合うと、黙りこむ。

少しの沈黙の後、プレシアが口を開いた。

「あなたには本当に感謝しているわ・・・私の命を助けてくれただけでなく、フェイトともこうやって解り合えた・・・」

「俺だけの力じゃない。周りも協力してくれたからな。フェイト自身が前に進もうとした事も大きい。本当の自分を始める為に、な」

孝俊は微笑んでプレシアに言う。

そして、立ち上がり・・・部屋を出る寸前に一言呟いた。

「・・・また縁があれば・・・会おうぜ」

「そうね・・・」

そして・・・海鳴臨海公園に向かう為、孝俊はテストロッサ家を後にした。

同時刻、高町家にて。

リビングで拓也は、桃子と士郎と話をしていた。

「この約1ヶ月間、本当にお世話になりました」

「いや、君は本当によく働いてくれた。なのはも君といるとなんだ

か嬉しそつだつたしね」

頭を下げる拓也に、笑顔で答える土郎。

拓也の存在は、なのはにとつて本当に大きい物だつた。

「またいつでも遊びに来ていいからね？」

「はい、ご縁があればまた・・・」

笑顔で拓也に話す桃子。

拓也も出来るだけ丁寧に返す。

この約1カ月、見ず知らずの自分を住まわせてくれた高町家の面々。

その恩はとても大きい。

「じゃあ、そろそろ・・・」

「ええ、またね・・・拓也君」

高町家の玄関を後にする拓也。

向かう先は・・・孝俊と合流する海鳴臨海公園だつた。

PM11:30・・・海鳴臨海公園。

そこに、パラレルモンと孝俊、拓也がいた。

「2人とも準備は・・・出来てるだか？」

「大丈夫だ」

パラレルモンの問いかけに、声を合わせて答える2人。

「じゃあ、時空間ゲートを……んっ!?」
「どうした? パラレルモン……」

ゲートを開こうとするパラレルモンだったが、咄嗟に動きを止める。

すると背後から……何かの方向が響いた!

『グオオオオオオオ!』

「むっ!……ヴァンデモン一派の残党か!？」

「解らん、だが……穏やかな雰囲気じゃねえな……」

現れたのは……デジモンだった。

シャウジンモン 完全体 魔人型 ウィルス種

必殺技 降妖杖・滝の陣：「降妖杖」を回転させて水の竜巻を起す。

降妖杖・渦紋の陣：「降妖杖」を叩きつけ大地を砕き激流を放つ技。

得意技 月牙斬：接近時に三日月状の刃で相手を突き刺す技。

デジタルワールドの“天界”から追放された河童の姿をした魔人型デジモン。超重量級の杖「降妖杖」を軽々と扱い戦う。無口で冷静沈着なデジモンだが、元はとても恐ろしいデジモンであったとされる。

シードラモン 成熟期 水棲型 データ種

必殺技 アイスアロー：口から鋭い氷の矢を吐き出す技。

得意技 ウォーターブレス：後ろに一回転して、口から水の息を吹きつける技。

チルブレインズ：体で水面を叩きつけ、氷の壁を作る技。

コールドブレス：口から氷の息を吹きかけ、凍りつかせる技。

蛇のように長い体をした水棲型デジモンで、ネットの海や湖などに生息する。

攻撃力は高いが知性はほとんどなく、感情のままに生きている。

「上等だぜ・・・最後にひと暴れして帰るとするか」

「飛ぶ鳥後を濁さずってか?・・・パラレルモン、広域結界を展開した方が良いぜ」

「わ、解っただ・・・!」

即座に戦闘態勢に切り替える拓也と孝俊。

パラレルモンは広域結界を展開する為、アースラに戻って行った。

さて、その頃・・・テストロッサ家では・・・予想外の事態となっていた。

フェイトとアルフが起きてしまっていたのだ。

フェイトは枕元に置いてあった手紙を見て、愕然とした。

【フェイト・アルフへ・・・この手紙読んでる頃には多分俺はこっちの世界にはいないだろうな。

湿っぽいのは苦手だし、お前達の顔見てたら泣いちまいそうだから黙って帰る事にした。

この1ヶ月間・・・なんつーか忙しかったけど、その分楽しかった。

あと、フェイトはこれから鍛えればどんどん強くなる。基礎の積み重ねは大事だぜ？

ヴァンデモン戦で見た【雷光斬】、見事だったな。

お前の持ち味であるスピードは、これからも磨いていけ。お前より速い奴は、世界中探せば意外といるもんだ。

誰よりも速く、強くなれ。お前なら・・・きっと出来る。

アルフ、お前にもなんだかんだで世話になったな。

これからもフェイトと仲良くやって行けよ？

これが永遠の別れって訳じゃないだろう・・・多分。またいつか会えると思う。その時まで・・・元気だな。

【面林孝俊】

「そんな・・・いきなりすぎるじゃないか・・・」

「まだ・・・私の気持ち・・・伝えて無いのに・・・」

ふと、デジモンの気配を察した2人・・・
考えるまでも無く・・・立ち上がった。

デジモンある所・・・そこには必ず孝俊がいた。

まだ・・・孝俊はこの世界にいる。そう信じ、マンションを飛び出した2人だった。

また同じ頃、なのも枕元に置いてあった拓也からの手紙を読み、家を飛び出していた。

その頃、拓也達は既にシードラモンを撃墜し、2人でシャウジンモンを追い込んでいた。

アグニモンとプロスモンの猛攻の前に、シャウジンモンは既にヨレヨレだった。

「これで決める・・・！」

プロスモンが剣を構え・・・その場からジャンプし、縦に高速回転し始める。

その姿は・・・巨大な車輪だった。

「喰らいやがれ・・・！【爆転斬^{はくてんざん}】！」

それがシャウジンモンに見事に直撃し、シャウジンモンは真つ二つに縦に斬られて消滅した。

プロスモンは着地・・・に失敗して派手に転んでいたが。

「おーい・・・大丈夫か？」

「痛つてえー・・・この技、着地だけ未完成なんだよなあ・・・」

進化を解いて起き上がる孝俊。

最後の最後まで締まらないという、ある意味可哀想な奴である。

「さて、今度こそ・・・待って!」・・・え？」

歩き出そうとする拓也と孝俊を呼び止める声が聞こえた。

そう・・・フェイトとなのは、そしてアルフだった。

「良かった・・・間に合った・・・」

2人とも息を切らしていた。

いくら夜中とはいえ、街中を堂々と飛行する訳にも行かなかった
ので、走って来たのだ。

「・・・黙って・・・行かないで下さい・・・!」

なのはが走り込んで、拓也に抱きつく。

「まだ・・・言いたい事・・・あったんだから・・・」

「勝手に・・・行かないでくれよ・・・!」

フェイトとアルフも、孝俊にしがみついている。

簡単には離れてくれそうにない。

(やれやれ、参ったな・・・デジモンと闘って時間食っちゃまってフ
ェイト達に見つかっちゃったか・・・)

困った表情で自分にしがみついているフェイトとアルフを見てい

る孝俊。

拓也もまた、孝俊と同じ気持ちで自分に抱きついていているのはを見ている。

「・・・まあ、なんだ・・・とりあえず黙って出たのは悪かったよ・・・」

申し訳なさそうに孝俊が呟き、それを聞いたフェイトとアルフはひとまず孝俊から離れる。

「・・・帰っちゃうんですよね・・・？」
「・・・ああ」

なのはも悲しそうな表情で拓也に尋ねる。
拓也も、重々しく口を開く。

・・・少しの沈黙が続いた後、拓也が自分の頭に付けてあったゴーグルを外した。

「これ、やるよ」
「ふえ？これって、拓也さんの・・・」

そのゴーグルをなのはに手渡した。
それは拓也にとって大事な物だと知っていた為、なのはは驚いた表情になる。

「良いんだよ。なのはちゃんも俺にとって大事な・・・仲間だからな」

「・・・うん、ありがとうございます・・・！」

一方、孝俊は・・・拓也・・・なのはと少し離れた場所で、フェイトとアルフと話していた。

「・・・で、言いたい事ってなんなんだ？」

「・・・あの・・・私ね・・・た、孝俊の事が・・・好き・・・なんだ・・・／／／」

「・・・What？」

いきなりのフェイトの告白に、フリーズする孝俊・・・
そりゃまあ、そうだろう。

いかにまだ9歳とはいえ、フェイトはどんなに控えめに見ても美少女なのだ。

「私が伝えたかったのは・・・それだけ・・・／／／」

「あー・・・うん・・・気持ちはすげえ嬉しい・・・けど、正直俺は恋愛とかした事ねーから・・・実感が・・・／／／」

「うん・・・私も今はまだ子供だから・・・大人になってから・・・また改めて気持ちを伝えるよ・・・／／／」

2人は顔を赤くし、話していた。

とりあえず、この話は保留・・・という事なのだろうか。

どちらにせよ、お互いに好き合っている事は間違いなさそうだが。

(良かったね、フェイト……)

後ろではアルフが腕を組んで孝俊とフェイトを見つめていた。

(アタシも……いずれ伝えなきゃね……フェイトにはっきり先を行かせる訳には……行かないからね)

落ち着いた所で……パラレルモンの準備が終わったらしく、空間の歪みが出来ていた。

拓也達の世界に繋がる時空間ゲートである。

拓也、孝俊がゲートに向かって歩きだす……

「孝俊！」

「ん……っ／／!?」

ふと、フェイトが孝俊を呼び止めたかと思うと……孝俊に飛びつき、自分の唇を孝俊の唇に重ねた。

早い話が……キスである。

ちなみに、お互いにこれがファーストキスだったりする。

「……またね／／」

「あ……ああ……／／」

孝俊は顔を赤くして言う……時空間ゲートの中に消えて行った。

拓也もしばし呆然としていたが、我に返ってゲートの中に消えて行ったのだった。

「……ありがとう……」

なのはとフェイトが呟く。

そんな2人の間を……夜の涼しい風が通り抜けて行った。

第1章……完。

第2章へと続く！

第26話 別れ方にもいろんなパターンがある気がする（後書き）

はい、第26話終了です。

今回で一区切り・・・そして次回からA・S編です。

起動した闇の書にそれを狙う謎の影・・・！？

海鳴市に再び戦乱が・・・なのは達に危機が訪れた時、再び彼らはやって来た！

ポケモツツコミも戦闘もシリアスも激しさを増す第2章！

新たに仲間を増やして拓也達がなのはの世界で大暴れ！

では次回予告・・・孝俊、行けい！

孝俊「ノッてるなオイ（汗）・・・まあ、無理も無いが。んじゃ・・・

次回、リリカルなのはフロンティア第2章・第27話【バカは本当に何するか解らない気がする】お楽しみに!!」

第2章・第27話 バカは本当に何するか解らない気がする(前書き)

はい、やっと第2章に入りました!

ここからA・S編・・・ボケの割合が多くなっていきそうですが、
よろしくお願いします。

いきなりヴォルケNZ襲撃になります。

詳しい話は、次かその次くらいになります。

では、名言コーナーを

・・・惚れた女にや幸せになってほしいだけだ(土方十四郎 銀魂)

・・・俺は自分の肉体が滅ぶまで背筋伸ばして生きていくだけよっ!
!(坂田銀時 銀魂)

・・・お前がどこの誰だろうと!!おれはお前を超えていく!!!!
モンキー・D・ルフィ ONE PIECE)

・・・逃げる?いや、違う・・・勝つんだ!(小早川瀬那 アイシー
ルド21)

- You still have lots more to
work on... (まだまだだね...) (越前リョーマ テニスの王
子様)

孝俊「こりゃまた名言がそろってんな」

拓也「だなあ」

孝俊「さあ、これから第2章・・・スタートだ」

拓也「じゃ、第27話・・・始めるぜ！」

第2章・第27話 バカは本当に何するか解らない気がする

来の火】

第27話副題【光・剛龍・そして再

ジュエルシード・VV事件から半年・・・拓也達は元の生活に戻っていた。

孝俊は自らが生体兵器である母・ナツキの血を継いでいる事を仲間達に言うが、既に龍輔によって知らされていた仲間達は笑って受け入れた。

前回の事件から半年が経って、拓也達は高校2年生となっていた。事件終了時は12月だったので、今は6月・・・5月生まれの孝俊は17歳に。

拓也も7月には誕生日を迎える。

余談だが、帰ってから即行で高雄の元に向かい、精密点検をしてもらったらしい。

拓也はまだ良かったものの、ヴェノムヴァンデモン戦で【ドラゴニック・ダイナマイト】を強行した孝俊は、高雄にこっぴどく叱られたとか。

ダブルスピリットを使っていれば、間違いなくD-スキャナがイカせていたと言う。

拓也達の世界では現在6月2日・・・再び、事件は起きようとしていた。

「あー・・・久々に遊んだなー」

「ここんご部活続きだったしな」

並んで歩いているのは、読者の皆さんにはお馴染みの拓也と孝俊。更にその2人の横に、もう2人の人物がいた。

「もう夏か・・・野球が忙しくなる季節だぞ」

「体調管理には気を付けんな」

1人は自転車を押しながら歩いている茶髪のボサボサ頭の男性・
・四谷高雄よつやたかお。

もう1人は黒髪の長髪を後ろで結び、青いバンダナをしている美
形の男性・・源輝二みなもとこうじ。

4人揃ってそれぞれの部活が休みになり、街に遊びに出かけたの
だった。

そして、今はその帰りだった。

夜になり、人気の無い公園にいる4人・・・

ふと、4人の前に空間の歪みが発生した！

「これは・・・時空間ゲート!？」

「待て、なんか声が聞こえるぞ!」

拓也が驚くと、孝俊が制止する。

ゲートの中から声が聞こえて来る。

『拓也さん、聞こえるだけか!?オラだす!パラレルモンだす!』

声の主は・・・あのパラレルモンだった。

「パラレルモン!どうした!？」

『し、至急こっちに来てほしいだ!なのはちゃんと、フエイトちゃん
んが危ねえだ!』

「何っ!!!?」

パラレルモンの言葉に驚愕する2人。

高雄と輝二も、驚いた表情で聞いている。

「よし！すぐに行く！待ってるよなのはちゃん・・・！」
「拓也・・・なのはちゃんって、前にお前と孝俊が飛ばされた世界の・・・魔導師の子か？」
すぐに飛び込もうと意気込む拓也に輝二が尋ねる。

「ああ！俺と孝俊の大事な仲間だ・・・！」
「なるほど・・・よし、俺も行こう。戦力が多い方がいい」
「俺も行くぞ。メンテナンス役がいた方がいいだろう？」
輝二と高雄も同行する事を決意。
高い実力を持つこの2人が来るとなれば、心強い。

『緊急で慌ててゲートを開いただから、時間や場所が多少ズレる可能性があるだよ・・・そこは許して欲しいだ！』
「あいよ！じゃあ、行かぜ・・・！」
「・・・おう！」「・・・」
4人は・・・時空間ゲートへと飛び込んだ！

時間は少し戻り・・・海鳴市街にて。
なのは達の世界では12月2日だ。

12月2日。

海鳴市の市街地。

高町なのはは、謎の襲撃者に襲われていた。
襲撃者は、赤いドレスのような恰好で、手にはハンマーのような物を持っている・・・鉄槌の騎士・ヴィータ。
なのははバリアジャケットを着て、レイジングハートを構える。

ヴィータは鉄球を上に向けて、なのはに向かって鉄球をハンマーで打った。

なのはは障壁を張って鉄球を防ぐと同時に、二つの桜色の魔力弾を出す。

「どらああああー!!」

ハンマーを振り下ろしながら、ヴィータがなのはに迫る。

なのはは横に飛んで、ハンマーをかわす。

「いきなり襲い掛かられる覚えはないんだけど…!!」

空中で止まって、ヴィータに向き直る。

「どこの子!? 一体なんでこんな事するの!?!」

大声でヴィータに理由を尋ねるのは。

だが、ヴィータは答えずに、黙って指の間に新たな鉄球を出す。

「教えてくれなきゃ、わからないってばあ!」

そう言っなのはは、先ほど出した二つの魔力弾を操作し、ヴィータの背中目掛けて放つ。

「っ!...はあっ!」

ヴィータは一発目を避け、二発目を障壁で防いだ。

「このやろおおお!!」

ヴィータは怒りの形相でハンマーを振り上げ、なのはに襲い掛かる。

振り下ろされるハンマーを、なのはは後ろに飛んでかわす。

そしてレイジングハートをシューティングモードにして、距離をとる。

「話を...」

【Divine】

「聞いてっばあっ!...」

【Buster】

ヴィータに向かって、得意技の【ディバインバスター】を放つ。ディバインバスターはヴィータの左側を掠った。その時に、ヴィータがかぶっていた帽子が落ちてしまった。

落ちて行く帽子を見ながら、ヴィータはなのはを怒りの形相で睨んだ。睨まれたなのはは、少したじろぐ。

ヴィータは、足下に赤い魔法陣を展開する。

「グラーフアイゼン！カートリッジロード！！」

ヴィータが叫んだ後、ハンマーがガシャンと撃鉄を打った音を立て、形を変えた。

「あ……え……ええ〜！？」

ハンマーの形が変わって、なのはが驚く。

ハンマーは片方の先の部分が尖っていて、もう片方の面は噴射口みたいな形だった。

「ラケーテン！」

片方の面がジェット噴射して、ヴィータが回転する。

回転の勢いを使って、なのはに襲い掛かる。

なのははすぐに障壁を展開するが、あっさりと破られ、レイジングハートに直撃してしまう。

「ハンマー！！！！」

ヴィータはハンマーを振り抜き、なのははビルに向かって吹き飛ばされる。

「ああああ！！」

窓ガラスを破って、ビルの中に入った。

埃や煙が立ち込める中、なのはは咳をしながら立ち上がった。

「でええええい!!」

ハンマーを構えたヴィータが、突っ込んでくる。

【Protection】

なのはは、再び障壁を張って防ぐ。

「ぶち抜けエエエ!!」

【了解】

ヴィータの叫びに、持っているハンマーが応えたと、障壁は破られた。

バリアジャケットも破壊され、なのはは後ろに吹き飛び、壁に叩きつけられる。

ヴィータがなのはに近づく。

なのはは、傷ついたレイジングハートをヴィータに向ける。

なのはの目の前で、ヴィータはハンマーを振り上げる。

(こんなので・・・終わり？嫌だ・・・ユーノ君・・・クロノ君・・・拓也さん・・・フェイトちゃん!!)

なのはは固く目を閉じた。

その直後、金属同士がぶつかる音が響いた。

なのははゆっくりと目を開け、恐る恐る前を見た。

そこには黒いマントを羽織って、自分を護っているフェイトの姿があった。

「ごめんなのは・・・遅くなった」

横から声をかけられて、なのはは見た。

「ユーノ君・・・」

隣にいたのは、フレットもどく……ユーノ・スクライアだった。

「く……！仲間か!？」

ヴィータはフェイトから距離をとった。

「友達だ」

バルディッシュをサイズフォームに変え、構えながらフェイトが答えた。

「民間人への魔法攻撃。軽犯罪では済まない罪だ」

「なんだテメエ？管理局の魔導師か？」

ハンマーを構えながらヴィータが睨む。

「时空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ」

一歩前に踏み出す。

「抵抗しなければ、弁護の機会がキミにはある。同意するなら武装を解除して」

バルディッシュを構えながら、一応武装の解除を促す。

「誰がするかよ!」

ヴィータはビルの外へ出た。

「ユーノ、なのはをお願い!」

「うん!」

すぐにフェイトは、ヴィータの後を追った。

残ったユーノは、なのはに回復の魔法をかける。

空中でヴィータとフェイトが対峙する。

「バルディッシュ」

フェイトは、バルディッシュの金色の魔力の刃をヴィータに向かって放った。

ヴィータも四つの鉄球をフェイトに向かって打ち放った。ヴィータは障壁を張って魔力の刃を防いだ。

フェイトは鉄球をかわすが、追尾型の鉄球はフェイトを追い続ける。

「はああああ！【バリアブレイク】！」

その時、アルフが下から接近し、ヴィータに拳を放った。

ヴィータがアルフに意識を向けた瞬間、フェイトは上に避けて鉄球同士がぶつかった。

そして、アルフの【バリアブレイク】を受け、ヴィータの障壁が崩れる。

アースラ内では……

結界によって、画面に現地の様子が映らない。局員達が結界の解析を急ぐ。

「術式が違う。ミッドチルダ式の結界じゃない……」

「そうなんだよ……何処の魔法だろう……これ……」

砂嵐の状態の画面を見つめながら、クロノは表情を険しくし、エイミーは焦りの表情を浮かべている。

二人の後ろでは、プレシアが心配そうに画面を見つめていた。

ちなみにプレシアの保護観察は終了し、今は時空管理局で研究員をしている。

現在はアースラに向中だった。

どうすればいいか解らず、プレシアの不安は大きくなっていった。
「フェイト……アルフ……！」

フェイトとヴィータがデバイスで打ち合う。しばらく打ち合ってから、フェイトが一旦離れる。

その直後、アルフがバインドでヴィータの動きを止めた。

「く……！」

ヴィータが歯を食いしばる。

「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えてもらおうよ」
ヴィータにバルディッシュを向けながら言うフェイト。

「……っ、なんかヤバイよ、フェイト！」

ふと、アルフが何かの気配を感じ取った。

その時、突如フェイトの前に剣を持ったピンクのポニーテールの女性が現れた。

その女性……剣の騎士・シグナムは剣を横薙ぎに振り、フェイトはバルディッシュで防ぐが後ろに飛ばされる。

「シグナム……」

ヴィータが呟く。

「おおおおおおおっ……！」

今度は別方向から獣の耳を生やした大柄の男性……ザフィーラがやってきて、アルフに蹴りを放つ。

「ああっ！」

アルフは腕で防御するが、吹き飛ばされてしまう。

「レヴァンティン。カートリッジロード」

シグナムの持つ剣が撃鉄を起こすと、剣が炎に包まれた。

「紫電一閃……！」

フェイトに向かって剣を振り下ろす。

バルディッシュで剣撃を防ごうとする。バルディッシュは真っ二

つに斬れてしまった。

シグナムが再び剣を振り下ろす。フェイトは障壁を張って防御する。フェイトはビルの上上に叩きつけられた。

「フェイト!!」

アルフがフェイトの元へ行こうとするが、ザフィーラが行く手を阻む。

シグナムはヴィータの前に浮かぶ。

「どうしたヴィータ？油断でもしたか？」

「うっせーよ。こっから逆転するところだったんだ！」

「そうか。それは邪魔したな」

そう言っつてシグナムは、ヴィータにかかっているバインドを破壊した。

「だが、あまり無茶はするな。お前が怪我でもしたら、我らが主が心配する」

「わーってるよ!!」

ヴィータはそっぽを向いてしまう。

「それから、落とし物だ」

シグナムはヴィータの頭に、先ほどなのはに落とされた帽子をかぶせた。

「破損は直しておいたぞ」

「・・・ありがと。シグナム」

「状況は実質3対3・・・1対1なら我らベルカの騎士に・・・」
「負けはねえっ!!」

シグナムとヴィータが、飛んでいく・・・が、そこに1人の男が立ちはだかった。

「おっと・・・俺が相手だ・・・!!」

前回のジュエルシード、VV事件で解決に貢献した男・・・佐野孝昭だった！

愛機バーニングブロスを手にも、2人を見る。

ただ・・・顔が赤く、額には熱　まシートを貼っていた・・・
「なんだてめえは・・・！」

「俺は時空管理局地上本部二等空佐、佐野孝昭・・・ぶえーつくしよー！」

グイータが睨みつけ、孝昭は答えるが・・・答えた直後に大きなくしゃみをしてしまうのだった・・・

「あー・・・畜生・・・風邪ひいてっからな・・・」

鼻水を吸いこみ、焦点の合わない目でシグナムとグイータを見る。珍しく風邪をひいていた為、本当なら寝ていたかったが、可愛い後輩のなのはとフェイトがピンチとあつては、黙って寝ている訳にもいかなかった。

その為、無理やり出て来たのだった。

『ご主人・・・大丈夫か？いくらご主人でもこの状態じゃ・・・』
流石のバーニングブロスも、孝昭を心配している。

相手はなのはとフェイトを圧倒する程の手馴れ・・・いくら孝昭でも、この状態ではヤバイ。

「ぶっちゃけマズイがな・・・だが、大人しく寝てる訳にもいかなーだろ・・・！」

「もたついてる暇はねえ・・・一気に決めてやらあ！」

「行くぞ・・・レヴァンティン、カートリッジロード！」

一気に孝昭に突撃し・・・

「ラケーテンハンマー！」

「紫電一閃！」

いきなり必殺技を放った！

「うぐっ……！」

孝昭は咄嗟に障壁を張るが、いつもの強度が出せずにあっさり割られてしまう。

何とかバーニングブロスで受け止めるが……フェイトのバルデイッシュ同様に真つ二つに割られてしまった。

更にその衝撃でビルの屋上に叩きつけられる孝昭。

「ぐう……っ……」

「孝昭さん……大丈夫……ですか……？」

近くに落ちていたフェイトが孝昭に話しかける。

「ははっ……ざまあねえや……君らを助けようとしてきたらこのザマだ……」

その頃、アースラ艦内では……

「あわわわわわわわ……たたたたた、大変だああ……！」

パラレルモンが相当混乱していた。

ふと、パラレルモンの身体から……一枚の写真が落ちた。

それは、半年前に拓也達と撮影した記念写真だった。

「そ、そうだべ……彼らを……彼らを呼ぶだ……！ひ、開け……時空の扉……！！」

こうして……パラレルモンが拓也達を呼んだのだった。

これを境に……事態が好転するのを祈って……

シグナムは、フェイトと孝昭が落ちた屋上に降り立ち、倒れてる2人に近付いた。

「くっ……！」

フェイトは、目の前に立つシグナムを見た。

「じつとしている……抵抗しなければ、命までは取らない」
そう言つて剣を上に掲げる。

「だ……誰が……！」

足に力を入れて立ち上がるうとする。

「弱気は……最大の敵……絶対に……引き下がらない……！」

自分が好きな男が教えてくれた、あの言葉を口にするフェイト。眼に強い光を秘め、シグナムを見る。

「いい気迫だ。だが：これ以上もたつてはいられん……ここまでだ」

シグナムが剣を振り下ろそうとする。

だが、次の瞬間……フェイトの頭上の空間が歪んだ。

「な、なんだ!？」

倒れている孝昭が驚くと……そこから拓也が飛び出して来た!

「おらあああああああつ！」

シグナムに奇襲攻撃と言わんばかりに飛び蹴りをぶちかます。

「つく！」

不意を突かれるも、咄嗟にレヴァンティンでガードするシグナム。拓也はバク宙をしながら綺麗に着地する。

「拓也……！」

フェイトは拓也の事を覚えていた。

自分が好きな男である孝俊と共に、自分達を助けてくれた炎の闘

一方、空中ではザフィーラとアルフが戦っていた。
「ちいっ！」

ザフィーラの攻撃に押され、アルフは防戦一方だった。

「はああああっ！」

「うわああああっ！」

ザフィーラの一撃を喰らい、地面に叩き付けられるアルフ。

「とどめだ……！」

ザフィーラがアルフ目掛けて急降下していく……が、アルフのすぐ近くの空間が歪んだ。

そして……そこから輝二が飛び出し、カウンターの要領でザフィーラの腹に掌底を叩き込んだ！

「はあっ！」

「ぐぶうああっ！？」

自身の急降下の勢いを利用され、綺麗に掌底を叩き込まれたザフィーラは、数M後退する。

「あ、アンタは……？」

「俺は源輝二……アンタ達が半年前に出会った神原拓也と、面林孝俊の仲間だ」

「えっ……孝俊の……!？」

フェイトが……そして自分が愛した孝俊の仲間。

強く、優しく、自分達の為に命をも張った男。

そんな男の仲間が……自分達を助ける為に、来てくれた。

「積もる話は後だ。まずはこの状況を打開せんと……」

輝二はジャケットの中からD・スキャナを取り出した……

そして、拓也・高雄・輝二の音が……同時に海鳴市上空に響いた。

「スピリットエボリューション！」

次回・・・激戦！

そして孝俊は・・・？

続く

第2章・第27話 バカは本当に何するか解らない気がする（後書き）

はい、第27話終了です。

遂にヴォルケンリッターが出現・・・そして拓也達の登場。

高雄は主にポケ担当です。ツッコミ役の拓也の負担が増えました
（笑）

ちなみに、孝俊は何処に行ったのか・・・勘の良い方なら既に察しはついているかもしれませんが、それはあと2・3回以内に（汗）

高雄の使う【剛龍】のスピリットが次回、遂になのは世界の戦場に姿を表します。

その力はどんな物か・・・とりあえずお楽しみに。

では、次回予告・・・シグナムさん、よろしくです。

シグナム「うむ、では・・・」

次回、リリカルなのはフロンティア第28話【必殺技は相手を仕留めるからそう言っ気がする】お楽しみに「

第28話 必殺技は相手を仕留めるからそう言う気がする(前書き)

はい、少し遅れましたが第28話です。

今回は名言コーナーはお休みします。

拓也達が大暴れの第28話・・・始まります。

拓也「じゃ、始めるぜ！」

第28話 必殺技は相手を仕留めるからそう言っ気がする

第28話副題【燃え盛る馬鹿】

かつての事件から半年・・・なのはがヴォルケンリッターの1人、
ヴィータの襲撃を受ける。

迎撃するなのはだったが、ヴィータの猛攻の前に絶体絶命のピン
チに陥る。

そこにフェイトが現れ、なのはを間一髪で助け出す。

得意の機動力と、アルフとのコンビでヴィータを追い詰めるも、
ヴィータの仲間のシグナムが乱入し、形勢が逆転する。

フェイトもシグナムの攻撃の前には歯が立たず、追い込まれる。
更に、病気の身体を押し出撃して来た孝昭もあつという間に撃
墜されてしまった。

もはやこれまでか、と言ったところに、パラレルモンからのS
Sを受けた拓也達が現れた！

拓也、輝二、高雄がそれぞれD・スキャナを構え、叫ぶ。

「...スピリットエボリューション！」

「アグニモン！」

拓也は炎の魔人・アグニモンに進化した。

「ヴォルフモン！」

輝二は・・・狼と人が一体化したような姿になり、青と白を基調とした装甲を身に付けた戦士・ヴォルフモンとなった。

ヴォルフモン ハイブリッド体 戦士型 バリアブル種

必殺技 リヒト・ズイーガー

（【リヒト・シュベアト】で敵を真っ二つにする技）

ツヴァイ・ズイーガー

（2本の【リヒト・シュベアト】をクロスして光弾を発生させ、振り抜いて発射。

下記のインテンズイーフ・リヒト・クーゲルよりも破壊力が上回る。

また、敵を切り裂くバージョンもある）

得意技 リヒト・クーゲル

（左腕から光の弾を発射する技）

インテンズイーフ・リヒト・クーゲル

（エネルギーを溜め、更に強力になった【リヒト・クーゲル】

リヒト・クライデン

（残像が残るほどのスピードで敵に近づき、2つの剣を繋げたツインブレードで

敵を吹き飛ばす技）

伝説の十闘士“エンシエントガルルモン”の力を受け継いだ、光の属性を持つ人型デジモン。

無口な性格だが、実は優しい戦士。体には聖なる光を詰め込んだ水晶「セントアメジスト」が付いている。

この水晶は正義の心を持つと強度が増し、悪の心を持つと脆くなる。光の剣「リヒト・シユベアト」を2つの剣を一つに繋げ「ツインブレード」にする事も可能。

「グレンモン！」

高雄は・・・なんと、孝俊が進化するブロスモンとそっくりのマシーン型デジモンに進化した！

グレンモン ハイブリッド体 マシーン型 バリアブル種 オリジナルデジモン

必殺技 ファイヤーカノン

(炎を纏ったレーザー砲。腹部のメインキャノン砲から発射)

ボルケーノクラッシュ

(上空高く飛び上がり、炎を纏った飛び蹴りを打ち込む)

ジェットインパクト

(空中戦用。高速で相手に突っ込んでハンマーをぶちかます)

得意技 スージーQ

(炎エネルギーを凝縮した必殺のフックパンチ。70t超の

破壊力を持つ)

バーニング・アーチ

(【メモリアル・アーチ】に炎を纏わせて敵に叩き込む)

全体的にプロスモンを赤くしたようなデジモン。プロスモンの兄弟機でもある。

プロスモンをベースにオフアニモンが作り上げた生粋のパワーファイター。

そのパワーは現役世代NO.1を誇る。

背中には空を飛ぶ為の装備【グレンブースター】が付いており、高速飛行が可能。

剣などの多彩な武器を使うが、最も得意とするのはハンマーである。ハンマーの使い方は孝俊から教わり、今では孝俊以上のハンマーの使い手である。

また、高雄自身がボクシングが得意である為、ボクシングを基本とした戦闘を行う。

名前の由来は紅蓮^{グレン}から。

「なっ・・・!?!」

「姿が変わりやがった・・・!?!」

「お前達・・・一体・・・!?!」

シグナム・ヴィータ・ザフィーラはそれぞれの相手を見て、驚愕の表情を隠せなかった。

「デジタルワールドに伝わる伝説の十闘士・・・炎の闘士の魂を受け継いだアグニモン!」

「ちいっ！」

咄嗟にその場から飛び退いて避けるヴィータ。
ハンマーが叩きつけられると・・・その場に綺麗な丸い大きな穴
が開いていた。

「なっ・・・！」

ヴィータは、その破壊力に目を丸くする。

あんなのをモロに喰らえば、間違いなくタダでは済まない。

「こ、この野郎おおおおおっ！」

【シュワルベフリーゲン】

ヴィータが鉄球を上に取り投げ・・・それをグレンモンに向かっ
て思い切り叩き落とした。

だが・・・グレンモンはその場から動かずにハンマーを構えた。

「・・・上等だコラ・・・！」

【Let's Stand by Burning Arch】

D・スキヤナから声が響く。

するとハンマーが炎を纏い・・・グレンモンは思い切りそれを鉄
球にぶちかました！

「【バーニング・アーチ】！」

カキイイイイインツ！と、気持ち良いまでの打撃音が響くと、

鉄球がヴィータに向かって飛んで行った！

「げっ！？打ち返しやがっただど！？」

慌てて障壁を張り、鉄球を防ぐヴィータ。

「さーて・・・お遊びはここから・・・じゃなかった、ここまでだ
ぜ・・・」

ちよいちよいボケを挟むグレンモン。

だが、実力は・・・まさしく本物だった。

ヴォルフモンは・・・ザフィーラと向かい合っていた。
狼士の対決・・・と言ったところだろうか。

「この人達は・・・前に俺の仲間が世話になっている。おいそれとやらせる訳にはいかん」

ヴォルフモンはそう言うと、自分の武器【リヒト・シュベアト】を2本構える。

ザフィーラはヴォルフモンを見据えたまま、動かなかった・・・否、無闇に動けなかったのだ。

（このヴォルフモン・・・見ただけで解る・・・明らかに孝俊と同等の凄腕だよ・・・）

アルフもヴォルフモンを見て、その威圧感に驚いていた。

（この男・・・出来る・・・シグナムと同じ・・・いや、それ以上か・・・！）

次の瞬間・・・ヴォルフモンが残像を残してその場から消えた！
「何っ!?!?・・・ぐうおっ!?!?」

驚くザフィーラ。だが、直後に一気に後ろに吹っ飛ばされる。
起き上がると・・・そこには【リヒト・シュベアト】を2本繋げたツインブレードを持ったヴォルフモンがいたのだ。

残像を残す程のスピードでザフィーラに接近、ツインブレードで攻撃し、吹き飛ばしたのだった。

「・・・舐めてかかると大怪我するぜ・・・」
「ぐっ・・・うおおおおっ!」

高速で向かってくるザフィーラ。

ヴォルフモンは【リヒト・シュベアト】を構えて迎え撃つ態勢に入る。

「はあああつ！」

ザフィーラが勢い良くパンチを放つ。

「ふっ！・・・はあつ！」

「ぐふっ！？」

だが、ヴォルフモンはそれを紙一重で受け流し、右手で手刀を叩き込む。

更に・・・

「おおおおおつ！」

「ぐああつ！」

ドオンツ！と爆発音が響く。

ヴォルフモンが左腕の装甲から光弾【リヒト・クーゲル】を放つたのだ。

ザフィーラは至近距離からそれを喰らい、吹っ飛ばされる。

「ぐっ・・・うお・・・」

ふらつきながらも立ち上がるザフィーラ。

【盾の守護獣】の2つ名を持つ為か、流石に防御力と耐久力は凄まじいものがあった。

だが・・・完全にヴォルフモンが押していた。

（くっ・・・この男の実力を見誤ったか・・・これはシグナムを明らかに上回る・・・となると、アグニモンとか言う奴と戦っているシグナムも危ないかもしれん・・・！）

自分を圧倒するヴォルフモンの実力に驚くザフィーラ。

そして、アグニモンと戦っているであろう、シグナムの身を案じた。

そして、そのアグニモンは・・・黙ったままシグナムと対峙していた。

両者共に、相手の出方を窺っている。

(このアグニモンと言う男・・・只者では無いな・・・不用意に先手は取れん・・・)

(このシグナムってねーちゃん・・・あのフェイトを圧倒するぐらいだ・・・下手を打つたらまずいな・・・だが、見てばかりもいられねえか・・・)

「行くぞおおおおおっ！」

アグニモンがその場から猛ダツシュし、シグナムに接近する。

(速い・・・！)

そのスピードに驚くも、すぐにレヴァンティンを構えて戦闘態勢をとるシグナム。

アグニモンはシグナムに向かってジャンプし・・・先制攻撃の飛び蹴りを放った。

「はあああああっ！」

「ぐうっ・・・！(こ、攻撃が重い・・・！)」

レヴァンティンで受け止めるが、予想以上の一撃の重さに顔をしかめるシグナム。

「せいっ！てやっ！はああっ！」

左回し蹴りから右後ろ回し蹴り、更に連続で同じ攻撃を繰り返すアグニモン。

息もつかせぬ猛攻に、流石のシグナムも押されていた。

「おらあああっ！」

「ぐうあっ！」

ローリングソバットでシグナムを弾き飛ばすアグニモン。

拓也は、元の世界に帰ってから修業を更に積み重ね、実力を増している。

彼に慢心は無い。常に自分自身が相手なのだ。

「くっ……！」

シグナムは一旦、アグニモンから離れて距離を取る。

「レヴァンティン！カートリッジロード！」

レヴァンティンが撃鉄を起こした直後、その刀身が炎に包まれた。

「むっ……！」

それを見て、アグニモンが構える。

「紫電一閃！」

高速でアグニモンに接近し、炎を纏ったレヴァンティンを振り下ろした。

その衝撃で床が砕け、辺りに煙が立ち込める。

「拓也……！」

後ろで戦況を見ていたフェイトと孝昭が叫ぶ。

シグナムは少し後ろに下がり、立ち込める煙を見つめていた。

（殺すつもりは無かった……だが……こうでもしなければ、間違いないやられていた……）

だが、煙が晴れると……そこには無傷のアグニモンがいた。

「危ないところだったぜ……流石にアレが当たってたら俺もタダじゃ済まなかつたぞ……」

（なっ……！？【紫電一閃】を……初見でかわしただと……！？）

シグナムは驚愕する。

だが、アグニモンにしてみればそんなに不思議ではない。

何故なら・・・アグニモンにとっては孝俊プロスモンの【閃光斬】の方が数段速いからだ。

それをかわす事が出来るアグニモンから見れば、【紫電一閃】も普通の速い斬撃である。

（そんなに不思議じゃない・・・スピードだけなら私の【雷光斬】や、孝俊の【閃光斬】の方が・・・まだ速かった）

フェイトもその状況を納得していた。
自分の剣の師である孝俊の【閃光斬】は、機動力に自信のある自分から見ても凄まじく速い。

ちなみにヴェノムヴァンデモン戦の後、フェイトは約束通り孝俊から剣術を教わっている。

（くっ・・・！このアグニモンと言う男・・・まだ底が見えない・・・！）

シグナムは再び距離を取って、レヴァンティンを構え直すと・・・

「はああああっ！」

一気にアグニモンに向かって斬り掛かって行った！

「上等だぜ・・・！」

アグニモンも、シグナムに向かって走って行く。

カキイン！ガン！ギギインツ！ブウンツ！ガゴンツ！

シグナムが次々に斬撃を打ち込む。

アグニモンはそれを両腕の装甲で受け止めたり、かわせるものは

かわしていた。

「はっ！」

「ぐうっ！」

アグニモンはシグナムの腕を蹴り、その反動を利用して距離をとる。

そして・・・拳に炎を纏わせる。

「くらえ！【バーニングサラマンダー】！」

「なっ・・・！？っう・・・！！！」

炎の龍を模したエネルギー弾がシグナムに向かって行った。

シグナムはそれをかわすが、直後に【バーニングサラマンダー】のまとった高熱が掠め、顔をしかめる。

今やアグニモンの技は、初めてデジタルワールドを冒険した時とは、比べ物にならない威力を誇っていた。

（なんとという威力だ・・・！あんなのをまともに喰らえば間違いなく戦闘不能だ・・・しかし・・・引き下がる訳にはいかん・・・！）

「仕方が無い・・・レヴァンティン！」

シグナムが叫んだ直後、レヴァンティンは連結刃形態の『シユラングフォオルム』へと変化した。

「おいおい・・・ありゃあもう剣じゃねーだろ・・・」

アグニモンが目を丸くする。

シグナムはすぐさま攻撃態勢に入る。

「うおっ！？」

アグニモンは横に跳んで刃をかわす。

だが、連結刃はまるで生き物のように動き、アグニモンを追いかけるように飛んでくる。

すると、シグナムが連結刃に紫の炎を纏わせた。

「・・・これで終わりだ」

そして炎を纏った連結刃を操る。

「【飛竜一閃!!!】」

シグナムが、炎を纏った連結刃をアグニモンに放った。

次の瞬間、屋上は大爆発を起こした。

「うおっ!?!」

「なんだ!?!」

ヴィータ、ザフィーラとそれぞれ戦っていたグレンモンとヴォルフモンが、アグニモンのいるビルの屋上を見る。

また、ヴィータとザフィーラも屋上を見ている。

「へっ!終わったな・・・シグナムのアレを喰らって無事で済んだ奴はいねえ」

「・・・シグナムにアレを使わせるとはな・・・心配していたが、私の考え過ぎだったか・・・」

ヴィータとザフィーラは笑みを浮かべ、シグナムの勝利を確信していた。

「あー・・・いつてーな畜生・・・」

だが、そこには・・・フェイトと孝昭を庇って連結刃を受け止めているアグニモンがいた。

斬撃によって装甲が所々壊れているが、炎によるダメージは一切無かった。

「な・・・何・・・!?!」

【飛竜一閃】を受け止められた事に驚愕するシグナム。

確かに、斬撃はアグニモンにダメージを与えたが・・・炎属性のアグニモンには、それだけしか通じなかった。

【飛竜一閃】が纏っていた炎は、アグニモンの放つ炎に掻き消されていったのだ。

「なっ！？シグナムの【飛竜一閃】を・・・受け止めやがっただど!?」

「バカな・・・！私ですらアレを喰らってタダで済む自信は無いと言っのに・・・！」

余裕の表情から一転、焦りと驚愕の表情になるヴィータとザフィーラ。

「行くぜ・・・今度はこっちの番だ・・・！」

すると、アグニモンが炎を纏って回転し、炎の竜巻となった。

「レヴァンティン、私の甲冑を・・・！」

【了解】

レヴァンティンが反応すると、シグナムの身体がうっすらと光る。防御態勢に入ったようだ。

そして、レヴァンティンを持って防ぐ態勢を取る。

「おおおおおおっ！」

だが、アグニモンは構わず向かって行き・・・

「【サラマンダーブレイク】！」

ドガアアアッ！・・・と、破碎音にも聞こえる強烈な打撃音が響く。

「がっ・・・はあっ・・・！」

シグナムは防御の上から【サラマンダーブレイク】をぶち込まれ・・・屋上に叩き付けられた。

120%の力を込めた、アグニモン渾身の【サラマンダーブレイク】は、シグナムの甲冑すらぶち抜いたのだった。

「む……無念……」

シグナムはそう呟くと……意識を手放した。

アグニモン 拓也 vs アグニモン シグナム……
アグニモン 拓也 Win!!

アグニモンが【飛竜一閃】を防いだ直後……グレンモンとヴィータは、激闘を繰り広げていた。

共にハンマーで打ち合い、その度に鈍い打撃音が響きまくる。

「はあああああっ!」

グレンモンがハンマーを振りかぶって突撃する……が、ヴィータは空を飛んで回避する。

「ちっ! 飛びやがったか……」

舌打ちするグレンモン。

そんなグレンモンを見て、ヴィータは薄ら笑いを浮かべる。

「へへっ、てめーみたいな重そうな奴は空飛べねーだろうしな……
こっからジワジワ攻めてやるぜ!」

「……しゃーねえ、やるしかないな」

グレンモンはそう言うと、D・スキヤナのボタンを押す。

【Green-Booster TAKE OFF】

D・スキヤナから声がすると、グレンモンの背中のハッチが開き、2対のブースターが出現する。

そして、ジェット噴射でグレンモンが浮かび上がった!

「なっ！てめえ、その体で空飛べんのかよ……！」

「別に飛べんとは言ってねーぜ」

そう、別に空が飛べない訳ではない。

ただ、やっぱり地上の方が戦いやすいから使ってないだけだった
りする。

「さーで、こっからは、真面目に行くぜ！」

……と、言いながら、【シエー！】とか、【命！】とか、【ゲ
ツツ！】などのなんか古いポーズを取るグレンモン。

「て、てめえ……どこまでも……ふざけやがってええええええ！」
額に青筋を浮かべ、グラーファイゼンを振りかぶって突っ込んで
くるヴィータ。

完全に高雄のペースにハマってしまったている。

「ブツ潰れるおおおおお！！！」

そして、思い切り振り抜いた。

【Let's Stand by Jet Impact】

「行くぜっ！必殺……【ジェットインパクト】オオオオオオオオ！」
ブースターのジェット噴射が一段と強くなり、グレンモンがヴィ
ータに突っ込む。

そして、ハンマーを大きく後ろに振りかぶって……ぶちかまし
た！

バアゴオオオオオンツ！と、耳をつんざくような打撃音が響く
と……ヴィータが屋上に向かって落下していく。

だが、なんとか持ち直して落ちる寸前で浮遊し、ゆっくり着地す

る。

グレンモンもそれを見て、ホバーのようにゆっくり降りて来る。

（ちつくしよー・・・なんなんだこの野郎・・・ふざけてるくせにとんでもねえ威力だ・・・）

ヴィータは、未だにグレンモンの行動パターンが理解出来なかった。

その為、完全にグレンモンに振り回されていたのだ。

（ちっ！もう考えるのはヤメだ・・・アタシの今持てる渾身の一撃を、奴にぶち込んでやる！）

「今度こそ・・・終わりにしてやらあ！アタシの全力で・・・ブツ潰れるおおおおおおおっ！！！」

ガッゴオオオオオオオオオッ！

ヴィータはグラーフアイゼンを両手で持って振り上げ・・・グレンモンに向かって思い切り振り下ろした！

グレンモンは・・・なんと、かわさずに両腕を頭上でクロスし、まともに受けた！

「つつう・・・これが今のお前の全力か・・・すげえ響いたぜ・・・！」

その衝撃に顔を歪めながらも、笑みを浮かべるグレンモン。

「なっ・・・！？てめえ・・・ワザと受けやがったのか・・・！」
「折角相手が全力で打ち込んで来たんだ・・・受け止めねーのは男じゃねえ・・・」

グレンモンはそう言うつと・・・グラーフアイゼンを払いのけ、一
旦距離を取る。

そして・・・その場で右拳を強く握りしめる。

「今度は・・・俺の本気を見せてやる・・・！」

グレンモンの右手が高熱を帯び、赤を通り越して青く光る。

「ぶっちやけ、女や子供をぶん殴んのは趣味じゃねえ・・・だがな
・・・」

グレンモンはヴィータを真っ直ぐ見据えて喋る。

「命を賭けた戦場に身を置いた以上、男も女も大人も子供も関係ね
え・・・俺は俺の持てる力を相手にぶち込むだけだ！」

そう叫ぶと・・・一気にヴィータに向かって走り出す。

ヴィータは魔力をありつたけ込めて障壁を展開した。

「へっ！いくら全力でも、素手でアタシの障壁を砕ける訳がねえ！
受け止めてやる！」

それでも、グレンモンはヴィータの目の前で止まって踏ん張り・・・
青く光る右拳で・・・フックパンチを放った！

「必殺・・・【スージーQ】！！！」

ガアアアアンツ！と、金属を叩いたような轟音が響く。

そこには・・・グレンモンの【スージーQ】を障壁で受け止めて
いるヴィータの姿があった。

「へへ・・・どうだ・・・！！？」

止めたと思いきや安堵するヴィータ。

だが、グレンモンはそのまま踏ん張り・・・拳に力を込める。

「うおおお・・・らああああああああああつ！！！！！！！」

「う……うわああああっ!!?」

一気に拳を振り抜き……なんと、障壁ごとヴィータを殴り飛ばしてしまった。

ヴィータは壁に叩き付けられ……そのまま気を失った。

「はあっ……はあっ……どうだチクショー……」

グレンモンは……息を切らしながらも、拳を天に突き上げていた。

グレンモン 高雄vsヴィータ……グレンモン 高雄Win!!

ヴォルフモン 輝二とザフィーラは……終始ヴォルフモンがザフィーラを圧倒していた。

「おおおおっ!!」

「ぐうっ!!」

ザフィーラの拳がヴォルフモンの顔面を捕える。

だが、同時にヴォルフモンは即座に【リヒト・シュベアート】を振り抜く。

「【リヒト・ズイガー】!」

「がはああっ!!」

不安定ながらも必殺技を叩き込まれ、体勢を崩すザフィーラ。その隙を、ヴォルフモンは見逃さなかった。

(決めるならここしかない……!)

【リヒト・シュベアト】を二刀流で構えてクロスさせる。
そして、高密度の光弾が発生すると…ヴォルフモンはそれを振り
抜いた！

「これで決める！【ツヴァイ・ズイーガー】！」

光弾は一直線にザフィーラに向かう。

ザフィーラは咄嗟に腕をクロスしてガードする…だが…

「ぐっ…ぐおおおおおっ！！？」

そのまま吹っ飛ばされ、地面に叩き付けられる。

気絶こそしなかったものの、戦闘不能なのは明らかだった…

ヴォルフモン 輝二vsザフィーラ…ヴォルフモン 輝二Win！！

それから少し経って…

「う…っ」

シグナムは意識を取り戻し、うつすらと目を開ける。

「私は…確か奴に敗れて…」

ゆっくりと体を起こした。

「おい、大丈夫か…？」

声をかけられて横を見ると、進化を解いて元に戻った拓也とフェイト、孝昭がすぐ側に立っていた。

「…！！」

シグナムはすぐに立ち上がるうとする。

「ぐっ…！！」

だが、拓也にやられた傷が痛み、立てなかった。
響いてくる痛みにも、顔を歪めるシグナム。

「無理して立とうとするな。俺の全開の一撃をまともに喰らってんだからよ」

そう言っただけで拓也は、シグナムに手を差し出す。

「え……？」

シグナムは唖然となり、差し出された手を見ていた。

「ほら……早く掴めよ」

「あ……ああ……」

困惑しながら、シグナムは拓也の手を掴んで立ち上がった。

「……何故、とどめを刺さなかった……？」

「あ？んなもん必要ねえだろ。勝負は付いたんだからよ」

尋ねるシグナムに、あっけらかんと答える拓也。

「それに……アンタと打ち合ってる時に感じたが……なんか焦ってるみてーだったし」

（この男……多少打ち合っただけでそこまで読み取ったのか……）

「……私はベルカの騎士、ヴォルケンリッターが将。【剣の騎士】シグナム……お前の名は？」

「俺は拓也。神原拓也だ……デジモンに進化する以外は、普通のサッカー好きの高校生だ」

「拓也……か。そっちの魔導師……男の方は孝昭とか言ったが……お前は？」

「時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ」

「そっか……3人の名前、覚えてぞ」

自己紹介をし合う拓也達とシグナム。

「で？アンタらの目的はなんなんだ？」

「・・・すまんが、それは・・・」

拓也の質問に、答えられないとシグナムが言いかけた所に・・・

「なのは！！！」

ユーノの叫び声が聞こえた。

拓也は叫び声が聞こえた方を向き、フェイトも同じくユーノの声がした方を見た。

なんと、なのはの体から、何者かの腕が出ているではないか。

そしてなのはの体から出てる手の中には・・・光の玉があった。

「な、なのはあーっ！！！」

すぐにフェイトは飛んでなのはの元へ向かう。

拓也はシグナムを睨みつけ、胸ぐらを掴む。

「てめえシグナム！なのはちゃんに何をしやがったんだ！？」

拓也が、閻魔大王も裸足で逃げ出す様な、激しい怒りの形相でシグナムに怒鳴る。

「お、落ち着け拓也・・・！あれは【リンカーコア】を蒐集しているんだ・・・！」

「リンカーコア？」

シグナムの口から出た聞き慣れない言葉に、拓也は首を傾げる。

「リンカーコアとは魔導師が持つ魔力の源だ。それを奪われたら、しばらくの間魔法は使えなくなるが、命に別状はない・・・！」

怒りに燃えている拓也を落ち着かせるように、シグナムが焦って説明する。

「……本当だろうな……?」

「……ああ」

拓也は真剣な眼差しでシグナムを見つめ、シグナムも同じく真剣に拓也を見つめる。

少し後、拓也はシグナムから手を離れた。

「……すまない、拓也……だが我らには、こうする以外に方法が無いのだ……」

シグナムが苦悶の表情で拓也に謝罪をする。

「……もう1度聞く……目的は何なんだ?」

再び拓也が尋ねた。

シグナムは……一呼吸置くと、目的を言った。

「……闇の書の完成です」

「闇の書? なんじゃそりゃ……?」

聞き慣れない言葉に、拓也はまた首を傾げる。

その時、戦闘に出ていなかったもう1人の仲間、【湖の騎士】シヤマルからシグナム達に連絡が入った。

(……蒐集は完了したわ。みんな、各自離脱して!)
(了解)

シヤマルに答えてから、意識を取り戻していたヴィータ達は離脱し始めた。

シグナムも拓也達から離れる。

「あっ……おい、シグナム!」

「すまない拓也! 我らは捕まる訳にはいかんだ!」

そう言ってシグナムもそこから飛んで離脱した。
拓也は、静かにシグナムが去っていった方を見つめるしかなかった。

輝二、高雄もまた・・・同じく呆然と見ているだけだった。

今回は、ヴォルケンズ側の話・・・そして、遂に孝俊が登場！
続く

第28話 必殺技は相手を仕留めるからそう言う気がする(後書き)

はい、第28話終了です。

拓也達が妙に強いですが・・・まあ、A・S編初戦闘って事で
何)

今回は・・・孝俊が現れます。

どうなるかは・・・お楽しみ。

では、次回予告・・・ヴィータちゃん、どうぞ～

ヴィータ「へいへい。つたく、あのバカ力め・・・いつかぶっ潰し
てやる・・・」

次回、リリカルなのはフロンティア第29話【主役は遅れてやって
来ても必ずカツコイイとは限らない気がする】お楽しみにな！」

第29話 主役は遅れてやって来ても必ずカッコイイとは限らない気がする(前

はい、遅くなりましたが第29話です。

名言コーナーの代わりにお知らせです。

人気投票を締め切りました。

結構票数が集まりました・・・発表は近い内に行いたいと思います。

投票して下さった方々、ありがとうございました！

ライター「じゃあ、第29話・・・始めるぞ！」

第29話 主役は遅れてやって来ても必ずカッコイイとは限らない気がする

第29話副題【龍の再臨】

拓也達の参入により、一気に形勢を逆転したフェイト達。
シグナム達を退け、ビルの屋上でなのはを見ていた。

「なのはちゃん……大丈夫か？」

「あ……拓也……さん」

なのはに駆け寄り、容体を心配する拓也。

なのははそんな拓也を見て、苦しそうだが笑顔を浮かべる。

「拓也……来てくれたんだね」

「ああ、パラレルモンからSOS受けてな。咄嗟にその場にいたメンバーで飛び込んだんだよ」

フェイトもなのはを心配しつつ、拓也の方を向く。

「いやー……しかし、別の時空とは言ってもそんなにこっちと変わらん」

高雄が周りをきよるきよる見回している。

「……何故か逆立ちしながら」

「何で逆立ちしてんだよ……」

「なんとなくだ」

拓也の呆れ混じりのツッコミに、普通にあっさり答える高雄。

「あ、あの・・・あなたは・・・？」

「あ、紹介が遅れたな。俺は四谷高雄ってんだ。君は・・・フェイトちゃんか。拓也から聞いてるよ」

「おやおずと尋ねるフェイトに対し、逆立ちをやめて普通に立って答える高雄。」

「それにしても・・・凄いパワーでしたね・・・」

「全くだよ。障壁ごと相手を殴り飛ばすなんて・・・なんつー非常識な」

フェイトとアルフが高雄に話す。

障壁ごとヴィータを殴り飛ばしてK・Oさせた、高雄の【スージーQ】の破壊力に驚きを隠せなかったのだ。

「パワーとジャンプ力とボケは自信有るんでな」

H A H H A A ! と笑いながら答える高雄。

「あと、そっちの青いバンダナのアンタも・・・さっきは助かったよ。ありがとう！」

「礼には及ばん。困ってる人を助けるのは当然だ」

輝二に礼を言うアルフ。

もし、輝二がいなければ、自分は今頃ザフィーラにやられていたかもしれないのだ。

そんなアルフに対し、輝二は微笑んで返す。

「おっと、自己紹介がまだだったな・・・俺は源輝二だ。アンタ達の事は、前に拓也と孝俊から聞いた」

「輝二か、よろしくね　ところで・・・今回は孝俊はいないのかい？」

アルフのその一言に・・・拓也・高雄・輝二の3人が凍りついた。

「あー——————っ！あいつだけ違う所に飛びやがったああああああっ！！！」

拓也の絶叫が海鳴市上空に再び響いたのだった。

その頃、なのはのリンカーコアを蒐集し、離脱したシグナム達は八神家へ向かっていた。

「シグナム、ヴィータちゃん、ザフィーラ、大丈夫？」

心配そうな表情で、シャマルが三人に聞いた。

「ああ、大丈夫だ」

「大した事はねえよ」

「私も大丈夫だ・・・打撲などはあるが、それだけだ」

三人はシャマルに答えた。

ちなみに、ザフィーラは狼形態になっている。

「・・・それにしても、途中にいきなり現れた彼らは一体・・・？」
シャマルが、途中から乱入して来た拓也達の事を思い、首を傾げる。

「姿が変わった・・・変身・・・いや、【エボリューション】と言っていたから進化と言った方がいいか？」

ザフィーラが先程の拓也達・・・アグニモン達の事を思い出す。

「デタラメな奴らだったぜ・・・魔法じゃねーけど、とんでもねー力だった・・・」

ヴェータは、パワー勝負で真っ向から自分を打ち破ったグレンモンの事を考えていた。

やる事なす事無茶苦茶もいいところだが、実力はまさしく本物だった。

「それよりも一番凄かったのがあのアグニモンって奴だな・・・シグナムの【飛竜一閃】を受け止めた上、必殺技と思われる蹴りでシグナムの甲冑をぶち抜くとは・・・」

ザフィーラがアグニモンの事を思い浮かべる。

シグナムの必殺技を受け止めたばかりか、シグナムの甲冑を蹴りで撃ち抜いた・・・

あの【サラマンダーブレイク】は、アグニモンの技で最強の破壊力を持つのだ。

ベルカの騎士は、1対1で負ける事など殆ど考えられない・・・にもかかわらず、アグニモンはシグナムに勝利した。

グレンモンも真っ向から力でヴェータをK.Oし、ヴォルフモンもスピードと技でザフィーラを圧倒した。

まさか自分達が1対1で負けるとは・・・想像もつかなかった。

そのシグナムは・・・自分を真っ向から打ち破った拓也の事を考えていた。

突如現れ、自分に真っ向から1対1を挑んで来た男。

アグニモンと言う炎の魔人となり、自分を終始圧倒した・・・
【紫電一閃】をかわし、【飛竜一閃】を受け止め、遂には自分の
甲冑をぶち抜いた。

不思議な事に・・・そんな拓也の事が、頭から離れなかった。

「・・・どうした？シグナム？」

「あ、いや、なんでもない・・・」

ザフィーラが声をかける。

シグナムは我に返り、ザフィーラに答える。

そんなこんなで、八神家に到着した4人（正確には3人と1匹）。

「主、只今戻りました」

「ただいまー」

「みんなおかえり〜」

帰って来たシグナム達を、車椅子に乗った少女が出迎える。

少女の名前は【八神はやて】・・・なのはやフェイトと同じ年の
女の子だ。

このはやてとヴォルケンリッターの出会い・・・半年前、拓也
達が【ジュエルシード・VV事件】を解決し、元の世界に戻る少
前まで遡る。

6月3日・・・PM9:05。海鳴市中丘町のとある一軒家。

はやては早くに両親を亡くして、1人暮らしをしていた。

はやては足が不自由であり、小学校も休学中である。

今日も今日とて、本を読み耽っていた・・・

いつの間にか、時計は12時を指そうとしていた。

「あ・・・もう12時・・・」

そして・・・時計が12時を指した瞬間・・・本棚に置いてあった、鎖に巻かれた1冊の本が激しく光り出した。
鎖が千切れ、その本がひとりでに動いて宙に浮き、パラパラと捲れていく。

【封印を解除します】

はやてはそれを呆然と見ていた。
そして、その本がボタンと閉じる。

【起動】

やがて光が収まると、はやての前に見知らぬ四人の男女がいた。
女性3人と男性1人だ。
女性三人は黒いワンピースっぽい姿で、男性は黒いタンクトップと短パン姿だった。
この4人の男女こそが、ヴォルケンリッターのシグナム・ヴィータ・シャマル・ザフィーラである。

「【闇の書】の起動・・・確認しました」
シグナムが最初に口を開く。

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士でございます」
次にシャマルが言う。

「夜天の主の下に集いし雲」
そして人間モードのザフィーラが続く。

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を」

最後にヴィータが言った。

四人とも片手と膝を床につけて、頭を下げて主であるはやての命令を待っていた。

・・・が、いつまで経っても命令が来ない。ヴィータが焦れたのか、はやてに近寄ってみる。

(ねえ・・・ちよつとちよつと)

ヴィータが念話で仲間に話し掛ける。

(ヴィータちゃん、静かに)

シヤマルが、ヴィータに注意する。

(黙っている。主の前で無礼は許されん)

シグナムも、シヤマルと同じくヴィータを止める。

ヴィータは、倒れているはやての顔を覗き込んだ。

(無礼つてかさあ・・・こいつ・・・気絶してるように見えるんだけど・・・?)

「ええっ!?!」

突然、目の前に得体の知れない人達が現れ、はやてはビックリして気絶してしまったのである。

守護騎士達は慌てて、はやてに駆け寄った。

・・・と、まあこんな感じだった。

しかも、はやては今までシグナム達が見て来た主とは一味も二味も違う・・・とゆーか、微妙にズレていた。

はやては、闇の書の蒐集は望まず、シグナム達にも蒐集はしないように言っていた。

だが・・・闇の書ははやての身体を蝕んでおり、命さえも危うい状態になっていた。

そんなはやてを助けようとシグナム達は誓いを破り、今回の事件が起こった・・・と言う訳だ。

もつとも、まさかデジモンに進化する人間達が出て来ようとは思ってもよらなかっただろうが。

「ごちそうさま」

夕飯の時間が終わり・・・はやて達はリビングでくつろいでいた。

「・・・！」

ふと、シグナムが急に緊張感漂う顔つきになる。

他の3人も表情を変えた。

「ど、どうしたん？みんな・・・」

はやてが心配そうに4人を見る。

「主、下がって下さい・・・何かがこの付近にいます。とてつもなく危険な何か・・・」

『ほう、我らの気配に気づくとは只者では無いな・・・？』

『貴様らの持つ闇の書・・・その膨大なるエネルギー・・・我々が首領が欲している・・・』

『闇の書・・・我々がいたたく・・・』

シグナムがはやての前に立つと、何かの声がした。

そして、3つの何かが姿を現した。

1つは吸血鬼と闘牛士を合わせた様な恰好。(マタドウルモン)

もう1つは骸骨と悪魔が合わさったような格好で、翼が生えている。(スカルサタモン)

更にもう1つは丸い身体に大きな目と口、そして腕だけが付いた様な恰好だ。

この3匹は・・・デジモンだった。

マタドウルモン 完全体 アンデッド型 ウィルス種

必殺技 蝶絶喇叭蹴：（独自の格闘技「武舞独繰」から繰り出される蹴り技）

得意技 サウザンドアロー（腕に仕込まれたレイピアで攻撃する技）

とある博物館の民族舞踊データベースから生まれたアンデッド型デジモン。

吸血鬼と闘牛士を併せたようなデジモンで、「武舞独繰」という舞の動きを独自にアレンジした格闘技を使う。

ヒラヒラした柔らかな衣装で敵を油断させその隙に仕込んでいるレイピアで攻撃する。

吸血鬼タイプなので、デジモンの血を吸わなくては生きていけない。常に強いデジモンの血を求め転々と移動する。

スカルサタモン 完全体 アンデッド型 ウィルス種

必殺技 ネイルポーン（杖の先から暗黒パワーを凝縮させた光を放つ技。デジモンのデータに異常を発生させ、全てを破壊する）

得意技 スカルハンマー（持っている杖でぶん殴る技）

強さと破壊だけを求めてダークエリアに堕ちアンデッド型になってしまったデジモン。

しかし、強大な悪のパワーを秘めた、^{デジコア}電脳核の“ダークコア”を手に入れてしまったので、強い暗黒のパワーを持っている。

テツカモン 完全体 マシン型 ウィルス種

必殺技 斬電剣（凄まじい切れ味の剣に電撃を纏わせ、敵の構成データもろとも真つ二つにする技）

得意技 スカルスタンド（巨大な頭蓋骨を敵の頭上に落とす技）

丸い体に大きな目と口、右手に“斬電剣”を持つマシン型デジモン。

悪いハッカーがプログラムを破壊する目的で作ったといわれている。

周りも薄暗くなっている。

どうやら、結界らしき物が張られているらしい。

「な、なんや・・・あの化物・・・!」

は yet は怯えた表情で3匹のデジモンを見ている。

「この野郎・・・いきなり出てきやがって闇の書を渡せだど？ふざけんじゃねえ!」

ヴィータはグラーファイゼンを構えて既に戦闘態勢に入っていた。「主には指一本触れさせんぞ・・・! シャマル、主の傍に付いていろ」

「ええ!」

シグナムもレヴァンティンを構える。
ザフィーラも人間形態となり、シグナムの隣で構えを取る。

「ならば力づくで奪い取るまでよ・・・！」

マタドウルモンを先頭に、スカルサタモン、テツカモンが迫る。

「1人で1体を相手にすれば止められる！確実に潰すぜ！」

ヴィータがスカルサタモンに向かってグラーフアイゼンを振り下ろす。

だが・・・スカルサタモンの持つ杖で受け止められてしまった。

「ふん・・・ぬるいわっ！【スカルハンマー】！」

「うわぁっ！」

そのまま杖に殴り飛ばされて吹っ飛ばされるヴィータ。

「ヴィータちゃん！？」

「ヴィータ！」

シヤマルとはやてが後ろで悲鳴を上げる。

（ちくしょう・・・グレンモンってのとやり合った時のダメージがまだかなり残ってやがる・・・！）

ヴィータは、グレンモンにK・Oされた時のダメージが残っており、本調子には程遠かった。

シグナムとザフィーラも同様らしく、それぞれテツカモン、マタドウルモン相手に苦戦を強いられていた。

「ほらほらどうしたあ！」

「くっ・・・！」

シグナムも、テツカモンの素早い剣捌きに苦戦を強いられている。本調子ならば、そこまで苦戦する程の相手ではない。

だが、アグニモンの【サラマンダーブレイク】をまともにくらい、

そのダメージが身体に残っている。

おまけに、テッカモンには胴体が無い為、当たり判定が小さいのだ。

「おおおおおっ！」

「ぐぬっ！」

ザフィーラは、マタドウルモン相手に奮戦していた。

本調子には遠いが、シグナムとヴィータに比べれば、ダメージはまだ少ない。

「はああああっ！」

「させんわ！【蝶絶喇叭蹴】！」

追い打ちをかけようと飛びかかるザフィーラ。

だが、マタドウルモンの必殺の一撃がザフィーラを捉える。

「ごはあああ・・・っ！」

何とか踏みとどまるザフィーラだったが、ダメージは着実に溜まっていた。

「【斬電剣】！」

「ぐうっ・・・！」

テッカモンの【斬電剣】が、シグナムを掠める。

直撃こそ免れたものの、斬電剣のまとった電撃がシグナムの自由を奪っていた。

シグナムは片膝をつき、肩で息をしていた・・・

「あかん・・・このままじゃ・・・みんなやられてまう・・・！」

はやてが今にも泣きそうな顔で戦況を見ていた。

（みんな今日の戦闘のダメージが残ってて全然思うように動けないんだわ・・・このままじゃ・・・！）

シヤマルが焦った顔でシグナム達を見る。

「さあ・・・大人しく闇の書を渡せ・・・大人しく差し出せば命までは取らんぞ・・・？」

「断る・・・命に代えても・・・闇の書は渡さん・・・！」

迫ってくるテツカモンに、シグナムはレヴァンティンを向けて答える。

闇の書を渡してしまえば、魔力の蒐集が出来なくなり、いずれははやてが死んでしまう。

「ふふふ・・・これを見てもかな・・・？」

テツカモンが何やら合図をすると・・・はやてとシャマルの背後から悪魔と龍が一体化した様な、赤い目をした物体が現れ、襲い掛かった！

デビドラモン 成熟期 邪竜型 ウイルス種

必殺技 クリムゾンネイル（両手の鉤爪で切り刻む技）

得意技 レッドアイ（4つの目で睨み、敵を動けなくさせる技）

デモニツクゲイル（翼を振り、風の刃を飛ばす技）

“複眼の悪魔”と呼ばれ、恐れられている邪竜型デジモン。

ダークエリアから誕生した魔獣で、闇の中を飛び回っている。

真つ赤な4つの目で睨まれたら相手は身動きがとれなくなり、カラダを切り刻まれてしまう。

尻尾で突き刺すことも得意とする。

邪神像として各地に点在しているという話もある。

「なっ……！あ、主……！！」

シグナムが叫ぶが、デビドラモンの方が明らかに早かった……
「……！！！」

はやては最早、恐怖のあまり声も出なかった。

まさに絶体絶命……と思われたその時、八神家の上空の空間が歪んだ。

「お、おい……何か降ってくるぞ……！？」

ヴィータが指差した先には……

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおお……！！」
スカイダイビングして来る孝俊の姿があった。

……何故かパラシュート付けて……

どんどんやる事なす事が無茶苦茶になって来ている。

この状況について……数年後の彼女達はこう語る。

ヴィータ「高雄と一緒に出て来なくて本当に良かった」

シグナム「軽く混乱しました」

シャマル「凄く衝撃的な出会いでした」

ザフィーラ「何とも言えなかった」

はやて「めっちゃボケの匂いがしました」

落下しながら・・・孝俊は下の状況を見た。

そして・・・一瞬で分析した。

状況・・・美女2人・美少女2人・犬っばい男1人。明らかに怪しい4匹。

戦況・・・美女1人と美少女1人と犬っばい男が負傷、明らかに怯えてる美少女1人。

黒いのが美少女に襲い掛かってる・・・明らかに怪しい4匹を敵と認識。攻撃態勢。

「おらああああああっ!!」

「ブベツ!?!」

孝俊は一瞬で状況を判断し・・・右膝を突き出してデビドラモンの顔面に、フライングニードロップをぶちかました。

「うおおっと・・・!?!」

「ぎゃっ!?!?!」

・・・までは良かったのだが、体勢を崩し・・・
・シヤマルの上に落ちたのだった。

「いててて・・・何で空中に出口が・・・
孝俊は頭を押さえながら下を見ると・・・シヤマルがいた。
そう、押し倒している状態だった。」

(・・・ちょっと待て、なんか半年前にもこんな事があつた
ような・・・これってデジャヴ・・・?)

ふと考えると・・・後ろから2つのどでかい殺気を感じた。
孝俊は、おそろおそろ後ろを振り向く・・・

そこには、レヴァンティンとグラーファイゼンをそれぞれ構えた
シグナムとヴィータがいた。

「いきなり現れて何をしとんのじゃああああああっ!!!」

それぞれの必殺技が・・・孝俊に炸裂した。

「わつぎやああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああ!!!??」

そして・・・ズタボロになって頭も爆発へアーとなった孝俊は・・・
・シグナムとヴィータに土下座して謝っていた。

「すみません・・・なんか色々すみません・・・いくら降って来た
からってこんな展開ですいません・・・」

一方、押し倒されていたシヤマルは・・・両手を頬に添えて、顔

を真っ赤にしていたりする。

「おいこら貴様ら！こつちはほったらかしか！」「
マタドウルモンが怒って叫ぶ。

今の間、呆然となっていたせいもあつてか、ほったらかしにされていたのだった。

「……やれやれ、出てきて早々にバトルか。もはやお約束
かね、これは……」

一転して真面目な顔付きになる孝俊。
そして、ゆっくりと立ち上がる。

（な、なんだ……この圧迫感は……ついさっきまでとはまるで
違う……！）

孝俊の放つ威圧に、シグナムは眼を見開く。

目の前の男には……先程までのバカっぽい雰囲気は欠片も無い。

「貴様……何者だ!?!」

スカルサタモンが孝俊に杖を向けて言う。

「通りすがりの高校生だ。ちつとおふざけが過ぎるがな……」

孝俊はそう答えると……ポケットからD-スキャナを取り出す。
そして……左手にデジコードを発生させ、それをスキャンさせ
る。

「スピリットエボリューション!」

ありったけの声で……叫ぶ。

そして・・・機械の装甲が孝俊の身体を包む。

そこに降り立つは、龍の魂を持った重戦士

緑に光り輝く機械の鎧で身を包み

振り回すは、邪な魂を叩き潰す鉄槌

悪意を斬り裂く研ぎ澄まされた魂の刃を振るう者、その名は・

・

「ブロスモン!!」

アグニモン達に遅れる事2時間・・・漸くブロスモンが海鳴市に現れた!

「なっ・・・!あ、あいつも・・・進化した!?!」

「しかもあれは・・・グレンモンって奴にそっくりだぞ・・・!?!」

シグナムとヴィータは、目の前に現れたブロスモンに驚く。

ヴィータに至っては、自分をK.Oしたグレンモンと瓜二つだった為、尚更驚いていた。

孝俊の持つ【龍】、高雄の持つ【剛龍】、そして現在孝俊達の住む世界にいる善之の【黒龍】。

この3つはそれぞれ兄弟機なのである。

「ふん・・・何者かは知らんがこっちは4体だ。貴様1人で勝てる
と思っっているのか？」

マタドウルモンが余裕の表情でブロスモンに言う。

「ごたくはいらん。さっさと掛かって来い」

ブロスモンはハンマーを取り出し、腰を低くして構えた。

次回・・・孝俊が暴れ回る！そしてアースラSideでは高雄の
隠れた特技が・・・！

続く

第29話 主役は遅れてやって来ても必ずカッコイイとは限らない気がする(後

はい、第29話終了です。

終盤で漸く孝俊が登場です。

孝俊「っーかなんなんだあの登場は・・・」

鷹「まあ、ああやってはっちゃけるのも面白いかと」

孝俊「やりすぎだつての・・・orz」

拓也「なんか微妙に嫌な予感がしてきたな・・・」

孝俊「・・・第2章初登場で、1章の最初と同じ目に遭うとは・・・」

「

高雄「ま、運命って奴だ」

孝俊「こんな運命嫌だよ・・・orz」

では、次回予告・・・はやてちゃん、お願いしまっせ。

はやて「はいはい。じゃあいくで〜」

次回、リリカルなのはフロンティア第30話【馬鹿っぽい奴でも特技の1つくらいは持っている気がする】お楽しみに〜」

第30話 馬鹿っぱい奴でも特技の1つくらいは持っている気がする(前書き)

第30話を始める前に・・・

4月7日、読売巨人ジャイアンツの木村拓也守備走塁コーチが、
くも膜下出血で37歳の若さでお亡くなりになりました。

作者が好きな球団である広島東洋カープでも長きにわたってプレーし、投手以外では何処でも守れるプレーヤーとして活躍されました。

誰にでも好かれるその人柄は、多くの野球ファンを魅了しました。

1人の野球ファンとしてここに哀悼の意を示し、故人のご冥福をお祈りいたします。

鷹「では、改めまして・・・第30話、始まります」

第30話 馬鹿っぱい奴でも特技の1つくらいは持っている気がする

第30話副題【真の閃光】

闇の書を狙って突如現れたデジモン・・・

シグナム達は応戦するが、拓也達との戦闘のダメージが残っており、たちまち追い詰められてしまう。

更に、はやての背後からデビドラモンが襲い掛かった。

だが、上空より孝俊が飛来し、デビドラモンを強襲する。

そして・・・デジモン4体を前に、ブロスモンへと進化した！

「切り裂いてやるぜえええい！」

テツカモンが一直線にブロスモンに向かってくる。

だが、ブロスモンは微動だにせずにテツカモンを見据える。

「【斬電剣】・・・!?」

テツカモンが剣を振り下ろそうとした瞬間・・・

ブロスモンが横を通り抜ける。

すると、テツカモンの身体が空中高く吹っ飛ばされていた。

「墜ちろ」

ブロスモンが空中に飛び上がり、一言そう呟くと、テツカモンをハンマーで叩き落とした。

地面に強烈に叩き付けられ、テツカモンはピクピクと痙攣しながら消滅していった。

「なっ・・・!? シグナムが本調子じゃ無いとはいえ、あれだけ苦

戦した奴を……」

ヴィータが驚きの表情でブロスモンを見る。

「おのれえええ！」

マタドウルモンとスカルサタモンとデビドラモンが一斉に襲い掛かる。

ブロスモンはハンマーを収めて、もう一つの武器【重龍牙】を持つ。

「我流剣技……【閃光斬】！」

ブロスモンの【重龍牙】の刀身がうつすらと緑色に光る。

そして、正面にいたデビドラモンに閃光の如き速度で迫り……斬り裂いた。

「グガアアアア……！！」

真つ二つに斬り裂かれ、データの粒子となって消滅するデビドラモン。

「せいっ！はあっ！」

「ぐぶっ！？」「ぐがあっ！？」

更に、横から飛びかかって来たマタドウルモンとスカルサタモンを目にも止まらぬ速さで峰打ちを喰らわせ、弾き飛ばした。

ブロスモンは、一旦下がって呼吸を整える。

（こ、この男の剣の腕……間違いなく……一流だ……！）

シグナムはブロスモンの技を目の前にして、驚愕の表情を隠せなかった。

動きに一切の無駄が無く、なおかつ強烈な剣技は……シグナムを戦慄させるには十分だった。

（ま、マジかよ……ハンマーも剣も両方使いこなすって……認

めたくはねーが、こいつのハンマーの扱いはアタシより上だぞ……！?)
ヴィータも、テッカモンを瞬殺したブロスモンのハンマー捌きに驚いていた。

あまりの速さに、認識が遅れてしまった程である。

「て、テッカモンにデビドラモンが一瞬で……な、なんなんだ貴様は……！」

マタドウルモンが後ずさりしながら叫ぶ。

「俺は……三天使・オフアニモンに作られた特殊型スピリット……龍の闘士・ブロスモン」

敵に剣を向け、名乗るブロスモン。

その背中には……巨大な龍の形をしたオーラが渦巻いていた。

ふと、ブロスモンがシグナムとヴィータの方に向き直る。

「……傷を負っているようだが、大丈夫か？」

「こんなのなんでもねー……と言いてえとこだが、生憎そうでもねえよ……」

ヴィータがフラフラと立ち上がる。

だが、既に体力は限界に近いようだった。

シグナムとザフィーラも同様である。

「……少しじつとしてるよ」

ブロスモンが額のクリスタルから光を照射する。

すると、みるみるうちにヴィータ達の傷が無くなって行くではないか。

「おお……！傷が……無くなって行く……！」

シグナムが自分の身体を見て驚く。
プロスモンの「クリスタルレーザー」を浴びて、回復したのだ。
おまけに、闇の書のプログラムであるシグナム達は、普通の人間よりも回復速度が凄まじかったのである。

「よっしゃ！これでもう負けねえ！」

「先程までの分・・・きっちり返させてもらうぞ」

ヴィータがグラーファイゼンを振り回す。

シグナムもレヴァンティンを構え、やる気満々になっていた。

「か、回復技だと・・・!?」

スカルサタモンが目を見開いて驚く。

第一、マシーン型と言うのは攻撃第一に考えられた物が大多数である。

マシーン型のデジモンで回復技を持つてる奴は無に等しいのだ。

「内部の損傷までは治せんが、外傷ならどうにかなる」

プロスモンが静かに言い放つ。

「さつきはよくもやってくれやがったな・・・100倍にして返してやらあああっ！」

ヴィータがグラーファイゼンを構えて突っ込む。

スピードも先程とは比べ物にならなくなっていた。

「は、早・・・ぐばあっ!!」

驚くと同時にグラーファイゼンを叩き込まれて吹っ飛ばすスカルサタモン。

打撃の重さも先程とはまるで違う。

「まだまだああああっ!!」

「がっ！ぐへっ！げばっ！ぐぶっ！ぶはあっ！ぐばあっ!?!?」

次々と重い一撃をぶちかますヴィータ。

攻撃の手を緩めず、パワー全開でグラーフアイゼンを振り回す。

「グラーフアイゼン、カートリッジロード！」

グラーフアイゼンが撃鉄を打った音を立て、形を変える。

「【ラケーテンハンマー】！」

ハンマーのジェット噴射を使い、その勢いでスカルサタモンに叩き込んだ。

「ぐわあああああつ！！！」

もの見事に吹っ飛ばされ、結界の壁に叩き付けられるスカルサタモン。

ヴィータは完全にスカルサタモンを圧倒していた。

「・・・行くぞ！」

シグナムがその場から動く。

そして・・・分身するかのようにならなくなる。

「なっ・・・消えた・・・!?」

「はあああああつ！」

マタドウルモンが驚いた次の瞬間、上からシグナムが急降下して来た。

レヴァンティンを上段に振り上げ・・・叩き付けるように振り下ろした！

「ぬぐうっ・・・!!」

辛うじてガードするマタドウルモンだが、あまりの衝撃に膝を付いてしまう。

「レヴァンティン、カートリッジロード！」

レヴァンティンが撃鉄を打つと、刀身が炎に包まれる。

そのまま高速で突入し、振り下ろす。

「【紫電一閃】！」

「がああああっ!!！」

直撃こそ免れたものの、凄まじい熱と衝撃で吹っ飛ばされるマタドウルモン。

「……主はやてに手を出そうとした事……後悔するがいい……！」

レヴァンティンを向け、怒りの形相で言うシグナム。

その威圧感、マタドウルモンを戦慄させるには十分だった。

「ぬぐう……こうなったら……これだあ！」

マタドウルモンが手を振り上げると……空間が歪み、そこから巨大な何かが現れた。

キメラモン 完全体 合成型 データ種

必殺技 ヒートバイパー（4本の腕から死の熱線を放つ技）

得意技 ハイブリットアームズ（合成された様々な腕で相手を攻撃する技）

デスクロウ（自由に伸び縮みする腕で攻撃する技。相手の^{デジコア}心臓をわしづかみにする）

様々なデジモンパーツで合成されたデジモン。

デビモン、エンジエモン、スカルグレイモン、カプテリモン、クワガールモン、エアドラモン、グレイモン、ガルルモン、モノクロモン、メタルグレイモンのパーツを組み合わせている。

ちなみに、何故作られたのかは謎に包まれている。恐るべき闘争本能を持っており、ありとあらゆるモノを破壊し続ける。

また、究極体タイプも存在するらしい。

「なっ・・・！」

シグナムが突如現れたキメラモンを見て驚く。

完全体だが、マタドウルモンやスカルサタモンとは比べ物にならないレベルである。

「ふははは！キメラモン、こいつらを捻り潰せ！」

マタドウルモンがキメラモンに号令をかけると、キメラモンがヴィータに襲い掛かる。

「むんっ！」

「グガッ！？」

だが、プロスモンが立ちはだかり、キメラモンを重龍牙でぶん殴って弾き飛ばす。

「このデカブツは任せろ」

「さっきから悪いな、礼は後で言わせてもらうよ」

ヴィータはプロスモンにそう言うと、スカルサタモンに向かって飛ぶ。

「・・・キメラモンか・・・今のは不意打ちだったから効いたものの、プロスモンじゃ少々きついな・・・」

プロスモンがそう言うと、その体がデジコードに包まれる。

「スライドエボリューション！・・・グリーンドラモン！」

そして、ビーストスピリットであるグリーンドラモンへと変化した。

サイズはキメラモンと同じくらいになっている。

「・・・変化できるのか？」

隣にいたザフィーラが尋ねる。

「まあな。詳しい事は・・・こいつらを片づけてからな」
グリーンドラモンは専用剣【機龍牙】を持って構える。

(・・・下手に【ドラゴンカノン】は撃てねえ・・・剣で決めるしかないな)

ドラゴンカノンやマグナムランチャーでは、辺りに被害が出る可能性がある。

グリーンドラモンはそこまで考えていた。

「ふっ！・・・はあっ！」

シグナムがマタドウルモンを追い詰めて行く。
既にヨレヨレのマタドウルモン。

そして・・・再びレヴァンティンの刀身が炎に包まれる。

「これで決める・・・！【紫電一閃】！」

「グ・・・グガアアア・・・！！！」

綺麗に叩き斬られ、マタドウルモンはデータの粒子となって消滅した。

一方のヴィータvsスカルサタモンも、ヴィータが一方的に押し
ていた。

「おらおらおら！どうしたどうしたあ！」

グラーファイゼンを振り回し、次々とスカルサタモンに叩き込
んで行く。

スカルサタモンの顔面は・・・既にボコボコだったりする。

どうやら顔を集中的にぶん殴られていたようだ。

「がふっ・・・顔ばかり集中的に・・・殴りやがって・・・」
ヨレヨレになって、弱々しく呟くスカルサタモン。
なんか顔が變形して、違う形になってしまっている。

「これで最後だっ！」

ヴィータが超スピードで突入し、グラーフアイゼンを振り上げる。

「ぶち抜けえええええ！」

【了解】

ズドオンツ！と豪快な音が響くと・・・スカルサタモンが吹っ飛ばされていた。

その衝撃に耐え切れず・・・スカルサタモンはデータの粒子になり、消えた。

そして、グリーンドラモン&ザフィーラは・・・キメラモンを徐々に追い詰めていた。

「ぬおおおおっ！」

ザフィーラの強烈な拳がキメラモンの顔面を捉える。

ジャストミートし、よろけるキメラモン。

「ふんっ！」

グリーンドラモンが機龍牙で連続で斬りつけていく。

合成獣キメラモンと言えど、基本的に究極体に迫る実力を持つグリーンドラモン相手では歯が立たない。

更に、体力全快のザフィーラまでいるとあっては、到底勝ち目は無い。

「ガアアアア！！！」

「突撃してきやがったか・・・上等だ！」

キメラモンが、ズシンズシンと巨体を揺らしながら突入してくる。

グリーンドラモンも、それに向かって走り出す。

「ぬうおおおおあっ！」

ズドオンツ！と、凄まじい打撃音が響く。

そこには・・・キメラモンの腹に強烈なボディーブローを叩き込んでいるグリーンドラモンがいた。

更に・・・キメラモンにガツチリ組みつくと・・・

「でえいやあああああっ！！！」

ドゴオンツ！と、またも大きな音がする。

なんと、キメラモンの巨体を持ち上げ、バックドロップを喰らわせたのだ！

「ガ・・・グ・・・」

キメラモンはフラフラして、今にも倒れそうなほど足取りがおぼつかなくなっていた。

腹に強打を喰らい、バックドロップで脳天に衝撃を喰らったのだから無理も無い。

「ぬおおおおっ！」

追い打ちをかけるかのようにザフィーラが突撃してくる。重い一撃が次々とキメラモンにぶちかまされていく。

「はあっ！」

ザフィーラの気合を入れた一撃が、キメラモンを吹き飛ばす。

キメラモンが結界の壁に叩きつけられる。

「よし・・・行くぞ！」

グリーンドラモンが剣を構え・・・凄まじい速度でキメラモンに突入する。

その速度は・・・【閃光斬】のスピードを超えていた。

「超必殺・・・【真・閃光斬】！」

機龍牙の刀身が緑色に強く光る。

そして次の瞬間・・・目にも止まらぬ斬撃が、キメラモンを斬り裂いた！

グリーンドラモンの新しい必殺技・・・真・閃光斬である。

真・閃光斬 使用者：面林孝俊、面林龍輔

孝俊が血の滲むような努力の末、漸く身に付けた我流剣技の1つ。半年前の【ジュエルシード・VV事件】の時にはまだ習得できていなかった。

【閃光斬】よりも速く動き、敵を斬り裂く必殺技。威力も【閃光斬】の2倍ある。

父・龍輔の使う【閃光斬】がこれに当たる。

【閃光斬】には、他にもバリエーションが存在するらしい。

キメラモンは縦に真っ二つに斬り裂かれ・・・消滅した。

それと同時に、八神家の周りを覆っていた結界が消えたのだった。

「・・・ふう、終わったか・・・」

一息ついて、進化を解いて元に戻る孝俊。

後ろでは、呆然としているはやて、未だに顔を赤くしてるシャマル、じつと孝俊を見ているシグナム・ヴィータ・ザフィーラがいた。孝俊は、とりあえずはやての方に向かって歩く。

「・・・大丈夫かい？」

「あ、はい・・・危ないところをありがとうございました・・・」
はやての安否を気遣う孝俊。

その声で、我に返ったはやてが孝俊に礼を言う。

(なあ、あいつも進化したって事は……あいつらの仲間かな……?)

(……かもしれんな。だが、敵になると決まった訳ではない。第一、あんなのを敵に回したら魔力の蒐集どころではない……)

はやての横では、ヴィータとシグナムが念話で話し合っていた。念話を悟られないように、視線は孝俊の方を向いている。ただでさえ拓也達を半ば敵に回してしまったような物なのに、その上孝俊まで敵に回すと相当厄介になる。

「……何であいつらは君達を？」

「……主の持つ闇の書を狙って来たのだ。そう言っていた」
孝俊の質問に対し、はやてに代わってシグナムが答える。

「闇の書？なんじゃそりゃ？」

孝俊も拓也同様に首を傾げる。

勿論、孝俊も闇の書なんて聞いた事が無い。

「あ、あの……ここじゃなんですから……今日はうちに泊まっ
てって下さい。助けていただいたお礼もしたいですし」

「え、良いのか？」

「はい」

はやての申し出に少々困惑する孝俊。

だが……闇の書という聞き慣れない単語、それを狙ったデジモン……そして主と呼ばれる車椅子の少女……
色々と気になる事がある孝俊は……

「ん、じゃあ……お言葉に甘えさせてもらおうかな……」

「どうぞ、あ、うちは八神はやて言います、よろしゅう」

「はやてちゃんか。俺は面林孝俊ってんだ、よろしくな。苗字は呼びにくいし、名前で呼んでくれて構わんよ」

はやてと孝俊は互いに自己紹介をする。

「ほな、みんなも挨拶して」

「私はヴォルケンリッターが将、【剣の騎士】シグナムです。よろしく」

「あたしはヴォルケンリッター、【鉄槌の騎士】ヴィータだ」

「わ、私はヴォルケンリッター、【湖の騎士】シヤマルです。よろしく・・・／＼」

「私はヴォルケンリッター、【盾の守護獣】ザフィーラ。主を助けていただいて感謝する」

はやてに言われ、シグナム達が自己紹介をする。

シヤマルは、未だに若干顔を赤くしていた・・・

そして、とりあえず家の中に入る八神家一同&孝俊だった・・・

その頃、拓也達は・・・時空管理局の本局にいた。

現在、アースラが調整中で使えなかったのだ。

レイジングハート達の修理となのは達の治療もある為、本局の方が都合が良かったりもする。

「検査の結果、怪我は大した事ないそうです・・・ただ、魔導師の魔力の源、リンカーコアが異様なほど小さくなってるんです」

「そう・・・じゃあやっぱり、一連の事件と同じ流れね」

「はい、間違いないみたいです・・・休暇は延期ですかね・・・流れる的に、うちの担当になっちゃいそうですし」

「仕方ないわ、そういうお仕事だもの」

本局内のエレベーターで、エイミィとリンディが話している。

なのはの容体は検査の結果、リンカーコアが縮小している以外は
大した事は無いようだった。

2人は、お互いに苦笑するのだった・・・

「でも、良かったですよ・・・拓也君達が駆け付けてくれて」

「そうね・・・」

当の拓也達はと言うと・・・

拓也はなのはに付き添い、高雄と輝二はフェイトと一緒にいた。

「いやあ、君の怪我也軽くてよかった」

「そうだな・・・多少は俺達が来た甲斐もあったかの」

クロノと高雄がフェイトを見て言う。

輝二も言葉にこそ出さないが、安心していた。

「ごめんね、心配掛けて・・・」

「君となのはでもう慣れた。気にするな」

クロノは苦笑してフェイトに言う。

「ま、若い内は多少の無茶はするもんよ。こっちの世界にや良い年
して無茶するオッサンもいるけえの」

「ふ、違うない・・・」

高雄が笑いながら言う。

輝二も微笑を浮かべて高雄に賛同した。

ちなみに、良い年して無茶するオッサンとは・・・龍輔（+他数名）の事である。

高雄は多少オッサンくさい喋り方だが・・・これは広島弁が混じっているからだ。

高雄も気を付けているのだが、やっぱり出てしまうものだったりする。

作者も気を付けて（どうでもいいので以下省略）

一方、なのはのいる病室。

なのはが医師の診察を受けていた。拓也も傍らで見ている。

「流石若いね。もうリンカーコアの回復が始まっている。ただ、しばらくは魔法が殆ど使えないから、気を付けるんだよ」

「あ、はい・・・ありがとうございます！」

そこに・・・フェイトを連れたクロノが入ってくる。

当然ながら、高雄と輝二も一緒である。

だが、クロノは医師に呼ばれて再び部屋を出て行った。

「フェイトちゃん・・・拓也さん・・・」

「なのは・・・」

「なのはちゃん・・・」

3人は互いに見つめ合い、気まずそうな表情だった。

「・・・ごめんね、折角の再会がこんなで・・・フェイトちゃん、怪我大丈夫・・・？」

「あ、ううん・・・こんなの、全然・・・それより、なのはが・・・」

「そっだよ。こっちこそごめんな・・・俺達ももっと早く来ていればこんな事には・・・」

一言謝ってフェイトの心配をするなのは。

フェイトと拓也は、それよりもなのはの心配をしたのだった。

拓也に至っては、もっと早く来れなかった事を悔やんでいた・・・

「私も平気。拓也さん達のおかげだよ。元気元気！」

そう言っってベッドから降りて、拓也達に近付こうとするなのは。

だが・・・

「あっ・・・」

「つと、大丈夫か？無理して歩こうとするなよ・・・」

足元がふらついて倒れかかるなのはを抱きとめる拓也。

この半年で拓也は更に背が伸びて、体も少し大きくなっていたりする。

「あはは・・・ごめんね、まだちょっとフラフラ・・・」

「まだまだ休養は必要みたいだな・・・」

苦笑いするなのはに対し、溜息混じりに同じく苦笑する拓也。

「助けてくれてありがとうございます・・・それから、また会えてすっごく嬉しいです・・・拓也さんにも、フェイトちゃんにも」

「ああ、俺もまた会えて嬉しいよ」

「うん、私も・・・なのはに会えて、嬉しい・・・」

なのはは拓也に続き、フェイトとも抱擁を交わしたのであった。

「・・・なあ、俺達って邪魔？」

「言うまでも無かるう」

冷や汗を流しながら隅っこで呟く高雄と、溜息を吐いて言う輝二は、その光景をずっと見ていたのだった・・・

それから数十分後。

ユーノとアルフが、破損したレイジングハート、バルディッシュ、そしてバーニングブロスを見ていた。

プレシアも、データを見ながら修復作業に当たっていた。

そこに、なのは達が入って来る。

「なのは！フェイト！」

「ユーノ君、アルフさん、プレシアさん・・・！」

なのはが3人に駆け寄る。

「なのは、久しぶり！」

「なのは・・・」

「みんな・・・！」

なのはは、久しぶりに再会した仲間達を見て、目を潤ませる。

フェイトは・・・破損したバルディッシュを見ていた。

「バルディッシュ、ごめんね・・・私の力不足で・・・」

「破損状況は？」

「正直、良くないわね・・・今は自動修復をかけてるけど、基礎構造の修復が済んだら、一度再起動して部品交換とかしないとイケないわ・・・」

クロノが、コンピューターに向かっているプレシアに尋ねる。

プレシアが言うには、大分厳しい状況らしい。

そこに、高雄が近付いてくる。

「ちよつと見してみい」

「え、ええ……」

さっきまでのおバカな雰囲気は無く、至って真面目な表情の高雄。鋭い目をして、自動修復のプログラムを見ている。

「こりゃあ大分わやじあの……内部のプログラムまでこつぴどくやられちよる……」

「わや？」

「地球の日本の広島って所の方弁で、【めちやくちや】って意味だよ」

高雄の方弁混じりの言葉に首を傾げるユーノ。

それを見て、拓也が補足する。

「よつしゃ、俺が何とかしちやるわ。久々に腕が鳴るのお……」

「え！？で、でもこれは半端なく壊れてるんですよ!？」

高雄の発言にビックリするユーノ。

アルファプレシア、なのは、フェイト、ユーノも目を丸くしている。

「高雄……ホントに大丈夫か？」

「おいおい、いつもD・スキャナのメンテしてるのは誰だと思ってんだ？これくらいならお安い御用だ」

拓也の問いかけに、笑って答える高雄。

その高雄の答えに、再びなのは達が驚く。

「え……!じゃあ、前に拓也達が言っていたD・スキャナの精密点検が出来る高雄って言うのは……」

「俺の事だが？」

驚いて尋ねるクロノに、平然としながら答える高雄。

「なら・・・頼めるか？管理局員の誰もが解析できなかったD・スキャナ・・・それを完璧に解析できる貴方になら任せられる」

「おう、任せとけや。あんたらには半年前に拓也と孝俊が世話になつたけえ、きつちり礼はさせてもらう」

高雄はそう言い放つと、自動修復のプログラムを弄り始めた。

その手は・・・残像を残す様なとんでもないスピードでキーボードを打っていた。

見る見るうちに新しい修復プログラムが出来上がって行く。

「は、速い・・・！」

「しかも正確に・・・無駄の無いプログラムを打ち込んでいるわ・・・！」

ユーノとプレシアは驚愕しながら、高雄を見ている。

特に、ユーノは戦闘中の高雄のおふざけバトルを見ていただけに、そのギャップに戸惑っていた。

「よし、これで良い。このプログラムなら、さっきまでの倍のスピードで修復する」

「あ、ありがとうございます・・・！」

「ありがとうございます」

なのはとフェイトが高雄に礼を言う。

「なーに、気にすんな。半年前に孝俊が自爆して帰って来たD・スキャナの修復に比べればナンボのもんよ」

HAHAHA！と、豪快に笑う高雄であった。

「孝俊・・・何処に・・・行ったんだろう・・・」

フェイトは、まだ見ぬ自分の大好きな男の事を思い・・・悲しげに呟いた。

次回、お引越し！そして八神家にいる孝俊は・・・？
続く

第30話 馬鹿っぱい奴でも特技の1つくらいは持っている気がする(後書き)

はい、第30話終了です。

なんと、遂に30話到達・・・自分でもここまで続くとは・・・

(汗)

拓也「もうすぐ20万Hiteに到達するしな」

孝俊「応援していただいた皆様には感謝だな」

輝二「更新ペースはゆっくりだが、これからも見て頂ければ幸いですな」

高雄「とにかく、頑張って更新するので、よろしく願いします！」

では、次回予告・・・ザフィーラ、頼む。

ザフィーラ「うむ、上手く出来るかどうかは解らんが・・・

次回、リリカルなのはフロンティア番外第2回【人気投票したんだから結果発表すんのは当たり前な気がする】お楽しみに」

番外第2回 人気投票したんだから結果発表すんのは当たり前な気がする（前書

はい、遅くなりましたが第1回人気投票の結果発表です。

ちなみに、結構短いです（汗）

あと、いつも以上の駄文だと思いますが・・・いつも以上に温かい目で見えて頂けると幸いです。

高雄「じゃ、人気投票の結果発表・・・始めるぞ」

現在、見るも無残な展開になっております。暫くお待ちください

「と、とにかく・・・結果発表を・・・始める・・・ぞ・・・」
返り討ちに遭ったらしく、ミイラ男みたいに包帯を巻いている作者。

「今回、総投票数は29票、6の方が投票して下さった。持ち票は1人5票だから本来より1票少ないが、投票されてない以上はその1票は失効なので、ご了承願いたい」
頭を下げながら輝二が総投票数を説明する。

「ちなみに・・・なぜ輝二が司会かと言うと、1票も投票されていないからだったりします（笑）」
「仕方なかるう。俺の1章でのまともな出番は1度しか無かったからな」

「私も1章では半分悪役だったからね」

「では・・・早速始めたいと思います。ちなみに、投票数が同じだった人は、作者の独断で順位を決めています」

「では・・・第8位・・・1票獲得、クロノ・ハラウン執務官だ」
輝二が紹介すると、バリアジャケット姿のクロノが入ってくる。

「僕に票数があるとは思わなかったよ・・・」

「クロノが選ばれた理由は・・・【なのはの原作（とらハ3）をやった事があるから】だそうです」

クロノが選ばれた理由を読む作者。

「なるほど、原作か・・・知ってる人は結構いるだろうが、実際にプレイした人は少ないだろうな」

クロノが腕を組んで頷く。

「さて、次は第7位・・・同じく1票獲得、次元航行艦船アースラ艦長、リンディ・ハラウン！」

作者が紹介する。

そして、私服姿のリンディが入ってくる。

「あらあら・・・クロノはまだしも、まさか私に票が入るとは思わなかったわ」

苦笑するリンディ。

どうやら票が入ってるとは思わなかったらしい。

「ちなみに・・・リンディさんが選ばれた理由もクロノと同じ【原作をやった事があるから】だそうです」

「あの時の私は、今とは全然違ったわよねえ・・・」

当時を懐かしんでるリンディ。

詳しくは【とらいあんぐるハート3〜リリカルおもちゃ箱〜】を Wikipedia で調べてください(何)

「次は第6位ね・・・同じく1票獲得、自称、気弱な究極体デジモン・パラレルモン、どうぞ」

プレシアがカンペを見ながら紹介する。

すると、パラレルモンがふわふわ浮かびながらやって来た。

「ま、まさかオラに票が入るとは・・・ありがたいだよ・・・」

既に嬉し泣きしているパラレルモン。
相変わらず感情的になり易い奴である。

「第1章ではなかなかの活躍だったからな。Vヴァンデモン^{ヴェノム}の弱点を教えたり、その野望を暴露したり」

「い、いやぁ・・・なんだか照れるだよ・・・／＼／」

作者相手ですら、もじもじしながら喋るパラレルモン。

「投票理由は無かったものの、やはりその活躍が買われたのではないかと作者は推理しているようだ」

輝二がパラレルモンに向かって言う。

「こ、これからも精一杯頑張るだ・・・お、応援よろしくお願いしまするだ・・・!」

「続いて第5位・・・2票獲得。こいつホントに二等空佐か？地上本部の異端児、佐野孝昭!」

輝二が紹介するが・・・現れる気配が無い。

「あ、アレ見るだよ!」

パラレルモンが窓の外を指さすと・・・何かがちちらに向かって

進化を解いた輝二が詰め寄る。

「いや、悪い悪い、ついついハシャいでしまった」

苦笑しながら頭を掻く孝昭。

傍らでは・・・血だらけで転がっている作者がいた。

「・・・まあ、アレはほっとくでしょう」

「放置すんな！あれで死んでたまるか！」

放置しようとする輝二に対し、起き上がる作者。

「ちっ、生きてたか」

「舌打ちしやがった!？」

「ちなみに、投票理由だけど・・・【面白いから】って言うのがあったわ」

孝昭への投票理由を説明するプレシア。

確かに何かとボケている孝昭・・・デタラメな奴は、書いてて結構面白かったりもする。

「・・・き、気を取り直して・・・第4位・・・4票獲得、フェイト・テストロッサ！」

作者が紹介すると・・・白いドレス姿のフェイトが入ってくる。

「え、えつと・・・投票してくれた人・・・ありがとう・・・／＼」
若干照れながら、頭を下げるフェイト。

「おめでとう、フェイト」

「母さん・・・ありがとう・・・」

プレシアが微笑みながらフェイトを祝福する。
フェイトもまた、嬉しそうに笑っていた。

「理由は特に無かったものの・・・作者の俺としてはやっぱり原作通りの健気な行動が良かったのではないかと」
「俺としてはあの実力だな。最初はなのはすら圧倒したほどらしいし」

作者と輝二がそれっぽい理由を述べる。

「フェイトちゃんについては、感想でも良く話題が出るだからなあ」
パラレルモンが頷きながら喋る。

「さて・・・3位、2位は同時に紹介するわね」

そう言って一旦カンペを見るプレシア。

「まずは第3位・・・5票獲得、高町なのは。そして第2位・・・7票獲得、神原拓也。どうぞ」

そして・・・タキシード姿の拓也と、桃色のドレス姿のなのはが手を繋いでやって来る。

なのはは何処となく嬉しそうだったりもする。

「おお、手を繋いで来るとは・・・」

「仲睦まじいな」

作者がニヤニヤしながら2人を見る。

輝二もまた、作者と一緒に笑って見ている。

「な、なんか照れるんだけど・・・と、投票サンキューな／＼／」
「にははは・・・投票してくれた人、ありがとうなの／＼／」

2人とも顔を真っ赤にして、礼を言う。

「なのは、おめでとう・・・」

「ありがとう、フェイトちゃん！」

なのはとフェイトは顔を見合わせて笑顔を見せていた。

互いに複数票が入り、上位に食い込んだのだからそりゃあ嬉しいだろう。

「拓也も流石に主人公だな。2位とは」

「まあ、俺は出番多かったしな。次はどうなるか解んねーよ」

輝二と拓也も、微笑を浮かべて話している。

「えーと・・・投票理由は特に無かったが・・・拓也はやはりあの実力が評価されたのではないかと」

「決め技の【サラマンダーブレイク】は強烈だな。あと、ヴリトラモンの【コロナブラスター】も」

作者と孝昭が、投票理由を推測している。

アグニモンの必殺技【サラマンダーブレイク】は、発動すれば殆どの確率で敵をK.Oしている。

ヴリトラモンの【コロナブラスター】もまた然りだ。

「残るは第1位だな。紹介は俺がやろう」
輝二が前に出る。

「第1位、8票獲得・・・やっぱり主人公は強かったか・・・龍のスピリットの持ち主、面林孝俊！」

輝二が紹介すると・・・何故かタキシードではなく、エプロン姿の孝俊が現れた。

「・・・何故にエプロン姿？」

「料理中だったんだよ」

作者の問いに、普通に答える孝俊。

「どうやら、何かを作っていたようだ。」

「ちなみに、理由は特に語られなかったが・・・恐らくはあの性格やボケ気味のキャラが影響してるかと思われる」

作者が理由を述べる。

「しかも、6人中5人が投票。多い人で3票も孝俊に入れている・・・人気だなオイ」

「あー・・・まあ、なんだ・・・投票して下さった方々、ありがとうございます！」

孝俊が深々と頭を下げる。

「しかし、何でまた料理なんか？」

「せっかく集まったんだし、今日はみんなでパーっとやろうかと思っただけ」

すると・・・何時の間にもやら大量の料理が運び込まれる。

ちなみに、運び込んだのはアースラのスタッフの皆さんらしい。

「よし、じゃあ孝俊作の料理で皆でパーっとやるか！」

拓也の声が響き、全員の歓声が響いたのだった。

それから・・・リンディ、プレシア、パラレルモンは酒を飲み、他の皆は未成年なのでジューズを飲んでいった。

だが、孝昭が誤って酒を飲んで大爆走し、拓也の強烈なハリセンツッコミを喰らうと言つ珍事もあった。

また、なのはとフェイトはここぞとばかりに、それぞれ拓也と孝俊にくつついていた。

孝俊は既にフェイトに告白されているだけあり、なかなか良いムードになっていた。

だが、拓也は・・・相も変わらず鈍さ全開。特に気にも留めていなかったりする。

そんな拓也を見て・・・輝二が溜息を吐いていたのは気のせいではないだろう。

「・・・と、言う訳で・・・今回の1位は孝俊でした!」

「次回、第2回の人気投票は・・・A's編(第2章)の最後の方で行つ予定です」

拓也と孝俊が締めくくる。

ちなみに作者は・・・下戸げいなのに飲めない酒を無理やり飲まされ、部屋の隅で転がっていたとき・・・

今回の結果発表

1位 8票 面林孝俊

2位 7票 神原拓也

3位 5票 高町なのは

4位 4票 フェイト・テストロッサ

5位 2票 佐野孝昭

6位 1票 パラレルモン

7位 1票 リンディ・ハラオウン

8位 1票 クロノ・ハラオウン

6位と8位は作者の好きな順番で決めています。

次回から再び本編に戻ります。
続く

番外第2回 人気投票したんだから結果発表すんのは当たり前な気がする（後書

はい、結果・・・孝俊が1位でした。

作者としては結構意外だったりします（マジです）

作者としては拓也かなのは辺りがトップかと思ってましたが、まさか孝俊とは・・・（苦笑）

では、次回予告・・・輝二、よろしくー

輝二「じゃあ、行くぞ・・・」

次回、リリカルなのはフロンティア第31話【めんどくさい事は皆でやった方が良い気がする】お楽しみに！

第31話 めんどくさい事は皆でやった方が良い気がする(前書き)

はい、遅くなりました・・・やっと31話目です(汗)

最近、書く時間がなかなか作れません・・・

で、今回はStriker'sキャラが序盤で出て来ます。
大して絡みはしませんが(苦笑)

では、久々の名言コーナーを・・・

オレは、夢盗まれたからな 取り返しに行かにはや (ルパン三世)

オレは拳銃しか信じないんでね (次元大介 ルパン三世)

オレにはもうリングしか見えねえ (三井寿 スラムダンク)

人生を投げた時点でお前の負けだ
区亀有公園前派出所)

(両津勘吉 こちら葛飾

拓也「久々の名言コーナーだな」

輝二「ネタが無いと見える」

高雄「違いねえな・・・じゃ、31話、始めるZE!」

第31話 めんどくさい事は皆でやった方が良い気がする

高雄が修復プログラムを改造していた頃・・・とある一室。

「・・・ふう・・・熱は・・・少しは下がったかな」

孝昭がベッドから起き上がる。

療養中にも拘らず戦場に出たものの、あっさりと撃墜されてしまった。

「・・・バーニングブロス・・・俺の無茶に付き合って・・・あんな事に・・・」

孝昭は、シグナム達に撃墜されてしまった時の光景を思い出す。バーニングブロスの本体は酷く破損し、かなりヤバい状態となっている。

今更ながら、自分の軽率な行動を反省する孝昭・・・

ふと、病室のドアが開く。

そこに、3人の男女が入って来た。

「孝昭、大丈夫か？」

「・・・あ、ゼストのつつあん・・・それにクイント姐さんとメガー又姐さんも・・・」

1人は大柄の筋肉質の男・・・ゼスト・グランガイツ。

もう1人は、青い長髪の明るそうな女性、クイント・ナカジマ。

更にもう1人は紫髪の優しそうな雰囲気を持った女性、メガーヌ・アルピーノ。

この3人は、孝昭と同じ地上本部に勤務する管理局員である。

「あなたが撃墜されたと聞いた時は信じられなかったけど・・・まさかホントだったとはね」

クイントが驚きを隠せないと言った感じで言う。

「風邪ひいてる身体で無茶しちゃ駄目よ？」

メガーヌは、心配そうな表情で孝昭に話す。

「へーい・・・」

ぼふつと枕に顔を埋める孝昭。

考えるのは・・・愛機バーニングブロスの事のみだった。

「うちの娘達も【いつも遊んでくれるお兄ちゃんが怪我した】って言うって心配してたわよ・・・」

クイントには2人の娘がおり、孝昭は暇があればその娘達の遊び相手をしていたのだ。

その為、クイントの娘達は孝昭が撃墜されたと知るや、泣きそうな表情で心配していたらしい。

「まあ、大丈夫だって伝えといてください。その内また遊びに行くんで」

「ええ、伝えておくわ」

その頃・・・本局のとある一室にて・・・とんでもない人ばかりが出来ていた。

1か所に100人近くが集中してこつた返していたのだ。その中心には・・・人波に揉まれている高雄がいた。

【凄まじいレベルの技術者が現れた】・・・と、本局で有名になっていたのだ。

デバイスの自動修復プログラムを改善した事が何処からか知れ渡り、あつという間に管理局中に広がったのだ。

で、その結果・・・

「高雄さん！俺のデバイスを見て下さい！」

「俺も俺も！」

「私もお願いします！」

「俺のも直して下さいーい！！！」

と、混乱状態になっていた。

本局を訪れて2時間も経たぬ内に、四谷高雄の名を知らぬ局員は指で数える程度しかいなくなっていた。

「・・・すげーなおい」

「まあ、無理も無かるう。聞くところによるとあの自動修復プログラムは、管理局でも最高レベルの物だったらしいじゃないか。それをアツサリと更にハイレベルに再構築してしまったんだからな」

冷や汗を流しながらその光景を見ている拓也と、仕方ないと割り切っている輝二。

なのはとフェイトも、呆然としてその光景を見ているしかなかった。

「わぶっ！ちょ……多い……落ち着……け……っの……」

人波に翻弄されながらも声を上げる高雄。

よもやこんな事になるうとは当然予想だにしなかった。

「普段は何考えてるか解らんぐらいボケてるがな……戦闘面もなかなかだが、何よりも機械にかけては奴の右に出る者はいない」
輝二が腕を組んで、高雄の事をなのは達に説明する。

「人は見かけによらない……って事なのかねえ……」
「そうね……」

アルフとプレシアは、納得の表情で輝二の説明に耳を傾けていた。

余談だが、高雄の事を聞いたエイミィが、高雄からプログラミン
グ技術を教わろうと考えているらしい。

最早、高雄は時空管理局の技術者の間で憧れの的となりつつあつた。

そして……暫し人波に揉まれまくった高雄は……

「だ――――――――――」

「――――――――っ！おどれら静かにしろい！！」

爆発したかのような大声で一気に周りを鎮静化させる。

「こうなりや全員纏めてデバイスの面倒見ちやるわ！おどれら一列に並べい！！」

早口でまくし立て、反論の余地も許さない。

こうして・・・高雄は凄まじき速さで100人近くのデバイスの修理や調整を行ったと言う。

「ねえ、そう言えばさ・・・あの連中の魔法、なんか変じゃなかった？」

アルフがクロノとユーノに尋ねる。

「アレは多分、ベルカ式だ」

「ベルカ式？」

聞き慣れない魔法体系に首を傾げるアルフ。

「その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だよ」
ユーノがアルフに説明する。

「俺が見た限りだと、なのはちゃん達の魔法は砲撃とかが主体だよな？」

拓也がクロノに尋ねる。

「ああ。ミッド式は遠距離から近距離までオールラウンドに対応するが・・・どちらかと言えば遠距離寄りだ」

クロノは拓也の問いかけに頷いて答える。

「だが、奴らは近距離が多かった・・・恐らく、ベルカ式ってのは遠距離戦とかを度外視して、近距離・・・つまり対人戦闘に特化した魔法体系って所か？」

「流石に鋭いな・・・その通りだ。そして、優れた術者は【騎士】と呼ばれる」

拓也がベルカ式についての考えを述べる。
クロノは少し驚いた様子で、拓也に答えた。

「最大の特徴は、デバイスに組み込まれた【カートリッジシステム】
って呼ばれる武装・・・儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで、瞬間的に爆発的な破壊力を得る・・・危険で物騒な代物だな」

ユーノがベルカ式のデバイスの最大の特徴、「カートリッジシステム」について述べる。

レイジングハートやバルディッシュ、バーニングブ羅斯の本体に多大なダメージを与えたその威力は凄まじい。

「確かに・・・ありやとんでもない威力だったな・・・俺は属性が炎だったお陰である程度相殺できたが・・・」

拓也は、シグナムの【飛竜一閃】を受け止めた事を思い出す。
自身の持つ炎のスピリットが【飛竜一閃】の炎を受け付けず、斬撃によるダメージだけで済ませたのだ。

「・・・いっぱい頑張ってくれてありがとう、レイジングハート・・・
今はゆっくり休んでね・・・」
なのはは、ポロポロのレイジングハートを見て呟いていた・・・

「そうだ、拓也・・・ちょっと良いか？」
「なんだ？」

クロノが何かを思い出したように拓也を呼ぶ。

「君に是非会いたいと言う人がいる。本当なら孝俊も呼びたかったが・・・いない以上は仕方が無い」

「俺に会いたい人・・・？」

「なのは、フェイト・・・君達も来てくれ」

「・・・？」

拓也、なのは、フェイトはクロノに連れられ、何処かへと歩いて行った。

数分後、アルフとユーノ、そして輝二は自販機の前でジュースを飲んでいた。

そこにエイミイがやって来た。

「ユーノ君、アルフ。レイジングハートとバルディッシュとバーニングブロスの部品、さっき発注して来たよ。今日明日中には揃えてくれるって！」

「あ、ありがとうございます」

デバイスの部品を発注してくれたエイミイに礼を言うユーノ。

「でね、さっき正式に今回の件がうちの担当になったの」

「え？でもアースラは整備中じゃ？」

「そうなんだよね・・・」

今回の闇の書に関する事件が、正式に次元航行艦隊の担当になったらしい。

だが、アースラは整備中で、まだ満足に使える状態ではないのだ。エイミイの言葉に疑問符を浮かべるアルフ。

エイミイも困った表情で答える。

「や、やっとひと段落ついた……」

そこへ、高雄がやって来た。

どうやらひと段落つけたらしい。

「少しは落ち着いたみたいだな」

輝二が高雄にジュースを放る。

「ああ、何とかの……プログラム自体はてんで大した事無いんじゃないが、いかにせん数が多いわい……あそこまで、よおけえ（沢山）あるとは思わんかったわ……」

ジュースを受け取って答える高雄。

高雄からしてみれば、1つ1つは大した事は無い。ただ、数が多
いらしい。

「あの一……」

「ん、なんじゃ？」

ジュースを飲みながら、話しかけるエイミーに反応する高雄。

「出来ればこれからもプログラム系統で協力して欲しいんだけど……」

「何を言うゆちよる。そんなの当たり前じゃるが」

エイミーの申し出に、高雄は笑いながら答える。

義理堅い彼女にとっては、親友が世話になった……それだけでも十分に協力するに値するのだ。

「それにしても……アンタ達の世界はあんなに技術が進んでんのかい？」

アルフが高雄に尋ねる。

だが、高雄から帰ってきた言葉は想像に反する物だった。

「いや、この世界の地球と大して変わらんよ?」

「え?ど、どうして・・・?」

エイミイが驚きの表情で高雄に尋ねる。

「確かに、俺達のプログラミング技術は進んどる。だけど・・・進化しすぎた技術は、星をも滅ぼしてしまいかねん」

高雄は真面目な表情で語り出す。

「それに、進んだ技術を手に入れると、必ずそれを悪用しようとする奴が現れるもんじゃ・・・」

遠い目をして、天井を見上げている高雄・・・

現に、地球上ではテロや抗争、紛争などが絶えず起こっている。

もし、高雄達の進んだ技術を悪人が手に入れると・・・そこから強力無比な殺戮兵器を作る事だって可能かもしれない。

高雄はそれを恐れ、D・スキャナ&D・ブレスの関係以外での、高度な技術の使用を行っていないのだ。

「そうなんだ・・・色々と考えてるんだね」

「まあ、バカはバカなりにな」

何かと考えている高雄に感心するエイミイ。

高雄は苦笑いしながら答えるのだった。

「あ、そうだクロノ君知らない？」

エイミーがユーノとアルフにクロノを見て無いか尋ねる。

「なのはとフェイトと拓也を連れてどっかに行ったよ？」

「なんか、管理局の偉い人と会うそうですけど・・・」

「へえー」

本局のとある部屋。

部屋の奥に、1人の初老の男性が立っていた。

ギル・グレアム・・・時空管理局顧問官である。

部屋のドアが開き、拓也達を連れだクロノが入って来る。

「失礼します」

「クロノ・・・久しぶりだな」

「ご無沙汰してます」

クロノ達はソファに座り、グレアムと話している。

「君達の事はリンディ提督から聞いているよ。先の事件を解決した
功労者だとか」

「あ、ありがとうございます・・・」

「ありがとうございます・・・／＼」

フェイトとなのはにグレアムが笑顔で話す。

なのはは緊張気味に、フェイトは照れているのか顔を赤くしている。
る。

拓也は、微笑みながらそれを見ていた。

「あと、君の事も聞いているよ・・・先の事件、【ジュエルシード・VV事件】を解決した英雄の片割れ、神原拓也君」

「そうすか・・・ま、英雄ってのは言い過ぎっすけど」

拓也は特に緊張した様子も無く、普通に話す。

「君は…提督の前だと言うのに落ち着き過ぎだぞ・・・」
クロノが拓也に対して呆れ混じりの口調で話しかける。

「はは、良いんだよクロノ。妙にかしこまられるより、この方が話しやすく良い。寧ろ、君も少しは彼を見習うと良いんじゃないか？」

「で、提督・・・！」

グレアムのからかい半分の言葉にあたふたするクロノ。

「で・・・君と一緒に先の事件を解決した英雄のもう1人は・・・いないのかな？」

「ああ、孝俊の事っすか。あいつならこつちの世界に来る際に、違う所に飛んじまったみたいっす。ま、あいつなら心配いらねっすよ」

孝俊について尋ねるグレアムに対し、落ち着き払って言う拓也。
何があるうとあいつならば大丈夫・・・拓也はそう考えていた。

同じ頃、自販機の前では・・・エイミィがグレアムについて、アルフ達に説明を行っていた。

「グレアム提督は、クロノ君の指導教官だった人なんだよ」

グレアムはかつてクロノの指導をしていたらしい。
しかし、あんな穏やかそうな人からあんな固そうな教え子が出る
とは想像がつかなかったりする。

「歴戦の勇士。一番出世してた時で艦隊指揮官、後に執務官長だっ
たかなあ」

「めっちゃくちゃ偉い人じゃん！」

グレアムの経歴を聞き、ビツクリするアルフと呆然とするユーノ。
「うん、でも良い人だよ、優しいし」

その頃、再びグレアムの部屋にて。

「ふむ……なのは君と拓也君は日本人なんだな。懐かしいな、日
本の風景は」

「え？」

グレアムの言葉に、なのはが少し驚く。

「私も、君と同じ世界の出身だよ。イギリス人だ」

「ええ！？そうなんですか？」

そう、グレアムはなのはと同じ地球の出身だったのだ。
それを聞いて、更に驚くのはだった。

「あの世界の人間の殆どは、魔力を持たないが・・・稀にいるんだよ、君や私みたいに高い魔力資質を持つ者が」

「俺は地球って言っても・・・なのはちゃん達とは違うんすけどね」「違う・・・とはどういう意味かね？」

グレアムの言葉に、拓也が頭を掻きながら答える。

拓也の答えに、グレアムは首を傾げる。

「次元じゃなくて、時空の違い・・・まあ、パラレルワールドとでも言うのかな。まあ、こつちの世界には魔導師なんて皆無ですけど」「ふむ、なるほど・・・」

今更だが・・・拓也達の世界は、なのは達の世界から見れば元々存在しない筈の世界なのだ。

パラレルワールドと言うのが一番正しい答えだろう。

「それにしても・・・なのは君は魔法の出会い方まで私とそっくりだ・・・私の場合は、助けたのは管理局の局員だったんだがね」

なのはのデータファイルを見ながら呟くグレアム。

グレアムは、なのはが淫獣ユウジュを助けたように、管理局の局員を助けた事で魔法と出会ったのだと言う。

「誰が淫獣だ！」とか聞こえたような気もしたがスルーだ。

「もう、50年以上も前の話だよ・・・」

そう言って、データファイルを机に置く。

「フェイト君は、なのは君の友達なんだね？」

「はい……！」

「1つだけ約束して欲しい事がある。友達や自分を信頼してくれる人の事は、決して裏切ってはいけない。出来るかね？」

「はい、必ず……！」

グレアムの問いかけに、力強く答えるフェイト。

なのはを初めに、アルフ、プレシア、拓也、ユーノ、リンディ、エイミイ、ついでにクロノ、そして孝俊……

少なくとも、これだけの人が自分を信じていてくれる。

「うん、良い返事だ」

グレアムは、笑顔を浮かべてフェイトを見ていた。

そして、部屋を出る際にクロノがグレアムの方に向き直る。

「提督、もうお聞き及びかもしれませんが、先程自分達がロストロギア【闇の書】の搜索・捜査担当に決定しました」

「そうか、君がか……言えた義理では無いかもしれんが、無理はするなよ」

クロノの身を案ずるグレアム。

闇の書がいかに危険な物か……グレアムは解っているみたいである。

「大丈夫です。急時にこそ冷静さが最大の友・・・提督の教え通りです」

「うむ、そうだったな・・・」

クロノは微笑を浮かべ、言葉を返す。

グレアムは、かつて自分がクロノに教えた事を実行してくれる事を嬉しく思うのだった。

「では」

クロノ、なのは、フェイト、拓也は部屋を出る。

しばらく歩いてクロノと別れ、なのは&フェイトと一緒に歩いていた拓也は・・・何かを考えていた。

「拓也さん・・・どうかしたんですか？」

そんな拓也を不審に思ったのはが尋ねる。

「んー・・・なんつーかさ、さっきのオッサン・・・グレアムって言ったっけか？なんか引つかかるんだよな」

「引つかかる・・・？」

拓也は、グレアムから何かを感じ取っていたようだった。

フェイトは、拓也の言葉に首を傾げる。

「俺の推測に過ぎねーが・・・あの目つーが雰囲気・・・過去に何か悲しい事か辛い事があった・・・そんな感じがよ」

拓也は、話していない間もずっとグレアムを見ていた。

グラムから感じ取ったあの雰囲気・・・過去に何か重い出来事があった・・・拓也はそう推測していた。

「ま、俺の思い過ぎしかもしれねーし、気にするな」

「う、うん・・・」

拓也はそう言って、つかつかと歩いて行く。

なのはとフェイトは、慌ててそれについて行くのだった。

追いついたなのはが、ちゃっかり拓也にくっついて歩いていたのは言っまでも無かったりする。

その頃、八神家では。

「ふーん、そんな事がねえ・・・」

孝俊が、はやてから闇の書を手に入れた経緯を聞いていた。

はやてが物心ついた時には既に闇の書は存在しており、今年のはやての誕生日に起動した事を聞いたのだった。

闇の書が魔力を喰らい、全666ページで完成すると言っ事も。

「・・・ちよつと見せてもらえるか？」

「う、うむ・・・」

真剣な眼差しでシグナムに尋ねる孝俊。

その威圧に圧され、孝俊に闇の書を手渡すシグナム。

孝俊はしばらく闇の書に手を触れていた・・・その時・・・孝俊の中を、何かが駆け巡った。

ドクン

「・・・!!?」

咄嗟に手を離してしまう孝俊。

自分の中を、得体の知れない何か・・・スピリットとはまた違う力が駆け巡ったのを感じたのだ。

(なんなんだ・・・今の感覚は・・・)

自分の手を見つめる孝俊。

その手は・・・小さく震えていた。

「ど、どうしたんですか・・・?」

はやてが心配そうに孝俊に尋ねる。

「いや、大丈夫だ・・・それより、これは・・・完成させたらいけ

ない気がする……」

「「「!?!?!?!」」」

孝俊が顔をしかめて言う。

何か嫌な予感を感じ取った様だ。

孝俊の言葉に、守護騎士達が一瞬驚きの表情を見せる。

「あはは、大丈夫やって、うちも完成させてええってシグナム達に言うとするし？」

はやてが笑いながら孝俊に言う。

そう、はやては闇の書の完成などは望んでおらず、守護騎士達にもリンカーコアの蒐集はしないように言いつけていたのだ。

しかし、闇の書の呪いがはやての身体を蝕んでいる事を知った守護騎士達は、やむなく誓いを破り、蒐集を開始したのである。

「そうか……」

しばらくして、はやてはシャルとヴィータと一緒に風呂場に向かった。

ちなみに、風呂場までは孝俊がはやてを運んでいたりする。

「ありがとうございます〜、助けてもらっただけやなくここまでしてもらって」

「いやいや、これくらいはさせてもらわんとな」

孝俊に抱き上げられながら、笑って礼を言うはやて。

孝俊も、笑顔で答える。

「じゃあ、ここからは……んーとシャルさんだっけ？あとよろ

しく」

「あ、はい……」

はやてをシャマルに託して、居間に戻って行く孝俊。

(なあ、シャマル……)

(何？ヴィータちゃん)

ヴィータが念話でシャマルに話しかける。

(あいつ……なんつーか不思議な感じがするんだよな)

(それなら私も感じたわ……彼からは何か……色んな意味で不思議な感じなのよね)

ヴィータとシャマルは……孝俊の出す雰囲気を感じていた。

真面目なのか……ふざけてんのか……良く解らない、掴み所の無い感覚。

(それと……魔力をなんとなく探ってみたんだがよ……わずかに反応しやがった)

(ええ！？で、でも彼は……あの魔力が感じられなかった人達の仲間……よね？)

ヴィータは孝俊の中にある魔力を探っていた。

その結果、微量に魔力を感じ取っていたのだ。

この作品を最初から読んでいる方々ならご存知であろうが……孝俊の体内には膨大な魔力が眠っているのである。

しかも、例えばリンカーコアが縮小しても恐ろしいまでの速度で回復してしまうのだ。

生まれた直後にオフアニモンによって封印され、体の外側からで

はごく微量にしか反応しない。

その魔力はランクにしてSS+・・・だが、外側から探っても、たかだかEかFランクぐらいにしか感じられない。

(その筈なんだよなあ・・・まあ、本人に聞いてみりゃ解んだろ)
(そうね・・・)

念話を切って、ヴィータとシャマルははやとと一緒に風呂に入るのであった。

孝俊は、シグナムとザフィーラと一緒にいた。

シグナムが今日の戦闘(v s フェイト)で少しばかり傷を負っていたらしい。

「あの黒い金髪の魔導師・・・お前の鎧を打ち抜いていたのか」

「ああ・・・済んだ太刀筋だった・・・余程良い師に学んだのだから・・・」

ザフィーラがシグナムの傷を見て答える。

その師は、目の前にいる孝俊だったりするのだが。

「黒い金髪の魔導師?・・・まさかとは思うが・・・その魔導師・・・フェイト・テストロッサって言わなかったか?」

「何・・・!お前、テストロッサの事を知っているのか!?」

孝俊の問いに驚愕するシグナム。

ザフィーラも言葉には出さないが、内心では驚いていた。

孝俊は思ったのだ。

シグナムが凄腕の魔導師（騎士）である事は解っている。そのシグナムに傷を付ける・・・ましてや剣での戦いで傷を負わせる魔導師など、孝俊の中ではフェイトか孝昭くらいしかない。

「あー・・・そう言う事か・・・これで展開が読めた・・・」

孝俊が頭を抱えて溜息を吐く。

「どついう事だ？」

ザフィーラが静かに孝俊に尋ねる。

「アンタら・・・フェイト達とドンパチやらかして・・・あわよくばフェイト達の魔力を蒐集しようとしたんじゃないのか？」

「あ、ああ・・・だが、なぜ解った？」

「さつき俺が【闇の書を完成させない方が良く】って言った時、アンタら一瞬だけ驚いたっつーか気まずそうな顔したろ？」

「そこまで見ていたのか・・・」

「おそらく、アンタらははやてちゃんには内緒で動いているな？」

「うむ、その通りだ」

孝俊が理由を述べ、ザフィーラが呟く。

表情は動いていないが、孝俊の観察力、洞察力の高さに驚いていた。

そして、はやてに内緒で動いている事も指摘され、シグナムはゆつくり頷く。

「で・・・その時に3人程アンタらを阻んだ奴らがいたんじゃないか？」

「拓也達の事か。では・・・やはりお前は・・・」

「仲間だよ・・・まあ心配しなさんな。アンタらの敵に回るつもり

は無い。そつちの事情は大体解つたしな」
「何・・・？」

警戒するシグナムとザフィーラに対し、落ち着き払って答える孝俊。

事情は大体解っていたのである。

「大方、その闇の書を完成させればはやてちゃんの足は治る・・・と見ていいのか？」

「ああ、そうだ」

「なら、俺も協力させてくれねーか？」

孝俊の問いに頷くシグナム。

それを聞いた孝俊は・・・なんと、協力を申し出たのだった。

「協力・・・だと？」

「・・・フェイト達を襲撃した以上、時空管理局や拓也達が敵に回るのは確定だろう。そうなると、闇の書を完成させるのは難しい」

正直、管理局だけでも厄介なのだ。

その上拓也達まで敵に回せば、闇の書の完成は不可能に近いだろう。

「俺がいれば、少なくとも拓也達との戦闘は避けられる。そつちとしても、あまりめんどくさい事はしたくないだろ？」

「まあ、出来ればそうしたいが・・・」

孝俊の提案に、渋々頷くシグナム。

孝俊の事を信用した訳ではない。だが、拓也達と戦闘になれば面倒な事この上ない。

出来る限り、手間の掛かる事はしたくないのだ。

「よし、はやてちゃんが寝静まった後に、一通り俺達の事を説明するとしようか……」

再びその頃……本局の一室にて……

クロノがいる部屋に、リンディとフェイトがやって来た。

拓也はなのはと一緒にいるらしい。

高雄は、再びデバイスの修理に追われていたりする。

「クロノ！」

「艦長、フェイトも一緒か」

「うん」

「今回の事件資料、もう見た？」

「はい、さつき全部」

海鳴市における魔導師襲撃事件の資料をリンディが見せる。

クロノは、既に全部目を通していた。

「なのはの世界が中心なんですよね、魔導師襲撃事件って」

「そうね、なのはさんの世界から個人転送で行ける範囲にはほぼ限定されてる……」

「あの辺りは、本局からだとかかなり遠いですね……中継ポートを使わないと、転送できない……」

「アースラが使えないの、痛いですね……」

なのはの世界・・・地球の日本・海鳴市が中心になり、魔導師襲撃事件が起こっている。

本局からでは遠く、アースラが使えないのは大打撃だった。いくら拓也達と言う強力な助っ人が来たとしても、距離の問題は頭が痛かった。

「空いている艦船があればいいんですが・・・」

「長期稼働できる船は、2カ月先まで空気が無いって・・・」

アースラが整備中の為、他の艦船を使うと言う手もあったが・・・フェイトが言うには何処も一杯で、2カ月先まで空いていないと言う。

ただでさえ管理局は、一部を除いて初動が遅いと言う悩みも抱えているらしいが・・・それはまた別の話。

「そうか・・・と言うかフェイト、君は良いのか？」

「何が？」

「囑託とはいえ、あくまで君は外部協力者だ。今回の件まで、無理に付き合わなくても・・・」

「クロノやリンディ提督が大変なのに、呑気に遊んでなんかいられないよ。アルフも付き合ってくれてるって言ってるし、折角拓也達も来てくれたんだ・・・手伝わせて！」

フェイトを気遣うクロノ。

だが、フェイトは周りが大変なのに自分が見ている訳にもいかないと、自分も手伝うと決めていた。

それに、地球で活動していれば・・・いずれ孝俊に会える・・・そう思っていた。

「うん・・・ありがたくはあるんだが・・・」

クロノは俯いて、現状を苦々しく思っていた。
本局からは時間が掛かる、アースラは使えない・・・
ふと、リンデイが提案をした。

「やっぱり、あれで行きましょうか！」

「あれ？」

「ふふ・・・」

数十分後、アースラスタッフの面々が集まっていた。

「さて、私達アースラスタッフは今回、ロストログア【闇の書】の
搜索及び、魔導師襲撃事件の捜査を担当する事になりました」

リンデイの説明を、なのは、フェイト、アルフ、ユーノ、クロノ・
・

そして拓也と輝二、それに先程漸く局員達のデバイスの点検を終
えた高雄が聞いていた。

「ただ、肝心のアースラが暫く使えない都合上、事件発生時の近隣
に臨時作戦本部を置く事になります。分割は、観測スタッフのアレ
ックスとランデイ、ギャレットをリーダーとした捜査スタッフ一同
・
・

名前を呼ばれたスタッフ一同が次々に返事をする。

「司令部は、私とクロノ執務官、エイミィ執務官補佐、フェイトさ
ん、プレシアさん、パレルモン君、そして・・・」
リンデイは拓也達に視線を向ける。

「前回の【ジュエルシード・VV事件】の解決に貢献してくれた神原拓也君、そして・・・新たに2名の仲間が加わります。自己紹介、お願いできるかしら？」

輝二と高雄に自己紹介するように促す。

そして、2人が前に出て来る。

「源輝二だ。拓也とは小学生の頃からの仲間だ。デジモンに進化して戦えるから、出来る事があれば、何でも言っただけいい。よろしく」
「四谷高雄です。拓也、輝二と同じく進化して戦えますんでよろしく。機械系統で困った事があつたら言ってくれ」

輝二は少々ぶっきらぼうに、高雄は飄々とした態度で自己紹介する。

そして、2人に拍手が起こる。

「以上、3組に分かれて駐屯します。ちなみに司令部は、なのはさんの保護を兼ねて、なのはさんのおうちのすぐ近所になります」

「うわあー」

で、翌日・・・とあるマンションになのは達はやって来た。

「うわあ、すごい！凄い近所だ！」

「ほんとー！」

マンションの部屋から、フェイトとなのはがはしゃぎながら外の景色を見ている。

「嬉しそうだな・・・なのはちゃん」

「ああ、そうだな」

拓也と輝二は、それを微笑みながら見ていた。

・・・引越しの荷物を運びながら。

高雄に至っては、重量物ばかり運ばされていたりする。

「ん？ユーノ君とアルフは、こつちではその姿か」

エイミィの足元には・・・子犬の姿をしたアルフと淫獣・・・ゲ
フンゲフン、フェレットの姿をしたユーノがいた。

「新形態、こいぬフォーム！」

「なのはやフェイトの友達の前では、こつちの姿で無いと・・・」

「君らも色々大変だねえ・・・」

ユーノの呟きに、苦笑するエイミィ。

「お、久々だな。淫獣形態」

「これが噂の淫獣か」

「外見こんなでもやる事はやってんのな」

「ちよつとおおおおっ！忘れかけてたのにいいいいい！」

拓也、輝二、高雄がユーノをからかう。

ユーノは・・・絶叫するしかなかったのだった・・・

「わあ！アルフちつちゃい！どうしたの？」

「ユーノ君も淫じ・・・フェレットモード久しぶり〜！」
フェイトとなのはがアルフとユーノに近付く。

「へへー、可愛いだろ？」

「ってかなのはも淫獣って言いかけなかった!？」

嬉しそうにフェイトの頬を舐めるアルフと、なのはに頬ずりされ

ながら叫ぶユーノ・・・

- ・ その内、堂々と淫獣と呼ばれる気がしてならなかったのだった・・・

次回、遂に新しいデバイスが・・・

そして孝俊サイドではまたしてもあのキャラが・・・！

続く

第31話 めんどくさい事は皆でやった方が良い気がする（後書き）

はい、第31話終了です。

ちよつとばつかし長いです。

高雄も広島弁混じりまくって解り辛いかもしれませんが・・・
とりあえず良い奴と解釈してくれれば幸いです（苦笑）

では、次回予告・・・シャルルさんよろしく。

シャルル「はい じゃあ、いきまーす

次回、リリカルなのはフロンティア第32話【新しい物を作る時は
大抵張り切っちゃう気がする】お楽しみに！」

第32話 新しい物を作る時は大抵張り切っちゃう気がする(前書き)

はい、漸く第32話です。

GWでは書く暇が全然なかったので、投稿が遅れました(汗)

ちなみに、題名はあまり関係ないかもしれませんが・・・

今回は名言コーナーはお休みです。

あと、後書きにアンケートがありますので、出来れば最後まで読んで下さい(土下座)

シヤマル「じゃあ、第32話・・・始まります」

第32話 新しい物を作る時は大抵張り切っちゃう気がする

シグナム達に襲撃されたフェイト達を助けに再びリリカルなのはの世界に飛んだ拓也と孝俊(+2)。

孝俊だけはぐれてしまったものの、拓也・高雄・輝二はシグナム達を追い払い、なのは達の救出に成功する。

その後シグナム達は、主である少女・八神はやての持つ【闇の書】を狙う謎のデジモン達と戦闘になる。

だが、拓也達との戦闘のダメージで思うように動けず、たちまちのうちに追い詰められてしまう。

そこへ拓也達とはぐれた孝俊が、上空より何故かパラシュート着用で飛来し、デジモン達を強襲する。

孝俊の参入により一気に形勢を逆転し、デジモン達を倒す事に成功したのだった。

そして、孝俊ははやてに誘われ、色々と気になる事もあったせいか、八神家で世話になる事に……

一方、本局にいる拓也達は……プログラム修復したり、なのはの治療したり、グレアムに会ったりで大忙しだった。

そして……現在アースラが使えないと言う事で、なのはの保護も兼ねて海鳴市に臨時作戦本部を置く事となったのだった。

ほんでもって、海鳴市に移動する際、ユーノはフェレットに、アルフは新形態のこいぬフォームとなった。

闇の書を巡る戦いが……今、本格的に始まるうとしていた。

「なのは、フェイト、友達だよ」

私服姿となっているクロノが、2人を呼ぶ。

「こんにちは」

「来たよ」

「さすがとアリサがやって来たのだった。」

「アリサちゃん、さすがちゃん！」

「なのはとフェイトが2人を出迎える。」

「初めまして！……ってのもなんか変かな？」

「ビデオメールでは何度も会ってるもんね」

「うん……でも、会えて嬉しいよ。アリサ、さすが」

「フェイトに挨拶をする2人。」

「こうやって直に会うのは初めてだが、以前にお互い何度かビデオメールで見ているのだ。」

「うん！」

「私も！」

「フェイト、お友達？」

「「こんにちは！」」

「私服姿のプレシアが出て来る。」

「後ろにはリンディもいた。」

「こんにちは、さすがさんにアリサさん……よね？」

「はい……」

「って、私達の事……」

「プレシアの質問に少々困惑する2人。」

「ビデオメール、見せてもらったの」

「リンディが困惑気味の2人に答える。」

「そうですか！」

「お？アリサちゃんにすずかちゃんじゃねーか」
「今度は拓也が出て来る。」
「高雄と輝二も一緒だ。」

「あ、拓也さん！お久しぶりです！」
「お久しぶりです！」

アリサとすずかが拓也に挨拶する。

「久しぶりだな、半年振りか」

「急に帰ったって聞いたからビックリしてたんです」
「すずかが拓也に言う。」

「なのは達から、元の世界に帰ったと聞かされて驚いたらしい。」
「別世界って事については、既にデジモンに進化する所を見ている為、特に驚かなかったという。」

「わりいな、出来りや挨拶したかったが、こっちもこっちで色々あってよ……」

「でも、元気そうで良かったです！」
「頭を掻きながら謝る拓也。」
「アリサは笑って拓也に言う。」

「余談だが、半年前に拓也に助けられてからと言うもの、アリサは拓也の事が気に入っていたりする。」

「で、そちらの方々は……」

「すずかが、拓也の横にいる輝二と高雄を見る。」

「ああ、俺の仲間だよ」

「源輝二だ。よろしく」

拓也に紹介され、一歩前に出て挨拶する輝二。

「で・・・もう1人のツツコミどころ満載な人は一体・・・」

アリサは・・・何故かビームサーベルとシールド（初代ガンム仕様、模造品）を持ち、野球帽（広島CARP）にサングラス、上は剣道の防具に下は柔道着を身に付けた高雄を見ていた。

何時の間にそんな恰好をしたのかは突っ込まないでほしい。

「なんちゅー恰好してんだよ！」

スパーン！パァン！ドスン！

「ぐおっ！？」

どっから取り出したのか、ハリセンと竹刀で高雄を2発ぶっ叩く拓也。

更に、大外刈りで高雄を廊下に沈めたのだった。

この半年で、拓也のツツコミスキルはかなり上昇していた（笑）

「あ、改めて・・・四谷高雄だ・・・よろしく・・・」

「よ、よろしくお願ひします・・・」

少々引き気味のアリサと、苦笑するすずかであった。

「あれ？孝俊さんは・・・今回はいないんですか？」

孝俊がいない事に気付いたさすが、拓也に質問する。

「あー・・・ちょっと今回はぐれちまってな・・・ま、心配いらねーよ」

「そうですね・・・」

苦笑する拓也。

「さすがはどこことなく残念そう感じたが・・・その感じに気付く者はいなかった。」

「良かったら、皆でお茶でもしてらっしゃい」

「あ、それじゃあうちのお店で！」

リンディの言葉に、なのはが翠屋に行こうと提案する。

「あ、そうね。じゃあ折角だから、私もなのはさんのご両親にご挨拶を・・・プレシアさんも」

「そうね・・・行きましようか。ちょっと待ってて頂戴ね」

そう言って、部屋の奥へ戻って行くリンディとプレシア。

「俺も行くかね、久々に桃子さんに挨拶しときたいし」

恭也シスコと士郎オヤバカがいるが、そこはまあ桃子がどうにかするだろう。

拓也は、なのはが絡むと殺気を向けられてしまうのだ（特に恭也）

翠屋に向かったなのは達。

中には入らずに、外でお茶をしている。

ちなみに今更だが、ユーノとアルフがいる為、店内に入れる訳にはいかない。

「ユーノ君、久しぶりだね」

「きゅ……きゅ」

すずかに撫でられ、とりあえず鳴いてみるユーノ。

人間とバレた時が怖いよなあ、と思いながらそれを見ている拓也だった。

「うーん……なんかアンタの事、どっかで見た気がするんだけど……気のせいかな……」

「くうーん……(汗)」

アリサはこいぬフォームのアルフを抱き上げて、呟く。

かつて、アリサはヴァンデモンの攻撃を受けて怪我を負ったアルフ(狼形態)を保護している。

その為か、ダブって見える気がするのだ。まあ、同一人物なのだが。

「……そんな訳で、これからはらくご近所になります。よろしくお願いします」

「ああ、いえいえこちらこそ」

「どうぞ、ごひいきに」

店の中ではリンディ、プレシアと桃子、士郎が挨拶をしていた。

「いやー、お久しぶりです。桃子さん、士郎さん」

「拓也君も、元気そうね」

拓也は、半年ぶりに会う桃子と士郎に頭を下げて挨拶していた。

「フェイトちゃん、3年生ですよ。学校はどちらに？」

「はい、実は……」

士郎の問いかけにプレシアが答えようとした時に、ドアが開いた。

「リンディイといと・・・リンディイさん、母さん・・・こ、これって・・・」

フェイトが、何やら箱を持っていた。

その箱の中には・・・なのは達と同じ制服が入っていたのだ。

「ああ、まだ話して無かったわね・・・リンディイさんの提案で、転校手続きを取っておいたの」

「週明けから、なのはさんのクラスメイトね」

実はプレシアは、このままフェイトを学校に行かせないのもどうかと思ひ、リンディイに相談していた。

そして、リンディイの提案でなのはの学校に行かせようと言う事になったのだ。

「あら、素敵！」

「聖祥小学校ですか、あそこは良い学校ですよ。なっ、なのは」

「うん！」

「良かったわね、フェイトちゃん！」

桃子と士郎が笑顔で言う。

なのはも、フェイトと同じ学校に行けるのが嬉しそうだった。

「あの・・・えと・・・はい・・・ありがとうございます・・・」

／／／／

フェイトは、制服の入った箱を抱きしめ、顔を真っ赤にしていた。「良かったじゃねーかフェイト。出来りゃ孝俊にも見せてやりたかったぜ・・・」

「あ、そうそう・・・拓也君、ちょっとお願いが・・・」
「？」

数分後・・・

「え！？用務員！？」

拓也の声が響いた。

リンデイが言うには、聖祥小学校に用務員として入って欲しいとの事だった。

タイミングの良い事に、聖祥小学校では用務員のボランティアを募集していた。

ちなみに、高雄は管理局で機械系統の対応をする事が決まってる。

現在、デバイスが修理中で戦闘力が皆無なのは・フェイトの護衛と言う意味も兼ねていたりする。

「なるほど、良い考えですね。最近世の中物騒ですし、拓也君の様な鍛えられている若い子が学校の中にいれば安心ですからね」

士郎が腕を組んで、リンデイの言葉に賛同する。

「うーん・・・そうっすね、解りました」

拓也は士郎の言葉に納得し、引き受ける事にした。

「しかし、俺は小学校の用務員、高雄は管理局の技術支援・・・輝二はどうするんだ？」

「む、そうだな・・・俺だけ何もしない訳にはいかんし・・・」

拓也の質問に、輝二が腕を組んで考え込む。

「だったら、うちでアルバイトしてみない？輝二君、外見もとてもカッコいいから、お客さん受けも良いでしょうし」

桃子が笑顔で輝二に言う。

「そーだな、ここでアルバイトしてみりゃ良いぜ？」

「うーん・・・確かに他にやる事も無いし・・・そうですね、やらせてもらいます」

拓也も翠屋でのアルバイトを薦める。

輝二は他にやる事も無い為、桃子に頭を下げ、アルバイトを申し出たのだった。

その頃、臨時作戦本部では・・・クロノとエイミイが闇の書について話し合っていた。

「ロストロギア【闇の書】の最大の特徴は、そのエネルギー源にある・・・闇の書は、魔導師の魔力と魔法資質を奪う為にリンカーコアを食うんだ」

「なのはちゃんのリンカーコアもその被害に・・・」

「ああ・・・間違いない。闇の書はリンカーコアを食うと、蒐集した魔力や資質に応じてページが増えて行く」

ちなみに闇の書は、なのはのリンカーコアを蒐集した事により、かなりのページが埋まっている。

「そして、最終ページまで全てを埋める事で、闇の書は完成する」

「完成すると・・・どうなるの？」

「少なくとも・・・ろくな事にはならない・・・」

クロノは、闇の書の映像を見ながら、苦々しく呟くのであった。エイミイもまた、悲しげな表情で映像を見ていた・・・

時間は少し戻り、昨夜の八神家・・・
はやてに勧められ、現在入浴中の孝俊。

「ふう・・・闇の書・・・か。こりやまた厄介な事件になりそうだ・・・だが、放っておく訳にもいかねえ・・・」

余談だが、孝俊は風呂場に近付く際は、凄まじく警戒するようになっていた。

かつて、偶然とはいえ風呂上がりのフェイトとアルフを目撃して、とんでもない目に遭っている為である。

万が一、シグナムやヴィータの風呂上がりなんぞ見た日には、レヴァンティンの錆になるか、グラーフアイゼンの頑固な汚れになるしかない。

「・・・気になるわ・・・彼・・・」

シヤマルははやてに言われて、孝俊の分のバスタオルを脱衣所まで運んでいた。

「孝俊さん、バスタオル置いておきますね」

「おう、ありがとう。わざわざごめんな」

風呂場の中から孝俊の声が聞こえる。

その声からは、何故か優しさを感じられる。

「あ、いえ・・・」

孝俊の性格は、とても穏やかで優しい。
そのためか、戦闘以外での一挙手一投足が優しく感じられる。
シヤマルは、そんな孝俊が気になりつつあった。

そして、更に1時間後。

はやてが寝静まり、それを見届けたヴィータがリビングに降りて来る。

「来たな」

「ああ」

シグナムが確認を取る。

「よし、じゃあ早速俺達について説明しよう」

孝俊は・・・何故かメガネ（伊達）をかけ、白衣を着ていた。
手元には数十枚のボードが置いてある。

「なんで先生みたいになってんだよ」

「そこは突っ込まないでくれるとありがたい」

ヴィータのツッコミに苦笑する孝俊。

高雄ほどではないが、孝俊もどちらかと言えばポケ役である。

「はい、まずは闇の書を狙って来たデジモンについて・・・だ」

「そもそも、デジモンとは何なのだ？」

襲撃をかけて来たマタドウルモン・スカルサタモン・テツカモン・デビドラモンの画像が入ったボードを出す孝俊。

そして、シグナムが質問する。

「デジモン・・・正式名称デジタルモンスター・・・電子の獣だな。超複雑なプログラムの塊が実体化したって言えば簡単な」

「プログラム・・・我々とはまた異なった者・・・か」

孝俊の説明にザフィーラが呟く。

「さて、次はこれだ」

「・・・拓也か」

今度は拓也とアグニモンの画像が入ったボードを出す孝俊。それを見て、シグナムがすかさず反応する。

戦ってからというもの、未だに拓也の事が気になるらしい。

「神原拓也。炎属性を操るアグニモンに進化する。かつて、デジタルワールドを救った伝説の十闘士のスピリット・【火】に選ばれた男だ」

「伝説を受け継いだ男・・・か」

「ぶっちゃけ・・・こいつと出会っても、魔力の蒐集を優先するなら極力戦闘は仕掛けない事だ」

「で、でもよお、お前がいれば何とか・・・」

孝俊の言葉に、ヴィータが不服そうに反論する。

孝俊はそれを聞くと、深くため息をつき・・・

「・・・これを見てもか？」

【188勝262敗】と書かれたボードを出す孝俊。

「・・・それは何なんですか？」

「俺の・・・拓也との模擬戦の通算成績だ」

「「「「!?!?」「」「」

驚愕する守護騎士達。

あれほどの実力を持った孝俊が、拓也相手に大きく負け越しているのだ。

「補足すると……最近俺の15連敗だ」

「・・・マジかよ」

呆然とするヴィータ。

シグナムを破った時点で只者ではないと思っていたが、まさかこれ程とは思わなかったのだ。

「そしてこれだ。これに出会ったら即行で退却する事」

ヴリトラモンの画像のボードを出す。

「・・・アグニモンとやらが、お前がやったように変化した姿か？」

ザファイラが呟く。

「はい、ザッファイー正解。こいつはヴリトラモンって言うんだ」

「ぎ、ザッファイー・・・？（汗）」

略称で呼ばれた事に冷や汗を流すザファイーラ。

横では3人が笑いを堪えていたりする。

「次が・・・これだ」

輝二とヴォルフモンの画像が入ったボードを出す孝俊。

「ヴォルフモン・・・とか言ったか」

ザフィーラが静かに呟く。

「源輝二、光属性を操るヴォルフモンに進化する。伝説の十闘士のスピリット・【光】に選ばれた男さ」

「この男も、只者では無いだろう・・・」

「鋭いねザッフィー、その通り。戦闘経験も豊富で、隙が殆ど無い」

輝二の画像を見て、戦った時の事を思い出さずザフィーラ。

自分を圧倒したあの實力は決してフロックでは無い。

「また、拓也と同じく・・・変化できる。この姿を【ガルムモン】
と言いつ」

ガルムモンの画像を出して説明する孝俊。

「地上を移動する速度はかなり速いから要注意な」

「・・・拓也に続き、この男も要警戒・・・か」

シグナムがぼつりと呟いた。

「じゃ、次だ」

今度は、高雄とグレンモンの画像のボードを出す。

「グレンモンって奴か・・・!」

やられた時を思い出し、悔しげな表情になるヴィータ。

「四谷高雄。特殊型スピリットNO.5【剛龍】所持者。属性は炎だ。こいつを一言で表すなら・・・パワー馬鹿だな」

「確かに・・・アタシが手も足も出なかつたぐらいだから・・・」

認めたくは無いが、自分を撃退する程のパワー・・・

正直、今の状態では勝ち目はないだろう。ヴィータは心の中でそう思っていた。

「こいつとは初見の奴がまともに向かい合つと、奴のペースに呑まれちまう」

「あー・・・そりゃもう身をもって体験したよ・・・」

「高雄と書いて【バカ】とか【ボケ】とか読めるくらいだから・・・あれにまともに向かい合いたいなら、そうだな・・・『銀魂』の志村新八か、『ボボボーボ・ボーボボ』のビュティくらいのツッコミスキルを身に付ける事だな」

高雄と戦った事を思い出すヴィータ。

ふざけまくってる割に、実力は本物だった。

だが、今考えればあれに惑わされてペースを完全に握られていたのだ。

「個人的には、拓也より厄介な相手だ」

「どういう事だ？」

孝俊としては、拓也より高雄の方が厄介らしい。

その理由は・・・対戦成績にあった。

「これを見れば解る」

そう言つて……【49勝41敗90セーブ】と書かれたボードを出す孝俊。

「……90セーブって何だ？」

「……あ、間違えた。これ津田投手の通算成績だった（汗）」

グイータの問いに慌ててボードを引つ込める孝俊。

25話で説明した気がするが、孝俊は元・広島投手、津田恒実投手の大ファンである。

「改めて……これだ」

そう言つて、【4勝3敗288引き分け】と書かれたボードを出す。

「「「引き分け多ッ！！!?」「」」

守護騎士達は、声を揃えて突っ込んでいた。

「……俺と高雄は親友で付き合いが長くてな……親曰く、生まれた病院も同じで、誕生日も1日しか違わん……というか、数秒しか違わんだ」

「マジかよ……」

孝俊と高雄は同じ病院で生まれ、誕生日も1日しか違わない。

孝俊は5月30日生まれ、高雄は5月31日生まれである。しかも、孝俊は31日に日付が変わる寸前で生まれている。孝俊に遅れる事数秒で、高雄が生まれたいらしい。

そして、幼稚園・小学校・中学校と何時でも何処でも一緒だった2人。

孝俊が東京へ転校しても、まるで後を追ったかのように高雄もすぐに親の仕事の都合で東京に引越してきた。

「で、お互いに手の内を読みつくしちまって、決定打が出せない。それで引き分けが多いんだ」

「それで、お前にとっては拓也よりそいつが厄介な訳か・・・ならば納得だな」

孝俊の説明に、腕を組んで頷くシグナム。

「あと、この技には要注意」

ヴィータをK・Oしたグレンモンの必殺技、【スージーQ】発動の瞬間をとらえた画像が入ったボードを出す。

「あのトンデモ破壊力のパンチか・・・」

吹っ飛ばされた事を思い出し、悔しそうに呟くヴィータ。

展開している障壁ごと、自分を殴り飛ばした恐ろしい破壊力を秘めたパンチだった。

「これは受け止めるより避けた方が良い。さっき見せた対戦成績の3敗のうち2敗は、これによる物だ」

「まさに一撃必殺・・・か。しかし、スージーQとは、どういう意味なのだ？」

シグナムが孝俊に尋ねる。

「あいつはボクシングが好きでな。あいつが尊敬するボクサー・・・55年ぐらい前のボクサーなんだが、ロッキー・マルシアノってのがいてね。無敗のボクサーって事で、オールドのボクシングファンの間では有名だったんだ」

「ロッキー・・・ってなんか映画の題名みたいな名前だな」

「だってロッキー・マルシアノは、一説ではその由来となった人だし。まあ、一説であって確証は無いけど」

「マジ!？」

ロッキー・マルシアノ (Rocky Marciano、1923年9月1日 - 1969年8月31日) は、アメリカ合衆国のプロボクサー。

マサチューセッツ州 Brockton 出身。本名は ロッコ・フランシス・マルケジャーノ。イタリア系アメリカ人。

ボクシング世界ヘビー級王者史上、唯一全勝無敗のまま引退した第19代世界ヘビー級王者。

全階級通じて引き分け無しは無敗のまま引退した世界王者はスベン・オットケ (2004年引退) が出現するまでマルシアノただ一人であった。

映画『ロッキー』の名前の由来になっているとも言われているが定

かではない。

「ブロックトンの高性能爆弾」の異名を持ち、身長180.3cm・体重83kgと現代では一階級下のクルーザー級の体格ながら、無類のタフネスと破壊的な強打で並みいる強豪を次々とマットに沈めていった。

戦績：プロボクシング 50戦50勝（43KO）無敗

「で・・・そのロッキー・マルシアノが1952年に世界王座に挑戦した時にチャンピオンをマットに沈めた、首がねじ切れんばかりの超破壊的な右フックが【スージーQ】と名付けられたんだ」

「では・・・そのボクサーに敬意を表しての・・・あの必殺技と言う事が」

「YES」

孝俊が一通り説明すると、ザフィーラが静かに言う。

「しかし・・・特殊型スピリットとは・・・一体何なのだ？」

「それについては・・・俺から説明するより、作った本人に聞いた方が早かるう・・・って事で・・・」

シグナムが孝俊に尋ねる。

孝俊はそれを聞き・・・D-スキャナを弄る。

「もしもーし、そろそろ良い年した三大天使のオフアニモン」
何気に凄い失礼な事をサラッと言い放つ孝俊。

『・・・ほつといて下さい』

すると、D・スキャナから光が立ち、その中にオフアニモンのホログラムが現れた。

「うわっ！？な、なんだこいつ・・・！」

突如現れたオフアニモンのホログラムに驚くヴィータ。

「特殊型スピリットを作ったオフアニモンだ。凄く偉い天使型デジモンなんだよ」

『・・・で、何の御用でしょう？』

「実は・・・かくかくしかじかだよ・・・」

孝俊は、ここまでの経緯をオフアニモンに話した。

闇の書について、拓也達と敵対してしまった事について、そしてシグナム達に特殊型スピリットを教える事について・・・

『なるほど・・・これはまた厄介な事態になりましたね・・・』

「なあ、オフアニモン・・・アンタの力で闇の書の呪い、どうにかならねーか・・・？」

『・・・流石に私と云えど、その闇の書の呪いを解く事は不可能です・・・良くて、呪いの進行を若干遅らせるのが精々でしょう・・・

・
私の力が及ばない・・・何かとてつもなく大きなプログラムの力を感じます・・・

それさえ無ければ、辛うじてどうにかなるかもしれないのですが・
』

流石にオフアニモンでも、闇の書の呪いは解けない。

デジモンがかけた呪いなら大抵は解除できるが・・・それ以外の物については無理があるようだった。

『では・・・特殊型スピリットについて簡単に説明いたしましょう』

オフアニモンは・・・特殊型スピリットを作った経緯を簡単にシグナム達に説明した。

人間界に侵攻してくるデジモン達に対抗する為、新たに戦力増強の為にスピリットを作り上げた事を。

「へーえ・・・そっちの世界も結構大変なんだな・・・」

「まあな・・・」

呆然として呟くヴィータに、溜息交じりに返答する孝俊。

「あ、そうだ・・・オフアニモン、例の物はどうなってる？」

『順調です。あと1〜2週間あれば完成するかと』

「そうか・・・頼むよ、オフアニモン」

「話し中すまないが・・・例の物・・・とは？」

孝俊とオフアニモンの会話に、シグナムが入って来る。

「新しい特殊型スピリットを、数ヶ月前から開発してるんだよ。2つ程ね」

「そう言う事か・・・」

なんと、現在新たに特殊スピリットを開発しているとの事だった。順調にいけば、1〜2週間で完成するらしい。

「まあ、それはさておき・・・これからは管理局の動きも本格化してくるだろうから・・・慎重にやらんな」

「そうですね・・・でも、良いんですか？あなた、完成させない方が良いつて言ってますけど・・・」

孝俊の言葉に、シャマルは同意した後に孝俊に聞き返す。

「仕方ねーさ・・・正直やり方には反対だが、これしかはやてちゃんを助ける方法はねえんだし」

孝俊はそう言つて、窓から星空を見上げるのだった・・・

時間は元に戻つて翌日の夜。
クロノ達が住む部屋に通信が入る。

「ん？・・・はいはい、エイミイですけど？」

『あ、エイミイ先輩。本局メンテナンススタッフのマリーです』

本局に勤めるエイミイの後輩・マリーからの通信だった。

「ああ、何？どうしたの？」

『先輩から預かっているインテリジェントデバイス3機なんですけど・・・何だか変なんです』

「え？」

何でも、レイジングハート、バルディッシュ、バーニングブ羅斯の様子が変だと言う。

その言葉にエイミィは首を傾げる。

『部品交換と修理は終わっただんですけど・・・エラーコードが消えなくって・・・』

「エラー？何系の？」

『ええ、必要な部品が足りなくて・・・今、データの一覧を』

何やらエラーが発生しているらしい。

マリーがデータの一覧表をエイミィの元に送る。

「・・・あ、来た来た。・・・え？足りない部品って・・・これ？」
『ええ、これ・・・何かの間違いですよねえ・・・？』

泣きそつな声でエイミィに尋ねるマリー。

データには…文章が出ていた。

【エラーコードE203 必要な部品が不足しています エラー解決のための部品、 “CVK-792” を含むシステムを組み込んでください】

『3機とも、このメッセージのままコマンドを全然受け付けませんです。それで、困っちゃって・・・』

マリーは困惑してエイミィに助けを求めたのだ。

と、そこに・・・

「ふああ・・・なんかあったんかあ・・・？」

着ぐるみの様なパジャマを来た高雄が部屋の奥から出てきたのだ。

高雄は、クロノ達の住む部屋に居候させてもらっているのだ。

ちなみに・・・着ぐるみの形は広島カープのマスコット・スライリーだったりする。

「おおっ、丁度良い所に！実はかくかくしかじかで・・・」

エイミイが目を輝かせ、高雄に状況を説明する。

「ふーむ・・・CVK-792・・・ベルカ式・カートリッジシステムか・・・なるほどのう・・・目には目をつて訳か・・・よっしゃ、今から俺がそつちに出向くわ」

『え！？いい、良いんですか！？』

高雄の言葉に、マリイが驚く。

今、本局でも有名な凄腕の技術者が自ら出向いてくれるとは思わなかったのだ。

「構わん。やるならとことん張り切ってやっちゃるわい。少し時間掛かるが待つとけや」

「ありがと、頼りにしてるよー！」

「おうよー！」

エイミイの言葉に、着ぐるみの姿でガッツポーズを取る高雄。

何となく締まらないような気もするが、技術は本物である。

普段は高度な技術は使わないが、仲間の為ならと、既存の技術での範囲内ならば使い惜しみはしないのだった。

次回は、八神家の日常やフェイト達の学校生活！
そして遂に新デバイスが完成する・・・？

続く

第32話 新しい物を作る時は大抵張り切っちゃう気がする(後書き)

はい、第32話終了です。

孝俊によるデジモン講座・・・

そんでもってなんかゴテゴテしていますが・・・それでも最後まで読んで下さった方、感謝です(土下座)

今回はほのぼの系を目指して書きたいと思います。

で、ちょっとばかりアンケートを取ろうと思います。

Q:リリリなの世界に来てないキャラ(拓也・輝二・孝俊・高雄以外)で、気になるキャラは?

686

・・・と、言う事で がアンケートです。

気になるキャラや素性が知りたいキャラがいたら気軽に聞いて下さい。

感想かメッセージでお答えします。

では、次回予告・・・グレアムさん、どうぞ。

グレアム「ん、私で良いのかね・・・?

次回、リリカルなのはフロンティア第33話【ふとしたきっかけで距離が縮まったりする気がする】お楽しみに「

第33話 ふとしたきっかけて距離が縮まったりする気がする(前書き)

はい、随分遅れましたが33話です・・・

今回は、出来るだけ日常の風景を描くように心がけましたが・・・
ぎこちないかもです(汗)

ちなみに、アンケートはまだ受け付けておりますので、キャラに
対する質問などを待っています)

では、今回の名言コーナーを・・・

・・・弱い者ほど相手を許す事が出来ない 許すという事は、強さの
証だ(野原ひろし クレヨンしんちゃん)

・・・やかましい!!名も知らぬ奴らが戦っているんだ ここでチャ
ンピオンが逃げたら良い笑い者だぜ(ミスターサタン ドラゴンボ
ールZ)

・・・静かにしろい この音が...オレを甦らせる 何度でもよ(三井
寿 スラムダンク)

・・・負けっぱなしは趣味じゃねえんだ!(十文字一輝 アイシール

ド21)

- - 逃げるならいつでもできる だが今しかやれん事もある (桂小太郎 銀魂)

孝俊「アニメの名言・・・沢山あるもんだな」

拓也「だな・・・さて、最近は更新ペースが鈍ってるが・・・」

グレアム「では、第33話・・・始めよう」

今回は久々に後書きコーナーにゲストが来てくれていきます

第33話 ふとしたきっかけで距離が縮まったりする気がする

時空管理局本局・・・AM0:00。とある一室に高雄がいた。
そう、レイジングハート達の修理の為である。

「CVK-792・・・ベルカ式・カートリッジシステム・・・正直、物騒な代物じゃが・・・良えんか？」

【構いません】

【お願いします】

【奴らに勝つには・・・それしかねえ・・・頼む】

高雄の問いかけに、レイジングハート、バルディッシュ、バーニングブ羅斯は自らカートリッジシステムを付ける事を望んだのだ。

「ふーむ・・・よし、解った。お前らの戦う意思はしっかり伝わったけえの」

高雄はそう言つと・・・後ろにいるマリーの方を向く。

「マリーちゃん、決まりじゃ。【CVK792-A】を2機と【CVK792-R】を1機発注しちよいてくれ」

「え、でも・・・カートリッジシステムは本当に危ないんですよ・・・？」

高雄の言葉に、困惑するマリー。

カートリッジシステムは、使用者に負担が掛かる物であり、多用はかなり危険なのだ。

「……そんな事はこいつらも承知の上じゃ。じゃったら俺は、その戦う意思を尊重してやりてえ。同じ戦う者としての」

高雄も技術者……カートリッジシステムが危険な事は百も承知である。

しかし、現状を見れば四の五の言っている暇は無い。

高雄は、デバイス達の戦う意思を尊重しようと考えたのだった。

「解りました……すぐに発注してきます！」

マリーは部屋を出て、部品を発注しに向かった。

高雄はそれを見届けた後、デバイス達の前に立ち……話しかけた。

「待つとれよ。部品が届いたら……すぐに組み込んだるけえの」

【ありがとうございます】

【お願いします】

【恩に着るぜ……】

「気にすんなや。特に、バーニングブロス……お前は俺とよう似とるけえの……」

高雄は……バーニングブロスに自分と似た気を感じていた。

それもその筈……この1人と1機は……同じ炎属性なのだ。

【すまねえ……これからアンタの事を【兄貴】って呼ばせてもらひげ】

「ぶっ……好きにせえや」

バーニングブrossの言葉に、高雄は小さく笑って返すのだった。そして、その後孝昭にも事情を説明……

【バーニングブrossが望んだなら、俺もそれを望む。バーニングブrossを頼むぜ】

……と、孝昭は高雄にバーニングブrossの事を一任した。後は……部品が届くのを待つのみである。それを確認した高雄は、再び海鳴市に戻るのだった。

海鳴市中丘町・はやての家……AM6:30……

目覚まし時計が鳴り、はやてが目覚めます。隣では……ギターがぐっすりと眠っていた。

車椅子に乗って台所に向かうと……何やら音が聞こえた。そこには……朝食を作っている孝俊がいたのだ。すると孝俊が、はやてに気付いたのか、後ろを振り返る。

「おう、おはよう」
「た、孝俊さん……一体何時から起きてたんです？」

笑顔で挨拶する孝俊に、驚いて何時から起きていたのか尋ねるは

やて。

「んー・・・5時くらいかな。朝からトレーニングして、30分くらい前から朝食の準備してたんだが」

「そんな事までせんでも良かったですよに・・・」

「気にするな。泊めてもらった礼だ・・・こう見えても料理には自信があるしな」

申し訳なさそうに言うはやてに、孝俊は笑って答える。

今更だが、孝俊は料理を含め家事が得意なのだ。

ちなみに、日課のトレーニングは今でも欠かさずやっている。

「あそこでまだ寝てんのが2人程いるから・・・寝かしといてやりな」

孝俊がソファの方を指さすと、ソファではシグナムが・・・その足元ではザフィーラ（狼形態）が眠っていた。

ちなみに、2人には毛布がかけられている。

「ホンマや・・・夜更かししたんかな、シグナムもザフィーラも・・・」

「ま、良いんじゃないか？」

はやての心配そうな言葉に、孝俊は微笑して言う。

（こんなに想ってくれる奴らがいて・・・はやてちゃんは本当に幸せもんだな）

シグナムとザフィーラを見ながら、孝俊は料理を続ける。

はやてはその横で・・・孝俊の料理する姿を見ていた。

(ほえー・・・やっぱ男の人でもこんなに料理出来る人っておるんやなあ・・・)

孝俊が初めて台所に立って既に11年・・・はやてが生まれるよりも前から料理をしている。

そのスムーズな動きに、はやては少しばかり驚くのだった。

その頃、海鳴市桜台林道・・・

なのはとフレット姿のユーノ、そしてトレーニングがてら付き添いでやって来た拓也がいた。

両手を小さく広げて集中し、魔力弾を発生させるが・・・すぐに消えてしまう。

「はあ・・・」

残念そうに溜息を吐くのはとユーノ。

まだ回復にはもう少し時間が掛かる様である。

「まだ流石に回復しきれてねーか・・・まあ、焦る事はねーさ」
「はい・・・」

拓也が苦笑しながらなのはの頭を撫でる。

なのはは少し安心したように笑うのだった。

(・・・一晩明けても戻って来なかったな、孝俊の奴・・・パラレ

ルモンが言うには、ちゃんとこの世界の地球には来てるらしいが……)

拓也は、全く戻って来ない孝俊の事を考えていた。
そして……1つの答えが出た。

(……また何か厄介事に巻き込まれたかな、あいつ……もしくは半年前みたいに敵陣で暮らしてる可能性もあるな)

半年前の【ジュエルシード・VV事件】では、孝俊はフェイトの所に住んでいた。

状況的に、拓也達から見て敵陣となる所にいたのだ。

それを踏まえると……孝俊がシグナム達の所にいるのでは……とも考えられる。

見事に正解だったりするのだが。

「さ、帰るか……朝飯に遅れちまう」
「そうですね！」

ユーノを肩に乗せ、なのはは拓也にくっついて歩きだす。

ちゃっかり手を繋いだりしているが……例の如く、特に気にしない拓也だった。

ちなみに、拓也は桃子や美由希に気に入られており、今回も高町家に住む事になっていたりする。

また同じ頃・・・海鳴市市街地のとあるビルの屋上で、フェイトが鉄の棒を持って素振りをしていた。

アルフもこいぬフォームになって、傍で見ている。

孝俊と離れ離れになって以降も、しっかりと修行を積んでいる。

あと、ちゃっかり【閃光斬】を覚えようともしているらしいが・・・なかなか上手く行かなかつたりする。

「おう、やっとなるのー」

「あ、高雄・・・」

そこに、高雄がやって来た。

本局から戻って来て即行で寝たが、もう起きたらしい。

「昨日は遅くまで作業してたそうじゃないか・・・」

「ああ、ちよっとデバイス達の調子を見よつての・・・」

アルフの問い掛けに、寝癖の付きまくったボツサボサの髪を掻きながら答える高雄。

これが機械系統で右に出る者がいないと言っただから、世の中解らない。

アルフに至っては、未だに高雄の実力が信じられなかったりする。

ちなみにフェイトは、高雄が孝俊の親友だと言う事を知り、納得の表情を見せていた。

「あの・・・バルディッシュの調子は・・・？」

「ああ、修理は終わっちゃるよ。後は色々調整すりゃ大丈夫じゃる。

・・・とこるで・・・」

「？」

バルディツシユの調子を聞かれ、のんびり答える高雄。
その後の高雄の言葉に、「?」「マークを浮かべるフェイト。

「ぶつちやけ孝俊の事はどーなんだ?前に告つとんじやる?」
「っ／／／!?!」

ニヤニヤしながらフェイトの耳元で呟く高雄。
どーやら孝俊から聞き出したらしい。
フェイトは一気に顔を赤くし、驚いていた。

「半年前に帰って来てから、数日間あいつの様子が可笑しかったからな・・・凄くポーっとしとつたし」
「え・・・えつと・・・そ、その・・・／／／」

笑いながら尋ねる高雄に、しどろもどろで言葉が出て来ないフェイト。

アルフもアルフで、ちょっとニヤついていた。

「次会った時、改めて告白しちまったらどうだ?今度はあいつも落ちるかもしれねーぜ?」
「・・・っ!からかわないで下さい／／／!」

高雄の言葉に、耳まで真っ赤にしたフェイトは・・・

サクッ

魔力刃を発生させ、高雄に突き刺したのだった・・・それも頭に。

ザフィーラも、口を使って器用に畳んでいる。

(ザツフィーの奴、意外と器用だな)

孝俊が微笑しながらザフィーラを見る。

ちなみに、この2人・・・男同士と言う事もあつてか、意外と気が合うらしい。

実は昨日も、男同士で色々話していたのである。

「シグナム・・・はい、これ・・・ホットミルク。温まるよ」

「・・・ありがとうございます」

はやてがホットミルクをシグナムに手渡す。

シグナムは、微笑を浮かべてホットミルクを受け取る。

「ごめんなさい！寝坊しました！」

そして、今度はシャマルが台所に駆け込んでくる。

どーやら寝坊したらしい。

「おはようシャマル」

「おはよう！ああ、もうごめんなさいはやてちゃん！」

「ええよ、朝食の準備は孝俊さんがやってくれはったし」

「え！？そ、そうなんですか？」

はやての言葉に目を丸くするシャマル。

孝俊は昨日、自分達と同じ時間に寝た筈だった。

それなのに、既に起きて準備を済ませていてくれたのだ。

「おう、泊めてもらった礼って奴だ」

「ありがとうございます〜(汗)」

WAHHAHA!と笑う孝俊に、申し訳なさそうに礼を言うシヤマル。

「おはよう〜」

「あー、めっちゃ眠そうやなあ？」

「ねむい・・・」

ヴィータが漸く起きて来た。

随分眠たそうである。

「もう、早く顔洗ってらっしゃい」

「んむ・・・ミルク飲んでから・・・」

ヴィータがホットミルクを受け取って、飲む。

そんな光景を見て、孝俊は・・・

(こうしてると、戦闘中とは全然違うな・・・なんかほのぼのしてら)

そう思い、微笑むのだった。

朝食の時間・・・孝俊の作ったご飯や味噌汁など、一般的な和食メニューをみんなで食べる。

和食好きなシグナムは、表情にこそ出さないが随分とご機嫌みたいであった。

ヴィータもまた、孝俊の腕前に素直に【めっちゃうめえ!】と唸

っていたりする。

そして・・・はやては何故か孝俊を見ていた・・・

「んー・・・それにしても、孝俊さんの事、何処かで見た事ある気がするんよなあ・・・」

「けど、俺ははやてちゃんと会った記憶は無いんだが・・・」

かつて、孝俊を見た気がすると言っははやて。

だが、孝俊には車椅子の少女と出会った記憶は無い。

「いや、会ったんやのうて、うちが見ただけやねん・・・確かシグナム達もその時いたような・・・」

「我々も・・・ですか？」

はやては、会ったのではなく見ただけだと言う。

シグナム達もいたと言うが、シグナム達も孝俊と会った記憶がなかなか浮かんでこない。

「・・・あ、そうや・・・半年前の町内対抗の野球大会や！ほら、シグナム達がうちに来た次の日にうちが街を案内した時の・・・」
「・・・ああ！あの時の！」

ふと、はやてが思い出したらしく声を上げる。

それを聞いて、シャマルが真っ先に思い出した。

「あー・・・見てたのか、アレを」

「あ、思い出した！孝俊が外野からキャッチャーに向けて凄え送球したやつか！」

孝俊は若干恥ずかしそうに指で頬を搔く。
ヴィータも思い出したらしく、孝俊を見る。

「孝俊は後半、投手もやっていたな？」

「ああ、投手の方が本業だから・・・っーか詳しいな？」

今度はシグナムが孝俊に尋ねる。

孝俊が投手をやっていた所もちゃんと見ていたのだ。

答えると同時に、意外と野球に詳しいシグナム達に少し驚く孝俊。

「野球はテレビでたまに見ているのでな・・・基本的な事は覚えて
いる」

「なるほどな・・・まあ、俺も野球はテレビで見て覚えた口だし」

はやてと暮らしている中で、たまに野球中継を見る事があり、その
中で覚えたと言う。

「ヴィータ、あの時は凄く興奮しとったもんなあ・・・【良く解ん
ねえけど・・・あいつすげえ！】って」
「そ、そんな事ねーけど・・・」

はやてが笑いながらヴィータを見る。

ヴィータは今頃恥ずかしくなったらしく、顔を背ける。

「孝俊さんって高校生？」

「ああ、今は高校2年。一応17歳だ」

「じゃあ、甲子園とか行った事あるんですか？」

「残念ながら、去年は行けなかったから今年また目指してるんだよ」

そんな野球の話で盛り上がりながら・・・朝食の時間は過ぎて行った。

ちなみに、後片付けもちゃんと孝俊がやったのは余談である。

AM 9:00 聖祥小学校

「さて皆さん、実は先週急に決まったんですが、今日から新しいお友達がこのクラスにやって来ます。海外からの留学生さんです、フェイトさんどうぞ！」

「失礼します・・・」

先生が紹介すると・・・ドアを開けてフェイトが入って来る。

「あの・・・フェイト・テストロッサと言います・・・よろしくお願ひします／＼」

恥ずかしさで顔を赤くしながらも自己紹介するフェイト。

教室中からは拍手が起こる。

フェイトは、同じく拍手をしているのはと見つめ合い、小さく笑みを浮かべた。

「あと、それから・・・これから少しの間ですが、用務員のボランティアの人が入って来ました。皆さんも会った事があると思います
が・・・どうぞ！」

間を空けて、先生が紹介すると・・・拓也が入って来た。

しかもしっかりとジャージ姿になっている。

「どーも、神原拓也です。覚えてる人もいるかな・・・？」

少し教室が静かになり・・・そこから一気にワツとざわめいた。

半年前、小学校に現れたデジモンを撃退し、自分達を助けてくれたお兄さん・・・

そんな拓也は、子供達にとって正に【ヒーロー】となっていた。

「ちよつとの間だけだが、よろしくな！」

拓也の元気な返事に、子供達もまた大きな返事を返す。

そして拓也は、他のクラスへの挨拶もある為、すぐに教室を出るのだった・・・

休憩時間・・・転校生にはお約束であろう質問攻め・・・
フェイトは、まさにそんな状況になっていた。

「フェイトちゃん、人気者・・・」

「でも、これはちよつと大変かも」

「はぁ・・・しょうがないなあ」

それを見ていたなのは達。

すずかは呆然とし、なのはは苦笑いしている。

アリサは状況を見かねて、フェイトの元に向かう。

「はいはい！転入初日の留学生をそんなに皆でわやくちゃにしないの！」

「アリサ・・・」

声を上げて質問攻めを鎮静化させるアリサ。
そんな助け船を出してくれたアリサを見るフェイト。

「それに質問は順番に！フェイト困ってるでしょ？」

アリサがまとめた事により、順番に質問が出され、フェイトはおどおどしながらも答えて行くのだった。

そんな光景を見て・・・なのはとすずかは、微笑んでいた・・・

その頃、クロノ達の住む部屋にて・・・

クロノが、母・リンディの友人でもある、時空管理局本局運用部のレティ提督と通信をしていた。

「クロノ君、駐屯所の様子はどう？」

「機材の運び込みは済みました。今は、周辺探査のネットワークを」

「そう・・・ご依頼の武装局員一個中隊は、グラム提督の口利きのお陰で、指揮権を貰えたわよ」

「ありがとうございます、レティ提督」

クロノは今回の事件に際し、武装局員一個中隊の指揮権の取得を要請していた。

そして、グラムのお陰で無事に取得出来た様だった。

「それから、グラム提督のところの使い魔さん達が会いたがってたわよ？『可愛い弟子に会いたい』って」

「リーゼ達ですか・・・その・・・適当にあしらっただけ

ますか・・・」

「どうやらグレアムには使い魔がいるらしく、クロノの師匠であるようだった。」

「会いたがっているらしいが・・・クロノは苦笑していた。」

「レティとの通信を終え、居間にやって来たクロノ。」

「ああ、クロノ君。どう？そっちは」

「武装局員の中隊を借りられた。捜査を手伝ってもらおうよ」

「こっちは闇の書のデータを見たんだけど・・・何なんだろうね、これ」

「エイミイは、独自に闇の書について調べたらしい。」

「魔力蓄積型のロストログア・・・魔導師の魔力の根源となるリンカーコアを食って、そのページを増やしていく・・・」

「全ページである666ページが埋まると、その魔力を媒介に真の力を発揮する。次元干渉のレベルの巨大な力をね」

「と、言いつつテーブルの上のオレンジジュースを取ろうとするクロノ。」

「んで、本体が破壊されるか、所有者が死ぬかすると、白紙に戻って別の世界で再生する、と」

「だが、エイミイによって阻まれていたりする（笑）」

「闇の書は、本体が破壊されても白紙に戻り再生する・・・完全消滅は不可能な物だったりする。」

「様々な世界を渡り歩き、自らが生み出した守護者に護られ、魔力を食って永遠を生きる・・・破壊しても、何度でも再生する。停止させる事の出来ない、危険な魔導書」

「それが、闇の書・・・私達に出来るのは、闇の書の完成前の捕獲・・・？」

「そう、あの守護騎士達を捕獲して、更に主を引きずり出さないといけない・・・」

クロノは、闇の書の完成前の捕獲を考えていた。

だが、ヴォルケンリッター側には孝俊がいる事を、クロノはまだ知らない・・・

かつて、クロノは孝俊と一度交戦し、デバイスを弾き飛ばされて数秒で終わらされているのだ。

706

昼前・・・八神家。

なんだかんだで、はやてや守護騎士達の信頼を得た孝俊は、しばらく八神家で世話になる事に。

今、台所では孝俊とシャルルが昼御飯を作っていた・・・が。

「あ痛っ！」

「ん、大丈夫か？」

シャルルが包丁で指を少し切ってしまった。

孝俊は即座にシャルルの手を取り、傷口を見る。

「あっ・・・／＼」

「……うん、傷は浅いな。絆創膏貼れば止まるだろ」

初登場時に押し倒された時のインパクトがあるせいか、妙に孝俊を意識しているシャマル。

不意打ちのように手を握られて、顔を若干赤くする。

「……これでよし、と。ここは俺がやるから、シャマルは食器とか準備しててくれ」

「え……あ、はい……／＼」

慣れた手つきで手当てを終え、シャマルに指示を出す孝俊。

ちなみに、シャマルの顔が若干赤くなっていたのには、気が付いていなかった……

次回、八神家にオリキャラがもう1人やって来る……！
続く

第33話 ふとしたきっかけで距離が縮まったりする気がする(後書き)

はい、第33話終了です。
やっと書けました・・・

拓也「おっと、今回は久々にゲストが来てくれている」

孝俊「【魔法少女リリカルなのは〜神様の力を得た少年〜】より、
主人公の神谷迅君だ！」

迅「ういーっす」

孝俊「秋風先生からの作品では、直人君に続いて2人目か」

迅「よろしくな！」

孝俊「よろしく。転生して、無印〜A・S〜空白期〜ネギま！世界
を渡り歩いたようだね」

迅「いくらチート能力を身に付けたとはいえ、あれはハードすぎる
ぞ・・・」

孝俊「まあ、原作そのまんまじゃ手応え無いんじゃないか？」

迅「まあ、そうだけとさあ・・・てゆーか、お前の方はどうなんだ
？」

孝俊「何が？」

迅「ヴォルケン側についてるけど・・・」

孝俊「まだA・S編が始まったばかりで何とも言えないよ(汗)・・・それより、気になるのはフラグだな。恋愛フラグ(笑)」

迅「・・・何でか知らんが立ちまくってるんだよな」

孝俊「モテるね(笑)」

迅「そう言う孝俊だって、フラグ立ててんじゃねーか。フェイトに至っては告白までしてやがるし」

孝俊「う、いや、それはその・・・だな・・・/」

迅「後にフェイトに殺されても知らんぞ？」

孝俊「そ、それはそうと・・・Striker'sに入ったみたいだけど」

迅「(逃げたか)・・・ああ。なのは達には協力してやるつもりだ。管理局は嫌だが」

孝俊「それに関しては俺も同感だな。こっちもこっちで事情があるし」

迅「母親関連で、孝俊にも影響が出てるんだっただな」

孝俊「その影響については作者曰く、この2章の中で明らかになる予定らしい」

迅「ほう、それは楽しみだな・・・孝俊の中に眠る魔力がどれ程の物か・・・」

孝俊「どうだかな・・・ま、期待せずに待っていてくれ（汗）」

迅「そうさせて貰おう（笑）」

孝俊「おっと、そろそろ時間だ・・・土産は俺の特製デコレーションケーキ（直径20cm）と、ある戦隊から取り寄せた必殺武器【ローリングバルカン】だ」

鷹「ケーキは解るが何故必殺武器!?!」

孝俊「ライダー物取り扱ってるから、戦隊物も大丈夫かなと」

鷹「何その解釈!?!」

迅「まあ、貰っておくよ。ケーキはリインフォース達と食わせてもらうとしよう」

孝俊「じゃあ、次回予告お願いできるか?」

迅「あいよー、じゃあ行くぜ!」

次回、リリカルなのはフロンティア第34話【影薄くても馬鹿にしてはいけない気がする】お楽しみに!」

秋風先生、こんな感じでどうでしょうか（汗）
ではでは

第34話 影薄くても馬鹿にはいけない気がする(前書き)

はい、第34話です。

最近、どんどん更新ペースが落ちてきています・・・(汗)

拓也「やる気あんのかテーマは」

孝俊「しっかりやれよな」

鷹「仕方ないじゃん、忙しいんだから(汗)」

では、名言コーナーを

- - 人に優しくされないからって、自分も人に優しく出来ないんじゃない、いつまでも誰にも理解されないままだよ

(パワプロ君【実況パワフルプロ野球12】)

- - いくら格好悪い俺たちでもなあ……人様に負けねえ位必死で生きてきたつもりだよ

(坂田銀時【銀魂】)

- - 強かった、確かに強かったよ。けど強いだけで何も無かった。それが僕達との違いじゃないかな・・・

(パワプロ君【実況パワフルプロ野球9】)

…人間、つまづくことは恥ずかしいことじゃないんだ。立ち上がらない事が恥ずかしいんだぞ。

(両津勘吉【こちら葛飾区亀有公園前派出所】)

今回はオリキャラがもう1人登場・・・!

あと、いつもと比べて少し短いかもです(汗)

鷹「じゃ、第34話・・・始まります!」

後書きにゲストが登場しますので、最後まで読んでみて下さい

第34話 影薄くても馬鹿にはいけない気がする

AM11:30 八神家。

昼飯の準備を終えた孝俊が、シグナム、シャマルと何やら話している。

「・・・さて、リンカーコアの蒐集に行くのは良いが、問題がある」
「問題・・・ですか？」

孝俊の言葉に首を傾げるシャマル。
管理局以外で目立った問題は特に無かった筈だ。

「例えこの前の様なデジモン達に闇の書を直接狙われても、体調が万全のシグナム達なら何とかなる。完全体クラスならな」
「完全体？」

「ああ。デジモンには幼年期？ 成長期 成熟期 完全体 究極体と言った順に成長していくんだ」

デジモンの成長形態について説明する孝俊。

完全体ならば、一部を除いてシグナム達で倒せるだろう。

究極体が出てきても、自分がグリーンドラモンで迎え撃てばどうにかなるし、最悪の場合Wスピリットを使えば良い。

ちなみに、特殊型スピリットにもWスピリットは存在するが、それはまだ後の話・・・

「だが・・・もし家を空けて、はやてちゃんを人質に取られる・・・なんて事態もあり得る」

「・・・確かに。特に夜は我々守護騎士全員が家を空けるからな・・・」

これまでも、魔力の蒐集に行く際は守護騎士全員が外出していたのだ。

だが、もし家を空けている間にはやてが襲われてはとうしようもない。

シグナムは、孝俊の言葉に納得する。

「そこでだ・・・オフアニモン」

『解ってます。護衛を付けければ良いのですね』

既にD・スキャナから通信を繋いでいたらしく、オフアニモンのホログラムが現れる。

「時空管理局の平行ルモンに極秘に要請し、こちらに1人転送してもらいましょう」

「か・・・管理局!？」

「心配すんな。平行ルモンは絶対的に管理局の味方って訳じゃない」

オフアニモンの言葉に驚くシヤマル。

ちなみに平行ルモンからすると、優先順位はこうだ。

【オフアニモン>孝俊達>孝昭>プレシア=フェイト>なのは達>
>>>> (越えられない壁) >>>>>>その他の管理局員】

オフアニモンの命令とあらば、時空管理局に内緒で任務を実行する。

何せオフアニモンは、デジタルワールドでの自分の罪を赦してくれた聖母のような存在である。

平行ルモンからしてみれば、全く頭が上がらないのだ。

「・・・信じて良いのかな？」

「ああ。もし駄目なら斬り捨てるなり叩き潰すなりすりゃあ良い」

シグナムの問い掛けに、真剣な眼差しで答える孝俊。

「・・・解った。お前を信じよう」

シグナムは、孝俊を信じて頷く。

『話はまとまった様ですね・・・では、誰を呼びましょうか・・・？』

「・・・影ながら守るとすれば・・・あいつしかいないな」

『・・・そうですね。では、パラレルモンに秘匿回線で連絡を取り、呼んでもらいましょう』

オファニモンと孝俊は頷き合い、ある人物を呼んでもらう事で一致したようだった。

ちなみにオファニモンは半年前に、念話等の割り込みを一切遮断する対パラレルモン専用通信回線を敷いていた。

そんな事が出来る辺り、流石はデジタルワールドの三大天使である。

その頃・・・パラレルモンとはある一室で1人で休憩中だった。

そこに、オファニモンからの秘匿回線での通信が入る。

【パラレルモン、聞こえますか？オファニモンです】

「お、オファニモン！？秘匿回線まで使って何か急用だべか？」

突然の通信に驚くパラレルモン。
秘匿回線を使う事など、滅多に無いからだ。

【はい、急用です・・・実は・・・】

オファニモンは、これまでの経緯をパラレルモンに話した。
それを聞いたパラレルモンは・・・

「そうだべか・・・孝俊さんが戻って来ないのにはそう言う訳が・・・」

【ええ、それで・・・彼らの世界から・・・護衛の為に1人呼んで欲しいのです】

「解つただ。オファニモンの頼みとあらば、断れねえだよ」

そして・・・オファニモンから呼んで欲しい人物と、八神家の座標を教えられ、パラレルモンは・・・とある人物を転送したのだつた。

【あと・・・闇の書について、極秘に調べておいてほしいのです】

「それは良いだが・・・オラ1人じゃ流石に・・・」

【そうですね・・・どうしましょうか・・・】

闇の書について極秘に調べたいが、流石にパラレルモンだけでは重労働である。

するとそこに・・・

「パラレルモン、どうしたの？何か唸ってるみたいだけど・・・」

「あ、プレシアさん……」

プレシアがやって来た。

彼女も休憩に入ったようだ。

パラレルモンはプレシアとは良い友達だったりする。

【プレシアさん……彼女なら頼れるかもしれませんが。彼女に協力を要請してみてください】

「解っただ……プレシアさん、実は……」

そして、パラレルモンは……プレシアにオファニモンから聞いた全てを打ち明けた。

「なるほど……そう言う事だったのね。解ったわ……」

「協力してくれるのか!？」

「勿論よ。彼には……孝俊には恩があるわ。私の命を救う手立てをもらい、フェイトと解り合えて、アリシアの仇まで取ってくれて……一生かけても返し切れない程の恩が」

孝俊に対して深く感謝しているプレシア。

彼の為ならば、協力も惜しまない。

「私とパラレルモンでとりあえず動きましよう。佐野二佐も多分協

力はしてくれるでしょうけど……今は2人で」

「了解だべさ」

【では、お二人とも頼みます……】

そう言って、オファニモンはパラレルモンとの通信を切った。

そして、再び孝俊達と話す。

【話はつきました。すぐにこちらに来るでしょう】

「どんな奴が来るのか・・・」

オファニモンの言葉に、どんな奴が来るか考えているシグナム。
シャマルも、緊張の面持ちで待っている・・・

だが、次の瞬間孝俊から予想だにしない言葉が出た。

「何言ってるんだ。もう来てんじゃねーか」

「「「「・・・・・・・・・・・・はい？」

「」

孝俊の言葉に首を傾げるシグナム・シャマル・オファニモンの3人。

「ほら、シグナムの後ろ」

「!?!」

孝俊がシグナムの後ろを指さす。

慌ててシグナムが後ろに振り向くと…そこにはいつの間にか、1人の少年が立っていた。

なかばやしゆうと
中林雄人 15歳 男

特にこれと言って目立つ要素の無い、地味な脇役キャラ。

しかし、本人はそのポジションを気に入っており、堅実に良い仕事

をする。

孝俊の妹・春香とは順調に交際中らしい。
外見も地味にカッコいい。

座右の銘は……【裏方命】うらかたいのち、【脇役一筋】わきやくひとすじ、【人生いちサブキヤ
ラ】……である。

実家はラーメン屋。

戦闘レベルは孝俊の父・龍輔が一目置く程であり、特殊型スピリッ
トでは孝俊・高雄・善之に次ぐ実力者でもある。

油断すれば、拓也や孝俊ですら足をすくわれかねないレベル。

尊敬する人物は『マリオシリーズ』のルイージと、銀魂の『志村新
八』（何）

「どうも、孝俊さん」

「来たか、雄人」

孝俊に挨拶する雄人。

孝俊は笑顔で迎え入れる。

「い、いとも簡単にシグナムの後ろを取るなんて……どうやって・
……」
「……普通に歩いただけなんですけど」

シグナムがあっさり後ろを取られた事に驚くシヤマル。

しかし、雄人曰く普通に歩いて近寄っただけらしい。

要するに、影が薄いのである。

「・・・正直、影は薄いが馬鹿にしちゃいかん。ぶっちゃけ、シグナムより強いぞ」

「・・・ほう。断言する理由は？」

「地味に強いから」

孝俊曰く、雄人はシグナムより強いらしい

シグナムは訳を尋ねるが・・・帰って来たのはただ一言だった。

だが、本当に特筆すべき点はない。

本当に地味に強いのだ。

「ええつと、改めて・・・中林雄人です。よろしくお願いします」

「ヴォルケンリッターが将、剣の騎士・シグナムだ」

「ヴォルケンリッター、湖の騎士・シャマルです」

互いに挨拶する雄人と、シグナム&シャマル。

雄人は基本的に、とっても礼儀正しい少年なのだ。

孝俊ははやてに雄人を紹介。

そして・・・あっさりとして雄人もこの家で暮らす事を承諾された。

理由は・・・

『孝俊さんの仲間なら大歓迎や。それにたくさんおった方が楽しいやん』

・・・だ、そうだ。

こうして、八神家にもう1人仲間が加わったのだった。

海鳴小学校 PM12:00

昼休みに入り、なのは・フェイト・アリサ・すずかの4人が教室から出て来る。

「フェイトちゃん、初めての学校の感想はどう？」

「年の近い子が、こんなに沢山いるの初めてだから、何だかもつぐるぐるで……」

「あはは……」

「ま、すぐに慣れるわよ。きつと！」

4人は弁当を食べる為、屋上に向かう。

ふと、屋上の入り口に立った所で、扉の向こうから物音が聞こえてきた。

「ふっ！……はっ！……でいっ！せやあっ！」

4人がそーっと扉の隙間から覗いてみると……

ジャージ姿の拓也が、何やら格闘技の練習をしていた。

これもまた、訓練の一環だったりする。

「ふうー……ジャージだからなかなか動きやすいな……」

ん？」

拓也が振り返ると……扉の隙間から自分を見ているなのは達がいた。

「……もう昼飯の時間だったか」

「チャイムにも気付かない程必死に練習してたんですねー」

少し恥ずかしそうに頭を掻く拓也。

アリサは、一生懸命練習していた拓也に感心する。

ちなみにアリサも、年上相手にはちゃんと敬語を使う。

「まあ、命を賭けてる戦いだからな・・・デジモンとのバトルは」

デジモンとのバトルは、大抵が生きるか死ぬかのどちらかである。

勝って生き延びるか・・・負けて滅びるかなのだ。

だからこそ、拓也は日々の訓練を怠らない。

「・・・もう、あれから半年経つんですよね・・・その、デジモンが小学校を襲撃してから」

「あれには流石に驚いたわよね・・・」

すずか達にとっては忘れる事の出来ない、デジモンの襲撃。

拓也がいなければどうなっていたか・・・考えただけでもゾツとする。

「まあ、また出てきたら俺がブツ倒してやるさ。子供達を襲うんなぞ許せねえし」

握り拳を作り、鋭い目と言う拓也。

平和を壊す敵は、この手で叩き伏せる・・・拓也に出来るはずれば、主にそれぐらいだ。

「やっぱり頼もしいね、拓也さんは」

「ん、そうか？そう言ってもらえりゃ嬉しいね」

なのはの言葉に、笑って答える拓也。
普段ならともかく、なのはとフェイトが魔法の使えない今は、自分
が盾になるしかない。

拓也は、早い内でのデバイスの回復を望んでいたのだった・・・

PM13:00 八神家

「それじゃあ、はやてちゃんの病院の付き添いよろしくね、シグナム」

「ああ・・・ヴィータとザフィーラはもう？」

「出かけたわ」

はやての病院の付き添いがある為、シグナムが家を空ける事に。
孝俊は万が一を考えてシャルルの護衛、雄人は影ながらシグナム
とはやてを護衛する。

ヴィータとザフィーラは既に出かけたらしい。リンカーコアの蒐
集だろうか・・・

シャルルが、小さな箱を開けると・・・中には薬莢の様な物が詰
め込まれていた。

「カートリッジか」

「うん、昼間の内に作り置きしておかなきゃ」

カートリッジの作成は、シャルルが請け負っているらしい。

「すまん、お前一人に任せきりで」

「バックアップが私の役目よ。気にしないで」

「・・・じゃあ、はやてちゃんの事は任せたぞ。雄人」
「はい！」

部屋の外では、孝俊が雄人にはやての事を任せていた。
もしも、街中でデジモンの襲撃があったとしたら・・・周りの目もあって、シグナムは戦いづらい。
しかし、影が薄く周りに気付かれにくい雄人ならば・・・物陰で進化し、デジモンを迎え撃てる。

そして、はやてとシグナム、そして雄人が病院に向かい、家には孝俊とシャマルだけに。

「・・・なあ、シャマル」

「え、何？」

「・・・闇の書は何ページまで集まってるんだ？」

ふと、孝俊がシャマルに闇の書のここまでに埋まったページ数を尋ねる。

「確か・・・340ページだったけど」

「・・・全部で666ページだから・・・半分は過ぎた訳か」

「ええ、この間、白い服の魔導師の子から蒐集して・・・かなり稼いだから」

・・・と、シャマルが言ったところで、孝俊が固まった。

「白い服・・・その子ってさ、こんな子じゃなかったか？」

そう言っつて、半年前に拓也、なのは、フェイト、アルフと一緒に撮った写真をシャマルに見せる孝俊。

孝俊の顔は・・・少しばかり青ざめていた。

「え、ええ・・・この子だけ・・・」

「・・・あ、あはははは・・・
O d d...!...!...! Oh my G

建物から飛び出すかのような大声が響く。

「お、落ち着いて孝俊さん！」

「あかん、あかんってこれだけは！拓也の怒りを買うぞこれはああああああ!!」

孝俊は更に青ざめた。

拓也が妹の様に可愛がっているのは・・・

そのなののはからリンカーコアを蒐集したと言っつ事は・・・普通なら拓也の怒りを買うと言っつ事になる。

拓也を敵に回すと言う事がどれだけ恐ろしいか・・・
混乱する孝俊を、必死に抑えるシヤマルだった。

「・・・と、とにかく・・・拓也に会ったら有無を言わず逃げ
しかないか・・・」

「え、ええ・・・（孝俊さんがこんなに混乱するなんて・・・あの
拓也つて人の強さはそこまで・・・）」

自分達から見て、圧倒的な強さを誇る孝俊や、自分達より地味に
強い雄人。

拓也は、そんな孝俊からして【自分より強い】と断言させる程で
ある。

敵に回す事がどれだけリスクがあるか・・・測り知れない。

「それより・・・言っておく事がある」
「え？」

混乱した表情から一転して、真面目な顔付きになる孝俊。
そんな孝俊を見て少々ドキツとするシヤマル。

「もし、魔力の蒐集が間に合わないと思えば・・・俺のリンカーコ
アを蒐集しろ。俺にも魔力があるって事、解ってたんだろ？」

「え！？で、でも・・・」

孝俊の意外な申し出に困惑するシヤマル。

正直、自分達を助けてくれた恩人から蒐集するのは気が引けると
言うものだ。

「構わん。無いよりはマシだろ・・・はやてちゃんの命には代えられん」

「・・・え、ええ・・・でも、どうしてそこまで・・・？」

放っておけば、はやてが死んでしまう・・・

それだけはさせまいと、孝俊は自分のリンカーコアすら差し出すつもりでいたのだ。

「・・・あんな幸せそうな子を、おめおめと死なせる訳には行かねえ。それだけだ」

(！・・・何かしら・・・この気持ちは・・・何か・・・温かくなる・・・)

孝俊は俯いて、一言そう呟くのであった・・・

シャマルは・・・孝俊に対し、普通とは違う感情が芽生え始めていた・・・

次回・・・まだまだ続く日常生活&リンカーコア蒐集活動！

孝俊と雄人がそれぞれの場所で大暴れ！

玄武のスピリットも明らかに・・・！

続く

第34話 影薄くても馬鹿にはいけない気がする(後書き)

はい、第34話終了です。

オリキャラ、中林雄人がこの2章で本格的に初登場です。

雄人「よろしくお願いします・・・あ、今回はゲストが来てるみたいですよ?」

鷹「今回は、フロスト先生の作品【仮面ライダー逆鬼と夜天と魔法少女と】から、主人公の逆鬼君だ」

逆鬼「ういーっす!」

孝俊「やあ、初めまして」

逆鬼「招待してくれてありがとな」

孝俊「いやいや、こちらこそ来てくれてありがとう」

逆鬼「しかしなんだ、雄人だっけ?いとも簡単にシグナムの後ろを取るとはな」

孝俊「本人曰く、普通に歩いて近寄っただけなんだけどね」

逆鬼「あれか?影薄いって奴?」

孝俊「まあ、そう言う事だわな」

逆鬼「しかもそれを気に入ってるとは・・・珍しいよな?」

孝俊「まあ、大抵は地味だとか脇役だとかは嫌がるもんだしな」

逆鬼「ある意味大した奴だわ」

孝俊「本人曰く、【戦いにおいて、目立つ事は必要ない。如何にして命を守るか・・・それだけです】・・・だ、そうだ」

逆鬼「ほーお・・・それよか、お前、フラグ立ったな？」

孝俊「フラグ？んなもん立ったか？」

逆鬼「自覚なしかよ！？」

孝俊「恋愛事にはどうにも疎いもんで・・・そういう逆鬼も、えーとソラだったつけ？あれはどうなんだ？」

逆鬼「いや、どうって言われてもな・・・悪い奴じゃ無いとは思ってるぜ？可愛いし」

孝俊「まあ、勢力的には敵同士の立場だもんなあ・・・」

逆鬼「そりやお互い様だな。お前も管理局とは敵対勢力になっちまってるだろ？」

孝俊「そうなんだよなあ・・・如何にかして上手く収めたいが・・・難しいよなあ・・・」

逆鬼「まあ、お互いに頑張ろつや」

孝俊「うん、そうだな・・・こっちはまだまだ前半だが・・・」

逆鬼「今後も楽しみにしてるぜ？」

孝俊「過度の期待じゃ無ければ楽しみにしてくれていいが（苦笑）」

逆鬼「ははは（笑）」

孝俊「おっと、そろそろ時間だな」

逆鬼「もうそんな時間かよ。時間が立つのは早いな」

孝俊「だな。さて、土産だが・・・俺の手製のカップケーキ（10個）と、グレンモンの使っているハンマーのレプリカだ」

鷹「ハンマー!?!」

逆鬼「ハンマーか・・・ツツコミに使えるかな？」

鷹「いやいや、そんなのでツツコまれたら死ぬって（汗）」

逆鬼「カップケーキか・・・ソラが甘いもの好きだったっけな・・・」

孝俊「さて、次回予告お願いできるかな？」

逆鬼「おう、任せろい！」

次回、リリカルなのはフロンティア第35話【地味な奴は怒らせた
ら意外に恐ろしい気がする】お楽しみに！」

キャラ紹介

名前：逆鬼 【仮面ライダー逆鬼と夜天と魔法少女と】の主人公。

年齢：10歳前後（実年齢20代後半）

髪：黒髪のザンバラセミロング 瞳：鋭い黒眼

好きなモノ／趣味：家族・勝負・昼寝・はやての料理

嫌いなモノ：ちまちました事・難しい事

元は戦国時代にいたが、死が間近に迫った所でどういう訳か現代に飛んだ仮面ライダー！。

そこで車椅子の少女・八神はやたと出会い、そこで居候する事に。闇の書（夜天の魔導書）の守護騎士達とも出会い、成り行き上、時空管理局と対立する。

現在は危険人物として、管理局にマークされている。

フロスト先生、こんな感じでしょうか？
ではでは

第35話 地味な奴は怒らせたら意外に恐ろしい気がする(前書き)

はい、第35話です。

全然筆が進まない状態です・・・前回の更新から11日経っています(汗)

では、今回の名言コーナーを・・・

- 子供には夢を叶える力があるんだ!

(本宮大輔 デジモンアドベンチャー02)

- 一人の紋章はみんなの為に、みんなの紋章は一人の為に!

(八神太一 デジモンアドベンチャー)

- 時に人に教えるという事は、自ら学ぶ事にもなりますからね

(組長先生 クレヨンしんちゃん)

- 道を選ぶという事は、必ずしも歩きやすい安全な道を選ぶって事じゃないんだぞ

(ドラえもん ドラえもん)

- 言葉に出来る寂しさは誰かが慰めてくれます。

言葉にしない悲しみは、自分で乗り越えていくしかないのです

(翠星石 ローゼンメイデン)

孝俊「またネタが増えたか」

シヤマル「そうですねー・・・じゃあ、第35話・・・始まります
！」

第35話 地味な奴は怒らせたら意外に恐ろしい気がする

孝俊がシャマルと話している頃、シグナムとはやて（+雄人）は・
・病院へと向かっていた。

その途中で・・・

「なあ、雄人さん」

「ん、何かな？」

車椅子に乗っているはやてが、前を歩いている雄人に話しかける。
雄人が後ろにいと、存在している事を忘れてしまいそうなので、
前を歩いてもらっていたのだ。

「雄人さんの家族も・・・あんな風に存在感薄いん？」

普通の人なら心に突き刺さりそうな質問をするはやて。
シグナムも、少々興味があるのか雄人の方を見ている。

「あはは、違うよ。特にうちの親父は、僕とは対極で存在感抜群だ
しね・・・ただ、僕には双子の弟がいて、そっちは僕と同じくらい
存在感が薄いけど」

笑いながら話す雄人。

雄人には、【雄二^{ゆうじ}】という双子の弟がおり、同じくらい存在感が
薄いらしい。

ちなみに、雄二は一般人だが、その影の薄さで何度か拓也達の危
機を救ったりもしているのだ。

そして雄人の父は、雄人とは対照的に存在感が抜群らしい。

雄人の親父については、また別の話で紹介する事になるだろう。

「そうなんやあ・・・」

「まあ、存在感の有無はそこまで気にしてないから別に良いけどさ
(笑)」

そう言いながら、前に向かって歩みを速める雄人だった。

そして、デジモンの襲撃もなく無事に病院に到着。

はやての事はシグナムに任せ、雄人は診察室の外で待機していた。

「・・・うーん、やっぱりあんまり成果は出てないかなあ・・・」

カルテを見ているのは、はやての担当医である石田幸恵いしだゆきえ先生である。

実ははやてが初の大病患者らしく、はやての事を何かと気にかけている優しい人物だ。

「でも、今のところ副作用も出て無いし、もう少しこの治療を続け
ましようか」

「はい、えーと・・・お任せします」

笑顔で話す石田先生に、はやては全て一任する。

それだけこの人を信頼していると言う事だが・・・

「お任せって・・・自分の事なんだから、もうちょっと真面目に取り
組もうよ」

「あ、う、いや、その・・・私、先生を信じてますから」

苦笑する石田先生に対し、はやては自分の思いを告げる。
それに、この足の麻痺は現代の医学ではどうにもならないのだ。
とはいえ、魔法関係の事など解る筈も無い・・・正直、今のこ
ろはやてに打つ手は無いのだ。

「・・・はやてちゃん、日常生活はどうです？」

「足の麻痺以外は、健康そのものです」

「そうなんですよね・・・お辛いと思いますが、私達も全力を尽く
してます」

「はい・・・」

はやてが診察室を出て、シグナムと石田先生が2人で話し合っ
ている。

その間、雄人がはやての相手をする。

「今はなるべく、麻痺の進行を緩和させる方向で進めています・・・
これから段々、入院を含めた辛い治療になるかもしれませんが」
「はい・・・本人と相談してみます」

少しは麻痺の進行も緩和しているらしい・・・が、今のままでは
限界がある。

今後は、入院もありうる様だ。

「・・・ふーん、今後も同じ治療をね・・・」

「うん、あたしは・・・石田先生を信用してますから」

診察室の外では、はやてと雄人が話をしている。

「で、はやてちゃんとしては・・・実際どう思ってるんだい？」
「うちは・・・正直、よく解らへん。と言つより、無理やっと思つ
とる・・・」

はやても、闇の書に関しては多少解っている。
現代医学では無理な事ぐらい、はやて自身も解っていたのだ。

「せやけど、あの子達が・・・シグナム達があたしを必要としてく
れてる間は・・・それまで死んだり壊れたりせえへんよ」

はやては、強い意志のこもった目で雄人を見る。

「・・・強いな、はやてちゃんは」

「だってあたしは・・・あの子らのマスターなんやから」

はやての強い意志と精神力に感心する雄人。

強靭な精神力を持ち、スピリットを持つ自分達と比べても遜色な
いレベルである。

「・・・うん、そうだね」

雄人は・・・そんなはやてを見て、優しく微笑むのであった。

夕方、高町家前にて

アリサとすずかが自宅に向けて帰って行った。

なのはとフェイト、そして拓也は、それを見送る。

拓也のボランティアとしての勤務時間はAM8:00からPM15:00までである。

その為、なのは達と一緒に帰る事も可能なのだ。

ちなみに、輝二は今日家で待機中である(バイトが休みだった為)。

「あー・・・小学生の相手すんのもなかなか大変だぜ・・・」

大きく伸びをして、溜息を吐く拓也。

とにかく小学生は元気そのもの・・・自分もデジタルワールドに行った頃は小学生だったので、あんな感じだったのかなと思いついたりしていた。

「拓也さんもお疲れ様」

「私達の為に・・・ありがとう・・・」

なのははそんな拓也を労い、フェイトは礼を言う。

自分達の護衛の為にわざわざ小学校まで来てくれているの・・・感謝感激雨あられである。

そして、なのはの部屋に入る拓也達。

「・・・ねえ、なのははあの人達の事、どう思う?」

「あの人達って、闇の書の?」

「うん、闇の書の・・・守護騎士達の事」

なのはとフェイトが、闇の書に守護騎士達・・・シグナム達について話し合っていた。

「えっと・・・私は急に襲いかかられてすぐ倒されちゃったから、良く、解んなかったんだけど・・・フェイトちゃんと拓也さんは、あの剣士の人と話してたよね？」

「うん・・・」

「ああ、なんつーかよ・・・悪意は全然感じられなかったんだよね・・・」

フェイトと拓也はシグナムと少しばかり話している。

拓也がシグナムを撃退し、闇の書の完成を目指している、と言う所までは聞いていた。

「そっか・・・闇の書の完成の目的とか、教えてもらえばいいんだけど・・・話が出来そうな雰囲気じゃ無かったもんね・・・」

「・・・その事んだけどよ、1つ思ってる事があるんだ」

「思ってる・・・事？」

なのはの呟きに対し、拓也が口を開く。

フェイトは、首を傾げて拓也に尋ねる。

「もしかしたらよ・・・孝俊が奴らの所にいる可能性があるかもしれないねえ」

「「え？」」

拓也の考えに、驚くのはとフェイト。

高雄と輝二は想定範囲内だったのか、特に驚いてはいなかった。

「ほら、半年前もそうだったろ？ジュエルシードの時・・・」

「あ、そっか・・・孝俊さんはフェイトちゃんの所にいたんだよね」

「う、うん・・・」

あの時も、孝俊は拓也の敵側にいた。
今回もその可能性がある・・・拓也はそう考えた。

「ありえなくは無いな・・・もし本当にそうなら、闇の書の主とも接触してるだろう。あいつなら自然と目的も聞き出せているかもしれない」

輝二が拓也の考えに賛同する。

もつとも、闇の書の主であるはやては、闇の書の完成を望んではないのだが、現時点ではそんな事を知る由も無い。

「解る・・・気がする。私も、そうだったから」

「フェイトちゃん・・・」

フェイトは、半年前の事を思い出す。

突如自分の前に現れた孝俊・・・

いつの間にか親しくなり、共に闘い、喜怒哀楽を共有し・・・孝俊になら何だつて相談できる・・・

今更だが、フェイトにとって孝俊は無くてはならない存在になっている。
「・・・」

「孝俊つて、なんか不思議な感じがするの。言いたくない事でも、時が過ぎて行くと自然に言えるようになるって言うか・・・」

「まあ、なんじゃ・・・本当に優しいけえの、あいつは・・・寧ろ、優しすぎるぐらい・・・」

孝俊に関しての考えを述べるフェイト。

それに対し、高雄が答えを簡潔に述べる。

孝俊の事で、高雄が解らない事など皆無に等しいのだ。

「もし、孝俊が今も本当に闇の書の守護騎士達の所にいるとすれば・
・向こうには何かしら深い事情があるんじゃないかな？」
「だな。そうじゃなきゃ、孝俊はとっくにこっちに戻って来てる筈
だ」

孝俊が戻って来ないのは、孝俊が相手側に協力するだけの深い事情がある。

拓也達はそう考えていた。

「・・・強い意志で自分を固めちゃうと、周りの言葉ってなかなか入って来ないから・・・私も、そうだったしね・・・」

フェイトも、かつてはジュエルシードを集める為に、必死に駆けずりまわっていた。

アルフや孝俊が止めるのも聞かずに、無茶をやらかす事もあった。

「私は、母さんの為だったけど・・・傷つけられても、間違ってるかもって思っても、疑っても・・・だけど、絶対に間違ってるって信じてた時は、信じようとしてた時は、誰の言葉も入って来なかった・・・」

「・・・まあ、そういうもんじゃ。それだけ必死になりゃ、誰だつての・・・」

昔を思い出すフェイトに、優しく語りかける高雄。

自分達も、散々無茶はやらかして来た。幾度となく傷を負い、死にかけてた事もあった。

それでも、強い意志を持って戦い続けてきた・・・
フェイトの気持ちも、何となくだが解ったのだ。

「あ……でも、言葉をかけるのは、想いを伝えるのは、絶対無駄じゃないよ……母さんの為だとか、自分の為だとか……あんなに信じようとしてた私も、なのはの言葉で何度も揺れたから」

「フェイトの言葉を黙って聞いているなのは。拓也、輝二、高雄もまた、静かに聞いている。」

「言葉を伝えるのに、戦って勝つ事が必要なら……それなら、迷わずに戦える気がするんだ」

「フェイトちゃん……」

「なのはが教えてくれたんだよ、そんな強い心を」

「そ、そんな事、無いと思うけど……」

そう言って、笑い合うのはとフェイト。

「まあ、人つてのは……誰でも変われるもんじゃけえ」
それを聞いて、高雄が腕を組んで喋る。

「俺の好きな映画でな、【ロッキー4】ってのがあるんじゃけど……主人公のロッキーが、ボクシングの試合で殺された親友の仇を取る為に、敵地に赴いて試合をする事になって……当然ながら観客は完全アウエー状態……ロッキーに対して敵意むき出しだった訳じゃ」

高雄の話を静かに聞くのは達。

高雄は、更に話を続ける。

「じゃが……試合を進めて行く内に……ロッキーの闘志が観客

の感情を変えて行つて・・・しまいには声援まで聞こえるようになった」

「・・・少し、私達と似てるかも・・・」

フェイトが小さく呟く。

戦つていく内に感情が変わつて行く・・・確かに、なのはとフェイトに通じる物があった。

「そしてロッキーはその試合に勝利し、試合後のインタビューでこう言つたんじゃない」

「なんて・・・言つたんですか？」

なのはの問いに、高雄は一呼吸置いて・・・真面目な顔で言った。

「【この私も変わり、皆さんも変わった・・・誰でも変われるのです！】・・・ってな」

「誰でも変われる・・・かあ」

高雄の言つたロッキーの言葉・・・

それを聞いたなのはは、更に意志を固めるのだった。

「つて言うか、高雄さん今日はボケませんでしたね？」

「（グサッ）お、俺だつてたまには真面目になるもん・・・」

なのはの質問（悪意なし）が心に突き刺さる高雄であつた・・・

その日の夜中・・・八神家にて

「・・・よし、行くか。雄人、後は任せたぞ」

「了解です」

はやては既に寝静まり、はやてと一緒に寝ていたヴィータは起きて来た。

シグナム、シャマル、ザフィーラは既に集合場所で待機中だ。はやての事を雄人に任せ、孝俊はヴィータと一緒に家を出た。

「・・・なあ、孝俊」

「ん、どうしたヴィータ？」

集合場所に向かう途中で、ヴィータが孝俊に話しかける。

「正直さ、お前みたいな強えー奴が協力してくれるのはありがたいんだけどさ・・・なんでここまでしてくれるんだ？」

「・・・それ、昼にシャマルにも言われたんだよな・・・まあ、何だ・・・ヴィータ達と一緒にいて幸せそうなのはやてちゃんを・・・死なせたくなかったんだ」

孝俊は、自分の素直な考えをヴィータに言う。

「それに・・・ちと図々しいかもしれんが、俺はヴィータ達を仲間だと思ってるしな」

「そっか・・・あ、あのさ・・・」

「？」

ヴィータは孝俊の答えを聞いた後、少し口ごもる。

「色々・・・ありがと・・・／＼」
「どーいたしまして」

少々照れくさそうに礼を言うヴィータ。

ヴィータは、はやてを助けてくれて、更にはこうやって魔力の蒐集も手伝ってくれる孝俊に好意を抱き始めていたのだ。

それを見て、孝俊は優しく微笑むのだった。

そして、集合場所に到着した2人。

「来たか」

「ああ・・・」

シグナムが確認を取る。

「時間も迫っている・・・早く完成させねばな」

「だな・・・よし、行こう」

守護騎士達が飛び立ち、孝俊もブロスモンに進化して飛行してついでに行くのだった。

そしてその頃・・・八神家に怪しい影が2つ迫っていた。

『ここが闇の書の主の家か・・・』

『厄介な守護騎士達がない隙を狙うとは・・・^{ボス}首領も用心深い事だ』

なんと、孝俊の読み通り、はやてを狙って敵がやって来たのだ。

『闇の書は恐らく守護騎士達が持っているだろうが・・・主を人質にしてしまえば大人しく差し出すだろうよ』

『念の為、この辺に結界も張っておいたしな・・・心おきなくやれると言っものだ』

1体は蜂の巣を模したコンテナと蜂が一体化した様な大型のサイボーグ。

もう1体はピンク色の身体をした、鎌状の腕を持った狐の様な奴だった。

キャノンビーモン 完全体 サイボーグ型 ウィルス種

必殺技：ニトロステインガー（尾に搭載された超大口径のレーザー砲を放つ）

得意技：スカイロケット（ムゲン）（蜂の巣状のミサイルコンテナからミサイルを撃ちまくる）

空中秘密基地“ロイヤルベース”を防衛する超大型のサイボーグ型デジモン。

空中にある基地を守るために、全方位に砲撃する事が可能な武器を搭載しており、基地防衛の軸となる存在。

キュウキモン 完全体 妖獣型 ウィルス種

必殺技：ブレイドツイスター（敵を中心に竜巻を発生させ、真空の刃で切り裂く）

得意技：三連星（腕の鎌で連続で斬りつける）

全身が凶器の、風を操る妖獣型デジモン。

つむじ風と共に、薄紅の鎌鼬から繰り出される真空の刃で切られてしまう。

『さて、手っ取り早く済ませるか・・・』

『そうだな』

2体が動き出そうとした瞬間・・・

「残念ですが、そうはさせませんよ」

八神家の2階のベランダに、雄人が仁王立ちしていたのだ。それを見て、急に止まるキャノンビーマンとキュウキモン。

『な、何！？まだ誰かいたと言うのか！？』

「どうやら僕の存在までは感知できなかったようですね・・・孝俊さんに言われて待機してて正解でしたよ」

驚くキャノンビーマンを尻目に、雄人は・・・黄緑と銀色のカラーリングが施されたD-スキャナを出した。

「はやてちゃんには・・・手出しはさせない！」

雄人が左手を構え、デジコードが発生する。

それをD・スキャナでスキャンし・・・叫んだ。

「スピリットエボリューション！」

そこに現れたのは・・・鉄の様な甲羅を背負い、ヘルメットのような兜で守られた頭部。

丸太の様な太い腕と脚、筋骨隆々の全身。

その名は・・・

「メガトータモン！」

メガトータモン ハイブリッド体 戦士型 バリアブル種 オリジナル

必殺技：マシンガンアイアンブレイク（鋼鉄の拳と脚を相手に連続で叩き込む）

スパークキャノン（両手から発射する電撃砲。メガトータモン唯一の砲撃技）

得意技：雷蹴撃（雷をまとった飛び回し蹴り）

グラビディクラッシュ（渾身の力を込めた拳を振り下ろして叩き付ける）

特殊型スピリット完成体No.4【玄武】のヒューマンスピリット。トータモンの亜種で、成長して二足歩行が可能となった姿。

体の鎧も岩から鉄に変わっている。

重量級なので素早さは多少低いが、それを補っても余り過ぎる程の地味とは言えない凄まじい防御力を誇る。

パワーも地味に高く、ブロスモンとタメを張れる程。

防御力だけは、最高に調子が良い時は究極体をも凌駕する。

『な、何者だ貴様!』

「三大天使・オフアニモンにより作られた特殊型スピリット、鋼鉄の闘士・メガトータモン」

キュウキモンの問い掛けに、静かに言い放つメガトータモン。
重量級だけあって、威圧感は相当だった。

『ええい、敵はたった1人だ・・・これで終わらせてくれる!』
【ス
カイロケット】!』

キャノンビーモンの体の蜂の巣状のコンテナが開くと、そこから
大量のミサイルが発射される。

そしてそれが・・・全てメガトータモンに直撃した!

『ふん、他愛も無い・・・!!?』

「・・・この程度で、玄武の防御は破れませんよ」

だが・・・傷1つ付いてはいなかった。

当たる瞬間にメガトータモンは背中の中の甲羅でミサイルを受け、凌
いだのだった。

甲羅以外の部分でも防御力は結構あるが、流石に無傷では済まな
い為、甲羅を使ったのだ。

『ならば・・・切り刻んでくれるわ!・・・でえええいつ!』
「むんっ!」

キュウキモンが接近し、メガトータモンに向かって鎌を振り下ろす。

だが、メガトータモンは左腕の装甲で受け止め、そのままキュウキモンの腹部に重い一撃を喰らわせた。

『ぐふ．．．っ！』

「隙有りです．．．【雷蹴撃】！」

『ぐばあああっ!?!?』

メガトータモンがジャンプし、キュウキモンの顔面に電撃を纏った回し蹴りを喰らわせる。

それを喰らったキュウキモンは、地面をバウンドしながら吹っ飛んだ。

『おのれ．．．これでも喰らえ!【ニトロステインガー】!』

キャノンビーモンが尻尾から巨大なエネルギー砲を発射した!

『ぬははは!避けたっていいんだぞ?この家が吹っ飛んでも良いんならなあ!』

「避けるなど．．．必要ありません!」

避けられない状況を作り、高笑いするキャノンビーモン。

だが、メガトータモンは避けようとせず．．．そのまま仁王立ちで腕をクロスし、【ニトロステインガー】を正面から受けた。

「んぐぐぐぐぐ．．．．．でやあああああっ!」

『な、何iiiiiiiiっ!?!?』

メガトータモンは暫し耐えた後、そのクロスした腕を振り抜くと、

【二トロスティングァー】を四散させ、掻き消してしまった！
自身の最大の技が消されてしまい、驚愕の表情を隠せないキャノンビーモン。

「今度はこちらから行きますよ！・・・【グラビディクラッシュ】
！」
『げぶふうっ！？』

ハンマーのように振り下ろされた拳を脳天に喰らい、落下するキャノンビーモン。

着地したメガトータモンは、そのまま走り込んで距離を詰める。
そして・・・両腕と両足にエネルギーを溜め込み、鋼鉄のように硬化させ・・・一気に叩き込んだ！

「これが僕の必殺技・・・【マシンガンアイアンブレイク】だあっ
！」

次の瞬間・・・キャノンビーモンに降り注ぐ打撃、打撃、打撃、
打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、打撃。

殴る、殴る、殴る、殴る、蹴る、蹴る、蹴る、蹴る、蹴る、
殴る、殴る、殴る、殴る、蹴る、蹴る、蹴る、蹴る、蹴る、

とにかく打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、
打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、打撃、
打撃、打撃・・・

容赦ない鋼鉄の連撃が、キャノンビーモンに浴びせられていく。
派手さはいらぬ・・・ひたすら連打の嵐だった。

「フィニッシュブレイク！！」

そして、大きく振りかぶった拳が・・・キャノンビーモンにジャストミート！

『ぬ・・・があああ・・・あ・・・！』

あまりの衝撃に耐え切れず・・・キャノンビーモンはデータの粒子となり、消滅していった・・・

メガトータモンはそれを見届けた後、よろよろと立ちあがって来るキュウキモンを見る。

「貴方達の負けです。これ以上戦うのは意味がありません・・・」

『ぬかせえ！貴様は・・・俺が殺してやるあああああ！』

出来ればもう戦いたくないメガトータモン。

しかしその説得も虚しく、狂った様に向かって来るキュウキモン。

「仕方がないですね・・・」

メガトータモンは一瞬悲しそうな表情をした後、両手にエネルギーを充填する。

エネルギーがスパークし、バチバチと火花を散らしている。

「【スパークキャノン】！」

メガトータモンが両手を前に突き出すと、そこから高密度の電撃砲が発射された！

そしてそれはキュウキモンを飲み込み・・・消滅させた。

「・・・生まれ変わった時は・・・正しい心を持って下さいね・・・」

「

メガトータモンは一言そう呟くと、進化を解いて雄人の姿に戻ったのだった……

その頃、とある場所では……守護騎士（+孝俊）が、巨大な魔法生物達と激闘を繰り広げていた。

シグナムはレヴァンティンで魔法生物を斬り裂き、ヴィータはグラーファイゼンで叩き潰す。

ザフィーラは岩をも砕くような強烈な攻撃と、堅牢な防御力で相手を寄せ付けない。

多少傷を負っても、シャマルが回復してくれる。

そして……孝俊はハンマーフロスモンと剣を持って大暴れ。片っぱしから魔法生物を撃退していく。

「ぬどりゃああああっ！」

バゴンツ！と大きな打撃音が響くと、岩の身体を持った魔法生物が四つん這いになって伸びた。

孝俊は蒐集行動は出来ない為、相手に大きなダメージを与える事だけに集中している。

「むっ！……シャマル、そこを離れる！」

「は、はいっ！」

シャマルがその場から飛び退くと、巨大なトカゲみたいな魔法生物が降って来た。

どうやら上からシャマルを襲おうとしていたらしく、咄嗟に気付いた孝俊が指示を出したのだ。

「あ、ありがとうございます・・・！」

「なに、礼には及ばんさ・・・行くぜ！【ブロスバーストブレイカー】！」

ブロスモンはシャマルの前に立ち、得意の【ブロスバーストブレイカー】をぶっ放す。

エネルギー砲、ガトリング、ランチャー等の容赦ない砲撃が魔法生物達に浴びせられる。

「おいおい・・・あんな技もあつたのかよ・・・」

初めて見る砲撃に、少し呆然としているヴィータ。

前に見た時はハンマーと剣しか使っていなかった為、かなりインパクトがあつたらしい。

「近距離は剣とハンマー、中・長距離ではあの強力無比な砲撃・・・奴には目立った隙が無いな」

ブロスバーストブレイカーをぶっ放しているブロスモンを見て、シグナムが言う。

「バランスが取れている・・・正直、敵に回さなくて正解だったな」

「そうね・・・」

ザフィーラの呟きに賛同するシャマル。

正直、孝俊まで敵に回してしまえば、自分達にはロクな未来が待っていないかっただろう。

孝俊がいるお陰で拓也達の行動を押さえる事も出来るし、管理局の魔導師ぐらいならシグナム達で十分対抗できる。

しかしそれ以前に、孝俊からは何か不思議な感じがするのだ。普段の孝俊を見ると、何故か戦闘意欲が削がれてしまっている。

当初は、本当に味方でいてくれるのか半信半疑で孝俊と一緒にいたが、共に過ごす内に警戒心が薄れ、自然に接するようになっていたのだ。

はやて以外には懐かないヴィータですら、孝俊には心を許している部分がある。

孝俊自身は、元々守護騎士達の味方でいるつもりだったのだが。

「ふう・・・もうすぐ時間かな」

「ああ、そろそろ戻らないと、主が起床してしまう」

一息吐いたブロスモンに、シグナムが帰宅を促す。

そして・・・5人は大急ぎで八神家に戻って行くのであった・・・

今回は一休みして小ネタ集を・・・

続く

第35話 地味な奴は怒らせたら意外に恐ろしい気がする（後書き）

はい、第35話終了です。

筆を執るまでに3日・・・書き終わるまでに更に8日・・・最近では気力との戦いになっています（汗）

で、今回は遂に玄武のスピリットが登場しました。色んな事が地味な彼ですが、防御力だけは地味じゃありませんでした（笑）

さて・・・次回は小ネタ集をやるうと思います。

それでは次回予告を・・・雄人君、よろしく。

雄人「はい、解りました」

次回、リリカルなのはフロンティア番外第3回「たまには小ネタをやりたくなる気がする」お楽しみに！」

番外第3回 たまには小ネタをやりたくなる気がする(前書き)

はい、今回は番外編です。

小ネタ・・・と呼べるほどでもないですが(汗)

では、今回の名言コーナーです。

- 生きることは戦うことですよ？

(真紅【ローゼンメイデン】)

- 侍が動くのに 理屈なんていらねーさ そこに護りてエもんがあるなら剣を抜きゃいい

(坂田銀時【銀魂】)

- 弱くたって 運が悪くても やらなきゃいけない事はやるよ。

(野上良太郎【仮面ライダー電王】)

- 刃物を握る手で人を幸せにできるのは料理人だけだ

(天道総司【仮面ライダーカブト】)

・ ・ ・ 今を戦わない者に 次はやつては来ないよ
(牛尾御門【Mr・FULLSWING】)

孝俊「んじゃ、番外編・・・始まるぜ」

ヴィータ「最初は雄人の話だぜ！」

番外第3回 たまには小ネタをやりたくなる気がする

1. 雄人、八神家登場前。

雄人が八神家に来る直前・・・

雄人は・・・なんと孝俊の妹、春香とのデートの帰りだった。

「今日はありがとね、雄人君」

「い、いえこちらこそ・・・」

可愛らしい笑顔を向ける春香と、それを見てドキドキしている雄人。

2人の中にあまゝい空気が流れていた。

が、次の瞬間・・・2人の目の前の空間が歪んだ。

そして、そこから声が聞こえる。

「あの、聞こえるのか？時空管理局の平行レルモンと言うもんだども」

「平行レルモンってもしかして・・・前にお兄ちゃんと拓也さんが言ってた・・・」

平行レルモンについては、半年前に拓也と孝俊から聞いていた。

「折り入ってお願いがあるだ・・・実はかくかくしかじかで・・・」

事情を説明する平行レルモン。

「・・・僕、ですか・・・しかし・・・」

雄人は言葉を濁すと、チラッと春香の方を見る。
どうやら春香の事が心配らしい。
そんな雄人を見て、春香は……

「雄人君、行つてあげて？」

「春香さん……」

「折角必要としてくれてるんだもん、困ってる人がいるなら助けてあげなくちゃ！」

本当は、雄人と離れ離れになるのは寂しい春香。

しかし、自分の恋人が違う世界でも必要とされている事に嬉しさも感じる。

寂しさを押し殺し、雄人の背中を押す。

「……解りました。じゃあ、行きます！」

「……雄人君……頑張つて……」

雄人に声を掛ける春香。

それを聞いた雄人は、春香に近付き……ギュッと抱きしめた。

「ふえ……」

「必ず、無事に帰ってきます……待つて下さいね」

雄人はそう言つて春香の唇に軽くキスをして、空間の歪みに入つたのだつた。

歪みが消えた後、春香は暫くその場所を見つめていた……

そして、八神家の中に着地した雄人。

「よし・・・頑張ろう」

そう言って、孝俊・シヤマル・シグナムのいる部屋に足を踏み入れたのだった。

2・雄人の地味な運氣

雄人が八神家にやって来た数日後・・・
はやては孝俊が見ているので、ぶらりと街に出かけた雄人。
ふと、宝くじ売り場が目に入った。

「・・・暇潰しにやってみようかな」

雄人はそう言って、スクラッチを5枚程購入。
そして、早速やってみた。

「・・・あ、5等だ」

1枚目・・・5等：500円
2枚目・・・はずれ
3枚目・・・はずれ
4枚目・・・4等：1000円

そして、5枚目・・・

「・・・あ、2等だ！」

2等の5万円が出た。

「・・・孝俊さんと分けて使おう」と

流石にはやてに集るたか訳にもいかない（笑）ため、孝俊と分けようと考える雄人。

その後、2万を孝俊に分けたのだった（雄人は半々にするつもりだったが、当てたのは雄人だからと孝俊が遠慮した）。

3・高雄とフェイト

ある日のテストタロッサ家にて。

フェイトが自宅に高雄を呼び、何やら話をしていた。

「そつだな・・・孝俊は80年代〜90年代の歌が大好きで、よく歌つとんじゃ」

「なるほど・・・他には？」

「あいつはトマトが大の苦手じゃ。最悪な頃は、見るのも嫌だった程にな」

「トマトが苦手・・・と」

フェイトは、孝俊の親友である高雄から孝俊の好き嫌いを聞き出していた。

なんでも、【孝俊の事をもっと知って、距離を縮めたい】・・・だとか。

「あと、知つての通りあいつは大の野球ファンじゃ」
「自分でもやってるくらいだからねえ」

ちなみに、こいぬフォームのアルフもいた。
アルフも孝俊に好意を抱いている為、ここで情報を得ているのだ。
しっかりとアルフフラグも立てている孝俊だった。

「ああ、そうそう・・・あいつは人当たりが良くて優しいからの・・・
もしかしたら闇の書の守護騎士達と恋愛フラグを立てかねんかも
なあ」

「・・・・・・・・へえ・・・・・・・・」

ちよつとからかい半分で言ってみた高雄。

だが、既にシャマルフラグを立ててしまっている孝俊・・・高雄
の言葉は、図らずも的を得ている。

そして、フェイトの声が急激に冷たくなる。

「早いとこ仕掛けんと、誰かに取られるぜ？」

「ふ、ふふふふ・・・」

「・・・・・・・・？」

高雄の言葉を聞いて、フェイトはゆらりと立ち上がる。

しかも、何やら凄まじい殺気が漂っていた。

数分後・・・買い物から帰って来たプレシアが見たものは・・・

【100t】と書かれたハンマーを持って高雄を追い回しているフ
ェイトの姿だったとさ。

4・孝俊と守護騎士 その1、シグナム編

ある日の昼過ぎ、孝俊とシグナムは珍しく2人で家にいた。ヴィータとザフィーラは出かけており、シャマルと雄人ははやてと病院に行っていた。

「・・・1ついいか？」

「ん、どうした？」

テレビで時代劇（暴れん坊 軍）を見ながら、シグナムが孝俊に話しかける。

「お前は誰に剣を習った？」

「ああ、親父だよ」

孝俊の剣の腕前を何回か見ているシグナム。

その実力は、軽く自分を上回っているのが解る。

そして、そんな孝俊に剣を教えたのが・・・父である龍輔だ。

「お前の父親も・・・まさかデジモンになれるのか？」

「ご名答だ。親父もガキの頃からデジモンとして戦ってきた。もつとも、今は殆ど前線に立つ事は無いが・・・それでも俺や拓也がまるで歯が立たん」

「なっ・・・!？」

龍輔の実力の程を聞いて、驚愕するシグナム。
拓也や孝俊がまるで歯が立たないと言うのだから、無理も無いだろう。

「・・・正直、お前が味方で良かったよ」
「そうか？」

孝俊が味方だった事に心から安堵するシグナム。
万が一、拓也達を倒そうものならどうなっていたか解ったもんじゃない。

「・・・そうだ、ちょっと訓練に付き合ってくれないか？」
「へ？」

「お前の剣の腕前を直に体験したいのでな」

シグナムからの誘いに、間抜けな声を出す孝俊。
彼女曰く、孝俊の実力を見てみたいらしいのだ。

「はぁ・・・解ったよ」
「ありがたい・・・では、全力で行かせてもらおう！」

そう言うとシグナムは・・・バリアジャケット装着で孝俊に斬りかかった。

「って待てええええええええ！いきなりバリアジャケットかよオオオオオオ！」

孝俊は慌ててブロスモンに進化し・・・シグナムと剣を交えたのだった。

少し後に、戻って来たヴィータが乱入したのは余談である。

ちなみに、勝負(?)は無事に孝俊が勝ったとさ。

5・孝俊と守護騎士 その2、ヴィータ編

「
」

八神家の台所で・・・孝俊が鼻歌を歌いながら何かを作っていた。
そこへ、ヴィータがやって来る。

「なあ、何やってんだ？」

「ん、思わぬ臨時収入(雄人の宝くじの分け前)があつたからな、
材料買ったから手作りのアイスでも作るうかと」

孝俊がそう言った瞬間・・・ヴィータの目が煌めいた。

「ア、アイス！マジか!？」

「マジ」

ヴィータは涎が出そうになっている口元を押さえながら尋ねる。
アイスが好物物のヴィータにとっては、ラッキーである。

「で、何か希望の味はあるか？」

「も、勿論バニラだ!」

孝俊の問いに、1秒と待たず即答するヴィータ。

「あいよ、じゃあ向こうで待ってな」

「た、楽しみにしてるからな！」

「へいへい」

孝俊はこの時・・・ヴィータが小動物みたいに見えたと言う。
目もすんごいキラキラしていたようだ。

「」

「・・・可愛い奴だ」

スキップしながら部屋に戻って行くヴィータを、孝俊は笑いながら見ていたのだった。

6・孝俊と守護騎士 その3、シヤマル編

ある昼下がり・・・

「きゃあああああああああああああああー!!」
「シヤマル!?!」

いきなりシヤマルの悲鳴が聞こえた。
それを聞いた孝俊が、シヤマルのいる部屋に駆け付ける。

「どうした!・・・ってぬおっ!?!」

駆けつけた瞬間、シャルルが抱きついて来たのだ。
何が何だか分からず、混乱する孝俊。

「あ、あああああれ……！」
「ん……？」

震える手でシャルルが部屋の隅を指差す。
その先にいたのは……

「……ゴキブリ？」
「あ、あれは苦手なんですううう……！」

誰でも一度は見た事があるであろう、黒い物体Gことゴキブリだった。
抱きついたまま、泣きそうな顔で孝俊に訴えかけるシャルル。

「守護騎士ともあるもんがゴキブリ苦手って……ゴキブリ型の魔法生物とか出たらどうすんだよ（汗）」
「そ、そんなのがいたら……はうっ……」

孝俊の言葉を想像したシャルルは、あまりに恐ろしかったのか気絶してしまった。

例え守護騎士だろうが、シャルルだって1人の女性である。
ゴキブリが怖くても無理は無いのだった。

「やれやれ……ショーがねーな」

孝俊はシャルルをベッドに寝かせ、しばらく様子を見ていたとき。

ちなみに、買い物から帰って来たはやてがその光景を見て、なんとなく面白くなさそうな顔をしていたのは余談である。

7・孝俊と守護騎士 その4、ザフィーラ編

ある日の夜中……

ベランダで孝俊とザフィーラ（人間形態）が茶をしばいていた。男同士と言う事で、何かとこの2人は仲が良いのだ。

「……で、進展はあったのか？」

「ああ、10ページほどな……図体はでかくても質が良くない物ばかりだな……」

リンカーコアの蒐集に行つて来たらしく、ザフィーラは闇の書を見せる。

図体がデカイのが多いのだが、質は良くないのが殆どらしい。

「で……ここまで何ページだ？」

「……370ページだな……やっと残り300ページを切つたところだ」

孝俊が茶を飲みながら尋ねる。

「ここまで合計で370ページ……まだ先は長い様だ。」

「そうか……なあ、ザッフィー」

「なんだ？」

「前にシャマルにも言つといたんだが・・・もし足りないなら、俺のリンカーコアを蒐集しろ」

「お前の・・・リンカーコアか」

孝俊は、前にもシャマルに自分のリンカーコアを蒐集するように申し出ている。

孝俊のリンカーコアは恐ろしく膨大であり、実際に収集すると何ページ埋まるか想像がつかない。

「そうだ。俺はいつでも差し出すつもりだ。それに、蒐集されてもどうせいずれは元に戻るんだろ？」

「それはそうだが・・・」

ザフィーラも、シャマルと同様に恩人から蒐集するのは気が引けるようだった。

それに、孝俊はザフィーラにとって唯一の男同士で友人とも呼べる仲だ。

「俺の事は構うな。今ははやてちゃんの命を救う事が先決だろう」

「・・・解った。もしもの場合は・・・頼む」

孝俊は真剣な眼差しでザフィーラを見る。

ザフィーラは頷き、頭を下げる。

「俺も蒐集は手伝うからよ・・・頑張ろうぜ」

「うむ・・・主の命を救う為だ・・・これからよろしく頼む・・・」

ガツチリと握手を交わす2人。

男の友情を深めた瞬間であった。

「・・・にしても寒いな、ザッフィー・・・」

「当たり前だ。12月だぞ」

「・・・そうだったな(汗)」

しかし、微妙に締まらなかったのだった(笑)

8・拓也の夜

PM 8:30 高町家

拓也は・・・入浴中だった。

「あー・・・いい湯だ・・・」

用務員の仕事もなかなか大変で、疲れが少々溜まっているようだ。ふと、風呂場のドアが開く。

そこにいた人物を見て、拓也は・・・絶句した。

「拓也さん、背中流してあげるの」

(何イイイイイイイイイイイイイイイ!!?)

なんと、バスタオルを体に巻いたのはが立っていたのだ。

拓也は・・・心の中で絶叫した。

「おいおいおいおいおい、なんなんだこの展開は！てゆうかこんなところ恭也さんや土郎さんに見られたらどうなるんだよ・・・」

「大丈夫なの。お兄ちゃんはお姉ちゃんのお剣道の稽古してるし、お父さんはお母さんが足止めしてるの」

「足止め!?!」

恭也や士郎にこんな所を見られたらどうなる事が解ったもんじやない。

だが、上手い具合にどっちもお取り込み中らしい。

ちなみに、母・桃子がこの作戦(?)を考え、士郎を足止めしている様だ。

そして・・・なのは嬉々として拓也の背中を流し、拓也はいつ見つかるかとビクビクしながら背中を流してもらったとか。

だが翌日・・・入浴はバレなかったものの、拓也のベッドにまたもやなのは寝ぼけて潜り込んでおり、それを見た恭也が木刀を振り回して拓也に襲い掛かったらしい。

いつかの災難再びである。

しかし、今回は拓也は何とか逃げ切り、恭也はまたもなのはに叱られ、数日ほど口を聞いてもらえなかったとさ。

9・孝昭の仕事現場

ヴォルケンリッター襲撃の数日前・・・孝昭は違法魔導師を追い、部隊を率いて動いていた。

そして、数十人の部下達を上手く誘導して犯人を追いつめた。

「うぬぬ・・・くそお！」

犯人が逆上し、魔法弾を放って来る。

この違法魔導師、ランクはAA+相当。だが・・・

「あ、よいしょおっ！」

カキーン！とバーニングブロスで魔法弾をホームランする孝昭。
S+ランクの孝昭の相手では無かった。

「おお、流石は部隊長・・・普通なら避けたり障壁を張ったりする所を、デバイスで打ち返すとは」

部下の1人が感心して頷く。

孝昭は、地上部隊の部隊長を務めている。

ちなみに、本局の方から幾度となく引き抜こうとする動きがあったらしいが、孝昭は全て固辞している。

理由は・・・【地上の方が実家に近いから】、【自分を信頼してくれる部下を残して行けない】だそうだ。

次元航行艦隊にも、【出向】である事を条件で出向いている。

「大人しくお縄につきな！」

孝昭は、そう言ってデバイスに魔力を込めて思い切り振り下ろす。すると犯人の頭上から何か落ちてきて・・・脳天に炸裂した。

ガァーイーイーーンツ！と言う大きな金属音を立てて落ちたそれは・・・巨大な金盥かなだらだった。

「グバアッ!？」

まともに脳天に喰らった犯人はうつ伏せに倒れ、ピクピクと痙攣していた・・・

そして孝昭は犯人に近付き・・・

「よーお前、【メツチャ悪い事した罪】で逮捕だ」

「いや、ちゃんと罪状言いましょや(汗)」

部下から遠慮がちなツツコミを受けながら、無事に犯人を逮捕したのだった。

次回、新デバイス起動・・・の予定。

続く

番外第3回 たまには小ネタをやりたくなる気がする(後書き)

はい、番外編終了です。

孝俊「それにしても最近マジで時間が取れんな・・・」

鷹「頑張っではいるんだけどね・・・(汗)」

拓也「早く書かないとストックしてるネタが消えちまうぞ」

鷹「シヤレにならん・・・」

では、次回予告・・・久しぶりにアルフさん、よろしく

アルフ「あいよ、んじゃ行くよ!

次回、リリカルなのはフロンティア第36話【仲間が危機に陥った
ら助けるのが普通な気がする 前編】お楽しみに!」

第36話 仲間が危機に陥ったら助けるのが普通な気がする 前編(前書き)

はい、第36話です。

随分時間が掛かってしまった・・・(汗)

で、長くなりそうだったので、前中後編の3つに分けました。

今回、男の誰かにフラグが立ちます(何)

では、名言コーナーを。

- 居たくもねえあいつの居場所なんて、おれが全部ぶっ壊してやる!!!

(モンキー・D・ルフィ ONE PIECE)

776

- 君はこの先 何度も転ぶ でもその度に立ち上がる強さも君は持っているんだよ

(大人のび太 ドラえもん)

- あんたを奈落から引き釣り上げる為の縄なら 幾らでも用意してやらア

(坂田銀時 銀魂)

- 人の記憶がどれだけ大切か何度も見てきたよ。たとえ過去が壊れても人の記憶がもう一度時間を作る

(野上良太郎 仮面ライダー電王)

- 命がけの男の勝負にリセットボタンはねえ!

(茂野吾郎 MAJOR)

- ウフフフフ・・・ 586920時間37分ぶりね、真紅・・・

(水銀燈 ローゼンメイデン)

- 約束よ 巴とヒナとの・・・ 絶対破っちゃいけない約束・・・

(雛苺 ローゼンメイデン)

孝俊「7つも入れたか(汗)」

孝昭「入れ過ぎだ入れ過ぎ(汗)」

拓也「と、とにかく・・・第36話、始めるぞ!」

第36話 仲間が危機に陥ったら助けるのが普通な気がする 前編

ある日の夜、八神家。

例の如くはやては寝静まっているが、まだ少し時間が早い為、ウルケンリッター&孝俊^{バカ}・雄人^{じみ}は、リビングで話し合いをしていた。現在は、雄人が何やら話している。

「・・・と、まあそう言う訳で・・・あの時は僕がどうにか撃退したんですが」

「孝俊の予想通りだったか・・・手間をかせかせてすまなかったな、雄人・・・」

雄人は、数日前にキャノンビームとキュウキモンが襲撃して来た事を話していた。

孝俊の予想通り、はやてを狙ってデジモンがやって来た事を理解し、雄人に礼を言うシグナム。

「いえ、これが僕の役目ですから・・・気にしないで下さい」

「・・・すまないな」

雄人は、微笑みながらシグナムに返す。

「しかし、いつまた刺客が来るか解りませんから、油断は出来ませんけどね・・・」

雄人は、真剣な表情で語る。

その雄人の後ろでは、孝俊がブロックやルービックキューブと言った四角い物（刺客「四角」というギャグ）を持っていたが・・・

「・・・ツッコみませんか？」

雄人は、前を向いたまま言い放ったのだった。

翌朝・・・シグナムは、孝俊がやっている様なトレーニングを真似て、町内をランニングしていた。
そこで・・・

「「あ・・・！」」

なんと、シグナムは同じくトレーニング中の拓也と出くわしたのだった。

周囲には誰もいない為、間髪入れずにレヴァンティンを構えようとするシグナムだったが・・・

「ちょ、ちょっと待て・・・！俺はお前と戦う気はねえ」
「・・・」

拓也の言葉を聞き、警戒しながらも戦闘態勢を解くシグナム。

「・・・一つ聞きてえ」
「なんだ？」
「・・・孝俊はそっちにいるのか？」
「・・・！」

拓也からの質問に驚くシグナム。

まあ、無理も無いのだが。

「言つとくが、孝俊から連絡が来た訳じゃない。ただ、前にも似たような事があったから、もしかしてと思つてな・・・」

「・・・察しの通りだ。孝俊は確かに我々の元にいる」

拓也の言葉に、シグナムは頷いて答える。

拓也が嘘を言っているようには思えない。だから、自分も正直に話したのだ。

「そうか。それが解りゃいいや」

「・・・取り返しに来るとかは考えないのか？」

あつさりした拓也の言葉に、質問を投げかけるシグナム。

だが、拓也は・・・

「別に考えてねーさ。そつちに協力するだけの深い事情があるから、孝俊はそつちにいるって事だろ？」

そう言つて、微笑むだけだった。

「まあ、あれだ・・・さつきも言つたように、俺はお前達と不要な戦いはしたくねーからな」

「・・・そうか」

戦いたくないと言う拓也の言葉に、ぼつりと呟くシグナム。

「俺だけじゃねえ。高雄と輝二も・・・そう考えている」

「あの2人か・・・それにしても、お前達はかなり冷静に状況を見る様だな・・・？」

「昔、やたらと考え無しに突っ込みまくって散々痛い目見てるから

な・・・」

拓也の冷静な考え方も、かつての痛い経験があつてこそだ。失敗から学び、同じ過ちを繰り返さぬよう、努力を重ねてきた。

「過去の過ちから学んだ、と言う訳か・・・どうりでそれだけ冷静な訳だ」

「そういうことだ。んじゃ、俺はそろそろ行くぜ」

そう言つて歩き出そうとする拓也。

だがその前に、シグナムが言葉を発した。

「・・・闇の書について何も聞かないのか？」

「んあ？・・・どうせ何も答えねーだろ？ま、闇の書の主に出会う様な事でもありゃ、その時改めて聞くさ。じゃあな！」

拓也はそう言つと、そのまま走り去つて行った・・・

シグナムは・・・しばらく拓也が走つて行った方向を見つめていた。

「・・・神原拓也・・・か」

シグナムは一言そう呟くと、Uターンして、元の道を走つて帰るのだった。

そしてその頃、時空管理局本局のとある一室にて・・・

「……………つしゃあ！組み込めたぜい！」

高雄が、レイジングハート、バルディッシュ、バーニングブロスにカートリッジシステムの組み込み作業を行っていた。そして、たった今組み込む事に成功したらしい。

「凄い……メインの部分を殆ど1人で完成させちゃった……」

後ろでは、マリーことマリエル・アテンザが呆然として高雄を見ていた。

マリエルもまた、高雄に協力する為に殆ど休みなしで動いていたのだ。

「マリーちゃん、ここまで手伝てつとってくれてありがとの。殆ど休みなしで疲れたじやるう？」

「い、いえ……大丈夫……です」

マリエルに労いの言葉を掛ける高雄。

返事をするマリエルだが、少し声が弱々しい。

そして……歩こうとしたが、足元がふらついて倒れそうになる。

「つとと……無理しんさんな。ゆっくり休みんさい」

「は、はい……すみません……ZZZ……」

高雄がマリエルを抱きとめ、優しく頭を撫でる。

マリエルは一言謝った後……そのまま眠りに落ちた。

「……いや、だからって俺に寄り縋すがったまま眠らんでも……」

高雄は困った様に呟く。

仕方が無いのでマリエルを仮眠室まで運び、ベッドに寝かせたのだった。

「さてと、俺はジュースでも飲んで一休みしてくるかね・・・」

高雄は仮眠室を出て、すたこらと歩いて行くのだった。

余談だが・・・その後、マリエルは高雄を見る度に、若干顔が赤くなっているらしい。

どーやら、技術者としても1人の男性としても、高雄に惚れてしまったようだ。

思わぬところでフラグが立った高雄であった。

一方、その日の夕方・・・拓也は珍しく図書館にいた。用務員の仕事の空き時間の暇潰しに、本を探していたのだ。

「んーと・・・これがいいかな・・・ん？」

いくつか本を選びながら拓也が周りを見渡すと・・・

「あれ？拓也さん？」

「おう、すずかちゃんか」

同じく図書館を訪れていたすずかと出会ったのだった。

「すずかちゃんは、この図書館にはよく来るのか？」

「はい、面白い本とか結構沢山あるんで・・・拓也さんは？」

「はは、俺は仕事の合間の暇潰しになるような本を探しにな。休憩

時間は子供達の相手をすれば良いんだが、それ以外で手が空くとどうにも暇だな」

「そうなんですか・・・」

すずかの問いに、苦笑いして答える拓也。

休憩時間は子供達と触れ合ったり、昼休みにはサッカーの相手をしていたりしている。

現役の高校サッカーの選手である拓也は、小学生からすれば相当上手に見える。

デジモンに進化しなくとも、男子女子問わず人気なのである。

「・・・あ、はやてちゃん」

「あ・・・すずかちゃん」

すずかが車椅子に乗ったはやてを見つけ、声を掛ける。

はやてもまた、すずかに気付いて笑顔になる・・・と、ここまでは良かった。

「シグナム!？」

「拓也!？」

神原拓也&シグナム、本日2度目の遭遇だった(笑)。

「あれ、シグナム・・・この人と知り合いか？」

「え、ええまあ・・・」

「拓也さんも・・・？」

「あ、ああ・・・前に2、3度な」

まさかの出会いに、多少驚いている拓也とシグナム。

「えっと・・・貴方は・・・」

「あ、ああ・・・俺は神原拓也。すずかちゃんに通ってる学校で、
用務員のボランティアをやってたんだ。よろしくな」

「そうなんですか・・・うち、八神はやて言います。すずかちゃん
とは、ここで良く会ってます・・・」

とりあえず、互いに自己紹介する拓也とはやてだった。

「・・・あの子が主か？」

「・・・ああ」

はやてとすずかは借りた本について話しており、拓也とシグナム
は少し離れた場所で隣り合わせに立って話していた。

「・・・リンカーコアの蒐集は、あの子の・・・はやてちゃんに関
係あるんだな？」

「そうだ」

拓也の問いに、一言返すシグナム。

拓也は、管理局の奴よりはまだ信用は出来る・・・が、まだ心か
ら安心は出来ない。

「改めて聞くけどさ・・・どっという事なんだ？」

「主はやては闇の書の呪いを受けている・・・その呪いから解放す
る為に我らは蒐集を行い、闇の書を完成させようとしているのだ」

シグナムが理由を話す。

それを聞いた拓也は、はやての足を遠目から改めて見てみる。

はやては足が不自由・・・アレが闇の書の呪いなのだろう・・・
拓也はそう考えた。

「闇の書を完成させれば、はやてちゃんの足は治る・・・って事か？」

「ああ、少なくとも麻痺の進行は止まるはずだ。死ぬ事は無くなる」

拓也の質問に、頷いて答えるシグナム。

それを聞いた拓也は、うつすら微笑んで・・・

「そーか・・・なら良かった。これなら、孝俊がお前達を手伝うのにも納得がいったよ」

「拓也・・・この事は管理局には・・・」

「わーってるよ。言うなつてこつたる？」

「敵であるお前に頼むのも変な話だが・・・図々しいとは分かっている。だが・・・頼む」

拓也に向かって頭を下げるシグナム。

それに対して拓也から帰ってきた答えは・・・

「おいおい、頭上げてくれよ。俺は確かに管理局側にいるが、別に管理局の味方って訳じゃねえしよ」

「で、では・・・」

「勿論、誰にも言わねえ。この事言っちゃまったら、遠回しにはやてちゃんを見殺しにする様なもんだろ。んな事、俺には出来やしねえよ」

「すまない・・・恩に着る」

拓也の答えに、安心して話すシグナム。

正直、出会ったのが拓也だったのは運が良かったと言える。

万が一出会ったのがKY・・・じゃなかった、クロノとかだと全員捕まってしまうのがオチだったかもしれないのだ。

「ただ、1つだけ条件がある」

「・・・な、なんだ？」

シグナムが息を飲む。

拓也が出した条件、それは・・・

「孝俊の事、よろしく頼む」

「・・・なんだ、そんな事か。勿論だ・・・それに、奴にはこちらも世話になっているからな」

拓也は、孝俊の事をシグナム達に任せただの。

既に、孝俊を仲間だと認めていたシグナムは、拓也の申し出を快く受け入れたのだった。

その日の夜・・・本局の医務室から、なのはが出て来る。

そこへ・・・フェイト、アルフ、ユーノ、拓也、輝二、高雄がやって来る。

「なのは！」

「検査の結果、どうだった？」

「無事、完治！」

アルフの問い掛けに、笑顔で答えるなのは。

どうやら、リンカーコアも完全に回復したようだった。

「こつちも完治だつてよ」

フェイトがバルディッシュを、拓也がレイジングハートを見せる。拓也は、レイジングハートをなのはに手渡す。

「高雄が完全に復元してくれた。完璧に元通りだ」

輝二がなのはに説明する。

高雄の機械システムに対する腕前は、デジモン組全員が全幅の信頼を置いている。

拓也達現役世代はおるか、龍輔達親世代からも頼りにされているのだ。

「わあ・・・高雄さん、ありがとうございます！」

「ありがとうございます・・・」

なのはとフェイトが高雄に頭を下げる。

「なーに、気にすんな。俺も役に立てて、ぶち（凄く）嬉しいわい」

高雄は笑みを浮かべ、なのは達に話す。

ちなみに、高雄は自分の世界の技術は一切使っていない。

あくまで、管理局にある技術のみを使ってレイジングハート、バルディッシュ、バーニングブrosを修理している。

ちなみに、バーニングブrosは既に孝昭に返却している。

「さてと、エイミーさんに連絡しておかねーとな・・・」

そして、中継拠点（エイミー達の家）にて・・・

「そう、良かったあ！今、何処？」

【2番目の中継ポートです。後10分くらいでそっちに戻れますから】

エイミイとユーノが、通信を繋いでいる。

本局から地球までは結構距離がある為、次元航行艦船でも使わない限り、いくつか中継ポートを使わないと辿り着けない。

「そう・・・じゃあ戻ったら高雄君も交えて、レイジングハートとバルディッシュについての説明を・・・！！！」

エイミイがそう言いかけたところで、緊急事態を伝えるブザーが鳴り響いた。

「ああ、こりやまずい！至近距離にて緊急事態！」

【都市部上空にて、搜索指定の対象2名を捕捉しました。現在、境界内部で対峙中です】

「相手は強敵よ。交戦は避けて、外部から結界の強化と維持を！現地には、執務官を向かわせます！」

その頃、結界の端の方に・・・孝俊がいた。

ヴィータとザフィーラの帰りが遅いので、心配になって途中まで見に来たのだ。

「・・・結界か・・・もしや、管理局に感付かれたか・・・！」

少し遠くの方を見上げると・・・多数の武装局員に囲まれたヴィータとザフィーラがいたのだ！

孝俊は、急いでその場から走り出す。

「・・・管理局か」

「でも、チャライよこいつら。返り討ちだ!」

だが、武装局員達は2人の周りから離れて行く。

「上だ!」

「!」

上を見ると、そこには無数の魔力刃を発生させているクロノがいた。

どうやら既に発射態勢に入った様だ。

「【ステインガーブレイド・エクスキュージョンシフト】!」

クロノは杖を振り下ろし、魔力の刃の雨がヴィータとザフィーラに降り懸かる。

「ちいつ!」

ザフィーラがヴィータの前で障壁を張る。

障壁に無数の刃がぶつかり、爆発が起きた。

そして、爆発により煙が立ち込める・・・

「:少しは・・・通ったか?」

煙が晴れてきて、ザフィーラ達の姿が見える。

ザフィーラの左腕には、数本の刃が刺さっていた。

「ザフィーラ！」

「気にするな。この程度でどうにかなる程…ヤワじゃない！」

腕に力を入れて魔力刃を破壊するザフィーラ。

流石に盾の守護獣…この程度ではビクともしないようだ。

「上等！」

ヴィータは上空にいるクロノを睨んだ。

クロノは悔しそうに舌打ちをして、杖を構える。

その時…エイミィから通信が入った。

「武装局員配置終了、OK！クロノ君！」

「了解！」

「それから今、現場に助っ人を転送したよ！極上のを8人！」

「え？」

クロノは視線をヴィータ達から外した。

すると、ビルの屋上には…

「なのは！フェイト！」

なのはとフェイトが立っている。

少し離れた違うビルの屋上には、アルフとユーノがいた。

更に今度は、空間が歪んでそこから4人が出て来る。

拓也、輝二、そして…何故かドラもん&の太のコスプレをした高雄&孝昭がいた。

「こんな時に何をしとんのじゃあああああ！」

「ぐぶっ！？いや、こう言う時こそ笑いと言うものをだな…」

即座に鉄拳ツッコミをぶちかます拓也。
それに対して反論する高雄だったが・・・

「ほう・・・なら22世紀まで旅立たせてやるのか？」

「OK、ちよつと待った、俺が悪かった・・・だから落ち着け」

マウントポジションを取り、高雄の顔面目掛けてパンチを撃とうとする拓也。

高雄は若干の冷や汗を掻き、慌てて拓也を宥めようとするのだった。

「んな事してる場合じゃないだろう。敵は上だ」

輝二の呆れ混じりの声に、拓也・高雄・孝昭は上を見る。

「あいつら!!」

「デジモンに進化する奴ら・・・拓也達も一緒だな・・・」

ヴィータとザフィーラもまた、なのはや拓也達の姿を確認した。

「レイジングハート!!」

「バルディッシュ!!」

「セーットアップ!!」

なのはとフェイトは、待機モードのデバイスを上に掲げた。

「え・・・こ、これって・・・？」

「今までと・・・違う・・・？」

起動した時の感じの違いに、若干戸惑う2人。
すると、高雄が通信機を持ち、2人に話しかけた。

「2人とも、落ち着いて聞いてくれ。レイジングハートとバルディッシュは、新しいシステムを積んどるんじゃない！」

「新しいシステム？」

「そいつらが望んだんじゃない。自分の意志で、自分の思いで！」

高雄の言葉に、戸惑いながらも待機状態のデバイスを見上げる2人。

高雄は、更に言葉を続ける。

「呼んでやってくれ、そいつらの・・・新しい名前を！」

「レイジングハート・エクセリオン!!」

「バルディッシュ・アサルト!!」

【Drive Ignition】

二人は、自分のデバイスの新しい名前を叫んだ。

二人の体が光に包まれ、新しいバリアジャケットを身につけ、生まれ変わったデバイスを手に持つ。

「あいつらのデバイス…！アレってまさか!？」

なのはとフェイトのデバイスを見て、ヴィータは驚いた。

まさか、なのは達がデバイスにカートリッジシステムを搭載してくると思いきり寄らなかったのだ。

「うつしや、俺達も行くぞ・・・バーニングブロス！」

【あいよっ！俺も高雄の兄貴にカートリッジシステムを積んでもらった・・・新しい名前、頼むぞご主人！】

孝昭も、待機状態のバーニングブロスを高く掲げる。

そして・・・新しい名前を叫んだ！

「爆炎の魔杖改め・・・火山の魔杖、バーニングブロス・ボルケーノ・・・セツトアップ！」

【ドライブ・イグニッション！！】

孝昭も、新しく新調された騎士服を身に纏う。

前の物よりも、更に赤が強調され、炎の模様がより一層多くなっている。

デバイスもまた、柄の部分には【VOLCANO^{ボルケーノ}】の頭文字である【V】の文字が入り、メタリックレッドの装飾が施されている。

「ふいー・・・燃えて来たぜい・・・！」

風邪ひいてたせいでしばらく戦列から離れていた事もあり、闘志が溢れ出ている孝昭。

周囲は寒かったが、孝昭の心は熱く燃え上がっていた・・・

その頃、はやてとシャマル（+雄人）は・・・近くのスーパーに買い物に出ていた。

「せやけど、最近みんなあんまりおうちにおらんようになってしま
うたねえ……」

「ええ……まあ、その……なんでしょうね」

「……何でだろうね」

少し焦った顔をして言葉を返すシャルと雄人。

「ご存じの通り、はやてには秘密で動いているからだ。」

「ああ、別にあたしは別に全然良えよ。皆が外でやりたい事とかあ
るんやったら……それは別に」

「はやてちゃん……」

「……」

はやての言葉に、心配そうな顔になるシャルと、無言になる雄
人。

「あたしは……元々1人やったしな」

「はやてちゃん、大丈夫です！今は、みんな忙しいですけど……
その、すぐにまた、きつと……」

寂しそうな笑顔を浮かべるはやて。

それを見て、シャルがはやてを励ます。

「ん……そつか！シャルがそう言うなら、そうなんやね。今夜
はずかちゃんも来てくれるし……お肉は、こんなもんかな？」

「はい！」

「外は寒いし、今夜はやっぱあったかいお鍋やね」

「そうだね」

そんなやり取りをしながら、買い物を済ませて外に出る3人。

「みんなも、外で寒くないかなあ……」

寒さに少し震え、手を温めながら……はやてはそう呟くのだった。

その頃、結界の外では……シグナムが佇んでいた。

ふと、孝俊から念話が届いた。

(シグナム！今何処だ！？)

(孝俊か？……市街上空だ。近くに結界があるが……)

(そうか、丁度良い。俺も結界の中だし……ヴィータ達を助けに行くつもりだ)

(やはりヴィータ達は閉じ込められていたか……お前がいてくれれば心強いが、相手は多数いるだろう。油断はするな)

(あいよ！俺はどっかのビルの屋上に上がるから……！)

孝俊とのやり取りを終え、結界を見るシグナム。

「強装型の捕獲結界……孝俊の言う通り、ヴィータ達は閉じ込められたようだ……」

【行動の選択を】

「レヴァンティン、お前の主はここで引くような騎士だったか？」

【否】

「そうだレヴァンティン。私達は、今までずっとそうして来た！」

カートリッジをロードし、剣に炎を纏わせるシグナム。

そして・・・結界を見据えるのだった・・・

「私達はあなた達と戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて」「闇の書を完成させようとしている理由を・・・!」

フェイトとなのはがヴィータ達に尋ねる。

「あのさあ、ベルカの諺にこういうのがあんだよ」

腕を組みながら、ヴィータが言った。

それを聞いた、隣にいるザフィーラはヴィータを見る。

「和平の使者なら槍は持たない」

それを聞いたなのはとフェイトは、顔を見合わせて首を傾げた。拓也、高雄、輝二もまた、何の事か解らずに同じく首を傾げる。

「そーいやベルカにそんなのがあったような・・・でも諺だったっけ・・・?」

孝昭は、ヴィータの言葉に聞き覚えはあるらしいが、諺だったかどうかまでは覚えていないようだ。

しかし、流石は二等空佐を務めるだけあり、それなりの教養は持っているようである。

「話合いをしようつてのに、武器を持ってやって来る奴がいるかバカって意味だよ。バカカ!」

「なっ!?!い、いきなり有無を言わず襲い掛かって来た子がそれを言う?」

ヴィータの言葉に、なのはが反論する。

確かに、誰に言われても良いが、ヴィータにだけは言われたくない。

拓也達も、うんうんと頷いて納得している。

「それにソレは諺ではなく、小話のオチだ」

「うっせー！いいんだよ細かい事は！」

ザフィーラがヴィータにツッコむ。

ツッコまれて、ザフィーラに怒鳴るヴィータ・・・顔には出さないが、少し恥ずかしかったようである。

その時、上空で爆音が響いた。

直後に、紫色の雷が拓也達のいる隣のビルに落ち、煙が立ち込める。

煙が晴れると・・・そのビルの屋上に、シグナムの姿が見えた。

「っ・・・シグナム・・・！」

フェイトが声を上げた。

（おいおい、なんつー派手な登場だよ・・・デジモンでもあんなのなかなかいねーぞ・・・）

拓也は苦笑いをしながら、シグナムを見ていた。

「ユーノ君、クロノ君、拓也さん達・・・手え出さないでね。私あの子と一対一だから！」

ヴィータを見ながら、なのはが言う。

「どーやらリベンジに燃えているようである。」

なのは言葉を聞いたヴィータは、なのはを睨みつける。

「マジか……」

「マジだよ……!」

後ろではクロノとユーノが不安そうに呟く。

しかし、拓也は……

「ああ、解った。手も足も頭も出しはしねーよ……思う存分やっ
てきな!」

「はいっ!」

「アルフ。私も……彼女と……!」

シグナムを見つめながら、フェイトが言った。

「ああ……あたしも野郎に、ちよいと話がある。高雄も輝二も、
手は出さないでおくれよ!」

そう言いながら、アルフはザフィーラを睨む。

「まあ良いが……発情期でも迎えたのか?」

「「違うわっ!」」

アルフの言葉に、高雄が質問するが……

直後に帰って来たのは、アルフと輝二のWキックだった。

「……早くしねーと……!」

その頃、孝俊は……とあるビルの階段を駆け上がっていた。
そのビルの屋上に、拓也達がいるとは思ってもよらずに……

いよいよ戦闘開始!

続く

第36話 仲間が危機に陥ったら助けるのが普通な気がする 前編（後書き）

はい、第36話終了です。

次回は後編・・・遂に孝俊が拓也達と再会します。

まだまだ続く闇の書を巡る戦い・・・

どうやってこの局面を切り抜けるか・・・！

では、次回予告・・・輝二、お願いしまーす。

輝二「よし、じゃあ行くぞ

次回、リリカルなのはフロンティア第37話【仲間が危機に陥ったら助けるのが普通な気がする 中編】お楽しみに！」

第37話 仲間が危機に陥ったら助けるのが普通な気がする 中編(前書き)

はい、第37話です。

なんか書いてる内にどんどん話が長くなったので、次を後編にします(汗)

では、今回の名言コーナーです。

- 人生流れ星ツ ギラ~~~~ツと光って 散るだけよッ!!!!

(獅子川文 Mr・FULLSWING)

- 夢は心の中にある灯のようなもの 叶って強く思えば思うほど その炎は強くなる・・・

(子津忠之介 Mr・FULLSWING)

- 我が選んだ道に、悔いは無し!

(大野豊 広島東洋カープ)

- 好きな人を好きでいるために、その人から自由でいたいんだよ。
(諸星あたる うる星やつら)

- 自分以外に何も守るべき物がない孤独な人間に、本物の栄光は
掴めない

(茂野英毅 MAJOR)

今回は中編・・・主にバトルです。

輝二「第37話、始まるぞ！」

第37話 仲間が危機に陥ったら助けるのが普通な気がする 中編

カートリッジシステムを搭載した新デバイスを手に入れたのはとフェイト（ついでに孝昭）。

新デバイスを手に、再びヴォルケンリッターと激突する！

一方の孝俊は、ヴィータ達を脱出させるべくビルの屋上へと駆け上がる……

果たしてこれからどうなるか……!?

「強装型の捕獲結界……か。俺1人で破るのは流石に厳しいが……とにかく、戦況を見るしかねえか……」

階段を駆け上がりながら呟く孝俊。

結界を破って脱出させようにも、今回の結界は結構強固な物である為、いかに孝俊と言えど1人で破るのは難しい。

「ふう……やっと着い……!?!」

屋上に辿り着いたが、慌てて角に隠れる孝俊。

それもその筈……そこには拓也達がいたのだ。

「うっわー……マジかよ」

いずれは遭遇するだろうとは思っていたが、まさかこんな所で発見するとは思ってもいなかった孝俊。

しかし、幸い拓也達は孝俊に気付いていないようだった。

孝俊はとりあえず、角から顔半分だけ出して様子を見る事にした。

「しっかし・・・なのはちゃんとフェイト・・・デバイスが変わってるな。それに孝昭も・・・」

遠目になのはとフェイトを見る孝俊。

カートリッジシステムを搭載したレイジングハート・エクセリオン&バルディッシュ・アサルトが目に入る。

更に、バーニングブロス・ボルケーノも確認する。

「シグナム達から前の戦闘の事は聞いていたが・・・目には目を・・・か。こりゃあ厳しい戦いになるかもな・・・」

(ユーノ、それなら丁度良い。僕と君で手分けして、闇の書の主を探すんだ)

(闇の書の・・・?)

(連中は持っていない・・・恐らく、もう1人の仲間か、主かが何処かにいる。僕は結界の外を探す・・・君は中を)

(解った・・・)

また、1つ隣のビルではクロノとユーノ淫獣が、闇の書の主を探す為に念話で打ち合わせをしていた。

ちなみに、孝俊の姿は死角に入っていて見えなかったりする。

実は、孝俊がいる位置は図らずも殆どが死角になっており、非常に見つかりにくい場所だったりする。

【Master】

「？」

【『カートリッジロード』を命じて下さい】
「うん！」

レイジングハートから指示を出すように言われ、レイジングハートを掲げるなのは。

「レイジングハート、カートリッジロード！」

【Load cartridge】

【Sir】

「私もだね・・・バルディッシュ、カートリッジロード！」

【Load cartridge】

それぞれのデバイスからカートリッジをロードし、構えるのはとフェイト。

戦闘準備はOKのようだ。

「デバイスを強化しているな・・・気をつける、ヴィータ」
「言われなくても！」

そして・・・それぞれが一気にビルの上から飛び立った！

「なのはちゃん、頑張れよー！」

「フェイトー、しっかりやりんさいやー！」

「アルフ、油断するなよ！」

拓也、高雄、輝二がそれぞれを見送る。

命の危険が極限にまで迫らない限りは、あくまでこの戦闘には手

を出さないつもりである。

なのはvsヴィータside

上空を高速で飛びながら、ヴィータは後ろを向く。
後ろからは、なのはが同じくらいの速度で追いかけて来る。

「ふん、結局やんじゃねーかよ！」

「私が勝ったら、話を聞かせてもらうよ・・・いいね!？」

「やれるもんなら・・・やってみるよ!てめーなんか速攻でブツ倒して、あの怪力バカ(高雄)にリベンジしてやらあ！」

【シュワルベフリーゲン】

ヴィータは鉄球を4つ取り出す。

そして・・・グラーファイゼンで打ち出した。

【Accel Fin】

なのはは【アクセルフィン】で飛び上がり、素早く鉄球を避ける。
前の【フライヤーフィン】よりも移動速度が格段に上がっていた。

「アイゼン！」

【ラケーテンフォルム】

ヴィータがなのはに向かって飛び上がり、ラケーテンフォルムを
起動する。

前回の戦闘でなのはを戦闘不能に陥らせた【ラケーテンハンマー】を発動させ、突入した！

「でええええええええええええい！！」

「っ！」

【Protection powered】

なのはは咄嗟に【プロテクション・パワード】でヴィータの攻撃を迎撃する。

その強度は、前の物とはまるで比べ物にならない程・・・頑丈だった。

「くっ・・・固え・・・っ！」

「あ・・・ホントだ」

ヴィータの【ラケーテンハンマー】を受けてもなおビクともしない強度・・・

レイジングハートは、想像以上のパワーアップを果たしていた。

【Barrier Burst】

レイジングハートがそう発した瞬間、バリアが爆発してヴィータを吹っ飛ばした。

「うわあああっ！」

【『アクセルシューター』を撃つて下さい】

「うん・・・アクセルシューター！」

【Acceler shooter】

「シューター！！！」

なのははレイジングハートの言う通りに『アクセルシューター』を放つ。

そこから、一度に12発の魔力弾が勢いよく飛び出した！

「っ！？」

「ああっ！？」

その光景に、ヴィータは勿論の事、撃った本人であるなのはも驚いた。

【コントロールをお願いします】

レイジングハートがそう発すると、なのはは目を閉じて魔力弾の制御に集中する。

「アホか！こんな大量の弾、全部制御できる訳が！」

ヴィータはそう吐き捨てると、鉄球を4つ操作してなのはに向かわせる。

【出来ます。私のマスターなら】
「なっ！？」

すると、ヴィータの周りを飛び回っていたアクセルシューターが4つ、なのはの元に戻って行く。

そして、正確に鉄球を上から撃ち抜いた！

なのはの魔法弾の制御技術に驚愕するヴィータ。

「約束だよ！私達が勝ったら、事情を聞かせてもらおうって！」

なのははそう叫ぶと、右手を掲げる。

「アクセル・・・シュート!!」

次の瞬間、ヴィータの周りを飛んでいた魔力弾が一斉にヴィータに向かう。

それを見たヴィータはバリアを張って自分の周りを防御する。

「つく・・・このお・・・っ!」

だが・・・徐々にバリアにヒビが入って行き、ヴィータは顔をしかめるのだった。

シグナム vs フェイト side

一方、シグナムとフェイトは、ビルの間を高速で飛び回り、幾度も交錯していた。

「はああああああああああっ!」「」

レヴァンティンとバルディッシュが激しくぶつかり合い、火花を散らす。

そして、一旦距離を取る2人。

【Plasma lancer】

「プラズマランサー・・・ファイア!!」

フェイトが電気を纏った槍型の魔力弾、『プラズマランサー』を8発放った。

『フォトンランサー』の発展型であり、威力は桁違いに上がっている。

「はあああつ!!」

シグナムは炎を纏った状態のレヴァンティンを一閃し、プラズマランサーを弾き飛ばす。

「ターン！」

だが、魔力弾は方向を変え、再びシグナムに向かっていく。

それを見たシグナムは、今度は上空に飛び上がる。

それでも、魔力弾は再びシグナムを追って上空へと向かって行った。

「レヴァンティン！」

シグナムは、レヴァンティンからカートリッジをロードする。

【Blitz rush】

バルディッシュがそう発すると、魔力弾がより一層スピードを増し、シグナムに襲い掛かる。

「でえええええいつ！」

シグナムはレヴァンティンの炎を飛ばして、プラズマランサーに

ぶつけて相殺した。

デバイスの性能の差が無くなった今、2人の差は殆ど無かった。

【H a k e n F o r m】

フェイトはカートリッジを1発ロードし、『ハーケンフォーム』を発動させる。

前の『サイズフォーム』に相当するが、姿勢制御を行うフィンブレードを3枚増やしてフェイトの体感重量をより軽くすることで、かなり使いやすくなっている。

【S c h l a n g e f o r m】

レヴァンティンも、連結刃形態のシユランゲフォルムになる。

そして・・・2人が激突し、爆発が起きる。

距離を取る2人だが、フェイトの左腕には2か所の切傷が、シグナムの胸元にも1つの切傷が残っていた。

「強いな・・・テストロツサ。それに、バルディツシュ」

【T h a n k y o u】

フェイトとバルディツシュを称えるシグナム。

バルディツシュは、一言礼を言う。

「あなたと・・・レヴァンティンも・・・シグナム」

【d a n k e】

フェイトもまた、シグナムと同じく相手を称える。

レヴァンティンもまた、ドイツ語で礼を言う。

「この身に成さねばならぬ事が無ければ、心躍る戦いだつた筈だが・
・仲間達と我が主の為、今はそうも言ってもらえん」

シグナムはそう言って、一度レヴァンティンを鞘に収める。
フェイトは、バルディッシュを構えてシグナムを見ている。

「・・・殺さずに済みます自信は無い」

足元に魔法陣を展開し、抜刀の構えをとるシグナム。

「この身の未熟を・・・許してくれるか！」

「構いません・・・勝つのは、私ですから」

互いにデバイスを構えて向かい合う2人。

だが、そこに孝俊からの念話がシグナムに入る。

(シグナム・・・戦闘中にすまない)

(孝俊か・・・どうした?)

(ビルの屋上に着いたは良いが・・・あろう事か拓也達のいるビル
に来ちまってな・・・まだ見つかつてはいないんだが)

(そうか・・・いくらお前でも、拓也達3人を相手にするのは無茶
が過ぎるだろう)

(とにかく、打開策を考えるから・・・しばらく粘っててくれ！)

(心配はいらん。私は負けんよ)

(確かに、シグナム・・・お前は強い。だが、フェイトには半年前

に俺の剣術を仕込んであるんだよ・・・)

(何!?)

そう、孝俊は前にフェイトに自分の剣術を仕込んでいた。

更に、フェイトは孝俊の『閃光斬』をモデルとした、『雷光斬』を会得している。

あれから半年、訓練を怠る事が無かったフェイト・・・剣術の腕前は、かなり上がっている。

(フェイトは筋が良かった。デバイスの差が無くなった今、下手に打ち合おうと、いかにお前でもタダでは済まんぞ・・・)

(道理で太刀筋に覚えがあった訳だ・・・忠告感謝するぞ)

シグナムと孝俊は、前に剣術で模擬戦をしている(番外編その3参照)。

その為、シグナムは孝俊の教え子であるフェイトの太刀筋に覚えがあったのだ。

孝俊との念話を打ち切り、再び構えるシグナムだった・・・

見学者 side

「・・・すげーなおい。半年前とは比べ物にならねーぞ」

「何より、デバイスの性能が跳ね上がってるからな・・・この間の様にはいかないだろう」

拓也と孝昭は、上空で戦っているのは達を見ている。

孝昭はもしもの時に備えて待機しているのだ。

・・・と言うか、余ってしまっただけだったりするのだが（笑）。

「流石は高雄クオリティだな・・・しかし、何か隠し要素とかは無
いのか？」

「んー・・・急ごしらえだったからの・・・まあ、このバトルが終
わったら調整がてらやってみるわい」

輝二と高雄も、戦況を見守っている。

高雄によつて生まれ変わったデバイス達・・・明らかに前の物よ
りも性能は飛躍的にアップしている。

「・・・ん？」

「どつした拓也？」

拓也が何やら気配を感じて後ろをチラリと見る。

それを見た輝二が、拓也に尋ねる。

「いや、あれ・・・」

拓也が目線で促すと・・・そこには屋上の入り口の角から顔半分
だけ出してる孝俊がいた。

「・・・何やってんだあいつは？」

「【家 婦は見た】みたいな感じだなオイ」

輝二と高雄が孝俊に気付き、苦笑しながら言う。

なんか某ドラマみたいな感じだったので、少し笑えたらしい。

「よし、あいつに悟られないようにゆっくり移動するぞ」

「「「OK」」」

ザフィーラ vs アルフ side

周辺のガラスやら何やらを破壊しながら激闘を繰り広げるザフィーラとアルフ。

「はあああああああっ！」

「ぬっ、ぐうおおおっ！」

渾身の一撃を放つアルフ。

ザフィーラは腕をクロスしてガードし、耐えている。

「デカブツ、アンタは誰かの使い魔か!？」

「ベルカでは、騎士に使える獣を使い魔とは呼ばぬ！」

「!？」

「主の牙、そして盾、守護獣だああああ!!！」

「おんなじような、もんじゃんかよおおお!!！」

2人の間で大爆発が起こり、爆炎が巻き起こる。

ザフィーラは飛び上がって、遙か後方に着地する。

そして……一旦上を見上げると、空中戦を繰り広げているヴィータとなのはが見えた。

(状況は……あまり良くないな……シグナムやヴィータが負けるとは思わんが、ここは引くべきだ。シャマル、なんとか出来るか?)

(なんとかしたいけど、局員が外から結界を維持してるの……私の魔力じゃ破れない……)

シャマルに念話を送るザフィーラ。

シャマルは、はやてを雄人に任せて戦場に駆け付けたのだ。

だが、攻撃手段を殆ど持たないシャマルでは、維持された結界は破れないのである。

(シグナムのファルケンか、ヴィータのギガント級の魔力を出せなきゃ……)

(二人とも手が離せない。止むを得ん、アレを使うしか……)
(解ってるけど、でも……!)

その時、シャマルは背後に気配を感じた。

「搜索しているロストログアの所持、使用の疑いで貴女を逮捕します」

シャマルの背後には……杖を突き付けているクロノがいたのだ。
った。

「おいおいおいおいおい……こりゃヤバいってえ……」

その頃、孝俊はどうするべきか頭を抱えていた。

と、そこに……

「……何やってんだ？こんな所で……」

「うを！？た、拓也！？」

孝俊の後ろには・・・拓也、高雄、輝二、孝昭が立っていた。
拓也達を見て、驚愕する孝俊・・・

「いや、そんなに驚かんでも」

驚いている孝俊を見て、苦笑いする孝昭。

「大方、闇の書の守護騎士達を助けに来たってところだろ？」

「・・・流石にお見通しか」

拓也の質問に、溜息をついて呟く孝俊。

そして、一呼吸置いて話し始める。

「この際だから話しておく。俺は今、闇の書の主の元で世話になっている」

「ああ・・・てゆーか、俺はもう闇の書の主と会ってるんだぜ？」

「・・・え？」

孝俊は、現在の自分の状況を話す。

だが、既に闇の書の主と会っていると云う拓也の言葉を聞き、驚いてしまう。

「今日の夕方に、主を連れしたシグナムと偶然出会ってな・・・闇の書の主は、なのはちゃんとそう変わらない小さな子だ」

「拓也の言う通りだ。しかも、闇の書の主・・・はやてちゃんって言うんだが、こっやってシグナム達が戦ってる事すら知らんだ」
「・・・マジかい」

拓也の言葉に間違いは無いので、同意して頷く孝俊。
高雄が、目を丸くして呟く。

「しかも、他に闇の書を狙ってる奴がいるらしくて……ここまで
何体かデジモンがはやてちゃんを襲撃に来ているんだ」

「そうか……って待って待って！今ここに守護騎士全員とお前がおる
んじゃないあ、その主のはやてちゃんが完全フリーじゃないんか!？」

孝俊から謎のデジモン達の襲撃を聞く拓也達。

それを聞いた高雄が孝俊にツッコむ。

高雄がツッコむなんてかなり珍しいのだが（笑）

「心配いらん。雄人がこつちに来てくれてて、今はあいつがはやて
ちゃんの護衛をしているんだ」

「おお、雄人が……ならば大丈夫だな」

雄人の存在を知り、安心する輝一。

安定した実力を持つ雄人ならば大丈夫だと思っているのである、

「……あと、今日ははやてちゃんの友達が夕飯を食べに来るらし
くて……皆揃わないとはやてちゃんが心配する……」

孝俊も、はやてから聞いていた。

もつとも、その友達がすずかだとはまだ知らないのだが……

「……なるほど、ここでシグナム達がつつまる訳にはいかねえ
って訳だな」

「……そう言う事だ」

・・・と、孝俊が言い終わった辺りで、打撃音が響いた。

向こうのビルを見ると、何者かがクロノを蹴り飛ばしていたのだ！

「な、なんだアイツは!？」

「あれも守護騎士か!？」

「いや、あんなのはいねえ・・・!」

クロノを蹴り飛ばした人物・・・仮面を付けた長身の男を見て驚く拓也と孝昭。

孝俊も、見覚えの無い人物に驚く。

更に・・・今度は結界の中の空間が歪む。

するとその中から・・・数匹のデジモンが飛び出してきた！

デスメラモン 完全体 火炎型 データ種

必殺技 ヘヴィメタルファイアー（体内で重金属を溶かし、吹きつける）

得意技 ヒートチエーン（燃える鎖で攻撃する）

青い炎に身を包んだ火炎型デジモン。メラモンが規則的進化した姿。メラモンより炎の力がパワーアップして、色が赤から青に変化した。

その力は、触れるだけで金属も溶かしてしまう。バトルでは、溶かした金属を放って攻撃する。攻撃力も防御力もアップし、目を見張るほどの破壊力を身につけている。

ムシャモン 成熟期 魔人型 ウィルス種

必殺技 斬り捨て御免（妖刀「白鳥丸」で相手を真つ二つにする）
得意技 白鳥丸：（妖刀「白鳥丸」で斬りつける）

海外のゲームソフト“サムライマスター”のデータにウィルスが感染したデジモン。

幾多の戦いの中を生き延びた武者のような姿をしている。
愛刀“白鳥丸”は敵の生命力を奪う呪文が刻まれており、1000匹斬るたびに切れ味が良くなる。
いつかレオモンと勝負することを望んでいるらしい。

サイクロモン 成熟期 竜人型 ウィルス種

必殺技 ハイパーヒート（口からあらゆるものを溶かす高熱の光線を発射）
得意技 ストレンジスアーム（ゴムのように伸び縮みする腕を使い攻撃する）

異常に発達した右腕を持つ、ひとつ目の竜人型デジモン。
元は強く勇敢な戦士だったが、レオモンに右目を潰されてからは戦

士としての誇りを失い、復讐しか考えられなくなってしまった。右腕を巨大化させ、レオモンを倒す機会を狙っている。

スコピオモン 完全体 昆虫型 ウィルス種

必殺技 ポイズンピアス（尻尾の先の鋭い毒針で刺す）
得意技 ブラックアウト（毒霧を撒き、相手の視覚プログラムを破壊する）

別名“砂漠の暗殺者”と呼ばれる昆虫型デジモン。
気配を悟られる事なくそつと近付き、尻尾の先の猛毒の針を突き刺す。

この猛毒は神経データの伝達スピードよりも早いために、何をされたかわからない内に敵は力尽きてしまう。

822

「おーおー、噂をすればなんとやら、か・・・」

「なんか色々めんどくさくなってきたなあ・・・」

「またしても闇の書を狙って現れたデジモン達・・・
それを見た拓也達は・・・D・スキャナを構えた！」

「孝俊、お前は隠れてた方が良い。管理局に見つかったら厄介だろ」
「あ、ああ・・・」

「孝俊に隠れるように促し、上空を見上げる拓也。

そして・・・！

「『スピリットエボリューション!!』」

左手の周りに複数のデジコードが現れ、それをスキャンする拓也と輝二。

ビーストスピリットへの進化である。

ちなみに、高雄は1本・・・ヒューマンスピリットで行くようだ。

「ヴリトラモン！」

拓也は、紅蓮の装甲を纏った魔竜型デジモンのヴリトラモンに進化する。

「グレンモン！」

高雄は、ブロスモンの色違いみたいなデジモン、グレンモンに進化する。

「ガルムモン！」

そして、輝二は・・・四足歩行の狼を模したサイボーグ型デジモン・・・ガルムモンとなった!

ガルムモン ハイブリッド体 サイボーグ型 バリアブル種

必殺技 スピードスター（超光速で敵に突っ込んで「ウイングブレード」で敵を真っ二つにする）

ソーラーレーザー（太陽光線を集め、口から発射する）

得意技 クリング・ヴィントラート（体を回転させながら、全身の刃で切り刻む）

リヒト・トルペード（光に包まれながら敵に突撃する）

伝説の十闘士“エンシェントガルムモン”の力を受け継いだ、光の属性を持つ獣型デジモン。

光ケープル内に生息し、超光速で移動ができる。一度忠誠を誓った者に対しては絶対に裏切らない。

背中には「ウイングブレード」を装備している。

「っしや、俺達も行くぜ、バーニングブロス！」

【がってん！】

孝昭も、ヴリトラモン、グレンモン、ガルムモンと共にデスメラモン達相手に立ち向かう事に。

丁度4対4・・・数も合う。

「・・・げっ！またデジモンかよ!？」

なのはと戦闘しながら、ヴィータはデスメラモン達の方を見る。

デジモンが厄介なのは身を持って体験している為、少々げんなりしていた。

「……くっ、これでは撤退は難しい……！」

ザファイラも、空中でデスメラモン達を確認する。

シグナムとシャマルもまた、同じく相手を確認した。

ちなみにクロノは……少し離れた場所で仮面の男と対峙し、睨み合いの状態を続けていた……

「どうすればいい……どうすれば……！」

孝俊は……まだ悩んでいた。

夕飯まで時間が無い……孝俊達は無事に脱出できるのか!?

続く

第37話 仲間が危機に陥ったら助けるのが普通な気がする 中編（後書き）

はい、第37話終了です。

やっとこさ仮面野郎登場です。あんまり絡んでませんが（汗）。

孝俊「つーか、どうやって脱出すべきだろうか・・・」

ま、そこんところは俺の気分次第で（何）

孝俊「気分で変えるんじゃないやねえ！（蹴り）」

ぐふあっ!？

高雄「さて、次回予告だが・・・マリーちゃん、頼むわ」

マリエル「え、わ、私ですか!？は、はい・・・/」

次回、リリカルなのはフロンティア第38話【仲間が危機に陥ったら助けるのが普通な気がする 後編】お楽しみに!」

高雄「顔赤いが大丈夫か?」

マリエル「だ、だ、大丈夫です!い、いたって正常です/」

拓也「鈍い奴・・・（汗）」

輝二「（人の事言えんだろ・・・）」

第38話 仲間が危機に陥ったら助けるのが普通な気がする 後編(前書き)

第38話です。

今回、結界をぶち破ります。

では、名言コーナーを・・・

・限界はあるものではなく、自分で決めるものでしょ

(緋村剣心 るろうに剣心)

・一度見た技を二度喰らうのは三流のやる事だろ??

(相楽左之助 るろうに剣心)

・卑怯よりいい人の方がいいじゃん。素直じゃないより素直の方がいいじゃん。

(さくらももこ ちびまる子ちゃん)

・人の物を盗む奴は、もっと大事な物を無くす

(天道総司 仮面ライダーカブト)

孝俊「天道は多いな・・・」

拓也「だな・・・」

マリエル「では、第38話・・・始まります！」

第38話 仲間が危機に陥ったら助けるのが普通な気がする 後編

拓也達と遭遇した孝俊。

既に拓也にも事情が伝わっていた為、高雄・輝二・孝昭にも真実を話す。

だが、そこに再び闇の書を狙ってデジモンが乱入。孝俊を除いた4人がデジモンを迎え撃つ！

ROUND 1

ヴリトラモン

拓也 vs デスメラモン

「行くぞおおおおっ！」

翼を広げて上空へ飛び上がるヴリトラモン。

「ヌウウ……【ヒートチェーン】！」

「はっ……と！……行くぜ！」

炎を纏った鎖を飛ばすデスメラモン。

だが、ヴリトラモンは鎖の周りを旋回しながらデスメラモンに突入していく。

そして、両腕の【ルードリー・タルパナ】を前方に突き出して盾のように構えた。

「くらえっ！【クリムゾンフィンガー】！！！」

ドガアンツ！と、重い打撃音が響くと、デスメラモンの巨体が浮かび上がり、吹っ飛んでいた。

流石はヴリトラモン……例え重量級でも、完全体相手に後れは

取らない。

「ウ……グオ……」

ヨロヨロと立ち上がるデスメラモン。

ヴリトラモンは仁王立ちで、デスメラモンを睨みつけている。

「さあ、かかって来な……てめえらの好き勝手にはさせねえぞ！」

腰を落とし、体勢を低くして構えるヴリトラモン。

長い戦闘経験で培った心・技・体の3つの要素……拓也にはそれがバランス良く備わっていた。

孝俊ですら、拓也にはなかなか勝てないのも頷ける。

戦況は……ヴリトラモンが明らかに優勢だった。

「た、拓也さん……やっぱり強い……！」

なのはは、遠目にヴリトラモンvsデスメラモンのバトルを見ていた。

半年経っても変わらない……いや、更にパワーアップしたとも取れる拓也の実力……

なのはにとって、拓也は本当に心強い存在である。

ROUND 2

孝昭vsムシャモン

「拙者の名はムシャモン・・・我らが首領が欲する闇の書・・・その入手を邪魔する輩は・・・斬り捨てるまで！」

「悪いな・・・こっちもこっちで訳有りなんでな・・・！」

【ご主人、行くぜ！カリバーフォームだ！】

愛刀・【白鳥丸】を構えるムシャモン。

孝昭もバーニングブロスを構えて迎え撃つ態勢に入る。

そして、バーニングブロスは剣型の【カリバーフォーム】（以後・Cフォーム）へと変形する。

だが・・・その刀身は、常に炎が纏っている状態だった。

「す・・・すげえ・・・燃えてやがる・・・・・・悪くねエな」

孝昭は一瞬、燃えている刀身に驚くが、薄く笑って剣を構える。

「ふん、そのようなコケオドシに拙者が怯むものか！」

「なら・・・コケオドシかどうか・・・その身で感じやがれ！」

孝昭がその場から飛び出す。

そのスピードは・・・前の【ブーストフォーム】に匹敵する程のスピードだった！

「ぬおっ！？は、速・・・！」

「でえいりゃああああああっ！！！」

孝昭は、力任せにバーニングブロス・Cフォームを振り抜く。
すると・・・そこから巨大な炎の衝撃波が飛び出した！

「ぬおおおっ！！！？」

咄嗟に横に飛び、辛うじて炎の衝撃波をかわすムシャモン。
炎の衝撃波はそのまま飛んでいき・・・前方のビルの上部を、縦
に真っ二つに斬り裂いてしまった！

「な、なんという・・・」

「・・・うわぁーお・・・」

【や、やり過ぎたかな、ご主人・・・】

その光景に、標的にされたムシャモンは勿論、撃ち出した本人&
バーニングブロスですら啞然としていた。

まさか、あそこまでの威力があるうとは思わなかったのだ。

「げっ・・・あ、あいつ・・・あんなバカ魔力持ってやがったのか
よ・・・！」

少し離れた場所では、ヴィータが飛びながら斬られたビルを見て
いた。

前に会った時は、すぐに撃墜出来たから大した事は無いと思って
いたが・・・

ところがどっこい、あんなとんでもない物を撃ち出したのだから、
そりゃあ驚く。

「ぐぬぬ・・・！」

「さーて・・・まだまだここからだぜ！」

ムシャモンを相手に、孝昭は気を取り直してデバイスを構える。

ムシャモンは、孝昭の技の威力に驚きを隠せないでいたのだった。

・
・

ROUND 3
グレンモン
高雄 vs サイクロモン

「そおりやあつ！」
「グブウツ!？」

その頃、高雄はサイクロモンを持ち前のパワーで圧倒していた。ちなみに、思い切りやる為地上に降りてきている。発達した右腕のパワーは結構強いサイクロモンだが、グレンモンの前には並のパワータイプでしかない。

「行くぜえっ!・・・【スージーQ】！」
「グアアアツ!？」

いきなり必殺の右フックを放つグレンモン。サイクロモンは体を捻ってかわそうとする。しかし直撃こそ避けたものの、胸部を掠めてしまっていた。そして、その掠めた胸部は・・・真つ赤に焼き斬れたような跡が残っていた・・・

「グ・・・ガア・・・」

膝をついて苦しんでいるサイクロモン。

スージーQはその破壊力もさる事ながら、拳に纏った熱は3000にも達する。

完全に避け切らない限り、ダメージは逃れられないのだ。

あの時、ヴィータも障壁を張っていなければ、火傷も負っていただろう。

「時間はかけてられねえ・・・早い内に決めるぜ！」

グレンモンはその場で態勢を低くして構える。

すると、右足にエネルギーが集束されていき・・・赤く燃え上がった！

「はあああ・・・・・・とおああっ！」

その場から2、3歩踏みだして、そこから一気にジャンプする。

「【ボルケーノクラッシュ】！！」

地上から飛び上がり、なんとビルの屋上をも飛び越すような大ジャンプを敢行する。

そして、真っ赤に燃え上がる炎の飛び蹴りを繰り出した！

「どおりゃあああああああああああああああああああああ
あ！・・・！」

ドオゴオオオツ！と、爆音と間違えるかのような轟音が鳴り響いた。

そして、それをまともに喰らったサイクロモンは、ボールのように地面を勢い良くバウンドしながら、数十M程吹っ飛ばされた。

そこからゆらりと立ち上がるうとするが・・・そのまま粒子となって消滅したのだった。

「さて・・・孝俊の所に戻るか・・・事情も解った事じゃし、今回は守護騎士達を逃がしてやらにゃあの・・・」

そう言つて進化を解いて呟く高雄・・・

と、そこに・・・フェイトの制御下を外れた【プラズマランサー】が1本、後方から高雄目掛けて飛来し・・・

ドズツ！

「でえー——————」

「——————お！！？」

高雄のケツに突き刺さつたのだった。

モロに喰らつて飛び跳ねる高雄・・・だが、誰も気付いていなかったりする。

勿論、今のは事故だ。フェイトは、未だにシグナムと激戦を繰り広げている最中である。

「け、ケツが3つに割れるかと思つた・・・」

尻をさすりながら、孝俊がいるビルの上へと戻つて行く高雄。

高雄の尻には・・・未だに【プラズマランサー】が消滅せずに突き刺さつたままだった・・・

グレンモン

高雄VSサイクロモン 高雄WIN！

ROUND 4
ガルムモン
輝二vsスコピオモン

「でえいつ!」

「ギャウツ!!」

ガルムモンが超高速で突っ込み、スコピオモンに体当たりをお見舞いする。

スピードに乗った突進は、かなりの威力を誇るのだ。

「グウウ・・・」

スコピオモンが立ち上がり、唸り声を上げると・・・煙の様な物を吹き出した。

だが、得意技の【ブラックアウト】とは違い、ただの攪乱用の煙の様だ。

現に、ガルムモンは煙の真っ只中にいるが、何ともない。

「・・・視覚を遮って俺を襲撃するつもりだな・・・」

そう言つと、ガルムモンはそつと目を閉じる。

(こつ言つ時は視覚に頼るな・・・聴覚、嗅覚など・・・視覚以外の全ての感覚で敵の気配を感じ取る・・・!)

そして、数秒の静寂が流れる・・・

と、次の瞬間・・・ガルムモンは斜め後ろを振り向く。

そして・・・背中ウイングブレードを展開し、体を回転させながら突入した！

「そこだっ！【クリンゲ・ヴィントラート】！！」

ズバツ！ドシュウツ！ビシツ！シュパパツ！ズドツ！・・・と、ウイングブレードで滅多斬りにするガルムモン。

「グ・・・ギヤアアア・・・！！!?」

煙が晴れ、そこには全身を切り刻まれてダメージを負ったスコピオモンがいた！

ガルムモンは少し距離を取り、スコピオモンを見据える。

「・・・どうして解ったのか、と言った顔をしているな・・・」

「ググ・・・」

ガルムモンは一呼吸おいて、続ける。

「お前自身は姿も気配も消したつもりだったろうが・・・殺気が丸出した。それに、小さいが足音もした・・・地に足を付けている以上、足音は消せん」

「グウウ・・・!!」

ガルムモン
輝二の言う事はもっともだった為、悔しそうな表情を浮かべるスコピオモン。

輝二とて、拓也と共に長きに渡って戦い続けた歴戦の戦士だ。

ただ戦っただけではない。様々な経験を積み、戦場における多種多様な感覚を研ぎ澄ましていた。

「……時間をかけてはいられん……これで決める！」

ガルムモンがウイングブレードを左右に展開し、その場から凄まじいスピードで動き出した！

「うおおおおおっ！！……【スピードスター】！！！」

ザンツ！と、綺麗な斬撃音が響く。

それと同時に……スコピオモンが真っ二つに斬り裂かれ、消滅した！

「……よし、とりあえず元の場所に戻るか」

スコピオモンが消滅するのを見届けるガルムモン。

そして、ビルからビルへと飛びながら元の場所へと移動していくのだった……

ガルムモン
輝二vsスコピオモン 輝二WIN！

「……早くしないと……！」

その頃、シャマルは焦りながら状況を見ていた。

すると、そこに再び仮面の男が現れる。

ちなみに……クロノは、後から出現して来たイビルモンの群れ

と戦っていたりする。

「使え」

「えっ……?」

「闇の書を使って結界を破壊しろ」

「でも、アレは……!」

シヤマルは闇の書を使う事を戸惑う。

折角集めたページを減らす事になるのだ。そりゃあ迷うだろう……

「使用して減った頁はまた増やせばいい。仲間がやられてからでは遅かるう?」

（……仕方ないわ……。ここで全員捕まってしまうよりは……!）

シヤマルは少し考えた。

もはや、突破口はこれ以外に無いとみて、闇の書のページを使う事にしたのだ。

【みんな、闇の書で結界を破壊するわ!うまくかわして撤退を!】

念話でシグナム達に伝えるシヤマル。

そして、それを聞いた孝俊は……

（……まずい、そんな事したら……。完成が遅れちまう……。ええい、やむをえん!）

そう考えると、すぐにシヤマルに念話を送った。

【シャマル！闇の書のページは使わない！今から俺が進化してこの結界をぶち破る！】

【ええ！？で、でも孝俊さん・・・そんな事したら管理局に見つかってしまっくんじゃ・・・！】

【今はそんな事言ってる場合じゃねえ！そんな事、後からどうとでもならあ！】

【・・・わ、解ったわ・・・じゃあ、お願いします・・・！】

シャマルとの念話を切ると、孝俊はD・スキャナを取り出す。と、そこに・・・高雄と輝二が戻って来た。

「孝俊・・・やる気か？」

「・・・止めても無駄だぞ・・・ってか、どうした？その尻・・・」
「・・・聞かないでくれ・・・」

結界を破壊しようとする孝俊に尋ねる高雄。

孝俊は、未だにプラズマランサーが突き刺さっている高雄の尻を見て、高雄に尋ねるが・・・

高雄は沈んだ表情で返すのだった。もう痛みや痺れには慣れてしまったらしい。

「止めねーよ。むしろ協力させやがれってんだ」

「その通りだ。俺達は仲間だろう?」

そして、立ち直った高雄から帰ってきた言葉は協力する、との事。輝二も、当然と言わんばかりに高雄に同意する。

ズズウン!

「グアアアアツ!!」

ふと、孝俊達がいる屋上にデスメラモンが降って来た。どうやら、グリトラモンに吹っ飛ばされたらしい。

「やるんなら俺も協力するぜ!」

孝俊の元に、グリトラモンが降り立つ。

更に・・・

「勿論、俺もな!」

丁度、ムシャモンを片づけたらしく、孝昭が戻って来る。

孝昭が先程までいた場所では、ボロボロになったムシャモンがゆっくりと消滅していた。

「お前ら・・・良いのか・・・?」

「構わねーよ。それに、はやてちゃんと約束してるんだろ?約束は守ってやれ」

困った様な表情で拓也グリトラモンに尋ねる孝俊。

ヴリトラモンはサラリと言い放ち、協力の姿勢を崩さない。

「よし、まずはあのデスメラモンを上空に打ち上げるんだ。そして俺達の砲撃技でデスメラモンを貫き、結界を破る」

孝昭は、咄嗟に思いついた方法を提案する。

まあ、早い話が合体砲撃ぶっ放して、力づくで結界をぶち破るってことである。

結界を破った事について後からクロノ辺りに言われても、デスメラモンを倒す為に放った技が強すぎた・・・と理由を付けられるおまけ付きだ。

「よっしゃ、なら俺に任せろ！」

高雄は再びグレンモンに進化する。

そして、倒れているデスメラモンを上空高くぶん投げた！

「おるああああああ！！！！」

グレンモンの馬鹿力の前には、デスメラモンの巨体も大した重さにはならない。

デスメラモンは、結界の高さスレスレにまで投げられていた。

「スピリットエボリューション！・・・グリーンドラモン！！」

高雄がデスメラモンを投げた瞬間、孝俊はグリーンドラモンへと進化した。

ちなみに、極力目立たないように最小サイズの2Mでの登場であ

る。

おまけに、アースラ側は仮面の男+デジモンの出現でてんやわんやになっており、孝俊に気付いていなかった。

「行くぜ！【コロナブラスター】！！！」

ヴリトラモンは、両腕のルードリー・タルパナからレーザーを发射する。

修業を積み重ねてきた事もあり、半年前よりも更に出力が増していた。

「【ソーラーレーザー】！！！」

ガラムモンは、口に光を集め・・・そこから強烈なレーザー砲を撃ち出す。

その威力は、【コロナブラスター】と同等である。

「燃え上がれ・・・【ファイヤーカノン】！！！」

グレンモンは、腹部のメインキャノン砲から真っ赤に光る極大のレーザーを発射する。

この【ファイヤーカノン】は、グレンモン最大の必殺技でもある。威力は、【プロスバーストブレイカー】を僅かに凌ぐ。

「くらえ！強化された・・・【ネオ・デイベインブラスター】だあ

ああ！！！」

孝昭は、バーニングブロスをバスターフォームに変え、前よりも格段にパワーアップした砲撃を放つ。

その威力、攻撃範囲共に前の物とは比べ物にならない。

「行けえエエエ！！【ドラゴンカノン】！！」

グリーンドラモンは、ありったけのエネルギーを込めて、必殺砲ドラゴンカを放つ。

グリトラモンと同様に、半年前と比べて威力が上がっていた。

5つの砲撃が1か所に集中し、デスメラモンを飲みこんであつさりと消滅させる。

そして・・・砲撃はそのままの勢いで結界に衝突し、一気にぶち抜いた！

ぶち抜かれた穴からヒビが広がり・・・結界が粉々に砕ける。それを見て、シグナム達が撤退を始めた。

「すまん、テストロッサ。この勝負預ける」
「シグナム！」

シグナムはフェイトから離れた。
ふと、違うビルの上にいる拓也達を見る。

拓也はシグナムに気付いて振り向き・・・

(・・・早く行きな)

(・・・すまない)

微笑を浮かべて、シグナムに早く脱出するように促した。
シグナムは拓也に軽く頭を下げ、すぐに飛んで行った。

「ヴォルケンリッター『鉄槌の騎士』ヴィータ。あんたの名は？」
「なのは。高町なのは」

互いに名を名乗るヴィータとなのは。

「高町なぬ・・・・・・・・・・な・・・・ええーい、呼びにくい!」
「逆切れ!？」

「ともあれ勝負は預けた。次は殺すからな! ぜってーだ!」
そう言い残して、ヴィータは飛んで行き・・・・離脱した。

「あ、えつと・・・・ヴィータちゃん!？」

「・・・・私も離脱させてもらう。勝負は預けたぞ」

ザフィーラも、結界が破壊された事を確認してアルフから離れる。

「え、ちよっ・・・・!」

「今日は我が友と茶を飲む約束をしているのでな」

アルフは軽く慌ててザフィーラを見る。

ザフィーラは約束があると言い残し、全速力で飛んで行った。
どーやら、またも孝俊と深夜に茶をしばく予定らしい。

「・・・じゃあ、俺ももう行くぜ」

「ああ。こっちの事は任せな」

孝俊はそう言って、拓也達に背を向ける。

拓也は、孝俊を静かに見送り・・・周りに同員がいないかどうか警戒していた。

孝俊はグリーンドラモンの状態で屋上から飛び降り、地上に着地してから進化を解く。

そして・・・すたこらと走って行くのだった。

「あ・・・孝俊・・・!？」

そんな孝俊を遠目からフェイトを見つけ、追いかけてようとしますが・・・
孝俊は建物の中に入り込み、すぐに姿が見えなくなってしまった。

「・・・孝俊・・・」

フェイトは・・・暫く呆然として、空中に佇んでいた。

「なのはちゃん、大丈夫か？」

「う、うん・・・平気だよ」

「ったく、デジモンを片付けたのは良いけど結界が破れちまったよ・

・

・

「悪い悪い、威力が強過ぎちまった」

拓也はなのはを気遣い、声をかける。

アルフは結界が破れてしまった事にぶつくさ言っていたが、高雄は苦笑いしながら答えるしかなかった。

ちなみに・・・アースラでは何者かによってジャミングされてサーチャーとリーダーがイカれてしまい、艦内から孝俊の姿を確認した者は誰もいなかった。

そして、仮面の男もいつの間にか消えていた。

クロノは、どうにかイビルモンの群れを撃退したが・・・少しばかり遅かったようだった。

(シグナム達も孝俊も・・・約束に間に合えばいいんだがな・・・)

拓也は、シグナム達が飛んで行った方向を見つめていたのだった。

闇の書の小さな主との、大事な約束が果たされる事を願いながら・

・

続く

第38話 仲間が危機に陥ったら助けるのが普通な気がする (後編(後書き))

はい、第38話終了です。

デジモンにはデジモンで・・・拓也達再び大暴れです。

そして、折角デバイスを強化した訳ですし、孝昭も出陣しました。

孝昭「バーニングブロス・・・生まれ変わってすげえ事に(汗)」

孝俊「早く帰らねーと・・・間に合うかな・・・」

はてさて、シグナム達と孝俊は間に合うのか・・・

では、次回予告・・・久々にユーノ君、どうぞ」

ユーノ「ホントに久々だ・・・じゃ、行きます

次回、リリカルなのはフロンティア第39話【思わぬ所で思わぬ人に再会する事がある気がする】お楽しみに！」

第39話 思わぬ所で思わぬ人に再会する事がある気がする(前書き)

はい、第39話です。

今回・・・フラグ立ちます(何)

では、名言コーナーへ・・・

- 行くも戻るも地獄なら、前のめりに倒れるさ

(両津勘吉 こちら葛飾区亀有公園前派出所)

- 始まりはみんな同じだった なのに・・・随分と遠く離れてしまったものだな・・・

(桂小太郎 銀魂)

- でも俺だって仲間が傷つくのを黙って見てられない・・・だってそこが俺の居場所だから

(沢田綱吉 家庭教師ヒットマンREBORN)

- てめエのペースでやりやいいんだよ。「自分」を殺すな

(坂田銀時 銀魂)

- ピンチの時にこそ、一人一人の本当の姿があらわれるものさ。
(野比のび太 ドラえもん)

- 子どもをいつまでも親のものにしておくのは間違いなのだ!!
これが人間界の摂理なのだ!!
(バカボンのパパ 天才バカボン)

拓也「まさかのバカボン出たなオイ」

高雄「だな・・・しかし、でも述べたがフラグが立つか・・・誰にだ？」

ユーノ「読んでからのお楽しみですね。では、第39話・・・始まります！」

第39話 思わぬ所で思わぬ人に再会する事がある気がする

拓也達の砲撃で結界をブツ壊し、どうにか脱出出来たシグナム達。孝俊もそれを見届けて、同じく八神家へと戻って行く。はてさて、八神家に戻った彼女達はどうなったか・・・

孝俊達が結界をブツ壊す10分程前・・・八神家では。

「シグナム達も孝俊さんも遅いなあ・・・もうすぐすずかちゃんが出来てしまう・・・」
「ですねえ・・・どうしたんでしょうか・・・」

心配するはやてと、事情を知っている為に複雑そうな顔で苦笑する雄人。

と、そこに・・・

【ピンポーン】

「あ、誰か来た見たいですね・・・」
「すずかちゃんかもしれへん・・・!」

雄人ははやての車椅子を押しして玄関まで移動する。そして、はやてが玄関のドアを開けると・・・

「こんばんは、はやてちゃん」
「すずかちゃん、いらっしやいや」

そこには、笑顔のすずかが立っていた。

とにかく、部屋の中に入るはやてとすずか（あと雄人）。

「あれ・・・？はやてちゃん、1人？」

「いや、うちの横にもう1人おるんやけど・・・」

部屋の中を見回しているすずか。

雄人がはやての横にいるのだが、持ち前の影の薄さのせいか気付かれていなかった。

はやては、苦笑しながらすずかに説明する。

そう言われて、すずかはちよつと集中してはやての横を見る。

「あ、どうも・・・挨拶が遅れまして・・・」

「ひゃっ!？」

雄人が、自分の方を見ているすずかに挨拶をする。

そして、突如聞こえた雄人の声に驚くすずか。

「中林雄人です。ちよつと訳有つて、この家でお世話になってます・・・」

「あ、私は月村すずかと言います・・・よろしくお願いします」

驚いたものの、すぐに落ち着きを取り戻す。

そして、お互いに冷静に挨拶をかわした。

「えっと、雄人さんってどういう方なんですか・・・？」

「あー、えっと・・・」

「それはうちから説明するわ。すずかちゃん・・・デジモンって知ってるかな？」

すずかの質問に、言葉を詰まらせる雄人・・・流石に下手な事は

喋れない。

その雄人を遮り、はやてが説明を始める。

「あ、うん知ってる・・・私も前に、デジモンに襲われた事があるの」

「そ、そうやったんか！？大丈夫やったん！？」

デジモンに襲われた事がある、というすずかの答えに驚くはやて。雄人もこれは初耳だった為、ちよつと驚いていた。

「もう駄目か・・・って思った時に、頭にゴーグルを付けた高校生くらいの男の人が飛び込んできて・・・助けてくれたんだよ」

「ほへえー・・・えらい勇気のある人がいたもんやね」

「しかもその人、炎のデジモンに進化したの・・・カッコ良かったよ」

「へえ・・・そうなんやあ・・・」

（炎のデジモンに進化する、頭にゴーグル付けた高校生・・・あの人しかおらんわな（汗））

かつての体験談を語るすずかに、感心しながら聞いているはやて。一方で、すずか達を助けた人物が拓也である事を確信する雄人であった。

「あ、話が逸れてしもうたけど・・・うちにもデジモンに進化出来る人がおるんやで」

「え、そうなの？」

「そこにおる雄人さんもそうなんやで？」

雄人を指差して答えるはやて。

雄人は、苦笑を浮かべながらすすかを見る。

「そうなんだ・・・」

「もう1人おるんやけど、今ちよっと出かけとってな・・・もうすぐ帰って来ると思うんやけど」

ピンポーン

はやてが言い終わったと同時に、インターホンが鳴った。
そして・・・

「遅くなりました！ごめんなさいはやてちゃん！」

「ごめんねはやて！」

「主はやて、大変遅くなって申し訳ありません」

シャマル、ヴィータ、シグナム・・・そして、狼形態のザフィーラが帰って来た。

どうやら間にあった様だ。

「ふふ、ええよ。ついさつきすすかちゃんが来たところなんやで？」

はやての言葉に、守護騎士達はすすかに一礼して席に着く。

ふと、はやてが口を開く。

「・・・あれ？孝俊さんは？」

「え、孝俊さん!？」

はやての言葉に、すずかが驚く。

孝俊がデジモンに進化出来ると言う事は、すずかも知っている。そして、もう1人デジモンに進化出来る人が住んでいるとついさつき聞いた……

すずかの頭の中には……既に孝俊の姿が想像されていた。

「ん？すずかちゃん……孝俊さんの事、知つとるん？」

「え、えっと……私の想像が間違つてなかったら、多分……半年前に会った事がある人の事……」

ふと、すずかが言ったところで雄人が徐おもむろに立ち上がり、窓の方に歩いて行く。

そして、静かに窓を開ける。

雄人の手には……何故かフライパンが握られている。すると、次の瞬間……窓から……

「とおおー……っ！」

孝俊が飛び込んで来た（靴は脱いでいる）。が、次の瞬間……

「俺、さんじょ（ベゴンツ！）ぶべらあっ!!!？」

雄人のフライパンが孝俊の顔面に炸裂していた。

孝俊はそのまま吹っ飛ばされてソファーに墜落し、ピクピクと痙攣していた。

「……ちゃんと入口のドアから入りましょうね」

(((((怖っ!!))))))

笑顔でフライパン担いで孝俊に言い放つ雄人。

その光景を見た、はやて・すずか・守護騎士一同の想いがシンク口した。

雄人は笑顔になっているが、何故か威圧感も感じられる。

今の雄人なら、魔王すらも威圧だけで倒せるかもしれない。

とにかく、雄人を下手に怒らせるのは止めようと心に誓う一同だった。

何故？だって地味に怖いから・・・

「あいててて・・・何もフライパンで殴る事・・・って、え、す、すずかちゃん!？」

「やっぱり！孝俊さん！」

孝俊とすずか、半年ぶりの御対面ごたいめんだった。

互いに驚く2人。

はやてと守護騎士達は呆気に取られ、雄人は【あちゃー・・・】と言った感じで見ている。

「・・・へえー、そうだったんや」

「まあ、そう言う事だね・・・」

はやて達に、半年前にすずかと出会った事を話した孝俊。

勿論、ジュエルシードとかなのは達の事は伏せた。色々とめんど

くさいから。

それに、すずかはデジモンの事は知ってても魔法関連の事は知らないのだ。

「そ、それよりも・・・折角みんな揃ったんやし、早速ご飯にしよつか」

「そうだな・・・」

「今日は疲れたし、沢山食べよつと」

はやての言葉に、守護騎士達・孝俊・雄人も席に着く。

そして・・・夕飯を食べ始めた。

はやてとすずかは楽しそうに話し、シグナムとシャマルは笑顔でそれを見ている。

ヴィータは鍋料理に舌鼓を打ち、雄人は細々と自分の分を確保して食べている。

孝俊は・・・一足先に食べ終わり、台所で何やら準備をしていた。

それから20分ほど後、孝俊が冷凍庫から何かを取り出した。

数日前に作った手作りアイスである（番外編その3参照）。

「おお！あの時作ってたアイスか!？」

ヴィータが待つてましたと言わんばかりに孝俊に尋ねる。

「ああ、流石にそろそろ固まったろうしね。デザートにどうかと思つてな」

どうやらかなりの数を作つたらしい。

はやて、すずか、守護騎士達、雄人、自分の分まできっちり数がある。

「わぁ・・・ありがとうございます」

かつて、孝俊手作りのクッキーを食した事があるすずかは、笑顔を浮かべて礼を言う。

すずかは、何気に孝俊の事が気に入っているらしい。

「いやいや、どういたしまして。料理は趣味の一環みてーなもんだしな」

孝俊は笑いながら皆の分のアイスを配って行く。

そして・・・全員が美味しく頂いたのであった。

ヴィータに至っては、【このアイズギガうめえ！！】と叫ぶ始末だったりする（笑）

シグナムはちゃっかり抹茶味をリクエストしたり、シャマルは孝俊に作り方を教えてもらおうと迫ったりしていた。

夕食後、はやてと話しているすずか・・・

「へえー、孝俊さんって歌が得意なんだ？」

「そうやねん、暇な時は勿論、お風呂入った時とか料理作ってる時とかよく歌ってるんや」

そう言っつて、孝俊を見る2人。

ふと、はやてが・・・

「そや、孝俊さん・・・何か1曲歌ってくれへん？」

「あー・・・まあ、良いけど・・・雄人、お前もちよつと付き合え」

「え、あ、はい・・・」

はやてからのお願いに、孝俊は雄人と一緒にソファーに座り、2人で歌い始めた。

その横には何処から取り出したのか、ラジカセ（古っ！）が置かれていた。

ラジカセから、音楽が流れ・・・

（中略（何））

「・・・こんなもんで」

「はわぁ・・・じっくり聞いてみるとやっぱええなあ〜 ってか、雄人さん地味に上手いんやね」

「あ、あははは・・・／＼」

とある90年代のメガヒット曲を歌い終わった孝俊と雄人。

はやては目を輝かせて喜んでいた。

すずかや守護騎士達も聞き入っていたようで、部屋の中は静かだった・・・

雄人は少し恥ずかしかったようで、顔を俯かせていた。

余談だが、孝俊と雄人ははやてにおねだりされ、もう1曲歌う羽目になったとか。

それ以降も、はやてはすずかと楽しい時間を過ごしていた。

2人が大好きな本の話・・・孝俊や雄人にまつわる話・・・等々、色んな会話で盛り上がった。

そして、楽しい時間はあっという間に過ぎ、すずかが帰る時間になった。

「とっても楽しかった・・・ありがとうはやてちゃん！」

「こつちこそ、ありがとうなすずかちゃん・・・ホンマに楽しかったで」

玄関で挨拶をかわす2人。

迎えが来るそうなのだが、すずか1人で行かせる訳にもいかない為、孝俊と狼形態のザフィーラが見送りをする事に。

デジモンにでも襲われたりしたらたまった物ではない。

孝俊は狼形態のザフィーラをリードで繋いですずかの隣を歩いている。

すずかは、一言も喋らず・・・否、喋れなかったと言った方が良いのかもしれない。

なんとなく、話しかけづらかったのだ。

さつきははやても一緒だったので、自然に話しかけられたのだが・・・ザフィーラもいるとは言え、この場に人は孝俊とすずかのみだ。

「あ、あのっ・・・」

「ん？」

意を決して、孝俊に話しかけようとするすずか。

孝俊はすずかの方を振り向く。

・・・が、次の瞬間だった。

「キイイツ！！ボタン！！」

「！？」

「ギャルルルツ！！ブオオオン！！」

さすがが、急に横付けされた青い車に引っ張り込まれる。

そして、青い車は煙を上げてその場から猛スピードで走り去る。その間、僅か5秒足らず・・・電光石火の誘拐行為だった。

「・・・え、今の？」

「・・・もしかしなくとも誘拐だ！」

あまりに速過ぎる展開に呆然としている孝俊と、すぐに我に帰ったザフィーラ。

「こんちくしよー・・・俺の目の前で堂々と誘拐とは愉快な真似してくれんじゃねーか・・・！」

「・・・この場に雄人がいたら殴られてるぞ」

「ゴホン！・・・雄人には内緒な」

ちよつとばかりシヤレを挟む孝俊に、いつもの冷静な声でツッコむザフィーラ。

孝俊は一つ咳払いをして・・・D・スキャナを取り出した。

「とにかく、行くぞザフィーラ！このままずかちゃんを攫われたりしたら、はやてちゃんに何言われるか解らんぞ」

「うむ・・・そうだな」

孝俊はプロスモンに進化し・・・肩にザフィーラを乗せ、ターボ

を使つてすずかを攫つた車を追走した！

以前説明したが、プロスモンはメカの塊である。

すずかを連れ去つた車のタイヤ痕をスキャンし、そのタイヤの痕を見ながら追つて行つたのである。

人間の視力では見えないような物でも、プロスモンには見えていくのだ。

数分後、海沿いの工場。

昼間は人がいて賑やかな海辺も、夜は人気がまるひとけで無く、不気味にさえ感じる。

その中に……すずかが両手足を縛られ、猿轡を噛まされて口を塞がれていた。

「んー……！んー……！」

すずかが恐怖に震えた声で呻き声をあげている。

周りでは、すずかを攫つたと見られる男達が、すずかをニヤついた表情で見ている。

「月村財閥の令嬢がこうも簡単に手に入るとはな……」

「身代金をガツポリ要求して、そのまま国外に高飛びとでも行くかあ？」

「いやいや、その前に少し楽しもうや……」

男の1人がすずかの服に手を掛ける。

「んづううづうつ!!」

すずかは体を揺らして必死に抵抗する。

このまま諦めたら、どんな目に遭わされるか・・・想像するのもおぞましい。

「この・・・っ、いい加減にしやがれ！」

男の一人が暴れるすずかに苛立ったのか、顔をはたく。

運が悪かったのか、それとも狙ったのか・・・すずかは、顎を強くはたかれ、脳を揺さぶられて脳震盪を起こしてしまった。

（まずい・・・。体が・・・うごかない・・・）

すずかは体に力が入らずそのままぐったりと倒れこんでしまった。辛うじて意識はあるが、もう抵抗する余力は残っていない。

「お？なんか良い感じに入ったな？」

「これで漸く楽しめるな・・・お嬢ちゃん、自分の運の無さを恨みなよ。へへへ・・・」

「やりすぎんなよ？後でこの嬢ちゃんには身代金要求を手伝ってもらわなきゃいけねーんだからよ」

下品な笑い声を上げながら、力の入らないすずかにのしかかろうとする男達。

すずかは・・・最早何もできない自分に絶望していた。

「待てい！...！」

と、次の瞬間・・・何者かの声が響いた。
その声が響いた瞬間、男達が振り向く。

「純なる子供の心を操り、自らの欲望を達しようとするは悲し。人
それを、【エゴ】と呼ぶ」

「だ、誰だ!？」

男達は驚いた。

工場の中にあるコンテナの上に、孝俊緑のロボットとザファイラ蒼い狼が並んで
立っていたのだから。

「貴様らに名乗る名前は無い!」

フロスマン孝俊はどっかで聞いたようなセリフを叫び、ザファイラは静かに
頷く。

そして・・・2人はコンテナの上から飛び降りた!

「とっああっ!」

・・・バキッ! ドンッ!!

「があっ!?!?」

「ぎゃああっ!?!?」

孝俊は、コンテナの上から男の1人に飛び蹴りを喰らわせ、昏倒させる。

ザフィーラはその大きな身体で男の1人に体当たりを喰らわせて吹っ飛ばす。

意外に男達に手応えが無かったので、孝俊は進化を解いて元の姿に戻る。

それを見た男の1人がチャンスと見て、ナイフを孝俊に突き刺そうと突っ走って来た！

「死ねやガキがあああああ!!!」

だが、これでも親父龍輔の剣術をその眼で長い間見て来た孝俊。たかだかチンピラの1人や2人・・・もの数では無い。何よりも、男のナイフの扱い方が振り回すだけの素人だ。

「・・・むんっ!・・・ふっ!」

・・・バシッ!ズドンッ!!

「がっ!?!・・・はっ・・・」

左手で男のナイフを持つ手を突き上げ、そのまま懐に踏み込む。そして、そのまま体重を乗せた肘鉄を男の鳩尾に叩き込んだ。

「・・・ふう、いっちょ上がり・・・か」

周りの男達も、ザフィーラの噛み付きや体当たりによって全員が
気絶させられていた。

10人くらいいた男達も、この2人にとってはものの数では無い。

「すずかちゃん、大丈夫か!？」

急いですずかの両手足の縄を解き、猿轡を外して体を起こす孝俊。
少しは体力が戻ったのか、すずかは孝俊の姿を確認すると・・・

「・・・・・・・・!!」

「ぬおっ!？」

孝俊にしがみついて泣きだしてしまった。

「・・・・・・・・ぐすつ・・・・・・・・ひつぐ・・・・・・・・うええええ・・・・・・・・!!」

「あー・・・・・・・・よしよし、よっぽど怖かったんだろうな・・・・・・・・」

孝俊はすずかを抱きしめて、優しく頭を撫でていた。

警察が来て、すずかの家族が来るまで、孝俊はずっとすずかの傍
にっていた・・・・・・・・

ちなみに、ザフィーラは一足早く帰って行った。

すずかは、月村家で働いているメイドのノエル・K・エアリヒ
カイトと、その妹であるファリン・K・エアリヒカイトが迎えに
来て、家に帰って行った。

その際、ノエルとファリンは孝俊に深く感謝し、何度も頭を下げ
ていた。

特に、すずか専属のメイドであるファリンに至っては、心配し過

ぎて泣き出す始末だったとか・・・

翌朝・・・さすがは何事も無かったかのように学校へ登校していた。

ただ、休憩時間は勿論の事、授業中も少し顔を赤くしてボーっとしていたらしい。

特に、【孝俊】と言うフレーズに敏感に反応したと言う。

用務員のボランティアである拓也は、そんなすずかを見て・・・

「・・・孝俊・・・何があったかは知らねーが・・・またフラグ立
てたのな・・・」

そう一言呟いたと言う。

自分の事にはとことん鈍いくせに、他人の事には恐ろしく敏感である。

実はすずかは半年前に孝俊に出会った時、一目惚れに近い感情を抱いていたのだが・・・

それが今回の事で、完全に孝俊に対する考えが確定したようだった。

「ぶえーつくしよーい！」

「ん、孝俊さん・・・風邪かー？」

「いや、バカは風邪ひかねーから・・・多分、誰かが俺の噂でもしてんのかな・・・」

孝俊は、八神家ではやてと一緒に朝食を作りながら話していた。ちなみに、昨日はちよつと事件に巻き込まれた・・・と、弁解して納得してもらったらしい。

(・・・すずかちゃん、大丈夫かな・・・)

孝俊は純粹にすずかを心配しながら・・・窓の向こうを見つめるのだった。

続く

第39話 思わぬ所で思わぬ人に再会する事がある気がする（後書き）

はい、第39話終了です。

ここで孝俊が更にフラグ確立・・・恋の競争の準備は着々と整いつつ・・・

孝俊「・・・（汗）」

さて、次回が遂に40話・・・ここまで来るとは思いませんが（苦笑）

では、次回予告・・・すずかちゃん、よろしく～

すずか「は、はい・・・！じゃあ、行きます・・・

次回、リリカルなのはフロンティア第40話【物騒な物の持ち主だからって、歴代の持ち主の全てが物騒だとは限らない気がする】お楽しみに！」

第40話 物騒な物の持ち主だからって、歴代の持ち主の全てが物騒だとは限

はい、遂に第40話・・・

ここまで読んで下さった皆さん。本当にありがとうございます！

今回はちょっと長くなりそうだったので、前後編に分けました。

あと、少し書き方を変えました・・・詰め過ぎて読みづらかった
ので(汗)

では、名言コーナーを・・・

・・・見たくはない・・・海南の勝利も敗北も・・・

(藤真健司 SLAM DUNK)

・・・「負けたことがある」というのがいつか大きな財産になる

(堂本五郎 SLAM DUNK)

・・・真つ直ぐに生きた、馬鹿の魂はたとえ肉体が滅びようが、消え
やしねえ

(坂田銀時 銀魂)

・・・負けてねエ 喧嘩は心が折れねエ限り 負けたことにならねエ

(土方十四郎 銀魂)

- 全身に何百の武器を仕込んで、腹にくくった一本の槍にはかなわねえ時もある

(オーナー・ゼフ ONE PIECE)

- 夢を掴んだ奴より 夢を追ってる奴の方が 時に力を発揮するもんでさあ

(沖田総吾 銀魂)

拓也「最近は前後編に分ける事が多いな・・・」

高雄「・・・だな」

孝俊「今回は、あんまりギャグは無いかも(汗)」

すずか「では・・・第40話、始まります!」

第40話 物騒な物の持ち主だからって、歴代の持ち主の全てが物騒だとは限

時間は少し巻き戻り、孝俊がすずかを救出した直後・・・

孝俊は警察から事情聴取などを受けていた。

すずかの父親からも連絡が来て、深く礼を言われた。

その際、何か礼がしたいとすずかの父親から言われたが、色々めんどくさい事になりかねないので丁重にお断りした。

普通なら多少のお礼は受け取る所だが、今の状況では色々複雑である。

それでもすずかの父親が食い下がって来た為・・・

【色々訳有りなので、自分がすずかを助け出した事は伏せて欲しいと頼んだのだった。

もし、ニュースで流れたりして管理局の目に入ったらめんどくさい事になるからである。

そうして、月村財閥を通して警察やマスコミに圧力にも近い物がかけられ、すずかの誘拐事件が詳しく語られる事は無かった。

翌日のテレビや新聞にも、【目撃者の証言で犯人逮捕に繋がった】

・・・くらいの事しか報道されなかったという。

帰って来た直後・・・

「孝俊さん！遅かったから心配したんやで!？」

「ああ、悪い悪い。ちょっと事件に巻き込まれちゃって・・・もう解決したけど」

玄関で待ち構えていたはやてに迫られ、多少たじろぐ孝俊。

事件に巻き込まれた、とはぐらかして苦笑いをしていた。

それから少し経って・・・はやてが寝静まった後・・・

リビングでは孝俊と雄人、守護騎士達が話合いをしていた。

「それにしても・・・シャルル、お前を助けたあの男・・・一体何者だ？」

「解らない・・・当面の敵では無さそうだけど・・・」

シグナムがシャルルに尋ねる。

シヤマルがクロノに追い詰められた際、突如現れた仮面の男に
ついての事である。

「孝俊、お前はどう思う？」

「……俺としては……あいつはなんかキナ臭いんだよ……
第一、素顔も晒さん奴は信用できねえし」

「孝俊の言う通りだ。とにかく、警戒はした方が良さだろう」

シグナムの質問に、孝俊は難しい顔をして答える。

孝俊としては、どうにもあの仮面野郎は信用出来ないようだ。

ザフィーラも孝俊に賛同し、警戒を続ける事を提案する。

「でも、孝俊さん達が結界を破ってくれた事で……闇の書のペー
ジを使わずに済んだわ。本当にありがとうございます……」

「いやいや、仲間助けるなら当然の事だよ。それに、礼なら拓也達
にも言ってくれ」

シヤマルが、孝俊に頭を下げ、孝俊は笑いながらシヤマルに言葉
を返す。

自分だけでは、派手なアクションを起こさないと結界は破れなか

った・・・拓也達がいなければ危ない所だったのだ。

「すみません・・・僕が行ければ、外からWスピリットダブルで砲撃をぶち込んだのですが・・・」

「何を言う・・・お前がいたからこそ、我々がいない間でも主はやてが無事でいられたのだぞ？」

雄人が申し訳なさそうに頭を下げる。

だが、シグナムははやてを守ってくれていた事に感謝し、雄人を宥める。

「ってか、Wスピリットってなんなんだ？」

雄人の言葉を聞いたヴィータが、聞き慣れない言葉に首を傾げる。

「Wスピリットは、ヒューマンスピリットとビーストスピリットが1つになった形だ」

「ヒューマンの知性とビーストの野性を同時に兼ね備えた強力な形態です」

Wスピリットについて簡単に説明する孝俊と雄人。

「そ、そんなもんがあるのかよ……ビーストスピリットだって、
相当な破壊力があつたつてのに……」

それを聞いたヴィータが冷や汗を垂らしながら驚く。

ビーストスピリットでも、Sランクの砲撃魔法に勝るとも劣らな
い破壊力を持つているのだから。

「出来りや使いたくないけどな……人間界でアレ使ったらビース
トスピリットより疲れるから」

「デジタルワールドでなら、あまり負担も無いんですがね……」

しかし、孝俊としてはあまり使いたくないらしい。

人間界ではD・スキャナは勿論の事、自分にもそれなりの負担が
押し掛かって来る。

雄人もまた、孝俊と同じ考えだった。

「では……孝俊と雄人が使えるという事は、拓也達も……」

「察しの通りです。それどころか、拓也さんと輝二さんは随分前か

らWスピリットを使っているので・・・」

シグナムが自分の予想を口にし、雄人はシグナムの言葉を肯定する。

拓也と輝二は、小学生の頃にWスピリットを習得して完全にマスターしているのだ。

更に、マスターしただけでなく経験を積み上げて行き、当時とは比べ物にならないパワーを身に付けている。

その為、性能が十闘士の1・25倍ある特殊型スピリットも、拓也達の経験の前ではそんな性能差は無いも同然なのだ。

「だが・・・拓也は我々と敵対するつもりは無いらしい」
「何でそんな事が解んだよ？」

シグナムが拓也の事を述べると、ヴィータが怪訝そうな表情を浮かべる。

「今日、主と図書館に行った際に、拓也と出会ったのだ・・・その際に本人の口からそう聞いた」

「シグナムは嘘は言ってねーよ。それに、そうじゃなきゃさっきだって結果を破壊したりはしねーさ」

拓也に出会った事を述べるシグナム。

そして、シグナムをフォローする孝俊。

拓也が平然と嘘を吐くような奴ではない事を、孝俊は良く知っている。

「まあ、そうだろうけど・・・」

ヴィータは若干納得が行かないようだったが、無理にでも納得する事にした。

「あいつはちゃんと冷静に状況を見る。その上で、俺達と敵対しないと決めたんだろう」

拓也に関しては、孝俊は嫌という程知っている。

彼は、十闘士、特殊スピリット全てをひっくるめてのリーダーだとも言われている。

そして冷静さは、今では輝二と同じくらいである。

それでも、一度^{ひとたび}熱くなれば昔のように燃えたぎる闘志を漲らせ、熱く戦う戦士となる。

「しかし、今回の事で管理局はいよいよ本腰を入れて来るでしょうね……」

「そうだな……ここからは更に気を引き締めないといけない」

不安そうに呟く雄人と、それに頷くシグナム。

孝俊、雄人、守護騎士達は……12月の寒空を見上げ、決意を新たにするのだった。

・
・
時間は更にもう少し巻き戻り、リンディ達が住むマンションにて

高雄とエイミィが、カートリッジシステムについての説明を行っていた。

「カートリッジシステムは、扱いが難しいの」

「本来なら、そいつらのような繊細なインテリジェントデバイスに組み込むような物じゃないんだ」

「本体破損の危険も大きいし、危ないって言ったんだけど……」

「そいつらがどうしても、ってな……よっぽど悔しかったんじゃない

ろつのお・・・自分が、ご主人様を守ってあげられなかった事が、ご主人様の信頼に応え切れなかった事が・・・」

エイミイと高雄は、カートリッジシステムを組み込んだ経緯をなのはとフェイトに伝えた。

ちなみに、孝昭には先立って説明しておいた。

彼は現在、本局に駐在して緊急時に出勤できる様に待機している。

「ありがとう、レイジングハート・・・」

【All right】

「バルディッシュ・・・」

【Yes sir】

危険を顧みず、自分達の為に強化してくれた事に感謝する2人。レイジングハートとバルディッシュは、光って反応した。

「モードはそれぞれ3つずつ。レイジングハートは中距離射撃のアクセルと、砲撃のバスター、フルドライブのエクセリオンモード」

「バルディッシュは、アサルト、鎌のハーケン、フルドライブは大型剣のザンバーフォームだ」

エイミィと高雄が、レイジングハートとバルディッシュのモード説明を行う。

前の物と比べ、役割もかなりしっかりしている。

特に、注目すべきは新要素のフルドライブだろう。

「破損の危険があるから、フルドライブはなるべく使わないように・
・特に、なのはちゃん」

「あ、はい？」

「フレーム強化をするまで、エクセリオンモードは起動させないで
ね」

「はい・・・」

エイミィに釘を刺され、少ししょんぼりするなのは。

と、そこに・・・

「エイミィさんの言う通りだぜ、なのはちゃん」

「た、拓也さん!？」

ドアを開けて、拓也が入って来た。

今話を聞いていたらしい。

「大威力砲撃は体への反動も大きいしな。砲撃主体のなのはちゃん
は特に危険だ」

「あう……」

「デバイス以前に、なのはちゃんはまだ9歳……体の内部組織も
完全には出来上がっていないんだ。フルドライブは本当にどうにも
ならない時にのみ使うこつた」

「はあい……」

流石に拓也に言われては強く言えないのは。

拓也に惹かれている為、なのはは拓也に対して強く出られないの
だ。

「そこで、俺から1つ提案があるんじゃない」

ふと、高雄が口を開いた。

拓也、エイミー、なのは、フェイトは高雄の方を向く。

「前に拓也から聞いたんだが・・・なのはちゃんとフェイトちゃん、デバイスを特殊強化した事があるらしいな？」

「あ！もしかして、レイジングハート・サラマンダーとバルディッシュ・ドラグーンの事！？」

高雄の発言に、エイミーが思い出したように言う。

かつて、ジュエルシード事件でヴァンデモンとの戦いに使用した強化形態、レイジングハート・サラマンダーとバルディッシュ・ドラグーンの事だ。

「その通り。炎のスピリットと龍のスピリットの基本データを組み込んで、それぞれモードを追加するんじゃない」

「なるほど、その手があったか！」

高雄の提案に、笑顔を浮かべる拓也。

流石にそこまでは考え付かなかったらしい。

「基本データだけじゃから、本来なら前のより劣る所だが・・・カトリッジシステムで強化されとるお陰で、前と大差なく使えるは

「ずだぜ？」

高雄の言葉を聞いた瞬間、なのはとフェイトの顔が明るくなる。

「エイミーは、高雄の発想力と技術力に度肝を抜かれていたりするのだが。」

「そうだな・・・名付けるならば【レイジングハート・バーニングエクセリオン】と、【バルディッシュ・アサルトドラグーン】かな？」

「縮めて【バーニングモード】と【ドラグーンフォーム】ってところだな」

ソファアに座っているクロノとリンディは、守護騎士達について話し合っていた。

「問題は、彼らの目的よね・・・」

「ええ、どうも腑に落ちません。彼らはまるで、自分の意志で闇の書の完成を目指しているようにも感じますし・・・」

「んー、それってなんかおかしいよ？」

クロノの考えに、アルフが割って入る。

「闇の書つてのも、要はジュエルシールドみたく、すごい力が欲しい人が集めるもんなんでしょ？ だったら、その力が欲しい人の為に、あの子達が頑張るつてのもおかしくは無いと思うんだけど・・・」

アルフの答えに対し、クロノはリンディと顔を見合わせる。

そして、一呼吸置いて話した。

「第一に、闇の書の力はジュエルシールドみたいに、自由な制御が利く物じゃないんだ」

「完成前も完成後も、純粋な破壊にしか使えない。少なくとも、それ以外に使われたという記録は一度も無いわ」

「そっかぁ・・・」

クロノ曰く、闇の書はジュエルシールドの様に幅広く使える様な物ではないらしい。

純粋な破壊力を持った、危険な魔導書・・・と言う事らしいのだ。

「それからもう一つ、あの騎士達・・・闇の書の守護者の性質だ。彼らは人間でも使い魔でも無い」

「……て事はアレか？闇の書に合わせて作られた、魔法で作られた限りなく人間に近い擬似人格……ってところか？」

「ああ、拓也の言う通りだ。主の命令を受けて行動する、ただそれだけのプログラムに過ぎない筈なんだが……」

クロノの言葉に、拓也が思った事を述べる。

それが正解だったようで、クロノは拓也の言葉を肯定する。

シグナム達は闇の書の魔法技術で作られた擬似人格で、本来は主の命令通りにしか動かないらしい。

もっとも、シグナム達はリンカーコアの蒐集以外は、その主であるはやての命令で動いているのだが……知る由も無い。

「ふうーむ……となると、こっちは考えられねーか？今度の主は、今までとは違ってそこまで力に執着していないとか」

「……確かに考えられない事は無いが……その様な例は今まで一度も無いしな」

「……まあ、俺の勝手な思い込みだ。一つの考えとして取ってくれりゃいいわ……」

拓也は、何気なく自分の考えを述べてみる。

クロノは、難しい顔をして拓也の言葉を否定（？）した。

確かにクロノの言う通り、かつての持ち主の中に、はやての様な力を求めない主など1人もいなかった。

拓也は、管理局には内緒にして欲しいというシグナムとの約束もあり、それ以上突っ込むのを止めた。

「あの・・・」

ふと、フェイトが口を開いた。

「使い魔でも人間でも無い擬似生命って言う・・・私みたいな「そいつぁ違うな」え・・・？」

フェイトが言いかけた所に、拓也が割って入る。

「フェイトは、生まれ方が少し違うだけで、ちゃんと命を受けて生み出された人間だろ？」

「検査の結果でも、ちゃんとそう出てただろ？変な事言う物じゃない」

拓也とクロノが、フェイトに言い聞かせる。

「2人の言う通りよ・・・」

「母さん!？」

そこに、本局から戻って来たプレシアがやって来た。

彼女も今の話を聞いていたようだ。

「私が言えた義理じゃないけど・・・フェイト、あなたはちゃんと命を持って私が生み出した1人の人間・・・私の大事な娘よ」

「プレシアさんの言う通りね」

プレシアとリンディが、フェイトに言い聞かせるように話す。

フェイトは、もはやプレシアにとって無くてはならない存在である。

アリシアの代わりなどでは無い、フェイト・テストロッサという1人の大事なプレシアの娘だ。

「じゃあ、モニターで説明しよっか!」

そうやって、エイミーがモニターを開く。

すると、モニターには闇の書を中心に、守護騎士達が映し出された。

「守護者達は、闇の書に内蔵されたプログラムが人の形をとった物・
・闇の書は、転生と再生を繰り返すけど、この4人は闇の書と共に
様々な主の元を渡り歩いている・・・」

「意志疎通のための対話能力は、過去の事件でも確認されてるんだ
けどね・・・感情を見せたって例は、今までに無いの」

クロノとエイミーが、闇の書の守護騎士達に関しての情報を伝える。

今までは、感情を見せずに只々主の命令に従うだけのプログラム
だったというのだ。

「闇の書の蒐集と主の護衛・・・彼らの役目はそれだけですものね」

「でも、あの帽子の子・・・ヴィータちゃんは怒ったり悲しんだり
してたし」

「シグナムからも、ハッキリ人格を感じました・・・なすべき事がある
って・・・仲間と、主の為だって・・・」

リンディの言葉に、なのはとフェイトがそれぞれの想いを述べる。それぞれが戦った相手・・・ヴィータとシグナムからは、はつきりと人格を感じていたのだ。

「主の為・・・か・・・」

フェイトの言葉に、クロノがボソリと呟く。

「まあ、それについては捜査に当たっている同員からの情報を待ちましょうか」

「転移頻度から見ても、主がこの付近にいるのは間違いないでしょうし。案外、主が先に捕まるかもしれません」

「あー、そりゃ解りやすくして良いね!」

「だね。闇の書の完成前なら、持ち主も普通の魔導師だろうし」

リンディ、クロノ、アルフ、エイミィがこれからについて話す。

実際クロノの言う通り、闇の書の主であるはやては、この付近に住んでいる。

それに戦う意思も無いのだ。

（確かにそうだが・・・そうなればあいつらと戦う羽目になっちまう・・・出来れば避けたいんだがな・・・）

拓也は考えた・・・守護騎士達と戦いになれば、孝俊・雄人とも戦う事になりかねない。

そうになると、かなり厄介な事になる。

最悪、同士打ちなんて事も考えられるのだから。

「それにしても、闇の書についてももう少し詳しいデータが欲しいな・・・」

クロノはそう言うと、なのはの肩に乗っているフェレット状態のユーノに近寄る。

「ユーノ、明日から少し頼みたい事がある」

「ん、いいけど・・・？」

帰り道・・・ユーノはなのはと念話で話し合っていた。

(ねえユーノ君、闇の書の主ってどんな人かな?)

(闇の書は、自分を扱う資質を持つ人をランダムで転生先に選ぶみたいだから……)

(そっか……案外、私達と同じ年くらいの子だったりしてね)

(うーん、流石にそれは……)

闇の書は、ランダムで転生先を選ぶらしく、今回の場合はそれにはやてが選ばれたらしい。

ランダムで選ぶとは、なんとも傍迷惑な物だが……

そして翌朝……八神家では……

「はよーっす……」

「あら、孝俊さん。おはようございます」

孝俊が、寝癖でスー　ーサイヤ人みたいな髪型で起きて来た。

既に起きていたらしく、シャマルが孝俊を見て挨拶する。

「ん……この匂いは……シャマル、お前が朝飯作ってくれたのか？」

「はい、はやてちゃんはまだ寝てますし、折角だから……」

「そうか、わざわざすまねーな」

この時、孝俊は知らなかった……シャマルの料理の腕前を。

1時間後、全員が揃って朝ごはんを食べている……

が、後から起きて来た孝俊とはやてが作った料理は次々に無くなっているのだが、シャマルの料理は手がつけられていなかった。

不審に思った孝俊は、シャマルの料理に手を伸ばす。

「……」

そして……何回か口に入れ……食した。

見た目はかなり平然としていた為、それを見たヴィータが……

「た、孝俊……それ……どうだ？」

「ん……少し塩気が強いかな。まあ、これくらいなら食えん事

無いぞ？」

「そ、そうか……（どんな胃袋してやがんだこいつは！？）」

自分はおろか、シグナムやザフィーラ、はやてですらロクに食べられなかった物を食べたのだ。

そりゃあ、驚きもするだろう。

そして、朝飯も終わり……孝俊は自分の部屋に戻って行く。

数分後、ウェイターは孝俊にハンマーの使い方を教わろうと孝俊の部屋のドアを開けた。

そこで見た物は……

「……………」

まるで【あ たの ヨー】の如く真っ白になって、燃え尽きたよ
うな表情でベッドに座って頂垂れている孝俊の姿だった。

なんだか、魂が抜けているようにも見える。

「わーーーーーーっ!? 孝俊、しつかりしろおおおお
おおおお!」

ヴィータは必死に孝俊を揺さぶり、孝俊の抜けかけていた魂を元
に戻したとか。

「なんで無理してまであんなもんシャマルの料理食ったんだよ……?」

「折角作ってくれたんだし……食べないのは悪いと思って……」

漸く精神が元通りになって意識を取り戻した孝俊と話すヴィータ。

シャマルの料理を食べた理由を聞いたヴィータは……

(あかん、コイツ良い奴だ……やべ、ちょっと泣きたくなってき
た……)

少々目頭が熱くなってしまったとか。

同時に、シャマルの料理まで食してしまう孝俊の胃袋の耐久力に、
素直に驚くのであった。

余談だが、その後シャマルはヴィータとシグナムに説教を喰らっ
て涙目になり、孝俊はそれを励ましていたとか。

「時間は流れ、昼過ぎ・・・」

「・・・そーいえばさ、ヴィータ達とはやてちゃんって・・・最初
どんな感じだったんだ？」

「なんだよ、急に・・・」

「あー、ちょっと気になってな・・・」

孝俊がヴィータに、はやてとの出会いの事を探ねる。

ちょっと気になった様だ。

「そつだな、お前には話しても良からう・・・」

「そつね、孝俊さんなら・・・」

「シグナム、シャマル・・・」

シグナムとシャマルが、孝俊の部屋に入って来た。

ザフィーラも、狼形態で孝俊の傍に座っている。

ちなみに、はやてはお疲れの様で昼寝中だったりする。

・
そして・・・守護騎士達の口から、はやてとの出会いが語られる。
・
孝俊の反応やいかに・・・？

続く

第40話 物騒な物の持ち主だからって、歴代の持ち主の全てが物騒だとは限ら

はい、第40話終了です。

次回で、詳しく守護騎士達とはやてとの出会いが描かれます。

では、次回予告・・・前回すずかちゃんだったから、アリサちゃんよろしく〜

アリサ「はいはい。じゃ、行くわよ〜

次回、リリカルなのはフロンティア第41話【物騒な物の持ち主だからって、歴代の持ち主の全てが物騒だとは限らない気がする 後編】お楽しみに！」

感想、質問などお待ちしております〜

第41話 物騒な物の持ち主だからって、歴代の持ち主の全てが物騒だとは限ら

はい、第41話です。

今回は後編・・・はやてと守護騎士達の出会いが主になってます。

また、後半には幼き頃のStrikerSキャラが登場・・・！

では、名言コーナーを。

い
- 善でも悪でも 最後まで貫き通せた信念に偽りなどは何一つな

(キャプテン・ブラボー 武装錬金)

- 一片の迷いも無く己が道を貫く・・・簡単なようでなんと難し
いことよ・・・

(魚沼宇水 るろうに剣心)

- 他の誰かのために120%の力が出せる...それがお前達の強さ...

(戸愚呂(弟) 幽遊白書)

- 生き延びれば、見える明日もあるんじゃないか。

(サンジ ONE PIECE)

-. 命かけてダチを迎えに行くダチを見捨てておめエら！明日食つ
メシがうめエかよ？

(ボン・クレー ONE PIECE)

-. 心の中でマーチを鳴らせる奴はな、何度座折しても前を向ける
んだよ!!

(90式先輩 サウジ やわらか戦車)

拓也「やわらか戦車と来たか」

孝俊「名言だと思えば何でも載せるからなあ・・・」

アリサ「じゃ、始めるわよ！」

第41話 物騒な物の持ち主だからって、歴代の持ち主の全てが物騒だとは限ら

シグナム達との戦いを終えたなのは達は、高雄& amp;・エイミイからデバイスの説明を受けた。

フルドライブを追加したが、危険性が高い・・・そこで、高雄からの提案で新モードを付ける事になった。

なんと、先の【ジュエルシード・VV事件】で使用したレイジングハート・サラマンダーと、バルディッシュ・ドラグーンの機能を追加するとの事。

スピリットの基本データを使用して、安定して強力な力が出せるようになる。

名付けて、【レイジングハート・バーニングエクセリオン】と、【バルディッシュ・アサルトドラグーン】である。

一方、八神家では孝俊がシャマルの料理を食べ、真っ白に燃え尽きたりしていた。

そして、【折角作ったのだから食べないのは悪いと思った】という孝俊にヴィータが涙した。

その後、ふと気になったのか、孝俊がヴィータにはやてとの出会いの事を探ねる。

孝俊ならば良いだろうと、シグナム達ははやてとの出会いを語り始めた・・・

はやての誕生日である6月4日を迎えたと同時に・・・闇の書は起動した。

それでもって、起動して守護騎士達が現れたは良いのだが・・・

「・・・目え回して気絶してた訳かい（汗）」

「ええ・・・まさかあんな事になるなんて思わなかったわ・・・」

孝俊が苦笑いしながら答える。

守護騎士達も意外だったらしく、同じく苦笑いをしていた。

その後、はやては海鳴大学病院の石田先生の元に担ぎ込まれた。

「はやてちゃん、良かったわ。なんともなくて・・・」

「えっと・・・すいません・・・」

石田先生に対し、申し訳なさそうに謝罪するはやて。

はやてもまだ、今の状況を完全には理解できていなかった。

「・・・で、誰なの？あの人達は・・・」

「ほえ？・・・あつ！」

石田先生が指差した方を見ると・・・

守護騎士達が無表情ではやての方を見ていた。

ザフィーラに至っては耳を出したままだったりする。

「……どういう人達なの？春先とはいえまだ寒いのに、はやてちゃんに上着も掛けずに運び込んできて……
変な格好してるし、言ってる事は訳解んないし……どうも怪しいわ……」

「あー、えっと、その……何と言いましょうか……」

石田先生の疑問も、尤もである。

いくらなんでも怪しさ超全開の見慣れない4人組。

まあ、女性3人は100歩譲って行けるとしても……
大柄マツチヨの獣耳& amp・尻尾付けた色黒の男なんぞ、天地がひっくり返ろうが萌えない。

と言うか、人によっては不快感MAXになりそうである。

「(ご命令を頂ければ力になりますが……如何いたしましょう?)
「へっ……ほえ……?」

突如頭の中に響いたシグナムの声に驚くはやて。

(思念通話です。心で、ご命令を念じていただければ)

はやては少し考えて、小さく頷いた。

(ほんなら、命令と言うかお願いや。ちょお私に話し合わせてな)
(あ……はい)

「えーと、石田先生。実はあの人達、私の親戚で……」

「親戚？」

はやての言葉に驚く石田先生。

まあ、いきなり言われても信じられないのが普通だが。

「遠くの祖国から、私のお誕生日をお祝いに来てくれたんですよ。それで、ビックリさせようと仮装までして来てくれたのに、私がそれにビックリし過ぎてもうたと言うか、その・・・そんな感じで・・・なあ？」

そう言って、引きつった笑顔を見せるはやて。

正直、かなり苦しい言い訳である・・・ちよっと考えればバレそうなものだが。

「あ、そうなんですよー！」

「その通りです」

はやての問い掛けに、シャマルとシグナムは話を合わせる。

そうして、その場は何とか切り抜けたのであった・・・

「我々の新しい主・・・主はやては、年の若さもそうだったが、これまでの主とは随分違っていた」

「なるほどな・・・ってか、親戚って相当無理あったんじゃない？」

石田先生、よく信じたな・・・(汗)」

シグナムの説明を聞き、とりあえず理解した孝俊。

しかし、やはり親戚と言う所には違和感を感じたようだった。

「まあ、結果オーライだよ。気にすんな」

ヴィータが、孝俊の横で言った。

ちなみに、ヴィータはちやっぴり孝俊の隣に座っている。

「そっかぁ・・・この子が闇の書って言うもんなんやね」

「はい」

「物心ついた時には棚にあったんよ・・・」

そう言って、はやくは車椅子を動かして棚に向かう。

「綺麗な本やから、大事にはしてたんやけど・・・」

「・・・覚醒の時と眠っている間に、闇の書の声を聞きませんでしたか？」

シャマルが顔を上げて、棚をゴソゴソといじっているはやくに尋ねる。

「んー・・・私、魔法使いとちゃうから漠然とやったけど・・・あ、あった！」

はやくが、棚にある小さな引き出しから何かを見つけたらしい。

「解った事が一つある。闇の書の主として、守護騎士みんなの衣食

住、キツチリ面倒見なあかんゆうことや。

幸い住むところはあるし、料理は得意や。みんなのお洋服買ってくるから、サイズ測らせてな」

はやてがメジャーを持って、笑顔で話す。

そんなはやてを見て、守護騎士達は呆然とするのであった。

「そう、本当に・・・今までの主とは、何もかもが違っていた。主はやての我々への対応は・・・これまでの主の様に高圧的であったり、道具の様に扱うものでなく、まるで家族にするようなものだった・・・」

「・・・そんなに珍しいタイプだったのか・・・はやてちゃんは」

シグナムの話を聞き、孝俊は腕を組んで言う。

今までの主は、シグナム達をただの戦う道具としてしか扱わなかったのだ。

それ故に、はやてからの扱いは・・・心温まる物があった。

「我々は戸惑いながらも・・・しかし、新たな主の望むままに静かな日々を暮らし始めていた・・・」

「で、次の日だったかしら・・・はやてちゃんに連れられて、この街を案内してもらった時に孝俊さんを見たわけ」

「あー、この間もそんな事言ってたな。町内会の野球大会の時か・・・」

野球大会については第25話を参照（笑）

出会って次の日・・・

「ほな、今日はこの街を案内するな」

「は、はい・・・よろしくお願いします」

シグナムに車椅子を押ししてもらい、家を出る。

そして・・・商店街や学校などを見て回り、とあるグラウンド付近で・・・

「あ、そっぴや今日は町内会対抗の野球大会やったな・・・」

「野球・・・ってなんですか？」

はやての呟きにシヤマルが尋ねる。

今まで戦闘漬けの毎日だった守護騎士達には、野球はおろかスポーツというジャンル自体がよく解らないのだ。

「この国で最も有名なスポーツの1つや。日本一をかけて戦うプロのチームも沢山あるんやで？」

「はい・・・なんとなく理解できました」

野球について大まかに説明するはやて。

シグナムは、とりあえず一定の理解を示したようで、小さく頷く。

「・・・んー、海鳴商店街チームはピンチやねえ・・・」

場面は5回裏1アウト2・3塁・・・海鳴商店街チームが守備についている。

要するにピンチなのだ。

そして、相手チームがボールを打って、外野に飛んで行く・・・

「あー・・・結構飛んだわ・・・こりゃ犠牲フライで1点やなあ・・・」

飛んだ先にいたのは、ライトの守備についていた孝俊だった。

孝俊がボールをキャッチし、それと同時に3塁ランナーがスタートする。

そして孝俊がホームのキャッチャー目掛け・・・右腕を振り抜いて超レーザー送球を発射した！

「はわ・・・！」

「速い・・・！」

「なんて肩の力・・・！」

「むう・・・！」

「す、すげえ・・・！」

上からはやて、シグナム、シャマル、ザフィーラ、ヴィータの順。今の送球・・・投げたのは普通の人間（はやて達にはそう見えてる）の筈だ。

その普通の人間が・・・あのようなレーザービーム送球を放るとは思いもよらなかった。

その後・・・ピッチャーとしても登板した孝俊にまたしても驚いた（笑）はやて達。

ヴィータに至っては、【良く解んねーけど・・・あいつギガすげえ！】と唸っていた。

まさかその孝俊と、この半年後に会うとは夢にも思わなかった
ろうが。

「・・・なるほどなあ・・・」

孝俊は少々呆然としているが、一応話は理解していた。

「今思えば、まさか孝俊さんとかうやって話してるなんて・・・な
んか運命的と言うか・・・」

「ある意味そうかもしれないな・・・私としても、良い友に巡り合え
た・・・」

シャマルとザフィーラが、今の状況についての想いを語る。

「んー・・・ま、確かに俺も偶然ここに降って来たからな・・・運
命と言うのもあながち間違いないじゃねーかもな」

孝俊もまた、2人の意見に同意する。

元々、拓也達と一緒になのは達の元に行くつもりが、どーいう訳
か1人だけはぐれて八神家に墜落したのだから。

「そうだな・・・では、話を続けよう」

シグナムもそれに頷き、再び話し始めた。

ある日の図書館にて・・・

「騎士甲冑？」

「ええ。我らは武器は持っていますが、甲冑は主に賜わらなければなりません」

「自分の魔力で作りますから、形状をイメージして下さい」

「そっかぁ・・・そやけど、私はみんなを戦わせたりはせえへんから・・・」

これまでも、シグナム達守護騎士は、主から騎士甲冑をイメージしてもらい、それを身に纏っていた。

レヴァンティンやグラーフアイゼンと言った、武器の装備はあるものの、甲冑は初期装備に入っていないらしい。

しかし、は yet はシグナム達を戦わせるつもりは全く無い。
そして、少し考えた後・・・

「あ、服でええか？騎士らしい服。な？」

「ええ、構いません」

「ほんなら資料探して、カッコ良えの考えてあげなな」

そうやって、は yet が訪れたのは・・・玩具屋だった。

は yet て曰く、こう言うところにこそそれっぽい材料があるとの事らしい。

ちなみに、ヴィータがそこで見つけたうさぎのぬいぐるみを大層気に入ったらしく、は yet に買ってもらったそうだ。

これまでの接し方に加えてこれが決定打となり、ヴィータは完全

にはやてに懐いたのだった。

その日の夜・・・はやてはシグナムに抱き上げられて、夜空を見ていた。

星空を眺めていたはやてに、シグナムが話しかける。

「主はやて、本当に良いのですか？」

「何が？」

「闇の書の事です。貴方の命ならば、我々はすぐにでも闇の書のペー지를蒐集し、貴方は大いなる力を得る事が出来ます。

この足も・・・治る筈ですよ」

シグナムは、やはりはやての足が気になるのか・・・闇の書の蒐集の事を持ち出す。

闇の書を完成させれば、はやての足も治る筈・・・そう信じていた。

「あかんで、闇の書のページを集めるには色々な人にご迷惑をおかけせなあかねやる？」

「あ・・・」

「そんななあかん。自分の身勝手に、人に迷惑をかけるんは良くない。あたしは・・・今のままでも十分幸せや。

父さん母さんはもうお星様やけど・・・遺産の管理とかは、おじさんがちゃんとしてくれる」

しかし、はやては他人に迷惑をかける訳にはいかないと、シグナムの申し出を固辞する。

足など治らなくても、はやてにとってはシグナム達がいてくれる今の環境がとても気に入っているのだ。

それに、両親は亡くなってしまっているが、両親の関係者が財産管理をしてくれているらしい。

「お父上の御友人・・・でしたか？」

「うん・・・お陰で生活に困る事も無いし、それに何より今はみんながあるからな・・・」

そう言って、シグナムに抱きつくはやて。

シグナムは、そんなはやてを見て微笑むのだった。

「シグナム」

「はい？」

「シグナムはみんなのリーダーやから、約束してな」

「はい・・・」

はやては一呼吸おいて、静かに話し始める。

「現マスター八神はやては、闇の書には何も望み無い。あたしがマスターでいる間は、闇の書の事は忘れてね？」

みんなのお仕事は、うちで一緒に仲良く暮らす事。それだけ・・・約束できる？」

「・・・誓います。騎士の剣にかけて」

こうしてシグナム達は、はやてと【闇の書の蒐集はしない】という誓いを交わしたのだった。

ずっと、一緒に仲良く暮らしていく為に・・・

しかし運命は・・・残酷な現実を突き付けた。

10月27日・・・海鳴大学病院にて、シグナムとシャルは、担当医の石田先生から驚愕の事実を告げられた。

「命の・・・危険？」

「はやてちゃんが・・・？」

「ええ・・・はやてちゃんの足は、原因不明の神経性麻痺だとお伝えしましたが、この半年間で麻痺は少しずつ上に進んでいるんです。この2カ月は、特に顕著で・・・このままでは、内臓機能の麻痺に発展する危険性があるんです」

はやての命の危険を告げられたシグナムとシャルは・・・部屋の外で、悔しさを滲ませていた。

シグナムは壁を拳で殴り、シャルは涙を流していた・・・

「何故・・・何故気付かなかった・・・！」

「ごめん・・・ごめんなさい・・・私・・・！」

「お前にじゃない・・・自分に言っている・・・！」

「・・・なるほど・・・な。それでお前達は、はやてちゃんを助ける為に、誓いを破って活動を始めた訳か・・・」

「はやての未来を血で汚したくは無いから、人殺しはしない。だけど、それ以外なら・・・何だっつてする・・・！」

孝俊は真剣な顔で、シグナム達の事情を聞いていた。

闇の書の呪いによって、はやては健康を阻害されるところか、命

の危険にまで晒された・・・

このままはやてを死なせる訳にはいかないと、彼女達は闇の書の蒐集を始めたのだった。

特にはやてに懐いていたヴィータは、人殺し以外なら何だってやる覚悟を固めており、孝俊に向かって言った。

「・・・うん。やっぱり俺はお前達に協力するべきだな。事情の詳細も解った事だし・・・ね」

「しかし・・・良いのか？お前と拓也達・・・それにテストロッサ達とは仲間なのだろう・・・？」

改めて協力の意志を見せる孝俊。

だが、シグナムが仲間との敵対について尋ねて来る。

「そりやあな・・・だが、ここまで来たなら後には引けねえ。やると決めた事を途中で投げ出すなんざ男らしくねえしな」

「孝俊・・・」

「ま、拓也達は手強いが・・・あいつも事情を知ってる事だし、無闇に攻撃してはこねーさ」

しかし、孝俊は協力の意志を曲げようとはしなかった。

孝俊とて、このままはやてが死ぬのを黙って見ていられるほど薄情では無い。

やれる事はなんだってやるつもりである。

「あー・・・なんかしんみりしちゃった・・・孝俊、気晴らしになんか歌ってくれよ」

「歌・・・うーん・・・」

急にヴィータに歌を要求されて、考え込む孝俊。

ヴィータは、飯もそうだが、孝俊の歌を大層気に入っているのだ。

そして・・・その後、孝俊は自分が知りうる限りの元気が出そうな曲を歌った。

ヴィータ達はしっかりと聞き、心に留めていたのだった。

「・・・全員で力を合わせて、必ず成し遂げるぞ」

「あたし達は逃げねー・・・前に向かって歩き続ける・・・！」

「ええ・・・孝俊さんと雄人さんもいますし・・・頑張りましょう・・・！」

「友よ・・・改めて我らに力を貸してくれるか？」

「たりめーだ。今更後には引けねーしな・・・これからもよろしく頼むぜ、ザツフィー」

「絶対にはやてちゃんを救いましょう！」

守護騎士一同・孝俊・雄人は顔を見合わせて・・・決意を新たに
するのだった。

「・・・ん、なんか焦げ臭くねーか？（ヴィータ）」

「あっ！ガスコンロのスイッチ入れっぱなしでした！（シヤマル）」

「うおおおおおい！何しとんねん！（孝俊）」

・・・しかし、シヤマルが何か作るうとしてガスコンロのスイッチを入れっぱなしにしており、お昼寝中のはやてを除く全員が大わらわで台所に向かったのは余談である。

その頃、拓也と高雄は・・・時空管理局の本局に出向いていた。レイジングハートとバルディツシユの強化の為、デバイスルームに向かうつもりなのだ。

ちなみに、エイミィに頼んでマリエルに連絡を入れておいてもらった。

だがエイミィ曰く、高雄が来ると知った時のマリーの顔と声が、何故か凄く嬉しそうだったらしい。

ふと、廊下を歩いていると・・・1人の小さな女の子が目にとまった。

何だかオロオロしており、半泣き状態だ。

「・・・ん？どうしたんだ・・・あの子？」

「・・・迷子かのう？」

そう言って、拓也と高雄は女の子に近付く。

「どうしたの？」

「ひっく・・・お兄ちゃんと・・・えぐっ・・・はぐれちゃったの・・・」

半泣きからマジ泣きに変わったようで、女の子は拓也に途切れ途切れに事情を説明する。

なんでも、局員である兄について来たのだが、ウロウロしてる内にはぐれてしまったと言う。

「うーん・・・どうすっかな・・・」

「拓也、お前はその子のお兄ちゃんを探しちゃれや。デバイスルムはお前も解るじゃろ？後から来ればええ」

「あ、ああ・・・」

と、言う訳で・・・拓也はその女の子を連れて、お兄さん探しをする事に。

「あ、そうだ・・・君の名前は？」

「ティアナ・・・ティアナ・ランスター・・・」

神原拓也とティアナ・ランスター・・・後に、共に闘うであろう2人の初めての出会いだった。

ティアナ・・・この時6歳。

「で、お兄さんの名前は？」

「んつと・・・ティーダ・ランスター・・・」

手を繋いで歩く拓也とティアナ。

と、そこに・・・

「おろ、拓也？」

「よう、孝昭」

本局で待機中の孝昭がやって来た。

「た、拓也・・・お前、遂にそんな幼女に手を出して・・・」
「断じて違う！！」

孝昭が言い終わる前に拓也が大声で遮り、見事なまでの回し蹴りを喰らわせたのだった。

「・・・ん？良く見たらその子・・・ティーダさんとこのティアナちゃんじゃねーか？」

「え、知ってんのか！？」

「知ってるも何も、ティーダさんは俺の同僚だよ・・・階級は俺の方が上だが、何かと世話になってんだ」

顔に拓也の靴跡を残しながら喋る孝昭。

ティーダとは同僚らしく、ティアナの事も知っているらしい。

「・・・そーいやさつき、ティーダさんがすんげえ形相で廊下を爆走してたな・・・あの人、超弩級のシスコンだから・・・」

孝昭が冷や汗を掻きながら、先程発見したティーダの状況を説明した。

ティーダは、可愛い妹のティアナ命な超シスコン兄貴なのだ。

ティーダにとって、ティアナはこの世のありとあらゆる物よりも可愛いのである。

「前に護送中の犯罪者がティアナちゃんを怖がらせて泣かせた際、通常の3倍の戦闘力を発揮して、犯人がボロ雑巾になるまでぶん殴

「さて……高雄を待たしてるし、デバイスルームに行かないとな」
「そうか……本当にありがとう」

そう言っつて、拓也はUターンしてデバイスルームに向かって歩いて行った。

そんな拓也の背中を見て……

「お兄ちゃん……拓也さんって……おつきいね……」
「……そうだな。流石に英雄と言われるだけはある……」

ティアナは、拓也の大きな背中を眺め、自分もあんな風になりた
いと……願うのだった。

この数年の後、ティアナは時空管理局に入局する事となるが、そ
れはまだ先の話……

続く

第41話 物騒な物の持ち主だからって、歴代の持ち主の全てが物騒だとは限ら

はい、第41話終了です。

次は・・・そろそろ猫姉妹の出番・・・かなあ（何）

拓也「とにかく、まだ戦闘までは時間が掛かるかな・・・」

高雄「だなあ・・・」

では、次回予告・・・今回は雄人君、よろしくー

雄人「はい、では・・・」

次回、リリカルなのはフロンティア第42話【原作に無い新形態つてやたらと強力になりそうな気がする】お楽しみに！」

第42話 原作に無い新形態ってやたらと強力になりそうな気がする(前書き)

はい、第42話です。

結構遅れてしまいましたか・・・(汗)

では、いつもの如く名言コーナーです。

- 花にストレスを与えてどうする？花は愛でてやるもんだ

(野原ひろし クレヨンしんちゃん)

- 戦うのをやめたチームは、絶対に勝てないだの

(ナリアちゃん GOLDEN AGE)

- 才能のある者がみな大成するかといえば、答えはノーだ！

だが…技を極めた達人に、共通するものが一つだけある！

それは…信念！！

(岬越寺秋雨 史上最強の弟子ケンイチ)

- 子供が道に迷った時、道標を立ててあげるのが 私たち教師おとなの仕事のハズです。

(校長先生 あひるの空)

孝俊「・・・少ないな」

拓也「ネタが切れて来たと見える」

雄人「では、第42話・・・始まります！」

第42話 原作に無い新形態ってやたらと強力になりそうな気がする

拓也がティアナを連れてティードを探していた頃・・・

高雄は、一足先にデバイスルームに到着していた。

「あ！こ、こんにちは高雄さん／＼！」

「おう、マリーちゃん。すまんおう、急にデバイスルーム使わせてくれなんてワガママ言って」

「いえいえ！高雄さんの技術力はこちらとしても勉強になりますから・・・／＼」

高雄を出迎えたのはマリエルである。

彼女は、高雄の技術力とその姿を見て、男性としても技術者としても惚れているのだ。

「拓也も連れて来てるんだが、さっき迷子を見つけてのう・・・それが済んだら来ると思うが」

「そうなんですか・・・」

「ま、先にバルディッシュの方から強化を始めるとするか・・・」

そう言って、バルディッシュを修復した時と同様にケースに入れる。

そして、プログラムを打ち込む為の準備を行う。

「あ、でも・・・龍のスピリットって、えっと・・・孝俊さん、でしたっけ？その人のなんじゃあ・・・」

ふと、マリエルが思い返したように言う。

確かに、龍のスピリットは孝俊が所持しているのに、どうやって強化するのだろうか・・・

だが、高雄からは意外な言葉が返って来た。

「はっはっは、心配いらんよ。俺の剛龍のスピリットを使えばええ」

「え？」

「剛龍のスピリットは、基本データは龍のスピリットと全く同じなんじゃ」

そう、龍のスピリットの兄弟機である剛龍のスピリットは、基本データは龍のスピリットと100%同じなのだ。

そこから、属性やステータスなどを弄っているのだ。

ちなみに、同じく兄弟機である黒龍のスピリットも基本データは同じである。

「そうなんですかあ」

「そーいう事だ。さて、組み込むとするか・・・」

そう言っつて、龍のスピリットの基本データをバルディッシュに組み込んで行く高雄。

と、そこに・・・

「ふう、やっと着いた・・・」

「お、来たか拓也」

ティアナをティータの元に送り届けた（と言うよりティータの方から来たのだが）拓也がデバイスルームにやって来た。

「俺の炎のスピリットの基本データでレイジングハートをパワーアップさせるんだったな」

「ああ。それを完全に使いこなせば、上位クラスの完全体相手でも

互角以上に戦える筈だぜ？」

全体的に見て魔導師よりも強いデジモン。

なのはやフェイトと言ったような、デジモンとともに戦える魔導師もいるが、それはほんの一部でしかない。

それに、完全体がワラワラ出て来るようになると、今のなのは達では到底歯が立たないだろう。

究極体の相手などもってのほかだ。

現に、ジュエルシードを取り込んでいたとはいえ、ヴェノムヴァンデモン相手に拓也・孝俊を含めたあの人数であれだけ苦戦を強いられたのだから。

「あとは経験・・・か」

「ああ、それだけは流石にどうしようもないからな」

経験とは、数と時間をかけて積んで行く物である。

効率などを考えれば若干楽になるが、それでもたかが知れている。

「・・・これでよし、と。バルディッシュはこれで新形態が搭載されたぞ」

【Thank you Takao】

バルディッシュがケースの中から高雄に礼を言う。

「よし、次はレイジングハートだ・・・拓也、協力頼むぜ」

「あいよ、しっかり頼むぜ・・・高雄」

拓也が自分のD-スキャナを高雄に預ける。

拓也のみならず、スピリットを扱う全員が高雄の事を心の底から信頼しており、何の気兼ねも無くメンテナンスを任せているくらいだ。

これもまた、高雄の人柄が成せる物であろう。

・・・時々ボケをぶちかますのは少々問題だが。

「・・・うん、こんなもんか・・・えっと、前に使ったのは槍だつて聞いたから・・・」

ぶつぶつ言いながら画面を弄っている高雄。

その指は、しっかりと正確にプログラムを打ち込んでいた。

(やっぱり凄い・・・高雄さん程の技術力を持った人なんて、ミッドチルダでも殆どいない・・・)

後ろでは、マリエルが呆然としながら画面を見つめていた。

既存の技術でここまでやってしまう高雄の技術力に、只々驚愕の表情を浮かべて・・・

数十分後、高雄はデバイス達の強化を終え、自動販売機の前でジュースを飲んでいた。

・・・2?のペットボトルで。

「さて、出来る事はやった・・・後は、あれを扱うのはちゃんとフェイト次第か・・・」

コーラを持ってデバイスルームに戻る高雄。

そして、部屋の中に入ると・・・マリエルがコンピュータの前で考え込んでいた。

「うーん・・・ここがこうしてこうやって・・・こうなって・・・
うーん・・・」

「高雄が打ち込んだデータを見て何とか理解しようとしている様であつたが、上手くないようだ。」

「えーっと……（ピタッ）うひゃあっ!？」

ふと、自分の頬に冷たい物が当たって驚くマリエル。

後ろを振り向くと、ジュースの缶を持っている高雄が立っていた。

「あんまり考え過ぎると体に毒だぜ？ちったあ休みんさい」

「は、はい……／＼」

椅子に座って隣同士で座っている高雄とマリエル。

マリエルは高雄からもらったジュースを持ったまま、若干顔を赤くして高雄に話しかけた。

「あ、あの、高雄さん……」

「ん？」

「高雄さんは……どうやってあれだけの技術を……？」

同じ技術者としてはやはり気になる高雄の技術力。

しかし、高雄は特に考え込む事も無く・・・アッサリとこう答えた。

「んー・・・どうやってって言われても難しいんじゃないが・・・まあ、強いて言やあ【好きだから】かのお・・・」

「好きだから・・・ですか？」

高雄の述べた理由にキョトンとするマリエル。

「【好きこそ物の上手なれ】ってな。嫌いなもん嫌々やったって面白くも何ともないじゃろ？」

「は、はい・・・」

「全てはアレだ。えーっと・・・その物事を好きになる事から始めれば良いと思うぞ？」

高雄は特に難しい事は考えていない。

ただ、好きだからやっているだけなのだ。

「なるほど・・・」

「それに、マリーちゃんは俺よりも全然若いんだ。今から難しい事を考える必要はねーさ」

そう言って、マリエルの頭を軽く撫でる高雄。

その姿は、まるで妹に対してのものに見える、

「は、はい・・・／＼／」

もっとも、当の撫でられた本人は・・・凄いドキドキしていたそう
うだ。

想い人にこんな事されれば当たり前だが・・・

「さて、と・・・強化も済んだ事だし、デバイスを持ち主に返さん
とな・・・」

そう言って、高雄は再び地球に戻って行くのだった・・・

余談だが、マリエルはこれ以降、より一層熱心に技術を磨いたと言
う。

機械その物を好きになる事も忘れず、グングンと実力を伸ばしたのだった。

その頃、本局の別の廊下では・・・

クロノ、エイミィ、ユーノ、孝昭が歩いていた。

孝昭は拓也達と別れた後、クロノ達と合流していたのだ。

「お前ら3人がかりで出てきたみたいだが・・・大丈夫なのか？」

「うん、モニタリングはアレックスに頼んで来たから」

孝昭の問いに、エイミィが答える。

モニタリングをクルーの1人、アレックスに頼んで出てきたらしい。

「闇の書について調査をすればいいんだよね？」

「ああ、これから会う2人はその辺に顔が利くから」

人間モードになっているユーノがクロノに尋ねる。

「どうやら、これからとある2人の人物に会いに行くらしい。」

本局の一室・・・2人の猫の姿をした人間(?)がソファアームに座っていた。

そこに、クロノ達4人が入って来た。

「リーゼ、久しぶりだ。クロノだ」

「わーお！クロスケ、お久しぶりぶり〜」

クロノを見た瞬間、ショートカットの髪型の方がクロノに飛びつき、クロノの顔を胸に押しつける。

「ロツテ！おわ、ちょ、離せコラ！」

「なんだとコラ、久しぶりに会った師匠に冷たいじゃんかよ　うり
うりうりうり〜」

「うわあああああ！アリア！これを何とかしてくれ〜！」

ロツテと呼ばれた方がクロノを抱きしめて胸に押しつけまくる。

クロノはもう1人、アリアと言う方に助けを求めた。

「久しぶりなんだし、好きにさせてやればいいじゃない。それに・・・まあなんだ、満更でも無かるう?」

「そんなわけ無いだ・・・」

「ニヤー!!!」

アリアは笑いながらクロノに返す。

クロノは否定しようとするが、その前にロツテがクロノを押し倒した。

で・・・色々やり始めた。

「リーゼアリア、お久し!」

「ういっす、アリア」

「うん、お久し 孝昭も元気そうじゃん」

アリアとタッチを交わすエイミィ。

孝昭もアリアとは知り合いらしく、普通に挨拶を交わした。

「孝昭と前に会ったのは・・・訓練校を卒業して少し後だったっけね？」

「もうそんなになんのか・・・4、5年ぶりになるんかなあ・・・」

アリアと会うのは久しぶりらしく、感慨に耽る孝昭。

「しっかしアタも二等空佐かあ・・・随分偉くなったもんだねえ。前に会った時は二等空士だったのに」

「時折、上層部バカの連中がうるせーけどな。本局もちよくちよく勧誘してきやがるし・・・俺は地上の方が性に合ってるんだがな」

感心するアリアに、溜息を吐いてやれやれと言った感じで返す孝昭。

孝昭からすれば、上層部は殆どの面々が地位と権力にしがみつき、自分の保身しか考えない様なバカばかりらしい。

更に、自分を引き抜こうとちよくちよく迫って来る本局にも呆れており、気苦労もある様だ。

「リーゼロッテは相変わらずだねえ」

「まあ、我が双子ながら時々測り知れん所はあるね」

なんか色々やってるロツテを見ながら、苦笑いする2人。

「えへ、じちそうさま・・・っておお？孝昭！お久しぶり〜」

そう言って、今度は孝昭に飛びかかるロツテ。

「久しぶりだな変態猫^{ロツテ}」

「コラコラ！変態猫と書いてロツテって読むなよー！」

飛びかかって来るロツテをかわしながら挨拶する孝昭。

そんな孝昭の呼びかけに抗議するロツテだが・・・

「やかましいわ、ちったあ自重せい！」

「ふにゃー！？ちょ、そんなとこ撫で・・・ニヤアア・・・／／／
！」

- 暫くお待ちください -

数分後、すっかり大人しくなったロツテ。しかも猫形態に戻っている。

ちなみに、リーゼアリアとリーゼロツテは猫を素体とした使い魔なのだ。

リーゼロツテは横になってグデーっとなっており、骨抜きにされていた。

ちなみに、孝昭は別にやらしい事をしてた訳ではない。

「うにゃああ・・・た、孝昭って・・・こんなに撫でたりするの得意だったのかあゝ・・・／＼／」

普通に撫でたり、毛繕いしただけだったりする。

骨抜きにされて気持ち良さそうにしているロツテを見て、アリアが少々羨ましそうな顔をしていたが、そこはスルーしよう。

「うちの妹がおめーと似たような性格だからな。こーいっなのは慣れてんだ」

孝昭には妹がおり、ロツテと性格が似ているらしい。

孝昭の妹は、兄譲りの魔力資質があり、一度暴れ出すと兄の孝昭でもなかなか止められないらしい。

ただ、結構単純な性格らしく、手懐けるのは楽しいが・・・それはまた別の話。

「リーゼロツテ、お久し。大丈夫？」

「ふにゃ、エイミィ・・・お久しゝ／＼／」

そう言って人間形態に戻って起き上がるロツテ。

すると、何かを感じ取り……

「……なんか美味しそうなネズミっ子がいたような……
どなた？」

ユーノに近付いて、笑顔で尋ねる。

彼からフェレットの匂いでも感じ取ったのだろうか……

「う……（汗）」

ユーノは身の危険を感じたのか、少々後ずさる。

「なんで……あんなのが僕の師匠なんだ……」

やっとこさ起き上がったクロノ。

ロツテに散々弄られたらしく顔中にキスマークが付いており、自身の不遇(?)を嘆くのだった。

「あー、そう、闇の書の搜索ね」「事態は父様からうかがってる。出来る限り力になるよ」

「よろしく頼む」

事態への協力を申し出たアリアとロツテ。

クロノは、真面目な顔で協力を頼んだ。・・・まだ顔にキスマークが付いていたが。

「エイミィさん、孝昭さん、この人達って・・・」

ユーノは、自分を挟んで座っている孝昭とエイミィに小声で尋ねる。

「クロノ君の、魔法と近接戦闘のお師匠様達」

「あの大人しそうなのが、魔法教育のリーゼアリア・・・で、さっきクロノに色々やってた変態が、近接戦闘教育担当のリーゼロツテだ」

「グレラム提督の、双子の使い魔なんだよ」

「見ての通り、素体は猫な」

エイミィと孝昭がアリアとロツテについて簡単に説明する。

すると、ロツテがユーノを見て手を振る。

「な、なるほど・・・」

ユーノは未だに身の危険を感じてるのか、顔を引きつらせながら手を振るのだった。

「二人に、駐屯地方面に来てもらえると心強いんだが、今は仕事なんだろう?」

「うん・・・武装局員の新人教育メニューが残っててね」

「そっちに出ずっぱりにはなれないのよ。悪いね」

出来れば、駐屯地である地球に来てもらいたいのだが、アリアとロツテも仕事が残っており、来る事は出来ないようだ。

「いや、実は今回の頼みは・・・彼なんだ」

そう言って、ユーノの方を見るクロノ。

クロノの言葉を聞いた瞬間、ロツテが目を光らせた。

「食っていいの!?!」

「いつ!?!」

ユーノが顔を一段と引きつらせる。

身の危険の感度がMAXまで達しようとしていた。

「ああ、作業が終わったら好きにしてくれ」

「なっ!?!おい、ちょっと待て!」

クロノの言葉に、焦って慌てて立ち上がるユーノ。

その姿に、みんなが笑うのだった。

「それで、頼みって?」

「彼の、無限書庫での調べ物に協力してやって欲しいんだ」

それを聞いたアリアとロツテは、ユーノの方を見る。

ユーノは、真面目な表情で2人を見るのだった……

翌日の昼休み・・・学校にて。

教室で、フェイトが何やら雑誌を読んでいる。

「なんだか、いっぱいあるね・・・」

「まあ、最近はどれも同じような性能だし・・・見た目で選んでいいんじゃない？」

「でも、やっぱりメール性能が良いやつがいいよね！」

「カメラが綺麗だと、色々楽しいんだよ」

フェイトが見ているのは・・・携帯電話の雑誌だった。

勿論、携帯電話など扱った事の無いフェイトは、どれが良いのか等全く解らない。

アリサ・なのは・すずかがそれぞれ選ぶポイントを述べて行く。

「でもやっぱり、色とデザインが大事でしょう？」

「操作性も大事だよー」

「外部メモリ付いてると、色々便利で良いんだけど……」

色々協議する3人。

と、そこに……

「ん、何やってんだ？」

「あ、拓也さん！」

たまたま教室前を通りかかった拓也が、教室の中に入って来た。

すっかり用務員の仕事はやっているらしい。

「……ふーん、携帯ねえ」

「拓也さんは、どんなの持ってるんですか？」

フェイトの持ってる雑誌を見ながら呟く拓也。

ふと、なのはが拓也に尋ねる。

「俺か？俺は……仲間内の連絡はD・スキャナ使ってるからなあ・
……一応、他の携帯も持ってるけど」

そう言って、赤と黒のカラーリングが施された携帯を見せる拓也。
自分のD・スキャナと同じカラーである。

余談だが、輝二は青・黒、高雄は深紅・銀、孝俊は緑・銀・・・
と、それぞれ自分のD・スキャナと同じ色の携帯を持っている。

「それにD・スキャナは元々、携帯電話が変化した物だからな」

「え、そうなんですか？」

拓也の言う通り、D・スキャナは当時拓也達が持っていた携帯電
話が、オフアニモンの力で変化した物である。

ルーチェモンを倒し、最初の冒険が終わって人間界に戻った時に、
元の携帯電話に戻ったのだが・・・

再び戦い始める際に、またしても携帯電話が変化したのだ。

「携帯を2台持つてるようなものなんですね」

「ま、そーいう事になるわな」

アリサの言葉に、軽く返す拓也。

確かにアリサの言葉は間違いではない。

「どれが良いんだろ・・・」

そして、未だに悩んでいるフェイト。

拓也は再びフェイトの持っている雑誌を覗き込む。

ふと、1つの携帯が目にとまった。

「うーん・・・お？これ、孝俊が持つてる奴に似てるな・・・」

「じゃ、これにしようかな」

「決断早っ!?!」

フェイトは拓也の言葉を聞いた途端、即決した。

そのやり取りを見たアリサはビックリしていたが。

「・・・機種変しようかな」

「すすかちゃん!?!」

すずかもまた、孝俊のと同じタイプの携帯に変更しようかと考えており、それを聞いたなのはが驚いていたのだった。

放課後・・・フェイトはプレシアに来てもらい、携帯電話を購入した。

「フェイト・・・はい、これ」

「ありがとう・・・母さん」

プレシアから携帯電話の入った紙袋を受け取って、なのは達のもとに走って行くフェイト。

携帯を見せながら、楽しそうに話していた。

「・・・楽しそうだな」

「ええ、ホントに・・・ジュエルシードを集め始めた時は・・・あんな顔はしなかったわ」

そんなフェイトを見ながら、拓也とプレシアは話していた。

なのは・アリサ・すずかと言った良い友達を持ったフェイトは・・・

・とても幸せそうに見えた。

「・・・オフアニモンから聞いたが、闇の書について極秘に調べてるんだろ？」

「ええ・・・」

「・・・何か解った事はあるのか？」

「・・・ええ、かなり重要な事が解ったわ・・・闇の書は・・・元々はそんな名前ではないらしいわ」

「何・・・？」

プレシアから闇の書に関する情報を聞く拓也。

しかし、闇の書は元々そんな名前では無かったらしい。

「本来の名は【夜天の魔導書】・・・どうやら、昔の持ち主の数人が力を求めて無理やり改竄したらしいわ」

「それで・・・今みたいになっちまったのか」

「それだけじゃないわ・・・結構前だけど、改竄に関わった持ち主の1人に・・・時空管理局の局員がいたわ」

「なっ……！」

闇の書の本来の名前を聞いた拓也。

それだけでなく、改竄に管理局員が関わっていた事に驚きを隠せなかった。

「……今のところはこれくらいね。何処から漏れるか解らないから……まだこの事は内密にしておいてちょうだい」

「ああ、解った……」

そう言っつて、2人ともフェイト達の元へ向かって行った。

(……管理局の裏の部分は遙か前から存在してやがったか……闇の書にまで関わっていたなんて……孝俊の事と言い、とんでもねー連中だぜ……)

拓也は……かつて聞いた孝俊の事もあり、時空管理局の裏側に對して強い不信感を覚えるのだった……

続く

次回……バルの新形態登場 & amp; 孝俊に異変……!?

第42話 原作に無い新形態ってやたらと強力になりそうな気がする(後書き)

はい、第42話終了です。

やつとこさ猫姉妹登場です・・・

高雄「次回からそろそろ本格戦闘かな・・・」

拓也「かもな・・・ってか高雄、夏じゃあるまいし？って(汗)」

高雄「そんなに珍しいか？」

では、次回予告・・・リーゼアリア、よろしく～

リーゼアリア「はいはい。じゃ、行くわね～

次回、リリカルなのはフロンティア第43話【主役クラスがぶち切れたらマジでおっかない気がする 前編】お楽しみに」

第43話 主役クラスがぶち切れたらマジでおっかない気がする 前編(前書き

はい、前回の投稿から3日・・・このペースはかなり久々です(汗)。

そんな訳で第43話です。

今回・・・最後辺りで、孝俊に異変が起きます。

では、名言コーナーです。

・私なら、母親の値段は100億つけても安いものだがね
(ブラックジャック ブラックジャック)

・星は壊せても、たったひとりの人間は壊せないようだな。
(孫悟空 ドラゴンボールZ)

・友よ、君たちは何故 悪魔に魂を売ったのか？
(超獣戦隊ライブマンOPコール 超獣戦隊ライブマン)

・たった一日でも 一瞬でも 忘れたくない時間があるんだ

(野上良太郎 仮面ライダー電王 俺、誕生！)

- 他人を指さして自分の弱さをそいつのせいにするな それは卑怯者のする事だ

(ロッキー・バルボア ロッキー・ザ・ファイナル)

拓也「また古いの来たなオイ・・・」

高雄「うちの作者ホントに20代なのかよ・・・(汗)」

鷹「20代だもん」

リーゼリア「じゃ、第43話・・・始めるよ」

第43話 主役クラスがぶち切れたらマジでおっかない気がする 前編

フェイトが携帯をゲットした頃・・・

エリアとロッテが、ユーノに無限書庫について説明を行っていた。

「管理局の管理を受けている、世界の書籍やデータが全て収められている、超巨大データベース」

「いくつもの歴史が丸ごと詰まった・・・言うなれば、世界の記憶を収めた場所」

「それがここ・・・無限書庫」

この無限書庫には、幾多もの次元世界の歴史が書籍やデータとなって収められている。

勿論、なのは達の地球に関しての事も解る。

但し、拓也達の出身である、本来存在しない筈の異世界の地球・・・

・即ち、平行世界に関しては流石に解らないが。

「とは言え、中身の殆ど全てが未整理のまま」

「ここでの探し物は大変だよ？」

「本来なら、チームを組んで年単位で調査する場所なんだしね」

無限書庫は、あまりの広さの為に殆ど整理できず、半ば放置気味になっていたのだ。

本来なら、沢山の人数でチームを組んで、何年もの時間をかけて調査しなければならぬのだから。

「過去の歴史の調査は、僕らの一族の本業ですから。検索魔法も用意してきましたし、大丈夫です」

「そっか・・・君は、スクライアの子だっけね」

「私もロツテも仕事があるし、ずっとつて言う訳にはいかないけど・・・なるべく手伝うよ」

「可愛い愛弟子、クロスケの頼みだしね」

ユーノの一族は、遺跡の調査などが本業なので、歴史に関する作業は得意中の得意である。

同じスクライアの一族であるユーノも、例外ではない。

ユーノを中心に、アリア、ロツテは闇の書に関する調査を始めるのだった・・・

また同じ頃・・・エイミイ達が住んでいるマンション（駐屯地）。エイミイが買い物から帰って来て、遊びに来ていたのはとフェイト、そして拓也が手伝っていた。ちなみに、アルフは子犬フォームでビーフジャーキーを食べていた。

「艦長、もう本局に出かけちゃった？」

「うん、アースラの武装追加が済んだから、試験航行だって。アレックス達と」

「武装つて言うつと・・・アルカンシエルかぁ・・・あんな物騒な物、最後まで使わずに済めばいいんだけど」

リンディはアースラの追加武装が済んだので、試験航行に立ち会う為に本局に出かけていた。

アルカンシエル・・・エイミイが溜息をつく程なので、相当物騒な物なのだろう。

「クロノ君もいないですし、戻るまではエイミーさんが指揮代行だ
そうですよ?」

「責任重大」

「はは・・・大変だな」

なのはの言葉に、アルフがからかい半分でエイミーを茶化す。

拓也は、苦笑いしながらエイミーを労わっていた。

「ははっ、それもまた物騒な・・・」

そう言いつつ、買って来たかぼちゃを撫でるエイミー。

そして、それを片手で掴み・・・冷蔵庫に持って行くこととする。

「ま、そうそう非常事態なんて起こる訳が・・・」

エイミーがそう言いかけた次の瞬間、ブザーが鳴り響いた。

モニターには、【Emergency】と出ている。

「・・・非常事態・・・起きたな」

「・・・マジですかい」

拓也が呆然となって呟く。

エイミーは・・・orzみたいな感じになっていた。

そして、コンピュータの前でモニターを見るエイミー、なのは、
フェイト、アルフ、拓也。

「文化レベル0、人間は住んでない砂漠の世界だね・・・」

モニターには、砂漠の世界にいるシグナムとザフィーラが映っていた。

実は、隅っこの方にちっちゃく孝俊が映っているのだが、あまりにちっちゃ過ぎて気付かれていない。

「結界を張れる局員の集合まで、最速で45分・・・うん・・・マズイなあ・・・」

頭を抱えるエイミー。

そして、フェイトとアルフはお互いに頷くと・・・

「エイミー、私が行く」

「アタシもだ」

「うん・・・お願い！・・・なのはちゃんと拓也君はボックス、ここで待機してて！」

「はい！」

「あいよ！」

フェイトとアルフの申し出を、エイミーはありがたく受ける事にした。

クロノモリンディもない今、これと言った有効策も思いつかない。

と、すれば・・・もう力任せに行くしかないのだ。

フェイトは一旦自室に戻り、準備をする。

そこに、高雄がやって来た。

「・・・出撃か？フェイト」

「うん・・・守護騎士達が・・・出たから」

「なら丁度良い。バルディツシユの強化改造は済んだからな、危なかったら新形態を使うと良い」

「うん、ありがとう・・・行くよ、バルディツシユ！」

【Yes sir】

時間は少し巻き戻り、砂漠地帯・・・

シグナム、ザフィーラ、孝俊がやって来ていた。

「・・・ここは無人の世界だったな」

「ああ、人間はいない。魔法生物しか存在していない筈だ・・・だが、大丈夫か孝俊。今朝は何だか顔色が悪かったが・・・」

辺りを見回す孝俊。

シグナムはそれに答えた後、孝俊を心配して尋ねる。

孝俊は朝、顔色が悪かった・・・本人曰く、若干息苦しかったらしい。

「ああ、少々息苦しい程度だ、心配無い・・・それよりも急いだ方が良い」

そう言いつつも、孝俊には解っていた。

自分の中にある【何か】が、異常な反応を起こそうとしているのを・・・

前にも、似たような感じはあった。

海に沈んでいた6つのジュエルシード搜索の際、フェイトを助け

に行こうとした時・・・

立ちはだかったクロノに対して放った眼光と威圧・・・

その時も、自分の体内で【何か】が渦巻いていた・・・否、暴発しようとしていたのだ。

それでも今は、とにかくリンカーコアの蒐集を優先しようとする孝俊。

心配無い、とシグナムに言って再び辺りを見回す。

「ここはバラバラに分かれよう。俺は相手をブツ倒したら念話で2人を呼ぶから」

「うむ、解った・・・だが、無理はするな」

「ああ」

孝俊は蒐集は出来ない為、相手を倒したらシグナムとザフィーラを呼ぶ手段を採る事に。

ザフィーラはそれに頷いた後、シグナムと共に飛んで行った。

「さーて、張り切ってやりましょ（グニユツ）・・・ん？」

飛んで行った2人を見た後、別方向に歩きだした孝俊。

だが、直後に何かを踏んづけた。

「グオオオオオ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

孝俊が冷や汗を垂らし、おそろおそろ上を見上げると・・・

そこには、明らかに怒って唸り声を上げているワームの怪物がいた。

そう、孝俊が踏んづけたのは、ワームの怪物の尻尾だったのだ。

「グオアアアアアア!!!」

「NOOO!!!」

ワームの怪物が雄叫びを上げ、孝俊はその場から猛ダッシュで逃げ出した。

そこから・・・孝俊とワームの怪物は、凄まじい追いかっこを展開するのであった。

孝俊が必死こいて逃げ回っている頃・・・シグナムはザフィーラとも別れ、巨大なワームか蛇か解らんような魔法生物と戦っていた。巨大な体躯もさながら、砂の中から攻撃して来る為かなり厄介な相手である。

「はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・ヴィータが、手こずる訳だな・・・少々、厄介な相手だ・・・」

「グオオオオオ!!!」

「なっ・・・!!!?!?」

そう言っつてカートリッジを入れようとした瞬間、背後からワームの尻尾と触手が飛び出し、シグナムを捕えた。

レヴァンティンは手動でカートリッジを入れなければならない為、どうしてもそこで隙が出来てしまうのだ。

「くっ・・・しまった・・・!」

ワームが唸り声を上げて、縛り上げて捕えたシグナムを睨む。

そして、触手でシグナムを締め上げる。

「う……うああっ！」

ワームが先端の鋭い尻尾でシグナムを突き刺そうと動き出す。だが、その時……機械音が聞こえた。

【Thunder Blade】

その直後、金色の魔力刃が何発もワームに降り注いで突き刺さり、シグナムを縛る触手も切った。

シグナムが上を見ると、そこには金色の魔法陣を展開しているフェイトがいた。

「ブレイク！」

フェイトの言葉と共に、魔力刃が爆発してワームを倒した。流石に上からの不意打ちに加え、フェイトの強烈な魔法とあつては耐えられなかったようだ。

その頃、ザフィーラは雷が鳴り響いている方を見つめていた。

「ご主人様が気になるかい？」

「……お前か」

「ご主人様は1対1……こつちも同じだ」

ザフィーラが振り向いた先には、アルフがいた。

前回と違い、両腕と両足に武装が追加されている。

「シグナムは我らの将だが、主ではない・・・！」
「アンタの主は、闇の書の主・・・っていつ訳ね」

そう言っつて、互いに構えをとる2人。

再び、フェイトとシグナムはと言つと・・・空中で静かに対峙していた。

ちなみに、ワームは砂の中に逃げて行つた。

『フェイトちゃん！助けてどうすんの！捕まえるんだよ！』
「あつ、ごめんなさい・・・つい・・・」

通信でエイミィに怒られ、謝るフェイト。

『まあまあ、やっちゃまったもんはしょーがねーよ。フェイト、頑張れよ！』

「拓也・・・解つた！」

だが、拓也がエイミィを宥めながらフェイトに言つ。

「礼は言わんぞ、テストロツサ」

「・・・お邪魔でしたか？」

「・・・蒐集対象を、潰されてしまった」

そう言っつて、シグナムはカートリッジをレヴァンティンに入れる。

「まあ、悪い人の邪魔が私の仕事ですし・・・」
「そうか・・・悪人だったな、私は」

そう言っつて、カートリッジを1発ロードするシグナム。
そして、フェイトを睨みつけるのだった。

その頃、エイミー達の所に再び警報が鳴り響いていた。

「あっ・・・もう1か所!？」

モニターには、1人で空を飛んでいるヴィータが映っていた。
しかも、闇の書を持っていたのだ。

「本命はこっち・・・!なのはちゃん、拓也君!」

「はい・・・!」

「おう!」

なのはと拓也が、2人がかりで出撃する・・・!

同じ頃、本局ではグラムとリンディが話をしていた。

「久しぶりだね、リンディ提督」

「ええ・・・」

「闇の書の事件・・・進展はどうだい?」

「なかなか難しいですが、上手くやります」

グレアムからの問いに答えて、紅茶を飲むリンディ。
グレアムは一呼吸置いて、続ける。

「君は優秀だ。私の時の様な失態はしないと信じているよ」

「・・・夫の葬儀の時、申し上げましたが・・・あれは提督の失態ではありません」

そう言って、カップを置くリンディ。

そして、笑顔を見せてグレアムに答えた。

「あんな事態を予測できる指揮官なんて、いませんから」

グレアムは・・・表情を変えずにリンディを見つめるのだった。

無限書庫では・・・ユーノが座禅を組むような格好で、闇の書について検索を行っていた。

「へえ、器用なもんだねえ。それで、中が解るんだ？」

「ええ・・・その、まあ・・・」

大量の本を運んで来るリーゼロッテの質問に、少々ぎこちない感じで答えるユーノ。

「あの・・・リーゼロッテさん達は、前回の闇の書の事件を見るんですよね？」

「うん・・・ほんの、11年前の事だからね」

「その・・・ホントなんですか？その時に、クロノのお父さんが亡くなったって・・・」

前回の闇の書の事件を見たと言うリーゼロッテに尋ねるユーノ。
リーゼロッテは本を一旦手放して、悲しそうな顔をして語り始めた。

「ホントだよ・・・あたしとアリアは父様と一緒にだったから、すぐ近くで見てた・・・」

封印した筈の闇の書を護送中のクライド君が・・・あ、クロノのお父さんね。クライド君が、護送艦と一緒に沈んで行くところ・・・」

クロノは、11年前の闇の書の事件の時に、父親を亡くしていたらしい。

その頃本局の廊下では、クロノとリーゼアリアが話していた。

「封印手段はやっぱり、アルカンシエルになっちゃったな」

「他に無いもんね・・・あんな大出力が出せる武装・・・」

闇の書の封印手段は、アルカンシエルで行うつもりらしい。

「あれは周辺への被害が大き過ぎる・・・撃たずに済めばいいんだが」

「・・・主が見つければいいんだけどね・・・まあ、例え主を押さえた所で、闇の書には転生機能があるから・・・」

新しい主に渡るまで、ほんの数年ばかり問題を先送りに出来るだけ

「だけど」

クロノとしては、あまりアルカンシエルは撃ちたくないらしい。だが、例え主を押さえた所で、転生機能を持つ闇の書を完全に停止させる事は不可能なのだ。

「それでも、その場で大規模な被害が出るよりはずっと良い」

「まあね・・・」

そして・・・砂漠で対峙しているフェイトとシグナムは、未だに睨み合っていた。

「預けた決着は、出来れば今しばらく先にしたいが、速度はお前の方が上だ。逃げられないのなら、戦うしかないな」

「はい。私も、そのつもりで来ました」

そう言つて、互いに武器を構える2人。

「その前に、1つ聞いていいですか？」

「？」

武器を構えたまま、フェイトがシグナムに尋ねる。

「・・・孝俊は、そちらにいるんですか？」

「・・・ああ。孝俊は、我々に協力してくれている」

フェイトの問いに、シグナムは頷く。

「・・・お前達の仲間であった事も聞いている。それでも、あいつは我等が主の為に協力してくれているのだ」

「そう・・・ですか」

「・・・1つ聞こう。テスタロッサ・・・お前にとって、孝俊はどのような存在だ？」

シグナムの言葉を聞き、少々沈んだ感じで答えるフェイト。
ふと、シグナムが孝俊についてフェイトに尋ねた。

「孝俊は・・・私の家族・・・また剣の師匠であり、時には兄の様で・・・そして何より・・・私が好きな人です」

「そうか・・・（なるほどな・・・シヤマル、そして主はやて・・・ライバルが増えてしまいましたよ）」

シヤマルとはやてが孝俊に好意を抱いている事に気付いているシグナムは、2人（特にはやて）を心の中で心配（？）するのだった。
ちなみに、シグナムも孝俊の事は好きだが、仲間として見ている。
つまり、LOVEではなくLIKEと言う事だ。

「だが、どうする・・・力づくで取り返しに来るか？」

「いえ・・・それが孝俊が選んだ道なら、無理に取り返すつもりはありません。私は、孝俊が帰って来るまで待っていますから・・・！」

「・・・そうか」

そして、再び武器を構え直し・・・2人同時に飛びかかった！

同時に武器がぶつかり合い、交差する。

そして、着地した瞬間にフェイトが残像を残すようなスピードで動き、シグナムの背後を取る。

そして、バルディッシュを振り下ろす

「はあああつー!!」

だが、シグナムはレヴァンティンを鞘に収め、それを防ぐ。

そして、すぐさま鞘から出したレヴァンティンを一閃し、フェイトを弾き飛ばす。

【Schlange form】

シグナムはカートリッジを1発ロードし、レヴァンティンを連結刃形態のシュランゲフォルムにする。

連結刃がフェイトに襲い掛かるが、フェイトはそれをギリギリまで引き付け、飛んでかわす。

【Load cartridge Haken Form】

フェイトは着地と同時にカートリッジを1発ロードし、ハーケンフォームに変形させる。

「ハーケンセイバー！」

フェイトは横に思い切り振りかぶり、バルディッシュをスイングする。

その鋭いスイングから、魔力刃が射出された。

【Blitz rash】

シグナムは連結刃を操作してハーケンセイバーを防ごうとする。
だが、ハーケンセイバーはそれをも掻い潜って飛んで来た。

「・・・はっ!?!」

「はああああああああっ!」

シグナムはそれを飛んでかわすが、上空からフェイトが襲い掛かり、バルディッシュを振り下ろした!

だが・・・シグナムは咄嗟に鞘を使ってそれを防いだ。

「っ・・・鞘・・・!?!」

「ぬあああああっ!?!」

フェイトが驚いた隙を見逃さず、シグナムはフェイトを蹴り飛ばす。

咄嗟に手でガードしたフェイトだが、衝撃は抑えきれずに地面に落下していく。

【Plasma Lancer】

だが、落下しながらもプラズマランサーを放つ。

それが・・・シグナムに向かって行き、爆発した。

【Assault Form】

着地すると同時に、通常のアサルトフォームに戻すフェイト。
それと同時に、直撃は免れたらしいシグナムが降りて来た。

【Schwert form】

シグナムもまた、レヴァンティンを長剣形態のシュベルトフォルムに戻す。

2人は互いにカートリッジをロードし、魔法陣を展開する。

「プラズマ……」

「飛竜……」

フェイトの掌に雷が集まり、シグナムの剣が再び連結刃になって炎を纏う。

そして……同時に必殺技を放った！

「スマツシャー！」

「一閃！」

必殺技同士がぶつかり合い、中心で爆発を起こす。

それと同時に2人が飛び上がり、それぞれカートリッジを1発ロードする。

「はああああああああああ！！！！」

そして再び、激しい打ち合いを開始した！

その頃、ザフィーラと戦っているアルフは……

「……アンタも使い魔、守護獣ならさあ……ご主人様の間違いを正そうとしなくて良いのかよ！？」

「……闇の書の蒐集は、我らが意志。我らが主は、我等の蒐集に

ついでは何もご存じない！」

「なんだって……そりゃ一体……!？」

ザフィーラの言葉に、驚きを隠せないアルフ。

ザフィーラは握り拳を作ると……こう言った。

「主の為であれば血に染まる事も厭いとわず。我と同じ守護の獣よ、お前もまたそうではないのか……!」

そう言って、再び構えるザフィーラ。

「そうだよ……でも、だけどさ!」

また同じ頃、ヴィータが山岳地帯を飛びながらシャマルと念話で話していた。

【シグナム達が……!?!?】

【うん……砂漠で交戦してるの。テストロッサちゃんと、その守護獣の子と……】

【た、孝俊は……どうしてる!?!?】

【……魔法生物に追いかけて回されてるわね】

【なんじゃそりゃ(汗)】

シヤマルから戦況を聞くヴィータ。
ちなみに孝俊は・・・まだ逃げ回っているらしい。

【長引くとまずいな・・・助けに行くか】

だが、前方に何かを発見し、急ブレーキをかけて止まるヴィータ。

【ヴィータちゃん？】

【くそお・・・こっちにも来た！しかも・・・2人いやがる！1人は例の白服・・・】

「高町なんとか！！」

「なあ！？なのはだってばあ！な・の・は！」

崩れ顔で反論するのは。

どーやらまだヴィータは名前を覚えて無いらしい。

「ぷくくくく・・・高町なんとかって・・・なんとかって・・・やべえ、腹が・・・ぷくくくく・・・！」

ちなみに、なのはの後ろでは・・・ヴリトラモンに進化している拓也が腹を抱えてうずくまって笑っていた。

アグニモンでは、高くジャンプ出来ても空は飛べない。

その為、ヴリトラモンに進化したのだ。

「拓也さんも笑わないでよおー！！」

「くくく・・・わ、わりい・・・」

涙目で拓也に怒るなのは。

拓也は必死に笑いを堪えながら謝った。

なのはは気を取り直し、ヴィータに話しかける。

「ヴィータちゃん・・・やっぱり、お話聞かせてもらう訳にはいかない？もしかしたらだけど、手伝える事とかあるかもしれないよ？」

ヴィータは一瞬考えるが・・・

「うるせえ！管理局の言う事なんざ信用できるか！」

「私、管理局の人じゃないもの。民間協力者」

（だけど・・・ヴィータの言う事も俺には納得できる。俺も管理局を信用しきってる訳じゃねーしな・・・）

ヴィータは怒鳴るが、なのはは表情を崩さない。

ヴリトラモンは・・・考え込んでいた。ヴィータの言う事も、完全には否定できないのだ。

自分も・・・管理局に対して完全に信用している訳ではない。

（闇の書の蒐集は魔導師1人に付き1回・・・つまり、こいつを倒してもページにはなんないんだよな・・・）

ヴィータはなのはを見て考える。

なのはのリンカーコアは1度蒐集しており、もう蒐集する事は不可能なのだ。

(かと言って・・・あのヴリトラモンにはアタシじゃ勝ち目がねえ・
・ヴォルケンリッター全員でかかっても、勝てるかどうか解らね
えし・・・それ以前に奴には魔力がねえ)

ヴリトラモンには手を出さないように孝俊から言われた事もあり、
ヴィータは戦闘を避ける方向で考える。

第一、ヴリトラモンには魔力が無いので、どっちにしる蒐集は出
来ないのだ・

(カートリッジの無駄遣いも避けたいし・・・)

「ヴィータちゃん・・・」

「・・・ブツ倒すのは、また今度だ!」

そう言って、ヴィータが魔力の弾を形成し、なのはに向ける。

「むっ・・・!」

それを見たヴリトラモンがなのはの前に出て、ガードの体勢を取
る。

「吼える! グラーファイゼン!」

【Eisengeheul】
アイゼンゲホイル

グラーファイゼンで魔力の弾を叩くと、その場で強烈な閃光と爆
音が響いた。

どつちやら目くらましだったようである。

「ぎゃあっ!?!」

「くっ……！」

グリトラモンが咄嗟になのはを覆うように抱く。
なのはは耳を塞ぎ、グリトラモンに抱かれていた。
その隙に、ヴィータは遠くへと離れた。

【……master】

「うん……！」

レイジングハートがなのはに呼びかける。
なのはは……何をするか決めた様で、それに頷いた。

「よし……ここまで離せば攻撃も来ねえ……次元転送……！」

だが……転移魔法で離脱しようとした瞬間、ヴィータは目を疑った。

なんと、なのはとグリトラモンがそれぞれデバイスと武器を構えていたのだ！

「行くよ！久しぶりの長距離砲撃……！」

「狙い撃ちはあんまり得意じゃねーが……威力を抑えれば発射した衝撃でのブレは無くなるし、ダメ元でやってみるか……！」

【Load cartridge】

カートリッジを2発ロードして、発射態勢に入る。
グリトラモンも、しっかりと前方を見据えてルードリー・タルパ

ナを向ける。

「まさか・・・撃つのか！？あんな遠くから!？」

ヴィータは見誤った・・・なのはの砲撃の精度を。

【Divine Buster Extension】

「デバワイイイン・・・バスタアアアアア!!!」

「セービング・コロナブラスター!!!」

セービング・コロナブラスター 使用者：ヴリトラモン オリジナル技

拓也が自分で考えて開発した、威力を半分ほどに抑えたコロナブラスター。

全開で撃つと、発射時の衝撃で狙いが多少ブレてしまうコロナブラスターの欠点を補った形。

必殺の威力こそ無いものの、射程距離と命中精度は格段にアップしている。

主に、長距離射撃で使用するヴリトラモンの技。

敵を倒すのではなく、牽制、捕獲、または気絶させる目的で使う。

2つの砲撃が・・・ヴィータに向かって一直線に飛んで行った!

「嘘……！」

そしてそれが……ヴィータのいる場所で爆発した。

【直撃ですね】

「ちよつと……やりすぎた？」

「……かもしれねーな」

【いいんじゃないでしょうか】

だが、その先には……ヴィータの前でそれを防いだと思われる
仮面の男がいた。

「あ……あなた……」

「……行け。闇の書を完成させるのだろう？」

ヴィータは気を取り直すと、再び魔法陣を展開し、転移魔法を使
う。

なのはは再び砲撃を撃とうとするが……

「きゃあっ!?!」

「うわっ!?!」

その前に仮面の男が放ったバインドに捕まってしまった。

ヴリトラモンも同じくバインドに捕まっている。

「バインド……! そんな……あんな距離から、一瞬で……!」
「?」

「この野郎……舐めた真似しやがって……!」

ヴリトラモンはそこから力を込め……

「うおらあああああー!!」

バキイイイイイイン!!

なんと、バインドを力づくで破ったのだった。
流石にパワーに優れたビーストスピリットである。アグニモンで
は破れなかったかもしれない。

「くうううっ!」

なのも、バインドブレイクでバインドを破る。
だが、その時には既に仮面の男もヴィータも消えていたのだった。

その頃・・・砂漠地帯のフェイトとシグナムは・・・

(ここに来て・・・なお速い。目で追えない攻撃が出てきた・・・
早目に決めないとまずいな)

腕から血が滴り落ちているシグナム。
フェイトのスピードについて行けなくなりつつあったのだ。

(強い・・・クロスレンジも、ミドルレンジも圧倒されっぱなしだ。
・・・今はスピードで誤魔化してるだけ・・・まともに喰らったら、
叩き潰される・・・!)

フェイトも、足から血が流れている。
スピードこそ勝っているが、他は圧倒されてしまつのである。

【サー、アレを使いましょう】

「バルディッシュ・うん、そうだね」

バルディッシュの申し出に、フェイトが頷く。
そして・・・

【Load cartridge・・・Dragon form
set up】

カートリッジを2発ロードすると・・・バルディッシュが変形し、
剣になった！

しかもそれは・・・

「こ、これって・・・孝俊の・・・」

「グリーンドラモンの・・・機龍牙・・・だと・・・!?!?」

そう、ドラゴンフォームはグリーンドラモンの武器、機龍牙を
模した物だったのだ。

フェイトもシグナムも、それには驚きを隠せなかった。

「よし・・・行くよ、バルディッシュ・・・!」

【Yes sir】

そして・・・フェイトが駆け出し、シグナムも動く。
だが・・・

「・・・あ・・・っ!？」

なんと、先程なのは達の所にいた筈の仮面の男がフェイトの身体を貫いていたのだ。

「テストロツサ・・・!」

シグナムもまだ状況を完全には理解できていなかった。
だが、それを尻目に・・・仮面の男はフェイトからリンカーコアを取り出した。

「ああ・・・うああああああつ!!!!」

「貴様・・・っ!？」

シグナムは怒りの声を上げるが、リンカーコアを見て表情を歪めた。

「さあ・・・奪え」

仮面の男が、フェイトのリンカーコアを差し出す。

シグナムは、仮面の男を睨みつけた。

確かに、はやての為にもリンカーコアは必要だ。だが、こんな形で手に入れたくはなかったのだ。

シグナムは・・・戸惑っていた。

「どうした？リンカーコアが必要なだろう・・・？」

仮面の男がシグナムにリンカーコアを蒐集するように促す。

ゾクッ

が、次の瞬間・・・凄まじい殺気が自分を貫くのを、仮面の男は感じた。

咄嗟に後ろを振り向く仮面の男。

だが、それと同時に何者かの拳が顔面にめり込み・・・仮面の男はまるで紙切れの様に吹っ飛んでいた。

仮面の男はまるで水面を跳ねる石の様に、凄いスピードで地面をバウンドしていく。

フェイトは地面に倒れ伏しており、シグナムが駆け寄っていた。

リンカーコアはまだ無事なようだ。

「・・・孝俊・・・!？」

そして、シグナムが見た物は・・・砂漠に佇む孝俊の姿だった。

だが・・・何やら様子がおかしい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・！」

そう、孝俊は “進化していなかった” のだ。

そうになると、生身である仮面の男をブツ飛ばした事になる。

「ど・・・・・・・・どういう事だ・・・・・・・・!？」

シグナムは、孝俊の瞳を見て驚いた。

黒と蒼だったはずの孝俊の目が・・・両方とも蒼になっていたのだ。

しかも、目にはハイライトが無く・・・まるで感情を感じさせなかった・・・

ブツ飛ばされた仮面の男は・・・ヨロヨロと立ち上がっていた。

(な、なんだったのだ、今は・・・・・・・・!?!一瞬だったぞ・・・・・・・・!?!)

シグナムは今の孝俊を見て、戦慄を覚えずにはいらなかった。

普段見ている、いつもの優しい彼の姿は……そこには無かった・
・

仮面の男は……やってしまった。

長い間眠っていた忌まわしき強大な力を……自分の行動が引き
金になって、解放してしまったのだ。

次回……忌まわしき力を纏い、孝俊が大暴れ……！

続く

第43話 主役クラスがぶち切れたらマジでおっかない気がする 前編（後書き

はい、第43話終了です。

孝俊の中にある強大な力が暴発しました。

1章で紹介したので、この場では紹介は控えさせていただきますが・

・

高雄「おいおいおいおい・・・こりやまずいんじゃね？」

雄人「忌まわしき強大な力・・・一体どれほどの物なんでしょうか・

・・・」

拓也「と、とにかく・・・次回予告行こう」

では、次回予告・・・リーゼロッテ、どうぞ〜

リーゼロッテ「な、なんなのよあの化物は・・・（滝汗）

次回、リリカルなのはフロンティア第44話【主役クラスがぶち切れたらマジでおっかない気がする 後編】お楽しみに・・・！」

第44話 主役クラスがぶち切れたらマジでおっかない気がする

後編(前書き

はい、第44話です。

2週間ぶりの投稿・・・ペースが再びガクンと落ちました(汗)

では、名言コーナーです。

- 俺の強さに、お前が泣いた！

(キントロス 仮面ライダー電王)

- さあ、お前の罪を数えろ！

(左翔太郎&フィリップ 仮面ライダーW)

- もし俺の仲間にかかったら、おまえをこの島ごとぶっ飛ばす
！！

(モンキー・D・ルフィ ONE PIECE)

- 人を守る為にライダーになったんだから、ライダーを守ったって良い！！

(仮面ライダー龍騎 仮面ライダー龍騎)

・ 剣1本でも、この眼に留まる人々であればなんとか守れるで
きるよ

(緋村剣心 るろうに剣心)

・ 命の取捨選択なんてオレには無理！拾える命は全部拾う！

(武装錬金 武藤カズキ)

高雄「今回の名言はライダーが多めだな」

孝昭「んな事より・・・前回暴走したアレ、どうなるんだ？(汗)」

拓也「そ、それは今回を読んでから・・・(汗)」

リーゼロツテ「だ、第44話・・・始まるよっ！」

第44話 主役クラスがぶち切れたらマジでおっかない気がする 後編

砂漠で激戦を展開するフェイトとシグナム。

拓也・なのはも山岳地帯でヴィータと対峙する。

遠距離砲撃でヴィータを狙い撃つ拓也となのはだったが、突如現れた仮面の男に阻まれてヴィータを逃がしてしまった。

シグナムと激戦を続けるも、劣勢になりつつあったフェイトは遂に、新形態・ドラグーンフォームを発動させる。

だが、動き出した瞬間に後ろから忍び寄った仮面の男にリンカーコアを抉り出されてしまう。

シグナムにリンカーコアを奪うように促す仮面の男。

が、次の瞬間、とんでもない殺気が仮面の男を貫き・・・仮面の男が振り向いた瞬間に、それを殴り飛ばす。

シグナムが見た物は・・・

進化もせずに砂漠に静かに佇み・・・

片目にしか無かった筈の蒼い瞳を両目に光らせ・・・

不気味な笑みを浮かべる孝俊の姿だった・・・

かつて・・・管理局の闇が生み出そうとした最大最強にして究極の生体兵器、アンリミテッド・ダイナモ。

その血を継いだ息子の中で、その忌まわしき力が今、爆発する・・・

989

Side 孝俊

「ぬおおあああああああああああ！！！！」

必死こいてワームの怪物から逃げ回る俺。

流石に怪物、スタミナが尽きねえ・・・（汗）

【Load cartridge Dragon form】

「フェイト・・・とバルディッシュのあれは・・・!?!」

フェイトがバルディッシュからカートリッジを2発ロードする。
すると・・・なんと、グリーンドラモンの機龍牙になったではないか。

・・・こりゃ恐らく高雄の仕業だろうな。

デバイスにあんな芸当が出来るのは、せいぜい奴ぐらいだ。

それと同時に・・・フェイトとシグナムの魔力にあてられたのか・
・俺は、再び息苦しくなる。

どうも今朝からこんな調子だ・・・一体、俺の身体に何が・・・?

だが、考える間もなく・・・急展開が起こった。

「・・・あ・・・っ!?!」

「テストロツサ・・・!」

仮面の男がフェイトを背後から不意打ちし、リンカーコアを取り出した。

「ああ……うあああああ……！」

ドクンッ

フェイトの悲鳴を聞いた瞬間、俺は……

ブチッ

フェイトを庇って衝撃波を防ぐシグナム。
ここでフェイトからリンカーコアを奪うのは簡単だが、それは彼女の騎士道精神に反する。

それに・・・仮面の男の様にここでフェイトに手を出せば、自分は間違いなくあの怪物孝俊の標的になる・・・
シグナムは本能でそう感じ取っていた。

「おのれっ!!」

仮面の男が猛スピードで孝俊に襲い掛かり・・・拳を振り上げる。

ブンッ!!

だが、その拳はあっさりと空を切る。
捉えたと思いきや・・・瞬間的に孝俊が消えて空振ってしまったのだ。

「なっ・・・(ドゴンッ!!)(ぐふあああっ!!?)」

そして空振った瞬間に、またしても地面に叩きつけられる仮面の男。

瞬時に仮面の男の上に移動していた孝俊のパンチが顔面に命中し

ただ。

「ガアアアアッ！」

「ぬんっ！」

更に超スピードで仮面の男に拳を打ち込む孝俊。
仮面の男は咄嗟に障壁を張るが・・・

ガゴンッ！・・・ビシビシッ・・・バキンッ！

「な、何だと・・・！！？」

防いだ瞬間、すぐに割られてしまったのだ。

そして間髪入れずに孝俊のパンチが飛び、仮面の男の顔面を捉える。

「ガッ！！？ぐう・・・！」

砂漠を転がって行く仮面の男。

何十発・・・いや、もつとだろつか。とんでもない数の連打だった。

「が・・・ぐうお・・・っ」

それでも何とか立ち上がる仮面の男・・・
だが、もはや仮面はグシャグシャで全身傷だらけだった。

（な・・・なんという・・・事だ・・・たかが生身の人間に・・・
私がこの有様とは・・・）

未だに目の前にいる孝俊が理解出来ない仮面の男。
進化すれば確かに脅威だが、生身など恐るるに足らず・・・そう
思っていた。

だが、その考えはあっけなく・・・粉々に砕かれた。
進化していない生身の人間に手も足も出ず、反撃も出来ずに蹂躪
されてしまったのだから。

しかもこの仮面の男は、不意を突いたとはいえフェイトの後ろを
取る程の実力を持っている。
更に、歴戦の実力者であるシグナムにも気配を悟られる事は無か
った。

それ程の実力者でも・・・目の前にいる怪物には、まるで敵わな
かったのだ。

(仕方が無い・・・フェイト・テストロッサのリンカーコアは断念するしかあるまい・・・だが・・・こいつからどう逃れるか・・・！)

仮面の男は・・・自分の方を見て不気味な笑いを崩さない孝俊を見て・・・何とか脱出方法を考えていた。

Side シグナム

何と言う事だ・・・私が存在を確認できず、不意打ちとは言えテストロッサが後ろを取られる程の奴が・・・

「グウオオオオオオオオツ！！」

「がああっ!？」

進化もしていない孝俊相手に・・・手も足も出ない・・・だと？

確かに、孝俊はデジモンに進化すれば強い・・・

しかし・・・生身では仮面の男どころか、並の魔導師にさえ勝て

る様な力は無かった筈だ（並の魔導師なら油断してれば別かもしれないが）。

それに・・・孝俊の雰囲気の代わりよう・・・あれは一体・・・

「どうなっているんだ・・・孝俊は・・・」

私は、孝俊の魔力を遠目から測ってみる事にした。

前に、僅かだが孝俊に魔力がある事は解っていた・・・

そして孝俊の魔力を見た私は・・・驚きを隠せなかった。

（・・・・・・なっ!?!?・・・軽く見積もっても・・・SS+・・・
だど!?!?）

SS+・・・これは私やテストロッサどころか、主はやての魔力
すら上回る。

だが、前に見た時はたかだかFランク程度・・・最低ランクだった筈だ。

しかし・・・テストロッサを上回るスピードに、仮面の男の障壁
をいとも容易くぶち破るパワー・・・

間違っても、今の孝俊がSランクを下回る事はまず無い。

そうこう考えてる間も、孝俊は尚も仮面の男に猛攻を加えている。私は・・・この場から動かなかった・・・否、動けなかつたのだ。

本能で悟つたのだ。

無闇に近付けば・・・叩き潰される、と・・・

S i d e o u t

「ガアアアアアアアッ!!」

既にボロボロの仮面の男に対し、尚も攻撃の手を緩めない孝俊。

目の前の物を破壊する・・・孝俊の頭の中は・・・それだけだった。

ドオオオオオオオン!!

『グオオオオオオオオオオ・・・』

だが、そんな最中・・・ワームの怪物が現れた。

どうやら孝俊を追いかけていたあのワームのようで、孝俊を見て唸り声を上げている。

そして・・・間髪入れずに孝俊に向かって猛スピードで突進していく！

ガシッ！

だが、孝俊は・・・空中に浮かび上がり、なんとワームの頭を右手1本で受け止めた。

しかも・・・更に高く浮かんで行き、ワームの身体を持ち上げてしまったのだ。

孝俊の背中には・・・ダークグリーンに鈍く光る、大きな禍々しい悪魔の様な翼が生えていた・・・

『グオオオオオオ・・・！？』

「ガアアアアアアアアッ！」

ズズウウン！！

孝俊はワームの頭を引つ掴んだまま大きくジャイアントスイングで振り回し、砂漠に叩き付ける。

更に・・・孝俊は掌に魔力弾を瞬時に作り上げる。

その魔力弾は・・・渦を巻いていた。

「アアアアアッ！！」

ドドオオオオンッ！

『グギヤアアオオオオオオ・・・！！！！』

孝俊が発射した魔力弾は、もの見事にワームに命中する。

直撃を喰らったワームは更に遠くへ吹っ飛び、暫くもがいた揚句、砂の中へと逃げ込んでいった。

孝俊は、再び後ろを振り向く。

だが、孝俊が再び振り向いた時には・・・仮面の男は影も形も無くなっていた。

今の戦闘に乗じて、逃げ出したのである。

「……………っ!」

シグナムが、振り向いた孝俊に向かってレヴァンティンを構えるが、孝俊は暫く空中に佇んだ後……いきなり背中の中翼が消失し、地面に落下した。

不審に思ったシグナムは、砂漠に倒れ伏している孝俊のリンカーコアを調べてみる。

「……………なっ!?!……………また元に……………フランク相当に戻っている……………?」

更に、両目共に蒼だった瞳は……………再び片目が黒に戻っていた。禍々しい雰囲気も消えている……………どうやら、孝俊は元に戻った様だった。

「……………元に……………戻った様だな」

シグナムは安堵の表情を見せ、孝俊に近付く。

ザザザ……………!!

だが・・・次の瞬間、砂の中からデジモンが現れた・・・！

「なっ・・・！？」

「ふふふ・・・この瞬間を待っていたぞ・・・！」

ネオデビモン 完全体 （人造）墮天使型 ウィルス種

必殺技：ギルティクロー（デビモンの「デスクロウ」を更に強化した必殺技）

得意技：スタンクロー（電気を帯びた爪で攻撃する技）

何者かによってデビモンを改造され誕生した人造墮天使型デジモン。

顔面に装着されたマスクは、自身の力と意思をコントロールする為の物といわれている。

主人の命令に忠実に従い、雑兵として使用される事が多い。

ワस्पモン 成熟期 サイボーグ型 ウィルス種

必殺技：ターボスティングァー（尾に搭載された大口径のレーザー砲を連射する技）

得意技：ベアバスター（尾に搭載されたレーザー砲から毒の光線を放つ技）

空中秘密基地“ロイヤルベース”に生息する蜂の姿をしたサイボーグ型デジモン。

非常に優れた感度を持つ頭部の触覚パーツを使って常に基地周辺を巡回する。

近づく者に対して容赦なく襲い掛かる。

肩の推進器と背中スタビライザーによる上下前後左右と移動性能にも優れ敵の攻撃を素早く回避する事も可能。

得意技のベアバスターは、大型デジモンをも一撃で仕留めるほどの威力を持つが、エネルギーを溜めてから放つ為に素早い相手には当たりにくく、主に地上に対して使用する。

「貴様はそこで気を失っている金髪の魔導師と戦って手負いの状態・・・最も厄介なその男は謎の暴走の果てに気絶・・・」

「我が首領の目的の為に障害となる貴様らは・・・ここで死んでもらう！」

ネオデビモンとワस्पモンが、シグナムに言い放つ。

ネオデビモンの言う通り、シグナムはフェイトとの激闘で疲弊した上に負傷している。

フェイトはリンカーコアを抉り出されたショックで気絶し、孝俊は先程までの暴走の影響か、フェイトと同じく気絶している。

「主はやての為・・・私はここで倒れる訳には行かん・・・！」

レヴァンティンを構え直すシグナム。

だが・・・腕から流れる血のせいか、力が入らない。

「ならば・・・くられ！【スタンクロー】！」

「ぐっ・・・！」

ネオデビモンの爪をレヴァンティンで受け止めるシグナム。
だが・・・

バリバリバリバリイイイツ！！

「ぐっ！？ぐあああああああああああ！！！」

スタンクローのまとった電撃が、レヴァンティンを伝ってシグナムを襲う。

倒れそうになるシグナムだが、レヴァンティンを立てて何とか踏みとどまる。

「ふん……しぶとい奴だ……次こそとどめを……!」

ゴオオオオオ……

しかし、ネオデビモンが爪を振り上げた次の瞬間……何かが上空から降って来た!

「のおあああああああああああ!?!?なんで上空うつううううう!?!?」

それは……上空から隕石の様に迫って来る高雄だった!!
なんか悲鳴を上げているようにも見える。

「な、何事だ!?!?」

「隕石……いや人間か!?!?」

「あれは……確か拓也の仲間の……!」

驚いているネオデビモン&ワスプモンと、苦しみながらも、降つて来る高雄を見るシグナムであった・・・

思わぬ援軍・・・まだまだ激闘は続く!?

そして次回、剛龍のビーストスピリットが見参する・・・!

続く

第44話 主役クラスがぶち切れたらマジでおっかない気がする

後編（後書き

はい、第44話終了です。

どうにか孝俊の暴走は止まりましたが、今度はデジモンの襲撃です。

高雄「俺1人だけの見せ場は初めてか・・・」

拓也「ま、頑張れや〜」

輝二「剛龍のビーストスピリット・・・か」

では、次回予告・・・えーっと、ティアナちゃん（6歳）お願いします。

ティアナ「はい・・・！えっと・・・」

次回、リリカルなのはフロンティア第45話【ポケ役だってたまには真面目になる気がする】おたのしみに！」

感想・質問・・・いつでもお待ちしております

そして、どーにかこーにか評価が450ptを超えました・・・
お気に入り登録、ポイント評価を下さった方々、本当にありがとうございます！

これからも精進致します！

第45話 ポケ役だったたまには真面目になる気がする(前書き)

はい、第45話です。

今回、高雄が大暴れます・・・ポケと真面目が入り混じった高雄の姿、とくにご覧下さい(笑)

では、名言コーナーです。

- 努力した者がすべて報われるとは限らん、しかし!成功した者は皆すべからく努力しておる!!

(鴨川会長 はじめの一步)

- 人生は七転び八起きだ。立ち上がり続けりや勝つんだよ。

(大崎ナナ NANA)

- 何人たりともオレの眠りを妨げる奴は許さん

(流川楓 SLAM DUNK)

- 俺達やこの薄汚れた街で笑って一緒に生きて来た。だったら、この街齒アくいしばって護るのも一緒だ。

(平賀源外 銀魂)

- 万事屋が三人揃ったからには、ここから先何一つたりとも奪え
ると思うな。

万事を護り続けてきた万事屋の力 見せてやるヨ。

(神楽 銀魂)

- カープがプロ野球に在籍している限り、優勝の可能性はゼロじ
やないの。戦えば先はあるの。

(基町勝子 球場ラヴァーズ)

高雄「珍しい作品名が出たな・・・球場ラヴァーズか」

拓也「なんかカープ関連の漫画らしいぜ。気に入ったらしい」

輝二「さて、いよいよA・Sも折り返しか・・・無印より長かつた
な(汗)」

ティアナ「じゃあ、第45話・・・始まります!」

今回・・・遂に首領の正体が明らかに・・・!!

第45話 ポケ役だったたまには真面目になる気がする

第45話副題【友よ、君の為に戦う・
・！】

砂漠にて、仮面の男を圧倒する孝俊。

自身の身体の中の魔力が暴発し、軽く見積もってもSS+といふ
とんでもない魔力を計測する。

途中現れたワームの怪物も、右腕一本で軽々と撃退してしまった。

だが、仮面の男は逃がしてしまい、孝俊自身も急激に元に戻って
砂漠に倒れ伏した。

そこに、シグナム達を倒そうとデジモンが襲来する。

傷ついた体を押しして迎撃するシグナムだったが、ネオデビモンの
【スタンクロー】の高圧電流を喰らい、体の自由を奪われる程のダ
メージを負ってしまう。

今まさにとどめの一撃が振り下ろされようとしたその時・・・上
空から、高雄が隕石の如く降下して来たのだった。

高雄 Side

・・・遅い。フェイト達が遅い・・・
そう思って、俺はエイミーさんの所に行った。

「・・・つく！クラッキングされちゃってる・・・一体何処から・・・！？」

だが、どうやら通信機器が何者かによってクラッキングされたく、復旧作業の真っ最中だった。

手助けしようとも思ったが結構早く作業が進んでいた為、エイミイに任せる事にする。

しかし、いとも簡単にクラッキングされるとは・・・仮に俺がクラッキングしようとしても、容易にはいかないのに・・・

だが、考えてても仕方ない為・・・とりあえず一旦部屋に戻り、オファニモンを呼んでみた。

「・・・オファニモン、フェイトが向かった次元世界の座標って解るか？」

『ええ、ちょっと待ってて下さい・・・・・・・・・・ああ、ありましたよ』

「よし、今から向かいたいけえ・・・飛ばしてくれんか？なんか嫌な予感がしてならねーんだ・・・」

『・・・解りました、では一気に飛ばします』

そして俺は・・・フェイト達がいる次元世界・・・砂漠の世界へと飛び込んだ。

・・・何故か上空から。

Side out

「あああああああああ！！！！！」

ズズウウウン・・・！

上空から降って来た高雄は・・・もの見事に砂漠に真つ逆さまに墜落した。

・・・しかも頭から砂漠に刺さっている。

「もっごもっご・・・！！！」

「・・・だ、大丈夫なのか・・・？」

ジタバタと足を動かしている高雄。

見ていてなんだか面白かったが、とりあえず引っこ抜くシグナム。

「ぶはっ・・・！た、助かった・・・っ！かタイトル違うじゃん！ボケもたまには真面目になるって、初っ端からギャグやってんじゃん！」

「い、意味が解らんが落ち付け・・・」

メタ発言（？）する高雄を、未だに痺れが残る身体で宥めるシグナム。

「おいコラア！こっちを無視するんじゃない！！」

「ほったらかしとは良い度胸してんじゃねーか！！」

ふと、ネオデビモンとワスプモンが叫ぶ。

ほったらかしにされて怒っているようだ。

「つと・・・愚痴ってる場合じゃねえか」

ネオデビモンとワスプモンの方に向き直る高雄。

そして・・・深紅と銀に光るD・スキャナを取り出す。

「ふん・・・邪魔をすると言っなら貴様も始末してやる」

「貴様含めて4人ともあの世行きだ！」

ブブブブブ・・・

高雄に爪を向けるネオデビモンと、尻尾の砲口を向けるワスプモン。

更に・・・空間が歪んでワスプモンが数十匹現れた。ネオデビモンの援軍の様だ。

「アホ抜かせ。こちとら、【き さん・ぎ さん】より長生きするつもりなんじゃけえの・・・てめーら如きにやられてたまるか」

ネオデビモン&ワスプモン軍団に人差し指を向けて言い放つ高雄。

なんか懐かしい人物の名前が出たが、ここはスルーしよう。

「それに・・・俺の親友に手を出そうとするってんなら・・・おどれらは許さねえ・・・！」

(なっ!?!こ、この威圧感・・・孝俊と互角・・・!?!?)

一転して真面目な顔付きになる高雄。

高雄の纏う威圧感に気圧されるシグナム・・・
その高雄の背後には・・・炎が見えていた。
今まさに・・・高雄が炎と化して・・・戦う!!

高雄が左手を構えると・・・複数のデジコードが左手を覆う。
そして・・・進化する為の言葉を・・・叫んだ。

「スピリット・・・エボリューション!!!」

次の瞬間・・・凄まじい爆炎と爆音が響き渡る。

「ぬおおおおおおおおあああああああああああああああああ
あああっ!!!」

高雄の咆哮が砂漠を突き抜ける。

高雄の身体を・・・燃える様に赤い機械の装甲が包んで行く。
グレンモンよりも更に大きく、重厚さが増したデジモン、その名
は・・・

「タイタンドラモン！」

タイタンドラモン ハイブリッド体 マシン型 バリアブル種
オリジナルデジモン

必殺技 タイタン・ノヴァ

（胸のクリスタルから破壊光線を放つ。決してグレートタ
タンとか言っではいけない）

メガトンバーニング

（燃え盛る拳で放つ必殺パンチ。スージーQの強化版）

得意技 ジェットブラスター

（マグナムランチャーと同等の破壊力を持った連続光弾）

ダイナミックアックス

（自らの重さを利用した飛び回し蹴り）

ビッグバースト

（全身の砲身から光弾をぶっ放しまくる）

高雄が剛龍のビーストスピリットで進化した姿。グリーンドラモン

の兄弟機である。

姿はグリーンドラモンと瓜二つだが、全体的に赤い。

グリーンドラモンと同様に大きさを自在に変える事が出来、3M〜60Mまで自在に変わる。

その為、全スピリット合わせて、1番巨大なデジモンでもある。

通常サイズは20Mだが、グリーンドラモンよりも制御が難しく30M以上は3分しか持たない。

その上、高雄自身が不器用な為（機械弄り以外はまるで不器用）、10M以上は5M間隔でしか身長を変えられない。

制御が難しい分、パワーは現役世代の全スピリットで最強を誇り、先代の龍輔達を合わせても

2番目にパワーが強い。

必殺のタイタン・ノヴァは、まともに喰らえば究極体でも一撃で葬り去る破壊力を持つ。

名前の由来はタイタン（巨人）+ドラゴン。

今回は3Mの状態が登場。

「ええい！敵はたった1人だ・・・一斉にかかれい！」

ネオデビモンの号令で、一斉に襲い掛かるワスパモン軍団。
だが、タイサンドラモンは全く動じず・・・拳を構える。

「ぬおおおおおおっ！！！！」

ドオオオオオンッ！

渾身の腕の一振りか1体のワस्पモンに命中する。
それをモロに喰らったワस्पモンは・・・ピンポン玉の様に飛んで行き、空中で消滅した。

「なっ・・・何と言う凄まじいパワー・・・！」

成熟期デジモンを腕の一振りか吹っ飛ばして星にしてしまう程の、
タイタンドラモンのパワー・・・
それを見たシグナムは、驚きを隠せなかった。

「おら、どしたあ！どんどん来いやあ！」

タイタンドラモンの気合を入れた叫びが響き渡る。
それを聞いて、怯むワस्पモン達・・・

「おのれ・・・怯むな！どんどん掛かるのだ！！」

ネオデビモンの号令で、更に多数襲い掛かるワस्पモン。

タイタンドラモンはそれを見て、今度は自ら動き出した！

「ふぬりゃあああつー！！」

ズドンッ！バゴオオンッ！バキィッ！ガスッ！ドゴオンッ！

向かって来るワस्पモンに、拳を振りかざし・・・ひたすら撃ちこんだ！

その巨大で重く、熱い拳は・・・ワस्पモンを1体1撃で沈めるのには十分だった。

「ぐぐ・・・撃てええ！！」

ネオデビモンが号令をかけると、ワस्पモン達が一斉に尻尾から砲撃を放つ。

ワस्पモンの必殺技、【ターボスティングー】だ。

「ふっ・・・なんのおおっ！！」

すると、タイタンドラモンは大きく上半身を後ろに反らして・・・ターボスティングーを全てかわした！

降り注ぐ光弾の雨を避けられず、次々と沈められていくワスプモン軍団。

成熟期が束になっても、タイタンドラモンの前には・・・成す術も無かった。

「な、なんという事だ・・・あれだけいた・・・デジモン達が・・・

」

タイタンドラモンの圧倒的な火力に、驚きを隠せないシグナム。

100匹はいたであろう、ワスプモンの群れが・・・もの3分も経たない内に、全滅してしまったのだから。

これで残るは・・・ネオデビモン1体のみだった。

「お、おのれ・・・！これでもくらえっ！」

ネオデビモンが空中に飛び上がったかと思うと・・・そこから旋回して、タイタンドラモンに飛び蹴りを炸裂させた！

「つぐ・・・！」

飛行の勢いを使った飛び蹴りを正面からモロに喰らうタイタンドラモン。

喰らったままズルズルと後ろに後退していく・・・が！

ガシッ！

「ぬおおおおおおおおおっ！」

「う、うわあああああああああ！！？」

踏みとどまったかと思うと、ネオデビモンの足を引っ掴み、そのままジャイアントスイングで振り回す！

「おりゃあああっ！」

「ぐはあっ！」

そしてその勢いのまま投げ飛ばし、近くにあった岩にぶつける。更に、タイタンドラモンはネオデビモンに向かって行き・・・

「はあっ！せいっ！ふっ！でやっ！」

「ぐっ！げふっ！がっ！ぐばあっ！？」

どてっ腹に重いパンチを次々とぶち込んで行く。

パンチ以外は必要無い。その拳だけで敵を沈めるのが、タイタンドラモンの基本スタイルなのだ。

「おおうりゃあっ！！」

ドオオオオオン!!

「ぐあああつ!!!!」

渾身の一撃がネオデビモンに炸裂する。

まともに喰らったネオデビモンは・・・比喩抜きで10Mは吹っ飛んでいた。

「はああああああああ・・・!!」

態勢を低くして構えるタイタンドラモン。

すると、その拳が燃え盛る炎に包まれていく。

「俺の親友に手を出そうとした事・・・後悔しやがれ・・・!!」
「ヒイツ!!!!?」

烈火の如く、怒りを露にするタイタンドラモン。

流石のネオデビモンも・・・これには怯えずにはいらなかった。

・

「一撃必殺・【メガトンバーニング】!!」

ドッゴオオオオオオンッ!!

燃え盛る炎の拳の一撃が・・・ネオデビモンの顔面にクリーンヒツトした!

「ぐばあああああつ!!!」

顔面にクリーンヒットさせられ、きりもみ回転しながらブツ飛んだネオデビモンは・・・

ブツ飛びながら、空中で消滅していった・・・

「・・・さて、と・・・悪いんじゃけど、状況をちよつと説明してくれんかのお?まだ把握できてねーんだわ」

ネオデビモンを撃破したタイタンドラモンは、進化を解いて高雄の姿に戻る。

そして、呆然と見ていたシグナムに説明を求めた。

「あ、ああ・・・」

シグナムは・・・今までここで起きた事を、高雄に話した。
フェイトとの激戦、仮面の男の乱入、孝俊の謎の異変・暴走・・・
全てを包み隠さず話す。

「・・・なるほど・・・また仮面の男が出た・・・って訳か」
「それよりも・・・気になるのは孝俊の異変だ・・・高雄、と言っ
たな？お前は何か知らないのか・・・？」

仮面の男が出た事に付いて考える高雄。
しかし、シグナムはそれよりも孝俊の異変が気になっていた。

(暴走・・・とうとうアンリミテッド・ダイナモの影響が色濃く出
やがったか・・・だが、この事はまだ部外者に話す訳には行かぬ！
か・・・)

高雄は少し考えた後・・・シグナムに言った。

「俺も詳しい事は解らん。ただ・・・孝俊は感情の激変で暴走した、
とだけは言える」

「そうか・・・確かに、テストロッサが不意打ちを受けた直後に、
孝俊があの状態で現れたからな・・・」

シグナムは、高雄の言葉に納得する。

状況的に考えても、高雄の言葉に疑いの余地は無いからだ。

「さて、と……そろそろ向こうも復旧する頃じゃろうし……ア
ンタは孝俊連れて早いとこ逃げんさい」

「……良いのか？私を捕えるなら今がチャンスなのだぞ？」

早く逃げるように促す高雄に、戸惑いながらもシグナムが返す。
だが、高雄は笑みを浮かべて……こう言った。

「ふっ、何を勘違いしとんか知らんけどの、俺達は別に管理局の肩
を持つつもりは無い。アンタらを捕まえる必要は俺達には無えんじ
ゃからの」

「……」

「それに……久々に【メガトンバーニング】ぶっ放したせいで、
肩がちよっと痛いんだわ……フェイト担いで帰るだけで精一杯な
んだよ」

管理局の言いなりに動いてやるつもりなど、高雄には毛頭無い。
高雄からすれば管理局は、自分の親友が半分兵器の血で生まれる
事になった根本の原因でしかないのだ。

故に、全てにおいて管理局に協力するつもりは無い。
あくまで、なのはやフェイトを守る為にやっているだけである。

ついでに言うと先程の【メガトンバーニング】は、肩に負担が掛
かる技である。

しかも使い慣れていない為に、少々肩を痛めてしまっていた。

「……礼は言わんぞ……」

「いらねーよ。いいからさっさと行きんさい……管理局に感付かれん内にな」

シグナムは孝俊を背負い、そこから飛び去って行く。

高雄もフェイトを抱き上げて、オファニモンに頼んで転送してもらい、海鳴市へと帰って行った……

??? Side

何処かの次元空間……その中に、まるで時の庭園が更に禍々しくなった様な浮遊城がある。

その城の中心部で……

「むむ……ネオデビモンとワスプモン軍団がやられおったか……」

「はっ……剛龍のスピリットの持ち主が乱入した為に……このような事に……」

玉座に座っている、一際大きな姿と威圧感を放つデジモンが、自分の前で片膝をついて報告しているデジモンに言う。

「早く……闇の書を手に入れねば……ワシの寿命が……尽きる前に……ぐふっ……ごほっ……」

「お任せ下さい……かくなる上はこのデスモン、奴らを見事仕留めて見せましょう……」

デスモン 究極体 魔王型 ウィルス種

必殺技 デスアロー

(両手の邪眼から死の矢を放ち、敵を貫く)

得意技 エクスプロージョンアイ

(頭部の単眼が深紅に輝いた時に発射される破壊光線)

元々は高位天使型デジモンだったが、デーモンと同じく、ダークエリアに墮とされ魔王型デジモンになってしまった。

しかし墮天使型や悪魔型デジモンと違い、中立の立場を守り世界を静観している。

通常は体の色が灰色でデータ種だが、天使型のデジモンとの来るべき決戦時になると体が闇色に染まり、

ウイルス種の破壊神へと変貌する。
変貌した後は、無駄な戦闘を避けて蓄えていたパワーを開放し、破壊の限りを尽くす。

次は自分が出撃しようと言言するデスモン。

だが、そこに巨大な機械の身体を持ったデジモンがやって来る。

「ググ……デスモン、抜ケ駆ケハ許サン……次ハ俺ダ……」
「む……貴様もいたのか……ムゲンドラモン……」

ムゲンドラモン 究極体 マシン型 ウィルス種

必殺技 ^{ムゲン} キャノン

（2つのキャノン砲から超ド級のエネルギー砲を放つ）

得意技 ブースタークロー

（右手で敵を突き刺す）

カタストロフデイ

（内部から大爆発を起こし、相手を巻き添いにする）

ムゲンハンド

(自分の腕で相手を叩き潰す)

100%フルメタルボディを持つ、かつてのデジモンワールド最強のデジモン。

何ものかが“デジコンコア電脳核”に悪のプログラムを組み込み、操ってるため、無限にパワーが作られるようになった。

メガドラモンの腕、アンドロモンの知能と頭、メタルマメモンのサイコプラスター、メタルグレイモンのメタルアーム、メタルティラノモンのアゴを組み合わせて造られた。

本来なら意思は無い筈だが、ここのボスによって感情プログラムを追加されている。

他のデジモンを圧倒するパワーと頭脳を持っている。

「俺もいる事を忘れるな・・・」

「・・・カリスモンか」

今度は・・・巨大な熊の様な体躯をしたデジモンがやって来た。

カリスモン 究極体 人造獣型 ウィルス種

必殺技 ディープフォレスト

(熱き爪で敵を引き裂く)

得意技 ロデオバレット

(冷たい銃身から追尾機能付きの弾丸を放つ。)

その1発1発がブイドラモンのVブレスアローと同等の攻撃力を持つ)

人間の手により「グリズモン」を改造して誕生した、人造獣型デジモン。

更にアルカディモンのコピーデータも含まれており、究極体ではかなりの強さを持つ。

「いや・・・私に行かせてもらおう・・・」

すると、更にもう1体・・・蜂とサイボーグが融合したようなデジモンが現れた。

しかし、キャノンビームンやワस्पモンとは違い、二足歩行である。

「・・・タイガーヴェスパモンか」

タイガーヴェスパモン 究極体 サイボーグ型 ウイルス種

必殺技 マツハステインガーV^{ヒクトリ}

(2刀流の「ロイヤルマイスター」で相手を突き刺す)

得意技 ロイヤルマイスター

(秘密武器「ロイヤルマイスター」で相手を切り裂く)

ギアステインガー

(小さな針を連射する)

空中秘密基地“ロイヤルベース”の秘密戦闘部隊“ロイヤルコマンド”に所属する

超エリートサイボーグ型デジモン。

トップ0.08%の超エリートのみが所属できる“ロイヤルコマンド”の中でも

単独行動に特に秀でており、その姿から暗号名として“タイガー”と名づけられた。

俊敏性と体力に優れ戦闘中に動きを止める事が無いといわれる。

両手には秘密武器“ロイヤルマイスター”を装備している。

「キャノンビームンだけでなく、ワस्पモン達までやられた・・・
同志の仇、私に討たせてもらおう」

他の3体を睨みつけるタイガーヴェスパモン。
キャノンビーモンを雄人メガトータモンにやられ、ワस्पモン軍団が高雄タイトンドラモンにやられている。

本来、同じ秘密基地“ロイヤルベース”を守る仲間を倒されている為、復讐に燃えていた。

「ふむ・・・良からう、タイガーヴェスパモンよ・・・次はお前が奴らを仕留め、闇の書を奪うのだ・・・！」

「ははっ！このタイガーヴェスパモン・・・必ずや目的を達成しましょうぞ・・・！」

敬礼するタイガーヴェスパモン。

他の3体も、そのデジモンに向かって敬礼する。

「早くするのだ・・・この・・・デーモンの命が尽きぬ内に・・・！」

デーモン 究極体 魔王型 ウィルス種 七大魔王

必殺技 フレイムインフェルノ

（超高熱の地獄の火炎で焼き尽くす技。復讐心に満ち溢れた邪悪な火炎で消し去る）

得意技 ケイオスフレア

(混沌の業火を吐く)

スラツシュネイル

(左手の巨大な爪で切り裂く)

全ての悪魔型、堕天使型デジモンを統一する魔王型デジモン。

元々は天使型デジモンの最高位に位置する「セラフィモン」であったが、

デジタルワールドの“善の存在(恐らくは構築した人間といわれている)”に反逆し、
ダークエリアに墮とされ、魔王となってしまった反逆戦争のリーダー。

デジタルワールドを支配し、“超究極体”を復活させ、復讐を企てようとしている。

圧倒的な力を誇るが寿命が近付いており、やや弱体化しつつある。それでも、並の究極体では傷1つつけるのも難しい。

自らの力を取り戻し、更にレベルアップしようと闇の書を狙っている。

そう、今まで闇の書を狙っているデジモン達の首領は……デーモンだったのだ。

遂に……究極体クラスのデジモンが動き出す……!

続
く

第45話 ポケ役だったたまには真面目になる気がする(後書き)

はい、第45話終了です。

首領の正体はデーモンでした・・・若干弱ってますが(苦笑)

ヴェノムヴァンデモンより強い奴を考えてみた結果がこれです・

デスモン達は、四天王と言ったところですかね(汗)

では、次回予告・・・ティーダさん、よろしく

ティーダ「ティアナがやったなら俺もやらねばな・・・」

次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第46話【“灯台もと
暗し”ってのは意外によくある気がする】

お楽しみに!」

第46話 “灯台もと暗し” ってのは意外によくある気がする(前書き)

はい、大分間が空いて第46話です・・・大変お待たせしました。

孝昭「GREEばつかやってっから遅れるんだろうが」

鷹「うっ・・・(汗)」

拓也「自重しろよな・・・」

鷹「すみません(スライディング土下座)」

では、名言コーナーを・・・

・・・俺、参上!

(仮面ライダー電王 仮面ライダー電王)

・・・このWにはな……フィリップの最後の思いがこもってんだ。てめえなんかに食い切れる量じゃねえんだよ!

(左翔太郎 仮面ライダーW)

・・・誰かを好きでいるのも嫌うのも エネルギーいるよね

(基町勝子 球場ラヴァーズ)

- 欲しいモンはな、ただ手に入れりゃ良いつてモンじゃねえ
どうやって手に入れたか 手に入れようと力を尽くしたか
その過程にBIGなロマンがあつてこそ、男つてモンだけ

(大神照 Mr・FULL SWING)

雄人「ミスフルですか・・・」

高雄「この言葉は好きだな」

ティーダ「じゃ、第46話・・・始まるぞ!」

今回、序盤に久しぶりにあの男が登場・・・&先代キャラがもう
1人登場!

後書きにはプロフィールも載せます。

第46話 “灯台もと暗し” ってのは意外によくある気がする

ネオデビモンとワスプモンに追い詰められ、絶体絶命のシグナムの前に現れた高雄。

だが、敵は援軍を呼びだし、100体近いワスプモンが現れる。それでもシグナムを、フェイトを、そして何よりも親友を守る為、高雄はビーストスピリットを発動させる。

タイタンドラモンとなつた高雄は、その圧倒的なパワーでワスプモン軍団をあつという間に撃沈。

そして、ネオデビモンを必殺技・メガトンバーニングでブツ飛ばし、これも撃破に成功した。

その頃、とある次元空間に浮かぶ浮遊城に……闇の書を狙っていたデジモン軍団の首領・デーモンがいた。

デスモン・ムゲンドラモン・カリスモン・タイガーヴェスパモン……4体の究極体が、本格的に闇の書を狙いだす。

究極体が、本格的に動き出そうとしていた……！

Side 拓也達のいる地球・面林家

「……何！？本当なのかオフアニモン！」

『本当です……遂に、あの忌まわしき力が……目を覚ましてしまったのです……』

部屋の居間では、孝俊の父・龍輔が自身の持つデジヴァイス……
D・ブレスで、オフアニモンと連絡を取っている。
そして……孝俊が発動させた力、【アンリミテッド・ダイナモ】
について、聞いていた。

ピンポーン

「ん？誰か来た……」

D・ブレスをしまい、玄関に出て行く龍輔。
玄関を開けると……

「先輩、お待たせしました！」

そこには……ラーメン屋のおかもちを持った、190cmを超える
のであるう大男が立っていた。

「お、和久……そーいやお前の所のラーメン頼んでたっけな」

この大男の名は、なかばやしかずひさ 中林和久……雄人の父親であり、龍輔の後輩。
自身が経営するラーメン屋・【玄武亭げんぶてい】の店主でもある。
また、先代の特殊型スピリット試作型No.4【玄武】を持つ。

「……そうだ、ちょっと話がある。少し時間取れるか？」
「……はい。良いですよ」

真面目な顔で和久に尋ねる龍輔。

それを見て、何かあると感じた和久は、それを了承する。

そして、部屋の中で……

『和久君も来たのですね』
「え、オファニモン？」

D・ブレスから聞こえるオファニモンの声に少し驚く和久。

「……孝俊やお前のとこの雄人君が飛んだ世界で、色々起きてるみたいだな」

「色々、ですか？」

「……アンリミテッド・ダイナモについては昔、話したよな？」

「は、はい……先輩の奥さん……ナツキちゃんの……」

生体兵器アンリミテッド・ダイナモについては、勿論和久も知っている。

和久と和久の妻、そしてナツキは同じ年なので、仲が良かったのだ。

「……孝俊の体内にもそれがある事は知ってるよな？……それが遂に発動・暴走しやがった」

「なっ……！封印が解けたって事ですか！？」

勿論、孝俊の体内にそれが受け継がれ、封印処理がされている事も知っていた。

アンリミテッド・ダイナモが如何に危険な物かも知っていた為、発動した事に驚く和久。

「ああ……感情の激変、恐らく怒りが頂点を越えたんだろう……」
「な、なんだか某・戦闘民族みたいですね……」
『体が付いて行かず、一定時間で強制終了する様ですが……』

孝俊は、半分生体兵器だが、半分は人間である。

その為、アンリミテッド・ダイナモを永続的に制御するのは不可能なのだ。

「あの子は、半分は人間の血なんだ……生体兵器を制御し切るなんて無理だ」

「……子供にまでそんな重荷を背負わせるなんて……許せませんね、その時空管理局ってのは……」

「自分達の行いを、事実を隠匿してまで正当化してるんだからな……」

沈んだ表情になる龍輔と、拳を握り締めて静かに怒る和久。

時空管理局の裏の連中……所謂、管理局の闇の連中のせいで、どれだけの人が苦しんだか……想像がつかなかった。

これでもし、アンリミテッド・ダイナモが完成したとなっていれば……もはや手の打ち様が無かっただろう。

「それに……なんか状況的にも複雑みたいだしな」
「複雑？」

そう言うと、龍輔は現在知っている全ての情報を和久に伝える。
それを聞いた和久は……

「……なるほど、仲間同士で敵対勢力に分かれちまった訳ですか」
「まあ、何とか互いに戦闘を避ける様にはしてるみたいだな」

「で……闇の書に、それを狙うデジモン軍団……」
「……正体はまだ掴めていませんが……闇の書のエネルギーを狙っているのは確かでしょう」

和久に説明する龍輔とオファ二モン。
実は、なのはの世界に付いて詳細を知っているのは、先代では龍輔だけである。

ちなみに、龍輔は妻のナツキには殆ど話していない。
ナツキは心配性な所があり、子供に何かあれば自分も行こうと動く性格なのだ。

普通ならまだ良いのだが、今回ばかりは場所が悪過ぎる。
ナツキがなのはの世界に飛び込んだりすれば、恐らく時空管理局の裏の連中がナツキを狙う。
アンリミテッド・ダイナモと言うとんでもない戦力が手に入れば、何をしでかすか解らない。

そうなれば何の罪も無い沢山の人達が、命の危険に晒されてしま
うかもしれないのだから。

「……とにかく、これから息子達を頼むよ、オファニモン」
『はい……また、何かあれば伝えます』

そう言って、オファニモンとの通信を切る龍輔。

「……あの世界には二度と行くつもりは無かったが……もしもの時
は、行かなきゃいけないーかもなあ……」

龍輔は、ぼつりと呟くのだった。

遠く離れた世界にいる息子を想いながら……

S i d e o u t

その頃、アースラの艦内では……フェイトが眠っていた。
ちなみに、隣ではプレシアが付き添っている。
闇の書の極秘調査については、パラレルモンに任せている。

「ここはオラが引き受けるだ。プレシアさんは、フェイトちゃんが目を覚ますまで傍に付いててあげてほしいだよ」

パラレルモンにそう言われて、プレシアはアースラに駆け付けたのだ。

「フェイト……」

未だ眠り続けるフェイトを見て、心配を募らせるプレシア。それと同時に、フェイトをこんな目に遭わせた仮面の男に、怒りがこみ上げていた……

その頃、リンディや拓也達は……

「フェイトさんは、リンカーコアを抉られたショックで眠ってるけど、命に別条は無いそうよ」

フェイトは仮面の男にリンカーコアを抉り出されるも、暴走覚醒した孝俊の乱入により、蒐集はされなかった。

ただ、その時のショックで未だに眠っているのだ。

「闇の書には吸収されずには済んだんですね……」

「デジモンが襲撃して来たと聞いた時は、少々焦ったが……」

なのははとりあえず一安心したようで、胸をなで下ろす。

クロノは、デジモンの襲撃を聞いて若干ヒヤツとしたようだった。

「高雄が駆け付けてくれて助かったぜ……輝二はバイト中で動けなかったし、俺も

なのはちゃんと違う次元世界の山岳地帯にいたからな」

「いやにフェイトとアルフの帰りが遅かったんでな……ちょっと心配になって、

オファニモンに転送してもらったんだ」

輝二は翠屋でバイト中の為、駆けつける事が出来なかったのだ。

拓也も、その時はまだなのはと一緒に違う次元世界にいた。

「……3人が出勤して暫くして、駐屯所のシステムがクラッキングであらかたダウン
しちゃって……それで、指揮や連絡が取れなくて……ごめんね、あたしの責任だ……」

顔を俯かせて、沈んだ表情になるエイミー。

「んな事ないよ、エイミーがすぐシステムを復帰させたから、ア

スラに連絡が取れたんだし、仮面の男の映像だつてちゃんと残せた」
そう言つて、画面を開いて仮面の男の映像を見せるリーゼロッテ。
そこには……体内の魔力が暴発し、暴走モードになつて仮面の男
を蹂躪する孝俊も映っていた。

「こ、これつて……孝俊さん……だよな……？」

そのあまりにも圧倒的な光景に驚きを隠せないのは。

孝俊は、進化すれば魔導師では齒が立たない程になるが……生身
では普通の人間の筈なのだ。

そう思っていたが故に、なのははその光景が信じられなかった。

アルフ、クロノ、エイミー、そしてリンディも同じだった。

「孝俊には何故か魔力があつたけど……こんなとんでもない物じゃ
無かつた筈だよ？」

精々念話が出来る程度の微弱な物だった筈……」

アルフは首を傾げながら映像を見ている。

彼女は孝俊の魔力を確認しているが……半年前、アリサの家で保
護された際に孝俊と念話を交わしただけである。

「だが、ここに映っている孝俊の魔力は……明らかにSランクを超
えている」

クロノは、未だ信じられないと言つた表情をしながらも、孝俊の
魔力を測っていた。

「それにしても……おかしいわね？むこうで使っている機材は管理局で使っている
物と同じシステムなのに……それを外部からクラッキング出来る人間なんて
いるものなのかしら？」

「そうなんですよ、防壁も警報も全部素通りで、いきなりシステムをダウンさせるなんて……」

「ちよつと、有り得ないですよね……」

リンデイの疑問に、エイミィとアレックスも同感する。
だが、ただ1人……高雄は違っていた。

「いや、方法が無い訳じゃない。可能性自体は低いが……」
「えっ……？」

高雄の発言に反応するエイミィ。

「1つはデジモンによる干渉。デジモン……特に究極体レベルなら、管理局のシステムをダウンさせるのも簡単だ」

「た、確かに……」

「だが、その可能性は極めて低い。奴らの狙いはあくまで闇の書。システムをダウン

させるなんて手間が掛かる真似はせんし、どうせやるならもっと早く仕掛けとる筈だ」

「でも他にそれらしい方法なんて……」

デジモンによる犯行を否定する高雄に、クロノが困惑する。
高雄は一呼吸置いて……口を開いた。

「……内部犯行だ。管理局内部の奴なら、システムをダウンさせるのだって簡単な筈だ」

「な、内部犯行！？まさか、管理局の人間がなんで……！」

内部犯行の可能性を上げる高雄に、驚いて疑問の声を上げるクロノ。

「日本には“灯台もと暗し”って諺がある」

「“灯台もと暗し”？」

「あ、そっか……灯台のすぐ下には光が届かない……つまり、身近な事……この場合、内部犯行には意識が及ばないって事……！」

高雄の言葉に、ミッド出身の面々は首を傾げるが、日本出身のものは意味を理解したようだった。

管理局の人間がやった事に関しては信じ難いが、可能性は0では無いのだから。

「で、でも……なんで管理局の人間が捜査の妨害をして、闇の書の完成の手助けなんか……」

「さあな……俺の仮説に過ぎん。まあこう言う事もある、と頭に入

れておいてほしい」

確固たる証拠がある訳でもないのに、高雄はそれ以上の発言を控えた。

だが、その高雄の言葉を、リーゼロッテが難しい顔をして聞いていたのを……拓也は見逃してはいなかった。

「解りました……アレックス、アースラの航行に問題はないわね？」
「ありません」

「では予定よりも少し早いですが、これより司令部をアースラに戻します」

リンディが、アレックスに確認して言う。

今から司令部を駐屯所からアースラに戻すようだ。

「各位は所定の位置に」
「はい！」

リンディの言葉に、拓也と高雄以外の全員が応える。

「なあ、エイミィさん」
「ん、何ー？」

ふと、拓也がエイミィを呼び止める。
そして、リーゼロッテを指差して尋ねた。

「さっきから思ったんだが……誰だ？あの猫耳は」

「ああ、拓也君と高雄君は初めてだよね……彼女はリーゼロッテ。
クロノ君の師匠で、グレアム提督の双子の使い魔なんだよ」

「双子？もう1人いんのか？」

エイミィの説明に、首を傾げる拓也。

だが、次の瞬間……何かを思いついた。

（ん？待てよ……フェイトの所の前に、俺達の所にも仮面の男が現れた……

だが、あまり時間は空いていなかった……でも、俺達の所からフェイト達の所まで

行くには、どれだけブツ飛ばしても20〜30分はかかると聞いた。
しかし、奴はその

半分以下の時間で来たと言っていた……何より、さっきのリーゼロッテのあの苦虫を

噛み潰したような表情……）

拓也は、先程のリーゼロッテの表情を思い出す。

若干だが、何処か忌々しそうな……悔しそうにも見受けられた。

誰も気付いてはいなかったようだが、拓也だけはしっかり見ていた。

（双子の使い魔なら、姿はほぼ同じだろうし……変身魔法さえ使えれば、姿や声は変えられるし、時間の問題も無い……何より、クロノの師匠だ。

なのはちゃんの砲撃＋威力を抑えたとはいえ、俺のヴリトフモンコロナブラスタ
ーを

防いだり、あんな遠距離からバインドを仕掛けたり、フェイトやシグナムに気配を

悟られずに現れるなんて芸当は、そうそう出来るもんじゃねえ。

それに、前にグレアムのおっさんから感じた、何かを秘めた感じ……
リーゼロッテはグレアムの使い魔……もし、その秘めた（何か）
が闇の書の関連

だとしたら、内部犯行と言っ点も考えれば合点は行く……
だが、確証が無え……今は……まだ事態を見るしかないか……）

一通り考えてみたが、まだ確固たる証拠が無い為、しばらく様子を見る事にした拓也。

そして、なのはと一緒に海鳴市へと帰るのだった。

明け方……八神家。

「……ん……」

「あ、気が付きました？」

ずっと気を失っていた孝俊が、漸く目を覚ました。

・・・何故かシャマルに膝枕をされていたが。

余談だが、シャマルは孝俊を膝枕している間、何処となく嬉しそうだったらしい。

また、それを見たヴィータが何処となく不機嫌だったらしいが、ここはスルーしよう。

「……大丈夫か？」

「……っ……すまん……氣い失つてたようだ……」

「ま、まだ寝てなくて大丈夫なんですか？」

シャマルとシグナムの声を聞き、慌てて起き上がる孝俊。

流石に膝枕は恥ずかしかったようだ。

「ああ、大丈夫……もう平気だ」

「ビックリしたぜ……シグナムが気絶した孝俊を背負って戻って来た時には……」

シグナムはその後、追手に追われる事も無く無事に八神家に辿り着いた。

そして、すぐにシャマルに孝俊の治療を頼んだ。

「ん、心配してくれてんのか？」

「か、勘違いすんなよ！？お前に何かあったら、はやてが悲しむからよ……／＼」

「それに、お前や雄人がいてくれたから、我々はデジモンの様な未知の相手とも戦って来れた」

ヴィータが若干顔を赤くし、孝俊に言う。

そして、シグナムも孝俊を家族として認めていた。

「主はやても、お前の事を慕っている。お前は、この家に必要な存在だ」

「……そうか」

シグナムの言葉を聞き、微笑を浮かべる孝俊。

しかし、すぐに真面目な顔付きに戻る。

「シャマル、闇の書は今何ページだ……？」

「えっと……515ページね……」

現時点で515ページ。孝俊が八神家を訪れた時と比べて、結構進んでいる。

残りは151ページ……しかし、それでもかなりの魔力が必要となる。

「あと151ページか……足しになるかは解らんが、俺の魔力……使ってくれないか？」

「……本当に良いのか？」

孝俊は、遂に自分の魔力を蒐集するように申し出た。それを聞いたシグナムは、孝俊に確認を取る。

砂漠で見た孝俊のあの力ならば……かなりの魔力が見込める。だが、それでも……家族から蒐集するのは、若干気が引けるのだ。

「遠慮はいらねえ。早いとこやってくれ」

「解った……シヤマル……頼む」

孝俊の言葉に、シグナムが頷いてシヤマルに蒐集を頼む。

そして、シヤマルが孝俊のリンカーコアを……取り出した。

「す、凄い……これ……！」

孝俊のリンカーコアから感じる魔力に、体を若干震わせるシヤマ

ル。

【蒐集】

闇の書の中に孝俊のリンカーコアを吸収させる。
すると・・・物凄いスピードでページが埋まって行く。

そして・・・闇の書の動きが止まり、シグナムが確認する。

「ひゃ、140ページ……だと……」

埋まったページ数に驚くシグナム。
前に蒐集した、なのはのリンカーコアが約20ページ・・・その
およそ7倍である。

「凄い……これで残り11ページ……ホントにあと一息です……!!」

これで合計655ページ。遂に、残りは11ページとなった。

「す、すごい……孝俊……こんなに魔力がありやがったのか……！」

グイータも、こればかりは素直に驚いていた。

だが、それと同時に……

「でも、外から測つたらすんごい微弱だったのに……なんでだろーな？」

と、こんな疑問を持ったのだった。

普通、魔力は外から見れば丸分かりなのだが……孝俊は違っていた。

生まれた時にオフアニモンによって封印処理を施されている為、普段は外からでは極々微弱にしか感じ取れないようになっていた。

「それは俺にも解んねえ……それよりも、あと一息だ……頑張ろう」
「ああ、そうだな……」

そして、話題は仮面の男に映る。

「しかし……本当にあの仮面の男は一体……」
「少なくとも、奴が闇の書の完成を望んでいるのは確かだ」

孝俊が、仮面の男の事を考えて首を傾げる。
シグナムは、解っている事を述べた。

ここまで、仮面の男は闇の書を完成させる為の行動を取って来た。闇の書の魔力で結界を破って逃げるように勧めたり、なのはとヴリトラモンの攻撃からヴィータを守ったり……
そして、フェイトのリンカーコアを奪おうとしたりしている。その結果、暴走した孝俊にボコられたが。

「完成した闇の書を、利用しようとしているのかも知れんが……」
「ありえねえ！だって、完成した闇の書を奪ったって、マスター以外には使えないじゃん！」
「完成した時点で、主は絶対的な力を得る……脅迫や洗脳に、効果がある筈も無いしな」

そう、完成した闇の書は……マスターであるはやてにしか使えない代物である。
なのに、何故仮面の男が闇の書を完成させようとするのかが解らなかつた。

「うん……家の周りには、嚴重なセキュリティを張ってあるし……万が一にも、はやてちゃんに危害が及ぶ事も無いと思うけど……」
「それに、もしセキュリティを突破されたとして、主はやての傍には雄人が付いているからな」

八神家の周りには、幾重にも張られたセキュリティがある。

デジモンならともかく、魔導師などの類にはそうそう突破される事は無い筈だ。

万が一突破されたとしても、はやての傍には影ながら雄人が付いている。

「で、雄人は……？」

「主の部屋の前で、毛布にくるまって見張りしてたぞ」

雄人はこの場にはおらず、はやての部屋の前で見張りをやっていた。

ちなみに、12月なので毛布にくるまって無いと寒かったりする

(笑)

「ねえ……」

ふと、ヴィータが静かに口を開く。

「闇の書を完成させてさ……はやてが本当のマスターになってさ・
・それではやては幸せになれるんだよね……？」

「何だいきなり？」

「闇の書の主は大いなる力を得る。守護者である私達は、それを誰よりも知ってる筈でしょ……？」

ヴィータの言葉に、シグナムは首を傾げ、シャマルは今までの事を思い出して言葉を返す。

「そうなんだよ、そうなんだけどさあ……アタシはなんか、なんか大事な事を忘れてる気がするんだ……」

（大事な事？……闇の書にはまだ何かあるのか……？）

ヴィータの言葉を聞き、考え込む孝俊。

闇の書を完成させれば、大いなる力を得る。

だが、その大いなる力がどれほどの物か……正確には何なのか……まだ解っていないのだ。

（オファニモンに……後で聞いてみるか……）

ガチャン！

「は、はやてちゃん！」

孝俊がそう思った直後……2階から、ガチャンと何かが倒れる音と雄人の叫び声があった。

孝俊と守護騎士達が駆け付けると……そこには胸を押さえて苦しんでいるはやてと、その傍で若干混乱気味の雄人がいた。

「はやて!?!」

「はやてちゃん!?!」

ヴィータとシャマルが呼びかけるが、はやては苦しんだまま動かない。

「はやて!はやて!」

「シグナム!病院に連絡を!救急車だ!」

「解った!」

「動かすな!そつとしておけ!」

孝俊がシグナムに救急車を呼ぶ様に指示を出す。

そして、動かさずに救急車の到着を待った……

もはや、一刻の猶予も許されない状況。

はやてはどうなるのか……

そして、孝俊や拓也達はどう動くのか……?

続く

第46話 “灯台もと暗し” ってのは意外によくある気がする(後書き)

はい、第46話終了です。

序盤で雄人の親父、和久が登場しました。

では、プロフィールを……

なかばやしかずひさ
中林和久 34歳 男 魔導資質無し

『ラーメン屋のおやつさん』、『先代の玄武』、『怪力親父』

身長：193cm 体重：85kg

イメージCV：川本成さん(代表作：テニスの王子様・河村隆な
ど)

雄人の親父で、特殊スピリット試作型No.4【玄武】を持つ戦士。

かつては孝俊の父・龍輔らと共にデジタルワールドを守っていた。

孝俊の母・夏紀とは同い年で仲が良く、今でも懐かれています。

現在はラーメン屋【玄武亭】を開業している。また、玄武亭は拓也達の憩いの場所でもある。

豪快な性格で気前が良く、拓也達からは【おやつさん】と呼ばれ慕われている。

ちなみに、孝俊の料理の師匠でもある。

また、子供好きで結構子供に人気がある。

戦闘スタイルはパワー1本。

玄武本来の防御力もあるが、とにかくパワーが群を抜いている。
現役世代最強のパワーを持つ高雄ですら、和久には敵わない。
全スピリット通じて最強のパワーファイターである。

好きな物（人・事）：奥さん、ラーメン、筋トレ、子供
嫌いな物（人・事）：小さい事をネチネチ言う奴、ラーメン以外の
精密作業

・・・と、まあこんな感じで（何

では、次回予告・・・龍輔さん、よろしく。

龍輔「はいはい・・・んじゃ行くよ」

次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第47話【力に溺れた
らロクな事にならない気がする】お楽しみに」

第47話 力に溺れたらロクな事にならない気がする(前書き)

はい、大変遅くなりましたが第47話です・・・

孝俊「で・・・今度の遅くなった原因は何だ？」

鷹「・・・新作のポケモンやってました(汗)」

拓也「・・・ダメだこりゃ(苦笑)」

では、名言コーナーです。

- ゴール下は戦場だ！自分のゴールは死守しなければならん！！

(赤木剛憲 SLAM DUNK)

- ドリブルこそ、チビの生きる道なんだよ！！！！

(宮城リョータ SLAM DUNK)

- 革命なら、国に起こす前にまず自分に起こしたらどうだ？
その方が安上がりだぜ。

(土方十四郎 銀魂)

- 他人の記録を塗り替えるのは7割、8割の力でも可能だが
自分の記録を塗り替えるには10以上の力が必要だ
(イチロー シアトル・マリナーズ)

- 侍に花なんざ似合わねエ
花はやつぱり、女の子に一番似合いますよ
オカマもな・・・

(坂田銀時、志村新八、神楽 銀魂)

- ひとつ言つとくがオレの辞書によると 奇跡は起るもんじゃ
ねえ・・・
人が起こすもんだ

(猿野天国 Mr・FULLSWING)

高雄「奇跡は人が起こす・・・か」

雄人「確かに一理ありますよね」

輝二「さて、今回はどうなるやら」

龍輔「じゃあ、第47話・・・始まるよ」

第47話 力に溺れたらロクな事にならない気がする

はやてが倒れたのと同じ頃。

アースラの艦内では・・・フェイトが目を覚ましていた。

「・・・・・・・・う・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

ぼんやりと目を開けると・・・自分を心配そうに見つめている母・プレシアとリンディが見えた。

「フェイトさん・・・・・・・・」

「フェイト・・・目、覚めた・・・？」

「リンディ提督・・・母さん・・・・・・・・」

起きようとするフェイトの背中を支え、手伝うプレシア。
ふと、フェイトが前を見ると・・・

「ZZZZ・・・・・・・・」

アルフが眠っていた。

「アルフ・・・・・・・・」

「アルフも昨夜からずっと貴方の傍に付いてたから・・・」

アルフはフェイトが高雄に救出されてから、ずっとフェイトに付

いていた。

そして、アースラ艦内に運び込まれてからフェイトが目覚ますまで傍に付いていたのだ。

「あ……あれ……私……」

砂漠で戦闘して、仮面の男に襲われた為に前後の記憶が無く、辺りを見回すフェイト。

リンディはフェイトに向き直り、状況を説明する。

「ここはアースラの艦内。あなたは砂漠での戦闘中に背後から襲われて、気を失ってたの」

「でも、リンカーコアは無事よ。孝俊が……貴方を助けてくれたのよ、フェイト」

「孝俊が……！やっぱり……幻じゃなかったんだ……」

プレシアから孝俊に助けられた事を聞き、自然と笑顔になるフェイト。

フェイトはリンカーコアを取り出されてから気を失うまでに、少し時間があった。

その為……ぼんやりとだが、仮面の男をブツ飛ばした孝俊が見えていたのだった。

ただ、本当にぼんやりとだったので、夢か幻みたいに思っていた様だが。

「でも、良かったわ・・・フェイト、貴方が無事で・・・」
「うん・・・心配掛けてごめんなさい・・・母さん、リンディ提督・
・・・」

そう言っつて、フェイトはプレシアと抱き合い、リンディはその光景を微笑みながら見ていたのだった・・・

その頃、海鳴大学病院では・・・

「うん、大丈夫みたいね、良かったわあ」
「はい、ありがとうございます」

すっかり意識を取り戻したはやてが、石田先生と話していた傍らには・・・シグナム、シャマル、ヴィータ、孝俊がいる。ちなみに、雄人とザフィーラは八神家で留守番中である。

「はあ・・・ホツとしました・・・」
「せやから、ちょお目まいがして胸と手がつつただけやって言っただけやん。もう、皆して大事にするんやから」
「いやいや、アレ見たら誰だっつて焦るっつて・・・」
「何かあつたら大変ですから・・・」

「安心してシャマルと、苦笑しながら言うはやて。だが、孝俊とシグナムも心配そつに言う。」

「まあ、来てもらったついでに、ちょっと検査とかしたいから……もう少しゆっくりしてってね」

「はい……」

石田先生の言葉に、苦笑しながら答えるはやて。

「さて、シグナムさん、シャマルさん、ちよつと……」

「はい？」

「？」

石田先生に呼ばれ、病室を出るシグナムとシャマル。

「今回の検査では何の反応も出て無いです……攣っただけ、と言う事は無いと思います」

「はい……かなりの痛みがりましたから」

「マヒが広がり始めてるのかもしれない……今まで、こういう兆候は無かったんですよね？」

「と、思ってますけど……はやてちゃん、痛いのが辛いのが隠しちゃいますから……」

どうやら、遂に闇の書の浸食がヤバい所まで進んでいるらしい。
はやての体の麻痺が広がって来ていたのだ。

「発作がまた起きないとは限りません・・・用心の為にも、少し入院してもらった方が良いでしょうね。大丈夫でしょうか？」

「はい・・・」

石田先生から入院を勧められ、頷くシグナム。

このまま病院にいた方が、少しは安全だと判断したのだろう。
それに、入院していれば対処はすぐにできる。

「入院？」

「ええ・・・そうなんです。ああ、でも検査とか念の為とかですか
ら・・・心配無いですよ。ね？」

「はい」

はやてを安心させる為、理由を言っつて宥めるシヤマル。
シグナムも花瓶を置いて、シヤマルの言葉に同意する。

「いや、それはええねんけど・・・あたしが入院しとったら、皆の
ご飯は誰が作るんや？」

「うっ・・・」

はやての言葉に、ヴィータが言葉を詰まらせる。

「大丈夫です！私が作りますか」「却下！」「あう……酷い……」

シャマルが、自分が作ろうと進言しようとするが、シグナムとヴィータに却下されてしまった。

そして、部屋の隅で体育座りしていじけるシャマル……

「心配すんな、俺がやるから。それに、雄人も意外に料理出来るから大丈夫だよ」

いじけてるシャマルを慰めながらはやてに言う孝俊。

シグナムとヴィータは、改めて孝俊の存在に心から感謝していたりする。

雄人も、実家がラーメン屋【玄武亭】なので、良く手伝っている。

もつとも、シグナム達はその事を知らないが。

「そっかあ……じゃあ、孝俊さん……お願いするな？」

「おう、任せろ」

「はい……／＼」

ニツと笑って、はやてに言う孝俊。

それを見たはやての顔が赤かった気がするが、恐らく夕日に照らされたせいだろう・・・うん、きつとそうだ。

「毎日会いにくるよ！だから、大丈夫・・・」

「ヴィータは良え子やなあ・・・せやけど、毎日やのうてもええよ？やる事無いし、ヴィータ退屈やん」

「うん・・・」

ヴィータは、毎日会いに行く、とはやてに言う。

はやてはヴィータの頭を撫でながら、ヴィータに配慮して毎日は遠慮した。

「ほんなら私は、3食昼寝付きの休暇をのんびり過ごすわ」

「それが良いな。ま、この際だ・・・ゆっくり休みなよ」

はやての頭を優しく撫でながら言う孝俊。

はやてが何処となく嬉しそうだったが、孝俊は特に気にしてなかったりする（笑）。

「あ、アカン！すずかちゃんメールくれたりするかも・・・」

「ああ、私が連絡しておきますよ」

「うん、お願い・・・」

孝俊に慰められて立ち直ったシャマルがはやてに言う。

「では、戻って着替えと本を持ってきます。孝俊、主はやての傍に付いててくれ」

「ああ、解った」

シグナム、シャマル、ヴィータは一旦家に戻る事にした。
はやての着替えや本を持って来る為である。

そして、シグナムに言われた通り、孝俊は病室に残った。
いつ、デジモンがはやてを襲撃して来るか解らないからである。

「なあ、孝俊さん……」

「ん？」

「うち……どうなるのかなあ……」

孝俊は、内心驚いていた。

はやてからこんな弱気な言葉が出るとは思わなかったからである。

「ホンマは……怖いんや……このまま死んでしまっんやないか
って……不安で……（ぎゅっ）んえ……／＼？」

ふと、孝俊に抱き締められるはやて。
孝俊は、はやてを抱きしめながら頭を撫でる。

「・・・大丈夫。保証はねーけど・・・きっと大丈夫だ。俺が付いてる、雄人が付いてる、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラも付いてる」

「っ・・・うん・・・／＼」

はやてを安心させようと、撫でながら話す孝俊。
そして、はやてから離れてベッドの傍にある椅子に座る。

「なあ・・・はやてちゃんには・・・夢ってあるか？」

「んー・・・良く解らへん・・・けど、皆とずっと仲良く平和に暮らしたい・・・夢って言うより願ひ・・・かな？」

「そうか・・・なら、早く元気にならないとな？」

はやての夢（というか願ひ）は、シグナム達守護騎士と、ずっと仲良く暮らす事である。

それを聞いた孝俊は、笑ってはやての頭を撫でる。

「そうだ！はやてちゃんが完全に元気になったら・・・俺や雄人が住んでる世界に招待するよ」

「ホンマに！？わぁ・・・楽しみやわぁ・・・約束やで!？」

「ああ、約束だ。だから・・・気持ちを強く持って、早く病気治そうな・・・必ず何処かに突破口はある筈だからね」

「はい・・・！」

孝俊と小指を絡ませて指切りをするはやて。

はやての中で、病気（闇の書の呪い）を治したいと思う気持ちが・
・強く根付いた瞬間だった。

その頃、無限書庫では・・・リーゼアリアとユーノが闇の書について調査を続けていた。

（うん、ここまでで解った事を報告しとく・・・まず、闇の書ってのは本来の名前じゃない。）

ユーノが念話でクロノ、エイミィ、リーゼロッテ、そしてアースラ艦内に残った高雄に伝える。

ユーノも、正式名称の解明には辿り着いていた。

この事を現時点で知っているのは、他にプレシア・パラレルモン・拓也のみである。

（古い資料によれば、正式名称は夜天の魔導書。本来の目的は、各地の偉大な魔導師の

技術を収集して、研究する為に作られた・・・主と共に旅する魔導書。

破壊の力を振るうようになったのは、歴代の持ち主の誰かがプログラムを改変したからだと思う)

(ロストロギアを使って、無闇矢鱈に莫大な力を得ようとする輩が今も昔もいるって事ね・・・)

(その改変のせいで、旅をする機能と破損したデータを自動修復する機能が暴走してるんだ)

呆れ混じりに、リーゼアリアが念話で話す。

闇の書と呼ばれるようになったのは、歴代の誰か・・・

プレシアが拓也に語った事が本当ならば、新暦に入った辺りで誰かが闇の書を改竄かいざんしている。

もっとも、旧暦の頃から存在している闇の書だ。

旧暦の頃に改竄され、新暦に入って破壊の力に拍車をかけた、とも推測出来る。

「転生と無限再生はそれが原因か・・・」

「古代魔法なら、それくらいは有りかもね」

(一番酷いのは、持ち主に対する性質の変化・・・一定期間蒐集が無いと、

持ち主自身の魔力や資質を侵食し始めるし、完成したら持ち主の魔力を際限なく

使わせる・・・無差別破壊の為に。だから、これまでの主は皆完成してすぐに・・・)

蒐集が無いと、持ち主の魔力や資質を侵食する・・・
今のはやてがそうである。

更に、完成させても結局は死に至ってしまうのだ。
つまり・・・完成させてもはやてが助かる見込みは・・・無かつた。

「ああ・・・停止や封印方法についての資料は？」

（それは今調べてる。だけど、完成前の停止は多分難しい・・・）

「何故？」

ユーノの言葉に、クロノが聞き返す。

（闇の書が真の主と認識した人間でないと、システムへの管理者権限が使用できない。

つまり、プログラムの停止や改変が出来ないんだ・・・無理に外部からの操作を

しようとするば、主を吸収して転生しちゃうシステムも入ってる）

（そうなんだよね・・・だから、闇の書の永久封印は不可能って言われてる）

「元は健全な資料本が、何と云うかまあ・・・」

ユーノとリーゼアリアから帰ってきた答えに、リーゼロッテが呆れて返す。

クロノ達は知らないが、オフアニモンですら完成前の操作は不可能だったのだ・・・

永久封印が不可能でも無理も無いだろう。

ただ、停止させる事が出来れば話は違ってくるかもしれないが・・・

「闇の書・・・夜天の魔導書も可哀想にね・・・」

エイミイが悲しそうな顔をして呟く。

リーゼロッテが言ったように、元は健全な資料本だったが、力のみを求めた愚かな

人間のせいで今やロストロギア扱いである。

「調査は以上か？」

（現時点では。まだ、色々調べてる・・・でも流石は無限書庫、探せばちゃんと出て来るのが凄いよ）

（あたし的には君が凄い。すごい検索能力・・・）

リーゼアリアは、無限書庫の事よりもユーノの能力に驚いていた。普通は高ランクの魔導師でも、チームを組んで長い時間をかけな

ければいけない。

だが、ユーノはそれをわずか1〜2週間でここまで調べ上げていたのだから。

「ふうーむ、ただの淫獣じゃ無かったんじьяのお」

（誰が淫獣だ！誰が！）

高雄の呟きに、わずか0.1秒で反応したユーノだった。ちなみに、淫獣の【い】の字の時点で反応しているほど、敏感になっっていたりする。

「じゃあ、すまんがもう少し頼む」

「ああ」

そう言って、クロノはユーノとの通信を切る。

「・・・ユーノ君、凄いねえ」

「ああ、アタシも正直驚いたあ」

ユーノの搜索能力の高さに、エイミィとリーゼロッテは素直に称賛の声を上げる。

「・・・エイミィ、仮面の男の映像を」

「はいな」

クロノに言われ、仮面の男の映像を出すエイミー。

「何か考え事？」

「まあね」

「この人の能力も凄いと言うか、結構有り得ない気がするんだよね・
・・」

そう、既に拓也が考えていたが・・・

レイジングハート・エクセリオンの【ディバインバスター・エク
ステンション】、
ヴリトラモンの【セービング・コロナブラスター】の同時砲撃を防
いで見せた。

補足すると、威力を押さえたとはいえ、【セービング・コロナブ
ラスター】は
成熟期デジモンなら一撃で倒せる程の威力を持っている。

なのはとフェイトがいた2つの世界は、どれだけ急いでも20分
から30分はかかる。

だが、仮面の男が現れたのは僅か9分後。
普通ならまずあり得ないのだ。

「かなりの使い手って事になるね」

「そうだな、僕でも無理だ。ロツテはどうだ？」

「ああー・・・無理無理、アタシ長距離魔法とか苦手だし」

クロノですら再現不可能な芸当である。
リーゼロッテにも聞いてみるが、長距離魔法が苦手な為、無理らしい。

「アリアは魔法担当、ロッテはフィジカル担当でキッチリ役割分担してるもんね」

「昔はそれで、酷い目に遭わされたもんだ・・・」
「その分強くなったろ？感謝しろっつーの！」

どーやらクロノは昔、リーゼアリア&ロッテに訓練で色々酷い目に遭ったらしい。

その分、今の実力があるのだが・・・クロノ本人にとっては苦い思い出でしか無かったりする。

一方、高雄は・・・仮面の男の画像をじっと見ていた。

(・・・確かに、この仮面の男は有り得んくらいの実力じゃ・・・
しかし、何か
引つかかる・・・ん、待てよ・・・何も仮面の男が1人だけ
とは限らんのんじゃないか・・・?)

高雄は、暴走モードの孝俊とやり合った仮面の男の状況を思い返してみる。

(長距離バインドをアツサリ決める程の魔法の実力者なのに・・・
何故孝俊と

やり合った際に魔法を使わなかった・・・？勝ち負けはともかく、
目くらまし位は
可能だった筈・・・)

そう、砂漠の世界に現れた仮面の男は、一切魔法を使わなかった。
孝俊から逃げられたのも、魔法生物が現れた間のゴタゴタに
乗っただけである。

「(・・・仮面の男は・・・もしかして・・・!)・・・クロノ、
ちよつとええか？」
「ん？」

高雄はそう考えると・・・クロノを呼んで、アースラの奥へと歩
いて行くのだった。

その日の夜・・・別の次元世界。

「・・・今日はあまり魔法生物がいないわね・・・」
「ああ・・・残りはたったの11ページだと言つのに・・・」

シグナムとシャマルが、一緒に蒐集活動を行っていた。
だが、今日はどうやら不作の様で・・・魔法生物が殆ど出て来なかった。

「・・・！シャマル、下がれ・・・何かいる！」

シグナムがレヴァンティンを構える。
すると・・・何者かの声が響いた。

「ほう、私の存在に気付くとは・・・出来るだけ気配を消していたんだがな・・・」

そこにいたのは・・・デーモン配下の究極体デジモン、タイガーヴェスパモンだった！

(・・・っ！こいつ・・・今までの奴とは訳が違う・・・これが究極体、と言う奴か・・・！？)

シグナムは冷や汗を垂らしながら、タイガーヴェスパモンを見ていた。

タイガーヴェスパモンから感じる威圧感は、これまで戦ってきたデジモンの比では無い。

全くもって圧倒的・・・これぞ究極体、と言った感じである。

「さて、無駄口を叩いている時間も無い・・・貴様らを倒し、闇の

書を頂く！」

「シャマル、ここは私が引き受ける！お前は一旦戻って孝俊か雄人を……！」

「う、うん……！」

武器を構えるタイガーヴェスパモンと、それを迎え撃とうとするシグナム。

シャマルは戻って孝俊か雄人を呼びに行こうとするが……

「そうはさせんぞ……！」

すると、何処からともなく枯れた大木のようなデジモンが出現した！

ウツドモン 成熟期 植物型 ウイルス種

必殺技 ブランチドレイン（枝のような腕を伸ばして、突き刺し、敵のエネルギを吸い取る）

得意技 ウツデイスマッシュ（両手で相手を力いっぱい殴る）

リーフスライダー（鋭い葉っぱを飛ばして攻撃する）

ドレインバスター（毒を含んだ腕で相手を殴る）

枯れた大木のようなデジモン。

木のフリをして油断させ、通りかかったデジモンを捕まえてエネルギを吸い取る。

優しそうに見えるが、狂暴で危険な性格。木が鎧代わりになり、攻撃を簡単に跳ね返す。

しかし、火には弱く火炎型のデジモンは大の苦手。近寄ると逃げ出してしまふのだ。

「ほ、他にもいたなんて・・・！」

ウッドモンから距離を取るシャマル。

シグナムやヴィータなら勝てるかもしれないが、戦闘能力が皆無に近いシャマルでは勝ち目が無い。

「ぐ・・・っ！」

「どうした、この程度か・・・？」

更に、シグナムはタイガーヴェスパモンの攻撃を凌ぐだけで精一杯の状態である。

ただ、タイガーヴェスパモンからしてみれば、軽く流している程度だ、

それでも一撃一撃が重く、受け止めるのが辛いのだ。

「闇の書をよこせえええええ！」

「・・・っ！」

シャマルに飛びかかるウッドモン。

だが、次の瞬間・・・横から光弾が飛んで来て、ウッドモンに直撃した！

ドオオン！

「ぶべらあっ！？」

「え……！？」

光弾を喰らって吹っ飛ばされるウッドモンと、それを呆然と見る
シヤマル。

タイガーヴェスパモンとシグナムも、思わず動きを止めた。

「……エイミーから報告を受けて来てみたが……究極体のデジ
モンがいたとはな」

シヤマルが見た先には……

自身の剣である【リヒト・シュベアート】を構えた、光の闘士・
ヴォルフモンが立っていた……！

ヴォルフモン
源輝二、見参！

次回、戦闘開始！

続く

第47話 力に溺れたらロクな事にならない気がする(後書き)

はい、第47話終了です。

とりあえず今回は、フェイトとはやての容体を見る感じでした。

孝俊「とりあえず無事で良かったよ」

雄人「まだまだ予断は許されませんがね・・・」

そして終盤で遂にデーモン配下の究極体、タイガーヴェスパモン登場です。

それに立ち向かうは輝二・・・次回、戦闘開始です。

では次回予告・・・和久おやっさん、どうぞ〜

和久「あいよ！じゃ、元気良く行ってみよう！

次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第48話【男は何かと意地を張りたがる気がする】お楽しみに!!!」

第48話 男は何かと意地を張りたがる気がする(前書き)

はい・・・第48話です。

まず、最初に・・・

大幅に遅れましてどうもすみませんでしたああああ!!(スライディング土下座)

風邪ひいたり何やらでズルズルと引き延ばした結果、この有様に

・・・(汗)

これからはもう少し早く投稿できるように心がけます・・・

では、久しぶりの名言コーナーです。

・・・生き恥をさらすぐらいなら死んだ方がいい

(ロロノア・ゾロ ONE PIECE)

・・・オレは奴がボロボロになって交代するまで、何も気付いてやれず何も出来なかった・・・

見てろや子津!!今度は俺が借りを返す番だぜ!!!

(猿野天国 Mr. FULLSWING)

・・・約束したんだ!必ずつなぐって

ぼくは止まらない！

止まったら ぼくじゃなくなるから

(兎丸比乃 Mr・FULLSWING)

- 幕府でも將軍でもねえ 俺の大將はあの頃から 近藤だけだよ

(土方十四郎 銀魂)

- いつときの感情に流されて、自分がやりたかった事をやらなかったとしたら、

後で絶対後悔する時が来るんじゃないのかな・・・

(藤原拓海 頭文字D)

- 友情ってやつあ付き合った時間とは関係ナツスイング！

(ボン・クレイ ONE PIECE)

- この世に出来ねえ事なんてあるもんか

無理なんて誰が決めた？^{テキ}自分でできるって最後まで思っ^テていりゃあこの世に出来ない事なんて ねえと思うぜ・・・

(猿野天国 Mr・FULLSWING)

孝俊「さて、久しぶりだが・・・始めようか」

和久「んじゃ、第48話始めるぞ!・・・ちなみに次の俺の順番は？」

拓也「もうしばらく先だそうです」

和久「・・・orz」

第48話 男は何かと意地を張りたがる気がする

砂漠で仮面の男の襲撃を受け、気を失っていたフェイトはアースラの医務室で目を覚ました。

また、時を同じくして海鳴大学病院では、闇の書の呪いで意識を失ったはやてが目を

覚まし、治療を受けていた、

そして、入院すると言う事が決まり・・・孝俊の前で、はやては守護騎士達の前では

決して漏らさなかった弱音を吐く。

孝俊ははやてを精一杯慰め、はやては少し元気を取り戻す。

アースラでは・・・クロノ達が仮面の男に付いて調べていた。

正体が掴めないままだったが、映像を見て不審に思った高雄は何かを思いつき、

クロノを呼んで奥へと消えて行った。

その日の夜、違う次元世界でリンカーコアの蒐集をしていたシグナムとシャマルの

前に、デーモン配下の究極体・タイガーヴェスパモンが現れる。

タイガーヴェスパモンに苦戦するシグナム。

援軍を呼ぼうとしたシャマルも、ウツドモンに阻まれて絶対絶命の危機に陥る。

だが、そこにヴォルフモンが駆け付け、ウツドモンを吹っ飛ばす。

今・・・究極体相手の本気勝負が幕を開けようとしていた・・・！

「・・・伝説の十闘士とやらか・・・面白い」

「何故闇の書を狙うのか・・・俺達の知った事ではないが、その事でこっちの仲間に

危害を加えると言つのなら・・・見逃す訳にはいかない」

睨み合うタイガーヴェスパモンとヴォルフモン。

一定の間合を保ったまま、ずっと相對している。

「・・・行くぞっ！」

「ムッ！」

ガギン！

武器を打ち合う音が響く。

ヴォルフモンが先に動き、タイガーヴェスパモンに斬りかかったのだ。

「おおおおおっ！」

ガギンツ！カァン！キィン！ギギンツ！

次から次へとラッシュを加えるヴォルフモン。

しかし、タイガーヴェスパモンは全ての攻撃についていき、防いでいる。

流星は究極体である。

「ふん・・・なかなかやるではないか・・・っ！」

ガギインツ！

「ぐっ！」

タイガーヴェスパモンの反撃を防ぐヴォルフモン。
しかし、攻撃の重さゆえか、何歩か後ずさってしまっ。

「まだまだっ！」

ガアン！ゴオン！ギギインツ！スガンツ！

「くうっ・・・っあ・・・！」

辛うじてタイガーヴェスパモンの連撃を受け止めるヴォルフモン。
しかし、一撃一撃がとても重く、受け止める度に顔を歪めている。
しかも、スピードが恐ろしく速く、反応するだけで精一杯だった。

これでは反撃どころでは無い。

「ザフィーラを圧したあのヴォルフモンでも……あいつには劣勢を強いられるのか……!」

「あれが……究極体……!」

後ろでは、シグナムとシャマルがタイガーヴェスパモンの実力に驚いていた。

ヴォルフモンは、ザフィーラを倒す程の実力者……

そのヴォルフモンですら、劣勢になりつつあるのだから驚くのも無理は無い。

「っ……おおおおっ!」

「ふん……その程度!」

ヴォルフモンが光弾【リヒト・クーゲル】を放つ。

しかし、タイガーヴェスパモンはそれを何の苦も無く避けてしま
う。

不意を突いたつもりだったが、相手の反応力が半端では無かった
のだ。

「ぬんっ!」

ズドンッ!

「がつ……！」

タイガーヴェスパモンの一撃をまともに喰らって膝をつくヴォルフモン。

究極体の攻撃力は半端ではない。

「つく……やはりヒューマンスピリットでは荷が重過ぎたか……」

ゆっくりと立ち上がるヴォルフモン。

それと同時に、その体がデジコードに包まれる。

「ヴォルフモン、スライドエボリューション！……ガラムモン！」

ビーストスピリットのガラムモンに変化するヴォルフモン。

ヴォルフモンのままでは勝ち目は無いと見て、この姿を選んだのだった。

「さっきのようには行かないぞ……！」

「ふん、少しは楽しめそうだな……！」

ガギインッ！

喋り終わると同時に動き出し、交錯する2体。

2体とも目にも止まらぬ動きで、高速戦闘を展開していく。

まばたきした瞬間には、既に全く違う場所にいる。

まさに目の離せない展開となっていた。

「うおおおおおおっ!!」

「ぬっっっっんっ!!」

ガギン！ズガンツ！バキッ！ビシッ！ザザザザッ！ギヤリギヤリッ！

武器を撃ち合い、激突し、そこら中の岩や壁などが砕け、崩れる。なにせ、ガラムモンもタイガーヴェスパモンもスピードが武器のデジモン・・・その高速戦闘は凄まじい物だった。

「何という速さだ・・・目で追えない・・・」

「どっちも・・・とんでもないスピード・・・！シグナム、あれ！」

高速戦闘に呆然とするシグナムとシャマルだったが、ふと、シャマルが何かを見つける。

シグナムが、シャマルが指差した方向を見ると・・・先程、ヴォルフモンに

吹っ飛ばされたウッドモンが起き上がって来ていたのだ。

「くっ・・・あれでまだ倒れていなかったのか・・・！」

シグナムはレヴァンティンを構え、戦闘態勢に入る。

だが、何処からともなくウッドモンが更に2体出現し、計3体となる。

「ふ、増えたわ・・・！」

「だが、奴は見たところ樹木のデジモン・・・私とレヴァンティンなら何とかなる・・・！」

シグナムの言う通り、ウッドモンは樹木のデジモンであり、炎が大の苦手である。

相性で言えば、シグナムの方が有利だ。

「ヴォルケンリッターが将、烈火の騎士シグナム・・・ここで引く訳には行かん・・・！」

レヴァンティンを構え、鋭い目でウッドモン達を見る。

そして・・・一瞬でウッドモンとの差を縮め、横薙ぎにレヴァンティンを振るう。

「はぁっ！」

ズドンッ！

「グウアッ!？」

シグナムはウッドモンの1体を弾き飛ばすと、すぐに振り返る。
そこには既にウッドモンが飛びかかって来ていた。

「甘いっ！」

ガスッ！

「グガアッ!！」

そのまま振り返った勢いで回し蹴りを喰らわせる。

まともに喰らったウッドモンは、地面をバウンドして転がって行く。

「凄い……シグナムが完全に押ししてるわ……相手は3体いるの
に……」

「主の為にも、ここで負ける訳には行かない……!」

ウツドモン3体を相手に優勢に立つシグナム。
シャマルは、そんな彼女を見て驚いていた。

相手はまだ未知数の生物であるデジモン。

成熟期とはいえ、それを3体同時に相手して戦っている。

「あの究極体タイガーヴェスパモンに比べれば、まだ大した事は無い・・・！」

シグナムはそう言うと、カートリッジを1発ロードする。
そして、レヴァンティンが炎を纏う。

「【紫電一閃】！・・・・・・はあああっ！！！」

ザシュウツ！

「グギヤアアアア・・・・！！！」

シグナムの必殺技、紫電一閃をまともに喰らって消滅するウツドモン。

それを見て、シグナムはすぐにカートリッジを1発ロードする。

【Schlange forM】

そして、連結刃形態のシュランゲフォームが姿を現した。

「はああああっ!!」

ドシュツ!ズバアッ!

「ギャグッ!?」「グベラッ!」

連結刃の一撃で2体を弾き飛ばす。

更に間をおかず、シグナムはカートリッジを1発ロードする。

「これで決める・・・!【飛竜一閃】!」

ズドオンツ!バシユウウツ!

「「ギャアアアアアア・・・!!!!」」

炎を纏った連結刃で纏めて切り裂かれ、ウッドモン2体は燃えながら消滅していった・・・

ウッドモン3体を相手にしても、シグナムは怯む事無くこれを撃退する事に成功したのだった。

「あっちは・・・どうなった・・・?」

シグナムが、ガルムモンとタイガーヴェスパモンがいる方を振り返る。

ガシヤツ

ふと、金属が崩れる様な音が響くと、そこにはボロボロのガルムモンが倒れていた。

体中には針の様な物が刺さり、切り裂かれたような跡が残っていた……

「なっ!?!……ビーストスピリットを持ってしても……奴には勝てなかったのか……!?!」

「そんな……!」

2人の視線の先には……仁王立ちしているタイガーヴェスパモンがいた。

体には少数の掠り傷が付いているだけだった……

「ふん、なかなかのスピードだったが……所詮はその程度よ」

「ぐ……う……」

進化が解け、輝二の姿に戻ってしまうガルムモン。

シグナムがウッドモン達と戦っている間にも、ガルムモンはタイガーヴェスパモンと高速戦闘を繰り返していた。

だが、戦闘を続ける内に徐々に押され始め・・・タイガーヴェスパモンの必殺技、

【マツハステインガーV】のスピードに付いて行けずに翻弄されてしまったのだ。

その後も【ローヤルマイスター】や【ギアステインガー】といった技を徐々に

喰らい続け・・・遂に倒れてしまったのだった。

「トドメを刺してくれよう・・・！」

だが、タイガーヴェスパモンが飛びかかった次の瞬間・・・シグナムが間に飛び込んだ！

「【紫電一閃】！」

ズバンツ！

「うぬうっ!?!」

シグナムの紫電一閃をまともに喰らって後退するタイガーヴェスパモン。

輝二は、シグナムを見て驚きを隠せなかった。

「・・・何故・・・助けた・・・？」

「さっきの借りを返したただけだ。シャマルを助けてもらった借りをな」

確かに、輝二はシャマルがウッドモンに襲われそうになった時、リヒト・クーゲルを放ってシャマルを助けた。

シグナムはその借りを返したのである。

「・・・貸し借りがどうであれ、助けられた事実に変わりは無い。礼を言う」

「・・・律儀だな」

ゆっくりと立ち上がる輝二。

その眼からは・・・まだ闘志は消えていなかった。

「ふん・・・大人しく私に倒されれば良かった物を・・・」

「悪いがお断りだ。俺はこんな所で倒れる訳には行かない」

数M離れた所から言い放つタイガーヴェスパモン。
ガルムモンすら退けたからか、余裕の態度を取っている。

「ククツ・・・ガルムモンとやらの動きも見切った。もはや貴様に
勝ち目は無い」

薄ら笑いを浮かべながら話すタイガーヴェスパモン。
だが、輝二もまた・・・フツと笑った。

「何を勘違いしているかは知らんが・・・伝説の十闘士のスピリッ
トを舐めるな」

そう言うのと、真剣な顔付きになって再びD-スキャナを構える。

「見せてやる・・・光のスピリットの本当の姿を」

「本当の姿・・・だと？負け惜しみを・・・」

タイガーヴェスパモンは、輝二の言葉を真に受けてはいなかった。
しかし、シグナムとシャマルは・・・違った。

(本当の姿・・・まさか・・・)

(それが本当なら・・・雄人さんが言っていた・・・あの・・・！)

前に拓也達の協力で、管理局員達が張った結界を破って脱出した後、雄人が言っていた言葉を思い出す。

雄人の言っていた事が本当ならば、これから輝二がやるうとして
いる事が・・・
2人には解っていた。

輝二が左手を構えると、その左手に複数のデジコードが発生する。
そして、D・スキャナでデジコードをスキャンしながら・・・叫んだ。

「Wスピリットエボリューション!!!!」

その場に閃光が煌めき・・・輝二の身体が激しい光に包まれる。

「うおおあああー—————
———!!!」

輝二の激しい叫び声が響く。

その間にも、輝二の身体を装甲が包んで行く。

閃光が収まると、上空から1体の戦士が降りて来た。
着地し、持っている剣を一振りすると、その場を衝撃波が駆け巡る。

ヴォルフモン
人型の知性と、ガルムモン
獣型の野性を兼ね備えた光の融合戦士・・・

「ベオウルフモン！！」

ベオウルフモン ハイブリッド体（究極体級） 戦士型 バリアブ
ル種 融合形態

必殺技：ツヴァイハンダー（両手の大剣を使って超光速で斬りかかる。

巨大なエネルギー斬撃を飛ばすバージョンもある）

得意技：リヒトアングリフ（追尾ミサイルと主砲を撃ち出す）

ヴォルフモンとガルムモンが融合して誕生した戦士型デジモン。
伝説の十闘士「エンシェントガルルモン」の力を強く受け継いでおり、

光速のスピードで攻撃する。

スピードは勿論、攻撃・防御も格段に跳ね上がっている。
名前の由来は、イギリスの伝説に登場する英雄『ベオウルフ』と思
われる。

ギユオオオオツ！

「ふん、そのような虚仮威し！・・・がつ！？」

「・・・そのような虚仮威しが・・・なんだ？」

タイガーヴェスパモンは、自慢のスピードでベオウルフモンとの
距離を詰め、

自身の武器【ロイヤルマイスター】を突き出す。

が、ベオウルフモンはそれを見切ってたかし、瞬時にタイガーヴ
エスパモンの腹に

ボディーブローを打ち込んでいた・・・

次回・・・大反撃&決着！
続く

第48話 男は何かと意地を張りたがる気がする（後書き）

はい、第48話終了です。

つ・い・に・・・Wスピリット登場です！

ビーストスピリットとは一線を画すその実力が・・・今、発揮されました！

次回決着です。

さて、次回予告・・・今回の主役だった輝二、頼むね

輝二「よし、じゃあ行くぞ・・・」

次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第49話

【相手が急激にパワーアップしたら誰だって焦る気がする】お楽しみー！

第49話 相手が急激にパワーアップしたら誰だって焦る気がする(前書き)

はい、第49話です。

前回ほどではありませんが、時間が掛かってしまいました・・・
(汗)

では、名言コーナーです。

- 大切なモノが人を臆病にするんじゃない
大切なモノが多いほど人は強くなるのさ！
(たけすい 世紀末リーダー伝たけし！)

- 命うちゅうんは限りがあるから大事なんや。
限りがあるから頑張れるんやで。
(服部平次 名探偵コナン)

- 剣が折れたって？
剣ならまだあるぜ とっておきのが もう一本
(坂田銀時 銀魂)

- あいつは勝つために強くなるんじゃない！
絶対に負けないために限界を極め続けるんだ！
(ベジータ ドラゴンボールZ)

「剣と心を賭してこの闘いの人生を完遂する！」
それが拙者が見出した答でござる！！

（緋村剣心　るろうに剣心　）

「ときどき理屈に合わないことをするのが人間なのよ
（源静香　ドラえもん　）

拓也「ときどき理屈に合わない事をする・・・か」

高雄「だから人間って面白い」

輝二「じゃあ、第49話・・・始めるぞ」

第49話 相手が急激にパワーアップしたら誰だって焦る気がする

第49話副題【光の双魂】

砂漠の広がる次元世界でタイガーヴェスパモンに遭遇したシグナムとシャマル。

その圧倒的な力の前にシグナムは防戦一方に、シャマルもウッドモンに阻まれて絶体絶命のピンチを迎える。

だが、そこに輝二が進化したヴォルフモンが現れてウッドモンを弾き飛ばす。

タイガーヴェスパモンと勝負を始めるヴォルフモン。

シグナムもまた、3体が増えたウッドモンとバトルになる。

シグナムは3体のウッドモンを相手に優勢に戦い、遂に倒す事に成功した。

だが、ヴォルフモンは劣勢を強いられ、ガラムモンで巻き返そうとするが、それでも敵わずに倒れてしまう。

トドメが差されようとした瞬間、シグナムが飛び込んでタイガーヴェスパモンを押し返す。

シグナムは、ウッドモンからシャマルを助けてもらった借りを返したのだった。

しかし、シグナムの【紫電一閃】をまともに喰らっても、タイガーヴェスパモンは平然としていた。

ガラムモンすら倒し、余裕を見せるタイガーヴェスパモン。

だが、輝二の目からは闘志は消えていなかった。

ダブルスピリットを発動させ、ベオウルフモンへと進化したのだ。
ベオウルフモンはタイガーヴェスパモンのスピードを見切り・・・
ボディブローを喰らわせた！

反撃の狼煙が・・・今、上がった！

「はああああああっ！」

「うおおおおおっ！」

ドガッ！

ベオウルフモンとタイガーヴェスパモンが同時に走り出し、拳を
繰り出す。

それが相手に命中したのは・・・ベオウルフモンの方だった。

「ぐがあっ!？」

ベオウルフモンのパンチを喰らって後方に3、4歩下がってしまった
うタイガーヴェスパモン。

ガラムモン相手の時とはまるで形勢が逆転している。

「こ・・・こんな筈は無い・・・!でりゃあああ!」

形勢が逆転し、その事を受け止められていないタイガーヴェスパモン。

そりゃあ、先程完膚なきまでに叩きのめした相手が、信じられないパワーアップを

果たしたのだから無理は無い。

だが、現実的に・・・その相手はヘオウルフモン自分を圧倒している。

タイガーヴェスパモンは体勢を立て直して、今度は蹴りをぶち込もうとする。

だが・・・

「ふんっ！・・・はあああっ！」

ガッ！・・・ドゴオッ！

「ぐうおおっ！？」

蹴りをパンチで弾かれ、再びボディブローをぶち込まれる。その衝撃で砂漠を転がって行くタイガーヴェスパモン。

「ぐうう・・・何故だ・・・何故私の攻撃が通じんだ・・・！？」

「知らん。だが言った筈だ・・・伝説の十闘士を舐めるな、とな」

起き上がりながら叫ぶタイガーヴェスパモン。

ベオウルフモンはそれを一蹴し、進化する前に言い放った言葉をもう一度言う。

「お前はどうか知らんが、俺はお前より強い奴をいくらでも知っている」

「私より強い奴だと・・・？ふざけるな！私より強いのは我らが首領のみ！

少し攻撃を加えたからと言って図に乗るなあ！！！！」

「・・・聞く耳持たず・・・か。仕方が無い」

激昂して向かって来るタイガーヴェスパモン。

ベオウルフモンは一息つき、左手を向ける。

「【リヒトアングリフ】！」

次の瞬間、左手の装甲が開き・・・そこから光のレーザー砲と数発の小型ミサイルが撃ち出された。

ベオウルフモンの得意技、【リヒトアングリフ】だ。

「その程度っ！……【ローヤルマイスター】！！」

タイガーヴェスパモンは残像を残す様なスピードでレーザーとミサイルを避ける。

そして、勢いそのままに自身の武器でベオウルフモンに攻撃を仕掛けた。

ガギギインッ！

だが、ベオウルフモンもそれに反応し、自分の持つ剣でそれを受け止める。

鏢迫り合いになり、押し合う2体。

「甘いな……あの程度、私が避けられんと思ったか……！」

鏢迫り合いをしながら、勝ち誇った顔をして言うタイガーヴェスパモン。

だが、ベオウルフモンは表情を全く崩さなかった。

「……甘いのはそっちの方だ」

「なに？(トトトトトトオン！)ぐおああっ！？」

ベオウルフモンが言い終わると同時に……先程避けられた筈の小型ミサイルが

タイガーヴェスパモンに命中した。

あの小型ミサイルには追尾機能があり、何処かに着弾しない限りは追って来る様になっただ。

エイミイSide

「凄い！凄いよベオウルフモン！」

「あのデジモンが・・・押されている・・・！」

私もクロノ君も、ベオウルフモンの強さに驚いていた。

ビーストスピリットのガラムモンでも敵わなかったあのデジモンを、圧倒しちゃってる・・・

話には聞いていたけど・・・あれがWスピリット・・・
ビーストスピリットとは比べ物にならない強さだ・・・

「これなら行ける！あのデジモンを倒せるよ！」

「まだあんな力を隠し持っていたとはね・・・半年前の孝俊と言い、今回の輝二と
言い・・・全く、デジモンになる人達は何かとひやひやさせてくれる」

ベオウルフモンの実力に釘付けになっていた私とクロノ君。守護騎士達の事なんて、すっかり忘れてしまっていた。

それだけ……このバトルは目を見張るものがあったのである。

「ホント、一時はどうなる事かと思ったけど……」

「まあ、あれなら心配いらないな」

シグナムSide

強い……！あれがWスピリットの実力か……

個体にもよるが、確かにあのクラスが放つ砲撃ならば、あの時の管理局員達の

結界など、ガラス細工みたいな物だろう。

それに、ベオウルフモンの落ち着いた態度……

先程のガルムモンの時と比べてもまだ余裕が見える。

タイガーヴェスパモンはいつぱいいつぱいの様だが、ベオウルフモンはまだ余力を残してるようにも思える。

そう思うのも無理は無い・・・
何せ、ベオウルフモンは一撃たりとも攻撃を喰らっていないのだから。

タイガーヴェスパモンのあのスピードをもってしても、ベオウルフモンには通じていない。

完全に形勢は逆転してしまっている。

「す、凄いわ・・・あのベオウルフモン・・・」

シャマルも呆然として、ベオウルフモンの戦いぶりを見ている。

あれほどの次元のバトル・・・闇の書の長い歴史を通じても、恐らく存在しないだろう。

少なくとも、私の記憶の中には無い。

「・・・測り知れん・・・な」

自然とそんな言葉が出てしまった。

拓也達と初めて戦った時・・・私達はヒューマンスピリットの前に敗北した。

だが・・・目の前で戦っている輝一と言う男は、ビーストスピリットになり、

遂にはWスピリットを発動させている。

孝俊と雄人の話によれば、拓也も使えろと聞く・・・

あの時はまだ全力では無かった・・・と言う事か。

否、あの姿では全力を出していたのかもしれない。

それでも・・・デジモンと言う存在が測り知れない事に変わりは無かった。

「うおおおおおっ!!」

「ぐおあああっ!?!」

そうこうしている間にも・・・ベオウルフモンはタイガーヴェスパモンに確実に攻撃を喰らわせていた。

私の勘だが・・・決着は・・・近い。

S i d e o u t

砂漠に佇むベオウルフモンと、体の数か所に傷や痣を付けているタイガーヴェスパモン。

タイガーヴェスパモンは自身の武器を構えて、いつでも動き出せる体勢になっている。

ベオウルフモンもまた、剣を構えて攻撃態勢に入っていた。

「・・・・・・・・」

砂漠を風が吹き抜ける。

2体は共に動かず、止まったままである。

(・・・これで決まる・・・！)

シグナムは、次の一撃で決まる事を予測していた。

そして、しばしの沈黙の後・・・2体が同時に動いた！

「終わりだ・・・【マツハステインガーV】！！」

タイガーヴェスパモンが、これまでのどの動きよりも速い一撃を繰り出した。

自身最強の必殺技、【マツハステインガーV】である。

「今までよりも速い・・・！！」

シヤマルがそのスピードに驚く。

シグナムも、言葉には出さないが無言で目を見開いていた。
だが・・・

「ぬうあぁっ！」

ゴガッ！

「な、何いつ！？（ドゴッ！）ぐふおおっ！」

ベオウルフモンは、横からタイガーヴェスパモンの武器を殴って弾き飛ばす。

そして、タイガーヴェスパモンが怯んだ隙を見逃さず、右回し蹴りを叩き込んだ。

「これで終わりだ・・・！」

ベオウルフモンが剣を天に掲げると、白いオーラが剣を包む。それが・・・狼の形に変わって行った。

「【ツヴァイ・ハンダー】！！！」

狼の形を成した巨大な白いオーラが高速で砂漠を駆け抜け・・・タイガーヴェスパモンを一刀両断した！

これがベオウルフモンの必殺技【ツヴァイ・ハンダー】である。

「ぐおおおおお・・・！！！！そ、そんな・・・バ力なああああ
ああ・・・！！！！」

タイガーヴェスパモンは叫び声を上げながら・・・消滅していった。

ベオウルフモンは、タイガーヴェスパモンが消えて行った場所を、静かに見つめていた。

「か・・・勝った・・・究極体デジモンに・・・」

「あれが・・・Wスピリットの・・・力・・・」

シグナムとシャマルは、砂漠に佇むベオウルフモンを見て、感嘆の溜息を漏らす。

孝俊や雄人から簡単に話だけは聞いていたが、実際に戦うのを見たのは初めてだったからだ。

『よし！そのままこの守護騎士達も・・・！』

「・・・！！！！」

ふと、クロノから通信が入る。

この勢いで、シグナムとシャマルを捕えようと言うのだ。

それを聞いて、警戒するシグナムとシャマル。

だが、ベオウルフモンから帰ってきた答えは・・・

「クロノ、すまんがそれは無理だ」

『な、何故!?!』

そう言つと同時に、ベオウルフモンから進化を解いて、元の輝二に戻る。

それを見て、クロノが焦った様に声を上げる。

「どうやら体が限界寸前みたいでな・・・デジタルワールド以外では体への負担が大きいんだ」

『そ、そんな・・・』

「エイミィ、すまんが転送頼む」

『う、うん・・・』

若干悔しそうな声を出すクロノ。

輝二はシグナムとシャマルの方を1度見た後、すぐに別方向へと歩いて行った。

そして・・・転送されて地球へと戻って行ったのだった。

「……………」

「どうしたの？シグナム」

輝二が歩いて行った方向を見て、黙りこんでいるシグナム。それを見たシャマルが、彼女に尋ねる。

「あいつは……まだ余力があった」

「えっ！？で、でも彼は限界寸前だって……」

余力を残していた、と言うシグナムの言葉に驚くシャマル。

輝二本人は、限界寸前だと言っていたが……

「……おそらく、私達を逃がす為の口実だろう。奴も孝俊の仲間だからな……」

「……正直、疑ってたけど……本当に私達と戦うつもりが無いみたいね……」

シグナムの予想は当たっていた。

輝二には、まだシグナム達と戦うだけの余力は残っていたのだ。

だが、輝二も拓也と同じ考えで、仲間である孝俊が世話になっ
ているシグナム達と

戦いたくは無かったのだ。

そして、守護騎士達が闇の書のページを埋める理由も知っている為、尚更だった。

「……そろそろ時間だ。今日はもう蒐集は出来まい……主も心配だ……」

「そうね……」

こうして、シグナム達も砂漠を後にするのだった……
Wスピリットの力が……頭から離れぬまま……

そして、翌朝……

フェイト達が住むマンションの前で、なのはと拓也がフェイトを迎えに来ていた。

拓也は用務員の仕事の関係で、なのは達と同じ時間に出勤しているのだ。

「あつ、高雄さんおはようございます!」

「おう、出勤&登校か?」

「ああ、そーいやデジヴァイスの調整はどうだ?」

マンションの外で、高雄が早朝トレーニングを行っており、なのはと拓也に声をかける。

拓也は、昨晚から高雄にD・スキャナのメンテナンスを頼んでいた。

「ん、もうちよいかかるかな。まあ、午前中には終わるさ・・・終わったらチャリでそっちまで届けに行くからよ」

「おう、頼んだぜ！」

終わったらすぐに小学校まで届けに行くつもりらしい。

高雄には、今回なのはの世界に飛び込む際に乗って来た自転車がある為、そんなに

時間はかからない。

余談だが、輝二も昨晚タイガーヴェスパモンを倒した後、すぐに高雄にD・スキャナを預けている。

(ところでよ・・・孝俊のデジヴァイスは大丈夫なのか？シグナム達の所にいるんじゃないメンテナンズ出来ねーだろ・・・?)

(ああ、心配いらん。あいつと雄人の分はオフアニモンがメンテナンスしてくれてるらしいから)

小声で高雄に尋ねる拓也。

高雄が言うには、孝俊と雄人のD・スキャナは、オフアニモンが

直接メンテナンスしてくれているらしい。
些細な異常でも、オフアニモンならすぐに見つけて治す事が出来る。

「ま、とにかく・・・頼んだぜ」

「おう、じゃあ、いってらっしゃーい」

高雄は軽く手を振って、拓也達を見送るのだった。

「体調、大丈夫？」

「うん・・・リンカーコアも無事だし、体の方ももうすっかり」

笑顔で言葉を交わすのはとフェイト。
そんな2人を、拓也は微笑みながら見守っていた。

学校に到着し、教室でアリサとすずかと合流していつもの4人組になり、話し始める。

拓也は用務員室へ向かった為、この場にはいない。

「入院？」

「はやてちゃんか？」

「うん・・・昨日の夕方に連絡があったの。そんなに具合は悪くないそうんだけど、検査とか色々あってしばらく掛かるって・・・」

「昨晚、シャマルから連絡を受けたさすが、はやてが入院した事をなのは達に伝える。」

「そつか・・・じゃあ、放課後みんなでお見舞いとか行く？」

「え、良いの？」

「すずかの友達なんでしょ？紹介してくれるって話だったしさ、お見舞いもどうせなら賑やかな方が良いんじゃない？」

「こうして、アリスの提案で4人は放課後、海鳴大学病院に行く事となった。」

デーモンSide

「な、何・・・！タイガーヴェスパモンがやられたと言うのか・・・！？」

「はっ・・・光のスピリットの持ち主と交戦し・・・敗北したようです」

デーモンの城では、タイガーヴェスパモンが敗北したとの情報が入っていた。

その情報を聞いたデーモンは、驚きの表情を見せる。

タイガーヴェスパモンは、デーモンの部下の中でもトップクラスの実力者だ。

タイガーヴェスパモン
その実力者がやられたと聞けば、ショックもあるだろう。

「スピードだけならデーモン様をも上回るあいつがやられるとは……」

「デジモンに進化する人間は、そこまで強いと言うのか……面白い……次は俺が行こう」

自分達の中で最速のスピードを持つタイガーヴェスパモンが負けた事に驚くデスモン。

そして、タイガーヴェスパモンを破ったスピリットに興味が湧いたらしく……カリスモンが立ち上がった。

「そつだ、ついでにあの魔導師のガキ共も叩きのめすか……ぐわはははははー！」

カリスモンは何かを考えたらしく……高笑いをしながら地球へと向かって行った……

それから少し後・・・昼休みの聖祥小学校。
学校の裏庭で、拓也は庭の整備作業をしていた。これもまた用務員の仕事である。

「ふー・・・こんなもんかな・・・っと」

整備作業を終えて、伸びをする拓也。
ふと、空が急に暗くなり始めた・・・

「なんだ・・・？今日の天気予報は雨降るなんて言っただけじゃなかったよな・・・？」

ズズウウウウン・・・！

拓也がそう呟いた直後、グラウンドの方向から地鳴りがした。
それと同時に、子供達の悲鳴が聞こえてくる。

「ま、まさか・・・！！」

拓也は即座に走り出し、グラウンドへと向かう。

完全体と究極体では、一部の例外を除いて次元が違うのだ。

「た、拓也さんは・・・戦えるのよね!？」

「・・・そうしたいのは山々なんだが・・・デジヴァイスは高雄に預けててメンテナンス中なんだ・・・」

そう・・・D・スキヤナは高雄に預けたまま、まだ拓也の元に戻って来ていないのだ。

勿論、なのはとフェイトもここでは魔法を使う訳にはいかない。

(ど、どうしよう・・・フェイトちゃん・・・)

(ここじゃ魔法は使えないし・・・打つ手が無いよ・・・)

念話で話し合う2人。

まさしく絶体絶命、というところだ。

更に、カリスモンは部下と思われるデジモンを引き連れていた。

カリスモンは動いていないが、その部下のデジモンが暴れ回っている。

タスクモン 成熟期 恐竜型 ウイルス種

必殺技：パンツァーナツクル（突進の勢いを加えた重いパンチを繰

り出す)

得意技：ホーンドライバー（頭の巨大なツノで突進し、攻撃する）

両肩から巨大なツノを生やした恐竜型デジモン。

目の前のものを破壊して突き進んでいくところから、“パンツァーデジモン”と

呼ばれている。

両腕にある マークは今までに倒したデジモンの数（ 1個につき 100匹）を表す。

ツノは折れてもすぐ生えてくるため、折っただけではまったく勝ち目はない。

カリスモンの引き連れているタスクモンは3体。

その3体が、校舎へと迫る。

「とつとと出て来い十闘士！さもなければここを跡形も無く破壊してやる！」

「つく・・・！待てっ！」

拓也は我慢しきれず、カリスモンの前に飛び出した。

いかにD・スキャナを持ってないとはいえ、これ以上子供達の泣き顔は見たくない。

「ぬ？貴様が十闘士か・・・！」

「そつだ！」

「ならば話は早い・・・ここで貴様を仕留めて・・・」

チリンチリン

「む、何の音だ（ギャリギャリギャリイッ！！） のぎゃあああ
あああっ！！!?」

ふと、カリスモンの後ろからベルの音が聞こえて来る。
そして反応しようとした瞬間、カリスモンは自分の後頭部に嫌
な衝撃を受けた。

何かがぶつかったと同時に、削れるような音まで響いたからだ・・・

「ぬぐおおお・・・だ、誰だ！！!?」

カリスモンが後ろを振り向く。

すると、カリスモンの後頭部を見た拓也達は・・・

「よつす！お待たせ拓也！」

四谷高雄・・・案の定、こいつだった。

D・スキャナのメンテナンスが終わったので、自転車に乗って届けに来たのである。

で・・・到着直後にカリスモンを発見し・・・

自転車で突入&ジャンプして、カリスモンの後頭部目掛けて特攻を仕掛けたのである。

「高雄！」

「高雄さん！」

高雄を見て、拓也となのはが声を上げる。

高雄は自転車から降りて、拓也達に駆け寄る。

「間一髪って所か・・・遅くなって悪かった」

「デジヴァイスのメンテナンス終わったのか？」

「ああ、バッチリな・・・これで多少暴れ回っても大丈夫だ。あと、フェイト」

「え？」

顔を真っ赤にして、100tと書かれたハンマーを振り回して高
雄を追いかけ回していた。

いつかの再現だったりする。

この場にプレシアかアルフがいれば、間違いなくデジャヴを感じ
ていただろう。

「高雄さん・・・後でその写メ私にも・・・」

「すずか!？」

一方で、すずかは孝俊の写メを高雄に送ってもらおうと思ってお
り、それを聞いたアリサが驚いていた。

ちなみに・・・すずかは前に機種変して孝俊のと同じタイプにし
たらしい。

「おいコラガキ共!こっちを無視するんじゃないやねえ!!」

カリスモンが、額に青筋を浮かべて叫ぶ。

ほったらかしにされてりゃ怒るのも当然だろう。

「おっといけねえ、忘れてたぜ・・・」

「早いところカタを付けるかね」

カリスモン＋タスクモン×3を見る拓也と高雄。
タスクモンは巨大な腕を振り回し、臨戦態勢に入っている。

「ふん……見せてもらおうか。デジモンに進化する人間の實力とやらを」

カリスモンが薄ら笑いを浮かべながら、2人を見ている。

拓也は真剣な顔付きになり、高雄はいつもの様なアホっぽい雰囲気たまたまが無くなり、威圧感すら漂う佇まいたまたまになっていた。

「おばあちゃんが言っていた……子供は宝物……。この世で最も罪深いのは、その宝物を傷つける者だ」

「それ、仮面ライダーカトの言葉じゃねーか……ま、同感だな」

なんかどっかで聞いた様な格言を口にする高雄と、それにツッコミながらも同意する拓也。

そして、D・スキヤナを構える。
炎のデジモン2体が……今、立ち上がる！

続く

第49話 相手が急激にパワーアップしたら誰だって焦る気がする（後書き）

はい、第49話終了です。

タイガーヴェスパモンを倒し・・・今度はカリスモンが襲来しました。

今回は拓也と高雄が戦います。

火と剛龍のコンビがどう戦うか・・・必見です。

では、次回予告・・・アリサちゃん、どうぞ～

アリサ「あ、あたし！？しよーがないわね・・・

次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第50話【1度決めた事は最後までやり通すべきな気がする】お楽しみに！」

感想、質問待ってます～

第50話 1度決めた事は最後までやり通すべきな気がする(前書き)

あけましておめでとうございます！

なんだかんだで既に1年が経過・・・早いとこA・S編を終わらせたいです(汗)

では、名言コーナーです。

- 自分を守れねーやつが他人を守れるのか？

(沢田家光 家庭教師ヒットマンREBORN)

- 言われなくてもまあこっちはとくに好きに生きてんだよ
好きでここに来てんだよ 好きであんたと一緒にいんだよ

(神楽&志村新八 銀魂)

- 踏んだって 焼いたって 俺達は絶対負けねえ!!!

雑草は死なねえ 死なねえんだ!!!

(猿野天国 Mr・FULLSWING)

- 自分の人生を運命に変えられたなら

その運命に その人生に ただ守ることを誓う

(黒崎一護 BLEACH)

- お膳立てされた武士道貫いてどーするよ

そんなもんのためにまた大事な仲間失うつもりか

俺ア もうそんなの御免だ

どうせ命張るなら俺は俺の武士道貫く・・・

(坂田銀時 銀魂)

- 自力で苦難を乗り越えられん男なんか死んじまった方がいい

(両津勘吉 こちら葛飾区亀有公園前派出所)

高雄「困難は乗り越える為にある・・・なんちゃって」

拓也「さて、遅れてしまったが・・・最新話だな」

アリサ「第50話、始まるわよ！」

第50話 1度決めた事は最後までやり通すべきな気がする

第50話副題【王龍】

砂漠でタイガーヴェスパモンと対決した輝二。

1度は窮地に陥るものの、Wスピリットでベオウルフモンに進化し、形勢を逆転する。

そして最後は、必殺技【ツヴァイ・ハンダー】で遂にタイガーヴェスパモンを撃沈した。

その状況を見ていたクロノは、そのままシグナムとシャマルも捕まえる様に言うが、

輝二は体力の限界を理由にこれを拒否する。

しかし、それはシグナムとシャマルを逃がす為の嘘だった。

そして輝二が去った後、シグナムとシャマルも砂漠を後にするのであった。

翌日、学校に向かったなのは・フェイト・拓也は、いつも通りに過ごしていた。

なのはとフェイトは、すずかからはやてが入院した事を聞く。

そして、アリサの提案で放課後にお見舞いに行く事になった。

だが、昼休み・・・デーモン配下のデジモン、カリスモンが部下のタスクモン3匹を
引き連れて聖祥小学校を襲撃して来た。

メンテナンスの為にD・スキヤナを預けていて進化出来ない拓也は窮地に陥るが、

D・スキャナを拓也に届ける為にやって来た高雄により事なきを得る。

高雄の自転車による突撃を喰らって後頭部が盛大にハゲてしまったカリスモンを

見て、拓也達は大笑するのだった・・・

そして・・・これ以上好き勝手させない為、拓也と高雄は戦闘態勢に入った。

子供達を守る為・・・2人が戦う！

D・スキャナを構える拓也と高雄。

それぞれの手にデジコードが現れ、それをスキャンする。

「スピリットエボリューション！」

2人の咆哮とも取れる叫びが空に響く。

そして、2人の身体がそれぞれ装甲に包まれて行く。

「アグニモン！」

「グレンモン！」

2人は、ヒューマンスピリットのアグニモンとグレンモンに進化した。

まずは、暴れようとしているタスクモンを押さえようと動く。

「でやあああああつ！」

ドゴツ！

「ゲギャツ！」

アグニモンが得意の足技でタスクモンの顎を蹴りあげる。
まともに喰らったタスクモンは、悲鳴を上げると同時に後ろにひ
っくり返る。

「グオオオオオー！！」「ギャオオオオオー！！」

一方、残り2体のタスクモンはグレンモンに向かって突っ込んで
来る。

目の前の物を破壊しながら突き進むと言うタスクモンの突進を喰
らえば、タダでは済まないだろう。

ガガガツ！

・・・もつとも、並のデジモンが相手であればだが。

グレンモンは、片方ずつの手で突進をいとも簡単に受け止めてい
たのだ。

「・・・この程度で俺を吹っ飛ばそうってか？」

ギョオオオオッ！

「リンディさんの淹れるお茶並に甘いわあああああ！！！！」

グレンモンはそう叫びながら2体を掴み上げて振り回し・・・

ドゴゴコンッ！

「グギャハアッ！！！」

2体同時に思い切り地面に叩き付けた。

現役世代一のパワーを誇るグレンモンでは、相手が悪かった。

「ほお・・・なかなかやるじゃねーか」

盛大に地面に叩きつけられて伸びているタスクモンをまるで気にせず、カリスモンは

2体を・・・特に、グレンモンを見ていた。

あのパワーに興味が湧いたらしい。

カリスモンの口元は・・・僅かにつり上がっていた。
そして、グレンモンの方を見て・・・

「おい、その赤いロボットみたいなの！俺と1vs1タイムンで勝負しろ
！」

なんと、グレンモンに1vs1の勝負を申し込んだのだった。
それを聞いたグレンモンは・・・

「・・・おう、望むところじゃい。やったるうじゃねえか！」

闘志むき出しの表情で、カリスモンの申し出を受ける。
その眼は完全に闘志の炎で燃え上がっていた。

「てめえ・・・何企んでやがる！」

「何も企んじやいねえ。ただ単にそいつの力に興味が湧いただけだ」
アグニモンは何か裏があるのではと思い、カリスモンに怒鳴る。
だが、カリスモンは意に介さず、アグニモンの言葉を否定する。

「・・・だ、そうだぜ？ま、心配しなさんな・・・あいつは俺が倒
すからよ」

「ほう・・・大層な自信だな？面白い・・・！」

グレンモンはアグニモンを宥めながら、カリスモンを見る。カリスモンはグレンモンの言葉を聞き、微笑を浮かべた。

「た、高雄さん・・・ホントに大丈夫なんですか？」
「あのデジモン・・・とんでもなく強そうだよ・・・？」

なのはとフェイトも、カリスモンの威圧を肌で感じ取ったのか、不安になっていた。

それ故に、高雄が1人で勝てるかどうか疑問だったのだ。

不安な理由の1つには、高雄の実力が未知数である事もあった。

拓也の実力なら、半年前のジュエルシード事件でしっかりと目に焼き付けている。

しかし、高雄の場合はデジモンとの対戦を見ていないのだ。

確かに、高雄はヴィータを力づくで破る破壊的なパワーを持つ事は解っている・・・

だが、それはあくまで魔導師や騎士相手での事である。

デジモンが相手となると、また事情が違って来るのだ。

厳密に言えば・・・高雄はなのは達と同じ戦場でデジモンと戦っている。

ただ、その時はなのはもフェイトもそれぞれヴィータ、シグナムと戦っていて見て

いる暇は無かったのだが。

「なに、大丈夫だ心配すんな。ここで負けてちゃ親友孝俊に合わす顔が無えしな」

グレンモンはそう言い残すと、カリスモンに向かって歩いて行った。

グレンモンとカリスモンは向かい合い・・・そして睨み合っ

「ぶん・・・・・・・・ぶちのめしてやる・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・やってみる・・・・・・・・！」

カリスモンが睨みを利かせるが、グレンモンはそれに怯む事無く言い返す。

そして、一旦お互いに離れて距離を取る。

その光景はさながら、ボクシングの試合前の様な雰囲気だった。ひっくり返って気絶していたり、逆さまに地面に突き刺さってい

るタスクモンが周辺にいるのはまるで気になっていない。

「……高雄……」

「高雄さん……」

グラウンドの端では、拓也達がグレンモンを見ていた。

拓也達のみならず、校舎の中から子供達や教師達も、全員がグレンモンを見ていた。

「ね、ねえ……あの人……強いのか？」

ふと、アリサが拓也に尋ねる。

すずかも言葉には出さないが、気になるのか拓也を見ている。

「ん、そうだな……孝俊と殆ど互角……と言ったところかな。あいつと孝俊が戦ったら、殆ど引き分けになるくらいだし」

「そ、そうなんですか……？」

なのはが拓也の言葉を聞いて、若干信じられないといった顔をす
る。

だが、拓也の言っている事は紛れもない事実だ。

「こつちの世界に来る少し前に練習試合やって、288回目の引き分けになったとこだし」

「引き分け多っ!?!」

拓也の言葉に思わず突っ込んでしまったアリサ。

孝俊と高雄の練習試合の対戦成績は4勝3敗288引き分け・・・
孝俊が1つだけ勝ち越している。

とはいえ・・・これだけ引き分けが多いと、力の差など無いも同然だが。

「孝俊が剣なら高雄は力・・・あいつは俺達のパワーの象徴シンボルみたい
なもんだ」

拓也は・・・高雄の事を信頼している。

パワー勝負において、高雄の右に出る者などせいぜい雄人の父・
和久くらいである。

そんな話をしている拓也達をよそに、高雄とカリスモンは、未だ
に睨み合っていた。

「・・・行くぞおおおっ!!」

次の瞬間、グレンモンが動き・・・一気にカリスモンの懐に踏み
込む。

そして、高熱を纏った拳を振りかぶる。

「先手必勝！【スージーQ】！！！」

ドコオツ！

「やった！まともに入ったの！」

グイータを障壁ごと吹っ飛ばした必殺パンチ・【スージーQ】が
カリスモンの胸部に直撃する。

それを見て、なのはが嬉しそうに声を上げる。
フェイト・アリサ・すずかも安心した表情を見せていた。

「……ふん、そのレベルとしてはまあまあ良いパンチだな」

「う、ウソだろ……グレンモンの【スージーQ】をまともに喰ら
ってノーダメージだと……！？」

なんと、カリスモンは直撃を受けても全く堪えておらず、余裕の
笑みを浮かべていた。

拓也はそれを見て、驚愕の表情を浮かべていた。
それもその筈、【スージーQ】は並の究極体相手ならば、少しは
ダメージが通る技なのだ。

だが、カリスモンには全く通じていなかったのだから驚くのも無
理は無い。

「ぬんっ!」「ぐっ……!」

カリスモンが腕をふるって、グレンモンを跳ね飛ばす。
グレンモンは衝撃で数M吹っ飛んでしまっ。

「ちっ……やっぱりヒューマンスピリットじゃ究極体相手はきつ
いか……!」

グレンモンが体勢を立て直すと、その体がデジコードに包まれる。

「スライドエボリューション!……タイタンドラモン!」

グレンモンは、ビーストスピリットのタイタンドラモンに変化する。

ヒューマンスピリットでは荷が重すぎると判断したのである。

「ほう、少しはやりそうだな……」

タイタンドラモンを見て、カリスモンは嬉しそうに口元を釣り上げる。

実はカリスモンは、デーモンの部下の中でも随一のパワー馬鹿だったりするのだ。

このカリスモンにパワーで太刀打ちできるのは、首領のデーモンか、同じ幹部級の
ムゲンドラモンくらいだろう。

「うおおおおおー!!」

「ぬーっっっっん!!」

ドオオオオンッ!

刹那、タイタンドラモンとカリスモンの拳がぶつかり合い、打撃音が響く。

「ふん……さっきよりもマシにはなった様だなあ!!」

「そりゃどっ……もっ!!」

ズドオンッ!

再び拳と拳をぶつけ合う2体。

その後も、何度も何度も拳をぶつけて行った……

その頃、八神家では……孝俊とシグナムが庭で剣の訓練を行っていた。

「ふっ！せいっ！はあっ！」

「よっ！とおっ！ほっ！」

シグナムはレヴァンティンで、孝俊は重龍牙を持って互いに打ち合っている。

シグナムが目にも止まらぬ速さで孝俊に打ち込んで行くが、孝俊は全てに反応して受け流している。

魔法抜きにしても、シグナムはかなりの腕を持つが・・・何せ孝俊の師はあの龍輔。

龍輔は、現役世代がまるで歯が立たない無敵の剣豪なのだ。

その龍輔に小さい頃から教えを受けている孝俊だからこそ、シグナムの剣を難なく捌く事が出来るのだ。

「せいっ！」

カキインッ！

「つく・・・！」

ほんの一瞬の間を突き、孝俊はシグナムのレヴァンティンを弾き飛ばし、シグナムの喉元に重龍牙を向ける。

「ふう・・・参った・・・また私の負けか。これで15連敗だな」

「いやいや、最初の頃に比べて全然隙が減ってたよ。こりゃ次辺り解らんかもね」

「ふっ、言ってくれる・・・」

一本取られて負けを認めるシグナム。

シグナムは時間さえあれば孝俊に訓練（と言う名の模擬戦）を申し込んでいる。

魔力を抜きにしての純粋な剣術では孝俊に分があり、かれこれ15回も連続で彼に敗れている。

それでも、シグナムの剣術は孝俊との打ち合いでさらにレベルが上がっていた。

最初の頃こそ、すぐに一本取られていたが・・・今では10分くらい打ち合うようになっている。

「そーいやシグナム、前回の蒐集の時に究極体と対峙したってシヤマルから聞いたが、大丈夫か？」

「ああ、心配無い・・・お前の仲間の、輝二と言ったか・・・そいつに助けられた」

「輝二が・・・そうか」

究極体・・・タイガーヴェスパモンと戦ったと聞き、心配になる孝俊。

だが、輝二に助けられたと聞き、安心する。

「お前と雄人が言っていたWスピリットを見たが・・・圧倒的だっ

た
」

「輝二のWスピリット・・・ベオウルフモンか」

「しかし・・・お前の仲間達は本当に私達と戦うつもりが無いのだな・・・」

「まあな。俺もそうだが、一度決めたら挺子てこでも動かん連中揃いだからな」

拓也と言い、輝二と言い・・・シグナム達と戦うつもりは全く無い。

管理局側にいる為に警戒していたが、拓也達は全く戦う素振りを見せなかった。

輝二も余力を残していながら、限界寸前だと嘘をついてまでシグナムとシャマルと戦おうとはしなかった。

「一度決めた事は最後までやり通すってな。高雄なんて一際頑固だからなあ・・・」

「高雄・・・ヴィータと戦った男だな。しかし、お前は高雄の事を話す時は何処か楽しそうだな？」

「ん、そうか・・・？そんなつもりは無いが・・・」

長い付き合いのせいか、孝俊と高雄は一際固い絆で結ばれている。

そして、孝俊は高雄の事を話す時は何処か楽しそうと言うか嬉しそうになる。

逆に、高雄が孝俊の事を話す時も同様である。

これは、お互いを心から信頼し合っている証なのかもしれない。

「ふ．．．お前と高雄を同時に敵に回すのは避けたいな」

「おいおい．．．」

シグナムのからかい半分の言葉に苦笑いする孝俊だった．．．

再び、聖祥小学校では．．．

未だにタイタンドラモンとカリスモンの打ち合いが続いていた。

「はあっ．．．はあっ．．．」

「どうした、もう息切れかあっ！」

ズドンッ！

「が．．．っ！」

だが、タイタンドラモンの息が上がっており、明らかに疲れが見えていた。

全力でカリスモンに打ち込み続けていたが、全て互角で受け止め

カリスモンが腕の銃身をタイタンドラモンに向けると、そこから強烈な銃弾が次々と発射される。

タイタンドラモンは、至近距離から撃たれ・・・避ける事も出来ずに直撃を受ける。

「がはっ・・・ごぼっ・・・」

「ふん、まだくたばってないか・・・しぶとい奴だ」

全身ボロボロで、マシン型である為かあちこちショートしているタイタンドラモン。

見てて痛々しい姿である。

「高雄さん！もう無理しないでえ！」

「これ以上やったら死んじゃう・・・！」

なのはとフェイトがタイタンドラモンを見て、悲痛な声を上げる。アリサは今にも泣きそうな顔をし、すずかはまだもう見ていられないとばかりに顔を手で覆っている。

「どう見てもお前に勝ち目は無い・・・もう止めとけ」

「断る・・・それに言った筈だ・・・お前は俺がブツ倒すってな・・・」

「！」

カリスモンが降参するよう言うが、タイタンドラモンはそれを固辞する。

そして、未だに闘志だけは燃え尽きておらず、カリスモンを睨みつけている。

「ふん・・・わざわざ死を選ぶとはな・・・お望み通りぶっ殺してやるああ！！！」

カリスモンがタイタンドラモンに突入し、爪を振り上げる。

「【ディープフォレスト】！！！」

ズバシユウツ！！

「がっ・・・あ・・・」

カリスモンの必殺技、【ディープフォレスト】がタイタンドラモンに直撃する。

そして・・・タイタンドラモンの進化が解け、高雄に戻ると・・・仰向けに倒れてしまった。

「た・・・高雄さん・・・！」

「う、嘘・・・」

「ま、まさか・・・」

「い、いやああああっ!!」

なのはとフェイトとアリサは呆然とし、すずかはこの状況を受け入れられずに悲鳴を上げる。

だが、拓也だけは・・・黙って高雄を見ていた。

「ふん・・・買いかぶり過ぎだったか・・・この程度だったとは」

カリスモンは倒れている高雄を見て、つまらなそうに呟く。
そして、拓也の方に向き直る。

「今度は貴様だ、十闘士・・・俺と戦え!」

拓也にそう言い放つが、帰ってきた言葉は意外な物だった。

「何言つてやがる。まだ決着はついてねーぞ」

「何・・・!!?」

拓也が指差した方を見て、カリスモンは驚愕した。
なんと、先程倒した筈の高雄が・・・立ち上がっていたのだ。

「高雄さん……良かった……！」

「立ってる……あれだけの攻撃を受けて……」

なのはは安心して、フェイトは高雄の脅威の耐久力に目を丸くしていた。

「まだ10カウント……経ってねえぞ……」

「馬鹿な！？ 满身創痕の状態で俺の【ディープリレスト】を喰らって立ってられる筈は……！」

信じられない高雄のしぶとさに、驚きを隠せないカリスモン。
だが、すぐに首をぶんぶんと振って落ち着く。

「ふん……まあ立ち上がったのは褒めてやるが……また進化したとて同じ事。」

再び返り討ちにするまでだ！」

「あと1ラウンド……剛龍のスピリットの本当の力の一端を見せてやる……！」

高雄は再び右手にD・スキャナを持ち、左手を出す。

「キングドラモン!!」

キングドラモン ハイブリッド体 マシン型 バリアブル種 融合形態 オリジナル

必殺技 ファイヤードラゴンカノン

(炎を纏ったエネルギーキャノン砲。威力はドラゴンカノンの20倍)

ドラゴニックダイナマイト

(孝俊が切り札で使った自爆技。炎属性である為、孝俊のより強力)

メテオインパクト

(メガトンバーニングの強化版。爆炎を纏った超高熱パンチ)

得意技 シューティングハンマー

(上空数百Mまでジャンプし、急降下の勢いを利用してハンマーを叩き込む)

ガトリングハンマー

(超高速での連続パンチ。その様はまさにガトリング砲の如し)

バーニングスパルタン

(炎を纏い、飛行してドリル回転しながら敵に突入し貫く。
決め技に使う)

剛龍のヒューマンスピリットとビーストスピリットが融合したWスピリットの姿。

剛力無双の超パワーを誇る、現役世代のパワーファイターの象徴。ボクシングスタイルは変わらず・・・と言うか余計色濃く出ている。タイタンドラモンと比べて、出力は比べ物にならない程跳ね上がっている。

キングドラモン
王龍の名に恥じない絶大な威圧感を持っており、並の成熟期では近付く事すら

難しい。

炎属性である為に、ドラゴニックダイナマイトの破壊力は孝俊の物を上回る。

【ガトリングハンマー】は、1発1発が【スージーQ】の半分程(約40t)の破壊力を持っている。

また、拳を平手突きに変えた派生版の【ガトリングスピア】もある。他、【ネオ・ボルケーノクラッシュ】等、ヒューマンやビーストの必殺技の強化版も持っている。

尚、高雄はこの姿の時は、ボケとは無縁な真面目な性格になり、それを見た人は

普段とのギャップに違和感を感じる事が多い。

威圧感こそあるが、高雄自身は温厚で子供好きなので子供のデジモンにはとても優しい。

「ふん、ゲレンモン最初の奴にさっきの奴をくつつけただけじゃねーか……」

「……そう思うなら……さっさとかかって来い」

大した事は無い、と吐き捨てるカリスモン。
だが、キングドラモンは冷静に言い放つ。

「な、なんだか……いつもと様子が全然違うの……」

「いつものボケた様子が……全然無い……」

「あいつ、Wスピリットになると性格変わるんだよなあ……」

キングドラモンを見たのはとフェイトは、いつもの高雄とのギ
ヤップに戸惑っていた。

拓也も若干苦笑いして、キングドラモンを見ている。

「今度こそ……息の根を止めてやらああああ……!!」

カリスモンが猛スピードで突進して来る。

が、キングドラモンはその場で腰を落として、ゆっくりと拳を構

える。

「【ディープフォレスト】……（ドゴオンツ！）ガハアツ！？」

カリスモンは必殺技の【ディープフォレスト】を放とうと爪を振りかぶるが、その

直後にキングドラモンの拳が直撃し、吹っ飛ばされていた。

「来い……これがファイナルラウンドだ……」

圧倒的なキングドラモンのパワー！

次回、決着&闇の書事件急加速！？

続く

第50話 1度決めた事は最後までやり通すべきな気がする（後書き）

はい、第50話終了です。

特殊スピリットのWスピリットが今作初登場です！

王龍ことキングドラモン・・・

タイタンドラモンとは比べ物にならないパワーを誇ります。

詳細はまた次回・・・！

高雄「さあ、これが最終ラウンドだ・・・」

拓也「な、なんか違和感あるよなあ・・・（汗）」

高雄はこの時真面目になるからねえ・・・

では、次回予告・・・すずかちゃん、お願いします〜

すずか「は、はい・・・！

次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第51話【卑怯者は大
体口クな目にあわない気がする】お楽しみに！！

今年もよろしくお願いします〜

第51話 卑怯者は大体ロクな目にあわない気がする(前書き)

はい、大分時間が掛かりましたが・・・第51話です。

今回、高雄が大爆発・・・どっかで見た様なネタも出て来ますので、最後までお見逃しなく！

では、名言コーナーです。

無くした金は諦めてしまえばそれで済むが、意地というものは無くしたら一生手元には返ってこない

(輪島功一 元ボクシングWBA・WBC世界スーパーウェルター級王者)

俺は辞めないよ。

チャンピオンのまま引退するというのは確かにかっこよく映る。でも、ほんとはちっこもかっこよくないのさ。なぜ引退する？

負けれると思うからじゃないか、

負けれることを恐れるからじゃないか、

臆病だからじゃないか。

体が決定的に壊れてもいないのに引退するのは卑怯なんだ。

恰好を気にする奴は臆病なんだ。まだ闘える。

だったらたとえ負けても闘うべきじゃないか。

(輪島功一)

お前ら弱い世界じゃ強いじゃろうが、強い世界じゃ下の下じゃ
(竹原慎二 元ボクシングWBA世界ミドル級王者)

ボクシング辞めたアトの人生の方が長いヨ。

誰がそのボクサーの面倒ヲ見てくれるの？無事に家に帰シテあげる
のもワタシの仕事ネ

(エディ・タウンゼント ガッツ石松など、数々の世界王者を育て
上げた名トレーナー)

勝った時には友達おおぜいイッパイ出来るからワタシいなくて
もいいの。

誰が負けたボクサー励ますの？ワタシ負けたボクサーの味方ネ

(エディ・タウンゼント)

地道な努力こそが最大の近道と知れ

(鴨川会長 はじめの一步)

人生にはピンチばかり多く、チャンスは極めて少ないものだ

(白井義男 元ボクシング世界フライ級王者。日本人初の世界チャ

ンピオン)

拓也「見事にボクシング尽くしだな(苦笑)」

孝俊「さて・・・高雄がどう戦うか・・・」

輝二「面白い事になって来たな」

すずか「では、第51話・・・始まります!」

第51話 卑怯者は大体ロクな目にあわない気がする

第51話副題【HEART'S

ON FIRE】

ベオウルフモンがタイガーヴェスパモンを倒した次の日・・・
デーモンの部下、カリスモンが手下を引き連れて聖祥小学校を襲撃して来た。

D・スキャナをメンテナンスの為に高雄に預けていて進化出来ない拓也だったが……
間一髪で駆け付けた高雄がカリスモンの後頭部目掛けて自転車で突入する。

そして、進化した拓也と高雄はカリスモンの手下・タスクモンを速攻で叩きのめす。

カリスモンは、タスクモン2体を同時に倒したグレンモンに興味が湧いたのか、
グレンモンとの1vs1の勝負を申し込んだ。

グレンモンは速攻で必殺技【スージーQ】を叩き込むも、カリスモンには通じずに
跳ね飛ばされる。

すぐにビーストスピリットのタイタンドラモンになるが、それでも互角に持ち込む
のが精一杯だった。

全力で打ち合って奮闘するタイタンドラモンだが、子供達に危険

が及ぶ可能性があつて飛び道具が使えず、【メガトンバーニング】や【ダイナミックアックス】などと

言つた格闘技しか使う事が出来ない。

それも止められてしまい、遂にはカリスモンの【ロデオバレット】の直撃を受ける。

それでも立ち上がり、カリスモンに挑もうとするが・・・カリスモンの必殺技の

【ディープフォレスト】の直撃を受け、遂に倒れてしまった。

タイタンドラモンを倒したカリスモンは、次の相手に拓也を指名するが・・・拓也は

それを拒否し、立ち上がっている高雄を指差す。

あれだけやられても尚、高雄は闘志を失わず、立ち上がって来たのだ。

カリスモンは一瞬驚くも、余裕の表情に戻る。

高雄の闘志は最早、最大級に達していた。

真つ赤に燃え上がるデジコードをスキャンし、高雄はWスピリットを発動。

キングドラモンに進化し、迫り来るカリスモンに拳を一閃し、吹っ飛ばした・・・！

拳を突き出したまま止まっているキングドラモン。

その数M先には、仰向けに倒れているカリスモンがいた。

「す、凄い・・・」

「ビーストスピリットの必殺技も通じない相手を……普通のパンチ1発で吹っ飛ばした……」

その光景に、なのはとフェイトは驚きを隠せなかった。

自分達が2人掛かりでも勝てないであろうビーストスピリット……

そのビーストスピリットでも敵わなかった相手を、通常の攻撃だけで跳ね返したのだから。

「あれがWスピリットだ。ビーストスピリットとは比べ物にならないぞ」

「ダブル……スピリット？」

キングドラモンを見て、拓也が説明する。

ヒューマンでもビーストでも無いスピリットに、なのはが首を傾げる。

「そーいやなのはちゃん達にはちゃんと話してなかったな」

拓也はそう言って、なのはの方に向き直る。

アリサとすずかも聞いているが、この2人もスピリットに関しては知っているので聞かれても問題は無い。

「ヒューマンスピリットとビーストスピリットが合体して1つになった姿って言えば
簡単な」

「つまり・・・拓也さんの場合、アグニモンとヴリトラモンが一緒になった姿って
事なの？」

「ま、そんなとこだな。だが、実際の強さはそんな単純な物じゃないぜ・・・」

拓也は、自身が初めてWスピリットを発動させた時を思い出す。

デジタルワールドで当時、悪の五闘士の1人である鋼の闘士・メルキューレモンと
対決した時の事である。

メルキューレモンは、三大天使・セラフィモンのデータを取り込んで融合し、
ブラックセラフィモンとなって拓也に襲い掛かったのだ。

その強さは圧倒的で、アグニモンはおろかヴリトラモンですら全く歯が立たなかった。

進化が解けて窮地に追い込まれた拓也だったが、セラフィモンのデジタマが発した
光が拓也のデジヴァイスに入り込み、Wスピリットを可能にしたのである。

そうしてWスピリットを発動させた拓也は、ブラックセラフィモンの攻撃をいくら
受けてもビクともせず、たった一回の攻撃でブラックセラフィモンを撃破した。

それほどまでに、Wスピリットは強力なのである。

「さーて・・・こっからは高雄の反撃だな」

拓也はキングドラモンの方を見る。

キングドラモンはと言うと・・・両拳を顔の前で構え、軽くステップを踏んでいた。

後ろに某・イタリアの種馬が見える気がするが、恐らく気のせいだろう。

「つぐ・・・あの野郎・・・一体どんなトリックを使いやがった・・・」

一方、カリスモンは自身が吹っ飛ばされた事が信じられなかった。先程のタイタンドラモンの必殺技を喰らっても大して効かなかった・・・

その為、ただのパンチ1発で吹っ飛ばされた事が信じられなかったのである。

カリスモンは、殴られた辺りを押さえながらゆっくりと起き上がる。

「・・・さあ、来い・・・!」

キングドラモンはただ一言、そう言い放った。
それを聞いたカリスモンは眼をギラつかせ、キングドラモンを睨みつける。

「野郎・・・今度こそぶちのめしてやる!!」

カリスモンは猛然とダッシュし、キングドラモンに向かって行く。そして、凄まじい勢いのパンチを次から次へと繰り出して行った!

「ぬおおっ!でいっ!ふぬあっ!」

「ふっ、ほっ・・・はっ・・・!」

ブウンッ!ブオンッ!ブウン!

だが、キングドラモンは上半身を巧みに動かし、次々と避けて行く。
カリスモンのパンチは、虚しく空を切るばかりだった。

「ほっ、はっ・・・!ぬんっ!」

ドンッ!

「ぐほあっ!?!」

更に、キングドラモンが強烈なボディブローをカリスモンの腹に打ち込む。

その衝撃で、苦痛に顔を歪めるカリスモン。

「ふんっ!ふんっ!ふんっ!」

ドドドンッ!ドンッ!ドンッ!ドンッ!

「ぐほっ!?!がはっ!?!」

キングドラモンは攻撃の手を緩めず、連続でカリスモンの腹に拳を叩き込んでいく!

打ち込む度に、痛烈な打撃音が響き渡る。

ドンッ!ドンッ!ドドドンッ!ドンッ!ドンッ!ドンッ!

「がっ……ぐほっ……あ……」

キングドラモンは、ひたすらカリスモンにボディブローを連打連打連打!

そして、カリスモンが遂に地面に膝をつく。

「じゅあっ！？がっ！ぐはっ！ぎゃっ！ぐあぁっ！！」

キングドラモンの叫びと共に、超高速の連続パンチがカリスモンに撃ち込まれた！

キングドラモンの得意技【ガトリングハンマー】である。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアッ！！」

ズガガガガガガガガガガガガガガガガッ！！

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？」

強烈なパンチの嵐の前に成す術無く打ちのめされるカリスモン。

その光景を見たなのは達は・・・啞然としていた。

なのは達だけでは無い、他の児童達や教師達も、その光景に言葉が出なかった。

ガトリングハンマーの威力は約40t。

70tの破壊力のスージーQを受けても平気なカリスモンには効かないだろう。

もつとも、1発だけならばだが。

何十発、何百発と40tで高速で打ち込まれて行けば、あつとい
う間にダメージは蓄積
していくのである。

「す、凄い……」

「パンチのスピードが……目で追えないよ」

「てゆうか、あの人の背後に何か見えるんだけど……気のせいかな」

ガトリングハンマーのスピードについて行けないのはとフェイト。

一方で、アリサにはキングドラモンの背後に何か……遅しい筋肉質の肉体を持った

人型のスタンドが見える気がしたらしい。

「き、気のせいじゃないかな……」

すずかは苦笑いしながらアリサに言う。

そう、気のせいだ……多分、きつと、恐らく……

「……ジヨ ヨかよあいつは(汗)」

拓也がぼつりと言葉を漏らす。

どうやら某キャラクターに見えたらしい。

だが、当のキングドラモンは至って真面目に戦っている。

「ぐっ……な……何故……何故俺が貴様如きに……！」

「……俺は今、この場にいる子供達を守る為に戦っている……ただ破壊の為に力を振るうお前とは、拳の重さが違うんだ！」

ドゴッ！！

「がああっ！！」

キングドラモンが一喝し、カリスモンを殴り飛ばす。
子供達を守る……キングドラモンが戦う理由は、今はそれだけである。

しかし、それだけの為に全力になれる……彼はそう言う男なのだ。

「ぐうう……おのれ、かくなる上はあ……！」

ズズン……！

「むっ！？」

カリスモンが片手を上げると、それに反応するかのようにはデジモンが現れた！

どうやら、カリスモンはまだ部下を隠していたらしい。

オロチモン 完全体 魔竜型 ウイルス種

必殺技：アメノムラクモ

（尻尾の先端についた刃と圧倒的な力で、相手を切り刻む）

得意技：酒ブレス

（酒を飲み、アルコールの含んだ息を吹きかけ、相手を酩酊させてしまう）

名前の由来はヤマタノオロチから。その名の通り八つの頭を持つデジモン。

八つのうち七つは偽物で、中央の黒い頭だけが本体である。

オロチモンの誕生起源は古く、古代デジモンワールド時代に暴れ回り、一つのエリアを

壊滅状態にまでさせたため、調和を保つ“存在”の使いに封印されていたという過去がある。

「こうなったらこのガキ共を襲って人質に……！」

カリスモンがオロチモンを使い、子供達を人質にしようとする。だが、カリスモンは1つ忘れていた。まだ……あの男がいる事を。

「スピリットエボリューション……ヴリトラモン！」

オロチモンが子供達に迫ろうとした途端、拓也の咆哮が響き渡る。次の瞬間、ヴリトラモンとなった拓也が、オロチモンの前に立ちはだかった！

「キングドラモン！こいつは俺に任せろ！」

「ヴリトラモン……任せたぞ！」

キングドラモンはカリスモンの方に振り返る。だが、その表情は……怒りに満ちていた。

「自身が不利になると子供達を襲おうとするとは……この卑怯者が……！」

そして、キングドラモンの両手が赤く燃え上がる。

更に全身からつつすらと赤いオーラらしきものが出ていた。
キングドラモンはその手を、拳を作らずに真っ直ぐ構え・・・

「はああああ・・・！」

呼吸を整えるキングドラモン。
そして連続で平手突きをカリスモンに撃ち込み始めた！

「アーーーータタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ！」

「ぐがあああっ!?!」

・・・なんかどっかの神拳の継承者みたいな声を上げながら。
ホントに真面目なのだろうかと思うであろうが、本人は至って真面目である。

「ホアアアタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ！」

「がっ!?!ぎゃっ!?!あべしっ!?!ぐげっ!?!げぶふうっ!?!」

拳を平手突きに変えた【ガトリングハンマー】の変化版、【ガトリングスピア】が
次々とカリスモンに炸裂していく。

「ぬうおおおおおらあぁっ!!」

ズズン・・・!

「ギャオアアッ!」

一方で、カリスモンが呼び出したオロチモンも、ヴリトラモンにバックドロップで

地面に叩きつけられていた。

子供達には指一本触れさせまいと、鬼神の如き強さでオロチモンを圧倒するヴリトラモン。

半年前、メタルティラノモン&メガドラモンと戦った時と同じ気持ちだった。

「子供達には傷1つ付けさせねえ!【コロナブラスター】ッ!!」

ドドドオオオオン!!

「ギャグアアアーーーーッ!!!!」

両腕のルードリー・タルパナから強烈な火炎レーザーが放たれ、オロチモンに直撃する。

コロナブラスターの直撃をモロに喰らったオロチモンは、その場に崩れ落ちながら
消滅していった・・・

それを見届けたヴリトラモンは、拓也の姿に戻る。

「あ、あつという間だったわね……」

「流石は拓也さんなの」

あまりに圧倒的なグリトラモンの戦闘を見て、呆気に取られているアリサ。

その横では、なのはが嬉しそうな顔をして拓也を迎えていた。

「しかし、高雄もよくやるぜ……あいつがあそこまでやるとは……よっぼど

カリスモンの行動が怒りに火を点けたと見えるな」

「なんだか……物凄く怒ってるの……高雄さん」

キングドラモンは、未だに怒りの表情でカリスモンを攻撃し続けている。

その凄まじさに、なのはは若干怯えていた。

「まあ、無理もねーな。子供好きの高雄にとって、カリスモンのやり方は怒りを

買うには十分だったってこった。それに高雄には妹がいるから……尚更だな」

キングドラモンの説明にもあったが、高雄は子供好きである。その為、カリスモンが子供達を襲って人質にしようとした事が、高雄の怒りに完全に火を点けてしまったのだった。

更に、高雄にはレイと美那という2人の妹がいる。高雄と違って2人とも戦闘能力は無く、普通の一般人なのだが、高雄はとにかくこの2人の妹を可愛がっており、子供達を見てると妹達の事を思い出すのである。

それ故に、高雄はカリスモンの行動が許せなかったのだ。

「ぬおらあああっ!!」

ドンツ！ズドンツ！ドドドンツ！バキヤツ！

「がっ・・・ぐはっ・・・」

キングドラモンのボディブローやフックが、カリスモンにぶち込まれる。

最早カリスモンの足元はおぼつかず、完全にグロッキーだった。

「打てえ!!」

拓也の叫びがキングドラモンに届く。

その瞬間、キングドラモンのラッシュが一層激しくなり、カリスモンの顔面を襲った！

カリスモンは必死に顔面をガードしようとするが、全てをガードし切れず、何発か喰らっている。

「ふぬああっ！」

ズドンッ！ドオンッ！

「がふっ！？」

更にキングドラモンのパンチが綺麗にカリスモンの顔面を捉える。

「さあ来い……来いカリスモンっ！」

キングドラモンはそう言うと、拳を大きく振りかぶる。その拳には、激しい炎が燃え上がっている。

「【メテオインパクト】！！！！」

ドッゴオオオオオンッ！！！！

その拳を、ジヨルトブローの要領で叩き込むキングドラモン。

必殺パンチ【メテオインパクト】が、カリスモンの顔面を殴り飛ばした！

「が・・・あ・・・あ・・・っ」

ズズウウ・・・ン

カリスモンは・・・遂に仰向けに倒れ・・・消滅した。

そこから、少しの静寂が流れ・・・そして校舎から、グラウンドから、子供達や教師達の歓声が響き渡った。

そして、キングドラモンは進化を解除して高雄の姿に戻ると・・・

バタンツ！

グラウンドに仰向けに倒れた。

ビーストスピリットの時に受けたダメージが相当だった為、遂に限界が来たのだ。

「高雄さん！」

それを見て、拓也達が高雄の元に駆け寄る。

高雄は肩で息をしながらも、笑顔を浮かべていた。

「大丈夫！？高雄さん！」

「やっぱり、ダメージが酷かったんじゃない・・・」

なのはとフェイトが、倒れている高雄を覗き込む。

しかし、高雄はゆっくりと拳を天に向かって突き上げる。

「はあっ・・・はあっ・・・へへ・・・大丈夫だ・・・俺は勝ったぜ・・・！」

「・・・お疲れさん」

高雄は笑いながら、なのはとフェイトに言う。

拓也は、満足そうな笑みを浮かべる高雄に、同じく笑顔で労うのだった。

その後、高雄は教師達の勧めで保健室で治療を受けた。
そこでまずかに・・・

「あの、高雄さん・・・その・・・後で孝俊さんの写メ送ってもらえませんか／＼？」

「・・・後でな」

なのは達には聞かれないように、小声でちゃっかりお願いされていた。

高雄はベッドに寝転んだまま、苦笑しながら返すのだった……

昼……八神家では、シャマルがお弁当を作っていた。

ちなみに手元には、孝俊がシャマルの為に書いた弁当のレシピがあつたりする。

これのお陰で、シャマルは破壊的な料理を作らずに済んでいるらしい。

かつて、シャマルの料理を食して真っ白に燃え尽きた孝俊が、
【これはイカン】と
思っ得る限りのレシピを作ったのだ。

ふと、携帯に着信が入る。
入って来たのは、すずかからのメールだった。

「あ、すずかちゃん……」

メールの内容は……こうだった。

【シャマルさんへ

こんにちは 月村すずかです

今日の放課後 友達と一緒に
はやてちゃんのお見舞いに行きたいのですが
行っても大丈夫でしょうか？
お返事いただけると嬉しいです】

「すずかちゃん・・・良い子ね」

丁寧なすずかのメールに感心するシャマル。
そして、添付されている写真を見ると・・・

「ええっ・・・!？」

なんと、すずかと一緒にアリサ、なのは、フェイト、おまけに拓也が映っていたのだ。

これには驚きを隠せないシャマル。

【もし、ご都合が悪いようでしたら

この写真をはやてちゃんに見せてあげて下さい】

メールの最後には、そう書かれていた・・・

そして、蒐集の為に別の次元世界に行っていたシグナムと孝俊の

元に、シャマルから
連絡が来た。

『なんだ、そんな事か。フェイト達はやてちゃんのお見舞いに来
るって・・・』

い、――――――――――つ!?』

『孝俊、反応が遅いぞ』

吉本新 劇みたいな驚き方をする孝俊と、冷静にそれにツッコむ
シグナム。

「だから・・・テストロッサちゃんとなのはちゃん、管理局魔導師
の2人が今日、
はやてちゃんに会いに来ちゃうの!すずかちゃんのお友達だから!
ああ、どうしよう・・・どうしよう・・・!」

『落ち着け、シャマル。大丈夫だ。』

幸い、主はやての魔法資質は殆ど闇の書の中だ・・・詳しく検査さ
れない限りバレはしない』

「それは、そうかもしれないけど・・・」

『つまり、私達と鉢合わせる事が無ければ良いだけだ』

「うーん・・・顔を見られちゃったのは失敗だったわ・・・出撃し
た時、変身魔法

でも使つてれば良かった・・・」

なのは達が来る事でパニックっているシャマルと、それを宥めるシグナム。

孝俊も、シグナムの横で念話を使って話を聞いている。

『済んだ事を悔やんでも仕方ねえ・・・その時は俺達が見舞いを外すしかない』

『あとは主はやて・・・それから石田先生に、我等の名を出さぬようにお願いを』

「はやてちゃん・・・変に思わないかしら・・・」

孝俊が、なのは達が来る時は自分達が外すように提案し、シグナムは自分達の存在を

隠してもらつ事をはやてと石田先生にお願いする事を考えた。

正直、怪しまれる心配はあるが・・・今はこれしか方法が無いのである。

『仕方あるまい・・・頼んだぞ』

「うん・・・」

シグナムとの通信を切るシャマル。

そのシャマルを見て、雄人が話しかけて来る。

「・・・なんかまずい事態になって来たみたいですね」

「ええ・・・なんとか、管理局との接触は避けないと・・・」

「・・・なのはちゃん達だけなら、僕は顔が知られてないから良いですが・・・」

拓也さんがいるとなると、迂闊に顔を出せませんし・・・」

いくら影が薄い雄人でも、拓也には恐らく見つかってしまうであろう。

なんとかしても、なのは達との御対面は避けたい守護騎士達。

だが、運命の歯車は・・・ゆっくりと回り始めていたのだった・・・

続く

第51話 卑怯者は大体ロクな目にあわない気がする（後書き）

はい、第51話終了です。

とりあえず高雄劇場でした（こちら）。

さて、今回ちょっと専門用語が出て来ましたので、簡単に説明します。

ジョルトブロー：ボクシングなどにおけるパンチの技術の一種。

ボクシングなどの格闘技において、床面から片足、または両足を離しながら、あるいは浮かしながら（ステップインと同時に）打つパンチの総称である。

全身の力と体重を込めるため、威力が高く、当たれば一発でノックアウトできる可能性が高い。

ボクシング主体の戦闘スタイルって事で、専門用語を取り入れてみました。

これからも稀にこういう専門用語が出るかもしれません。

では、次回予告・・・プレシアさん、どうぞ！

プレシア「久々ね・・・じゃあ、行くわよ。」

次回、リリカルなのはフロンティア第52話【引き際が解らないと苦勞する気がする】お楽しみに「

第52話 引き際が解らないと苦勞する気がする（前書き）

はい、第52話です。

少し早くなりましたが・・・まだまだ亀ペースです（汗）

では、名言コーナーです。

今回は読者の方から提供された物も有ります。

- 空があるから雲は自由に浮いていられる。

（雲雀恭弥 家庭教師ヒットマンreborn）

- 小動物には小動物なりの生き方がある。
でなきゃ地球上の小動物は全滅しちゃうよ。

（雲雀恭弥 家庭教師ヒットマンreborn）

- 今の時代を作れるのは、今を生きてる人間だけだよ……………！！

（シルバース・レイリー ONE PIECE）

- 5%しか生き残る確率が無いなら、その5%を使って、あなたを守る。

（志村新八 銀魂）

- まっすぐに生きたバカの魂はな、例えその身が滅ぼうが、消えやしねー。

(坂田銀時 銀魂)

- 俺は自分を偽って生きたくはない

(蔵馬 幽遊白書)

高雄「さーて、闇の書事件もそろそろ佳境かな」

拓也「早いとこ進めんな」

プレシア「では、第52話・・・始まるわよ！」

今回はちょっと短めです(汗)

第52話 引き際が解らないと苦勞する気がする

小学校を襲撃して来たカリスモンと対決する高雄。

ビーストスピリットでも敵わないカリスモンに対し、Wスピリットを発動。

キングドラモンへ進化し、猛烈な反撃を開始した。

ロツ　ーばりのボディブローを連発し、カリスモンを圧倒。

更にはジヨ　ヨばりの超高速連続パンチ【ガトリングハンマー】をぶち込んだ。

劣勢に立たされたカリスモンは、オロチモンを呼び出して子供達を襲わせようと

するが、オロチモンはヴリトラモンに進化した拓也に阻まれる。

その卑劣な行動に堪忍袋の緒が切れたキングドラモンは、ケンシウばりの連続突き

【ガトリングスピア】でカリスモンを打ちのめす。

オロチモンもヴリトラモンの前には全く歯が立たず、【コロナブラスター】で撃墜

されてしまい、あえなく消滅した。

そして・・・キングドラモンは必殺拳【メテオインパクト】でカリスモンを殴打。

タフなカリスモンも、これには耐えられずにK・Oされ、遂に消滅したのだった。

一方・・・八神家ではすずかからのメールを見たシャマルが、なのは達がはやての

お見舞いに行くと言う事を知り、驚愕する。

運命の齒車は・・・現時点では誰にも止める術は無く、ゆっくり

動き始めていた。

*

夕方、海鳴大学病院のはやての病室。
病室のドアをノックする音が聞こえる。

「はい、どうぞー」

ガララッ

「……こんにちはー!」「……」
「よっ!」

ドアを開けて現れたのは、なのは・フェイト・アリサ・すずか、
そして引率で付いて
来た拓也だった。

「こんにちは!いらっしゃい!」

「お邪魔します……はやてちゃん、大丈夫?」

「うん、もう平気や。あ、みんな座って座って!」

「……………」

中でワイワイやってるはやて達を、ドアの外から見てる人物がいた。

サングラスとコートで武装（笑）したシャマルである。

そこに……

「……何やってんだあんた」

「……っ!？」

……何故かゴゴ13みたいな格好をした高雄がいた。しかも、顔もなんかそれっぽくなっている。

それを見たシャマルは……色んな意味でビックリした。

「おっと、前にも拓也辺りが説明してると思うが、俺はアンタとやり合うつもりはねーぞ」

「そ、その恰好で言われても……」

ゴゴの恰好&顔で【やり合うつもりが無い】とか言われても説得力が無い。

むしろ殺り合うつもり満々ですかコノヤローって感じである。

これで狙撃用のライフルでもあれば決定的だろうが、そんな物持

つてたら警察にとっ捕まるので流石に却下した。

「……中に入れば良えのに……ってのは禁句かの」

「えっと……あの……」

2人は席を外し、待合の椅子に座っていた。

「ちよつと話は変わるが……孝俊が世話になってるみて だな。ありがとよ」

「い、いえ……孝俊さんには、私達の方がお世話になってるくらいで……」

とりあえず、高雄は親友が世話になっている事に付いて礼を言う。シヤマルは高雄の自然な態度に困惑しながらも、返事をする。

「……呪いは……進行中って所か？」

「……ええ……」

「……病院側は、勿論そんな事は知らんだろうが……全力で戦ってくれてるんだろうな」

「……はい」

高雄の問い掛けに、ただ一言返すだけのシャマル。
高雄は構わずに続ける。

「拓也からも聞いたがな・・・はやてちゃんはかなり苦しんでると聞いた。

やっぱり、一番辛いのははやてちゃん自身だ」

「・・・」

「・・・けどな、お前達守護騎士や、すずかちゃんと言った友達が支えてあげる事で、

勇気や元気が出て来ると俺は思うんじゃない。だから支えてやってあげな。

はやてちゃんが呪いと戦えるように・・・それに打ち勝てるように・・・な。

まあ、敵側で事情知つとる俺がこーいう事言つのもおかしいんじゃないが」

「は・・・はい・・・っ・・・」

高雄はシャマルを見て、強く気持ちを込めて言う。

それを聞いたシャマルは・・・ちゃんと理解してくれる人がいたのが嬉しかったのか、
涙を流していた。

シャマルは高雄から・・・孝俊と似た感じを覚えたらしい。

高雄の事は、孝俊から聞いている。

孝俊曰く、自分の大親友で・・・自分の事を誰よりも理解している人物。

孝俊は、高雄の事を話す時は何処か嬉しそうなのだ。

それを知っていた為、シャマルは高雄相手に警戒心を抱く事は無かったのである。

「・・・っと、少々お節介だったようだ・・・俺はもう戻るよ」

高雄はそう言うと、ゆっくり歩いて去って行った。

ちなみに、帰る時もゴゴの恰好をしていた為、帰り道で何回か不審者扱いされていたのは余談である。

*

「お友達のお見舞い、どうでした？」

「うん、皆ええ子やったよ。楽しかった・・・また時々来てくれるって」

「それは良かったですね・・・」

なのは達が帰った後、シャマルははやての病室にいた。

花瓶の中の花を入れ替えながら、はやてと話している。

「そやけど、もうすぐクリスマスやな・・・皆とのクリスマスは初めてやから、

それまでに退院してパーッと楽しく出来たらええねんけど」

「そうですね、出来たら良いですね・・・」

カレンダーは12月13日を差している。

クリスマスまで、あと12日・・・

*

その頃、デーモンの城・・・

「な、何だと・・・カリスモンまでもが敗れただと!?!」

「はっ・・・剛龍のスピリットの所持者と交戦状態に陥り、あと一歩のところまで

追い詰めたのですが、タイガーヴェスパモンと同様にWスピリットとやらの前に

形勢を一気にひっくり返され、敗れました・・・」

カリスモン敗北の報が届いていた。

タイガーヴェスパモンに続き、カリスモンまでもが倒された事に
驚愕するデーモン。

「うぬウ・・・デジモンに進化スル人間・・・忌々しい奴らメ・・・
」

「デーモン様、今しばらくは我々も息を潜めておいた方がよろしい
かと・・・」

自分達の邪魔をする拓也達を忌々しく思うムゲンドラモン。
この状況を見て、デスモンがデーモンに進言する。

「むう・・・不本意だが仕方あるまい・・・」

「ですが、悲観する事はございません。闇の書の完成まで、もはや
殆ど時間は
無いでしょう・・・そこを狙えば良いのです。それに、少々差し出
がましいですが
わたくしめに考えがございます・・・」

「ふむ、ならば任せよう・・・」

デスモンは、闇の書の完成が近い事を予感していた。
闇の書完成まで、デーモン達は表立った行動はしない事にしたの
だった・・・

「だが、タイガーヴェスパモンやカリスモンを圧スルWスピリット・
・興味があるナ」

「ムゲンドラモン、今は時期尚早と言う物だ。今しばらく待つのだ」

ムゲンドラモンは、自分と同等の実力を持ったタイガーヴェスパ
モンとカリスモンを

破ったWスピリットに、興味を示していた。

デスモンは、今にも飛び出さんとするムゲンドラモンを宥めるの
であった・・・

*

少し後、八神家では・・・

シャマルがカートリッジを作りながら、シグナム達に念話を飛ば
していた。

（闇の書がはやてちゃんを侵食する速度が、段々上がって来てるみ
たいなの・・・
このままじゃ、持って一月・・・もしかして、もっと短いかも・・・
！）

シグナムは、巨大な岩の身体を持つ魔法生物を倒して一息ついて
いる所に。

ザフィーラ&孝俊は砂漠地帯を飛行しながら。
そして、ヴィータは嵐が吹き荒れる海の上を飛んでいた・・・

(何かがおかしいんだ・・・こんな筈じゃないって、アタシの記憶が訴えてる・・・)

でも・・・今はこうするしかないんだよな・・・！)

ヴィータは、何か違和感を感じていた。

自分のかつての記憶が、このままではダメだと警鐘を鳴らしている。

しかし、止まる訳には行かない。

今の主を・・・楽しい生活を失う訳には行かないのだ。

「はやてが笑わなくなったり、死んじゃったりしたら、やだもんなあ・・・!!」

『Ja』

涙を流しながらグラーファイゼンを構えるヴィータ。
グラーファイゼンもまた、自らの主の想いに同意する。

海が渦巻くと、その中心から巨大な魔導生物が現れる。

「やるよ、アイゼン！」

グラフアイゼンが形を変え、巨大なハンマーに変形する。
ヴィータはそれを構え、飛びかかって行った・・・

『ギガント！ぶっ潰せえええー！！！！！っ！！』

*

数日後・・・高町家。

食卓には高町家の面々に、フェイト、拓也、更に高雄と輝二がいた。

テーブルの下には子犬フォームのアルフもいる。

テーブルの上には、桃子お手製の豪華な夕飯が並べられていた。

「ほい、なのはちゃん取り皿」

「ありがとうございます」

「ありがとう、拓也」

「んー・・・どれもこれも美味そうだなあ・・・」

「これを1人で・・・流石は桃子さんだ」

拓也はなのはとフェイトに取り皿を配り、高雄は料理を見渡しながら腹の虫を鳴らしている。

輝二は、これを1人で作った桃子に感心していた。

テーブルの下では、アルフが美味しそうに骨付き肉を頬張っていた。

物凄いイイ顔で食べている。

「フェイトちゃんは、今年のクリスマスイブはやっぱりご家族と過ごすのかい？」

「はい、えっと、一応は」

土郎の問い掛けに、頬を赤らめて嬉しそうに答えるフェイト。何せ、母・プレシアと平和に過ごせる初めてのクリスマス・・・嬉しくない訳が無い。

「うちは今年も、イブは地獄の忙しさだな」

「あたし、今夜の内に値札とポップ作っておくから！」

「なら、俺と高雄も手伝うぜ。輝二はバイトなんだから、しっかり休んどけよ」

「ああ、スマンな」

「お願いね。私達は、今夜しっかり寝とかなきゃ!」

イブの事を考えて苦笑する土郎。

なのはは、少しでも皆の苦勞を軽減しようと、下準備を行う事にした。

拓也と高雄も、それを手伝うようだ。

輝二は翠屋でのバイトがある為、美由希達と共に一足先に休む。

その様子を見たフェイトが、キョトンとしている。

「翠屋のクリスマスケーキ、人気商品だから・・・イブの日はお客さんいっぱいなの!」

「それにね、イブを過ごす恋人同士とか、友達同士の為に、深夜まで営業してるんだよ」

「そうなんですか」

翠屋は、クリスマスイブは深夜までの特別営業らしい。

今日の豪華な夕飯も、一足先のクリスマスパーティーという意味合いがあるのかもしれない。

それを聞いて、納得するフェイト。

「恭ちゃんは良いよねー 店の中で忍さんとずーっと一緒だし」

「それは別に関係無いだろ・・・」

「仕事中とはいえ、恋人とずっと一緒にいられる恭也を茶化す美由希。」

「恭也は、すずかの姉・忍と順調に交際中である。」

「ほう、仕事中とはいえ好きな人といられる・・・良いねえ」

「どさくさに紛れて変な事せんようになー」

「誰がするか！」

「美由希に便乗して、拓也と高雄も恭也を茶化す。」

「言葉にこそ出さないが、輝二も微笑しながら恭也を見ている。恭也はムキになって反論するのだった。」

「好きな人・・・かあ・・・」

「お、何々？もしかしてフェイトちゃん好きな子いるの？」

「ボソリと言葉を漏らしたフェイトに食いつく美由希。年頃の乙女はこーい話題には異常に敏感だ。」

「そりゃー、フェイトは孝俊にぞっこんだから」

「っ……高雄っ……／／／！」

高雄の言葉に顔を真っ赤にするフェイト。

まあ、思い切り凶星なのだが。

「ほー、孝俊君ねえ。ありゃあ優良物件だわ 優しいし強いし家事出来るし、非の

打ち所が無いしねえ」

「あう……／／／」

「こら美由希。あんまりフェイトちゃんをからかうんじゃない」

「はい……」

孝俊の事を思い浮かべて真っ赤になるフェイト。

普段は態度に出ないが、孝俊に会えない寂しさは日々募り続けているのだ。

美由希は恭也に怒られて、笑いながら引き下がる。

「アリサちゃんちとすずかちゃんちの分も、ちゃんとキープしておくからね」

「うん、ありがとう！」

「リンディさんからも予約頂いてるからなあ。お楽しみに」

「あ、はい・・・ありがとうございます・・・／＼」

バニングス家と月村家は優先されており、その分のケーキはしっかりキープしているらしい。

今回はハラオウン家からも予約を貰っている。

（ふふ、楽しいクリスマスになれば良いな・・・だけど、何か嫌な予感がする・・・
何も起きなきゃいいんだが・・・）

皆が笑い合つ中、拓也はただ1人嫌な予感を感じ取っていた・・・

*

翌日・・・PM4：25 海鳴大学病院

「はやて・・・ごめんね。あんまり会いに来れなくて」

「ううん。元気やったか？」

「メツチャメチャ元気！」

時間を作ってはやての見舞いに来たシグナム、シャマル、ヴィー
タ。

ザフィーラは蒐集活動、孝俊はそれに付き添っている。

え、雄人はどうしたかって？

病室の隅っこにちゃんといまますよ。相変わらず影が激薄だけど。

コンコン

ふと、病室のドアをノックする音が聞こえる。

「「「「こんにちはー！」「「「「

すると・・・なのは、フェイト、アリサ、すずか。

そして拓也が入って来たのだ・・・！

遂に鉢合わせ！どうなる！？

続く

第52話 引き際が解らないと苦労する気がする（後書き）

はい、第52話終了です。

次回から本格的に闇の書戦が始まる・・・と思います。

あと、第2章が終わったら、いくつか番外編も書く予定ですので
お楽しみに。

では、次回予告・・・パラレルモン、どうぞ〜

パラレルモン、ひ、久々だから緊張するだな・・・

次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第53話【大切な事は
数で考えちゃいけない気がする 前編】お楽しみに！

第53話 大切な事は数で考えちゃいけない気がする 前編(前書き)

はい、第53話です。

どうにか出来上がりました・・・が、ちょっと長くなりそうだったので、久々に前後編に分けました。

では、名言コーナーです。

・・・ボケは恥ずかしがったら負けだ！

やるからには思いっきり、とことんまでやるんだ！

(田井中律 けいおん！)

・・・運命に、早いもの勝ちはねえ！

(瀬戸香 セキレイ)

・・・この世界にきつと、不可能なんてありません。

(結 セキレイ)

・・・生きた証というのは・・・誰かに与えられるものではないと思っただ...

(三千院ナギ ハヤテのごとく！)

- 怖いのは、死ぬことじゃなくて、退屈なこと。
(ルパン ルパン三世)

- 我らが母なる星の危機、人種も国籍もあるものか！
(キラル・メキレル 機動武闘伝Gガンダム)

- ヒーローなんて必要ねえだろ！傲慢だろうが、何だろうが、
お前自身が胸張れるものを自分で選んでみるよ！！」

(上条当麻 とある魔術の禁書目録)

拓也「さて・・・今回遂にシグナム達と鉢合わせちまった訳だが」

高雄「どうなるかは・・・読んでからのお楽しみに(何」

パラレルモン「では、第53話・・・始めるだよ！」

第53話 大切な事は数で考えちゃいけない気がする 前編

デーモン一派の幹部級・カリスモンを倒した高雄。

その日の夕方に、なのは達（+拓也）ははやての病院を訪ね、お見舞いに行く。

その様子を見ていたサングラス&コート姿のシャマル。
それを呼びとめたのは・・・何故かゴゴ13スタイルの高雄だった。

高雄はお節介だと解っていないながらも、シャマルを励ます。
シャマルもまた、孝俊に何処か似ている高雄に安心感を覚え、自分達をちゃんと理解してくれる高雄に涙した。

数日後・・・はやてに会う為に病院を訪れていたシグナム・ヴィータ・シャマル。

だが、そこにサプライズでやって来た拓也達と遭遇してしまった・・・！

*

「・・・っ!」

なのは達を見て、表情を険しくするヴィータ。
シグナムとシャマルも同様である。

(・・・マジかよ・・・嫌な予感的中しやがった・・・っ！)

拓也は表情には出していないものの、動揺していた。

「あ、皆さん今日はお揃いですか？」
「こんにちは、初めまして！」

すずかとアリサが笑顔でシグナム達に挨拶する。
アリサは初対面の為、礼儀正しく挨拶した。

「「あつ・・・」」

「「っ・・・！」」

なのはとフェイトはシグナム達を見て驚き、シグナムもまた、顔を強張らせる。

シャマルも、不安そうな表情を浮かべている。

「・・・？」

はやては当然事情を知らない為、シグナムとなのは達を交互に見て、首を傾げていた。

「あつ……すみません、お邪魔でした？」

「あ……いえ……」

「いらっしゃい、皆さん……」

アリサの言葉で我に返ったシグナムとシャル。
ぎこちないが、平静を装いながら返事をする。

「なんだ、良かった……」

「ところで、今日はみんななどないしたん？」

はやてに尋ねられると、アリサとすすかは顔を見合わせて笑う。
そして、持っていた【何か】にかぶせられたコートを取る。

「サプライズプレゼント！」

「わぁ……！」

それを見て、一気に笑顔になるはやて。

「今日はイブだから、はやてちゃんにクリスマスプレゼント！」

「わぁ……ホンマかー？ありがとうなあ」

「皆で選んで来たんだよー？」

和気あいあいとした雰囲気のアリサ・すすか・はやて。

それを尻目に、シグナムはシャルとアイコンタクトを取る。
なのはとフェイトも、不安そうに表情を歪めている。

拓也も、【こりゃ参った】と言った感じで、頭を掻きながら立っている。

グイータに至っては、未だになのはとフェイトと拓也を睨みつけていた。

「?・・・なのはちゃん、フェイトちゃん、拓也さん・・・どないしたん?」

「あ、う、ううん、なんでも・・・」

「ちよつと、ご挨拶を・・・ですよね?」

「ああ、別に何でもねーから・・・気にすんな」

はやてに言われ、慌てて言葉を返すなのは。

フェイトと拓也も、その場で取り繕うように返す。

流星に拓也は落ち着いた物だが、なのはとフェイトは若干動揺を隠せていなかった。

「はい・・・」

「ああ、みんな・・・コートを預かるわ」

シグナムも只一言、なのは達に合わせた。
シヤマルは、なのは達のコートを預かる。

「・・・念話が使えない・・・通信妨害ですか?」

「シヤマルはバックアップのエキスパートだ。この距離なら、造作も無い」

コートをハンガーに掛けながら、小声で話すフェイトとシグナム。拓也も、D・スキャナを見ている。

「D・スキャナもこの部屋の範囲外には使えねーみたいだな・・・進化は出来るみたいだが」

D・スキャナの通信機能も例外では無く、連絡が出来ないようになっていた。

ただ、進化だけは出来る様で、拓也が試しに左手を構えると、デジコードが浮かび上がったのが見える。

「っ・・・!!」

ヴィータは未だになのはを睨み続けている。完全に敵対心が剥き出しの状態だ。アリサ・すずか・はやてがいなければ、すぐにでも飛びかかっていただろう。

「えっと、あの・・・そんなに睨まないで・・・」

「睨んでねーです。こう言う目つきなんです」「こら、ヴィータちゃん」「うにい!?!?」

「「え!?!?」」

ヴィータがぶっきらぼうに言葉を返した瞬間、少年の声が聞こえ

た。

それと同時に、ヴィータの頬つぺたが左右に引っ張られていた。

「ヴィ、ヴィータちゃんの頬つぺたがひとりで……!?」

「え?え?え?」

「ふや、ふやふえるふお、ゆうふお〜(や、やめるよ、雄人〜)！」

「そうやでヴィータ、嘘はアカン」

その光景に驚くなのはとフェイト。

それを見た拓也は軽いため息をつき……

「ひとりじゃねーよ。よく見てみな」

拓也に言われて、少し集中してヴィータを見ると……

一人の少年が、ヴィータの頬つぺたを軽く引っ張っていた。

「ふ、ふええ!?!」

「男の人……み、見えなかったよ……?」

「どうも初めまして……はやてちゃんの家で御厄介になってます、
中林雄人です」

ヴィータの頬つぺたを引っ張っている、拓也達デジモン勢の誇る
影の男、中林雄人……

久々の登場だった（笑）。

「あ、雄人さん・・・来てたんですね」

「すずかちゃんとは2回目だったね。こんにちは」

雄人を見つけ、笑顔を見せるすずか。

雄人もまた、笑顔で挨拶する。

「えっと、拓也さん・・・雄人さんって・・・？」

「俺や孝俊の仲間だ。孝俊と同じく特殊型スピリットを持ってる。ついでに言うと

孝俊の妹と付き合ってる、孝俊の将来の義弟だな」

「そうなんだ・・・つまり私が孝俊と一緒になれば・・・私にとっても義弟に・・・」

「？」

雄人に関して、小声でなのはとフェイトに軽く説明する拓也。

それに対し、フェイトがなんかぶつとんだセリフを発していたが、拓也は聞いてない事にした。

ちなみに、なのははよく聞こえていなかったのか、首を傾げていた。

*

その頃、砂漠の次元世界では・・・
ザフィーラと孝俊が一緒に移動していた。

「ん・・・？おかしいな・・・シグナム達と念話が繋がらんとぞ・・・」

「なに・・・？」

シグナム達と連絡しようと念話を飛ばした孝俊。
だが、シャマルが通信妨害を掛けていた為、外からの連絡も受け付けなくなっていた。

「何か・・・あったのか？」

「良くない事かもしれん・・・孝俊、一旦地球に戻るぞ・・・！」

『おっと、そうさせル訳には行かんナ・・・』

だが、2人が地球に戻ろうとした瞬間に何者かの声が聞こえ、凄まじい数のデジモンが現れた！

ギガドラモン 完全体 サイボーグ型 ウィルス種（データ種もいる）

必殺技 ジェノサイドギア（両手から有機体系ミサイルを無限に放つ）

ジェノサイドアタックより攻撃力は高い

ジェノサイドアタック（両手から有機体系ミサイルを放つ）

得意技 ギルティクロー（右手を大きく振りかぶり、鉄の爪で攻撃する）

地味だが、物凄い攻撃力がある

ギガヒート（全身から発する熱気で敵を焼き尽くす）

メガドラモンと同じ時期に作られた闇のように黒い体をした、サイボーグ型デジモン。

攻撃力はメガドラモンよりもアップしているが、素早い行動がとれなくなっている。

メガドラモンと力を合わせれば、お互いの欠点を解消できる。性格は凶暴。

アサルトモン 完全体 サイボーグ型 ウィルス種

必殺技 ジャスティスマサカー（両腕のガトリングや腹部や肩の機関銃を連射する）

得意技 サプライズアタック（奇襲攻撃を仕掛ける）

プロテクトスーツで戦闘力を高め、様々な重火器で武装したサイボーグ型デジモン。

その姿からケンタルモンの特殊部隊ではないか？との説もある。

他に、かつて拓也が倒したメガドラモンやメタルティラノモンなどもいる。

マシーン型やサイボーグ型・・・300体は余裕で数えられる。

更に一番後方には・・・なんとムゲンドラモンがいたのだ！

「丁度今、面白い事になってイル・・・貴様ラ・・・特ニそっちの龍ノスピリットの男ニ八行かれタラ厄介なのデナ・・・」

「面白い事・・・だと・・・？」

「そうダ。管理局ノ魔導師のガキ共ト、闇の書ノ守護騎士達ガ鉢合わせたのだ・・・」

主の手前、大人しくしている様ダガ、激突八時間ノ問題ダロウナ・・・」

「くっ・・・そう言う事か・・・てめえらをさっさと片付けて地球に戻る・・・！」

ムゲンドラモンの言葉に、ザフィーラは顔を歪め、孝俊はD・スキャナを取り出す。

そして、2人が戦闘態勢を取る。

「スピリットエボリューション！・・・グリーンドラモン！」

孝俊はグリーンドラモンに進化すると、すぐさまエネルギーをチャージする。

そして・・・ムゲンドラモンのいない方向に向きを変える。

「ドラゴンカノン！」

ドドドドドドドドドドオンツ！

敵の成熟期や完全体を次々に蹴散らして行く。

ドラゴンカノンが通った後には、大きな道が出来ていた。

「ザッフィー、ここは俺に任せろ・・・お前は戻ってシグナム達を・・・！」

「なっ！？だ、だがいくらお前でもこんな大量の相手を・・・」

「心配すんな・・・俺は絶対死なん。必ず全て片付けて、お前達の

所に戻る・・・！」

孝俊の言葉に、ザフィーラは驚愕する。

だが、孝俊は強い意志のこもった目でザフィーラを説得する。

「・・・解った・・・だが、約束だ・・・絶対に戻って来い・・・！」

「ああ・・・約束だ」

ザフィーラは一言残すと、全速力で飛んで行った。

グリーンドラモンはそれを見送ると・・・ムゲンドラモン率いるデジモン達に向き直る。

「フン・・・1人逃がシタ所デ同じ事・・・貴様を消シタ後ニ、また倒セバ良いだけノ事ダ」

「そうはさせねえ・・・てめえらはここで俺が倒す・・・！」

グリーンドラモンは機龍牙を構え、デジモン達に突撃していった・・・！

*

その頃、翠屋の店内。

休憩に入った輝二が一息ついており、D・スキャナを見つめていた。

「・・・おかしい・・・拓也からの連絡が来ない・・・」

家を出る前、拓也から仕事が終わったなら翠屋に立ち寄り、との伝言を受けていた。

だが、拓也からの連絡が一向に来ない。

更に、D・スキャナからの通信も繋がらなくなっていたのだ。

「輝二君、どうしたんだい？」

「土郎さん・・・いえ、拓也からの連絡が入らなくて・・・おまけにこつちからの連絡も繋がらないんです・・・」

輝二の様子を見に来た土郎が尋ねる。

輝二は、今あった事を土郎に伝える。

「確かにそれは心配だね・・・彼なら大丈夫だとは思うが・・・」

「俺もそう信じています・・・けど、連絡が繋がらないなんて、今まで殆ど無かった」

ですから・・・」

D・スキヤナを見ながら不安そうに呟く輝二。
それを見た士郎は・・・

「輝二君、ここはいいから君は拓也君の様子を見て来ると良いよ」

「えっ・・・でも、この忙しい時に・・・」

士郎の言葉に迷う輝二。

確かに連絡が付かない以上、拓也達の事は心配だが・・・
それでも、翠屋の店内には沢山の客がいる。
ほっぴりだして行くのは気が引けるのだ。

「構わないよ。例年ならもっと忙しかったんだ・・・今年は君のお陰でここまで結構
楽だったからね。それに・・・前から思っていたんだが、君や拓也君からは只ならぬ
秀囲気を感じていたんだ・・・拓也君と連絡が付かないのは、その関連じゃないのかな？」

「・・・はい・・・詳しくは言えませんが、俺や拓也、高雄は一般の人間とは少し
違います。普段は何の変哲もありませんが・・・俺達は緊急の際に、戦う【力】を
持っているんです」

「そうか・・・なら尚更だ、行ってきなさい。桃子達には僕から上手く言っておくよ」

「・・・はい・・・ありがとうございます!」

自分達の事を見通している士郎に対し、輝二は自分達の事を簡単に話す。

恐らく、士郎には隠し通せないであろう。

それに、士郎からも自分達と同じ、戦う者としての雰囲気を感じ取ったのである。

輝二は、エプロンを脱いで士郎に渡し、翠屋から走って出て行った・・・

*

その頃、海鳴大学病院の屋上では・・・

シグナムとシャマル、そしてなのはとフェイトが対峙していた。

拓也と雄人は、それぞれ後ろから見ている。

なのは達はともかく、自分達は戦う訳には行かない・・・その為、静観を決め込んでいた。

「はやてちゃんが・・・闇の書の主・・・」

「悲願はあと僅かで叶う」

「邪魔をするなら・・・はやてちゃんのお友達でも・・・!」

なのはとフェイトを睨みつけるシグナムとシャマル。
だが、それを見た拓也が一步前が出る。

「ちょっと待ってくれ!話を・・・聞いてくれ!」

拓也が出て来た事に若干動揺するシグナム。
シャマルも、更に警戒を強めている。

「ダメなんだ!闇の書が完成したら、はやてちゃんは・・・!」

「だあああつ!」

すると、拓也が言いかけた所に上空からヴィータがグラーファイ
ゼンを振りかぶり、
襲い掛かった。

「っ!?!」

「拓也さんっ!」

なのは拓也の前に立ち、障壁を張ってヴィータの攻撃を防ぐ。だが、ヴィータは力づくでなのはと拓也を吹っ飛ばした。

「きゃああっ！」

「うおおあっ！」

拓也は、咄嗟になのはを抱きしめ、なのはを庇って金網に激突する。

「なのは！拓也！」

「うおおおおっ！」

フェイトが吹っ飛ばされたなのはと拓也の方を見る。

だが、即座にシグナムがレヴァンティンで斬り掛かって来る。

フェイトは高速移動でそれをかわし、バルディッシュを起動させる。

「管理局に、我が主の事を伝えられては……困るんだ」

「私の通信妨害範囲から出す訳には……いかない……！」

一方、拓也となのはの所には、ヴィータが迫っていた。

ヴィータはバリアジャケットを装着し、2人を睨みつける。

「邪魔、すんなよ……もうあとちょっとで助けられるんだ……はやてが元気に」

「悪魔と・・・化物め・・・！」

「悪魔で・・・良いよ・・・悪魔らしいやり方で、話を聞いてもらうから！」

レイジンググハートを起動させ、アクセルモードにするのは。だが、アグニモンは特に目立った動きを見せようとはしない。すると、ゆっくりとフェイトと対峙しているシグナムに向かって歩き出した。

「拓也・・・」

「フェイト、ちっと下がっててくれ」

アグニモンは、フェイトを後ろに下げる。

「シャマル、お前は離れて・・・通信妨害に集中している」

「うん・・・！」

シャマルは後ろに下がり、バリアジャケットを装着して通信妨害に集中する。

「闇の書は、大昔に悪意ある改変を受けて、壊れちゃってるんだ・・・」

・今の状態で
完成させたら、はやてちゃんは……！」

だが、アグニモンが言い終える前に、シグナムがレヴァンティン
を向ける。

「我々はある意味で、闇の書の一部だ」

「だから当たり前だ！アタシ達が闇の書の事を一番知ってるんだ！」

それを聞いたアグニモンは……叫んだ。

「だったら何故だ！何故、闇の書なんて呼ぶんだ！」

「っ……？」

アグニモンの叫びに、一瞬怯むシグナム。

上空のヴァイータにも聞こえていたようで、動きを止めている。

「そっだよ！なんで本当の名前で呼んであげないの！」

「ホントの……名前……」

なのも拓也と同意見で、ヴィータに諭すように伝える。
闇の書では無く・・・夜天の魔導書である事を思い出させるよう
に・・・

【Barrier Jacket Sonic Form】

一方で、拓也の後ろではフェイトが新しいバリアジャケット、ソニックフォームを
発動させていた。

そして、バルディッシュをハーケンフォームにして、構える。

「薄い装甲を・・・更に薄くしたか・・・」

「その分、速く動けます」

「緩い攻撃でも、当たれば死ぬぞ・・・正気か、テストロッサ」

「貴女に・・・勝つ為・・・そして、私の師である孝俊に少しでも
近づく為には・・・
これしかないと思ったから・・・！」

シグナムは、アグニモンとフェイトを見ながら、バリアジャケット
に身を包む。

そして、静かに眩き始める。

「こんな出会いをしていなければ・・・私とお前達は、一体どれ程の友になれただろうか・・・」

「まだ・・・間に合う!」

「止まれん・・・!我ら守護騎士、主の笑顔の為ならば、騎士の誇りさえ捨てると決めた・・・」

アグニモンの言葉に、一筋の涙を流しながら顔を上げるシグナム。そして・・・アグニモンに向かって猛スピードで動き出し、レヴアンティン突き出す。

「うおおおおおっ!!」

「・・・」

だが、次の瞬間・・・アグニモンは何を思ったか、進化を解いて拓也の姿に戻った!

それが・・・シグナムの動揺を生んだ。

シュパアッ!

レヴアンティンの狙いがずれ、拓也の頬を掠める。
拓也の頬からは、血が流れ出していた。

「何故だ・・・何故進化を解いた・・・生身で受ければ、死んでい

たかもしれないんだぞ!？」

「……言った筈だ。お前達と戦うつもりは無いってな」

拓也の行為に、動揺しながらも問いかけるシグナム。

だが、拓也はシグナム達と戦うつもりは無い。

拓也の決意を込めた鋭い眼光が、シグナムを貫いていた。

「……お前達が俺達をどう思ってるかは知らねえ。けどな、俺達はお前達と敵対する

つもりも、ましてや捕まえるつもりもねえよ。それだけは変わらねえ」

「……っ」

「俺達は正義の味方なんて言っつもりもねえ……てか、正義の味方だなんて名乗った事は無いしな」

「あ……」

拓也の言葉に、シグナムはハツとなる。

初めて拓也と出会ったあの時……拓也はこう言っていた。

【・・・通りすがりの高校生だよ・・・少々お節介焼きだな】

「別に俺達は管理局の味方って訳じゃない。てか、訳は言えねーけどぶっちゃけ管理局嫌いだし」

「拓也・・・」

「俺は俺の信じる道を進んでるだけだ。はやてちゃんを助けたい一心で進むお前達と同じだ」

拓也とて、管理局は別にどうでもいいと思っている。孝俊に関する事を知った以上、別に管理局に信用も信頼もしていない。

「今、闇の書を完成させても、俺ははやてちゃんが助かるとは言えない切れん。

それでもな・・・他に何か方法があると・・・俺は信じてる。だからよ・・・俺達を信じてくれ・・・シグナム！ヴィータ！シャル！」

「たく・・・や・・・」

拓也の想いはシグナムの心に届いたらしく、シグナムはゆっくりとレヴァンティンを下ろす。

ヴィータも動きを完全に止め、シャマルも涙を流している。

が、次の瞬間だった・・・

突如青いバインドが現れ、拓也を拘束したのだ。

「ぬあつ・・・！？ば、バインド・・・やべえ、生身じゃ外せねえ・・・！」

「た、拓也さ・・・きゃあつ！？」

なのはも捕まり・・・遂にはフェイト・シグナム・シャマル・ヴィータまでもが捕まってしまう。

そして・・・仮面の男が2人現れた。

「つ・・・仮面の男が・・・2人・・・！？」

なのはが、2人の仮面の男を見て驚く。

拓也は予想していた通りだったのか、仮面の男を見据える。

「やっぱり・・・2人いたのか・・・てめえら、グラムのおっさ

んの双子の使い魔だな！」

「「っ……！」」

拓也の叫びに、仮面の男が動揺する。

「貴様……何時気付いた……」

「確証は無かったがな……暴走した孝俊の画像を見てる時、ロツテの方が……」

すんげー忌々しそうな顔してたからな。それに……てめえらの行動は、1人じゃ

出来ねえところもあつたし……なのはちゃん+俺オレの砲撃ホウゲキは防ぐわ、シグナムと

フェイトに気配を悟られないわ……あんな芸当ゲイジヤウが出来るのは、クロノの師匠である

てめえらくらいだろうよ」

「ぐっ……！」

「構わん、そいつは生身では何も出来ん……この人数では、バインドも通信妨害も

あまり持たん……早く頼む」

拓也の推理に齒噛みする片方の仮面の男。

だが、もう片方がそれを宥め、何かを続行するように促す。

すると、仮面の男の手に、闇の書が現れる。

「あつ……何時の間に!？」

そして、闇の書が開き、紫に光り出すと……
なんと、シグナム・ヴィータ・シャマルから蒐集を始めたのだ!

「う……ぐああつ!」

「う……うあつ……あああつ!」

「あつ……うつ……ああ……!」

その光景に、拓也が目を見開く。

まさかシグナム達から蒐集しようとは思わなかったのだ。

「シグナム!？てめーら、なんのつもりだ!」

「最後のページは、不要となった守護者自らが差し出す……これまでも幾度か、そうだったはずだ……」

『蒐集』

そして……シャマルとシグナムが消えて行く。

「拓也……す、すまない……お前の言う事を……ちゃんと聞いていけば……」

あ、主はやてを……た、頼む……ぐあああああ!」

「呪われたロストロギア……こんな物で誰も救える筈が無い……」

「シャマル！シグナム！なんなんだ・・・なんなんだテメーら！」

「プログラム風情が、知る必要も無い・・・」

「ヴィータの言葉に、冷たく言い放つ仮面の男。

だが、その一言が・・・1人の男の怒りに・・・火を点けた。

「プログラム風情・・・だと・・・ふざけんな・・・シグナム達が・・・
・・・どれだけ

辛く苦しい思いを背負ってここまで頑張ってきたと思ってやがるんだ・・・！」

拓也が、生身でありながらもバインドを引き千切るうと、力を込める。

既に、ぶち切れる寸前まで感情も高ぶっている。

「てめえらは・・・シグナム達騎士の誇りを汚し・・・はやてちゃんとの家族の絆も

踏みじった・・・てめえら・・・絶対に許さねえ・・・！」

「っ・・・！？」

仮面の男は、拓也を見て後ずさった。

拓也はバインドに捕まって動けないにも関わらず、だ。まるで、巨大な炎の龍が自分達を睨みつけているような感覚が襲ったのである。

しかし、次の瞬間・・・何処からか闇色のエネルギーの矢が拓也の足元に着弾する。

ドオオンッ！

「ぐあっ!?!」

その爆発で拓也が吹っ飛ばされ、隅の方まで転がる。

拓也が上を見上げると・・・なんと、デーモンの配下、デスマンが空中に佇んでいたのだ・・・!

そして、拓也の意識は・・・そこで途切れた。

「貴様・・・な、何者だ・・・」

「私の事よりも、今はその闇の書を完成させるがいい・・・」

突如現れたデスマンに若干動揺する仮面の男。

だが、デスマンは早く闇の書を完成させるように促す。

「でえええええっ!てやあぁー!ー!ー!っ!!!」

だが、遙か遠方からザフィーラが猛スピードで飛行してくる。そして、渾身の一撃を仮面の男にぶち込もうとする。が、仮面の男は障壁を展開し、ザフィーラの拳を易々と防いでしまふ。

「そうか・・・もう一匹いたな・・・」

『蒐集』

「ぐっ・・・ぐおっ・・・ぐうおおおおおっ！！」

蒐集されながらも、更にもう一撃を加えようとするザフィーラ。だが、その一撃も虚しく防がれてしまふのだった。

*

その頃、砂漠地帯の孝俊は・・・

「はあっ・・・はあっ・・・畜生・・・きりが・・・ねえ・・・」

倒しても倒しても、なかなか数が減らず、ジリ貧になっていたのだ。

最初こそ圧倒的な火力と隙のない剣技で押していたが・・・
どれだけやっても後から湧いてくる為、キリが無かった。
やはり数の暴力は強力だったのである。

「早く・・・行かねえと・・・はやてちゃんが・・・」

孝俊はここを突破する事が出来るのか・・・！？

「次回、遂に闇の書が覚醒・・・！」

続く

第53話 大切な事は数で考えちゃいけない気がする 前編（後書き）

はい、第53話終了です。

次回、いよいよ闇の書戦開幕となります。

デーモンの手下達も入り乱れる、大乱戦になるかと思われます。

そして、新たな援軍が・・・？

では、次回予告・・・雄人、どうぞ！

雄人「僕の存在、完全に忘れられてるような・・・では、行きます。
次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第54話【大切な事は
数で考えちゃ行けない気がする 後編】お楽しみに！」

第54話 大切な事は数で考えちゃいけない気がする 後編(前書き)

はい、第54話です・・・またしても時間が掛かってしまいました(汗)

今回は名言コーナーはお休みです。

さて・・・今回の東日本大震災での死者・行方不明者が遂に1万人を超えました・・・

まだ冬の寒さが抜けきらない中での今回の大災害・・・
現地の方々の辛さは計り知れないでしょうが、なんとか頑張っ
てほしいです・・・

こつちも、出来る事があれば何でも協力しようと思います。

この小説が気を紛らわす程度にでもなれば幸いです・・・

雄人「では、第54話・・・始まります！」

第54話 大切な事は数で考えちゃいけない気がする 後編

海鳴大学病院にて、シグナム達と鉢合わせてしまった拓也達。

はやて・アリサ・すずかがいた為に、その場で戦闘にはならなかったが、一触即発の

緊張状態になってしまった。

ついでになのはとフェイトは、拓也達デジモン勢の誇る影の男・中林雄人と初めて出会う。

その頃、砂漠の次元世界では、念話が繋がらない事を不審に思っ
て戻ろうとした孝俊と

ザフィーラの前に、デーモンの部下・ムゲンドラモン率いるデジモ
ンの大軍が現れた。

そこで、なのは達とシグナム達が鉢合わせた事を知った孝俊は、
ザフィーラを先に行かせ、

グリーンドラモンに進化して一人でデジモンの大軍に挑んでいった。

同じ頃、翠屋で働いていた輝二もまた、士郎に後押しされて翠屋
を飛び出していた。

そして夜、病院の屋上で対峙する拓也達とシグナム達。

シグナムを諭そうとする拓也にヴィータが襲い掛かり、止めに入
ったなのはもろとも、

拓也を吹っ飛ばす。

それでも、なのははバリアジャケットを装着し、拓也も咄嗟にア
グニモンに進化して

戦闘不能にはならなかった。

そして・・・一戦交えようとレヴァンティンを突き出して向かっ
て来るシグナムに

対して、拓也は進化を解いて攻撃を受けようとする。

それがシグナムを動揺させ、レヴァンティンが頬を掠めるにとどまった。

戸惑うシグナムに、拓也は自分の想いをぶつけて諭す。

だが、その場が収まるうとしたところに2人の仮面の男が現れ、拓也やなのは、さらには

フェイトや守護騎士達も拘束してしまう。

そして・・・なんと、守護騎士達から蒐集を始め、シグナムとシヤマルを消してしまった。

その非道な行いと言葉に怒り、仮面の男達が後ずさる程の威圧を発する拓也だったが、

更に現れたデーモンの部下・デスモンの攻撃を受けて吹っ飛ばされ、意識を失う。

遅れて到着して来たザフィーラも、奮闘虚しく蒐集されてしまった。

そして孝俊も・・・次から次へと現れるデジモン達に劣勢に追い込まれていた・・・

*

「管理局の魔導師・・・なのはとフェイトは大丈夫か・・・？」

「四重のバインドにクリスタルケージだ・・・抜け出すのに数分は掛かる」

なのはとフェイトはバインドで縛られた上、檻状のクリスタルに

閉じ込められていた。

外部からの力が無い限り、すぐには脱出出来ないだろう。

普通なら拓也がすぐに進化して叩き壊しているところだが、拓也はデスモンの攻撃で

吹っ飛ばされて気を失っている。

「ならば、早く仕上げるがいい……私は炎の闘士を始末するとしてよう……」

デスモンはそう言うと、ゆっくりと拓也に近付いていく。そして、エネルギーを溜め始める。

「これで……終わらせてやろう……」

しかし、次の瞬間……何者かの声が響いた。

「そうはさせない！」

「何！？まだ誰かいたと言っのか!？」

その声に驚くデスモン。

ヴォルケンリッターはシグナムとシャマルが消え、ヴィータは仮面の男達に空中で礫に

されており、ザフィーラは気を失っている。

「フォートレモンー!!」

玄武のビーストスピリット・・・フォートレモンが現れたのだっ
た。

フォートレモン ハイブリッド体 サイボーグ型 バリアブル種
オリジナル

必殺技 ダイナストライク（手足を引っ込め、電撃を纏って高速回
転して突撃する）

ストライクハンマー（全力の拳を相手に叩き込む。破壊力
はスージーQを上回る）

得意技 グレイブショット（尖った岩を召喚し、相手にぶつける）

プラズマバスター（メガトータモンのスパークキャノンの
強化版。威力は5倍）

グレイブシールド（身体を岩で覆って攻撃を防ぐ。他人に
対しても使用可能）

雄人が玄武のビーストスピリットで進化した姿。

最大の長所である防御力は更に強化され、並の完全体の攻撃では傷
1つ付かない。

パワーも上がっており、必殺のストライクハンマーはグレンモンの
スージーQを上回る。

スピードも若干だが上がっている。

また、得意技扱いだが、プラズマバスターもかなりの破壊力を持つ

ている。
格闘能力に長け、接近戦を得意としているが、地味に中距離・遠距離の戦いもこなす。

「貴様・・・生身でどうやってバインドを・・・!」
「どうやっても何も・・・掛かって無かったんですよ」
「・・・はっ?」

何故雄人が無事だったのかを疑問に思うデスモン。
しかし、雄人フオートレモンから帰ってきた答えに、素っ頓狂な声を上げる。

時間は少し遡る。

「ぬあっ・・・!?!?ば、バインド・・・やべえ、生身じゃ外せねえ・・・!」

「た、拓也さ・・・きゃあっ!?!?」

拓也達がバインドに捕まる・・・
だが・・・

「拓也さん、なのはちゃん！守護騎士の皆も！？……あれ、僕は？」

雄人だけバインドを逃れていたのだった。

理由は簡単……影が薄過ぎる為に、仮面の男達にすら認識されていなかったのである。

「……と、まあこういう訳でしてね……」

「そ、そうか……」

明後日の方向を向き、哀愁が漂う背中を見せる雄人。

敵とはいえ、ちよっと気の毒に思ってしまったデスモンだった……

そんなやり取りをしている間に、仮面の男達は……

「闇の書の主……目覚めの時だ……」

「因縁の……終焉の時だ……」

なんと、なのはとフェイトの姿に変身する。
そして、屋上にはやてを呼び寄せる。

「なのはちゃん・・・フェイトちゃん？何なん・・・何なんこれ・・・？」

苦しそうにしながらも、辺りを見回すはやて。
それに構わず、仮面の男達は喋り始める。

「君は病気なんだよ・・・闇の書の呪いって病気・・・」

「もうね・・・治らないんだ・・・」

「闇の書が完成しても・・・助からない・・・」

「君が救われる事は・・・無いんだ・・・」

2人の言葉を聞いたはやては、ショックを受ける。
しかし、すぐにヴィータとザフィーラを見る。

「そんなん、ええねん・・・ヴィータを離して・・・ザフィーラに
何したん・・・？」

「この子達ね・・・もう壊れちゃってるの・・・」
「私達がこうする前から、とっくに壊された闇の書の機能も、まだ
使えると思っ込んで
無駄な努力を続けてた・・・」

白かった魔法陣は紫・・・否、闇色に染まって行く。

「はやて！」「はやてちゃん！」

漸くバインド＋クリスタルケージから抜け出したなのはとフェイト。

そして、デスモンと戦闘しているフォートレモン《雄人》。

3人がはやてに呼びかけるが・・・その声は最早届かなかった。

「う・・・うああー——————
—————！！！」

はやてが叫んだ直後・・・屋上で大爆発が起こった！

そして、闇色の光は天を衝くような巨大な柱となる。

「我は闇の書の主なり・・・この手に、力を・・・封印、解放」
『解放』

はやての身体が段々変化していく。

身長が一気に伸びて行き、体も成長する。

漆黒のバリアジャケットに身を包み、頭部と背中には合わせて6枚の漆黒の羽根が生えている。

「また、全てが終わってしまった。一体幾度、こんな悲しみを繰り返せばいい？」

「はやてちゃん！」

「はやて……」

目を閉じたまま天を仰ぎ、涙している彼女になのはとフェイトが呼びかけるが、今の彼女には届いてはいない。

「我は闇の書。我が力の全ては」

《Diabolic emission》

彼女が空へ向かって右腕を挙げると闇の書が光を放ち、彼女の右手の上に闇色の球体が現れ、一気に巨大化していく。

「主の願いのそのままに……」

「くく……遂に覚醒したようだな……今は退くとしよう……」

フォートレモンと戦っていたデスモンは、ワープしてその場を離脱する。

どつちら、時間稼ぎも兼ねていたようだった。

「逃げられましたか・・・って、まずい！拓也さんが・・・！」

深追いはせずに見ていたフォートレモンだったが、ふと拓也の方を見る。

拓也は未だに気を失っており、無防備な状態である。
フォートレモンは、すぐに拓也の元に駆け寄るのだった。

*

その頃、別のビルの屋上では、仮面の男が魔法陣を展開していた。

「よし・・・結界は晴れた。デュランダルの準備は？」

「出来ている・・・」

1人の仮面の男が、カードを出す。

そして・・・なのは達のいる方を見つめた。

闇の書の意志が作り出した巨大な球体が、空に昇って行く。
これはどう見ても攻撃にしか見えない。

「あ・・・っ！」

「空間攻撃・・・！まずい、拓也がまだ・・・！」

なのはとフェイトがそれを見て驚愕する。
更に、拓也がまだ気を失って倒れているのだ。
あんなのを生身で喰らえば、間違いなく死ぬだろう。

「闇に・・・染まれ・・・」

巨大な球体が、突然弾けるように広がる。
なのはは咄嗟にフェイトの前に出て、腕を突き出す。

【Round Shield】

「これで持つか・・・【グレイブシールド】！」

フォートレモンは、自分と倒れている拓也を岩で覆い尽くし、防御態勢を取る。

その後、なのは、フェイト、雄人、拓也は巨大な球体デアホリック・エミッションに飲み込まれた。

*

それを見ていた仮面の男達は・・・

「持つかな？あの2人・・・」

「暴走開始までの瞬間までは・・・持つてほしいな・・・」

と、次の瞬間・・・青色と赤色のバインドが、仮面の男達を拘束した！

「ぬあっ！？」

「何っ！？」

「はい、対象2人捕獲ーっ」と

ふと、間の抜けた声が聞こえる。
更に・・・

「ストラグルバインド・・・相手を拘束しつつ、強化魔法も無効化する」

仮面の男達が見上げると、そこにはクロノと孝昭がいたのだ。
青いのはクロノ、赤いのは孝昭のバインドだったのである。

「あまり使い所のない魔法だが、こう言う時には役に立つんだよな」
《変身魔法を、強制的に解除するからな！》

孝昭の愛機、バーニングブロス・ボルケーノが言葉を発した瞬間、仮面の男達の身体が光り出す。

そして、変身魔法が解け・・・仮面が剥がれた！

「クロノ、孝昭・・・このお・・・！」

「こんな魔法・・・完全に独学だった孝昭はともかく、クロノには教えて無かつたんだがな・・・」

「1人でも精進しろと教えたのは、君達だろう・・・アリア、ロツテ・・・」

「はぁ・・・高雄や拓也が言ってた通りだったな」

孝昭がやれやれと言った感じで溜息をつく。

クロノ、プレシア、パラレルモンと一緒に、高雄から事の次第を教えられていたのだ。

「高雄・・・あの男だけでなく、あいつまで気付いていたなんて・・・！」

「今にも飛び出さんとするプレシアさんを押さえんのは大変だったかな・・・」

実は今回の出勤前、プレシアが自分も連れて行って欲しいと、駄々をこねるのにも

似た感じでせがんでいたのだ。

しかも、かつてフェイトに折檻を加えていた時に使用した鞭を持

つてだ。

なんとかパラレルモンがプレシアを羽交い絞めにし、必死に抑え込んだそうだが（汗）。

「まー良いや。とりあえず付いて来て貰うぜ」

*

「隠れたか・・・」

デアボリック・エミッションが消え去ると、その場には闇の書の意味を除き、一人も居なくなっていた。

屋上にいた筈のフォートレモンと拓也も、いつのまにか消えていたのだ。

そこから大分離れた場所で・・・なのはとフェイトが隠れていた。なんとかデアボリックエミッションを防ぎきったものの、なのはは少し辛そうだった。

「ごめん、なのは・・・大丈夫？」

「うん、大丈夫・・・」

フェイトは闇の書の意志のいる方角を見る。

「あの子、広域攻撃型だね。避けるのは、難しいかな・・・バルデイツシュ！」

【Yes sir】

フェイトのバリアジャケットが、ソニックフォームから通常のライトニングフォームに戻る。

そして、2人の後ろからユーノ、アルフ、そしてヴォルフモンがやって来る。

「なのは！」「フェイト！」「2人とも無事か！」

「ユーノ君、アルフさん！それに輝二さんも！」

信頼できる2人に加え、輝二もやって来た。

なのはとフェイトにとっては心強い援軍である。

その頃、闇の書の意志は、流れていた涙を拭っていた。

そして・・・静かに呟いた。

「主よ、あなたの望みを叶えます。愛おしき守護者達を・・・傷付けた者達を今、破壊します」

魔法陣を展開した闇の書の意味を中心に結界が広がっていく。しかもただの結界ではなく、閉じ込める為に使用する捕縛型の物である。結界を破壊するか・・・もしくは術者を行動不能にしなければ、脱出も出来ないだろう。

「何・・・!?!」

「前と同じ、閉じ込める為の結界だ!」

「やはり・・・俺達を狙っているようだな・・・」

フェイトとアルフが焦りの声を上げる。

ヴォルフモンは難しい顔をして、腕を組んで呟いた。

「今、クロノが解決法を探してる。援護も向かってるんだけど・・・まだ時間が・・・」

「それまで、私達で何とかするしかないか・・・」

「スレイプニール。羽ばたいて」

《Sleipnir》

背中にある翼が一回り大きくなり、それを羽ばたかせて飛翔する闇の書の意志。

「!奴が飛んだぞ・・・!」

ヴォルフモンの声を聞き、全員が身構えるのだった……

*

その頃、時空管理局の本局……グレアム提督の部屋。
クロノ、孝昭、そしてD・スキヤナの調整と野暮用で来ていた高
雄がグレアムと向かい合っている。

「リーゼ達の行動は、あなたの指示ですね……グレアム提督」

「違う、クロノ！」「私達の独断だ。父様には関係ない！」
「ロツテ、アリア、良いんだよ。クロノや孝昭君はもう、あらかた
の事は掴んでる……違うかい？」

反論しようとするロツテとアリアを宥めるグレアム。
クロノ達3人は、静かにそれを見ている。

「……11年前の闇の書事件以降、提督は独自に闇の書の転生先
を探していましたね」
「そして、発見した闇の書の在り処と、現在の主・八神はやてを……
な」

クロノと孝昭は、調べた事を述べて行く。

だが、高雄はずっと黙ったままだ。

「しかし、完成前の闇の書と主を押さえても、あまり意味が無い・
・主を捕えようと、

闇の書を破壊しようと、すぐに転生してしまうから」

「だから、監視をしながら闇の書の完成を待ったって訳だな・・・」

「見つけたんですね・・・闇の書の、永久封印の方法を」

更に説明を述べるクロノと孝昭。

グレアムはしばしの沈黙の後、漸く口を開いた。

「両親に死なれ、体を悪くしていたあの子を見て、心は痛んだが・

・運命だと思った。

孤独な子であれば、それだけ悲しむ人は少なくなる・・・」

「あの子の父の友人を語って、生活の援助をしていたのも・・・提督ですね」

クロノは、はやたと守護騎士達が楽しそうにしている写真を出す。孝昭もグレアムを見て、高雄は未だに目をつむって黙ったままである。

今まで目をつむって黙っていた高雄がカツと目を見開き、怒りの咆哮を上げた。

そのあまりの威圧に、ロッテ達は勿論、グレアムですら気圧されていた。

ちなみに余談だが、今の咆哮で部屋の外で警備していた局員2人がビツクリして飛び上がったらしい(笑)。

「さつきから黙ってりゃよ・・・悲しむ人が少なくなる・・・？ふざけんな！どんな理由があるうと、何の罪も無い人の命を奪ってええ筈が無いじゃろおが！」

怒りの形相でまくし立てる高雄。
グレアムやロッテ達は勿論、隣にいるクロノと孝昭も呆然と見ている。

「大体、大切なもんは数で考えるもんじゃねえんだ・・・あの子を・・・はやてちゃんを
思う人間が1人でもいる限り、決して命を奪っちゃいけない！
第一、はやてちゃんは何も罪を犯しちやいなえよ。ためーらのやつてる事は違法だ」

「そのせいで・・・そんな決まりのせいで悲劇が繰り返されてんだ！クライド君だって…」

クロノの父さんだって、それで・・・！」

高雄の言葉に、ロッテが身を乗り出して声を荒げる。

だが、高雄は動じず、更に言葉を紡ぐ。

「てめーらのやってる事はただの復讐じゃねーか。はやてちゃんをてめーらの復讐の犠牲にさせる訳には行かん。そもそも、なんでこの世界とはやてちゃん、両方助けようと考えねえんだよ」

「そんな事が出来るならとっくにやってる！それが出来ないからこうやって・・・！」

今度はアリアが反論するが、高雄は溜息をつく。そして、腕を組んで呟く。

「だったら、俺達がやってやる。切札もいくつか残ってるからな」

すると、今度は孝昭が口を開く。

「そうだな。今までと今回じゃ状況も戦力も違う。デジモンって言

う未知の力に賭けて
みるのも有りだろう・・・それに、法以外にも、提督のプランには
問題がある。
凍結の解除はそう難しくは無い筈だしな。何処に隠そうと、どんな
に守ろうと・・・
いつかは誰かが手にして使おうとする。怒りや悲しみ、欲望や切望、
そんな願いが
導いてしまう。封じられた力へとな・・・」

そう言って、孝昭とクロノ、そして高雄が立ち上がる。

「現場が心配なので・・・すみません、一旦失礼します」

「・・・クロノ」

部屋を出ようとするクロノを、グラムが呼び止める。
そして、アリアの方を向く。

「アリア、デュランダルを彼に」

「父様！」 「そんな・・・」

「私達に、もうチャンスは無いよ・・・持っていたって、役には立
たん」

そう言っつて、グレアムはカード状になっている、待機状態のデユランダルをクロノに渡す。

「どう使うかは、君に任せる．．．．．氷結の杖、デユランダルだ」

*

その頃、砂漠では．．．

「くっそ．．．視界が．．．霞んできやがった．．．」

「クク．．．もう限界ノ様ダナ．．．この数相手ニ、たった1人デ良くやったト言いたいところダガ．．．」

完全にポロポロで、体中がショートしているグリーンドラモンがいた。

1人で何とか奮戦し、500体以上いたデジモンも、残り150体にまで減らしていた。

だが．．．降り注ぐマシン型軍団の強力無比な攻撃の前に、流石のグリーンドラモンもただでは済まなかった。

徐々に体力を奪われ、ダメージは蓄積し．．．最早立っているの

もやっつとである。

「諦めねえ……てめえら……倒して……はやてちゃん……を……」

ドシヤッ

そう呟いて立ち向かおうとするグリーンドラモン。
だが、とうとう限界が来てしまい、進化が解けて砂漠に倒れ伏した。

「フハハハハ！やったゾ！足止めだけノつもりダツタガ、まさか倒してしまうトハ！」

倒れている孝俊を見て、勝ち誇って笑うムゲンドラモン。
孝俊はまだ息はあるが、もう立ち上がる気力は無い。

「だが、念二八念ヲ入レネバ……お前ら、誰力奴ニトドメヲ刺セ……！」

ムゲンドラモンの号令で、10体程のデジモンが孝俊に近付いて行く。

もはやこれまでか、と思われた次の瞬間だった。

ブウン……

「ムウ？何ダ……？」

突如、上空の時空が歪み……その中から緑色に光る球体がゆっくりと降って来たのだ。

それを見上げるムゲンドラモンと手下達。

それは、ゆっくりと孝俊に近付いていたデジモン達の足元に降り……爆発した！

ドオオオオン！！

その爆発で、10体全てが後方に吹っ飛ばされる。そして、煙が徐々に晴れて行く……

「な……何者ダ、貴様……！！」

ムゲンドラモンの焦った様な声が響く。

孝俊は、ぼやける視界の中で……1人の男を確認した……

「何者かって？通りすがりのオッサンだよ。少々親馬鹿だけどな……

」

「……………親……………父……………？」

それは……………自分の父であり、師である男……………
面林龍輔、その人だった……………！

親父見参！

続く

第54話 大切な事は数で考えちゃいけない気がする 後編（後書き）

はい、第54話終了です。

遂に・・・親世代が1人、龍輔がリリカルなのはの世界に・・・！
次回、大暴れ・・・予定です。

では、次回予告・・・龍輔さん、どうぞ。

龍輔「あいあいさー。じゃ、いくよー

次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第55話【何だかんだで親って凄い気がする】お楽しみに〜」

第55話 何だかんだで親って凄い気がする(前書き)

はい、第55話です。

なかなかペースが上がりません・・・(汗)

孝俊「もっとやる気出せ駄作者」

(、・、) ショボン

高雄「顔文字使つなよ(汗)」

では、気を取り直して名言コーナーを・・・

- 人はいつ死ぬと思う？

心臓をピストルで打ち抜かれた時。違う！

不治の病に冒された時。違う！

猛毒キノコスープを飲んだ時。違う！

人に・・・忘れられた時さ

(Dr・ヒルルク One Piece)

- 正義の味方はかつこいいんだぞ！強いんだぞ！

ワルモンなんかには負けないんだぞ！

今はやられてても、絶対最後は勝つぞ！

(野原しんのすけ クレヨンしんちゃん)

- 己を信じず何を信じる!?

(破壊大帝ガルバトロン トランスフォーマー)

- 運命なんて誰かが決めるもんじゃない

(日向ネジ NARUTO)

- どう生きるか…… どう闘うか…… それはお前次第だ。

(ザフィーラ 魔法少女リリカルなのはStrikers)

- 仲間一人救えねえ奴が火影になんてなれるかよ!! そうだろ・
・サスケ

(うずまきナルト NARUTO)

孝俊「お、ザッフィーが入ってる」

拓也「Strikers……今はA・S編だからちょっとフライングっぽい気もするがな(苦笑)」

孝昭「気にしない気にしない(笑)」

今回は、遂に龍輔が戦います。

先代の闘士、とくにご覧あれ(笑)

龍輔「じゃ、第55話……始まるよ」

後書きに個人的な質問がありますので、最後まで読んでみて下さい(何)

第55話 何だかんだで親って凄い気がする

第55話副題【親父】

はやてのお見舞い先で鉢合わせてしまった拓也達とシグナム達。拓也は自分の思いをぶつけ、諭そうとするも仮面の男達の妨害と、デスマンの攻撃によって行動不能となってしまう。

だが、拓也にトドメを刺そうとしたデスマンの前に、只1人バインドを逃れた雄人がビーストスピリットで進化したフォートレモンで立ちふさがる。

しかし、雄人の奮闘も虚しく、はやては仮面の男達によって覚醒してしまう。

覚醒した闇の書の意志は、空間攻撃で周りを吹き飛ばそうとするも、なのははフェイトを庇って咄嗟にシールドを張って辛うじて防御し、雄人も岩のシールドで自分と拓也をガードする。

仮面の男達は、その状況を見ながら計画を進めようとするも、高雄から正体を聞かされたクロノと孝昭によって捕獲され、正体を晒す。

本局に戻ったクロノと孝昭は、D-スキャナの調整で来ていた高雄と合流し、グレアムに事の真相を問い詰める。

高雄は暫く黙って聞いていたが、真相を聞いた後に目を開いて一喝。

そして、この世界とはやて・・・両方助けると言い残して部屋を出る。

グレアムは少し考えた後・・・部屋を出ようとするクロノを呼び止め、氷結の杖・

デュランダルを託したのだった。

その頃、砂漠では孝俊が遂に力尽き、進化が解けて倒れてしまっていた。

トドメを刺そうと近づくムゲンドラモンの手下達・・・

だが、次の瞬間上空が歪み、そこから緑色の球体がゆつくりと降下して来る。

その球体は着陸するや否や爆発し、ムゲンドラモンの手下達を吹き飛ばす。

焦点の定まらない目で孝俊が見た物は・・・仁王立ちした父・龍輔の姿だった・・・

先代の戦士が・・・遂になのはの世界に降り立った・・・！

*

「通りすがりのオッサンが何ノ用ダ？邪魔ヲするナラバ、貴様モツイでニ始末してヤル」

爪を向けて龍輔を威嚇するムゲンドラモン。

並のデジモンなら、これで逃げ出す所なのだが・・・龍輔はそれを完全に無視し、孝俊の方を向く。

「全く、こんなにボロボロになるまで無茶しよってからに……お前は変な所で頭が悪いと云うか意地っ張りと言っか……」

苦笑しながら、孝俊に喋りかける。

それを聞いた孝俊も、口元に笑みを浮かべながら聞いていた。

「うるせーやい……誰の息子だと思っただよ……」

「はは、違いねーや……とにかく、この場は俺に任せな。お前には他にやる事があるだろう」

龍輔はそう言つと、再びムゲンドラモンの方に向き直る。

そして、ムゲンドラモンを指差して口を開く。

「俺の大事な息子を散々可愛がってくれたようだな……礼はきつちりとさせてもらっぞ」

「ふん、人間如きが俺二刃向うか……付け上がりオツテ」

龍輔を見て、余裕綽々といった様子で語るムゲンドラモン。

しかし、その余裕は……次の龍輔の行動で、粉々に砕け散る事となる。

「この数相手なら……こっちの方がいいな」

龍輔はそう言うと、両手首に巻いている内の左側の機械……D
-プレスを見る。

そして……【2・0・1・0・ON】の順にボタンを押す。

【two・zero・one・zero……BEAST SPI
RIT EVOLUTION】

プレスのスイッチが入ると同時に、電子音が響き渡る。
そして……一瞬で装甲を纏い……進化した！

*

ブレードドラモン ハイブリッド体 マシン型 バリアブル種
オリジナル

必殺技 サウザンドストライザー

(縦横無尽に敵に斬撃を浴びせる。発動時は動きが凄まじく
速い)

コスモスラッシャー

(剣にエネルギーを送って巨大化させ、エネルギー波を飛ばす。)

直接斬りつける事も出来る)

ドラゴンスパイク

(エネルギーを纏った飛び回し蹴り。鉄塊も易々と蹴り碎く威力を持つ。)

飛び蹴り型もある)

得意技 ブライトカノン

(光のレーザー砲を発射。孝俊のドラゴンカノンを上回る破壊力がある)

メディカルフラッシュ

(額のクリスタルから癒しの光を照射。体力を半分程度まで回復させる)

プロテクトレイ

(光のシールドを展開。その強度は、フォートレモンの装甲をも凌ぐ程)

龍輔が先代・龍のビーストスピリットで進化した姿。

D・ブレス(左腕)のコマンド【2・0・1・0・ON】で発動する。

グリーンドラモンと似ているが、装甲は更に重厚で鋭利になっている。

ビーストスピリットでありながら、実はWスピリットを上回る実力を誇る。

必殺技の【サウザンドストライザー】は、巨大な敵や多数の敵を相手にする時に最も

真価を発揮する技。

そのスピードは、現役世代NO.1のスピードを持つ善之、優れた動体視力を持つ拓也や孝俊ですら視認できない程である。

同じく必殺技の【コスモスラッシャー】は、エネルギーを込めれば込める程、天を衝くような光の柱に見える。

力を抑えれば長時間動けるが、龍輔自身が年を取ったせいかフルパワーでは長時間は持たない。

必殺技は【D・ブレス】でコマンドを打ち込むのが基本だが、別に打ち込まなくても使える。

ただ、コマンドを打った方が安定する上、若干強力になる。

*

(ヒューマンスピリットはこっちの世界じゃ指名手配されてるみたいだからな・・・)

何処で誰が見てるか解らんし、使わないでおくか・・・)

龍輔はかつて、スカリエッツィの妹で現在、自分の奥さんである夏紀ナツキを助け出す為に、

ヒューマンスピリットで大暴れしている。

その後、管理局の裏の連中の工作により、指名手配犯に仕立て上げられたのだ。

どうやってそれを知ったかと言うと・・・先代のオフアニモンが探りを入れたからである。

「なっ・・・！？進化シタ・・・ダト！？貴様一体・・・！」

「・・・先代・特殊型スピリットが将・・・龍の闘士・ブレードドラモン」

焦るムゲンドラモンを前に、静かに言い放つ龍輔。

そこから放たれる威圧感に・・・手下達はおるか、ムゲンドラモンですら不用意に近づけなかった。

「先代・・・ダト！？そんなノ、データ二八無かったゾ・・・！？」

「無くて当然だ・・・俺達が現役で戦ってたのは、もう20年近く前の話だからな」

ムゲンドラモン含め、デーモン軍団には龍輔達先代の闘士の事は頭に入っていない。

龍輔が現れた事自体、大きな計算外イレギュラーだったのである。

「ヌウ・・・ダガ、この数相手二たつた一人デ挑ム事ナド・・・！」

ザンツ！・・・ドサドサドサツ！

そうムゲンドラモンが言った瞬間、ブレードドラモンが剣を抜いて一瞬消えたかと

思いきや、また元の場所に戻る。

そして剣を収めると・・・なんと10体程が真つ二つに斬られ、消滅していた。

ほんの一瞬の出来事に、ムゲンドラモンが目を見開く。

「ば・・・馬鹿ナ・・・!？」

「・・・100・・・いや、140くらいはいるな・・・」

驚くムゲンドラモンを尻目に、ブレードドラモンは辺りを見回す。そして相手の数を確認すると・・・再び剣を抜き、エネルギーを込める。

「時間は掛けていらねん・・・これで決める・・・！」

すると・・・ブレードドラモンの剣の刀身が緑色に光り輝き、
ほとんど巨大化していくではないか！

その光景は・・・まさに天を衝く光の柱だった・・・

「（マズイ・・・！何故力解らんガ、アレを喰らったらマズイ気が
スル・・・！）クツ・・・！」

「・・・逃げやがったか・・・まあいい。目的は孝俊を助ける為だ
ったしな・・・」

ムゲンドラモンは、巨大化していく刀身を見て焦り、ワープして
その場を脱出した。

ブレードドラモンは特に追いかけてようとせす・・・巨大になっ
た剣を一気に横薙ぎに
振り抜いた！

「コスモ・・・スラッシャーアアアアーーーーーッ！！
！」

ザザザザザザザザンッ！！

何と言う事か・・・コスモスラッシャーが通り抜けた後には、僅
か10体程のデジモンが
残っていただけだった。

今の一撃で、およそ130体が真つ二つに斬られ・・・消滅した

のである。

そして、残ったデジモン達もまた愕然とし、動けなかった・・・自分達の目の前にいるのは・・・紛れも無い化物である。デジモン達を支配していたのは・・・圧倒的な実力差を見せつけられた事による恐怖だった。

「・・・立てるか？」

「何とか・・・な」

そんな敵のデジモン達を尻目に、ブレードドラモンは倒れている孝俊に手を差し伸べる。

孝俊は、フラフラでありながらも父の手を掴み、立ち上がる。

「よし、ちょっとじっとしてろ・・・」

ブレードドラモンは額のクリスタルから、淡い青色の光を照射する。

治療光線の【メディカルフラッシュ】である。

「・・・サンキューな・・・親父」

「構わんさ。子供を助けるのは親の役目だ・・・命が掛かってるなら尚更な。だが、これは

応急処置に過ぎん・・・次元航行艦船の・・・えっと、アースラだ

っけ？そこで治療を受けた方が良い」

「で、でも・・・地球の方が・・・」

龍輔の言葉に、はやてが心配な孝俊は素直に従う事は出来なかった。

確かに、自分の体力は全開には程遠い状態である。

それでも・・・はやてや守護騎士・・・自分のもう1つの家族が心配だったのだ。

「なら、俺が代わりに地球に行く。お前が戻るまで、俺が何とかしておくさ」

「親父・・・」

「つーわけで・・・オフアニモン、頼むよ」

『解りました・・・すぐに孝俊君をアースラに転送します。私も向かいますよ』

龍輔のD・ブレスからオフアニモンの声が響く。

どうやら、龍輔がずっと通信を繋げていたようである。

そして、孝俊の身体が光に包まれ・・・砂漠から消えた。

ブレードドラモンは孝俊を見送ってから・・・ゆっくりと振り返る。

その表情は・・・怒り以外の何物でもなかった。

「さあ、お片付けだ・・・！」

【One / zero / zero / zero・・・MAXIMUM
CHARGE】

ブレードドラモンがコマンド【1 0 0 0 0 0 N】を打ち込み、体勢を低くして剣を構える。

【Thousand Strizer】
サウザンド
ストライザー

電子音が響いた刹那・・・その姿が消えた。

ザンツ！ズシャツ！ドシュツ！バシュツ！ズバツ！シュパツ！
ズンツ！

何かを斬り裂く音が複数聞こえた瞬間、ブレードドラモンは・・・既に敵デジモン達の後方にいた。

そして、剣を鞘に収めると同時に・・・

『グアアアアアア………!!!!』

トシャドシャドサアッ

「【サウンドストライザー】……」

マシン型デジモン軍団は、真つ二つに斬り裂かれ……砂漠に崩れ落ち、消滅する。

ブレードドラモンは、小さく技名を呟いていた……

「さて、と……年甲斐も無いが……若者達のお手伝いをして来るかね……」

ブレードドラモンは一度進化を解き、龍輔の姿に戻って砂漠の世界を後にするのだった……

*

その頃、アースラでは……

「大丈夫かなあ……拓也君達……」

画面を見ながら、エイミーが拓也達を心配していた。

なのはやフェイトは姿が見えるものの、拓也はデアボリックエミ

ツシヨンの発動後から
姿が見えないのである。
と、その時……

『失礼します』

女性の声が響いた。

その声は、エイミイも含めたアースラクルーが一度は聞いた声。

「あ……オファニモン！それに……孝俊君まで！？」

アースラの転送装置の中に、オファニモンと孝俊が立っていた。
オファニモンがパラレルモンに要請し、アースラの中に送り込ん
でもらったのだ。

「おっす、久しぶり」

孝俊が苦笑いしながらエイミイに挨拶する。
そして、リンディの方を見る。

『互いに言いたい事は結構あるでしょうが、後で良いですか？事態
が事態ですし』

「そうね。闇の書が覚醒してしまった以上……のんびり話し合ってもいられないしね」

「……そうか……遂に覚醒しちまったのか……」

リンディの言葉を聞き、悲痛な顔をする孝俊。

途中、オファニモンから闇の書の正確な情報を聞いていたのだ。完成させても、は yet は助からないと言う事を……

「すぐに現場に向かいたいところだが……俺の体力はあまり残って無くて、回復の為に

ここに来させてもらったんです。その為に、こつやつてオファニモンにも同行してもらいましたから」

「解りました……それでしたら、空いている部屋を使って下さい」

「ありがとうございます。あ、そうそう……俺の代わりに超強力な助っ人が現場に向かいましたから……」

色々孝俊に聞きたい事があるリンディだったが、緊急事態だけに深くは聞かなかった。

ここで変に話がこじれてしまえば色々とややこしくなる。

孝俊は、部屋に向かう前にニヤリと口元を釣り上げて、笑った。デタラメな強さの戦士の事を思って。

*

そして、フェイトは闇の書の意志と交戦していた。
何度か交錯しながら、相手の出方を窺っている感じだ。

「ふっ！」

闇の書の意思に、下から緑色に光る鎖が伸び、彼女の足を絡め取る。

ユーノが発動させた拘束魔法の一種・チェーンバインドだ。

「はあっ！」

更に、アルフがバインドで右腕を拘束し、闇の書の意思をその場に足止めた。

その隙に、フェイトは魔法陣を展開して砲撃の体勢に入る。
闇の書の意志を挟んだ反対側では、なのも砲撃の用意をしていた。

それらを見た闇の書の意味は、慌てる事も無く呟く。

「碎け」

【Break up】

すると、バインドはいとも簡単に碎け散ってしまふ。

足止めと言っても、殆ど時間は稼げていない。

【Plasma smasher】

「ファイア！」

【Divine buster extension】

「シュート！」

フェイトは突き出した左手の先から、なのははレイジングハートの先端からそれぞれ強力な砲撃魔法を発射した。

二つの砲撃が、闇の書の意味を挟むように迫る。

「盾」

【Panzer schild】

だが、闇の書の意味が両腕を左右に伸ばし、防御魔法・パンツァーシールドを発動させる。

二つの砲撃は容易く防がれ、ダメージを与えられない。

「そこだっ！【ツヴァイ・ズィーガー】！！！」

ヴォルフモンがビルの屋上から、必殺技を放つ。
両腕が塞がった瞬間を狙ったのである。

しかし、それでも闇の書の意志は表情を崩さなかった。

「刃^も以て、血に染めよ、穿^{うが}て、ブラッディダガー」

あれほどの強度のシールドを同時に発動させているだけでも相当の技術だろう。

しかし、闇の書の意味は更に自分の周りに射撃魔法・ブラッディダガーを発生させる。

その数・・・なんと20発以上。

それらはなのはとフェイトに襲い掛かり、更にはツヴァイ・ズイーガーも容易く相殺させる。

なのはとフェイトは爆煙の中に消えるもどうにか防御したらしく、煙の中から姿を現す。

だが、闇の書の意志はゆっくりと右腕を上げる。

「咎^{とが}人^{びと}達^{たち}に、滅^めびの光を」

彼女の足元には円形の白い魔法陣が、右手の先には同じく円形の魔法陣が現れたのだが、

その魔力光は何となのはと同じ桜色をしていた。

そして驚くべき事に、その桜色の魔法陣の前に・・・散らばっていた魔力が集束していく

ではないか。

「あれは……」

「まさか!？」

その光景を見て、アルフとユーノが驚愕する。

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

「スターライト……ブレイカー？」

桜色の光が集束していき、中心の球体はどんどん巨大化していく。

「アルフ!ユーノ!」

「あいよ!」

フェイトに言われ、急いでその場を離脱するユーノとアルフ。
ヴォルフモンも、すぐにその場から離れる。

「スライドエボリューション!……ガラムモン!」

そして、ガラムモンに変化して地面に降りると同時に、猛スピードで離脱する。

機動力に優れたガラムモンならば、攻撃範囲からも逃れられると踏んだのだ。

「なのはの魔法を使うなんて・・・！」

「なのはは1度蒐集されてる。その時にコピーされたんだ！」

「ちょ、フェイトちゃん・・・こんなに離れなくても・・・！」

「至近で喰らったら、防御の上からでも落とされる！回避距離を取らなきゃ！」

フェイトは、前になのはとの戦いで1度直撃を喰らっている。

その為、スターライトブレイカーの威力が身に染みて解っている。てゆうか、なのはは自分の魔法の威力を自覚するべきだと思うのは作者だけではないだろう。

【サー、左方向300ヤード、一般市民がいます】

「「えっ・・・!?!」」

バルディッシュが発した言葉に驚くなのはとフェイト。

「2人共、どうかしたのか!?一般市民がいるとか聞こえたが！」

「あ、はい・・・!左方向300ヤードに..」

2人の下を走っていたガラムモンが尋ねる。

バルディツシュの声を聞き取ったらしく、若干信じられないと言った表情をしている。

ちなみに、輝二は成績優秀で常に学年でも最高クラスの成績を維持しているのだ。

その為、たまになのはの姉・美由希に勉強を教える事もあるのは余談である。

「一般人があれに巻き込まれたら、ひとたまりも無いぞ！早く見つけなければ！」

「はい！」

バルディツシュの言葉の通り、左に方向転換する3人。

スターライトブレイカーの発射まで、最早殆ど猶予は無い。

その証拠に闇の書の意志は、ゆっくりと右腕を前に突き出そうと
していた・・・

*

その300ヤード先では・・・

なんと、すずかとアリサがいた。

どうしてかは解らないが、結界内に取り残されてしまったらしい。

「やっぱり誰もいないよ！急に人がいなくなっちゃった・・・辺り

は暗くなるし、
なんか光ってるし！一体何が起きてるの!？」

結界内に入ってしまった為、辺りは誰もいない。

上空には、闇の書の意志が発射しようとしているスターライトブレイカーが見える。

こんな事は、当然ながら今まで経験した事が無いのだ。

「とりあえず、逃げよう！なるべく遠くまで！」

「う、うん・・・!」

すずかの手を引いて走り出すアリサ。

今は、この場を離れるのが先決だと思った。

どちらにせよ、ここですじっとしていても仕方ないのだ。

【Distance・・・seventy, sixty, fifty・・・】

「なのは、輝二、この辺」

「うん」

「分かった」

フェイトが反応が近い事をなのはとガルムモン^{輝一}に伝える。
なのはとフェイトは地上に降り、ガルムモンも急停止する。
3人は周囲を見回して、それらしい人影が無いか探す。

【Twenty , e i g h t e e n . . .】

「えっ……？」

3人は動きを止めているにも拘らず、対象との距離がどんどん縮まっているのだ。

ふと、なのはの視線の先に……2人の人影が映った。

「あの、すみません！危ないですから、そこでじっとしてて下さい
！」

「えっ？」

「今の声って……！」

辺りには、なのはやガルムモンが急停止した時の地面の摩擦で発生した煙が上がっている。

その煙が晴れると……なのはとフェイトの姿がはっきりと映った。

「なのは……？」

「フェイトちゃん・・・？」

「・・・！！」

呆然とする4人。ガルムモンも、驚愕の表情を隠せない様で、その場で固まっている。

更に、衝撃はこれだけでは無かった。

ブウン・・・ドシャツ

「ぐおっ！？腰打った・・・」

突然、なのは達とアリサ・すずかの間が歪み、そこから1人の男性が降って来たのだ。

それは・・・砂漠の世界から戻って来た龍輔だった！

「りゅ、龍輔さん！？」

「お？やあ、輝二君」

今度は輝二が声を上げる。

なのは達は、呆然としたまま龍輔を見ていた。

龍輔は腰をさすりながら、ガルムモンに声をかける。

「つて、呑気に挨拶してる場合じゃなかった！龍輔さん、すぐに防御態勢を！」

「おおー！？なんかヤバそうだねえ・・・」

ガルムモンが我に返り、龍輔に防御態勢を取る様に言う。
今にもスターライトブレイカーが発射されようと言う状態だからだ。

龍輔はそれを見て、咄嗟に左のD・ブレスのコマンド【2 / 0 / 1 / 0 / ON】を押す。

そして、再びブレードドラモンへと進化した。

「スターライト・・・ブレイカー」

なのは達はその事に驚くが・・・それと同時に、闇の書の意志が遂にスターライトブレイカーを発射した！
それと同時にブレードドラモンが前に出る。

「君達、おっちゃんの後ろに来な！そこで防御魔法を！」

「え！？で、でも・・・！」

「言う通りにした方が良い！龍輔さんなら大丈夫だ！」

ブレードドラモンの言葉に戸惑うのはだったが、ガルムモンに
言われて後ろに回る。

そしてガルムモンは、アリサとすずかを庇う様に前に立つ。

それを確認したブレードドラモンが、D・ブレスのコマンド【0、
1、ON】を打ち込む。

【zero, one... MAXIMUM CHARGE】

すると、激しくも優しい光がブレードドラモンから放たれ、その
場にいる全員を覆う。

【Protect ray】

それと同時にスターライトブレイカーが、地上に向かってレーザ
ーの様に落ちた。

着弾地点を中心に桜色のエネルギー波が巨大化して轟音を響かせ、
なのは達の元に迫る。

【Defenser plus】

フェイトがバルディッシュのカートリッジを2発消費し、アリサ
とすずか、ガルムモンを

覆うように防御魔法・ディフェンサープラスを発動し、更に前に降
り立ってシールドを展開する。

フェイトの前にいるのはも、カートリッジを2発消費して防御魔法・プロテクションを使用する。

「レイジングハート！」

【Wide area protection】

ブレードドラモンの【プロテクトレイ】、なのはの【ワイドエリアプロテクション】、フェイトのシールドに【ディフェンサープラス】、更に後ろではガラムモンが立っている。

アリサとすずかの前には、実に5段重ねの防御態勢が出来上がっていた。

その直後、桜色の光が彼ら全員を飲み込む。

驚いた事に、スターライトブレイカーは予想以上に威力が衰えていなかった。

「ふんぬううああっ！」

「ふえ・・・！？」「嘘・・・！」

だが、なのはとフェイトはもっと驚いていた。

なんと、自分達の前にいるブレードドラモンの【プロテクトレイ】が、衝撃を全て

受け止めていたのだ。

闇の書の意志の資質・・・【広域攻撃】の影響を受けて、距離を取っても威力が殆ど衰えていないにも関わらず、だ。

「ぬうおおおおお！！父親なめんなよおおおおお！！！！」

その言葉と何の関係があるかは解らんが、とにかく目の前の男はあの馬鹿魔力砲撃を防いでいる。

それに関して、なのはもフェイトも驚いている。

もっとも、ガラムモンは特に驚いた様子も無かったが。

「なのは！なのは、大丈夫！？」

「フェイト！？」

一方で、かなりの距離をとって退避していたユーノとアルフが、念話で呼びかける。

「うん、私達は大丈夫・・・！」

「アリサと、さすがが結界内に取り残されてるんだ！」

「エイミイさん！」

「うん、余波が収まり次第、すぐ避難させる！」

「はいっ！！！！」

エイミイが2人に呼びかける。
衝撃は全部ブレードドラモンが止めてくれているので、なのは達は全然無事なのだが。

「それにしても……いきなり出てきて進化した男の人……一体誰なんだろう……」

エイミイは、突如現れた龍輔に疑問を感じながら考えていた。もつとも、行動から察するに敵ではない事は確信している。

「あ、もしかして……彼が孝俊君の言ってた助っ人……!」

ふと、孝俊が言った言葉を思い出す。

【超強力な助っ人】……それならば合点が行った。

そして……漸く余波が収まった。

ブレードドラモンはシールドを消して、一息つく。

そして、警戒させぬ様に笑顔を見せて、なのは達の方に向き直る。

「ふうっ……みんな、大丈夫かい？」

「は、はい……えっと、あなたは……?」

「俺は……っ!?みんな伏せろ!」

フェイトに尋ねられ、ブレードドラモンは自己紹介しようとしたが、突如上を見上げて
声を荒げた。

上を見ると・・・なんと、コンクリートの塊が落下して来ていたのだ。

恐らく、今の砲撃で崩れたのだろう。
スターライトフレイカー

「とっあっ」

ブレードドラモンは、咄嗟に【3・8・1・9・ON】のボタンを押し、一気に飛び上がった！

【three・eight・one・nine・・・MAXIMUM
CHARGE】

ブレードドラモンの右足に、激しい光が宿る。
バチバチとスパークし、それがどんどん大きくなっていく。

【Dragon Spike】

「【ドラゴンスパイク】！！」

ギョオンッ！・・・バゴオオオオオンッ！

上空で渾身の飛び回し蹴りが、音を立ててコンクリートの塊に炸裂する。

その瞬間、コンクリートが粉々に碎け散った！

「ふいー……今度こそ大丈夫かな……？」

「は、はい……あの、あなたは……？」

着地して進化を解いて一息つく龍輔。

なのはは、戸惑いながらも頭を下げて礼を言う。
フェイトは、再び龍輔に名前を尋ねた。

「俺は龍輔……面林龍輔ってんだ」

「孝俊の親父さんだ」

「……ち、父親あああああああ！……！！？」

ガルムモンの言葉に、なのは、フェイト、アリサ、すずかは驚きの声を上げる。

目の前にいる男は、とてもそんな年齢には見えないからだ。
ぱつと見、20代半ばにすら見える。

「いや、おっちゃんこー見えても35だからね？」

「若っ！？17の息子いるのに35!？」

「って言うか30代にも見えないんだけど……」(汗)

年齢のカミングアウトに、更に驚いたアリサとすずか。

何せ、結婚するには法律上ギリギリの年齢なのだから。

「つて、それも驚いたけどなのは、フェイトこれってなんなの!？」

「いや、あの、今は危ないから流石に……」

「ええい黙らっしやい！簡単にでも良いから説明しなさいっ!」

「あ、アリサちゃん落ち着いて……」

ハツとしたアリサがなのは達に今の状況を尋ねる為に詰め寄った。
なのはが宥めようとするが、アリサは聞く耳を持たない。

隣では、すずかもアリサを落ち着かせようとしている。

「まあまあ、なんか状況を見るに今はヤバそうだからさ……事情を話すのはこれが

終わってからの方が良いんじゃない？」

埒があかないと思ったのか、龍輔が間に入る。

こう言う時に、大人の存在は役に立つのである。

「う、でも……」

「それに、戦いに巻き込まれたら怪我とか……最悪死ぬとかも考えられるんだしな。

だから、この件が終わったらじーっくりとO H A N A S H I
すればいいさ」

「龍輔さん、なんか言い方がおかしいですよ!？」

「うーん……そうね。この場は仕方ないから引いとくわ」

「そっだね」

「アリサちゃんとすずかちゃん納得しちゃった!？」

龍輔の言い方にツッコむフェイトだったが、アリサとすずかは納得する。

アリサとすずかが凄くいい笑顔をしてたのは多分気のせいだろう。
・ ・ ・ うん、きつとそっだ。

2、3歩下がった場所で、ガルムモンが心の中で合掌していたのは余談である。

『えっと・ ・ ・ 話はまとまったかな？ 転送するよー?』

「それだったら、俺も一緒に行こう・ ・ ・ この子達だけだと危ないかもしれない」

「そうですね・ ・ ・ デジモンの襲撃もあるかもしれないし」

エイミーが通信で呼びかける。

すると、龍輔がアリサとすずかの護衛を申し出たのだ。

それを聞いて、ガルムモンが頷いて龍輔の同行を薦めた。

間を置かず、アリサとすずか、そして龍輔を白い魔法陣が包み・ ・ ・ 転送したのだった。

続
く

第55話 何だかんだで親って凄い気がする(後書き)

はい、第55話終了です。

いつもよりちよつと長くなつてしまいました・・・(汗)

で、前書きで述べた質問ですが・・・

龍輔のヒューマンスピリットのデータは乗せるべきでしょうか？
ヒューマンスピリットの出番は、カーナーリ後になりそうなので

(汗)

龍輔「いやー、久々にハジケたね」

孝俊「無茶苦茶過ぎんだろ・・・(汗)」

孝昭「さてさて、今回はどうなるやら・・・」

次回、更に援軍が訪れる・・・予定です(何)

更に更に、新スピリットも・・・!

では、次回予告・・・久々にリンディさん、どうぞ〜

・リンディ「うーん・・・龍輔さんの若さの秘訣が気になるわねえ・・・

次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第56話【意外な人が
新戦力になる事もある気がする 前編】お楽しみに」

第56話 意外な人が新戦力になる事もある気がする 前編（前書き）

はい、第56話です。

もうこのぐらいのペースが固定されそうです・・・（汗）

そんでもって、今回少々長くなりそうだったので、前編に変更しました。

下手すりゃ【仲間が危機に陥ったら助けるのが普通な気がする】
以来の前・中・後と分かれる可能性も・・・（汗）

では、名言コーナーです。

・・・（広島カープ・衣笠祥雄選手の連続試合出場記録について野次を飛ばした人に対し）

人が何とか繋いで欲しいと思う所まで行ける人なんて殆どいないんだよっ

そこへもみんな辿り着けないの！繋げる所へ辿り着いた人だけが
見られる光景は自分の血の上に立って見る光景なんだよ
くやしかったら空ブリでもしてみろってんだーーーーー！！

（基町勝子 球場ラヴァーズ）

・・・最下位でも次はある 終わらない
だから次に行こうと思いつつ

まだうまく進めない 古い自分がいるのもわかってる
かさぶたなんてひっぺがせ その下にはもう新しい自分

（松田実央 球場ラヴァーズ）

- - (広島カープ・前田智徳選手をバカにした男に対し)
ばかにすんな 一生懸命をバカにすんな！
一生懸命を笑うな！ 好きな気持ちバカにすんな！
(下仁谷みなみ 球場ラヴアーズ)

- - ホントに大事なモンってのは、
もってる奴より、もってねー奴の方が、
しってるもんさ。

(坂田銀時 銀魂)

- - 道楽か… かもしれんね。
日一日と… 成長がはつきり見てとれる
この上ない楽しみだ。

(安西光義 SLAM DANK)

- - おめエチビのくせに色々苦しそうだで、
笑ったらええですよ！ 苦しい時は笑ったらええ。

(サウロ ONE PIRCE)

- - みんなとここにいた時間は、俺の宝だ！
俺の炎は、お前が支配するこの時代だからこそ生まれたみんなの炎
だ！

無闇に人を傷つけたために倒されることを、後悔しろ！！

(沢田綱吉【家庭教師ヒットマンReborn】)

「そりゃ確かに……未来は……怖くて……心から嬉しい時間なんてほんのちよつと
だけだったけど……今なら……今なら……少しわかってきた気がするんだ……。」

「……いいとか悪いとかじゃない……未来こゝろでのことは……全部大事なオレの時間だって……」

（沢田綱吉【家庭教師ヒットマンreborn】）

拓也「球場ラヴァーズ3連発か」

輝二「カープファンには嬉しい名言だな」

孝俊「はてさて……こつちの世界に親父もやって来てどーなる事やら（苦笑）」

リンディ「じゃあ、第56話……始まります」

第56話 意外な人が新戦力になる事もある気がする 前編

砂漠で倒れ、絶体絶命の危機に陥った孝俊。

だがその時、孝俊の父・龍輔が救出の為に駆けつけた。

現役の戦士達を遥かに凌ぐその実力は、150体いたデジモン達を、僅か数分で全滅させてしまった。

しまった。

一方、地球では遂にはやてが闇の書の意志に覚醒してしまった。

その圧倒的な力は、広範囲を高威力で攻撃する事が出来、更にはなのはとフェイト、

そしてヴォルフモンの同時攻撃すら防御・相殺してしまう程だった。

更に闇の書の意志は、前になのはのリンカーコアを蒐集した事によりコピーした、

スターライトブレイカーを撃とうとする。

距離を取って回避、または防御しようとするなのは達。

だが、何故か結界内に取り残されたアリサ・すずかと出くわし、更に砂漠の世界から

駆けつけた龍輔にも出会う。

龍輔は防御技【プロテクトレイ】でスターライトブレイカーを防ぎ切り、更にその衝撃で

崩れて来たコンクリートの塊にいち早く気づき、【ドラゴンスパイク】で粉碎する。

なのはとフェイトに状況を説明するように問い詰めるアリサだったが、龍輔の仲介に

よってこの件が終わってからと言う事で納得した。

そして龍輔は、アリサとすずかの護衛の為、共に転送されて行く

たのだった・・・

*

エイミーによって転送された龍輔・アリサ・すずかは・・・港に降り立っていた。

すると降り立つと同時に、龍輔がその場に座り込む。

「だ、大丈夫ですか？」

「ふうー・・・ちつと無茶し過ぎた・・・やっぱり年には勝てねーや」

心配そうに尋ねるすずかに笑顔で返す龍輔。

龍輔は圧倒的な攻撃・守備を誇るが・・・1つだけ弱点があった。

年を重ねる度に、攻撃・守備などの技術力は進化していった。

しかし、龍輔を含む先代は、子供達が生まれるまで長きに渡る激しい戦いを経験している。

そして、子供達が生まれてからは戦う事も少なくなり・・・寄る年波もあって、スタミナだけが徐々に落ちて行ったのである。

圧倒的な実力を誇る龍輔は、特にエネルギーの消費が激しいのだ。

100体以上を一気に薙ぎ払った【コスモスラッシャー】。

光速で動き回り、瞬時に複数の敵を斬り裂く【サウザンドストラ

イザー】。

スターライトブレイカーを防ぎ切った【プロテクトレイ】。
直後にコンクリートを蹴り碎いた【ドラゴンスパイク】。

そう時間も経たない内に、必殺技4つを使用しているのだ。

孝俊達くらいの年齢ならば苦も無いのだが・・・龍輔も既に35
歳、流石にしんどい。

もっとも、小さい頃からずっと鍛えていた賜物か、回復力もかな
り早かったりするのだが。

「流石にノーリスクとは行かないのね・・・」

「はは・・・若い頃ならこれぐらい何でもなかったんだけどねえ」

アリスも腰に手を当てて、心配そうに龍輔を見ていた。
龍輔も流石に年を痛感している様で、苦笑いしている。

『クク・・・そう言う事ならば好都合だな・・・』

「「「!?!?」「」」

ふと、何処からか声が響き、3人が辺りを見回す。

すると上空に・・・今まで姿を消していたデスモンがいたのだ！

「先程ムゲンドラモンが焦って逃げ帰って来たから警戒しておった

が・・・体力切れならば好都合よ・・・」

デスモンが何やら合図をすると・・・そこからまたも大量のデジモンが現れた！

しかも、孝俊の時とは違って究極体の姿も見られるではないか。

*

メタルエテモン 究極体 サイボーグ型 ウィルス種

必殺技 バナナスリップ

(バナナの皮を投げ、敵を転ばせる)

ラブセレナーデ

(相手の戦意を喪失させる歌を歌う)

得意技 メガパンチ

(強烈なパンチ)

ヘビーマンキック

(体を白い光で包み、強烈なキックを繰り出す)

かつて“キング・オブ・デジモン”と呼ばれていたエテモンが、自らの弱点を研究して改善・進化した姿。

“クロンデジゾイドメタル”という金属でフルメタル化した事でより強力になり、究極の

戦闘マシーンとなった。

ボルトモン 究極体 サイボーグ型 データ種

必殺技 トマホークシュタイナー

(背中に背負った巨大なバトルアックスを投げつける)

得意技 暴走

(その名の通り、暴走する)

アンドロモンと同じ時期に作られたサイボーグ型デジモン。

こちらは肉体をベースに作成され、サイボーグ型だが意思や感情がある。

だがアンドロモンに比べてコントロールしにくく、暴走してしまつたため、その存在を

闇に葬られていた。

巨大な斧“バトルトマホーク”を持っている。

グランクワガモン 究極体 昆虫型 ウィルス種(データ種も存在)

必殺技 デイメンジョンシザー

(巨大なハサミから、敵どころか周囲の空間ごと切り裂くエネルギーを射出)

得意技 ゾーンブラックホール

(2本のハサミの間にブラックホールを作り、相手を飲み込む)

グランデススクリュー

(体を回転させ敵に突撃する)

昆虫型の中でも特に危険なデジモンで、出会ってしまったら最後、一瞬で消されて

しまうため、別名「深き森の悪魔」とも呼ばれている。

デジタルワールドの森林の奥深くに生息していて普段は夜しか活動しない。

ヘラクルカブテリモンは最大の宿敵。

*

「ちっ、こりゃあ・・・まずいかね・・・」

「な、なんなのよこのデタラメな数は！」

アリサとすずかを庇うように前に出る龍輔。

進化出来ない事もないが、体力切れを起こした今の状態では、満身に戦えるかどうかも怪しい。

「くくく・・・いくら貴様でもこの数+究極体3体を相手に出来るかな・・・?」

デスモンの勝ち誇ったかの様な声が響く。

アリサは恐怖を押し殺しながら龍輔にしがみ付き、デジモン達を睨みつける。

すずかもまた、恐怖で泣きだしたいのを必死に堪えながら、龍輔にしがみついている。

「おっと、お前達はすぐには出るな。メインは最後の方が良からう」

「ふん、お前の言う事を聞くのも癪に障るが、デーモン様からお前の指示に従えと言われているからな・・・良いだろう」

「アチキはどっちでも構わないけどねえ」

「ギギギ・・・！」

ボルトモン、メタルエテモン、グランクワガーモンがデスモンに制止される。

ボルトモンは不満そうだが、首領のデーモンから言い付けられている為、指示を守る。

メタルエテモンは特に気にする様子もなく、ゆっくりと後ろに下がる。

グランクワガーモンは言葉を発せないで良く解らないが、理解はしたようで他の2体と

同様に、後方へと下がって行く。

「貴様の様な実力者が出て来た事には少々焦ったが・・・それもこ

「こまでだ・・・！」

デスモンの部下のデジモンの大軍が、じわじわと龍輔達に迫る。前にはデジモン、後ろには海・・・もはや打つ手は無いかと思われたその時・・・！

「「そうはさせない！」」

突如、龍輔達の前の空間が歪むと・・・そこから2人の少年が現れたではないか。

しかもその2人は・・・龍輔が良く知る人物だった。

1人は黒髪で、緑色のジャケットを羽織り、黒いジーンズをはいている。

そして、輝二と良く似た顔立ちをしていた。

もう1人は、少し幼い印象を受けるが、それでも背は低くは無い。黄色い帽子を被り、白いTシャツに水色のジャンパーを羽織っている。

「輝一君！それに友樹君も！」

輝二の双子の兄・木村輝一と、氷見友樹が駆け付けたのだった。アリサとすずかはキョトンとしているが、龍輔は安堵の表情を浮かべる。

「しかし、来てくれてありがたいが・・・どうして？」

「夏紀さんに頼まれたんですよ」

「【りゅーすけが1人で行っちゃったから、お手伝いしてあげて？
ってね」

何ともナイスなタイミングで飛び込んで来てくれた2人に尋ねる
龍輔。

2人は龍輔の妻・夏紀に頼まれてこの世界に飛び込んだのである。

尚、お願いして来た夏紀の上目遣い&涙目に、2人がノックアウトされたのは余談だが（夏紀は背がちっちゃく、殆ど老けてないの
で下手すりゃ小学生に見えてしまう）。

「夏紀さんが・・・そうか、ありがとな」

「ここは僕達が！」

「龍輔さんはその子達をお願いします！」

そう言って、輝一は黒と灰色の、友樹は水色と緑のD-スキャナ
を取り出す。

2人が左手を構えると、デジコードが現れる。

「スピリットエボリューション!!」

そして・・・それをD・スキャナでスキャンし、叫んだ。

「レーベモン!」「チャックモン!」

そこから現れたのは・・・黒い獅子を基調とした鎧に身を包んだ騎士。

そして、ランチャー砲を装備した小さい白熊の様なデジモンだった。

*

レーベモン ハイブリッド体 戦士型 バリアブル種

必殺技 エーヴィツヒ・シュラーフ

(槍を振り回し、敵を貫いたり薙ぎ払ったりする)

インテンススイフ・エントリヒ・メテオール

(エネルギーを溜め強化されたエントリヒ・メテオール)

得意技 ドウンケル・ラケーテ

(ダッシュから飛び込み蹴りをあびせる。ドイツ語で暗い口ケットと言う意味)

エントリヒ・メテオール

(ライオンの顔をした腹の口から闇の光線を放つ)

伝説の十闘士「エンシエントスフィンクモン」の力を受け継いだ、闇の属性を持つ

戦士型デジモン。

正義を貫く暗黒騎士でエンシエントスフィンクモンの尻尾の形をした槍と顔の盾を持つ。

闇の力を持つが、上記のように正義を貫いており、同じ闇属性に対して特に相性が良い。

その相性の良さは、Wスピリットの技を受けてもビクともしなかったケルビモン(悪)に分身だったとはいえ、結構なダメージを負わせた程。

チャックモン ハイブリッド体 獣人型 バリアブル種

必殺技 スノーボンバー

(ランチャー砲「ロメオ」から超氷結の雪玉を撃ち出す)

ツララララ

(体を溶かし、ツララ状に変形させて突撃)

得意技 カチカチコッチン

(敵をカチカチに凍らせる息を吐き出す)

Vジャンプアタック

(スキー板を装着し、V字にジャンプしながら敵に突撃する)

ツララパンチ

(硬い氷に覆われた拳で攻撃する)

伝説の十闘士“エンシエントメガテリウモン”の力を受け継いだ、氷の属性を持つ

人型デジモン。

サバイバル知識が豊富で、自称“ポラー軍”極地区防衛部隊所属の軍曹。

様々な雪玉を発射するランチャー「ロメオ」を装備。

初めて進化した当初は非力だったが、現在は友樹自身が成長した事もあり、格闘術にも長けている。

雄人が進化するメガトータモンとは親友で、コンビを組むとなかなか強力。

*

「おのれ、伝説の十闘士か・・・！」

「俺は闇の闘士・レーベモン・・・お前達にこれ以上好き勝手はさせん！」

「僕は氷の闘士・チャックモン・・・僕達が相手だっ！」

レーベモンとチャックモンを見て顔を歪めるデスモン。

2人はそれぞれ武器を構えて、デジモン軍団を見据える。

「ええい、こうなればお前達ごと葬ってくれ・・・かかれい！」

デスモンの号令と共に、成長期から完全体までの大量のデジモンが襲って来る。

だが、レーベモンは焦らずにその場に踏みとどまって腕をクロスし、力を込める。

すると、レーベモンの体の筋肉が若干だが膨張し・・・勢い良くクロスした腕を開く。

「【インテンズイーフ・エントリヒ・メテオール】ッ！」

レーベモンの胸部にあるライオンの口から光線が勢い良く発射されると、成長期や

成熟期と思われるデジモン達が次々に吹っ飛んで行く。

「行けえ！【スノーボンバー】！！！」

チャックモンが自身の武器であるランチャー砲・【ロメオ】から、超氷結の雪玉を次々と撃ち込んで行く。

雪玉とはいえ、スピリットを受け継いだデジモンの必殺技である。成長期や成熟期がともに喰らってはタダでは済まない。

その証拠に・・・成長期は軽々と吹っ飛ばされ、成熟期もフラフラになっている。

しかし、完全体と思われるデジモン達はダメージを受けながらも突き進んで来る。

更には・・・隙についてアリサやすずかに襲いかかろうとする者もいた！

「しまった！？数が多過ぎて手が回らなかったかっ！」

「ま、まずい・・・！龍輔さんはまだ体力が・・・！」

焦りの声を上げるレーベモンとチャックモン。

だが、その時・・・龍輔達の後方の海上で真っ赤な閃光が煌めいたと思うと・・・

その赤い光が勢い良く飛び込んで来た！

「ブラスタアアアーーーーーキイイイーーーーーック！
！！！」

それは・・・ブーストフォームを発動させ、必殺の【ブラスタキック】で飛び込んで来た、孝昭だった！

本局から出勤し、漸く現場に辿り着いたのである。

ズドオオオオオンッ！

「グギャアツ!？」

孝昭の【ブラスターキック】をモロに喰らったデジモンは地面を数回バウンドした後、消滅して果てた。

流石に、かつて傀儡兵20体をまとめて貫いた程の破壊力を誇っただけの事はある。

「ふう、何とか間に合ったか・・・」

見事に着地を決め、デジモンの大軍を見据える孝昭。すると、その横に魔法陣が展開されたかと思うと・・・今度は高
雄が現れる。

「お、龍輔さん!それに輝一に友樹も!」

「おおつ、高雄君か!」

「高雄!」「高雄さん!」

高雄の姿を見て、笑顔を見せる龍輔。

レーベモンとチャックモンも安堵の表情を浮かべ、高雄を見る。

「・・・状況はあんまりよろしくない・・・か。究極体までいるみてーだし」

「ああ・・・それに数も多い。この数を相手にするのは骨が折れるぞ」

まだまだ大量に存在しているデジモンの大軍。

それを見て溜息混じりに離す高雄と、注意するよう呼び掛ける龍輔。

だが、高雄は笑みを浮かべ・・・

「大丈夫です。孝俊がもうすぐ回復してこっちに向かうそうですから」

高雄と孝昭は、本局からアースラを経由してここに駆け付けた。

ちなみにクロノは、なのは達の方に向かってる。

アースラを経由する際、リンディから孝俊が回復中である事を聞いたのだ。

「あいつと共にこの世界で戦う事を・・・俺はどれだけ待ったか」

「俺も高雄と同意見だ。それにあいつと一緒にいるとおもしろいかな」

高雄と孝昭は、孝俊と一緒に戦える事を待ち望んでいた。

特に高雄。思えばこの世界に飛び込んだ時、どういつワケか孝俊とはぐれてしまった。

それから約3週間・・・孝俊とは離れ離れになり、1度しか顔を合わせていない。

特に、生まれた時から孝俊と一緒にいる高雄にとっては、隣に孝俊がいない戦いなど考えられない位である。

孝昭も半年前に初めて出会い、初対面で意気投合して友人となり、今でも孝俊の事は大事な仲間であり、親友だと思っている。

そんな2人を見た龍輔は・・・

(孝俊は本当に良い友に巡り合えた・・・特に高雄君の存在は大きい。感謝するぜ・・・虎鉄)

息子をこれ程想ってくれる存在を嬉しく思っていた。

そして高雄の父であり、自らの親友でもある四谷虎鉄に心の中で感謝するのだった。

(さて、後はオフアニモンから渡された新スピリットの使い道を考えなきゃな・・・)

龍輔のD・ブレスの画面には、2種類のスピリットが映っていた。

・
・
かつてオファニモンが言っていた、新しい特殊型スピリットが遂に完成し、それを龍輔に託していたのだ。

使い道をどうするか・・・龍輔は考え込むのだった。

*

その頃、なのはとフェイト、そしてヴォルフモンはアリサ達が転送されて行った先を見ていた。

ちなみにヴォルフモンは、先程ガルムモンからスライドエボリューションしている。

「・・・見られちゃったね」「・・・うん」

「・・・大丈夫だ。あの2人はお前達の友達だろう？ちゃんと話せば解ってくれるさ」

ヴォルフモンは2人を励ますように、優しく語りかける。

ただ、アリサとすずかが物凄いイイ笑顔をしていた事が頭から離れず、内心不安ではあったが。

「そう、ですね・・・！」

『なのはちゃん、フェイトちゃん、クロノ君から連絡！闇の書の主

に・・・はやてちゃんに投降と停止を呼びかけてっ！』

ヴォルフモンの言葉に頷くなのはとフエイト。

すると、そこにエイミィから連絡が入る。

闇の書の意志に投降と停止を呼びかける様にと、クロノからの言
伝があつたのだ。

『はい！・・・はやてちゃん、それに闇の書さん！止まって下さい
！ヴィータちゃん達を

傷付けたのは、私達じゃないんです！』

『シグナム達と、私達は・・・！』

「我が主は、この世界が・・・自分の愛する者達を奪ったこの世界
が、悪い夢であつて

ほしいと願つた。我はただ、それを叶えるのみ。主には穏やかな夢
の内で永久の眠りを。

そして、愛する騎士たちを奪った者には永久の闇を」

「闇の書さん！」

「お前も、その名で私を呼ぶのだな」

「えっ・・・？」

なのはが闇の書と呼ぶと、闇の書の意志は、少し悲しそうな顔を
する。

だが、すぐに表情は元に戻った。

闇の書の意味が足元に魔法陣を展開すると、辺りに地響きが起こる。

すると地割れが起こり、その裂け目からかつてシグナム達がリンカーコアを蒐集した生物を思わせる触手が多数現れ、なのはとフェイトをあっという間に縛り上げて拘束してしまった。

「くっ！これも蒐集した生物の力か……！」

ヴォルフモンは、自分に近付いて来る触手をビームソードで斬り裂いて凌いでいた。

だが、あまりに数が多く、なのはとフェイトを助けに行く余裕が無い。

「それでも良い……私は……主の願いを叶えるだけだ……」

闇の書は、淡々とした口調で答える。

それを聞いたなのはは、触手に締めあげられながらも口を開く。

「願いを、叶えるだけ？そんな願いを叶えて、それで！はやてちゃんほントに

喜ぶの！？心を閉ざして、何も考えずに主の願いを叶えるための道

具でいて、

あなたはそれでいいの!？」

「我は魔道書。ただの道具だ」

「だけど、言葉を使えるでしょ!？心があるでしょ!？そうでなき
やおかしいよ!

ホントに心が無いんなら・・・泣いたりなんか、しないよお!」

「この涙は、主の涙・・・私は道具だ・・・悲しみなど・・・無い」

闇の書の意志はなのはの言葉を否定する。

しかし、涙は未だにあふれ続けており・・・なのはは納得できな
かった。

『おいおい、そりゃ無いんじゃないか?んな顔で言われたって説得
力なんかありやしねーぜ?』

ふと、闇の書の意志の真下にあるビルの屋上から、声が響いた。

その声の主は・・・なのは達が良く知る男だった。

「お前は・・・」

「……通りすがりの高校生だ。だいぶお節介焼きだがな」

そう、アグニモンに進化した拓也が、闇の書の意志を見上げていたのだった。

その眼は……何か決意を込めているように、彼女を見据えていた……

拓也復活！

続く

第56話 意外な人が新戦力になる事もある気がする 前編（後書き）

はい、第56話終了です。

輝一&友樹が駆けつけ、拓也も戦列に復帰しました。

高雄と孝昭も加わって、ここからが本番と言ったところですよ！

そして、チラツと出て来た新スピリット・・・一体どうなるかは・

・・・次回かも（何）

では、次回予告・・・オファニモン、どうぞー

オファニモン『ここからが本番ですね・・・』

次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第57話「意外な人が新戦力になる事もある気がする 後編（仮）」お楽しみに！』

第57話 意外な人が新戦力になる事もある気がする 後編（前書き）

はい、第57話です。

色々設定してて投稿が遅れてしまいました（汗）。

何とか詰め込んだので、どうにか前後編で2つに分ける事が出来ました・・・（苦笑）

今回、とうとう新スピリットのお披露目です。

あと、名言コーナーはお休みします（後から追加する可能性もあり）

孝俊「さてさて・・・新スピリットの正体は何だろうか」

オファニモン』では、第57話・・・始まります』

第57話 意外な人が新戦力になる事もある気がする 後編

アリサ、すずかと共に港に転送された龍輔。

寄る年波のせいも、スタミナ不足でその場に座り込んでしまう。

そこを狙う様に、デスモンがデジモンの大軍を呼び出して龍輔達を襲わせようとするが、

駆けつけて来た輝一と友樹によって阻まれる。

アリサ達を襲おうとしたデジモンも、更に駆け付けた孝昭の【ブラスターキック】で

撃墜され、直後に高雄も港に転送されて来た。

総力戦の様相を呈して来た一方、闇の書の意志と向かい合うのは達は説得を試みる。

だが、闇の書の意志はそれを聞き入れず、なのはとフェイトを触手で捕縛してしまう。

自分は道具で、悲しみなど無いと言い放つ闇の書の意志。

だが、そこに・・・アグニモンとなった拓也が現れた・・・！

*

上空からゆっくりと降りて来る闇の書の意志。

そして、アグニモンから数Mの地点に着地する。

「・・・闇の書・・・いや、夜天の魔導書さんよ。こんな事もうや

めにしねーか？」

「！……私は……止まらない……だからせめて……主だけでも……安らかな夢の中に……」

闇の書ではなく、本来の名である夜天の魔導書と呼ばれ、彼女は少しだけ目を見開く。

しかし、すぐに無表情になってアグニモンの言葉を拒否する。

「……おい……」

ソワッ

(な、なんだ……この悪寒……は……？私が……怯えてる……？)

だが、彼女は次の瞬間アグニモンが発した声に身震いしていた。そのあまりの威圧に、1歩後ずさってしまいう程に。

アグニモンの発する威圧は……今までのどんな状況よりも凄まじい物だった。

彼女をこんなにしてしまった歴代の持ち主に対する怒り。

止まれなくなってしまう彼女に対する悲しみ。

力ばかりに依存する醜い奴らに、アグニモンはやり場のない怒りを感じていた。

「逃げてんじゃねーよ……夢は逃げる場所じゃねーんだ」

(この男……測り知れん……本当に人間なのか……?)

静かに語り続けるアグニモン。

アグニモンが発し続ける威圧感に冷や汗を流す闇の書の意志。

「この世界の破壊に穏やかな永久の眠り……んな事、はやてちゃん
は望んじゃいねえ」

「それでも……私は止まらない……アグニモン……お前とは
出来れば戦いたくは無い」

「俺だつて出来るなら戦いたくねーよ。だがな、このまま黙つてた
ら孝俊に怒られちまうんでな」

「孝……俊……我が主や鉄槌の騎士、湖の騎士が愛おしく想い、
烈火の将と盾の守護獣が
友と認めた男か……」

アグニモンとは出来れば戦いたくは無いと言う闇の書の意志。

無論、アグニモンとて戦いたくは無い……だが、目の前にいる
のは仲間孝俊が大切に想う
もう1つの家族。

このまま放つておいて暴走させてしまつては、申し訳がたたない。

「それに・・・1つ俺も決めた」

「何・・・？」

アグニモンはフツと笑顔を浮かべる。

そして、意外な一言を放った。

「アンタを止めて、その泣き顔を笑顔に変えてやるよ。美人は笑顔が一番似合うからな」

「・・・」

アグニモンの言葉に、理解出来ないと言った表情をする闇の書の意志。

しかし、アグニモンは至って真面目である。

「バリアジャケット・パージ！」

【S o n i c f o r M】

フェイトがバリアジャケットを爆破させて触手を吹き飛ばすと、
なのはと共に拘束から
逃れ、同時にソニックフォームを起動させる。

「悲しみなど無い？拓也も言ったけど・・・そんな言葉をそんな悲しい顔で言っただって、
誰が信じるもんか！」

「あなたにも心があるんだよ！悲しいって言っただけだよ！」

「そうだ！お前のマスターは・・・はやてちゃんはそれに応えてくれる優しい子だ！」

フェイト、なのは、ヴォルフモンも、必死に闇の書の意志に呼びかける。

すると、それが届いたのか・・・彼女は無言で反応を見せなくなった。

先程までは何を言おうと否定していたにも関わらず、だ。

だが、再び辺りに地響きが起こり、火柱がそこらじゅうから立ち昇る。

3人がいくつものそれに驚き、見回していると闇の書の意味が何やら呟き始めた。

「早いな・・・もう崩壊が始まったか。私も直、意識を無くす・・・
そうなればすぐに暴走が始まる。意識のある内に主の望みを叶えた

い
「

闇の書の意味はブラッディダガーを各8発ずつ発動させる。
それがなのは、フェイト、ヴォルフモン、そしてアグニモンを包
囲した。

「闇に、沈め」

ドオオオオン！！

次の瞬間、4人を中心に爆裂し、爆煙が発生する。
煙が晴れるとそこに三人の姿は無く、少し後方にフェイトがな
はを引つ張って回避していた。
ヴォルフモンとアグニモンも瞬時に飛び上がってかわしており、
ダメージは無かった。

「この・・・駄々っ子・・・！！」

すると、アグニモンが巨大な炎の竜巻と化す。
しかも、今まで発動させた物よりも更に大きくなっていた。

「言う事を・・・聞けえええっ！！」

アグニモンが闇の書の意志に迫る。
闇の書の意志は一瞬だけ表情を険しくするも・・・淡々と眩く。

「お前も・・・我が内で・・・眠ると良い」

「うおおおおおおっ！！【サラマンダーブレイク】ッ！！」

ドコオオオオンッ！ビシビシッ・・・

アグニモンが、渾身の【サラマンダーブレイク】をぶち込む。
闇の書の意志は、障壁で防御するも・・・その障壁にはヒビが入っていた。

『吸収』

「全ては・・・安らかな・・・眠りの内に・・・」

だが、それと同時に・・・アグニモンが突如意識を失う様に落下を始める。

アグニモンを赤い光が包みこんだと思うと・・・その姿が・・・弾けるように消滅した。

「た、拓也・・・さん・・・」

「拓也あああああああああつ！！！！」

闇の書はアグニモンを吸収し・・・その頁を閉じた。
呆然とするのはとフェイト、そしてヴォルフモンの叫びが虚しく木霊した・・・

*

同じ頃、港では・・・レーベモン・チャックモン・そして高雄が進化したグレンモン・
バーニングブロスを構えた孝昭がデジモン軍団と激戦を繰り広げていた。

「【エーヴィツヒ・シュラーフ】！」

レーベモンは、杖で敵を薙ぎ払う。
その杖使いは、ヴォルフモンの剣戟に匹敵する。

「【ツララパンチ】！」

チャックモンは固い氷に覆われた拳で、敵を次々と殴り飛ばす。
かつての冒険から6年、成長した友樹はもはや非力などでは無い。

「【スージーQ】！！！」

グレンモンはその燃える拳を大型のデジモンに叩き込み、撃沈する。

更に、その近くにいた巨大な樹木のようなデジモン、ジュレイモンのツタを引き千切ると・・・

ヒュンヒュンヒュンッ！

「おらおらおらあっ！即席のツタヌンチャクだぜい！」

ビシッ！バシッ！バチィッ！

ツタをヌンチャクの如く、変幻自在に振り回しながら敵を薙ぎ払うグレンモン。

だが、何事も調子に乗り過ぎるのは良くないのであり・・・

ヒュンヒュンヒュンヒュン！・・・ベチンッ！

「ぐおっ！？か、顔打った・・・」

調子に乗って振り回していたものだから、首の後ろにヌンチャクを回した際に顔面に

ヒットしてしまったのだった。

鞭の様なツタが勢い良く顔面にヒットすればこれは痛い。

「うわぁ・・・」「い、痛そう・・・」
「ま、まあ、あれも高雄君らしいっちゃらしいわな・・・」

後ろで見ていたアリサとすすかは顔を引きつらせ、龍輔は苦笑いしていた。

「やっぱりこいつ孝俊と似てんなぁ・・・」

孝昭はバーニングプロスを大剣の【カリバーフォーム】にして敵を薙ぎ払いながら、
微妙に締まらない高雄を見て呟いていた。

*

・・・と、まあそんなこんなで敵と戦い続ける4人。
時間を稼げば、龍輔も回復して参戦出来る。

更には孝俊ももうすぐ駆け付けると来ている・・・4人の士気は下がる事知らない。

一方で龍輔は、自分のD-スキャナをチラチラと見ている。
その中に見える、新たなスピリットをどうするか未だに考えているらしい。

ふと、龍輔の後ろからアリサの呟きが聞こえた。

「・・・ねえ、さすが・・・私達・・・見てるしか出来ないのかな・・・」
「アリサちゃん・・・」

アリサは、ただ守られて見ているだけの自分に、苛立ちを覚えていたのだ。

それに、先程のなのはとフェイトの事もある。

無論、なのはとフェイトの事は信じている・・・が、何処か置いてけぼりを喰らったような感覚を持っていた。

すずかもアリサ程ではないが・・・自分達がなのは達の気がかりになってしまった事を悔やんでいた。

その為、アリサの言葉に何も言い返す事が出来なかったのだ。

「あたしにもなのはやフェイト、拓也さんみたいな戦う力があれば良いのって・・・足を引く張りがなくて・・・今、そう感じてる」

「それは・・・私も同じだよ・・・私だって、出来ればなのはちゃん達を直接お手伝いしてあげたいよ・・・」

2人の目には・・・うつすらと涙が浮かんでいた。それを見た龍輔は・・・しゃがんで2人にある言葉を投げかけた。

「だったら・・・戦ってみるかい？」

「・・・えっ・・・？」

“戦ってみるか”・・・その言葉に、目を丸くする2人。

龍輔は、自分のD・ブレスの画面を2人に見せる。

そこには・・・太陽を模したマークと、月を模したマークが描かれたスピリットがあった。

「新しい特殊型スピリット・・・【太陽】と【月】だ」

「太陽と・・・」「月・・・」

全てを温かく照らす太陽の炎。

それとは対照的に、全てを冷たく癒す月の光。

三大天使と高雄が全力を尽くし、製作に約半年を費やした、最新鋭のスピリットである。

「本当は、他のスピリットの強化ブースター代わりに使っつもりだったんだが・・・」

やはりスピリットは進化する者がいてナンボだからね」

「スピリットを……」「私達が……」

2つのスピリットをまじまじと見つめ、呟く2人。

出来れば戦いたい……そう思うが、やはりいざ戦うとなると恐怖は拭えない。

すると、2人の想いに呼応したのが、2つのスピリットがD・ブレスから浮かび上がり、
2人の周りをゆっくりと浮遊しながら回り出した。

「この場は俺達が押さえる。少し考えて決めると良いさ」

龍輔はそう言うと、三度ブレードドラモンに進化し、戦場に飛び込んで行った。

体力はある程度戻っているらしく、成熟期のデジモンを軽々と薙ぎ払っているのが見える。

*

「……………」

自分達の周りを飛び回るスピリットを見つめるアリサとすずか。
その表情は、不安一色だった。

ふと、2人の後ろから……いつの間にか現れた友樹が声をかけた。

ちなみに、進化は解いている。

「・・・怖い？」

「「・・・」」

友樹の問い掛けに、ゆっくりと首を縦に振る2人。
そんな2人に、友樹は優しく笑いかけ、話しかける。

「君達、今何年生？」

「えっと・・・3年生です。聖祥大付属小学校の」

「そっか、じゃあ僕と一緒にだ。僕も初めて戦ったのは小学3年生の時だったからね」

「そうなんですか・・・？」

友樹は初めてデジタルワールドを訪れた時は、今の2人と同じ小学3年生だった。

その為、2人の今の気持ちも何となく解るのだ。

「僕、あの時は泣き虫で臆病で・・・いつも拓也さん達の背中に隠れてばかりだった。

それでも・・・ある事が出来れば・・・スピリットは応えてくれた」

「ある事・・・?」

「僕の個人的な見解だけど・・・何かを守りたいという強い思い、そして・・・」

ほんの少しの勇気があれば・・・スピリットは応えてくれるよ!」

友樹は、かつての冒険の中で強く逞しく成長した。

と、言うより・・・元々いざという時の勇気と行動力はあったのだ。

それが冒険の中で開花し、今の友樹の原動力となっている。

デジタルワールドの案内役・ポケモンをして、

【友樹はんがスピリットに受け入れられたのは、あの勇気があったからかもしれない】

・・・と言わしめる程である。

「何かを守りたいという強い思いと・・・」

「ほんの少しの勇気・・・」

それを聞いた2人は・・・俯いていた顔を上げて、自分達の周りを飛び回っている

太陽のスピリットと月のスピリットを見つめる。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「私達が守りたいのは・・・大切な友達・・・それに、大好きなこの街・・・!」

「今、私達に出来る事を全力でやります・・・!」

友樹を見て、真剣に言う2人。

それを見た友樹は、笑顔を見せて頷いた。

それと同時に・・・スピリットが強烈に発光し始める。

そして、光が収まった時には・・・2つの携帯機器が浮かんでいった。

1つは赤と銀、もう1つは白と銀の・・・D-スキャナだった!

「これが・・・」「私達の・・・」

赤と銀のD-スキャナはアリサの、白と銀のD-スキャナはすずかの手元にある。

それを見た龍輔達が、次々に声をかけた。

「そう、君達のデジヴァイス・・・君達のスピリットだ!」

「俺達がサポートする!君達は今は何も考えずに思い切りやれ!」

「新しいスピリットを使いこなせるのは・・・今は君達だけだ!」

「ビシッと決めよーぜ！」

『派手にやるーぜ！祭りの始まりでい！』

輝一、高雄、龍輔、孝昭、更に孝昭の愛機バーニングブロスまでもが背中を押す。

更に、三度上空の空間が歪むと・・・そこから1人の男が降りて来た。

「待たせたな。みんなで行くこうぜ・・・！」

「「孝俊さん！」」

治療を終えた孝俊が、アースラから海鳴市の港へ転送されて来たのだ！

どうやら今の一部始終も見ていたようだ。

「遅せーんだよバーロー！遅刻した分、思い切りやってもらおうぜ！」

「元よりそのつもりだ。究極体もいるなら、相手に不足は無い！」

孝俊は親友と笑い合うと、D・スキャナを取り出す。

そんな孝俊達を見て・・・今まで後ろに下がっていたボルトモン、メタルエテモン、

グランクワガーモンも前に出て来る。

「ふん、人間如きが進化したデジモンなんぞ、叩き潰してくれる！」
「タイガーヴェスパモンやカリスモンを倒したぐらいで良い気にならない事ねえん」

「ギギイ・・・！」

*

そんなボルトモン達を前に、最初に言葉を発したのはアリサだった。

両手を腰に当てて、睨みつけながら胸を張って口を開く。

「そつちこそ、あたし達を子供だと思って舐めてかかったら痛い目見るわよ！」

「この街を・・・あなた達なんかにめっちゃくちゃにはさせない！」

アリサに続いて、すずかも口を開いた。

それを見た孝俊は笑みを浮かべると、2人の後ろに立つ。

「よし、新しいスピリットのお披露目だ・・・行くぞ!!」

「「はいつ!」「」

アリサとすずかがそれぞれ左手を構えると、デジコードが発生する。

そのデジコードをD・スキャナでスキャンして・・・叫んだ。

「「スピリットエボリューション!」「」

アリサの体を真つ赤な炎が、すずかの体を青い光が包んで行く。
何処かアグニモンに似たその出で立ちには、神々しさすら感じられるデジモン・・・

「フレイアモン!」

フレイアモン ハイブリッド体 魔人型 バリアブル種 オリジナル

必殺技 シャイニングバスター

(高熱を圧縮して闘気と混ぜ合わせ、両手を前に突き出して
一気に発射)

プロミネンスブレイク

(業火を纏った必殺の飛び蹴り)

得意技 ヒートウイング

(超高熱の翼を発生させて、空を飛びながらその翼で切りかかる。)

フレイムソード

(高熱の炎の形を剣状に固定して、相手をそのまま焼き切ったり、相手の体に

突き刺して、相手を体の中から焼いたりする)

生きとし生けるもの全てに光を与える太陽の力を宿した人型デジモン。

だが戦いとなればその太陽の力は万物を焼き尽くす業火と化し、それを独自の格闘術に宿している。

接近戦に長けたパワータイプだが、決してスピードも遅くは無い。

姿はアグニモンと何処か似ている。

三大天使が力を合わせて生み出したエネルギーが、太陽の光のエネルギーを浴びた事で

完成・誕生した。

片やもう一方は、青と白の機械の装甲に身を包み、高速で空中を飛び回る高機動のデジモン。

「サレナモン！」

サレナモン ハイブリッド体 サイボーグ型 バリアブル種 オリジナル

必殺技 フルムーンブレイカー

（自分自身を中心に、満月状の魔方陣を展開。魔方陣の中に超高密度のエネルギーを発生させて、ダメージを与える）

ムーンスレイブ

（背中の翼から羽根が相手を自動追尾しながら飛んで行き、刺さったと同時に爆発する）

フラッシュアロー

（激しい光を纏った飛び蹴り。発動中は真っ白な光の矢に見える）

得意技 ハーフイリュージョン

（自分を二人に分身させる）

ヒーリングムーン

（月の光で自分自身の体力や怪我をある程度なら完治する回復技）

クレッセントウエーブ

（三日月形の衝撃波。エネルギー波なので、物理的な防御を貫通する効果がある）

漆黒の夜の世界を美しく照らす月の力を宿した人型デジモン。
激しさは感じられないが夜の闇を払いのけるその力と光は、驚異的
な攻撃力と回復力を
生み出す。

機動力に長けているが、そのメカメカしい体もあってか防御力も高
い。

三大天使が力を合わせて生み出したエネルギーが、月の光のエネル
ギーを浴びた事で
完成・誕生した。

*

「わあ……!」「じ、これが……私達……!」

自分の姿を見て、驚く2人。

何より、体の中から漲って来るエネルギーを凄く感じるのだ。

「よおし、皆……行くぞ!」

「……はいつ!」「……」

「……よっしあ!」「……」

龍輔の号令と共に・・・友樹、アリサ、すずか、高雄、孝昭、輝
一、そして孝俊が走り出した！

次回、デジモンの大軍との総力戦！

そして、拓也は・・・？

続く

第57話 意外な人が新戦力になる事もある気がする 後編（後書き）

はい、第57話終了です。

拓也が闇の書に吸収されてしまいました（汗）。

そんでもって、太陽と月のスピリットがお披露目です。

使用者はアリサとすずか・・・まあ、感が良い人は気付いてたか
もしれませんが（苦笑）。

では、次回予告・・・意外な所で石田先生、どうぞ（笑）。

石田先生「まさか私まで次回予告するとは思わなかったわ・・・（汗）

次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第58話【夢は逃げる場所じゃない気がする】お楽しみに！」

第58話 夢は逃げる場所じゃない気がする 前編(前書き)

はい、約1カ月ぶりの投稿となりました(汗)。
で、長くなりそうなので前後編に分けました。

しかし、気付けば570ptを突破・・・
書いた当初は100pt行ければ良いなあと思ってたのですが、
よもやここまでの評価を頂けるとは思いませんでした(苦笑)。

さて、名言コーナーですが・・・ちよつとネタが苦しくなってきたので、暫くお休みします(汗)。

その代わりに、自分の趣味になってしまいましたが・・・ちよつとプロ野球選手(主にOB)の紹介をしようと思います。
カテゴリーに【たまにスポーツ】と入れてますし(待てい)

今回は、自分の大好きな津田恒実投手の紹介です。

津田恒実(1960～1993)

所属：広島東洋カープ(1982～1991)

守備位置：ピッチャー 背番号：15(1982～1984)
14(1985～1991)

おじさん世代の広島ファンにはお馴染みの【炎のストッパー】。
高校時代から剛球投手として知られ、地区大会で完全試合を達成す

るなどの活躍も見せる。

甲子園にも出場し、社会人野球の協和発酵（現・協和発酵キリン）でも活躍した。

その後、1981年秋にドラフト1位で広島東洋カープに入団。

球団初の新人王を期待され、途中で苦しみながらも11勝6敗の成績で見事に新人王を獲得した。

2年目も期待され、夏までに9勝を挙げるも肩を壊し、そのシーズンを棒に振ってしまう。

その肩を治して挑んだ3年目には右手中指の血行障害を発症し、離脱。

だが、手術の末に血行障害も完治、1985年に『恒美』から『恒実』に改名する。

1986年に抑え投手に転向すると、いきなり大車輪の活躍を見せる。

4勝6敗22セーブでカムバック賞を受賞し、復活をアピールした。

翌87年も好投したが、88年には肩痛が遠因してサヨナラ負けを繰り返す『サヨナラの津田』と揶揄された。

だが、89年に12勝5敗28セーブと言う自身最高の成績を残し、再び復活を遂げた。

史上最強の助っ人と呼ばれたランディ・バース（阪神）をストリートだけで3球三振に

仕留めたり、原辰徳（巨人）の手首をファールの衝撃で骨折させてしまうなど、ストレートの威力は歴代でも最高クラス。

しかし、91年に脳腫瘍の為引退（当時、球団は水頭症と発表）。

一時は奇跡的な回復も見せたものの、92年6月頃に再び病状が悪化。

そして93年7月20日、遂に帰らぬ人となってしまった。そのニュースは、オールスター戦の最中に放送された。

旧広島市民球場には、その功績と人柄を讃え、「直球勝負 笑顔と闘志を忘れないために」の文章が浮き彫りにされたメモリアルプレート（津田プレート）が設置されていた。
現在はMAZDA ZOOM-ZOOMスタジアムに移設されている。

通算成績：286登板 49勝41敗90セーブ 542奪三振
防御率3.31

高雄「また随分長々と・・・（汗）」

孝俊「これでも随分短くしたらしい（汗）」

石田先生「とにかく・・・第58話、始まります!」

第58話 夢は逃げる場所じゃない気がする 前編

闇の書の意志と対峙するアグニモン。

なんとか彼女を止めようと説得するが、彼女は止まらない。

そして力ずくでも止めようと、「サラマンダーブレイク」を発動させる。

しかし、彼女の盾にヒビを入れるも、アグニモンは闇の書に吸収されてしまった。

同じ頃、高雄達はデスモンの率いるデジモン軍団と激闘を繰り広げていた。

そんな彼らを見て、アリサとすずかは戦えない自分達を歯痒く思う。

すると、龍輔が新スピリット【太陽】と【月】を彼女達に渡そうと提案する。

恐怖にかられる2人だったが、友樹の言葉に背中を押され、遂に進化を決断する。

そして治療を終えた孝俊も到着し、戦力が揃う。

力強く叫ぶ2人・・・熱き太陽と冷たい月・・・2つの力が今、解き放たれる！

*

「スピリットエボリューション！・・・グリーンドラモン！」

孝俊は走りながらグリーンドラモンに進化する。

その隣では、タイタンドラモンにスライドエボリューションした
高英雄が走っている。

2人は互いに顔を見合わせると微笑を浮かべ、同時に敵の中に飛
び込んで行った。

「スピリットエボリューション！・・・ブリザーモン！」

そして友樹は・・・ビーストスピリットのブリザーモンに進化し
た。

いかに鍛えたとはいえ、やはりビーストスピリットの方が強力で
ある。

ブリザーモン ハイブリッド体 獣型 バリアブル種

必殺技 アヴァランチステップ

(「エジ」「オジ」で舞うように攻撃する)

氷河魚雷(グレッツチャードルペイド)

(先が鋸のようになっている縛った髪の毛で、敵を突き刺す)

得意技 アヴァランチスロー

(「エジ」「オジ」をブーメランのように投げつける)

氷の息吹

(カチカチコツチンの強化版みたいな技。原作でアイスデビ

モンに対して使用)

伝説の十闘士“エンシエントメガテリウモン”の力を受け継いだ、氷の属性を持つ獣型

デジモン。

2本のトマホーク「エジ」「オジ」を自在に操る。

必殺技の名前を叫びながら攻撃したりと、目立ちたがり屋でお調子者のデジモンだが、

戦いを有利に進める抜け目なさを持っている。

*

「行くぞっ！グリーンドラモン！」

「あいよっ！」

タイタンドラモン（以降：Tドラモン）はグリーンドラモン（以降：Gドラモン）に呼びかけると、その肩に向かって飛ぶ。

Gドラモンがその場で立ち止まると同時に、TドラモンがGドラモンの肩を踏み台にして、上空高く飛び上がる。

只でさえジャンプ力に優れるTドラモン。

助走+タイミング+踏み台の相乗効果で、視認し辛い高さまで飛

戦士である。

そんじょそこらの成熟期に負ける程、やわな鍛え方はしていない。

「よし・・・行くわよ、すずか！」

「うん、頑張ろう！アリサちゃん！」

孝俊や友樹達が敵を蹴散らす様子を見て心強さを感じたのか、進化する前の恐怖が全く

消え去っているアリサとすずか。

2人とも大富豪の令嬢であるが故に、厄介事に巻き込まれる事が多い。

その為、不本意ながらも度胸は付いていたのである。

「ふん、ガキが・・・叩きのめしてくれるわぁ！」

斧が刺さったカボチャの頭を持つデジモン、パンプモンがフレィアモンに迫って来る。

こんなコミカルな外見をしているが、これでも完全体であり、かなりの力を持つ。

「そうは行かないわよ！・・・たあぁっ！」

迫り来るパンプモンをかわすと、背中に炎の翼を展開させて飛び上がる。

そのまま上空を旋回すると、急降下しながらパンプモンに突撃した！

「くらいなさい！【ヒートウイング】ッ！」

バシユンッ！

「がああっ!?!」

ヒートウイング
炎の翼で攻撃され、吹っ飛ばされるパンプモン。

フレイアモンはその隙を見逃さず、着地すると同時に足に炎を纏わせてジャンプする。

「【プロミネンスブレイク】!!」

ドガアアッ!!

「ぐああああああ……!!!!」

まともに喰らったパンプモンはその場に倒れ、消滅してしまった。フレイアモンの必殺技の1つ、【プロミネンスブレイク】である。威力はグレンモンの【スージーQ】とほぼ互角で、65tの破壊力を持っている。

「わ、我ながら凄いパワーね……これってパワー型なのかな……」

「？」

（うーむ、如何に太陽と月のスピリットが最新鋭とは言え、あそこまで力を引き出すとはね・・・彼女には素質があるのかもしれないな）

パンプモンを倒した自らのパワーに若干驚くフレイアモン。
そんな彼女を、龍輔が進化したブレードドラモン（以降・Bドラモン）が感心しながら見ていた。

太陽と月のスピリットは、デジタルワールドの最新技術で作られたスピリットである。
実は特殊スピリットは、後になればなる程、基本的な性能が高くなっているのだ。

龍輔達親世代が使う、第1期の試作型を皮切りに、龍・朱雀・白虎・玄武が第2期で製作された。
そして、龍のスピリットをベースに剛龍・黒龍を第3期として製作した。

太陽と月のスピリットは、いわば第4期と言ったところだ。

しかし、基本的な性能が高いとは言っても、使いこなせないのでは意味が無い。

第2期である龍のスピリットが特殊スピリット最強と言われる所にもそこにあるのだ。
孝俊にその適性があつたからこそだろう。親譲りと言う所もあるのかもしれないが。

龍輔の心配は、アリサとすずかがスピリットの力に振り回されて、

力が発揮し切れない
かもしれないという点だった。

しかし、今の戦いぶりを見るにアリサの方は大丈夫だった様だ。
龍輔は、今度は少し離れて戦っているすずかの方を見る。

「えーいつー!」

ブオンツ!

「のわあああつー!」

彼女は、半魚人の様なデジモン・ハンギョモンを振り回して投げ
飛ばしていた。

自身の装備をフルに生かし、背中のバーニアを吹かして高速で移
動し、相手を翻弄している。

「【ムーンスレイブ】!」

ドドドドドドンツ!

「ぐはあつー!」

背中に生えている鋼鉄の翼から羽根が飛んで行き、それらがハン
ギョモンに命中する。

羽根は命中した瞬間、爆発を起こしてハンギョモンにダメージを

与えた。

羽根には追尾機能も付いており、そう簡単には逃げられない。

「ぐぬう・・・こ、こんな小娘に・・・この俺が・・・」

「絶対負けないっ！私達がこの街を守る！」

既にヨレヨレのハンギョモンに対し、力強く言い放つサレナモン。
ハンギョモンも先程のパンプモンと同じく完全体なのだが、月のスピリットを見事に

使いこなしているすずかに翻弄されていた。

（こりゃあ、こっちも心配なさそうだな・・・俺の杞憂だったみたいで良かったよ）

アリスと同じくスピリットを使いこなしているすずかを見て、微笑を浮かべるＢドラモン。

龍輔の心配事は、アッサリと解決されていた。

２人とも、初めて戦うとは思えない戦闘能力を発揮している・・・
龍輔はそれに少し驚いていた。

「行くよっ！」

サレナモンが猛スピードで走りだし、前方に大ジャンプする。そこから右足を突き出すと、その体が真っ白な光に包まれ、光の矢と化した！

「【フラッシュアロー】ッ！！」

ドオオオオンッ！！

「あんぎゃああ~~~~っ！？」

超スピードの飛び蹴りをまともに喰らったハンギョモンは数M吹っ飛ばされ、そのまま消滅してしまった。

今のはサレナモンの必殺技【フラッシュアロー】である。フレイアモンと比べるとパワーに不安があるが、スピードに乗せる事で威力を補い、フレイアモンの【プロミネンスブレイク】と同等にまで強化している。

「まだまだいっぱいいる・・・頑張らなきゃ！」

ハンギョモンを倒したのを確認したサレナモンは、すぐに他の敵に向かっていく。

息をつく暇も無い・・・油断すればすぐにやられてしまっただろう。それだけ敵の数は・・・多いのだから。

「っ……ぐっ！」

ガギンツ！ガゴン！

「ほらほらあ！どうしたあ！」

一方、孝昭は……ポルトモン相手に奮戦していた。管理局の中でもかなり上位ランクの実力者である彼だが、何せ相手は究極体デジモン。ちよつとでも気を緩めればそこで終わりである。

その証拠に、【インパクトシューター】も楽に防がれ、【ディバインブラスター】も大したダメージを与えられない。遂には【ブラスターキック】まで防がれてしまっていたのだ。

【ストライクブレイカー】を至近距離で撃ち込めれば勝機はあるかもしれないが、チャージに少々時間が掛かる上、撃った瞬間の衝撃で自分も巻き込まれてしまう。

それで倒せるならば巻き込まれても大丈夫だが、耐えられたらTHE ENDである。

その為、今は【カリバーフォーム】のバーニングブロスVで、ポルトモンの武器と打ち合っている状態である。

しかし、ポルトモンの一撃が重く、打ち合う度に顔を歪める孝昭。

「ぐぬう・・・小癩な真似・・・をつ!？」

「おらあああああつ!!【爆熱斬】っ!」

ザシユアアツ!

「ごあああつ!!?」

バーニングブロスVに蓄積された炎の魔力を高密度の刃にし、叩き斬る。

対人戦闘において孝昭が考えた、近接戦用の必殺技【爆熱斬^{ばくねつざん}】である。

先程の【ウェーブバースト】で倒せるとは微塵も思っていなかった孝昭。

ボルトモンはそこを読み違えていた。技を決めて油断するであろうところを叩くつもりが、追撃を許す形になってしまったのだから。

相手は究極体デジモン。

魔導師とデジモンの力の差が解らない孝昭では無い。

とにかく自分の力が尽きるまで自分の持てる全てを叩き込んで勝てるか否か・・・だ。

今回は、ボルトモンが孝昭を舐めてかかっていた事もあり、孝昭の戦術がしっかりと決まっている。

渾身の【爆熱斬】を直撃させ、ボルトモンが怯んだ隙に孝昭はバーニングブロスVを
キャノンモードに変形させる。
そして、素早く魔力を集束していく。

「な……!？」

「いくら究極体デジモンでも……零距离で俺の最大魔法をぶつ放せば……タダじゃ
すまねえよな？」

バーニングブロスV・キャノンモードの砲身をピッタリとボルトモンの体に密着させる。

ボルトモンはそれを見て流石に動揺したのか、焦りの声を上げる。

「ま、待て……!こんな至近距離でぶつ放せば貴様も……!」

「究極体デジモンを相手にするんなら……命くらい賭けねーと倒せねえ……」

それを見た孝昭は、フツと口元を釣り上げ……

「Good byeだ……バーニングブロス、オールカートリッジロード……」

ガシューッ！×8

孝昭の言葉で、バーニングブロスからカートリッジが一気に8つ放出される。

これはバーニングブロスVの最大許容量なのだ。

「怒れ、大地の咆哮・・・【ネオ・ストライクブレイカー】ッ！！」

カツ！・・・ドゴオオオオオオオン！！！！

更に強化された超集束砲・【ネオ・ストライクブレイカー】を発射した！

かつて、ヴェノムヴァンデモン戦で使った【ストライクブレイカー】の5倍の破壊力を持つ、孝昭の最後にして最強の必殺技である。

「ぐぎゃああああああああああああああああ！！！！」

流石のポルトモンも、捨身の最大砲撃を零距離で喰らってはひとたまりも無かった。

ネオストライクブレイカー
断末魔の叫び声を上げ・・・消滅した。

余談だが、唯一単体で究極体デジモンを倒した魔導師・佐野孝昭のこの戦闘は、後にミッドチルダで【第97管理外世界の奇跡】と呼ばれるようになったとか。

「っ……ぐう……あ……」

しかし、ボルトモンは倒したものの、やはり零距离で大威力砲撃をぶっ放したリスクは大きすぎた。

その衝撃は孝昭の頑強なバリアジャケットを突き抜け、その体に多大なダメージを与えていた。それこそ、最低でも気を失っていてもおかしくない程に。

『ご主人！大丈夫か！？しっかりしろ！』

「大丈夫だ……まだ生きてる……から……」

バーニングブロスVの叫びに、途切れ途切れに話す孝昭。その孝昭の後ろから……グランクワガーモンが迫っていた！

「ギギイッー！」

（やっべ……ここまでかな……）

最早その場から動く事もままならない。
孝昭は、今回ばかりは死を覚悟した……

「【ジェットナックル】！」

「【ジェットブラスター】！」

ドゴオツ！ズドドドドドツッ！

「ギヤウアツ!?!」

……が、どうやら孝昭も死神に嫌われている様だった。
間一髪でGドラモンとTドラモンが、それぞれロケットパンチと
高速ブラスター砲を
グランクワガーモンに喰らわせたのである。

「孝俊……高雄……すまん、助かった」

「間に合って良かった……しかし、究極体を倒すなんざ大したも
んだ。その根性には
素直に敬服するぜ」

「同士打ち覚悟であそこまでするなんてな……大した奴だ」

孝昭にクリスタルレーザー（回復用）を照射しながら、Gドラモ

ンが言う。

「トドラモンも腕を組んで、うんうんと頷いている。

「伊達に部隊を率いてねーさ・・・それに、これぐらいしないと俺を慕って付いて来て

くれてる奴らに申し訳が立たんからな・・・」

孝昭は弱冠14歳でありながら、部下達に相当慕われている。

その性格から、【兄貴】とか【親分】と呼ばれる事もあるらしい。自分の事など放り出して、真つ先に部下や仲間のピンチに駆け付ける・・・

階級なんぞ、彼からしてみれば仲間を守る盾程度にしか考えていない。

それが佐野孝昭と言う漢^{おにい}である。

「とにかく、ここは俺達に任せろ。心配掛けた分はきっちり取り戻すからな」

「孝俊の言う通りだ。お前は少し休んでろ・・・まだお前の力が必要になる筈だからな」

『ご主人・・・高雄の兄貴の言う通りだぜ。ちっと休まねえと、ダメージで思うような動きが出来ねーぜ』

「ああ、そうだな・・・頼んだ」

孝昭はその場に座り込み、念の為に障壁を展開すると、大人しく回復に専念した。

高雄の言う通り、この戦いはまだ長い・・・孝昭の力がまた必要になるかもしれないのだ。

「さーて、行くぞ高雄！合わせるよ！」「よっしゃ！いつちよぶちかましますかい！」

GドラモンとTドラモンが体勢を低くして右腕を引き、その拳に力を込める。

Gドラモンの拳には緑色の、Tドラモンの拳には赤色のエネルギーが充填されていた。

「「とうあつ！」」

2人は同時にその場から飛び上がると、エネルギーを込めた拳を全く同じタイミングでぶち込んだ！

「「【双龍弾】！！！」」

ズドドオオンッ！！

「ギャウアアアアアツ!!?」

2人の合体必殺技【双龍弾】がグランクワガモンに叩き込まれる。

双龍弾は、龍（先代、現役）、剛龍、黒龍のどれか2つが同時にフルパワーで拳を叩き込む技である。

しかし、流石は究極体のグランクワガモン。

この攻撃でダメージこそ受けたものの、立ち上がって来たのである。

それを見たGドラモンは、Tドラモンの方を向いて話しかける。

「高雄、俺が時間を稼ぐ。その間にフルチャージして【アレ】を撃つんだ。あれを

まともにぶち込めれば、ダメージを受けてる究極体なら倒せる筈だ」

「よし・・・チャージには早くても15〜20秒はかかる・・・頼むぞー!」

Gドラモンはグランクワガモンに向かって行き、Tドラモンはその場でエネルギーをチャージし始める。

すると、Tドラモンの胸部にある真っ赤な四角形のクリスタルに、全身のエネルギーが集まって行く。

「ていつ！・・・よいしょっ！・・・おりゃっ！」

「ギギッ！ギイッ！」

一方で、Gドラモンがグランクワガーモンの周りを動き回り、攪乱する。

グランクワガーモンは凶体の割に素早いGドラモンの動きに付いて行けず、軽く混乱している。

その間にも、Tドラモンはエネルギーチャージを完了しようとしていた。

「よし！孝俊、そこを離れろおっ！」

Tドラモンの怒号にも似た叫びを聞き、瞬時にその場を飛び退くGドラモン。

そして、Tドラモンの胸のクリスタルから・・・破壊光線が撃ち出された！

「必殺・・・【タイタン・ノヴァ】—————ッ！！」

ギユオオオッ・・・シュバアアアアア！！

「ギギイイイ—————！！!?」

【タイタン・ノヴァ】の直撃を受けたグランクワガーモンは、直前の【双龍弾】のダメージもあつたせい、あえなく消滅していった。

トドラモン最強の必殺技【タイタン・ノヴァ】は、十闘士も含めた現役世代の全ての

スピリットの中で、最強の威力を持っている。

しかし、フルパワーの【ドラゴンカノン】以上にチャージに時間が掛かるのが欠点でもある。

勿論、【ドラゴンカノン】と同様にノーチャージでも撃てるが、威力は当然ながら下がる。

しかしリスクが大きい分、決まればとても大きい技なのだ。

「これでこの場に残る究極体はあと2体・・・！」

「親父がいるとは言え、無理はさせたくねえ・・・出力は相変わらず馬鹿みてーに
でええが、持続力が心配だ・・・」

孝昭が捨て身で倒したボルトモンに、トドラモンが撃退したグランクワガーモン。

これでこの場に残る究極体はメタルエテモンとデスモンのみである。

だが、龍輔がいるとはいえ、あまり頼りきりになる訳には行かない。

確かに出力は自分達では及びもつかない程だが、スタミナが心配なのだった・・・

*

「……………！」

一方……なのは、闇の書に吸収されてしまった拓也を見て、
呆然としていた。

同じくフエイトもヴォルフモンも言葉が出ず、拓也が消えた場所
を見つめている。

「……………エイミーさん！」

「……………状況確認！……………拓也君のバイタル、まだ健在！闇の書の
内部空間に閉じ込められただけ！助ける方法、検索検討中！」

我に返ったなのは、アースラ内のエイミーに呼びかける。

エイミーが調べたところ、拓也の体に異常は無いらしいが、闇の
書の内部に閉じ込められてしまったようだ。

「……………我が主も彼も、覚める事無い眠りの内に……………終わりなき
夢を見る……………」

生と死の、狭間の夢……………それは、永遠だ……………」

静かに言い放つ闇の書の意志。
だが、3人の意見は・・・それとは当然違った。

「・・・永遠なんて・・・無いよ」

「みんな変わってく・・・変わって行かなきゃ・・・いけないんだ」

「俺達も・・・そしてお前も！それに、拓也は夢の中で閉じこもる様な奴じゃない！
必ず再び俺達の前に現れる！」

力強く言い放つ3人。

特にヴォルフモンのそれは・・・拓也が必ず戻って来ると信じてるからこそ、言える言葉であった。

続く

第58話 夢は逃げる場所じゃない気がする 前編（後書き）

はい、第58話終了です。

殆どデジモンバトル・・・ちょっと反省です（汗）。

今回は、拓也視点から開始・・・予定です。

そんでもって、今回の前書きでやった野球選手紹介ですが・・・

【この選手を紹介してほしい】って意見があれば、それを採用したいと思います（現役・OB問わず）。

では、次回予告・・・フェイトちゃん、どうぞ！

フェイト「苦しい局面だけど、ここはしっかり乗り切らないと・・・」
次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第59話【夢は逃げる場所じゃない気がする 後編】お楽しみに！

番外第4回 たまには予定を変更する事だつてある気がする(前書き)

はい、前回の続きがなかなか書けない為・・・
予定を変更してA・S編の登場人物をまとめてみました。

では、前回に続いてのスポーツ選手紹介コーナーです。
今回は・・・鉄人こと、衣笠祥雄選手の紹介です。

衣笠祥雄(1947)

所属：広島東洋カープ(1965)～1987)

守備位置：一塁手、三塁手 背番号：28(1965)～1974)
3(1975)～1987)

カープファンにはお馴染みの【鉄人】。

その通り名が示す様に、プロ野球選手の中でも身体が飛び抜けて頑丈であつた。

高校時代は捕手を務め、3年時には春夏両方で甲子園に出場し、ベスト8に入る。

連続試合出場記録2215は日本記録(1996年まで世界記録)である。

その他にも安定した優秀な成績を残しており、広島の黄金時代に欠かせない存在。

1987年には、国民栄誉賞も受賞しており、背番号3はカープの永久欠番になっている。

有名なエピソードとして、1979年8月1日の読売ジャイアンツ戦、西本聖から死球を受け、左の肩甲骨を骨折する重傷を負ってしまう。

しかし翌日の試合にも代打で出場し、江川卓のボールにフルスイングで挑んで三球三振という記録を残した。

試合後には「1球目はファンのために、2球目は自分のために、3球目は西本君のためにスイングしました」

「それにしても江川君の球は速かった」とコメントしている。

衣笠が代打で打席に登場した瞬間、広島ファンのみならず、巨人ファン・ベンチからも大きな拍手が起こった。

また、衣笠の連続試合出場記録はアメリカでも非常に高く評価されており、現在でも「キヌガサ」は、

アメリカで最も名前の知られている日本人野球選手の一人である。

1996年6月14日にカル・リプケンJr.（オリオールズ）が記録を更新した試合にも、来賓としてアメリカに招かれた。

また、旧広島市民球場の敷地内には、連続出場記録を記念した碑がある。

その人柄は、球団の垣根を超えて、他球団やファンに今も愛され続けている。

通算成績：2677試合 504本塁打 2543安打 1448
打点 266盗塁

通算打率・270 1587三振（歴代3位、セ・リー

グ記録)

161死球(歴代3位)

高雄「鉄人衣笠か・・・」

孝俊「野球ファンでこの人知らなかったらカープファンに怒られそ
うだな(苦笑)」

拓也「じゃ、キャラ紹介どうぞ」

番外第4回 たまには予定を変更する事だつてある気がする

第2章（A・S編）、キャラクター紹介です。

神原拓也 17歳 男 魔導資質無し

『成長し続ける炎の闘士』、『聖祥小学校のイケメン用務員』、『現役最強』

身長：178cm 体重：71kg

ご存知、デジモンフロンティアの主人公。今作の主人公の1人でもある。

戦闘力は健在・・・と言うよりもパワーアップの一途で、今回もなのは達を助ける為に奮戦する。

シグナムに追い詰められたフェイトを助け、アグニモンとなってシグナムと戦闘する。

【サラマンダーブレイク】でシグナムを防御の上から撃墜するなど、攻撃力の高さは圧倒的。

洞察力も高く、不自然な部分に目を付け、最初に仮面の男達の正体に気付いた。

孝俊の正体を現役世代で一番最初に知り、管理局に不信を持っている。

だが、それでもなのは達に協力する事が第一の為、口には滅多に出さない。

前は翠屋でアルバイトしていたが、今回はなのはやフェイトの護衛も兼ねて、

聖祥大付属小学校で用務員のボランティアをやっている。

休み時間には子供達とサッカーをする事が多く、男女問わず人気者らしい。

孝昭に加え、高雄まで加わった為にツツコミに忙しくなった。

恋愛に対しての鈍さも相変わらずで、なのはの何気ないアプローチにも全く気付いていない。

余談：自分達の住む世界では、サッカー部のエースストライカーを務める。

孝俊の親友・黒田善之との2トップで、全国でも名を馳せている。

プロからも注目されているが、どうするかは思案中らしい。

炎のスピリット

アグニモン（魔導師ランク：S相当） 必殺技：バーニングサラマ
ンダー

ヴリトラモン（魔導師ランク：SS・相当） 必殺技：コロナブラ
スター

面林孝俊 17歳 男 魔導師ランク：最低でもSS+相当 魔力：明るい緑

『進化し続ける龍戦士』、『台所の神』、『アンリミテッド・ダイナモJr』

身長：179cm 体重：70kg

今作オリジナルキャラクター。

拓也達と共に再びなのは達の元に赴いた・・・が、またしても離れ離れになってしまった。

八神家に墜落し、それと同時に闇の書を狙って来たデジモン達と対決。

4体を同時に相手をして見せるなど、レベルアップした实力を見せる。

ただ、それでも未だに拓也には勝てないらしく、模擬戦で15連敗中らしい。

母親は管理局の闇によって作られた生体兵器【アンリミテッド・ダイナモ】。

1章でも説明したが、孝俊の体の内部には、母から受け継いだ超膨大な魔力が宿っている。

誕生直後にオフアニモンによって魔力を封印されていたが、フェイトが仮面の戦士の襲撃を受けた事で、怒りによって封印が解けた。

その戦闘力は、仮面の男をいともあっさりと蹂躪し、シグナムやウィータが苦戦した

魔導生物を一撃の下に撃退するなど、一線を画している。

だが、半分は人間の身体ゆえか、数分暴走すると強制的にSTO

Pし、気を失ってしまふ。

相変わらず某プロ野球選手を崇拜しており、『弱気は最大の敵』が座右の銘。

今ではすっかり八神家に溶け込み、はやて・シャマル・ヴィータに好意を抱かれている。

シグナムとも剣を扱う者同士仲が良く、ザフィーラとは親友と認めあう様になった。

余談：好きな曲はYMOの【ライディーン】と、鳥人戦隊ジェットマンの【炎のコンドル】。

自分達の住む世界では、野球部に所属している。

2年生にしてエースで3番に座っており、最高球速は148 km/h（高校1年時）。

1年の時は、リリーフとして都大会ベスト4に何気に貢献したらしい。

また、ご存知の通り剣術に長けている為、たまに剣道部の助っ人になり出されている。

龍のスピリット

ブロスモン（魔導師ランク：S相当） 必殺技：ブロスバーストブレイカー

グリーンドラモン（魔導師ランク：SS・相当） 必殺技：ドラゴンカノン

四谷高雄 17歳 男 魔導資質無し

『The ボクサー』、『高雄と書いて馬鹿と読む』、『メカに愛された男』

身長：178cm 体重：72kg

孝俊の無二の親友でもあり、特殊型スピリットNo.5【剛龍】を持つ戦士。

孝俊とのコンビネーションは抜群の一言で、全く隙が無い。単調な物から複雑な物まで、数多くのコンビプレイを見せる。

メカの扱いに非常に長けており、レイジングハートやバルディッシュの修理・改造・強化を行った。

デジヴァイスの精密点検が出来る希少な存在であり、管理局内でもたちまち有名になった。

しかし、自分達の技術の悪用を恐れ、既存の技術しか使わない様になっている。

ヴィータに苦戦するユーノの前に自転車で現れ、グレンモンに進化してヴィータと戦った。

パワーは現役最強で、必殺拳【スージーO】でシールドごとヴィータを吹っ飛ばして

K.Oするという荒業を見せた。

戦闘スタイルはボクシング基調。【ロッキー】シリーズを好んで観ている影響である。

また、キングドラモン進化時は何故か性格が真面目になる。

余談：好きな曲は激走戦隊カーレンジャーの【絶対勝利だ！VR
V】らしい。

いつかVRVロボのビ トリーツ スターを開発しようと思
っていたりする（何）。

また、自分達の住む世界では野球部に所属し、2年生ながら
正捕手で4番に座る。

剛龍のスピリット：

グレンモン（魔導師ランクS相当） 必殺技：スージーQ、ファイ

ヤーカノン

タイタンドラモン（魔導師ランクSS - 相当） 必殺技：タイタン・

ノヴァ

キングドラモン（魔導師ランク：測定不能） 必殺技：メテオイン

パクトetc...

源輝二 17歳 男 魔導資質無し

『光の闘士』、『炎の相方』、『クールな翠屋イケメンアルバイ
ター』

身長：177cm 体重：65kg

かつて、拓也達と共にデジタルワールドを旅した1人で、光のス

ピリットを持つ。

昔はクールでぶつきらばうな一匹狼的な感じだった。
今でもクールではあるが、すっかり丸くなって後輩達の良いお兄さんの存在。

ヴォルケンス襲撃時は、ザフィーラに苦戦するアルフを助け、ヴォルフモンに進化して戦った。

優れた剣術と戦闘技術でザフィーラを相手に終始優勢に戦い、勝利する。

現在は翠屋でアルバイト中。

お客さん（特に若い女性）からの受けは凄く良いらしい（笑）。
だが、当の本人は少々困惑（と言つか照れ）気味だったり。

余談：成績は学年でもトップクラスで、アルバイトが休みの時は、なのはの姉の美由希に

勉強を教えているらしい。

自分達が住む世界では、剣道部のエースとして都内のみならず、全国に名を馳せている。

剣道部の次期主将になる事が既に当確済みらしい。

光のスピリット

ヴォルフモン（魔導師ランク：S相当） 必殺技：ツヴァイ・ズィーガー

ガルムモン（魔導師ランク：S+相当） 必殺技：ソーラーレーザー
ベオウルフモン（魔導師ランク：測定不能） 必殺技：ツヴァイ・ハンダー

中林雄人 15歳 男 魔導資質無し
『影の玄武』、『裏方命』、『脇役一筋』、『人生いちサブキヤ
ラ』

身長：165cm 体重：54kg

イメージCV：阪口大助さん（代表作：銀魂・志村新八、キャプ
テン翼J・森崎有三など）

拓也や孝俊の後輩で、特殊型スピリットNo.4【玄武】を持つ。
恐ろしい程に影が薄く、その影の薄さで味方のピンチを救う事も
しばしばある。

玄武だけあって、特に防御力に優れている。

本人はそれをフルに生かして戦い、普段はサポートに徹している。
孝俊からはやての護衛を頼まれ、なのはの世界に飛び込んだ。

シグナムにも気配を悟られず、なのは達を捕縛した仮面の男達に
も気付かれなかった。

メインを張る事は殆ど無いが、一度はやてを守る為に1人で完全
体デジモン2体と戦った。

何気に高い戦闘能力を持っており、味方からも頼られている。

実は孝俊の妹・春香と交際中である。

なんやかんやでとつても仲が良いらしい。

余談：自分の母親が高雄の母と姉妹である為、高雄とは従兄弟同士である。

自分達の住む世界ではバスケット部に所属しており、キャプテンを務める。

高校は勿論、拓也達と同じ高校を受験する事になっている。
何気に頭が良く、学年でもTOP50に入る程らしい。

玄武のスピリット

メガトータモン（魔導師ランク：S相当）
必殺技：MIB
マシンガンアイアンブレイク
フォートレモン（魔導師ランク：S+相当）
必殺技：ダイナスト
ライク

佐野孝昭 14歳 男 魔導師ランクS+ 魔力光：赤

『ムードメーカー』、『やっぱりポケ男』、『爆炎の魔導師』、
『地上本部の兄貴』

身長：166cm 体重：56kg

今作オリジナルキャラクター。ミッドチルダ出身の魔導師。
役職は変わらず二等空佐で、現在も次元航行艦隊に出向中である。

管理局で高位の役職に就いているにも関わらず、管理局の正義に疑問を抱いている。

温厚で細かい事は気にせず、犯罪者相手でも改心の余地があれば慈悲を持って接する。

ヴォルケンス襲撃時は風邪をひいており、強行出撃したがすぐに撃墜されてしまった。

だが、完全復活後に成熟期のムシャモンと対決し、これを圧倒して打ち破った。

そして、闇の書覚醒後にクロノと共に仮面の男の捕縛に赴き、これに成功。

後に究極体のボルトモンと対決して苦戦を強いられるものの、油断している所を

狙って一気にたたみかけ、同士打ち覚悟での零距离ネオ・ストライクブレイカーで

遂に倒す事に成功している。

余談：地上本部で部隊を率いているが、メンバーの殆どが他の部隊の問題児や、過去に

軽犯罪（主に喧嘩など）を犯して改心した面々ばかりで、いかつい連中らしい。

また、StrikerSから登場するレジアス中将とは直接の上司と部下の関係らしいが、

関係者曰く【そうは見えない】とか。

実は、実家がミッドでも指折りの大会社なのだが、本人は継ぐ気が全く無い。

バーニングブロス・V^{ボルケーノ}（別呼称：バーニングブロス^ツ？）
男性型インテリジェントデバイス 使用者：佐野孝昭
性格：豪快な性格で江戸っ子口調。バトルを「喧嘩」と称する。

形態：スタンバイフォーム（待機状態。四角いオレンジの宝石）

デバイスフォーム（杖）

カリバーフォーム（剣。魔力を込めると、刀身が大きくなる）
バスターフォーム（レイジングハートのシューティングモードと似た形）

ブーストフォーム（籠手と靴。近接戦闘でよく使う）

キャノンフォーム（切り札。手持ち式のツインキャノン砲）

技：ストライクブレイカー

（孝昭最強の集束砲。威力はディバインブラスターの比では無い程強烈）

ウェーブバースト

（カリバーフォーム専用。地面に突き刺し、炎のエネルギーの波を起こす）

爆熱斬

（カリバーフォーム専用。刀身に炎の魔力を込めて叩き斬る）

ネオ・ディバインブラスター

（魔力砲。カートリッジで強化されたディバインブラスター）

ネオ・ストライクブレイカー

（ストライクブレイカーの強化版で、威力はその5倍。零距离で放てば、究極体と

言えどもかなりのダメージを受ける)

孝昭の愛機・バーニングブロスが高雄の改造によって生まれ変わった姿。

出力も段違いに上がり、8連装オートマチック式カートリッジシステムを搭載した。

高雄を『兄貴』と呼んで慕っている。

性格は相変わらず豪快な江戸っ子口調だが、自分の後輩に当たるレイジングハートや

バルディッシュに対しては、一応先輩っぽく振る舞っているらしい。

高町なのは 9歳 女 魔導師ランク：AAA（推定） 魔力光：

桜色

『局員？民間協力者？』、『砲撃馬鹿』、『拓也さん大好き』

ご存知、『魔法少女リリカルなのは』の主人公。

今回は、ヴォルケンスの襲撃を受けた所で拓也達に助けられる。

拓也の事を想っているのは相変わらずで、1章の最後に拓也から譲り受けたゴーグルは

普段から大事に保管してあるらしい。

ただ、無茶をする所も相変わらずであり、そこんところは拓也も頭を痛めている。

愛機レイジンググハートもヴォルケンス襲撃の際に大破したが、高雄によって修理されて

レイジンググハート・エクセリオンに。

更に、対デジモン用再改造で炎のスピリットの基礎データを組み込まれた事によって、

レイジンググハート・バーニングエクセリオンへと進化を遂げた。

本作ではまだ未使用である。

フェイト・テストロッサ 9歳 女 魔導師ランク：AAA（推定） 魔力光：金

『孝俊大好き』、『雷光の魔導師』、『剣術修行中』

金髪ツインテールの女の子。

今回はシグナムに苦戦していた所を拓也に救われた。

孝俊の事はずっと想っており、それを高雄にからかわれる事もしばしば。

その度に高雄を返り討ちにしていたりする。

一方で、母・プレシアとは仲良く暮らしており、日常生活では平和に過ごしている。

アルフとのコンビも健在で、1度はヴィータを追い詰めた。

愛機バルディッシュは、シグナムとの戦闘で中破してコアにダメ

ージを受けるものの、
こちらも高雄によって修理され、バルディッシュ・アサルトとなっ
て蘇った。

後に、剛龍のスピリットの基礎データを組み込んだ事により、大
きくパワーアップした

バルディッシュ・アサルトドラグーンへと進化した。

その形状は、グリーンドラモンの機龍牙と瓜二つである。

一度起動したが、仮面の男の妨害によってその時は使う事が無か
った。

八神はやて 9歳 女 魔導師ランク：S（推定） 魔力光：白

『闇の書の主』、『薄幸の美少女』、『八神家の家長』

闇の書を所持する、足が不自由な車椅子の少女。

不遇な境遇に置かれながらも、前向きで優しい心を持った強い子
である。

9歳の誕生日に闇の書が起動し、シグナム達ヴォルケンリッター
が現れる。

シグナム達と共に、闇の書を狙うデジモン達に襲われる。

拓也達との戦闘のダメージを残していたシグナム達が苦戦し、自
らもシャマルと共に

窮地に立たされるが、突如現れた孝俊によって助けられた。

お礼と言って孝俊を宿泊させ、何気に流れて滞在してもらっている。

孝俊の事は、当初は兄の様に慕っていたが、その内違う感情も抱いている素振りも見せるように。

また、自身の護衛をしてくれる雄人の事も兄の様に慕っている。

シグナム達の前では弱みを見せないが、一度孝俊の前で弱音を吐いた事がある。

シグナム 19歳（外見） 女 魔導師ランク：AAA+（推定）

魔力光：紫

『烈火の将』、『剣の騎士』、『実は意外と優しい』

闇の書（夜天の魔導書）の主仕えるヴォルケンリッターの将。

最初の戦闘ではフェイトを圧倒して追い詰めるが、乱入して来た拓也に敗れる。

以後、何度か拓也と出会うも、下手に戦おうとせずに話し合おうとし、無理な約束も

守ってくれている拓也に対して、複雑な感情を抱いている。

孝俊とは剣を扱う者同士、仲が良い。

何度も孝俊に模擬戦を挑んでいるが、技術で敵わずに一本も取れていないらしい。

それでも、魔法を交えて戦えば並の完全体デジモンにも優勢に戦

える実力を持つ。

拓也に出会ったり高雄に出会ったりと、何気にデジモンsideとの遭遇率が高い。

家事はシャマルや孝俊に任せきりの為、苦手。

ヴィータ 7歳（外見） 女 魔導師ランク：AAA+（推定）

魔力光：赤

『鉄槌の騎士』、『ツンデレ』、『食いしんぼっ』

ヴォルケンリッターの1人。

シグナムと同じく前線で戦うタイプの騎士。

性格は、はやて、孝俊、雄人以外に対しては短気で素直じゃない所が前面に出る事が多い。

パワーに優れ、なのはを戦闘不能に追い込んで、ユーノに対しても優勢に戦う。

だが、自転車で乱入して来た高雄に妨害され、そのポケに翻弄された末に敗北した。

それでもシグナムとほぼ互角の戦闘能力を持ち、体力が万全ならば完全体も倒せる程。

見ず知らずの自分達の為に頑張ってくれる孝俊に対し、好意を抱いている。

・・・が、前述の通り素直じゃない為に口には出さない。
また、アイスには目が無い（笑）。

シヤマル 22歳（外見） 女 魔導師ランク：A A +（推定）

魔力光：青磁色

『湖の騎士』、『料理勉強中』、『八神家の参謀』

ヴォルケンリッターの1人。

戦闘力は無いに等しいが、バックアップの能力は一流。

八神家では、主にはやての世話を務める事が多い。

家事は一通り出来るものの、料理だけは苦手であり、それを食した孝俊が真っ白になつて昇天しかかった程。

孝俊が八神家に墜落した時に事故とは言え押し倒され、それ以来孝俊が気になるらしい。

料理を教えてもらつたり、戦闘で助けてもらつたりで日に日にその想いは募っている。

ザフィーラ 20代前半（外見） 男 魔導師ランク：不明（A以上は確実） 魔力光：藍白色

『盾の守護獣』、『龍の親友』、『使い魔では無い、守護獣だ』、
『半ばペット扱い』

ヴォルケンリッターの1人で、唯一の男性。

防御力に優れ、盾の守護獣の名に恥じない力を見せる。

孝俊、雄人とは同じ男性として仲が良く、互いに親友と認め合う仲である。

一緒に行動する事も多く、すずかが誘拐された際は、孝俊と共にすずかの救出に大活躍した。

普段は狼の形態でいる事が多いが、孝俊や雄人と話す際は人間の姿になる。

面林龍輔 35歳 男 魔導資質無し

『最強の剣龍』、『先代の龍闘士』、『ノンビリボケ親父』

身長：183cm 体重：73kg

孝俊の親父で、特殊スピリット試作型No.1【龍】を持つ戦士。ムゲンドラモンの繰り出すマシン型デジモン軍団に追い詰めら

れた孝俊を助ける為、

なのはの世界に24年ぶりに降り立った。

凄まじいまでの戦闘力で、150体いたデジモン達をあっという間に撃沈した。

更に、闇の書の意志が放ったSLBスターライトブレイカーを防ぎ切るなど、防御力も高い。

アリサとすずかの戦う意思を汲んで、太陽と月のスピリットを預けた。

普段は陽気でポケ気味な親父だが、敵には容赦が無い。

寄る年波のせいか、スタミナに少々不安があるが、それでも現役の拓也達を圧する戦闘力を誇る。

余談：妻の夏紀とは今でも仲睦まじく、よく甘えられている。

夏紀には頭が上がらず、夏紀が泣きそうになると珍しくあたふたするらしい（笑）。

また、夏紀を泣かした奴には一切の容赦が無い。

ちなみに、好きな曲は【仮面ライダーBLACK】。

高校時代は野球部で捕手を務め、高雄の父とバッテリーを組んでいたらしい。

先代・龍のスピリット

???モン（魔導師ランク：測定不能） 必殺技：HMB

ハイパーミラージュフラスター

ブレードドラモン（魔導師ランク：測定不能） 必殺技：コスモス
ラッシャー

中林和久 33歳 男 魔導資質無し

『ラーメン屋のおやつさん』、『先代の玄武』、『超怪力親父』

身長：193cm 体重：85kg

雄人の親父で、特殊スピリット試作型No.4【玄武】を持つ戦士。

かつては孝俊の父・龍輔らと共にデジタルワールドを守っていた。

孝俊の母・夏紀とは同じ年で仲が良く、今でも懐かれている。

現在はラーメン屋【玄武亭】を開業している。また、玄武亭は拓也達の憩いの場所でもある。

豪快な性格で気前が良く、拓也達からは【おやつさん】と呼ばれ慕われている。

ちなみに、孝俊の料理の師匠でもある。

店を開いてるだけあり、料理の腕前は全キャラでNo.1。

当然、調理師免許も取得済みである。

また、子供好きで結構子供に人気がある。

戦闘スタイルはパワー1本。

玄武本来の防御力もあるが、とにかくパワーが群を抜いている。

現役世代最強のパワーを持つ高雄ですら、和久には敵わない。

全スピリット通じて最強のパワーファイターであり、高雄にとつては最終目標。

余談：龍輔と同様に奥さんには弱く、頭が上がらない。

実は奥さんは高雄の母の妹に当たり、高雄は甥に当たる。

また、【玄武亭】は何人が住み込みのアルバイトを雇っている程繁盛している。

面林夏紀 旧姓：ナツキ・スカリエッティ 33歳 女 魔導師
ランク：測定不能 魔力光：蒼

『アンリミテッド・ダイナモ』、『剣龍の嫁』、『先代の不死鳥』

身長：138cm 体重：29kg 3サイズ：86・54・82

孝俊の母親で、特殊スピリット試作型No.2【朱雀】を持つ戦士。

その正体は、時空管理局最高評議会によって作られた生体兵器【アンリミテッド・ダイナモ】。

【アンリミテッド・デザイア】ことジェイル・スカリエッティの妹でもある。

なのはの世界に飛び込んで行った龍輔を心配し、輝一と友樹に援軍をお願いした。

生体兵器であるが為に身体は一定以上の歳を取らず、背の低さも相まって下手すれば

小学生に見えてしまう程。

だが、出るところは出ており、そこで大人と判別できる（何）

余談：結婚して17年経った今でも龍輔とはラブラブで、よく甘えている。

子供達の前ではどうにか大人っぽく振る舞っているが、たまにボロが出かかる

らしく、現役世代達は本性に薄々気付いていたりする（笑）。
学校には通っており、独学で一般常識などを身に付けた。

しかしどこかズレており、若い頃は龍輔達男性陣の前で普通に着替えだすなど、

羞恥心に欠けていたりした。

デーモン 究極体 魔王型 ウィルス種 七大魔王

必殺技：フレイムインフェルノ

得意技：ケイオスフレア

闇の書を狙うデジモン軍団の首領。

圧倒的な実力を持つと言われているが、寿命が間近に迫っている。
デスモン・ムゲンドラモン・カリスモン・タイガーヴェスパモン
に命じて、闇の書を手に入れようと企む。

部下には一定の慈悲を見せる事もあり、タイガーヴェスパモンや

カリスモンが敗北した

際には、シヨックを受けるなどの感情も見せた。

特に側近であるデスモンの事を信頼しており、デスモンの進言は良く聞き入れる。

デーモン軍団四天王

タイガーヴェスパモン 究極体 サイボーグ型 ウィルス種

四天王の一番手。ガルムモンと対決して圧倒したが、ベオウルフモンには歯が立たず、

【ツヴァイ・ハンダー】で一刀両断されて破れ去った。

デスモン曰く、【スピードだけはデーモン様より上】らしい。

カリスモン 究極体 人造獣型 ウィルス種

四天王の二番手。拓也達と戦う為に、聖祥大付属小学校を襲撃した。

立ちはだかったタイタンドラモンと戦い、パワーで圧倒してダウンを奪って見せた。

だが、融合形態のキングドラモンには自慢のパワーでも圧倒され、キングドラモンの

必殺拳・【メテオインパクト】の前に撃沈・消滅した。

ムゲンドラモン 究極体 マシン型 ウィルス種

四天王の三番手。砂漠で自分の部下達を使って孝俊を追い詰めた。

だが、救援に駆け付けた龍輔が進化したブレードドラモンに気圧されて逃走。

部下達もアツサリと全滅させられてしまった。

デスモン 究極体 魔王型 ウィルス種

一応、四天王の四番手。デーモンの側近でもあり、頭脳労働はこいつの役目。

デーモンには全幅の信頼を置かれ、デスモンもまた、デーモンに心からの忠誠を誓っている。

逃げ帰って来たムゲンドラモンを見て龍輔を警戒していたが、スタミナ切れを起こした

所を狙って、大量のデジモン軍団で襲撃をかけた。

だが、輝一や友樹、孝昭や高雄に妨害され、更にはスピリットを手に入れて進化した

アリサとすずかにも苦戦する羽目となってしまった。

プレシア・テストロッサ 40歳 女 魔導師ランク：条件付き

SS 魔力光：紫

優秀な魔導師であり、フェイトの母。

昔、ヴァンデモンが引き起こした魔導実験の事故で実子のアリシア・テストロッサを

亡くし、その後【プロジェクトF】に参加。

そのクローンでフェイトを作り、ジュエルシードを集めさせた。

当初はフェイトに虐待を加えていたが、自らの過ちに気付き、事件解決後は孝昭の元で

比較的自由な保護観察を受け、フェイトと共に平和に暮らすようになった。

保護観察が終了した今では、孝昭の庇護の元、管理局で技術局員をしている。

かつての狂気に満ちた雰囲気は何処にも無く、今は穏やかで優しいお母さんである。

少しだけ孝俊についても本人から教えられており、管理局に対して完全に信用はしていない。

現在は、パラレルモンと共に闇の書の調査を行っている。

パラレルモン 究極体 突然変異型 ウィルス種

半年前の【ジュエルシード・VV事件】でヴァンデモンに脅されて無理やり働かされていたデジモン。

本来、冷徹な性格の筈なのだが、どういつ訳かとても気弱で臆病。そんでもって、何故か言葉が訛っている。

仲間の身を案じ、ピンチに陥ったなのは達を見て拓也達を呼び出すなど、

とても良い奴である。

現在は孝昭の庇護の元、管理局でプレシアと共に技術局員をしている。

プレシアとは良い友人関係を築いており、フェイトやアルフとも仲が良い。

頼りなさそうだが、これでも究極体の端くれである為、完全体以下に後れは取らない。

氷見友樹 15歳 男 魔導資質無し

『成長した氷の闘士』、『もう非力とは言わせない』

身長：166cm 体重：55kg

かつて、拓也や輝二と共にデジタルワールドを旅した仲間。

背がだいぶ伸びており、同年代でもかなり背が高い。

力も付いて高い戦闘力を持つようになって、今回は龍輔を手伝う為に輝一と共にやって来た。

スピリットの使用に躊躇するアリサとすすかを励まし、戦う事を決意させた。

氷のスピリット

チャックモン（魔導師ランク：S - 相当） 必殺技：スノーボンバー

ブリザーモン（魔導師ランク：S＋相当） 必殺技：アヴァランチ
ステップ

木村輝一 17歳 男 魔導資質無し

『光の闘士の兄』、『正義の闇の騎士』

身長：174cm 体重：64kg

友樹と同じく、拓也達と共にデジタルワールドを旅した仲間。

闇のスピリットを持っている。

当初はケルビモン（悪）に操られて敵対していたが、双子の弟である輝二との戦いの末に

支配から解放され、真の闇のスピリットを手に入れて仲間に加わった。

輝二とは幼い頃に両親が離婚した為に離れ離れになっていたが、旅が終わった後に

ちよくちよく会うようになった。

今回は夏紀に頼まれて友樹と一緒に龍輔の手伝いにやって来た。

余談：自分達の住む世界では、孝俊・高雄と共に野球部に所属。

2年生ながらスタメンを張り、5番〜8番のどれかを務める
事が多い。

闇のスピリット

レーベモン（魔導師ランクS - 相当） 必殺技：エントリヒメテオ
ール

カイザールレオモン（魔導師ランクS + 相当） 必殺技：シュバルツ・
ドンナー

道具紹介

D - スキャナ

使用者（今作）：神原拓也、面林孝俊、四谷高雄、源輝二、中林雄
人、

木村輝一、氷見友樹、アリサ・バニングス、月村すずか

デジモンに進化する為の道具。左手にデジコードを発生させ、それ
をスキャンすると進化できる。

ヒューマンスピリットとビーストスピリットがある。

また、それを融合したダブルスピリットが存在するが、人間界では
デジヴァイスに
負荷が掛かる。

今回は高雄もいる為、メンテナンスがしっかり行われているのでW
スピリットの発動が
可能となった。

D・ブレス 使用者（今作）：面林龍輔

先代の特殊型スピリットを扱う龍輔達が使う。

両手首に装着されており、右にヒューマン、左にビーストがある。

実はコマンドを入力した後、本人の強い意志によって進化するようになっている。

その為、進化するタイミングは本人次第なので、龍輔達親世代は変身ポーズをとったりする事もあるらしい（何）。

・・・とりあえずこんなところでは、次回もお楽しみに！

続く

番外第4回 たまには予定を変更する事だつてある気がする（後書き）

はい、これでなんとか登場人物紹介終了です。

何か抜けてる気もしますが・・・まあ、思い出したら追加します

（何）

では、次回からまた本編に戻ります。

それでは

第59話 夢は逃げる場所じゃない気がする 後編(前書き)

はい、第59話です。

まず、最初に一言・・・

3ヶ月半も空けてしまっただろうもすみませんでしたああアアア！！
(ジャンピンググ土下座)

もう、色々忙しかったり精神的に落ちてたりで色々ありまして・・・

これからはこんなに感覚が空かないように精進したいと思います・・・

1434

フェイト「本当に久しぶりです(苦笑)では、第59話・・・始まります！」

第59話 夢は逃げる場所じゃない気がする 後編

【帰還】

第59話副題「玄武の双魂、そして火の

デスモンの率いるデジモンの大軍を前に、アリサとすずかが太陽と月のスピリットで進化して立ちふさがる。

孝俊、高雄、輝一、友樹、孝昭、そして龍輔も団結して立ち向かう。

アリサとすずかはスピリットの性能の高さも手伝ってか、完全体相手にも優位に戦いを進め、必殺技を決めて勝利する。

一方では孝昭も、苦戦しながらもボルトモンの油断した所を突いて、零距离からのネオ・ストライクブレイカーで倒す事に成功する。

その反動で傷ついた孝昭を狙ったグランクワガーマンも、高雄のタイタン・ノヴァによって撃墜された。

そして、なのは達は闇の書に吸収された拓也を助けるべく、再び戦闘を開始しようとしていた。

無事、拓也を脱出させる事が出来るのか・・・
そして、闇の書に吸収されている当の本人は・・・？

*

「ん……ここ……は……?」

拓也が目を覚ますと……何故か森の中にいた。
すると拓也は、自分の後頭部に柔らかい感触を感じた。

「やっと目が覚めたみたいね……お寝坊さん」

「い……ずみ……?」

拓也の目に映ったのは、流れる様な金髪のロングヘア。
紫のニット帽のような帽子を被り、優しい笑みを浮かべる女性。
かつて、拓也や輝二と共にデジタルワールドを旅した仲間……
おりもといすみ
織本泉の姿だった。

そして、後頭部の柔らかい感触は……泉の膝枕だったりする。
しかし、なのは達の世界には来ていない筈の彼女が何故……?
拓也の中にはそんな考えが渦巻いていた。

(そうか……これは……夢の世界……か)

しかし、すぐに自分が闇の書の意志によって闇の書の中に吸収さ

れた事を思い出し、
ここが夢の中の世界だと勘付く。

(・・・静かで・・・平和だ・・・禍々しい気配も無い・・・)

拓也が少し向こうを見ると、仲間達が楽しそうに笑っている光景が映る。

高雄や孝俊がいつもの様にバカをやって、雄人や輝二に突っ込まれる。

周りでは輝一が、友樹が、純平が・・・それを見て面白がっている。

(そつだ・・・これが・・・俺が夢見た・・・平和な世界・・・平和な日常・・・)

人間界も、デジタルワールドも・・・デジモンによる争いが無い平和な時間。

拓也はずっと、それを望んでいた・・・

泉の膝枕から起き上がると、ゆっくりと皆の元に歩いて行く。

「平和な世界・・・やっぱり良いわね」

「ああ、そつだな・・・」

夢だと解っていないながらも、この状況に身を委ねる拓也。

果たして・・・抜け出せるのだろうか・・・？

*

一方、港で尚も激戦を続ける龍輔達は・・・

「・・・こりゃ埒が明かな・・・」

ふと、ブレードドラモンが呟くと、剣の刀身を後ろにスライドさせる。

すると刀身が一気に半分程度になったではないか。

「斬龍剣・・・ダガーモード！」

自身の武器・・・斬龍剣の刀身を短くしたダガーモードに切り替える。

そして、すぐさま敵の大軍に向けて走り出す。

「せい！はあ！とう！でい！らあっ！だらあっ！おうりゃっ！」

ザン！ザン！ザン！ザン！ザン！ザン！ザン！ザン！ザン！

先程までを遥かに上回るスピードで敵を斬りまくるブレードドラモン。

これがダガーモード最大の長所である。

攻撃範囲が狭まった代わりに、居合斬りにも匹敵する速度で敵を斬る事が出来るのだ。

「ったく、あの親父・・・何が体力切れだ・・・追い込まれて余計元気になってんじゃないかねーかよ・・・」

「窮地になればなるほど、その力を引き出す・・・か。流石は龍輔さんだ・・・」

成熟期デジモンの大軍をバツバツサと斬り伏せる龍輔を見て、苦笑するグリーンドラモン。

その横では、レーベモンが杖を構えたまま、ブレードドラモンを見ていた。

「・・・ば、馬鹿な・・・あの男、もうガス欠では無かったのか・・・!?」

一方、デスモンもブレードドラモンの土壇場での動きに驚愕していた。

進化する前の人間・・・龍輔は間違いなく消耗していた筈。

しかし、目の前にいるデジモンは動きが鈍るところか、その精度・キレを増しているようにすら見える。

だが、デスモンは知らなかった・・・

無力だと罵っていた人間が、土壇場まで追い詰められると時に信じられない力を発揮する事があると言う事を。

いわゆる、火事場の馬鹿力と言う奴である。

「・・・さあ、どうした・・・こんなもんで終わりじゃねえよな・・・」

まるで猛獣の如き眼光でデジモン軍団を睨みつけるブレードドラモン。

隙を見せれば即喰らい付いて来るような・・・そんな感じである。

「ぐっ・・・お、おのれ・・・!」

「たあああああつ!!」

と、そこに・・・デスモンの正面からサレナモンが超スピードで突っ込んでくる。

そして、スピードに乗った拳を叩きつけようと拳を振りかざす。

ガシッ!

「えっ・・・あぐうっ!?!」

だが、デスモンはそれを易々と受け止めると、腕を伸ばしてサレナモンの首を掴んで持ち上げる。

「小娘が・・・この私にそのような物が通じるとでも思ったか・・・！」

ギリギリと締める力を強めるデスモン。

決してパワーが強い方では無いサレナモンの力では外せそうもない。

「このっ！すずかを離しなさい！」

「ふん、もう一人いたか・・・！」

サレナモンを助けようとデスモンに飛びかかるフレイアモン。だが、デスモンは焦る事無くもう片方の腕を構えると・・・

シュルルッ！ガシッ！

「うあっ！は、離しなさい・・・よおっ！」

なんと、腕が鞭のように伸び、サレナモンと同じ様にフレイアモ

ンの首を掴んでしまった。

いかにパワーに優れるとは言っても、完全体とほぼ同等であろうヒューマンスピリット

では、究極体のデスモンには敵わない。

どんなに抵抗しても、2人を掴むデスモンの腕は全くビクともしない。

「ぐっ……うう……【ムーンスレイブ】っ！」

「このっ……【フレイムソード】！」

トドドンッ！ズバンッ！

咄嗟に2人が放った爆発する羽根と炎の剣がデスモンに炸裂する。
だが……

「ぐふふふ……その程度、このデスモンに効くと思ったか……？」

「そ、そんな……」「の、ノーダメージ……!？」

爆発が晴れると……そこには無傷のデスモンがいるではないか。
それを見て2人は愕然とする。

「このまま2人も絞め殺してくれるわ……!」

腕に力を込めようとするデスモン。

しかし次の瞬間……1つの大きな影がデスモンに飛びかかった！

「【アヴァランチステップ】！！」

ドガガガガガガッ！！

「ぬぐううっ！？」

ブリザーモンが無防備になったデスモンの懐に飛び込み、武器のトマホークの連撃を喰らわせたのである。

流石にビーストスピリットの技の直撃が少しは効いたのか、デスモンがフレイアモンとサレナモンから手を離す。

「けほっ……けほっ……あ、ありがとうございます……」
「無闇に突っ込んだんじゃダメだ。相手は究極体デジモン……ヒュー
マンスピリットじゃ
勝ち目は極度に薄いよ」

自分を助けてくれたブリザーモンに礼を言うサレナモン。
ブリザーモンは自身の経験から究極体の力量を弁えていた為、
2人に注意する。

「お、おのれ若造が・・・小癩な真似を・・・！」

ブリザーモンに攻撃された場所をさすりながら立ち上がるデスマン。

その姿は・・・戦闘用に黒く染まっていた・・・

*

その頃、海上では・・・なのはが闇の書の意志と対峙していた。だが、フェイトとヴォルフモンがいなかった。

実は、拓也が吸収されたのをチャンスと見たムゲンドラモンが、再び部下を引き連れて襲い掛かって来たのだ。

更に、部下達をヴォルフモンに差し向けてフェイトと分断させ、自身は離れた所で

フェイトと1vs1になったのである。

ヴォルフモンにWスピリットのベオウルフモンになられては恐らく勝ち目が薄い・・・

そう思って分断させたのだ。

「フフフ・・・貴様ノ様ナ小娘、軽ク捻リ潰シテくれル・・・」

「そう簡単には・・・やられない・・・！」

サイズフォームのバルディッシュを構え、ムゲンドラモンと対峙するフェイト。

しかし、ムゲンドラモンと比べるとフェイトが一際小さく見える。

ムゲンドラモンは、全身フルメタルで覆われ、更に圧倒的出力を持つデジモンである。

機動力こそ少々不安はあるが、それを補っても余りある程の攻撃力・防御力を持つ。

堅固な防御力を誇るなのはの障壁さえも軽々と砕いてしまっただろう。

ましてや、なのはの物に比べれば明らかに弱いフェイトの障壁では、無い物と一緒にである。

（相手は見るからにパワー型・・・しかも究極体だ。身体も堅そうだし、真正面から当たれば私どころか、なのはの防御でも破られると考えるべき・・・）

フェイトは冷静に、ムゲンドラモンをとりあえず見た目から出来る限り分析する。

現に、フェイトの分析は間違っではない。

かつて、デジタルワールド最強とまで言わしめたムゲンドラモン。少なくとも、群を抜いたパワーとフルメタルの全身・・・上位の完全体でも簡単には傷を付けられない。

「来ナイノカ？ナラバ俺カラ行クゾ・・・！！」

ムゲンドラモンがバーニアを吹かしながら、フェイト目掛けて一直線に飛んでくる。

フェイトは、その威圧的な凶体に怯みそうになるも、なんとか持ちこたえて回避する。

（くっ・・・接近して来ただけでこの威圧感・・・でも・・・こいで引く訳には・・・いけないんだ！）

フェイトはムゲンドラモンから距離を取ると、カートリッジを2発ロードする。

そして・・・前回使えなかった【あの】形態を発動させた！

（孝俊・・・力を貸して・・・！）

【Load cartridge・・・Dragon form
set up】

鎌のハーケンフォームから、剣の形をしたドラゴンフォームへと変形を遂げる。

龍のスピリットの基礎データを組み込み、出力を上げたバルディッシュの新形態だ。

前回、砂漠での戦闘でシグナムに対して起動させたが、仮面の男によって妨害され、

結局使う事の無かったこのドラゴンフォーム。

フェイトは、バルディッシュから感じるエネルギーに目を細める。

(凄い・・・まるで孝俊が傍についてるみたいだ・・・！)

バルディッシュがいつも以上に軽く感じているフェイト。

まるで、孝俊が共にバルディッシュを持っていてくれる様な・・・
そんな感覚だった。

「フン、形ヲ変エタクライデドウニカナル物デハナイゾ・・・！」

「・・・そんな単純な物じゃない！」

次の瞬間、フェイトが瞬間的にムゲンドラモンの足元に現れる。
そして、迷わずバルディッシュを振り抜いた！

「はぁあっ！」

ギイーン！

「・・・スピードはナカナカダツタガ、ソノ程度ノ攻撃・・・効ク
ト思ツタカ」

「つく・・・！」

フェイトが振り抜いたバルディッシュは、見事にムゲンドラモンの右足に直撃した。

だが・・・ムゲンドラモンはまるで堪えた様子も無く、平然としているではないか。

出力を増したバルディッシュでさえ、ムゲンドラモンの装甲には傷を付けられない・・・

フェイトはその事実にはショックを受けそうになるが・・・相手が究極体である事を

思い出し、すぐにムゲンドラモンから離れる。

（予想してたとは言え・・・流石に目の当たりにするとショックだな・・・）

「今度八・・・コッチノ番ダ・・・【ブースタークロウ】！」

ムゲンドラモンが右手を構えると、その右手がフェイト目掛けて飛んで行く。

「（速度は速くない・・・これなら避けれる）・・・っあ!？」

シュパパッ!

フェイトは紙一重で回避するが、それが良くなかった。

ムゲンドラモンの放ったブースタークロウは、あまりの威力ゆえ

に衝撃を纏っている。

それがカマイタチの様になり、フェイトのバリアジャケットを切り刻んでしまったのだ。

基本形態のライトニングフォームだから良かったが、ソニックフォームだったら今ので

落とされていたかもしれない。

「気が変ワツタ・・・スグニ八落トサン。ジツクリ痛メ付ケテズタスタニシテヤルゾ・・・！」

「つく・・・負けて・・・たまるかぁ・・・!!」

フェイトは、今の攻撃でも怯まずにムゲンドラモンに立ち向かっていく。

攻撃を当てては離れ、当てては離れ・・・ヒット&アウェイでひたすら攻め続ける。

しかし、ムゲンドラモンも大人しく攻撃を受け続ける訳ではない。右手の【ブースタークロー】を主体とした肉弾戦で、じわじわとフェイトにダメージを与えて行く。

フェイトの攻撃もまるで通じる素振りを見せない。

フェイトとムゲンドラモン・・・どちらが有利かは誰の目にも明らかだが、それでもフェイトは諦めない。

かつて孝俊に教えられた言葉【弱気は最大の敵】・・・これを胸に秘めて戦っていた。

確かに実力では負けているかもしれない。しかし、闘志だけは消さない。

どんなに押されようとも、フェイトの目から光が消える気配は無かった。

*

(眠い………眠い………んん……?)

真つ暗な空間の中……はやてがうつすらと目を開ける。

そこには、銀の長い髪と赤い瞳の美しい女性が見えている。

『そのままお休みを……我が主。貴方の望みは、全て私が叶えます。』

目を閉じて……心静かに夢を見て下さい』

はやてに眠るよう語りかける女性。

全ては夢の中で……望みは全て自分が叶える……と。

一方、外ではなのはが闇の書の意志と戦闘を繰り広げていた。

闇の書の意志の攻撃をラウンドシールドで防ぐのはだったが、あっさりと破壊されてしまう。

更に、拳に黒い魔力を纏ったパンチをレイジングハートで受け止めるが、あまりの

衝撃を受け切れずに、海に叩き込まれてしまった。

「っはぁ……はぁっ……はぁっ……はぁっ……はぁっ……！」

「……………」

海から出て来るのはと、それを無言で見つめる闇の書の意志。
あまりに圧倒的な実力差だが、なのははまだ諦めない。

（リンディさん、エイミィさん、戦闘位置を海の付近に移しました！市街地の火災をお願いします！）

「大丈夫、今、災害担当の局員が向かっているわ！」

（それから闇の書さんは、駄々っ子ですが、何とか話は通じそうです。もう少しやらせて下さい！）

なのはは念話でリンディに市街地の火柱を鎮圧する様に依頼する。リンディは既に災害担当の局員を向かわせており、それをなのはに伝える。

海岸付近では、未だに高雄や龍輔がデジモン達と戦闘を繰り広げているが、そこさえ避ければすぐに鎮圧に向かう事が出来る。

「行くよ、レイジングハート！」

【YES my master】

なのはカートリッジのマガジンをレイジングハートにセットする。

そして、残りのマガジンを確認する。

「マガジン残り3本、カートリッジ18発・・・スターライトブレイカー、撃てるチャンスあるかな？」

【手段はあります】

レイジングハートの言葉を聞き、なのはは眼を見開く。

しかし、次に発した言葉に驚く・・・

【Call me Exelion mode】

「ダメだよ！アレは本体の補強をするまで、使っちゃダメだって・・・！あたしが、コントロールに失敗しちゃったら・・・レイジングハート、壊れちゃうんだよ!？」

【Call me・・・Call me my master】

「・・・！そうだ・・・レイジングハート、その前にアレを使おう！拓也さんの力を・・・!」

レイジングハートの言う通り、エクセリオンモードを使うかどうかどう

か迷うなのは。

しかし、それ以外に1つの物が思い浮かんだ。

そう・・・火のスピリットの基礎データを組み込んだ・・・アレを。

再び、真つ暗な空間の中では、はやてが自分の望みが何かを考えていた。

目の前の女性の言う通り・・・夢を見る事なのか・・・

(あたしは・・・何を望んでたんやっけ・・・?)

『夢を見る事・・・悲しい現実は・・・全て夢となる。安らかな眠りを・・・』

(そう・・・なんか・・・?)

(私の・・・ホントの・・・望みは・・・)

*

「お前も・・・もう眠れ」

「いつかは眠るよ・・・だけどそれは今じゃない。今は、はやてちゃん、拓也さんを

助ける！それから、あなたも！」

（拓也さん・・・私に力を貸して下さい・・・鍛え上げた貴方の・・・燃え上がる魂を！）

なのはは少し目を閉じて意識を集中する。
そして、目を開けて起動コードを叫んだ！

「レイジングハート・バーニングモード・・・ドライブ！」

【Ignition】

次の瞬間、レイジングハートが鋭利に変化し、先端に真っ赤な魔力刃が出現する。

柄の部分には【Burnig】と走り書きされ、金色の部分はメタリックレッドに変わる。

半年前、^{ヴェノム}Vヴァンデモンとの戦いで見せた【サラマンダーモード】と似ているが、
カートリッジによる出力で更に強力になっている。

「繰り返される悲しみも、悪い夢も、きつと終わらせられる・・・」
「！」

*

「ちっ・・・無駄に数が多い・・・相変わらず人海戦術だけは得意だな・・・奴ら」

「あっちじゃ友樹君達がリーダーっぽいのとやり合ってるが・・・あいつは恐らく俺が

やり合ったカリスモンと同等かそれ以上・・・ビーストスピリットじゃ恐らく勝てねえぞ・・・」

港では、グリーンドラモンとタイタンドラモンがデジモンの大軍を相手に奮戦していた。

2人は戦いながらデスモンと戦う友樹達の方を見る。

高雄はデスモンをカリスモンと同等以上と評し、戦況が厳しい事を見抜いている。

ビーストスピリットで一度カリスモンにダウンさせられた彼だからこそ解るのだろう。

しかし、敵デジモンが多過ぎて援軍に行けそうもない。

それは輝一や龍輔も同じであった。

このまま消耗戦になれば、まずデスモンとやり合っている友樹・アリサ・すずかが危ない。

「このままじゃジリ貧だ・・・しかし、これだけ多いと技をチャージする時間も無い・・・!」

「俺達の必殺技はチャージしなきゃ本来の威力が出せんからな・・・つとー!」

襲い掛かって来る敵達を叩き伏せながら話す2人。

【ドラゴンカノン】も【タイタンノヴァ】も、チャージに時間が掛かると言う欠点がある。

速射でも撃てるが、威力が大きく下がってしまう・・・しかし、他の射撃・砲撃系の技では決め手に欠ける。

相手が単体や2、3体くらいならそれでも何とかなる。しかし、今回は数え切れないほど多いのだ。

このままではこっちがやられてしまうのが目に見えている・・・打つ手が無いかと思われた次の瞬間・・・!

「【ダイナストライク】!!」

ギョルルルルルッ! ドガガガガガガッ!

なんと、電撃を纏った大きな甲羅が凄まじい回転でデジモン達を蹴散らして来たではないか!

それは孝俊達に近付き・・・

ドゴッ!

「おぼろおっ!?!」

「高雄おおっ!?!」

「あ、すみません・・・止まるタイミング間違えました」

・・・タイタンドラモンを跳ね飛ばして止まった。
それは・・・雄人が進化したフォートレモンだった！

ドシヤッ

「お、お前・・・なんか俺に恨みでもあんのか・・・」

きりもみ回転しながら落ちて来たタイタンドラモン。

こんな状況でもこんな目に遭う彼。ある意味呪われているのかもしれない（汗）。

「そ、それより大変なんです！拓也さんが闇の書に吸収されてしまつて・・・！」

「な、何だと!?」「蒐集じゃなくて吸収・・・!?」

「説明してる時間は無いです！ここは僕がなんとかしますので、2人は闇の書の意志の方へ！」

雄人の言葉に驚く2人。

だが、雄人の言う通り、説明している時間は無い。

「そうだな・・・だが、行くのは俺達のどちらかの方が良い。こっ

ちの戦力を少なく
するのもきつい」

「なら・・・孝俊、行くのはお前の方が良い。闇の書の意志ははや
てちゃんだ・・・」

お前の方が俺より適任だろう」

雄人の言葉に頷く孝俊だが、行くのはどちらか片方を提案する。
それを聞いた高雄は、即座に孝俊を指名する。

短いながらもはやと家族として過ごした孝俊ならば、自分が行
くよりはずっと良い筈
だと判断したのだ。

「・・・あそこに見えるな。なんか戦ってる・・・ってアレはフェ
イトと・・・ムゲンドラモン!？」

「何い!？」

グリーンドラモンが海上の方を見渡すと・・・
なんと、ムゲンドラモン相手に必死に戦うフェイトの姿が映った
のだ。

「まずい!ムゲンドラモン相手じゃフェイトにはきつ過ぎる!」

「スピードこそ速いが一撃まともに喰らえば終わりだぞ・・・!」

そこに、デスモンから距離を取って下がって来たブリザーモンが現れる。

「でしたら、僕があそこまで道を作ります!」

そして、海上に向かって息を吹き付ける。

すると・・・見る見るうちに氷の道が出来て行くではないか。

「すまんブリザーモン! 高雄、雄人・・・あとは任せた・・・!」

孝俊は体力消費を抑える為に一度進化を解き、氷の道を歩いて行く。

氷で滑るので、あまり走れなかったが・・・一步一步、歩みを進めて行った。

その表情は・・・今までに無い、威圧感に溢れていた・・・

「おのれ、また貴様か・・・!」

雄人を見て、表情を歪めるデスモン。

彼の出現で、計画が微妙に狂ってしまっているのだ。

なのはや拓也の動きが封じられた際にも1人だけバインドを逃れる。

闇の書の意志や自分の攻撃を防いで拓也を守る。
雄人には、これで3度も邪魔されてしまった事になる。

「さてと、面白い物を見せてあげましょうか・・・！」

「何・・・！？」

雄人が一度進化を解き、再びD-スキャナを構える。

そして、左手に複数のデジコードが現れる。

そのデジコードは高雄の時と同様、従来の白では無かった。

雄人のデジコードは・・・黄緑色に光っていた・・・！

「Wスピリットエボリューション！！」

雄人がそれをスキャンすると・・・激しい電光が雄人を包む。

「うううう・・・おおおおおおおっ！！！！」

電光が収まり、その中から現れたのは・・・

銀に眩しく光る装甲を纏い、メカメカしい雰囲気を持った、巨大な二足歩行の亀だった。

それはメガトータモンとフォートレモンの力を1つにした玄武のWスピリット。

「メガロモン！」

メガロモン ハイブリッド体 サイボーグ型 バリアブル種 オリジナル

必殺技 メガロブラスター

（両手から発射するエネルギー砲。プラズマバスターの20倍の破壊力を持つ）

ボルティックストライク

（ダイナストライクの強化版。電撃・回転がそれぞれ3倍になっている）

得意技 ガトリンググナツクル

（その名の通り、ガトリングの如き高速パンチ。

キングドラモンのガトリングハンマーには及ばないが、一撃の重さが約30tある）

ヘビースクリュー

（上空から身体をドリル回転させ、敵をドリルキックで攻撃）

シルバリージス

（銀色の甲羅の形をしたシールドを発生させる。並の究極体の攻撃なら楽に耐える）

雄人が玄武のWスピリットで進化した姿。

言わずもがな、防御力は飛び抜けて強化されており、生身での防御力は勿論のこと、

防御技【シルバークライシス】の硬度も凄まじい。

相変わらず地味な存在ではあるが、機動力に劣る以外は特に弱点が見当たらない

バランスのとれた戦士である。

必殺技のメガロブラスターは、玄武のスピリットとしては初のメイソンの砲撃技である。

威力は並の完全体ならば20体は確実に吹っ飛ばせる程。

戦闘力が精神力に左右されるスピリットの中で、殆ど揺らがない頑強な精神力を持つ。

余談だが、この点については、親世代の龍輔も称賛する程であるらしい。

メガロモンは重厚な鎧を銀色に光らせ、デスモンを睨みつける。

ビーストスピリットとは比べ物にならない威圧感、デスモンと対峙するには十分過ぎる程だった。

「ここからは……僕が相手です！」

「小僧……小癩な……！」

*

その頃、夢の世界にいる拓也は・・・
大きな木の下で、泉と並んで座っていた。

「・・・平和だな・・・」

「そうね・・・」

拓也は一言そう呟いて周りを見回す。
そして・・・ゆっくりと立ち上がる。

「けど・・・やっぱりこれは夢でしかない。そうだろ？」

「うん、そうよ・・・でも、夢でも良いじゃない？一緒にいよう？
ここでなら・・・」

「ずっと拓也や私達が望んだ、争いの無い平和な世界があるから・・・」

泉が悲しげな表情で、拓也を見上げる。

しかし、拓也は背を向けたまま・・・言った。

「・・・所詮は夢だ。それに・・・眠って見る夢ってのは・・・い
つか覚めるからそう言うんだ」

「・・・」

「それによ・・・ホントのお前なら・・・俺の知ってる泉なら・・・」

【苦しんだり悲しんだりしてる子がいるなら、寝てないでさっさと助けて来なさい！】

って言つて、俺の顔引っ叩くかケツを蹴っ飛ばしてる筈だからな」

拓也は振り返ると、ニツと笑つて泉を見る。

それを見た泉は、一瞬驚くも・・・諦めたように苦笑した。

「そっか・・・そう言つ事なら・・・もう引き留める理由も無いわね。

でも、私は闇の書の意志があなたの記憶から引っ張り出した様な物だから、これも

ある意味ホントの私なんだけどね・・・」

「ははっ、だとすりゃなんか変なもんでも食つたんじゃねーのか？」

「もう、真面目な話なのよ？」

からかうような拓也の言葉に、やれやれと肩をすくめながらも反論する泉。

しかし、すぐに真面目な顔に戻る。

「悪い悪い、まあ・・・この戦いが終わったらまたちゃんと帰って来るからよ・・・」

「うん、待ってるから・・・絶対勝つて帰ってきなさいよ！じゃなきゃホントに引っ叩くからね・・・」

泉はそう言つと・・・周りの風景と共に、光となって消えて行つた。

拓也はそれを見渡した後・・・D-スキャナを構える。

「さてと、心配掛けちまつてるだろうし・・・行くとするかあ!!」

大きな爆発と共に・・・拓也の身体は夢の世界を脱したのだった・・・!

*

その少し前、海上では・・・

「っ・・・ぐ・・・ふうっ・・・!!」

「小娘ニシテハナカナカシブトイガ・・・モウ限界ノ様ダナ・・・次デ落トシテヤル・・・!」

フェイトが満身創痍になりながらも尚、ムゲンドラモンと戦っていた。

しかし、ボロボロのフェイトに対し、ムゲンドラモンには多少の打痕があるだけ・・・

フェイトはあれから何度も何度も諦めずにひたすら打ち込んだ。

それでも、ムゲンドラモンはビクともしなかったのだ。

しかし、それ故に・・・ムゲンドラモンは気付いていなかった。

自分の身体に感じる違和感を・・・

(不思議だ・・・あそこまでやっても殆どダメージを受けなかったら、我ながら心が折れそうになるのに・・・まるで・・・第六感で何か希望を感じてるみたいに・・・)

フェイトもまた、不思議に思っていた。

これでもかと言う程打ち込んででもダメージが無いと普通は萎えてしまうところだが、

全くそれを感じないのだ。

無論、確証がある訳ではないが・・・それでもフェイトは自分の助けになる何かがある予感がしていた。

と、次の瞬間・・・小さく足音が聞こえた。

コッッ・・・

「ム・・・？」

コッッ・・・

「え・・・？」

ムゲンドラモンとフェイトが下を見ると、海上に氷の道が出来ていた。

そして、足音が少しずつ大きくなってくる。

コッッ・・・

「あ・・・ああ・・・！」

フェイトの目には・・・自身がずっと会いたかった、1人の男が映っていた。

それは、予感が・・・確信に変わった瞬間でもあった。

「キ、貴様ハ・・・！？」

「孝俊・・・！！」

氷の道の上には、静かに佇む孝俊の姿があった・・・！

そして彼の左手には・・・緑色に光る複数のデジコードが渦巻いていた・・・！！

続く

第59話 夢は逃げる場所じゃない気がする 後編（後書き）

はい、第59話終了です。

玄武のWスピリットがデビューしました。

そして最後には孝俊も登場・・・拓也も夢の世界から脱しました！

いよいよ、面白くなって来ます・・・多分！（おい）

では、次回予告・・・なのはちゃん、どうぞ～

なのは「まだまだ頑張るの！はやてちゃんも助けなきゃ！

次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第60話【積み重ねた
てとっても大事な気がする】お楽しみに、なの！」

第60話 積み重なってとっても大事な気がする（前書き）

はい、第60話です。

とりあえず前回みたいに間を置く事もなくて一安心しております
（苦笑）。

・・・それでも半月以上経過しておりますが（滝汗）

さて、久しぶりのスポーツ選手紹介コーナーです。

今回は・・・20世紀最後にして広島カープ唯一の200勝投手、
北別府学投手です。

北別府学（1957～）

所属：広島東洋カープ（1976～1994）

守備位置：投手 背番号：20（1976～1994）

広島東洋カープ唯一の200勝投手にして、黄金時代のエースの1
人。

球速は140km/hを超える事が殆ど無かったと言われているが、
それを補っても

余りある程のコントロールを持っていた。

プロ入り直後、当時のエースだった外木場義郎（完全試合含め、ノ
ーヒットノーランを

3度達成した大投手)等の先輩投手のスピードボールに圧倒され、コントロールを磨く事を決意したと言う。

そしてプロ3年目にはその磨き上げたコントロールを武器に2ケタ勝利を上げ、見事に

チームの主力に成長した。

その抜群に優れた制球力から、【精密機械】とまで呼ばれるようになる。

当時バッテリーを組んでいた達川光男からは、『ミットを動かさずに取れる』とまで評された。

1989、90年には10勝に届かず限界説も囁かれたが、翌91年には11勝を挙げて復活。

92年にも14勝を挙げる活躍を見せ、94年に引退するまでに通算213勝を挙げた。

作者にとって、津田・外木場に並んで最も好きな投手の1人である。

通算成績：515登板 213勝141敗5セーブ 1757奪三振 防御率3.67

通算213勝は日本プロ野球歴代18位。

先発勝利数200は歴代10位。

孝俊「北別府か・・・作者はガキの頃にたまたまテレビで見てたとか」

鷹「あの当時は凄い投手って認識しか無かったけどな。まだ幼稚園児だったし」

高雄「さて、いよいよ面白く(？)なって来た闇の書事件・・・」

なのは「第60話、始まるの!」

第60話 積み重なってとっても大事な気がする

第60話副題【閃光皇龍】

闇の書の意志に吸収された拓也。

彼の目に映ったのは、仲間である織本泉の姿だった。

夢でありながらも平和な世界に身を委ねるが・・・やはり夢は夢だと割り切って、

泉に別れを告げて脱出する。

一方で、なのはは闇の書の意志に、フェイトはムゲンドラモンにそれぞれ苦戦を強いられる。

しかし、2人は諦めずに新形態を発動させ、果敢に挑んで行く。

そして、ムゲンドラモンに圧倒されて満身創痍になりながらも闘志を消さないフェイトの前に・・・
遂に孝俊が・・・姿を現したのだった！

*

「貴様・・・マタヤラレニ来タノカ・・・物好キナ奴ダ」

「・・・・・・・・」

余裕の表情を見せるムゲンドラモン。

しかし、孝俊は一切表情を動かさず・・・D・スキャナを構える。そして、自分の横に降りて来たフェイトに声をかけた。

「・・・久しぶりだな、フェイト。なんか心配掛けたみたいで・・・すまんかった」

「うん・・・うん・・・！」

フェイトは、ずっと会いたかった思いが押さえきれなくなったのか、涙目になって

孝俊に寄り添っている。

孝俊はフェイトの姿を見て柔らかな笑みを浮かべ、次にムゲンドラモンを見る。

「どーやら、凄く頑張ったみたいだな・・・フェイト」

「うん・・・でも、殆ど堪えて無いみたいだよ・・・」

孝俊の言葉に、若干しよんぼりするフェイト。

しかし、孝俊はそれでも笑顔を崩さない。

「いや、それでもねーぜ？」

「・・・えっ？」

「俺と一緒に証明してやるよ。お前の頑張りが決して無駄じゃなかったって事をな」

そう言つと、左腕に渦巻く緑色のデジコードに・・・D・スキャナを近付ける。

それと同時に・・・うつすらと孝俊の身体が光り始める。

「見せてやるぜ・・・龍の力の一端をな」

そして・・・デジコードをD・スキャナで一気にスキャンし・・・叫んだ。

「ダブルスピリット・・・エボリューション!!」

スキャンした瞬間、激しい緑色の閃光が煌めき、その場を包む。そのあまりの強さにフェイトは目を閉じて両腕で顔を隠し、ムゲンドラマモンも思わず顔を背ける。

「おおおお・・・・・・うおおあああああああああああああああ
ああ!!!」

孝俊の咆哮が、海上に響き渡る。

その龍の雄叫びの如き声は・・・同じ海上にいるのはは勿論、
離れた港で戦闘中の
高雄達にも伝わっていた。

閃光が収まると同時に姿を現したのは・・・

2対のブースターを背中に備え、ブロスモンがグリーンドラモンの
装甲を纏った姿。

白と緑を基調とした、その凜とした佇まいは・・・今までに無い
物がある。

龍のWスピリット、その名は・・・

「エンペラードラモン！」

*

エンペラードラモン ハイブリッド体 マシン型 バリアブル種
融合形態 オリジナル

必殺技 エンペラーカノン

(閃光を纏った超エネルギー砲撃。威力はF^{ファイヤー}ドラゴンカノン
と同等かそれ以上)

ブラストカリバー

(帝龍剣(後述)の刀身に高密度のエネルギーを溜め、それ

を振り抜いて発射する)

クリスタルパニツシャー

(額のクリスタルからレーザーを放つ。プロスモンの時と違い、破壊力は桁違い)

ファントム・ドラゴンカノン

(砲撃直後に拡散するドラゴンカノン。拡散後の弾道は自分の意志で操作出来る。)

また、拡散した一撃一撃がドラゴンカノンの2倍の破壊力を持っている)

得意技 ドラゴンサイクロン

(ドリル回転のドロップキック。決してRXキックとか言うてはいけない)

メガ・マグナムランチャー

(マグナムランチャーの強化版。威力はおよそ10倍)

コスモスパルタン

(光を纏って突撃し、敵を撃ち貫く。決め技として多用する)

インパルスナックル

(超高速のロケットパンチを相手にぶち込む。厚さ200mの鋼鉄も易々とぶち抜く。)

グリーンドラモンのジェットナックルと比べ、3倍のスピードと威力を持つ)

龍のヒューマンスピリットとビーストスピリットが一体化した姿。プロスモンがグリーンドラモンの装甲を纏ったような格好をしている。

別名・【閃光皇龍】とも呼ばれる龍のWスピリット。

体はクロンデジゾイドを強化したクロンデジゾイド・ネオ（本作オリジナル物質）で

出来ており、玄武のWスピリットに次ぐ硬度を誇る。

装甲はグリーンドラモンの時と比べ、ダイヤモンドとガラスくらいの違いがある（何）。

その防御力は、グリーンドラモンが生死の境を彷徨う程の攻撃を受けても全くビクともしない。

武器は機龍牙の5倍の破壊力を持ったレーザーブレードの【帝龍剣】。

背中には2対4つのブースターが装備され、グリーンドラモンよりも高速で飛行が出来る様になった。

パワー・スピード共にバランスの取れたデジモンである。

親友・キングドラモンとのコンビネーションは抜群で、全く隙が無い。

剣を使った戦闘はベオウルフモンすら上回り、全スピリット中で最強を誇る。

また、上記の技の他にも、多彩な剣技の数々を持っている。尚、キングドラモン進化時の高雄と違って、孝俊の性格が変わる事は無い。

*

「ぬおおああああああっ!!」

気合一発、エンペラードラモンが雄叫びを上げる。

すると、立っていた周辺以外の氷が砕け散り、海面には大きく波紋が広がる。

(す、凄い……! グリーンドラモンとはまるで比べ物にならない……!)

フェイトは、エンペラードラモンの発するエネルギーに、内心で驚く。

そのエネルギーは、フルサイズ時のグリーンドラモンを大きく凌ぐ物だったのだから。

「さあ、かかってくる……!」

「面白い……叩き潰シテクレル……!」

エンペラードラモンがブースターを噴射し、空中に浮かぶ。

フェイトもまた、それを追ってゆつくりと浮かび上がっている。

ムゲンドラモンもまた、バーニアを吹かして移動する態勢に入っていた。

「フェイト……まだやれそうか？」

「大丈夫……なのはや輝二さんが頑張ってるんだ……私だけへばってなんかいられないから」

エンペラードラモンの問いに、バルディッシュを握り直すフェイト。

まだ気力は十分にあるようだ。

「よし、ならちよっと耳貸せ」

「……はい」

フェイトの返答を聞いて、エンペラードラモンがフェイトに相談しようとする。

そして、エンペラードラモンに言われてフェイトが差し出したのは……

……耳だった。

「わあおう!?!?・・・な、なんだ作り物か・・・(高雄のポケが伝染しつつあんのかな・・・)」

もつとも、作り物ではあるが・・・これには流石のエンペラードラモンも仰天した。

高雄と過ごす事も多かったせいか、フェイトに少しずつポケが浸透している様だった・・・

ちなみに、遠くで見ていたムゲンドラモンも少しビックリしてたのは余談である。

「・・・で・・・して・・・な・・・を・・・すれば・・・まあ、作戦と呼べるようなもんでもないけどな・・・」

「・・・うん、解った・・・!」

気を取り直したエンペラードラモンは、何やらぼそぼそと耳打ちして、戦法を相談している。

フェイトもそれを了承し、2人は空中に並び立って戦闘態勢を取る。

「っしや!行くぞおっ!」

エンペラードラモンがブースターを吹かすと、その重厚な身体からは想像もつかないスピードで動き出す。

ブロスモンやグリーンドラモンにもブースターは付いていたが、1対だけだった。

それに対し、エンペラードラモンには2対ある上、更に出力も上がっている。

攻撃・防御・機動力・・・全てにおいて大きくパワーアップしている点については、

十闘士のスピリットと全く違いは無い。

「っ だらあああっ！」

ドオオンッ！

「グハアッ!？」

ブースターの勢いそのままに、ムゲンドラモンの上半身に殴りつけるエンペラードラモン。

それをまともに喰らったムゲンドラモンは、落下して海面に叩きつけられた。

（凄い・・・私がどれだけ打ち込んでもビクともしなかった奴が・・・！）

しかもあの威力・・・グリーンドラモンより遥かにパワーが上がっている・・・！）

エンペラードラモンの攻撃力に、啞然となるフェイト。
フェイトとしては、Wスピリットに関してはカリスモン襲撃時に
高雄が進化した
キングドラモンを見ている。

その時も、ビーストスピリットとWスピリットの大きな差を目の
当たりにしている。

「オ、オノレ小僧・・・ヤハリアノ砂漠デ俺自ラ仕留メテオクベキ
ダツタカ・・・！」

バーニアを吹かして再び浮かび上がるムゲンドラモン。

前回戦った砂漠で孝俊がグリーンドラモンだった時に、自らが出
ずに高見の見物を

していた事を悔やんでいた。

あの時、自分が出てさつさと片付けていれば、あの龍輔の邪魔も
入らず、この場で

孝俊にWスピリットを使われる事も無かったのだから。

「俺に対してもフェイトに対しても・・・てめーは【いつでも片付
けられる】と思って
いたようだが生憎だったな」

エンペラードラモンはそう言ってフェイトと顔を見合わせる。
そして、2人でニヤリと笑い合うと・・・

「俺（私）達は・・・諦めが悪いししぶといんだ！」

「ググググ・・・！」

ムゲンドラモンに言い放ったのだった。

そして、ムゲンドラモンは悔しそうに唸り声を上げ、2人を睨みつけていた・・・

*

その頃、海岸では・・・雄人がWスピリットで進化したメガロモンと、デスモンが対峙していた。

デスモンは身体を真っ黒に染め、完全に戦闘態勢に入っている。メガロモンもまた、呼吸を整えて腰を落として左手を腰の横に、そして右手を軽く前に出して構えている。

「・・・行くぞ！」

最初に動いたのはメガロモンだった。

彼は決して素早いデジモンではないが、それでも人間が走るよりは速い。

「せいっ！」

ガッ！

「ふっ……遅い……ぞおうっ!？」

ミシミシ……ッ！

メガロモンがデスモンの顔面に向けて放った左ストレートは、それを見切ったデスモンの腕に受け止められる。

だが、それを止めた瞬間、デスモンの顔が苦痛に歪んでいた。

それもその筈、それと同時にメガロモンの右拳がデスモンの腹部にジャストミートしていたのだから。

「ふむ、山突やまつきか……今時じゃ珍しいな」

「山突？」

その様子を見ていた龍輔が、笑みを浮かべて呟く。

高雄が来てくれた事で退き、今は進化を解いている。

その龍輔の言葉に、さすがが首を傾げる。

「空手の技……つつても、最近の競技じゃ使われてない技らしいんだけどね。

ま、スポーツ空手じゃなくて実戦空手だな」

「確かに、先手を打つには良い技かもしれないわね」

隣にいたアリサもまた、うんうんと頷く。

アリサとすずかも、今は進化を解いて休んでいる。

「人間ってのはどうしたって顔面への攻撃が怖い。それはデジモンも一緒なんだ。」

同じ成長レベルのデジモン同士なら、条件は大体一緒なんだしな」

「そこを狙っての、中段への攻撃って事ですね」

説明が遅れたが、メガロモンが使った技は【山突^{やまつき}】と呼ばれる空手の技の一種である。

上段と中段に同時攻撃を行う突きで、最近のスポーツ空手の試合には使われていないらしい。

（お、おのれ・・・顔面への攻撃は困か・・・！意識が上に行っていたから腹筋が緩んでしまっていた・・・！）

デスモンがよろけながら下がって行く。

今の一撃がかなり効いたらしく、焦点も定まっていない。

「まだ終わりではありませんよ・・・っと！」

ゴツ！

「ぐっ！？」

メガロモンがデスモンの斜め前に入り込み、側頭部に一撃を入れる。

今の当て身を喰らい、デスモンの体勢が崩れてメガロモンへの注意が逸れる。

「お、おのれえっ！」

「はっ！」

パシンツ！

デスモンが伸びる腕を生かした突きを放つが、スピードに乗る前にメガロモンに弾かれる。

スピードに乗って威力が上がる前に弾いて力をそらし、無効化したのだ。

「ふんぬっ！」

「ぬおあああつ!?!」

ガッ・・・ズズン・・・!

そして、そのままデスマンの腕を引つ掴み、足元を足払いで崩して一本背負いの要領でぶん投げる。

目立つた技も武器も使わず、その技術だけでデスマンを圧倒するメガロモン。

地味とは言うが、それは無駄の無い証拠でもあるのだ。

「す、凄い・・・派手さは無いけど、確実にあいつにダメージを与えてる・・・」

「雄人君は、あんな風に人間でも使える様な技も磨いてるからね。孝俊達も鍛えてはいるが、彼は特に重点的に磨いている。デジモンの状態で使えば、十分通じるしな」

「確かに・・・下手な必殺技より確実に効くかもしれないね。さっきの山突と言い、今の投げと言い・・・無駄が無いです」

アリスがメガロモンの戦闘スタイルに啞然とし、食いつく様に見える。

龍輔曰く、雄人は人間が使う様な技術を特に磨き、基本の戦闘スタイルにしている。

先程の投げ技にしても、畳の上での競技用とは違い、実戦では必殺の技となり得るのだ。

すずかも龍輔の言葉に納得し、感心していた。

「小さな積み重ねが大切ってな。それがどんどん重なって行けば、大きな力となる」

「塵も積もれば山となる・・・かあ」

*

その頃、はやては・・・真っ暗な空間の中・・・闇の書の意志の内部で、考えていた。

はやての目の前には、銀髪の女性が彼女と向かい合って立っている。

「私が・・・欲しかった幸せ・・・？」

「健康な身体・・・愛する者達とのずっと続いてゆく暮らし・・・」

はやての言葉に、女性が自身の想いを述べて行く。
確かに、はやてが望んだ物ではあった。

「眠って下さい・・・そうすれば、夢の中で貴女はずっと、そんな世界にいられます」

「・・・せやけど・・・それは只の夢や・・・!」

女性の言葉に、はやては首を横に振る。

そして、これまで虚ろだった目はハッキリと開き、力強く答えた・・・!

【それは只の夢だ】・・・と。

そしてその外では・・・なのはと闇の書の意志が高速で戦闘を繰り広げ、激突する。

しかし、闇の書の意志の力に押され、弾き返されてしまう。それでもレイジングハートを向け、砲撃態勢を取る。

「一つ覚えの砲撃・・・通ると思ってか」

「通す・・・!レイジングハートが、そして拓也さんが力をくれる!命と心、そして

魂を賭けて応えてくれてる!」

レイジングハートからカートリッジが2発射出されると、炎が渦巻いてその機体に炎を模した翼が出現する。

「泣いてる子を・・・救ってあげてって!」

【Burst Spartan】

レイジングハートの声が響くと、その先端に炎の魔力刃が出現する。

バーニングモード特有の変換資質、【炎】の力である。

この状態の時のみ、炎属性の魔法が使えるようになっていたのだ。

「【バーストスパルタン】・・・ドライブ!!」

「・・・!!」

なのはの周りを炎が回転しながら包むと、その場からロケットの如く飛びだした!

かつて、ヴァンデモン相手に使用した【バーニングスパルタン】の強化版とも言える、

【バーストスパルタン】である。

闇の書の意志は一瞬だけ驚いたような表情を見せるが、すぐに片手を前に突き出す。

そして、強固な障壁を再び展開し、止めて見せた。

「くっ・・・ううう・・・!!」

あまりに固いその障壁。その頑強さに顔を歪めるのは・・・

これでもダメなのか・・・やはりエクセリオンモードを使うしかないのか・・・?

そう思ったその時・・・大きな炎が、なのはの後方から突然吹き上がった。

「【コロナブラスター】ッ！！」

そして、叫び声と共に・・・二筋の真っ赤なレーザーが、障壁に激突した。

すると、障壁にヒビが入っていき・・・レイジングハートの魔力刃が突き抜いた！

「まさか・・・！？」

その状況に、今まで殆ど無表情を貫いていた闇の書の意志が、初めてハツキリと驚愕した。

それを確認したなのはは、更にカートリッジを2発ロードする。

「今だ・・・！【バーニングバスター】ッ！！」

なのはが叫ぶと、炎の魔力砲が発射され、闇の書の意志を飲み込んだ。

【ディバインバスター】に炎を付与した事で強化した【バーニングバスター】である。

（ほぼゼロ距離・・・バリアを抜いての【バーニングバスター】直撃・・・それに

しても、さっきのレーザーは・・・まさか・・・！）

なのはが後ろを振り向くと、そこには・・・

両腕の武器、【ルードリー・タルパナ】を向けた状態で海上に佇むヴリトラモンの姿があった！

闇の書の内部で大爆発を起こしてプログラムを乱し、その隙を突いてオファニモンに

干渉させ、自分を海上に転移させてもらったのである。

「ヴリトラモン・・・拓也さんっ!!」

「すまねえ、ちょっと寝過ぎた・・・」

なのはがゆっくりとヴリトラモンの元に移動する。

ヴリトラモンは右手の人差指で頬を掻きながら、申し訳なさそうに謝る。

「ううん・・・無事で良かった・・・!」

「はは・・・っと、呑気に話してる場合じゃねえな」

そう言うと、ヴリトラモンは海上に佇んでいる闇の書の意志に目を向ける。

なんと、先程の砲撃の直撃を喰らって尚、殆どダメージを受けていなかったのである。

「もう少し・・・頑張らないとだね・・・」

【YES】

*

再び、闇の書の意志の内部では・・・

「あたし、こんな望んでない・・・貴女もおんなじ筈や！違うか？」

「私の心は、騎士達の感情と深くリンクしています。だから騎士達と同じ様に、私も

貴女を愛おしく思います。だからこそ、貴女を殺してしまう自分自身が許せない・・・

自分ではどうにもならない力の暴走・・・貴女を浸蝕する事も、暴走して貴女を喰らいつくしてしまう事も、止められない・・・」

はやての問いに、女性は自分ではどうにも出来ない事を述べる。

彼女とて、出来るならば平穩に暮らしたいのだ。

しかし、長い月日を経て邪悪に歪められ、改竄されたせいで、もはや自分では修正が

効かなくなってしまう事に、深い悲しみを感じていたのだった。

「・・・覚醒の時に、今までの事少しは解ったんよ。望む様に生きられへん悲しさ・・・

あたしにも少しは解る。シグナム達と同じや！ずっと悲しい思い、寂しい思いしてきた！

せやけど、忘れたらあかん！」

そう言うと、はやては車椅子から身を乗り出し、女性の頬に手を添える。

その表情は、ハッキリとした意思が見てとれる。

「貴女のマスターは、今は私や！マスターの言う事は、ちゃんと聞かなあかん！」

すると、2人を中心にベルカ式の白い魔法陣が展開される。

「名前をあげる・・・もう闇の書とか、呪いの魔導書なんて言わせへん。あたしが呼ばせへん！」

「っ・・・！」

はやての言葉に、女性の目に涙が浮かぶ。

悲しみでも怒りでも無い、喜びの涙・・・

「あたしは管理者や・・・あたしにはそれが出来る」

「無理です・・・自動防御プログラムが止まりません・・・管理局の魔導師と、

デジモンの男が戦っていますが、それも・・・！」

しかし、はやてはそつと目を閉じて、強く念じる。

(止まって・・・！)

すると、外で戦っている闇の書の意志の動きが止まった。まるでフリーズしたかのように・・・

*

「おっ・・・止まったぞ・・・！？」

それを見たヴリトラモンが、相手が急に止まった事に戸惑いながらも言葉を発する。

なのはもまた、同じようにその状況に驚く。

『外の方！管理局の方！こちら、そこにいる子の保護者、八神はやてです！』

「は、はやてちゃん!?!」

『な、なのはちゃん!?!ホンマに……?』

「なのはだよ！色々あって、闇の書さんと戦ってるの!」

『ゴメンなのはちゃん、何とかその子、止めたげてくれる？魔導書本体からは、

コントロールを切り離れたんやけど、その子が走っていると、管理者権限が使えへん。

今そっちに出てるのは、自動行動の防御プログラムだけやから!』

はやての言葉に、なのはは少々戸惑う素振りを見せる。

しかし、その時……ユーノが動いた。

「（闇の書 completion 後に、管理者が目覚めてる……これなら!）なのは! 解りやすく

伝えるよ! 今から言う事をなのはが出来れば、はやてちゃんも外に出られる!

どんな方法でも良い、目の前の子を、魔力ダメージでブツ飛ばして! 全力全開……手加減なしで!」

「さっすがユーノ君！わっかかり易い！」

【まったくです】

「なのはちゃん！エクセリオンモードに切り替える！気は引けるがさっきのを見る限り

バーニングモードだと威力が足りねえ！」

その時、ヴリトラモンがエクセリオンモードを使えとなのはに叫ぶ。

あまり薦めたくは無かったが、先程のバーニングバスターの直撃を受けてもほぼ無傷

だった闇の書の意志を見れば仕方が無かったのである。

「は、はい！レイジングハート・エクセリオンモード、ドライブ！」

【Ignition】

すると、レイジングハートの色が従来の色合いに戻り、魔力刃が赤からピンクに変色する。

そして、なのははすぐに砲撃態勢に入る。

「エクセリオンバスター、バレル展開！中距離砲撃モード！」

【All right Barrel shot】

レイジングハートに魔力の翼の様な物が展開され、衝撃波が発射される。

それが動きの鈍った闇の書の意志に命中し、彼女を空中に完全に固定する。

今の衝撃波には、不可視のバインド効果があったのだ。

「夜天の主の名において、汝に新たな名を送る。強く支える者、幸運の追い風・・・
祝福のエール、リインフォース」

そして、闇の書の意志の中では、はやてが女性に新たな名を送る。闇や呪いと言った物とは対極の・・・それは女性にとっては素晴らしい物だった。

同時に外では、闇の書の暴走の一部と思われる触手を、アルフとユーノがバインドで押さえつけていた。

それでも間に合わない物は、ヴリトラモンが【コロナブラスター】や【フレイムストーム】で破壊する。

周りのサポートもあり・・・なのはが魔力のチャージを終える。

「エクセリオンバスター、フォースバースト！ブレイク・・・シュート!!!」

そしてレイジングハートから4発の魔力砲がうねりを上げ、闇の書の意志に直撃した！

『新名称・リインフォースを認識。管理者権限の使用が可能になります。ですが・・・』

防御プログラムの暴走は止まりません。管理から切り離された膨大な力が、じき暴れ出します』

「うん・・・まあ、なんとかしよ。外には孝俊さん達もおるんやしな・・・行こか、リインフォース」

『はい・・・我が主・・・！』

そう言うと、はやての身体が光に包まれて行った・・・

次回、はやて覚醒・・・そして孝俊&フェイト、雄人も決着！

続く

第60話 積み重なってとっても大事な気がする（後書き）

はい、第60話終了です。

何気に強いメガロモンのシーンは、自分的に頑張りました。

そして遂に登場した龍のWスピリット・・・これで登場してないのは火のWスピリットのみです。

そして、はやても目覚めていよいよ総力戦の様相を呈して来ます。

孝俊「そーいや今やってるデジモンクロスウォーズに拓也とかの歴代主人公が出演するんだって？」

拓也「ああ、そうみたいだな。いつ出るかは知らんけど」

なのは「ふふふ・・・お兄ちゃんかお姉ちゃんに頼んで録画してもらわなきゃ・・・」

高雄「・・・なんか怖いぞなのはちゃん（汗）」

では、次回予告・・・今回めでたく名を貰ったリインフォース、
どうぞ～

リインフォース「む、私がか・・・？上手く出来るか解らんが・・・
次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第61話【力を合わせるとマジで心強い気がする】お楽しみに」

第61話 力を合わせるとマジで心強い気がする（前書き）

はい、第61話です。

なんとか2カ月経過する前に投稿する事が出来ました……（汗）

では、スポーツ選手紹介コーナーです。

今回は人ではなく……競走馬です（何）

シンボリルドルフ（1981～2011） 現役期間（1983～
1986）

所属（生産）：シンボリ牧場

品種：サラブレッド 性別：牡^{オス} 毛色：鹿毛

父パーソロンはリーディングサイアーに2度なった名種牡馬。

母スイートルナはシンボリ牧場が生産した名馬スピードシンボリの産駒。

シンボリルドルフは、スイートルナの4番目の産駒として生まれた。馬名『シンボリ』は馬主の冠名、『ルドルフ』は神聖ローマ帝国の皇帝ルドルフ1世にちなんで名づけられた。

額に三日月に似た形がついているという特徴を持ち、誕生から立ち上がるまでにかかる

時間がわずか20分だったという。牧場にいるころは「ルナ」と呼ばれていた。

クラシック三冠である皐月賞・東京優駿・菊花賞を制し、史上4頭目の三冠を達成した。

更になんと、その三冠を制するまで無敗だった。

無敗での三冠達成は、シンボリルドルフが史上初である。

その後も有馬記念を連覇、天皇賞（春）、ジャパンカップを制覇し、G?で7勝を挙げた。

その競走成績・馬名から「皇帝」、または「七冠馬」と称される。

引退後も、種牡馬としてトウカイテイオーを送り出すなどの活躍を見せた。

2004年を持って種牡馬を引退し、今年2011年、30歳と言う長寿を全うし、亡くなった。

その実力から史上最強馬の一頭に数えられており、ファンからの印象は今尚強く残っている。

通算成績：16戦13勝

獲得賞金：6億8482万4200円

孝俊「まさかのシンボリルドルフと来たか」

拓也「少々年配の競馬ファンにはお馴染みの超が付く程の名馬だな」

高雄「野球選手ばかりじゃ飽きるしね（待て）」

リインフォース」では、第61話……始めます」

第61話 力を合わせるとマジで心強い気がする

第61話副題【夜天の主】

闇の書の意志、ムゲンドラモンとそれぞれ戦うのはとフェイト。そして、ムゲンドラモンに苦戦を続けるフェイトの前に、遂に孝俊が姿を現した。

孝俊は龍のWスピリットを発動してエンペラードラモンへと進出し、フェイトと共に

ムゲンドラモンに立ち向かう。

一方、なのはの元にもヴリトラモンが駆け付け、闇の書の意志に一撃を与える事に成功する。

更には闇の書の意志の内部ではやてが目覚め、闇の書に新たな名前【リインフォース】を与える。

はやてが念じて闇の書の意志の動きを止め、なのはがエクセリオンモードを起動し、

【エクセリオンバスター】で砲撃を加える。

それと同時に、はやてもリインフォースと共に光に包まれて行った……

*

一方、拓也がなのはの元に到着する少し前……

少し離れた海上では、エンペラードラモンとムゲンドラモンが殴り合いを展開していた。

「ぬおらああああ!!」

「又オオオオオ!!」

ガッ!ドゴツ!バキッ!ガシャンッ!ズンッ!

互いに拳をぶつけ合うと同時に、周囲に衝撃がビリビリと伝わる。並の完全体なら、その一撃で消滅してしまうであろうムゲンドラモンの攻撃。

しかし、それをまともに浴びても怯む事無くエンペラードラモンはカウンターの要領で的確に攻撃を当てていく。

ムゲンドラモンもまた、それを喰らっても負けずにエンペラードラモンに反撃する。

「はああああっ!!」

キイン!

「ヌッ……オノレ、サツキカラチョコマカト……!!」

しかし、その隙を搔い潜ってフェイトがムゲンドラモンに攻撃を加える。

エンペラードラモンは闇雲に攻撃している訳では無く、フェイト

にムゲンドラモンの
攻撃が及ばない様に位置などを計算して戦っていたのだ。

もつとも、何処に攻撃をするだの何処から攻撃が来るだのと、細かい打ち合わせはしていない。

その辺については、エンペラードラモンはフェイトの感覚に任せていた。

【自分がムゲンドラモンを引き付けるから、そこから隙を見つけて攻撃する事】……それが作戦（と言う程の物では無いが）だったのだから。

ぶつつけ本番で隙を見つながら攻撃出来るフェイトの戦闘センスもまた、並大抵の物では無かった。

フェイトとて、孝俊と離れていた半年間、必死に訓練を積んでいた。

更に、シグナムと言う好敵手の出現もあり、フェイトの訓練にも力が入った。

拓也達デジモンSideの戦い方も、自分なりに見て学んでいた。それによって、フェイトの戦法にも幅が広がり、様々な敵に対応できつつあったのだ。

パワーに劣ると言う弱点こそあれど、技とスピードでフォロー出来る様、フェイトは一生懸命頑張って訓練を続けていた。

【弱気は最大の敵】……この言葉を心の支えにしていたからこそ、ムゲンドラモンの様な圧倒的実力を持った相手にも挫けずに戦う事が出来たと言って

も過言ではない程、
フェイトは精神的に大きく成長を遂げていたのだった。

「負けるもんか……絶対……諦めるもんか……！効かないなら……
効くまで

撃ち込み続けるっ！！」

「（何故ダ！？コノ小娘八何故諦メナイ！？カノ差八圧倒的ダト言
ウノニ……）」

何故……何故貴様カラ八闘志ガ消エンノダアツ！？」

力の差は圧倒的に自分が優勢。

それにも関わらず、ムゲンドラモンはフェイトの消えない闘志に、
得体の知れない

恐怖感を感じ始めていた。

どんなにボロボロにしても、どんなに攻撃が効かない事を見せつ
けても、目の前の

相手は全く挫けずに向かって来る。

フェイトの気迫が……ムゲンドラモンを飲み込み始めていたのだ。

（フェイト……まさかここまで心が強くなってるなんてな……）

エンペラードラモンは笑顔を浮かべ、フェイトの気迫に心強さを
感じる。

半年前とは比べ物にならない精神力を身に付けたフェイトは、エ
ンペラードラモンも

称賛する程の心の強さを持っていた。

「（お前がこれだけ頑張ってるんだ……だったら俺も……）やる事
やんなきゃ、

男としてカツコ悪いよな！」

そう言つと、エンペラードラモンは右腕をムゲンドラモンに向け、
照準を合わせる。

そして……右腕を勢い良く撃ち出した！

「くらえっ！【インパルスナックル】！」

「ナツ……速……ガッ!？」

ドゴンツ！と鉄が変形する様な轟音が響く。

それはエンペラードラモンの放った【インパルスナックル】が、
ムゲンドラモンの右足の

付け根に直撃した音だった。

「グウウウ……コウナツタラ貴様ラ、2人マトメテ消シ去ッテクレ
ルワ……!！」

ムゲンドラモンが下にある氷の上に着地すると、背中 of 2門のキ
ャノン砲にエネルギーを溜める。

そして……エンペラードラモンとフェイト目掛けて照準を合わ
せた。

「終わリダ……【ムゲンキャノン】!！」

ドオオンツ！ベキベキイッ！

そして、キャノン砲から必殺技【ムゲンキャノン】が撃ち出されたが……

なんと、全く見当違いの方向に飛んで行ってしまったのだ。更に、撃ち出した瞬間に変な音も響いた。

フェイトは呆気にとられているが、エンペラードラモンは計算通りとばかりに笑みを浮かべていた。

*

「グガアア……ソナナ……ソナナ馬鹿ナアア……!？」

なんと、ムゲンドラモンの右足がバチバチと音を立て、崩れかかっているではないか。

「何故……何故俺ノ足ガアア……!？」

「簡単だ。テメーの足にダメージがあつて、今の砲撃の反動に耐えられなくなつて自壊したのさ」

そう、キャノンは確かに強力な技ではあるが、その分反動も大きい。

ダメージを負ったムゲンドラモンの足が、その反動に耐えられなかったのだ。

それは同じ砲撃系の技を持つエンペラードラモンにも言える事で

ある。

「オノレ……サツキノ貴様ノパンチノ所為カア……！」

「いや、半分正解だが半分ハズレだ。いくらWスピリットが強力だからと言っても、

さっきのたった1発で、自分の砲撃の衝撃で自壊する程のダメージが行く訳無いだろうが」

「何イ……！？」

確かに、エンペラードラモンが放った【インパルスナックル】は、ムゲンドラモンの

右足を捉え、直撃していた。

だが、原因はそれだけでは無い。

それを聞いたフェイトは、エンペラードラモンに話しかける。

「ねえ、孝俊……それってどういう事？」

「言つたるフェイト、お前のやってた事は無駄じゃないって。お前の攻撃はな、本当に

徐々にだが奴の身体にダメージを蓄積させていたんだよ」

そう、フェイトの攻撃は蓄積しているのに気がつかない程小さく、徐々に効いていたのだ。

「戦う前に奴を見ていたら、偶然か狙つてたかは解らんが右足に多

くフェイトの攻撃の

痕が付いていたんだ。だからもしかしてと思ってな」

「じゃあ、さっきのパンチも……」

「そう、確認の為のダメ押しって訳だ。全てはお前が頑張ってくれなきゃ成立しなかった事だけだな」

そう言つと、エンペラードラモンは右手を天に掲げる。

「帝龍剣！」

そう叫ぶと、右手にレーザーブレードが現れた。

エンペラードラモンの専用武器、【帝龍剣】である。

「フェイト、ここまで頑張ったんだ。最後まで一緒に行けるか？」

「うん……！バルディッシュ、まだ行けるよね？」

【Yes, sir】

「オノレ……コンナ人間如キニ……コノ俺ガアア！！」

ブースターを吹かして再び飛び上がるムゲンドラモン。

だが、既にフェイトがカートリッジを3発ロードし、構えに入っていた。

更に、エンペラードラモンも抜刀の構えを取り、エネルギーを充填する。

【Shin-Raikou-Zan】

「【真・雷光斬】っ！」

「必殺……【真・閃光斬】っ！」

2人が同時にムゲンドラモンに突っ込んで武器を振りかざす。

そしてフェイトの【真・雷光斬】と、エンペラードラモンの【真・閃光斬】が炸裂した。

真正面からX字に斬り裂かれ、墜落していくムゲンドラモン。

そして、徐々に消滅していく。

「グガアアアアア……！！！」

「その人間を甘く見たのが……フェイトの根性を甘く見たのがお前の敗因だ」

エンペラードラモンが喋り終わると同時に、ムゲンドラモンは消滅した。

そして、なのは達の方角を見ると……闇の書の意志が光に包まれる光景が見えていた。

「どうやら向こうも進展があったみたいだな……フェイト、とりあえず俺の肩に乗って休んでろ」

「うん……ありがとう」

フェイトを肩に乗せ、エンペラードラモンはなのはとヴリトラモンの元へと飛んで

行くのだった……

*

一方、港では……

メガロモンがデスモンを相手に、尚も激闘を繰り広げていた。

また、デスモンが呼び出した大軍はと言つと……

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアッ！」

高雄が進化したキングドラモンによつて、片っ端から薙ぎ払われていた。

今もまた、【ガトリングハンマー】によつて木の葉の様に数十体が吹っ飛んでいる。

「相変わらず大したパワーだ……こつちに来てても全くサボってはいなかつた様だな」

「アホっぽく見えて、実は結構真面目なんですよねえ……高雄さんつて」

レーベモンとブリザーモンが、苦笑いしながらキングドラモンの戦いを見ていた。

高雄とて、ずっと機械を弄ったりポケまくつてばかりいた訳では

ない。

孝俊や拓也同様、しっかりと訓練を積んでいたのだ。なんだかんだで真面目な所もある高雄だったりする。

「どりゃあああつ！」

ドオゴオオツ！

「ぐはっ……が……」

踏みこんで放ったメガロモンのボディープローが、デスモンに直撃する。

雄人は、様々な戦いを見て学んで来た。

父・和久から、従兄弟・高雄から、先輩・拓也や孝俊から……

色々なスタイルを使い、戦う事も出来るバランスファイター。

彼は堅実にどんな地味な役目でもこなす、重要な役割を担っているのだ。

「おのれ……地味な存在だと侮っていたが……！」

「地味なのは否定しません。寧ろ僕はそれを誇りにしていますので」

雄人にとって、それは誇りであり勲章でもある。

普通、地味なのは誰もが嫌がったり敬遠したりしそうなのだが、彼は違った。

第一、色々な事が出来てこそ、戦いにも幅が広がると言う物である。

「おかしな奴よ……究極体であるこの私を相手にこれ程の戦いをする貴様が……」

よもや地味である事を誇りにしていようとは……」

「僕みたいな物好きがいたって、別になんら不思議ではないでしょう。人間ってのは不思議な生き物ですからね……」

メガロモンの言葉を聞き、デスモンは肩をすくめる。

その目からは感じ取れないが、何処か敵意以外の物が混じっている様に思えた。

「ふん……人間はやはり好きにはなれんが……何故か貴様は嫌いなれん。」

だが、私と貴様は敵同士……このデスモン、忠義を尽くす方がおられる限り、戦いを止める訳には行かぬのだ！」

「そちらがそのつもりならば……僕も全力で答えます。それが命を賭けて挑んでくる

者に対する礼儀と言う物ですから……！」

デスモンがその大きな眼にエネルギーを溜め始める。

それを見たメガロモンも、両腕にエネルギーを充填していく。

「くらえい、【デスアロー】！」

「【メガロブラスター】！」

ドドオオオオン！！！！

2つの技がぶつかり合い、中央で爆発が起こる。
だがその直後、互いにそれを読んでいたかのように走り出した！

「うおおおおおおおお！！！」

「ぬおおああああああ！！！」

互いに拳を振り抜いて交差する。
そして……その衝撃で互いの身体が一瞬揺らぐ。

（決めるなら今だっ！）

しかし、一瞬早くメガロモンが立ち直り、手足と頭を引っ込める。
すると、一気に凄まじい高速回転を始め、激しい電撃を纏うと……
…その場から飛び出した！

「【ボルティックストライク】！！！」

ドオオオオオン！！

メガロモンのもう1つの必殺技【ボルティックストライク】が炸裂する。

フォートレモンの【ダイナストライク】の3倍の破壊力を持った突撃系の技だ。

メガロモンが着地すると同時に、デスモンが仰向けに倒れた。

そして……徐々に消滅を始めていく。

「ごぶつ……見事よ……メガロモンとか言ったな……私に勝った褒美だ、1つ教えて

おいてやろう……我らが首領に仕える究極体は、今回現れた私を含めた四天王の他にも

存在する……今回私が連れて来たメタルエテモン達以外にも……気を付ける事だ」

「忠告感謝しますよ……生まれ変わった時は、そちらとは敵同士じゃない事を祈ります」

「クハハ……何故だろうな……私も同じ事を考えてしまった……さらばだ。玄武の闘士よ……！」

そう言い残し、デスモンは消滅した。

もつとも、デジタルワールドで再びデジタマから生まれるが……その生涯を終えた事に違いは無い。

メガロモンは空を見上げ、今度出会う時があれば、敵同士ではな

い事を祈るのだった。

「なっ！？デスモンを倒すなんて……あの小僧、なかなかやるわねえん！？」

「よそ見してる暇はねえぜ！」

一方で、キングドラモンがメタルエテモンと戦闘を繰り広げていた。

だが、フルメタルの身体を持ったメタルエテモンと言えど、キングドラモンのパワーを
まともに受けてはタダでは済まなかった。

その証拠に、身体の一部にヒビが入っていたのだ。

「こんなところで……人間が進化したデジモン如きにアチキは負けてられんのよっ！」

【メガパンチ】！」

「人間人間ってじゃかあしいわい！デジモンに種族なんざ関係ねえだろっよおっ！」

【メテオインパクト】オ！」

ゴツ……メキメキメキッ！！

「あ、あんぎゃああーっ！！！？」

身体に大きな風穴をあけられたメタルエテモンは……あえなく消滅したのだった。

「さて、と……輝一、友樹、この場は任せて良いか？」

「ああ、行って来い。事情は俺達もある程度把握している。お前と雄人は拓也達の元に行ってやれ」

「敵も残り少ないですから。僕達だけで大丈夫です！」

高雄の問いに、輝一はゆっくり頷き、友樹も任せると胸を叩く。敵も残り少なくなり、率いていたデスモンを含め、この場には究極体はいない。

デスモンはメガロモンに倒され、ボルトモンは捨て身の孝昭に敗れ、メタルエテモンは高雄との一騎打ちに敗れた。

グランクワガーモンも孝俊と高雄の連携の前に敗れた為、強敵はひとまず掃討出来た。

「俺も連れて行ってくれ……お前達のお陰で休めたし、大分回復できた」

すると、今まで回復に専念して来た孝昭が高雄に近づく。流石に全開とまでは行かないが、それでも半分以上は回復できたようだ。

「よし、解った……じゃ、行くぜ！」

「はい！」「おう！」

こうしてキングドラモン、メガロモン、孝昭の3人は港を後にした。

親友を、仲間を助ける為に……

*

『闇の書の主、防衛プログラムから完全に分離しました！』

アースラの中で、オペレーターがはやての分離を確認し、リンデイに伝える。

海上には……紫に澱んだ大きな半球体があった。

見るからに禍々しく、近付きたくない印象を受ける。

「みんな！下の黒い澱みが暴走が始まる場所になる！クロノ君が到着するまで、無闇に近付いちゃ駄目だよ！」

「あ……はい……」

エイミィの指示を受けて、なのはは返事をする。
現在、クロノがこの場に向かっているらしい。

そして、防衛プログラムから分離したはやてはというと……

「管理者権限発動……」

『防衛プログラムの進行に、割り込みをかけました。数分程度ですが、暴走開始の遅延が出来ます』

「うん……それだけあつたら、十分や……」

リインフォースが割り込みをかけ、防衛プログラムの進行を遅らせた様だ。

どうやら分離した事で可能になったらしい。

そして、はやてが呟くと、彼女の周りに4つの小さな光が現れる。

「リンカーコア送還、守護騎士システム破損修復」

すると、市街地の建物の屋上にベルカ式の4色の魔法陣が展開され……

なんと、消えた筈のシグナム・ヴィータ・シャマル・ザフィーラが現れたではないか。

「おいで……私の騎士達」

はやてがそう呟いた瞬間、彼女がいた白い空間が眩しく光り……直後に光りの柱となり、海面を貫いた！

そして、その球体の周りに守護騎士達が転送される。

「ヴィータちゃん！」

「シグナム！」

「へへっ、やっとお目覚めか」

「はは……心配掛けてからに……」

なのはとフェイトは驚きで目を見開き、ヴリトラモンは微笑を浮かべる。

そして、エンペラードラモンは顔を俯かせ、少しばかり震えた声で言う。

「我ら、夜天の主の元に集いし騎士」

「主ある限り、我等の魂尽きる事無し」

「この身に命ある限り、我等は御身の元に有り」

「我らが主、夜天の王。八神はやての名の下に」

シグナム、シャマル、ザフィーラ、ヴィータの順に唱えて行く。
まるで夜天の主の誕生を示す、儀式の様でもある。

「リインフォース、私の杖と甲冑を」
『はい』

はやての体が、黒を主体とし、金のラインが入ったバリアジャケットに包まれて行く。

そして、はやての目の前に杖が現れ、それを掴むと同時に白い空

間にヒビが入り……砕けた。

「夜天の光よ、わが手に集え！祝福の風・リインフォース。セー
ト・アップ！」

髪の毛は茶色から白に近いクリーム色に変わる。
更に白い帽子を被り、3対6枚の黒い翼が形成される。

今ここに……夜天の王が誕生した！

「おおお、はやてちゃん、立派になって……お父さんは嬉しいぞお
お」

「いや、いつから父親になったんだよ」

バリアジャケット姿になったはやてを見て、泣く振りをしてボケ
発言をかます皇帝機龍エンペラードラモン

に、素早く突っ込みを入れる炎龍獣ガリトラモン。

ロボットと炎の龍（というか獣？）の漫才はなんかシュールだ。

*

「はやて……」

「すみません……」「あの、はやてちゃん、私達……」

「ええよ、みんな解ってる。リインフォースが教えてくれた。そや
けど、細かい事は後や」

申し訳なさそうに俯き、何かを言おうとする守護騎士達だが、はやてはそれを止める。

そして、微笑を浮かべて……言った。

「今は……おかえり、みんな」

「う……うわああああん！はやて！はやて！はやてええええ！」

そして、耐え切れなくなったヴィータがはやてに抱き付いて泣きだす。

すると、はやて達の元になのは、フェイト、ヴリトラモン、エンペラードラモンがやって来た。

「あ……孝俊……さん」

「孝俊……」

「孝俊さん……」

エンペラードラモンを見たはやて、シグナム、シャマルが気まずそうに呟く。

ヴィータとザフィーラも口には出さないが、何処となく沈んだ表情をしている。

はやて達はエンペラードラモンを見るのは初めてだが、それでもそれが孝俊と解る

のは、ある意味家族の絆と言う物かもしれない。

家族でもある彼にも、多大な迷惑と苦勞をかけてしまった。

だからこそ気まずいのである。

エンペラードラモンは進化を解除して元の孝俊の姿になると、はやて達の上にある

魔法陣の上に立つ。

そして、怒るでもなく文句を言うでもなく、ただいつも通りの笑顔を見せ……言った。

「待ってたぜ……おかえり」

「っ……うん……ただいまや……！」

はやては声を震わせながら孝俊に抱き付いた。

孝俊は只、はやての頭を優しく撫でるのだった……

嵐の前の静けさの中で、家族はまた、1つになった……！

続く

第61話 力を合わせるとマジで心強い気がする(後書き)

はい、第61話終了です。

結構急ぎ足な展開だった気がしますが……(汗)

孝俊「ま、とりあえずは一安心だ」

拓也「問題は次……だな」

高雄「原作で言えばやっと12話辺りだな……此処まで来るのに2年弱かかったとは(汗)」

孝昭「ちなみに、最後の孝俊を見て【ナデポ?】とか思った人。そんなの有り得んから(爆笑)」

では、次回予告……復活したはやてちゃん、どうぞ〜

はやて「はいーいーじゃ、いくでー!

次回、魔法少女リリカルなのはフロンティア第62話【総攻撃ってなんだか燃えて来る気がする】お楽しみに!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9623i/>

魔法少女リリカルなのはフロンティア ~ 魔導師と少年達の記録 ~

2011年12月8日01時55分発行